
The Kingdom

春野隠者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The Kingdom

【Nコード】

N3840G

【作者名】

春野隠者

【あらすじ】

魔女を求める老人の妄執は、炎すら絡めとる糸となつて王都に策謀の罟を張り巡らせる。過去から伸ばされた魔女の長い手は、老人の首を求めて憎悪に身を焼く。

賊徒を束ねるサギリと、王都の闇を支配するオウカの対決は、兇王ヴェル暗殺からの長い因縁に決着を迎えようとした。

現在、魔女の系譜《復讐するは我にあり》編です。

牙持つ者達（前書き）

本小説に目を通していただいております。残酷な描写が各所にありますので、ご注意ください。表現が露骨な場合がありますので、以下略。

牙持つ者達

黒き月は照らす。

痛みを、苦しみを、絶望を、希望を、復讐を。

黒き月は狂う。

滴り落ち、細かく震え、焼き尽くし、落ちてくる。

宿る、瞳に。宿る、腕に。宿る、背中に。想いは黒く焼け墮ちる。

業深き、人々の贄。

生と死の狭間の四人。呪いの子。

狼と、聖女と、騎士と、王。そして魔女。

駒は踊り、血は花を咲かす。

花は器を満たし、蔓は月に絡みつく。

正義を貪り、悪を飲み干す。

飢えを、渴きを癒すため、この世の全てに牙をむく。

愚者は踊り、賢者は謡う。

聖者は嘆き、死者は晒う。

歌う、晒う、黒い月。

声高らかに、この世の全てに災いあれと。

ソイツは歪に削られた岩の上に悠然と胡坐をかいている。長い黒髪を風になびかせ、整った顔立ちを楽しげに歪ませる。時折見える月が、その姿に陰影を刻む。

「若いのに、良い腕じゃないか」

膝の上に肘をつき、頬杖をつく。

「……チクシヨウ」

地面に四肢を投げ出し、頬を擦り付けながら俺はソイツをにらむ。立ち上がるどころか、腕には、無様に体を痙攣させるだけの力しか残っていない。

ソイツの顔がにんまりと笑みを湛える。俺に反撃する力が残っていないと思っっているんだろう。

「で、だ。アタシに手え出したんだ。覚悟はできるんだろうね？」

俺は唇を歪めただけで笑った。

好きなだけほざけばいい。目下状況は最悪だが、俺はまだ死んだわけじゃねえ。

あと一撃。

それだけの力しか残っちゃいないが、それで十分なんだ。

「さっさと殺せ」

さあ、近づいて来い。俺に止めを刺すために。

「随分あっさりしてるじゃないか」

ソイツは大げさに驚く風に両手を広げる。

「アタシを殺すんじゃないかったのかい？」

俺を見下すのがそんなに楽しいのか、ソイツの愉しげな笑みは変わらない。何も答えない俺に業を煮やしたのか、ソイツは一つ舌打ちすると音もなく岩から舞い降りる。

「チツ、最近の餓鬼はだらしないねえ」

俺の近くでしゃがむと、髪を掴んで自分の目線まで軽々と引き上げる。その細腕のどこにそんな力があるというのか、土で汚れた俺の顔に息がかかるほどの距離でソイツの顔がある。

妙に老成した言葉を使うが、その声も顔立ちも少女のものだった。風が雲を洗い流し、薄ら蒼い月光に照らされるソイツは、美しかった。

整った鼻筋に、小ぶりな唇。何よりも印象的なのは、周囲を覆う夜の闇よりも、更に濃い漆黒の瞳。

ほんのわずかの時間、ぶつかる視線の中で俺はその瞳に魅入られていた。先ほどまで限りなく研ぎ澄ましていたはずの殺意までもが、一瞬その漆黒の宝石に飲み込まれる。

不意に覗きこむように俺を見ていたその漆黒の瞳が、それる。周囲をかき回るように素早く目を走らせると、先ほどの愉しげな笑みを仕舞い込み、真剣な面持ちになる。

つい、釣られて俺もその視線を追う。

「また、そろそろと……」

ほんの近くから聞こえたその声に苛立ちが感じられる。

「隠れてないで、出てきたらどうだい？」

その声に応じるように、闇の中から影が動く。チロチロと、闇に浮かぶ目を残忍な喜びに光らせて。

デイド。
荒地に生きる奴等なら、誰もが係わり合いを避けたがる狂人どもだ。

女は一度瞼を閉じて、再び俺を見るでもなく見る。

「アタシ等に、なんか用かい？」

そして奴らに視線だけを向ける。間近でみる、そのゆっくりとした視線の移動に殺意が籠っているのがわかる。

デイドどもは、低く晒った。

「餓鬼を寄越せ」

ひび割れた声がやつらの口から出る。

俺はデイドどもが嫌いだった。やつらは人を喰う。それだけでも嫌悪を誘うというのに、最低なことに俺はやつらに個人的な恨みがある。

「あん？」

女は訝しげな視線で俺を見る。

「随分もてるんだね」

笑えない冗談だ。

「くそつたれなことにな」

一応言い返しておこう。

「で、俺を渡すのか？ 一応忠告してやるが、渡したらさっさと逃げたほうが良いぞ」

目を見開いて、驚いたように俺を見ると女は不敵に笑う。

「まさか、アタシの獲物を横取りするやつは死んだほうが良い」

俺の言葉を一笑に付した女の瞳が俺を射すくめる。引き込まれるような、その漆黒の瞳が愉快げに揺れ、俺を映す。

「見てな、餓鬼」

勝者特有の傲然とした物言いで、俺を解放すると女はデイドドもに向き直った。

デイドドどもから低い雄たけびが上がる。手に手に鈍器を振りかざし、俺と女に向かってくる。四方から迫るその凶器に、女が打ちのめされると思った瞬間、女の口元が禍々しく、笑みの形を作った。俺はその光景が信じられなかった。

女がデイドドどもを圧倒してやがる。あの細い体のどこに、そんな力があるのかと思われるほど、その動きは俊敏で攻撃に転ずる時の力強さは、女の2倍もあるデイドドを引き裂くほどに強靭だった。

女がいかに強いと言っても限界がある。デイドドどもは数に任せ粗雑だが威力のある攻撃を繰り返す。そのうちの一つが女を捕らえた。苦痛を噛み殺した短い悲鳴が聞こえ、女の小さな身体が俺の傍まで吹き飛ぶ。たまらず俺は声をかけた。

「おい……」

女はチラリと俺を一瞥すると、迫り来る凶撃に再び目を向けた。そのすぐ横を唸りを上げて刃の欠けた斧が通り過ぎる。俺の目の前を、女が舞姫のように跳ね、デイドもがそれを追う。

女を取り囲むデイドの一人が、女の死角から凶撃を振るう。その瞬間俺の体は自然に動いていた。女を殺す為に取って置いた奥の手だ。体の中を沸騰した力が駆け巡り、全身から一気に力が抜ける。一緒に消え失せそうになる意識を、必死につなぎとめ、女を狙った凶刃とその所有者に向けた。

切り裂け！

無色透明の刃が埃を巻き上げ地を翔ける。狙いは過たず、牙を剥いた俺の風はデイドとその獲物を切り裂いた。パッと血の花が咲きデイドは崩れ落ちた。

限界だった。

薄れていく視界の中で、俺は女がデイドどもの最後の一人を片付けるのを見た。

背負った子供を地面に放り投げると、アタシは周囲を見渡した。

荒涼とした大地が横たわり、低い灌木が所々に密生している。しばらく前にこの、荒れた土地へ流れてきたがいけ好かない場所だ。

小さく舌打ちして、目を空に向ける。曇天が重く押し掛かるように頭上を覆う。強い風が土埃を巻き上げて、吹き抜ける。自分の長い髪が、風になびくのを感じながら、まるで自分の心のようにだと、感じた。

遠くに見える山脈、それをぼんやりと眺めた。あの向こう側には街がある。《人間》の住む場所だ……。

小さなうめき声に、アタシは子供のほうを振り返る。

まだ十歳を少し超えた程度だろう。眠っている顔を見れば、愛らしい。伸び放題の黒髪は奔放さを、整った鼻筋はどことなく気品を、歪んだ口元は傲慢なほどの自信を持っていた。そして何より印象的だったのは殺気を宿らせた琥珀色の瞳。食うや食わずで生きてきたのだろう、酷く痩せてはいたが、瞳に宿る狂気にも似た光は全く衰えを見せず、精悍さすら感じた。

この子は人間の皮を被った獣だと、出会った瞬間から感じた。知らずに口元が緩んでいた。どんな理由かは知らないが、この子はアタシを助けたのだ。

何もかも放り出して、流れ着いた最果ての地。そこで出会ったアタシに似た力を持つ少年。

「運命か……」

逃れられないのか、それとも最初からアタシがここに来ることが決まっていたのか。

どちらにしても、逃げ場は無いらしい。

逃れられない運命、なら牙を剥いてやるのも良いかもしれない。

そしてこの子だ。

この子供は使えるかもしれない。

例えばそれがアタシの命を狙っているとしても。そつと子供の頬をなでて、アタシは子供の上に押し掛かった。

俺は自分の上に覆い被さる女の体重を感じて全身の毛が逆立った。ご丁寧に、投げ出された俺の腕は女の手で、両腕とも押さえつけら

れている。

耳朶をくすぐるように、甘い声で女は囁いた。

「……いつまでも寝たふりなんてしてんじゃない。さっきよりもっと酷いことしちゃおうよ」

バシてやがる！ そう思った瞬間、俺は全身のバネを一気に引き上げて女の手を振り払った。

「クツクツク、なぐんだ。やっぱり目覚めてたんじゃないの」

女は地面に胡座をかきながら、俺を眺める。全身に緊張感を漲らせ、俺は女を睨んで身構えた。

「殺してやる」

「そればっかりだねえ」

にたり、と女が笑う。

「さっきまでは、なんで寝たふりなんてしてたんだい？」

「うるせえ関係ねえだろう」

女は何の警戒もなく立ち上がる。無防備だ、チャンスだ。

「もしかして、捨てられた母親に背負われたことを思い出したとか？」

「うるせえって言うてんだらうが！」

軽薄な態度の女が両手を広げて首を振る。なんで足が動かない？

「なにムキになってんだい。それじゃあ事実だって認めてるようなもんじゃないか」

口から漏れるのは無規則な、乱れた呼吸だ。なぜ俺の呼吸が乱れる？ まだなにもしてねえだろう？

「さっきアタシに触られて感じちゃった？ 随分気持ちよさそうだったけど」

わからねえ、わからねえ、わからねえ！ だけど一つわかることは、これ以上あの女に喋らせるのは危険だったことだ。あいつに喋られているだけで、俺は俺でなくなっちまう。

できる、やれる、殺せる。心に深く念じる。いつだってやってきたはずだ。

「さっきの続きをしようつてのかい？ まあ悪くはないけどねえ」

一瞬のために、体に力をため込む。意識を絞れ、あの女の首を取る。それだけに集中しろ！

ふっと、女の体から力が抜けたように見えた。

今だ！

意識が景色を置き去りにするような浮遊間の中、俺の風は女の首筋目がけ飛翔した。

「へえ、これがアタタの力か……」

……なんでだ？ 何で殺せない？ 外れたはずはねえ、女は腕を振ったただけだ。打ち消された？ 暗闇の底へ引きずり込まれるように俺は、膝から地面へ崩れ落ちた。意識が急速に遠くなるのを覚えるが、もはやそれに抵抗しようとする気力もなかった。

目の前の少年が倒れ込むのを確認してから、アタシはそっと近づいた。気絶している。無理もない、こんな小さな体で、力を使ったのだ。おそらく誰にも教わっていないのだろう。荒れた大地が彼をここまで磨き上げたのかと思うと、軽い嫉妬を覚えた。

幼い瞳が、驚愕に見開かれるさまを思い出す。おそらく誰にも負けたことなどなかったのだろう。倒れたその横顔をのぞき込み、そつと髪を梳く。力をみたいがための挑発だとしても、彼は傷ついただろうか。

ふと、アタシは嫌な女だなと思った。

曇天はやはりどこまでも続いている。遠くに鳴り響く雷鳴に急ぎ立てられるように、アタシは再び少年を背負った。

土煙を上げる風を避けてアタシは灌木の陰に入る。ねぐらにしている場所までもう少しと言ったところだ。今度は少年を傷つけないように、ゆっくり地面に横たえる。

アタシも少し休もう。彼が目を覚ますのはもう少し時間がかかるはずだ。

膝を抱えて、ほんの少し眠りに落ちる。

「んっ……」

少年のうめき声に私は意識を覚醒させた。まだ意識は戻っていないのだろう。身じろぎをしただけで、すぐに動かなくなる。悪夢を払うように、アタシはじつと少年の横顔を見つめる。

なんだか、猫を飼い始めたときを思い出した。軽い心の痛みと共に、自然と頬が緩む。再び少年を背負い、私は歩き出した。

ねぐらに戻ったアタシは、少年を枯れ草を敷き詰めたベットに横たえる。すぐそばには泉がある。この荒地で数少ない貴重な場所だ。雨露を凌げる最低限の、木々を組み合わせて作ってある。決して快適とはいかないが、贅沢を言うわけにはいかないだろう。

藁を敷き詰めただけのベットに横たえ少年の顔を飽かず眺める。まるで宝物を手に入れた時のように胸の鼓動は早かった。

俺が再び目を覚ましたのは、藁が敷き詰められただけのベットの上だった。

「おい」

体の節々が痛い。起きあがることもできない、首だけを動かして女に声をかけた。

「起きたのか？」

女は俺が起きたのを確認すると、席を立った。帰ってきたとき女の手には、シクの実が握られている。女の手に収まる程度の小さな果実だが、甘い果汁が特徴の貴重品だ。

それを女は俺の目の前で、何の躊躇いもなく一口かじる。思わず、ゴクリとなる俺の喉がこれほど恨めしく思ったことはない。

「ほしいか？」

心根を見透かされたようで、俺はぶっきぼつに答える。

「いらねえよ」

「ああ、そうかい」

そういつてまた一口、かじる。

「本当に食べないの？」

「い、いらねえよ…！」

口ではそういつつ、俺の視線はシクの実に釘付けになっていた。

「美味しいんだけどねえ」

また一口、見せつけるように……いやコイツは俺に見せつけているんだろ。くそっ頭に来る女だ。女にその気がないからなのか、やりあったときのよ様に女の言葉から不快感を受けることはなかった。

「クツクツ、嘘だ、ほら食べる」

ちょうど口の前に差し出されたシクの実。

「い、いら……」

言葉をすべて言い終える前に、シクの実は強引に俺の口の中に割

り込んだ。薄い皮の下から、甘い果汁が俺の口の中に広がる。一噛みすること、新しく広がるその甘みに、気づくと口の中のシクの実が胃の中に収まっていた。

いや、食べたんじゃない。胃の中に入ったただけだ。たぶん……。

「なんだ、もう食べちゃったのかい？」

やり合ったときは別の意味で、女の言葉は俺の心を揺さぶった。

「うるせえな、腹減ってたんだよ！」

あのシクの実には何か入ってたんだろうか？ 自分でも不思議なほど素直に言葉が出てくる。

「アタシを狙ったのもそれが理由？」

「ああ、そつだよ！ 腹が減ってれば他の奴が持つてるのを奪うしかねえだろうが！」

いつしか言葉は叫びに変わっていた。荒地じゃそれが現実だった。石や土くれは食えねえし、そこら辺の草には毒がある。おいそれと手を出せるもんじゃない。水ばかり飲んだって限界がある、だから他人の懐を狙った。

女はため息をついてまたシクの実を取り出してきた。

「食いな」

目の前に差し出されるそれを、痛む体を無理に動かして受け取った。

「アンタ名前は？」

「ねえよ」

なにを考えてるんだろうこの女。

「……ならアタシの手下にならねえか？」

「ああ？」

思わず思い切り女の顔を見てしまった。首が痛てえ。

「アンタがほしいもんは、全て持つてると思うんだがね？」

ちやうど同じ高さの女の目を見返すが、からかつ色は微塵もない。

「俺がほしいのはな、てめえの命だ！」

食いかけだったシクの実を丸ごと口の中に放り込む。

「ああ、構わねえよ」

「はあ！？」

予想外の答えに、俺は戸惑う。

「じゃいいな？ アンタたった今からアタシの手下で！」

いや、良くねえよ、全然。

「なんか問題ある？」

女の眉間に皺がよる。

「俺おまえを殺すって言うてんだけど、大丈夫か？」

頭の悪い奴を見るような哀れみの視線を俺に向け、女は再び口を開いた。

「アンタの腕でアタシに敵うわけないんだから、全く問題ないよ」

うわ、言い切りやがった。

「てめえさつき俺のほしいもんは全部持つてるって言ったじゃねえか！」

ああ、と女は天を仰いで口の端を歪めた。

「誰がやるって言ったんだ？ ほしいもんは自分で取れ」

俺が唾然としているうちに、女は勝手に納得した様子になる。

「もう、問題ないな。ああー……アンタの名前決めなきゃな。えっと……」

少し考える風をして、女は嬉しげに俺の名前を告げた。

「ジン！ どうだ、いい名前だろ？」

女は立ち上がり思い切り胸を張る。

「アンタは今日からこのサギリ様の一の子分、ジンだ！」

そう宣言するサギリの顔は、今までみてきた毒々しさの欠片もなく、ただ無邪気に喜ぶ少女のような笑顔だった。

「……殺せよ」

冗談じゃない。

殺して殺して殺し尽くしてやる。

デイドも、大人も、女も俺が生きている限り。

そう決めて生き延びてきたのだ。

俺が負けるときは死ぬときだ。

やっとこのくそつたれな人生から開放されると思ったのにつ！

「殺せよ！」

気づけば、俺の視界は曇っていた。泣いている。くそつたれ、泣いているんだ俺は。

「殺してくれ、俺はもう疲れたんだ」

うんざりだ。

「おい、ジン」

低く呼びかけたサギリの声が響いた瞬間、俺の胸倉は掴み上げられ強制的に泣き顔を上げさせられる。

「負け犬にぐだぐだ言う資格なんて、あるわけねえだろうが！」

右頬をぶん殴られる。

「てえな！」

「そつだよ、その意気だ」

見下すように嘲笑うサギリ。

「殺してくれだあ？ 女々しいつたらありゃしない！」

投げ出された俺に、馬乗りになってサギリは俺の腕を固定する。

「余計な事考えんじゃねえよ！ お前は、アタシに負けた時点でアタシのものなんだ！」

俺でもわかる単純で、粗暴なガキの理屈だ。

「お前はアタシの為に生きてアタシの為に死ね！」

「ふざけんな、なんで俺がっ」

「十日に一度、アタシを殺す機会をやる。気に入らないんならアタシより強くなってアタシを殺せ」

だが、それを口にするサギリの瞳は真剣そのものだ。
馬鹿みたいに単純で、俺に命をくれると言った。

「後悔、すんなよ……」

「ハッ、そうこなくっちゃな」

俺に名前と、目的と、生きる場所をくれた女は、不敵な笑みを浮かべた。

この世の全てに牙を剥くような、凶暴で美しい笑みを。

牙持つ者達（後書き）

小説を読んでくださいましてありがとうございます。
まだまだ至らぬ所もありますが、何卒ご容赦を。
不定期で連載していきます。

箱庭の夢（前書き）

やたらと人が死ぬ話になっています。
ご承知の上読み進めください。

箱庭の夢

積み上げられた煉瓦の壁垣、幾本もの蔦を絡ませ、それでもなお毅然としてあるその囲いの中に、庭園はあつた。咲き乱れる大輪の花々、百を越す種の花々が競い合い咲き乱れる。

強風に舞い上がる花卉の先には抜けるような青空、小さな雲が空の青さを強調するかのように浮かんでいる。

「カル？」

突然、その声と共に、空は遮られた。遮られた空には影がある。少年は幼く大切な、自分を呼ぶ声に影の主を悟った。

「なに？ ルク」

ルクと呼ばれた少女は大きな目で瞬きをして、カルの顔を見返す。愛らしくふくれた頬と腰に当てられた手が彼女の不機嫌さを物語りが、眠たげに目をこするカルには、彼女の不機嫌に思い当たる節がない。

「なに、じゃないわ！ またこんなところで眠っちゃってたの？ お洋服もこんなに汚してしまつて、また怒られちゃうわ！」

豪華な刺繍に彩られたカルの服、だがカル自身もその服に全く見劣りすることなく端正な顔立ちをしていた。

ともすれば女の子の間違われそうなほど色の白い白磁のような肌、黄金色の髪はこの国の貴族の証として貴種の血を誇示する。愛らしく大きな目に収まる瞳の色は、静かな湖面のように深い青、通った鼻筋は母親譲り、幸福を噛みしめて優しく笑う口元は名のある彫刻

家が彫つたように美しい。

「寝てたんじゃないよっと！」

そういつて立ち上がる少年に、ルクと呼ばれた少女は再び口を開く。

「さあ、カルのお母様が呼んでいらっしやっただわ、一緒に行きましよう」

カルの隣にたつ少女ルクも、愛らしい。フリルのついたドレスを纏つて可憐に微笑む。赤茶掛かつた髪を後ろで一つにまとめ、少年と似た青い瞳、赤みの差す頬、微笑む口元は慈しみの色を讃える。掴めば壊れてしまいそうなほど、その細い華奢な腕をカルの腕に絡ませると、彼を引っ張るように歩き出す。

「なんだろう、おやつかな」

呑気な独り言を呟くと、カルはルクに従つて花咲く庭園から、煉瓦作りの茶色の建物の中へ入っていった。建物の中では、一人の美女が紅茶を飲んでいた。先ほどの庭園で咲き乱れていた花をも色褪せてしまうような、通り過ぎる人が皆が皆振り返る美女。口元に漂うのは慈母の微笑み、瞳に宿るのは賢母の知性。

ルクはそんな彼女に見とれてしまった。何度もあつて実際に話もしているのだが、つい見とれてしまふ。大好きなカルがお母さんにべったりなのも頷けると、一人納得して歩む足が止まっているルクを置き去りに、カルは美女に声をかけた。

「お母様！」

その声にハツと美女が振り返る。

「カル……あらあらまた服を汚しちゃって」

苦笑するカル之母は、ルクに視線をあげた。ドキリとしたルクを知ってか知らずか、彼女は優しい笑みを向ける。

「ルクちゃんありがとう。カルがお世話をかけるわね」

「いえ、おばさまもつたいないです」

「カル、先ほどお父様から使いの者がきました。今日はこれで帰らねばなりません。ルクちゃんにお別れを言いなさい」

はい、つとしっかりした返事をしてカルはルクに別れの挨拶をした。柔らかな光の包む一室に、硬質なノックの音が響く。召使いの男が迎えの馬車の来訪を告げた。

「では、ルクちゃんご機嫌よう」

「はい、おばさまご機嫌よう」

ルクが見送る前を、豪華に飾り立てられた馬車は、遠ざかっていた。馬車が目指すはスカルディアの家、この街を代表する貴族の屋敷だった。カルは場所の窓から覗く街の風景が好きだった。流れる景色、人の営み、笑顔、それぞれが次々と目に入ってくる。

いつものように、街を眺める。もうすぐ屋敷に到着するということと、カルの目に偶然留まったのは、汚い服を着て鎖で繋がれた人の群れだった。

「ねえ、お母様あの人たちはなに？」

聡明な母なら知っているだろうと訪ねた母は、わずかに顔を曇らせた。

「あれはね、奴隷の人たちね」

悲しそうな母の声音に、カルは気づかず質問を続ける。

「どれいつて？」

「悪いことをした人がなってしまうものよ」

ふくんと言いながら、奴隷の群れを眺めるカルは偶然その中の一人の少女と目が合った。汚れてはいるが、緑色の髪を肩の辺りまで切り揃えた少女だった。強固な想いを込めた琥珀の瞳。きりつと結んだ口元は意志の強さを感じさせる。

心臓の跳ねる音を聞いたような気がした。

目をそらさないカルと少女。馬車が奴隷の群れを通り過ぎるほんの一瞬の間だったが二人は見つめ合った。

「カル？」

母の呼ぶ声で、カルは窓へ向けていた顔を母に向けた。

「ううん、なんでもないよ。あの人たち可哀想だね」

「カルは優しい子ね」

抱きしめられた母の温もりに、カルは身を委ねた。

「はあはあ……」

暗闇の中を全力で走る。裏路地から裏路地へ月の光さえも恐れるように、緑色の髪の少女は走った。仲間は無事に逃げられただろうか、脳裏の片隅にある疑問。だが、肉体的な疲労が思考を麻痺させる。

ともかく逃げなければ、捕まったら何をされるかわかったものではない。舗装された道とはいえ、素足で走るには厳しい。一度十字路を曲がったところで息を整えた。

「大丈夫よ、シュセ」ノイスター。貴方はできる。貴方ならできるわ」

自身を鼓舞すると、少女は再び走り出した。

シュセが生まれたのは地方の貴族の家だった。貧しくとも清らかな生活を好んだ父をシュセは未だに尊敬している。恨む相手は他にいない。父が死んだのち、私を死んだことにして奴隷商人に売り飛ばした叔父達にこそ、憎悪の対象だった。土地を奪い、家名を奪われた。

許せない、負けられない。

疲労した肉体を支えるのはその想いだ。

「居たぞ！ あの娘だ！」

見つかった、早くどこかに隠れなければ……。
でたらめに角を曲がる。

「はあはあ……」

鉄格子のはまった行き止まりに、シュセは天を仰ぐ。鉄格子のさ
らに向こうは茨の茂みだ。切り刻まれる己の肌を想像して、シュセ
は一度身震いした。

追跡者の足音が聞こえる。

「あのくそ餓鬼、どこへ行きやがった！」

怒声も近づいている。

「シュセ、できる、できるわ！」

一度目をつむり、意を決してシュセは鉄格子の間に体を滑り込
せ、茨の茂みへ身を躍らせた。獣か何かのようになって、シュセは
茨の茂みを転がり出た。想像したとおり肌は幾重にも茨の棘が食
込み、血を流している。

「う、わっ」

転がり出たシュセを待ち受けていたのは、黒く巨大な猛犬だった。
犬歯をむき出しにうなり声をあげている。一瞬間と向かって犬と視
線が合う。

まずいと思う間もなく、猛犬はシュセに吠え掛かる。

とにかく逃げなければ、その思いが彼女を再び動かした。猛犬に
背を向けて逃げようとする、犬は彼女の汚れた服に噛みついてい
る。思った以上のその犬の力に、シュセはバランスを崩す。

「デューダ、デューダどこ？」

声と明かりが近づいてくる。この犬の所有者だろう。逃げようとするシユセと、そのシユセを逃がすまいとする犬。無言の格闘は、犬の所有者の登場によって打ち切られた。

「デューダなにやってるの？ 誰か居るの？」

人を呼ばれる。もうだめだ。抵抗をやめたシユセを離すとデューダと呼ばれた犬は主人の下へ駆け寄る。甘えるようにしっぽを振り、小さな主に駆け寄る。

「うわ、たいへん」

シユセを一目見た少年はデューダに問いかける。

「どうしよう、デューダ！ 女の人だ。あ、もしかしてこれデューダがやったの？」

わんわん！ と心外だとばかりに答える犬に、少年はすまなそうに頭をかく。

「そうだよね、デューダがするはずないもんね。えっと、それはそうと、どうしよう！？」

わん！ と犬は主を先導するように屋敷の方に主の服を引っ張る。

「ああ、そうかお母様に知らせて手当してもらわないと！」

わん！ と肯定の返事をする犬。

「じゃあデューダその人動かないようにみていてね！」

わん！ まるで人間の言葉を完璧に理解しているような仕草に呆気にとられるシュセ。少年が走り去ると、ディーダは再びシュセの側に近寄る。だが今度は、無理矢理彼女を押さえつけようとはせず、寄り添うように側にいるだけだ。

荒い息をつく少女は、犬の方をみる。

「あなた、私を助けてくれるの？」

鳴く代わりにディーダは少女の頬をぺろりと舐めた。

草を踏んで幾人かの足音が聞こえる。

助かったと思った途端、彼女は睡魔に意識を委ねた。

シュセがカルの屋敷で奉公をすることになって10日間が経とうとしていた。傷ついた体は癒えシュセも徐々に仕事に慣れてきていた。

年が近いということもあり、カルの世話係ということによって彼女の立場は落ち着いている。カルの母の強い推薦ということもあり、他の使用人達も敢えて逆らおうとはしなかった。それに仕事に対するシュセ自身の熱心な態度も、他の使用人達から好感を得ることに成功していた。

「シュセ、本読んで！」

幼い、と言ってもシュセとカルの年齢は1つしか変わらない。その主の願いで彼女は毎晩彼に本を読み聞かせる。傷が癒えてからと言うもの、シュセはカルのお気に入りだった。

シュセの目からみても、カルは愛らしい。大きなベットで二人横

になりながら本を読む。カルが寝付くのを確認すると、シユセはベ
ットから起きあがった。シユセが起きあがるのとカルの部屋の扉が
開かれるのはほとんど同時だった。顔を覗かせたのはこの館の美貌
の女主人。

「奥様！」

思わず声を上げたシユセに、指をその形のよい唇に当て静かにす
るように指示をする。

「あ、失礼しました」

寝付いたばかりのカルを横目で確認しながらシユセは、ベットを
振動で揺らさぬように離れた。

「あの子ったらすっかり貴女に懐いてしまったわね」

優しい笑みをシユセに向けるカルの母。

「いえ、私なんて……」

我が子に布団をかけ直すのは、紛れもなく慈母の姿だった。

「隣の部屋で、少し付き合わない？ 良い紅茶が届けられたのよ」

無邪気に笑うと女主人は、まるで十代の少女にも見えてしまう。

「私などでよろしければ」

二人は隣の部屋へ移る。足下には黒い犬のデューダ。

紅茶から立ち上る芳醇な香りが、部屋を満たしていた。

「どうぞ」

勧められるままに、シュセは繊細な細工を施された椅子に座らされる。

「私の淹れたもので口に合うとよろしいんだけど」

少し困った様子を見せて、女主人はシュセに紅茶を差し出した。

「美味しいです！」

紅茶を口に付けた途端、その風味と仄かに香る甘みにシュセは目を開いた。

「ふふ、ありがとう」

女主人は、両肘をテーブルに突き、少し行儀悪くシュセの顔を覗き込む。

「シュセ、カルのこと好き？」

「はい？」

唐突な質問に、シュセは相手が自分の主人だと言うことも忘れて、問い返してしまっていた。

「私はね、我が子ながらあの子が可愛くて仕方がないのよ」

シユセは曖昧に頷く。

「親つてのはね、子供が大事なの。たぶん自分の命よりもね、私もカルには幸せになってほしいし、楽しく生きてほしいと思う」

「はい……」

「だからね、シユセ。敵討ちなんてやめて、ずっとここに居ない？」

シユセの事情は、助けてもらってすぐ話してある。だから驚くには至らない。

「申し出は、凄く嬉しいです。でも……」

困った顔をしているシユセをみて、女主人は表情を変えた。

「仕方ない子ね、強情なんだから」

そう言っただけで彼女の緑色の髪を撫でる。

「でもね、気が変わったらすぐに言っただけ。私は貴女のこと気に入ってるし、できればずっと手元に置いておきたいんですからね」

悪戯っぽく微笑む女主人の好意にシユセは、涙を流した。

シユセが涙を拭き終わった頃、足下で惰眠をむさぼっていたデイダが、うなり声をあげる。どこか切迫したその声に、シユセ達の表情が曇る。

「どうしたのかしら、この子がこんなに怯えるなんて……」

女主人はデューダを宥めるように、その頭を撫でる。だがデューダは忙しなく部屋中を歩き回り、怯えの色を隠そうともしない。

「シユセ、念のためカルのところにおいて。私は使用人を起こしてきます」

はい、と答えてシユセは隣のカルの部屋に向かった。何も起きなければいい、そう思いながらも不安な予感止め処なく胸に広がっていった。

段々と屋敷の中が騒がしくなってくるのを肌で感じながら、シユセはカルを揺り起こした。寝ぼけ眼のカルをなだめすかしてすぐに動ける格好に着替えさせる。

ドンという衝撃と共に扉は開いた。

「カル、シユセ無事!？」

シユセは乱暴に扉を開けた館の女主人の姿に、驚愕と共に安堵を感じる。細身の腕に握られているのは、レイピア。滴る赤い液体が視界に入った時、シユセは事態が切迫していることを知った。

「私も戦います」

そう願う出る彼女を、カルの母親は優しく退けた。

「貴女にはカルの護衛をお願いするわ。良い？ これは何にもまして重要な私の頼み事よ」

念を押す主人の言葉に、シユセは頷くことしかできない。その返事を了承と取って女主人は二人を促した。

「館に賊が入ったわ、狙いはわからないけど、手際の良さからみてカルね。奥の一室へ向かいなさい、私もすぐに向かいます」

シュセとカルが部屋を出て、すぐに黒い装束の賊が凶刃を振るわれた。縮こまるシュセとその腕に抱かれるカル。それを防いだのは、女主人の華麗な剣捌きだった。よくしなるレイピアは、持ち主の意志に過たず賊の心臓を一瞬にして貫く。

「行きなさい！」

シュセは奥まった一室の扉を開ける。中は倉庫として使われている部屋だ。

「カル様、大丈夫です」

怯える彼を宥めるように、必死にかき抱いた。そういう彼女自身の声も震えている。

倉庫に息を切って部屋に入り込んでいた女主人は、使用人を二人連れていた。まずは部屋にカルとシュセが居ることに安堵したのか、二人に微笑むが彼女の姿は凄惨というしかなかった。返り血を幾重にも浴び、ネグリジエは所々破けて軽い切り傷が伺える。

「扉を閉めなさい！」

使用人の二人に命じて、カルとシュセに近寄りしつかりと抱擁する。

「ごめんね、私の力が足りないばかりに……でもあなた達だけは必ず生き延びさせてあげるから」

女主人は手早く、首から銀の首飾りを外すとカルの首にかけた。

「カル……貴方を愛してるわ。誰よりも」

カルには、まだ事態が理解できていない。

「お母様？」

優しく彼の黄金色に輝く髪を梳くと、頬にキスをする。そしてシユセを振り向く。

「こんなことになってしまって、ごめんなさいシユセ。カルを……お願いね」

死を覚悟しているカルの母の笑顔、不謹慎だがシユセはそれが例えようもなく美しいと感じてしまった。

「さあ、あの箱に入って」

いやがるカルを連れて、シユセは木箱の中に隠れる。

「奥様、扉が破られます」

使用人に声をかけられ、女主人は頷く。木箱の上に新たに荷物を置き、内側からも出てこられないようにして、殺到してくるだろう敵を迎え撃つため彼女は扉に目を向けた。

グシヤリと扉が破かれる音と共に、賊が殺到してくる。入ってきた最初の賊を使用人達が切り伏せていくが、それも多勢に無勢。たちまち押し込まれてしまう。

「居たぞ、あの女だ！ あの女だけは殺すなよ」

賊の中から声上がる。

圧倒的な数の敵に囲まれて、それでも女主人は気丈であった。群がる賊を、レイピアの一突きで葬り去る。まるで舞踊のようなその動きで、3人の賊を一気に倒す。

「賊如き、私が一人で全て葬り去ってくれる！」

裂帛の気合いと共に更に一人を突き殺す。女主人には広すぎる部屋だったが賊にしてみれば狭すぎるその倉庫で、段々と彼女を囲む輪は遠巻きになっていった。

女如き情けねえと、その輪から出てきた巨躯の男を、瞬きをする合間に斬って捨てた女主人は剣を一振りしてレイピアの血を飛ばす。

「次は！？」

輪の間から、血だらけの男が投げて寄越される。フラフラと彼女の元へ歩み寄った男は使用人の一人だった。

「ポーシュ！？」

「奥様、申し訳……ありま、せん」

膝をつき崩れ落ちる使用人の男に気を取られたのが、女主人の不覚だった。背後から忍び寄った一刀は、彼女の動きを奪うのに十分であった。

「くっ……」

蹠踏ける彼女に迫る獣の群れ。手を足を身体を、満遍なく膾にされた。それでもなんとか致命傷を避けているのは彼女の卓越した技能と、先ほど彼女のを殺すと言った声のおかげだろう。

満足に動く部分が無くなった身体を、気力で奮い立たせる。

木箱の隙間からその光景を覗くカルとシユセは抱き合いながらその光景を見ていた。お互いに抱きしめていなければすぐにでも飛び出していきそうなほど、自分自身の理性というものが信じられなくなっていた。

だが、女主人にできるのもここまでだった。

剣折れ、力尽きた彼女は床に倒れる。

抵抗するすべの無くなった彼女に、賊達が止めを刺そうとしたその時、それを留める声が聞こえた。

しかし、それはさらなる地獄の始まりでしかなかった。

「その女には、まだ聞きたいことがある」

賊達の頭だろう。右頬から目に切り上げられた古傷が男の印象を凶悪なものにしている。口元に歪んだ笑みを張り付かせ、男は短剣を取り出して女主人に尋ねる。

「餓鬼はどこだ？」

「屑が！」

荒い息の合間から堪える女主人の左手に短剣を打ち込む。一拍遅れて彼女の絶叫が口から漏れる。

「餓鬼はどこだ？」

「地獄へ、堕ちろー！」

今度は右腕に、抉るように差し込まれる短剣。繰り返される絶叫。それが四肢に及んだとき、木箱の中のカルは自分の中で何かを音を立てて壊れるのを聞いた。自分の口を、身体を押さえつけてくれているシュセが居なければ、間違いなく母を救いに飛び出していったに違いない。

「放して、放してよ！ シュセ……」

そのカルの体から急に力が抜ける。と、同時にシュセの意識も裏返る。

そこは赤い空。

黒い月。

十字架に張り付けられた、黒髪の女が晒す場所。

『憎い？ ねえ、憎い？』

歌うように、願うように、女の三日月に裂けた真っ赤な口から言葉が漏れる。

『私もね、憎いのよ』

この世の全てが。

それは紛れもなく、呪いの言葉。

垂れ流される悪意。

膨れ上がる憎悪。

心を切り裂く敵意。

這い寄る嫌悪。

生きとし生けるものへの嫉妬。

『 憎い』

百万の罵詈雑言を、一言に凝縮したような重み。

その女と目が合った瞬間、カルとシユセは同時に意識を失った。

「強情な女だな、まあ次で最後だ。餓鬼はどこだ？」

五本目の短剣を振り上げながら、問いかけた男に罵倒の言葉は返ってこなかった。

「あん？ 死んでんじゃねえか。遊びすぎたか……」

あくまで平坦な言葉。何の感情も灯っていないような声に、彼の部下でさえ恐れを抱く。

「頭！ ヘルクオスの私兵がもうきやがりました！」

「予定より随分早いな、引き上げだ」

「けど、それじゃ依頼が……」

そう言った部下の首を何の容赦もなく短剣で切り裂く。

「俺に意見するんじゃない」

彼の苛立ちを示すその言葉を残すと、後はいつものように平坦な声に戻る。

「いくぞ」

木箱の中の二人は、ヘルキオスの私兵に発見されるまで意識を失っていた。

双頭の蛇

サギリがジンに出会って一年が経った。サギリは17歳に、ジンは13歳になっていた。

サギリとジンが暮らす荒地には、短い雨季と長い乾季が代わる代わるにやって来る。

そこが荒地と呼ばれるのは人にとって有用な植物が自生せず、雨を溜め込まない土壌に由来した。荒地を支配するのは砂礫と岩石、それに年中吹き荒れる強風だった。

頬を掠める白銀の光、吹き抜ける風に短剣が通り抜けたのだとわかる。反撃をしようと、右手に持った短剣を突き出そうとした瞬間、体の真ん中に鈍い衝撃が走る。同時にジンは、笑うサギリの顔から強制的に顔を背けさせられ、後方に吹き飛ばされた。

「どうした？ アタシを殺すんだらう？」

「くそっ！」

何度か地面を転がって、一気に飛び起きる。姿勢を低くして再び突進。転がった拍子に左手に掴んだ砂を投げつける。

「くそがき！」

砂で目が潰れたのを確認して、勢いを殺さず走る。

「うるせえ！」

言葉とともにサギリの喉目掛けて短剣を突き出す。サギリの白い肌に鉄の牙が食い込むのを幻視した瞬間、切り裂かれていたのは突き出したジンの腕のほうだった。前腕から肩近くまで薄くだが、一気に切り裂かれた。

「ぐっ……」

悲鳴を押し殺し、無理やり腕を動かそうとし、

「はい、おしまい」

傷口ごと、押さえつけられた。

「まだ、やれる！」

片手で目をこすりながら、もう片方はがちりとジンの腕を固定しているサギりに吠え掛かる。

「アンタねえ、アタシがどんだけ手加減してるかわかってる？ 殺さないように斬るのって案外難しいんだよ？」

「ふざけんな！ それはそっちの勝手だろうが」

ため息をつくサギりに、邪悪な笑みが浮かぶ。と同時に、腕から響く強烈な痛み。

「あああああ！」

堪らずあげた悲鳴に、傷口を握り締めるサギリの目には残酷な色が宿っていた。

「お、し、ま、い。わかった?」

無言で頷いたジンに笑顔の質が変わる。

「じゃ、手当てするからこっちおいで」

腰に吊るした革製の鞘に短剣を押し込むと、その後が続く。

「見せてみな」

「一人でできる」

「み、せ、ろ」

躊躇ったあと、ジンは腕を差し出した。

「……少し浅かったか」

物騒な独り言を呟きながら、手際よく傷口を縫いつける。じつと痛みを耐えていると、そのうち化膿止めの薬草と一緒に清潔な布を幾重にも巻きつけられる。傷むのを避けるため、それらはまとめて小さな壺に入れて封をしてある。

「ま、しばらくは動かすんじゃないよ。大体10日位経てば治るか
ら」

「もっと早く治してくれよ」

「アンタの体に言いな」

テキパキと壺を片付けると、サギリは寝台代わりの、藁の上に布を敷いた寝床へ向かう。

「アタシはしばらく寝るから、食事の用意忘れるんじゃないよ」

「俺怪我してんだけど？」

「負け犬がぐだぐだ言うな、行け」

舌打ちを残して、ジンは水を汲みに近くの泉まで足を伸ばした。簡単な食事を取り終えた後、一人何が悪かったのかを考えながら、小屋の外で短剣を振るう。前に一度見たサギリの短剣捌きは思わず見惚れるほど自由だった。両手に一本ずつそれが上下左右、どこからでも相手を襲う。その様を想像して腕を動かす。

「つつつ……」

右腕に走る痛みに、想像は姿を消してしまった。暗闇の中、理想の姿を探して片手で短剣を振るう。目を瞑って必死に思い描く姿はいつしか、サギリのその張り詰めたような横顔だけに吸い寄せられていた。

「そんなに、力任せじゃ振りが遅くなるだけだよ」

背後から聞こえたその声に、一瞬にして全てが霧散する。

「……なんだよ、飯は終わったんだから、俺の自由だろ放っておい

てくれ」

考えていた事が顔に出そうで、ジンは振り向かなかった。

「別に、どうぞ続けたら？」

「お前が居ると集中できねえんだよ」

「ああなるほど、そりゃアタシに勝てないわけだ」

「うるせえ」

背後に立った気配がジンの背にそつと寄り添って左手に手を添える。

「……っおい！」

「逃げるな」

逃げ出したいのを必死で堪える。否が応でもジンの背中がサギリの体の線を感じ取ってしまう。

ジンは自分の考えに思わず赤面する。

「握りは、そんな硬くする必要はない、もっと柔らかく」

添えられた手が、震えそうになるジンの手を柔らかく押し開く。

「丸い石を軽く握るみたいに、意識するのは小指から薬指……手首は自由を持たせて」

言葉とともに柔らかな指が触れられていく。

「そう、力抜けてきたじゃない。そのまま振りぬくのは腕全体を使うように一気に振り貫く……やってみな」

スツと離れていくサギリに、心からの安堵を感じジンは言われた通りに短剣を右から左へ振りぬいた。

「まだ、固いねえ。ま、後は勝手にやってよ」

そういふなり、サギリの足音は小屋のほうへ向かって遠ざかっていった。満足するまで短剣を振るった後、ジンは寝床についた。

藁の寝床に、獣のように丸くなってサギリの隣に寝転ぶ。怪我をした腕を上に向けて寝転がると、サギリの寝顔が近くなってしまふ。遠ざかるうとすれば、藁の寝床から滑り落ちる。早くなる鼓動を無視するように、固く目を瞑った。

一年のうちの何度目かの短い雨季が、荒地を僅かばかり潤していた時期、アタシはジンと狩りに出かけていた。

雨除けのフード付きの黒いローブを頭から被り、必要最低限の荷物をジンに背負わせる。雨を吸ったローブが足取りを重くする。腰にはいつものように、双剣が収まっている。

「この辺だな……ジンここで待ち伏せる。雨除けしつかりしとけよ」

小高い丘の上にある岩の隙間に入り込む。その隙間から出て周囲を見渡せば、雨に霞む街道が視界に収まる。

「なあサギリ」

布を張り終えたジンは、荷物から干し肉を取り出してかじりつく。

「あん？」

体が冷えないように、ジンと体を寄せ合う。

「あの道はどこからどこに行くんだ？」

ジンのかじっていた干し肉を奪い取りながら、ぼんやりと街道を見る。

「向こう側は王都ロクサーヌ。こっちは東都ガドリリアだな」

指を指して説明してやるが眉をひそめて、道を見るジン。

「ロクサーヌってのは、この国の中心。王様がいる場所だよ。ガドリリアってのは荒地の盗賊の親玉がいる場所だ」

いい加減な説明だが、ジンは納得したようだった。

「盗賊の親玉ってことは、サギリよりも強いのか？」

視線をアタシに合わせて、真剣に問いかける。

「さあ？ 会ったこと無いからね」

そうか、と言ってジンは視線をアタシから道に戻した。

「アタシは少し寝るから、見張り頼むよ」

ローブをジンに掛けてやりアタシ自身は、ジンの懐に入り込む。

「っおい！」

戸惑いを隠せていないジンを無視して、ジンの胸板にアタシの背中を預ける。

「何かあれば、起こしな。んじゃお休み」

目を閉じれば、睡魔はすぐにやって来た。

視界を曇らす豪雨の中、迫り来る白刃を寸での所で避け、相手の懐に潜り込んで双剣を一閃する。敵の血の噴き出した傷口を殴りつけ、投擲用の小剣を指呼に挟む。

「ジン！ 頭下げな！」

ジンが動く寸前、アタシの手から小剣は飛び立った。ジンの髪を掠めながら飛翔した小剣は、狙い通り敵に牙を剥く。

ジンが残りの護衛を引き付けている間に、アタシは本命を狙いに幌馬車へ向かった。

「や、やめろ！ 来るっ」

無様に叫ぶソイツの喉笛を掻き斬り、御者台から蹴り落とす。雨の飛沫が返り血を洗い流し、流れた血を大地に運ぶ。横目で

確認すれば、ジンもなんとか相手をしていた護衛を倒した所だった。

「ったく、手間かけさせやがって」

毒づきながら、幌馬車を街道から外す。人通りがあるとは思えないが、念のためだ。

「ジン荷物確かめて、使えそうなもんは持って来な」

不満そうなジンが、視界に入ったので説得してみる。

「さっき助けてやったろ？」

「どさくさに紛れて、俺を狙ったんじゃないのか」

ひどいことを言う。まあ当たっても良いかなあ、とは思ったけど。それでもジンは不承不承、アタシの命令に従う。

護衛どもの呻き声が聞こえる中、馬が暴れないように、御者台で手綱を握りながら勢いの衰えた雨音に耳を澄ませる。

雨粒が大地を濡らす。何千何万と降ってくる雨粒を大地は抱えきれなくなり、大地の上に薄い膜を張るように、水溜まりが出来ていた。その上から更に降る雨粒は、水溜まりを押し流して流れを作る。高いところ低いところへ、強い所から弱い所へ。

「ひい」

アタシの思考は、後ろから聞こえてきた声に遮られた。

「サギリ」

声をかけてきたジンの足元には、肥え太った男が転がっていた。

「これがカシラらしい」

ジンが無造作に蹴ると、悲鳴が上がる。

「そんなの捕まえてどうすんだよ。積み荷は何だった？」

ジンは痛みを堪えるように、幌馬車の方へ声を掛けた。アタシは御者台から降りて、ジンの傍らに立つ。

幌馬車から恐る恐る降りて来たのは、薄汚いガキが三匹。

「奴隷か」

使えそうにねーな。

「お前奴隷商人か」

自分の声から温度が失われて行くのが分かる。

「ジン」

痛ましそうに、奴隷のガキどもを見つめるジンを呼ぶ。

「殺せ。奴隷もな」

やだやだ、苦勞して獲たのは幌馬車だけとは。まあどこかで売
りさばれば……

「サギリー！」

「あん？」

アタシを睨むジンの姿に驚いてしまった。もしかして怒ってる？
何で？

「俺は子供は殺せない」

「じゃあ、アタシがやるよ。どきな」

「サギリ！」

「なんだよ！」

段々とアタシの機嫌も悪くなる。元々、獲物が少なくて落ち込んでたのだ。

「こいつらを逃がしてやってくれ」

「はあ？」

奴隷のガキどもを庇うようにして、前にでる。

この何の取り柄も無さそうなガキどもを助ける？ 一人一人の瞳を覗き込もうとするが、逃げるように目を逸らす。まるで、そうしていればジンが助けしてくれるとでも言うように。

段々と怒りが沸いてくる。抗うこともせず、何もせず、考えもせず、誰かに縋り付き助けを求める。その脆弱さが許せない。何よりも許せないのはそのせいでジンがアタシに逆らっている事実。

「どけ、ジン」

腰に差した双剣を抜き放つ。アタシのジンを惑わす奴は殺しておくに限る。

ジンは動かない。首を振って止めようとする。

一歩踏み出す。

それでもジンは動かない。動けよ、アタシの邪魔をするな。

「ジン、アタシがお前を殺さないとも思ってたのか？」

殺すつもりは無かったが、あくまで逆らうならアタシにも考えがある。視線に殺気が籠もって来る。

「俺は嫌なんだ」

ジンが体の中から声を絞り出す。

「サギリがこいつらを殺すのなんて見たくない」

ぶちりと、アタシの中で何かが切れた。

「甘えてんじゃねえ！」

ジンの胸ぐらを掴み睨み付ける。

「ジン！ こいつらを逃がしてどうするつもりだ！ こいつらがこの荒地で生きていけると思ってるのか、ここで殺してやるのが慈悲つてもんだらうが！」

雨はもう気にならなかった。ジンの髪を水滴が伝って落ちる。

「お前も知ってたんだろうが、ここは力がない奴が生きていくには、地獄だ」

怒りで震えたアタシの言葉は雨粒と一緒に落ちていった。

「知ってる」

アタシでない何か遠くを見て俯くジン。

「分かってん」

「けどよ！　俺はサギリに出会っただろ！」

何言ってるんだ。アタシと出会ったからって……それが。

「俺に名前をくれて、生きる理由も、場所もくれただろ！」

アタシの為に生きて、アタシの為に死ぬ。出会ったその日の言葉だった。律儀に覚えていたのか。

「お前には力があつた。けど、こいつらには無い。なんでそれだけのことが理解出来ない！」

熱くなるな。ジンはまだまだ使える。落ち着け。

アタシの言葉を受け入れたのか、俯き荒い息を吐いていた。

アタシはジンの肩に手を乗せる。

「お前が悪いわけじゃない。アタシ達には力の無い奴を抱えて、生きていくだけの余裕なんか無いってだけだ」

誰が悪い訳でもない。敢えて言えば運が悪かった。アタシはその現実を受け入れた。

だからジン、お前も受け入れて生きていくんだ。
ジンの肩に置いた手にジンの手が重なる。

「……こいつらが、力があってサギリの為に役に立てば良いんだな？」

ジンは泣いていたのかも知れない。また激しくなった雨がアタシに判断を許さなかったけど。

「ああ、そうだよ」

だがそんなことは有り得ない。こいつらは弱く、アタシやジンとは違う。

「わかった」

そう言つてジンは奴隷のガキどもに、小剣を一つずつ渡した。
怯えるガキどもにジンは言葉をかける。

「お前ら、名前は？」

一人一人、頭を撫でながらジンは聞いていく。アタシには聞き取れない程小さな声で名前を告げる奴隷のガキども。

「サイシャ、ケイフウ、ルカンド。お前らに一度だけ機会をやる」

ジンは三人を抱き締めながら命令した。

「あの奴隷商人を殺せ」

その言葉は懇願に似ていた。

「息のある護衛どもを殺せ」

その懇願はアタシと、奴隷のガキども、そしてこれから死ぬ奴隷商人達に向けられていた。

「俺がお前らを守つてやる。だからお前らは生き延びる為に、殺せ」

これは契りだと、アタシは思った。

人ではない、この荒地で生きるアタシを含めた獣達の。

弱い奴は死ぬ。

生き延びなければ、強くなるしかない。

例え人という範疇から洩れ、屍肉を漁つても……。

ガキどもは躊躇わなかった。

その日奴隷のガキどもは死んで、餓えた獣が三匹生まれた。

アタシは認めるしかなかった。

アタシは一声で三人もの人間の心を動かす術を知らない。

恐怖に縛られたガキどもに、狂気を選ばせる言葉をアタシは知らない。

それは間違いなくアタシには無い力と呼ぶべきものだ。

強い奴に従え。意志を通したきや力を示せ。

それがアタシ達のルールになった。

そしてアタシ達はその日から、盗賊団『双頭の蛇』を名乗ることになる。

人から忌み嫌われた魔女と、狼と、蛇どもの血まみれの組織は産声を上げた。

双頭の蛇（後書き）

荒地の気候はステップ気候と砂礫の砂漠の悪いところだけを混ぜたような感じを想像してくださいませ。

器に絡む薦（前書き）

悲劇から数年後……

器に絡む鳶

大人がゆうに五人は縦に並ばねば届かぬ天井、それを支える巨大な円柱が館の主が鎮座する椅子に向かつて整然と左右に並ぶ。沁み一つない赤い絨毯が敷き詰められた床、主の側に並ぶは鉄靴の先まで完璧に磨き上げられた屈強な私兵達。その眼光に油断の色は無く、主と対面する者を無遠慮に睨みつける。

主の名をヘルキオスと言う。広大な館は彼の威勢を物語る。街では一応十人の貴族の合議制を採っているが、内実ヘルキオスともう一人、ツラド家の当主が実権を握っている。その彼に来訪者があった。

「御機嫌麗しゆうなによりです父上」

肩にかかるほど伸ばした金色の髪を一つに束ね、目鼻立ちは恐ろしい程に整っている。彼が一声かけて微笑んだなら年頃の花々は彼に全てを捧げてしまうような、妖艶な雰囲気を持つ少年だった。歳相応の声から紡がれるのは、ヘルキオスが苛立つ程の落ち着きよう。私兵達の視線をせせら笑うように優雅に一礼して膝を付き、ヘルキオスを見上げる。湖水色の凍りついたような視線がヘルキオスの姿を映す。

全体に豪華な刺繍を施した椅子に居座るのは、巨躯の男だった。顔半分を覆う顎髭、落ちくぼんだ眼窩は猜疑心の塊のように、細く視線は実の息子を見るようなものではない。肥えた体は窮屈そうに椅子の骨格を圧迫する。

「久しいな、カル。いくつになつた？」

「16になりました」

視線をヘルキオスから外し、穏やかにカルは口にする。カルとヘルキオスはかれこれ一年近く会っていない。ヘルキオス自身が避けていたからだ。

「そうか、今日呼んだのは他でもない」

ヘルキオスの低音の聲がカルにかかる。

「近頃お前は私兵を養っていると聞いたが、まことか？」

「はい」

俯いたまま、カルは答える。

「その数は300を数えると聞いたが、些か集め過ぎであろう、まるで軍ではないか。即刻解散させよ、お前にはまだ早い」

カルはゆっくりと伏せていた視線を上げた。

「お言葉ですが、父上。私兵を養うは成人した貴族の嗜み、それに加え私は先年母を賊の襲撃により失っております。もしあのとき300の私兵が側に居たならば、母は未だ父上の傍らで微笑んでいらつしゃったでしょう。300ですら少ないと感じております」

カルの言葉に、ヘルキオスは唖った。

「貴族の成人は17からであろう、それに以前より治安は安定しておる。やはり300は多すぎる」

眉間に皺を寄せ、ヘルキオスは語気を強めた。

「父上、成人ともなれば私は戦に赴くことになりました。その家名を賭けた戦場に昨日今日雇った者共を連れて行くなど、私はそこまで無謀ではありません。私兵は日頃から目をかけ、手懐けておかねば役には立ちません」

ですが、と言い置いてカルは再び口を開いた。

「父上のご威光を持ちまして、確かに治安は安定しております、私兵を解散とは参りませんが数は100程度にまで減らしましょう」

苦々しくカルを見るヘルキオスに対して、カルは無表情に見上げた。

「ご用件がお済みでしたら、私は失礼させて頂きます。雇った私兵の半数以上を解散させねばなりませんので」

立ち上がって再び優雅に一礼するとカルは父に背を向けて歩き出した。その背が細部まで彫刻を施した豪華な扉の向こうに消えてから、ヘルキオスは舌打ちする。

父の居間から出て、待たせてあった馬車へと向かう。

「無駄に豪華な館だ……」

一人毒づいて、玄関まで歩を進めるとカルにとって見慣れた人影

がある。

「お帰りなさいませ」

まず目立つのはその髪の色だった。翡翠の色、町ではあまり見ない辺境の貴族達にまれに現れるという稀有な存在。そして少女から女へと成長する過程においての過渡期、その時期特有の美しさを持っている。意志の強そうな切れ長の瞳はそのままに、整って入るが少し低い鼻、愛らしい口元は固く引き結ばれている。

だが何よりも彼女を特色付けているのは、その身に纏う純白の鎧だった。プレートは彼女の体に合わせて優美な線を描き、手首を守るガンレットから足を守る鉄靴のソールレットにいたるまで縁を銀色で補うほかは、白で統一されていた。腰に帯びるは銀細工も見事な細剣。

「ご苦労、シュセ」

カルは彼女が開けた馬車の扉の中へ悠然と入り、続いて彼女も周囲を一瞥した後に入る。

馬車の中は思ったよりも広い。

「お父上との久々のご対面はいかがでしたか？」

「ふん……あのようなもの、父ではない」

穏やかに問いかけたシュセの言葉を、カルは一蹴する。シュセの表情が曇るのを見て取ったのか、カルが言い足した。

「息子の年すら覚えていないのだからな」

小さくシュセの溜息が聞こえたカルは、顔を窓の外に向けたまま、視線だけをシュセに向ける。

「私に失望したか？ そのようなことに拘る小さな器だと」

自信に満ちた、拒否されることなど考えもしない傲慢な微笑。カルの妖艶に整った表情とあいまって、普通の少女なら頬を染めるところだ。

「まさか、わたくしはカル様にもまだ子供っぽさが残っていて、安心しております」

くすりと上品に笑うシュセに、暗に子供だと言われて、カルは憮然として視線を外に戻す。

太刀をとつても、勉強をさせてみても同輩に並ぶものは居なかった。恵まれた体格と、努力を惜しまぬ心の強さ、加えて天賦の才。並ぶべき者は居なかったのだ。

ただ一人、決して自分の前に出ようとしなない彼女を除いては。 たった一度だけ、本気で立ち会った勝負では彼女に完膚なきまでに叩きのめされた。その後何度、立会いを望んでも彼女は応じなかった。

「カル様、この後はルク様のお屋敷に向かいますが、よろしいですか？」

「ああ……」

気の無い返事を寄越すカルに、シュセは微笑んだ。

「早くご婚約が整うとよろしゅうございますね」

「うん」

カルは思う。ルクのことには好きなのだ、母の死で取り乱す自分を曲りなりにも立ち直らせてくれたのは彼女の優しさだった。だが…。

「シュセ、お前は慕う男は居ないのか？」

ふと、常に傍らにいるこの女性が気になった。自分と共に絶望を味わい、苦しみを味わい、そして力を手にしたその女性のことを。

「……今はこの仕事こそが私の恋人ですよ」

一通り驚いた後、彼女が口に出した言葉にカルは寂しさを覚えた。

「なあ、シュセ。もしルクとの婚約がなり、私が王になったら」

カルはこちらを向いて彼女の瞳を真っ直ぐに見つめる。

「はい？」

「側室にならないか？」

その答えにシュセは噴出した。カルはやさしい。だが、育ちのせいか少々人と違う考え方をしてしまうようだ。半ば彼は本気でそんなことを考えている。自分を心配していることが嬉しくもあり、可愛くもあった。

「わたくしを剣で倒せたら、考えましよう。弱い者に嫁ぐなどわたくしの騎士としての誇りが許しませんわ」

カルは眉間に皺を寄せると、シュセに向けていた顔を再び窓の外に向ける。

「戦いたくとも、シュセが試合を受けないのでは、どうしようもないではないか」

「ふふ、ならば側室のお誘いはご遠慮いたします」

卑怯な、と行って拗ねるカルをシュセは愛しげに見つめていた。

「ああ、そうだ。それとな」

今思い出したという風に、カルは再び向き直る。

「父から私兵の数を減らせといわれてな」

シュセの中から固い鎧を着た武人の顔が現れる。

「いかほどまでに？」

「100だそうだ」

悠然と言い放つカル。

「随分と寛容なご処置でしたね」

50以下にまで、減らされることを覚悟していただけにその安堵は大きい。

「私としては、現状の半分程度は残したかったんだがな」

ふん、と面白くなさそうにカルは鼻を鳴らした。

「母の話をしたからな、あの男も思うところがあったのだろうさ」

母の話。その話をした時のカルはどんな気持ちだっただろう。やはりカルは強い、シユセは改めて自分の主を眩しいものでも見るように、目を細めてみた。

カルが去った後間もなく、ヘルキオスの元に一人の訪問客があった。

「オウカ翁が？」

客の名前を聞いて、ヘルキオスは落ち窪んだ眼窩を驚きに見開く。

「ご老体、わしに何か御用ですか？」

権威と権力を集めて、その傲慢さを隠さないヘルキオスにしては、この老人への接し方は異常な程に丁寧であった。招き入れた部屋さえも、カルと会う時に使った上下関係を知らしめるよなものではなく、まるで自分の年長の親族を敬うように、お互いに広いテ-

ブルを挟んで向かい合う。

客の名はオウカ・ジェルノ。街を支配する貴族の家のひとつジェルノ家の当主だった。齡76を数え、過去に美しい金色だった髪は既に白くなっていた。皺くちやな顔に温和な笑顔、小柄な体つき、一見して好々爺に見えるその老人の恐ろしさをヘルキオスはよく知っているつもりだった。

先々代、つまり彼の父の代からこの街に根を張る巨大な老木のような男だ。そしてこの男が動くとき、なにかが起ころのだ。

「ひとつ、買って頂きたいものがございましてな」

しわがれた声で老人は、ヘルキオスと向き合った。

「……ほう？」

ほんの一瞬だけ、戸惑ったような声を出すヘルキオスにオウカは人の良い笑みを向けた。

「なに、我々は過去において良い商談相手だった。これからもそうありたいと願っているだけですよ」

もって回った言い回しにヘルキオスは、この”商談”が自分にとっても、オウカにとっても利益のあるものだと考えた。そしてそれ相応に危険なことも同時に見て取ることができていた。彼には、オウカの笑みがこれ以上無く残忍に見えていた。

「買いましょう。その品物とやらを」

買うと決めたら、決して躊躇はしない。それがこの老人と商談をうまく運ぶコツだった。年老いて尚巧妙に造った笑顔の仮面の奥に、

確かに燃える野心の火を見取ってヘルキオスは即断した。

「カル、また服が汚れてしまっわ」

よいしょっ、と言ってカルの隣に腰を下ろすのは可愛らしい少女だった。背中 of 辺りまである赤い髪が、吹き抜ける風に揺れる。被った帽子に手を当て、深い青をした瞳は悲しみと優しさを内包して寝転がるカルに向けられる。高く通った鼻筋に、少しだけ垂れている大きな目、口元は二つの閉じた小さな貝殻のように愛らしい。落ち着いた色の若草色のドレスを纏い、心地よく吹く風に揺れる草花を視界の隅に収めながら優しい口調でカルをたしなめる。

「カル、眠ってしまったの？」

ルクの声に、カルは目を瞑ったまま答える。

「ああ、眠った。だからもう少しこのままにしておいてくれ」

カルはルクの家 of 庭園が好きだった。花咲く庭園、かつて母の殺される前包んでくれていた幸せの残照が、まだここにはあったからだ。太陽の光が降り注ぐこの場所。目を閉じて瞼の裏からでも、その光を感じることが出来る。

ふとその光が翳った。薄目を開けたカルの目に入ってきたのはすぐ側にまで近寄っていたルクの可愛らしい顔だった。一瞬たじろぐ彼を、ルクが笑って見下ろす。

「カル、嫌なことあったでしょ？」

「……ない」

「ふふふ、判り易いわね」

ルクはそつとカルの頭の下に両手を当てて、自らの膝の上に導く。

「嫌なことがあったときには、いつも庭園で寝転がるんだもの」

微笑と共に彼女の手が優しく包むように、カルの頬を撫でる。

「カル知ってる？ 社交界では貴方有名な人のよ」

「どうせろくでもないことで有名なんだろう？」

瞑った目はそのままに、薄っすらと微笑する。

「本当、ろくでもないわ。スカルディアの貴公子、その妖艶なる瞳は年頃の花々を魅了し、その蜜を吸い取ってしまうんですって、ですから社交界には滅多に出てこない」

クスクスと楽しそうに笑うルクに、カルも苦笑する。

「勇壮なその心は千里を駆け、その瞳は深遠なる智謀の色をたたえる。剣を取れば敵う者なく、美しきそのご尊顔は社交界の花々を魅了する」

「参ったな、そんな奴がいたら是非お目にかかりたい」

目を開けて笑うカル。

「本当、わたしの目の前にいるのは昔から変わらない甘えん坊の力なのよね」

「甘えん坊はないだろう。私のほうが年上なのだから、私は今年で15ルクは今年で14のはずだ」

見詰め合ったまま、二人は語り合う。

「あら、わたしの膝の上で気持ち良さそうに寝転んでいるのは、一体どこのどなたさまでしたかしら？」

「きつとその噂のろくでもない貴公子様だろう」

どちらとも無く笑いあう。

「あら、カルお迎えの方が来たみたいよ」

カルが視線を巡らせれば白銀の鎧姿のシュセが、ルクに深々と礼をしている。

「凛々しくて綺麗な方ね、浮気しないですよ？」

悪戯っぽく微笑むルク。カルは立ち上がりながら、体についた汚れを払う。

「残念ながら、振られたよ」

「あら、ろくでもない貴公子さんにも靡かせられない人がいるのね」

「そのろくでもない貴公子だから、靡かないんじゃないかな」

立ち上がったカルとルクの視線が絡み合う。

「カル……約束してくれる？ 私を一人にしないって」

今までの笑顔が嘘の様に、俯いてしまうルク。

「あと一年すれば正式にルクを妻に迎えられる。そうしたら一緒に住もう。この屋敷で……私がルクを幸せにしてみせる」

どちらともなく体を寄せ合い、口付けを交わす。

「約束だ」

「うん」

そういつて微笑み、分かれる二人を、一人の騎士と庭園の花々が無言で見詰めていた。

街で政変が起こったのは、その翌日の夜のことだった。それはあまりにも急激に、あまりにも隠密に進められた闘争。

すなわち、街の権力を二分していたスカルディア家とツラド家の闘争、いや闘争と呼ぶにはツラド家の抵抗はあまりに微弱だった。完全な不意打ちだといって良い、結果は目に見えている。スカルディアが勝ち、ツラドは滅亡に追い込まれた。

カルが事態を知って、着の身着のままルクの屋敷へ向かった時その屋敷は既に、紅蓮の炎が支配する場所と成り果てていた。

屋敷の主は行方知れず。だがこの炎では……。

「なぜだ。……なぜ、私の大切なものばかりを！」

壊れないように、優しく手にしたものばかりが、指の間をすり抜けて零れ落ちていく。火炎が踊る、花咲く庭園を睨みながら、カルは毒を吐き出すように呟いた。

刻まれた右腕の力が疼く。

「シユセ、屋敷に戻るぞ」

わずかばかり、付いてきた供を引きつただけで屋敷を出てきた彼は、ルクの屋敷が炎で崩れ落ちる音を背中で聞いた。溢れる感情を押し殺した声。わずかに震えたその語尾を追って、シユセはカルに従った。

馬にまたがり全速力で屋敷へ戻る。

あの男を殺そう。最早、父とは思うまい。

屋敷へ戻ったカルは、真っ先に屋敷の中にある武器庫へ走った。武器庫の番人を怒鳴りつけ、自分用の槍を掴み取る。荒々しく自分の部屋へ戻り、服を着替えていた所へシユセが顔色を変えて入ってくる。

「槍など出して、戦にでも向かわれるおつもりか!？」

「あの男を殺す! 兵を集める」

他には何も考えられなかった。

「できません」

「……なに？」

「できないと、申し上げたのです」

怒りに歪むカルの顔と、いつもより幾分強張ってはいるが冷静なシユセ。

「シユセ、主の命が聞けないのか！」

「今の貴方は怒りに狂っておられる。みすみす死に行く主を止めるのは臣下の勤めと心得ます」

身に着けようとしていた上着を投げ捨てて、カルが槍を振るう。風を切る音が夜の部屋に響く。主の部屋だけあって天井は高く、部屋は広い。余計な調度品も、ほとんどない。室内での戦いといえど、槍が不利になる要素は微塵も無い。

対するシユセは腰に帯びた細剣をすらりと抜く。胸の前で騎士の礼を取り、カルと相對する。

「もう一度言うぞ、シユセ。兵を集めろ、ヘルキオスの首を獲る」

槍を右の脇に抱え、低く怒りに満ちた声で、婚約者を失った男は告げた。

「できません」

礼をとっていた姿勢から、細剣を真横に振りぬき、忠実なる騎士は答えた。

そこから先、言葉は無かった。豪風を上げて、右から左へなぎ払われる槍が、シュセに襲い掛かる。まともに受ければ、シュセの体重など軽く吹き飛ばすほどの一撃を、シュセは紙一重ですり抜け力に迫る。

鎧を着けているとはとても思えぬ俊敏な動き、だがすり抜けた側から再びカルの振るう槍が戻ってくる。槍の重さをまったく感じさせぬ、恐ろしいほどの槍捌き。先ほどは紙一重で交わせた一撃が、今度はシュセの体を吹き飛ばす。だが、それでもシュセの体勢を崩すまでには至らない、鉄靴と、床が擦りあい跡ができる。

「どけ、シュセ。これ以上邪魔をするなら、貴様も殺すぞ」

「くぐいー」

細剣でその提案を斬るように、二度縦横に振る。

カルの腕に刻まれた剥き出しの印が、黒く光る。母を殺され、絶望の中で気づけばいつの間にか右腕に刻まれていた印。かつて邪悪なる神の僕達がつけていたと言われる印だ。

印から黒い雷がほとばしり、指先を通じて右手に抱えた槍を包む。黒き雷に包まれたその槍は、獲物を貫く為^ニに空を翔る。

「三叉の黒槍ですか……」

シュセはそれを見てあわてる様子も無く、細剣を真っ直ぐ飛翔する三叉の黒槍に向けた。シュセの右腕にも、印がある。発症したのは、カルと同時期、なぜかはわからない。だがシュセには理由などどうでも良かった、力がほしいという願いがなかったのだから。

細剣の先がチラリと光ったと思った瞬間、トリシユラは何かにぶつかり、爆散した。続いて、カルに向けられた細剣は、カルの体を吹き飛ばす。少ない調度品を壊しながら、吹き飛び転がるカルの方

へシユセが歩み寄る。

武器を失い、散々床に打ちつけられながらもカルは立ち上がる。口の中に溜まった血を吐き捨てる。シユセが彼の目の前に来るのは同時だった。

「どけ……シユセ」

尚も己の父を殺そうとするカルを、シユセは細剣を持たない左手で殴った。呆気に取られるカルに向かって、シユセは想いをぶつける。

「しっかりしないか、カル・スカルディア！ 貴方は私の主なのだ。何を怯える、何を恐れる！ 怒りを納める、貴方ならできるはずだ」

シユセは持っていた細剣を、逆手に持ち替えるとカルの目の前に突き出した。

「貴方から、貴方の母の形見の細剣を頂いた時私は誓った！ 貴方を必ず至高の座まで押し上げて見せると、こんな所で貴方を失ったら、私はどうすればいい！？ あの時味わった絶望を、悲しみを、一緒に拭い去るのだろうか？ 忘れたのか、カル！」

シユセは唇をかみ締め目尻に涙を浮かべ、必死にカルの瞳を見つめた。やがて、カルは彼女の前から離れ、ベットに腰掛け下を向く。

「私は、約束したのだ。幸せにすると、一人になど、しないと……ルクを、私は」

頭を抱え、自らの無力をかみ締める。果たされなかった約束。シユセは何も言わなかった。

「すまなかつた……」

震える唇から、聞こえるか聞こえないかギリギリの声を出すと、俯く。シュセは目尻に浮かんだ涙を払い、細剣を鞘に収める。腰から鞘ごとそれを抜くと、ベットに腰掛けて俯くカルの前に片膝をつき両手で捧げ持つ。

「いくら火急の事と言えども、主に手を上げたのは騎士にあるまじき行為。どうか処罰を……」

「そうだな、お前は私の騎士だ」

「はい」

カルは、左手で細剣を受け取ると処罰を待つシュセに歩み寄り、鞘を払い抜き身を彼女の肩に当てる。

「私は必ず、王となる。この街を治め、周辺の蛮族どもを平らげ、国を作る。以後片時も私の側を離れるな。そして、私より先に死ぬことは、許さぬ。お前は私の死を看取るまで生きること命ずる」

これが罰だ。そう言い置いてカルは細剣を鞘に戻した。

「受け取れシュセ」

「……はい」

細剣を受け取ったシュセは立ち上がる。

「……お部屋を片付けねばなりません。誰か人を呼んで参ります」

立ち去ろうとする彼女の手を、カルの左手が掴む。

「お前は、私を抱きしめてはくれないのだな」

シュセの握り締めた拳が震える。唇をかみ締め、きつく目を瞑る。

「わたくしは、貴方の騎士です」

「そうか」

力なく離れるカルの手の感触を振り切るように、早足で部屋を出るとシュセは扉を閉めた。中からは主の慟哭の音が聞こえる。

その声に、全身の力が抜ける。立ち上がることが出来ないほどに、打ちのめされた。

自分は正しい判断をしたはずだ。今動きを見せれば反逆者として即刻討伐の対象となる。

刻印の宿る右手を、思い切り床に叩き付けた。

力がほしいと願った。得たはずの力。だと言うのに、大切な人を悲しみから守ることも出来ない。

そして一瞬、だが確かに胸を掠める黒い想い。

これであの人の傍には、自分一人。

その想いを自覚したシュセは、浅ましさに顔をゆがめる。

「私は……最低だ」

器に絡む薦（後書き）

十貴族による合議制⇨寡頭政治という政治形態ですね。
ロクサーヌの人口は概ね20万人前後を想定しています。

牙を剥く黒蛇1（前書き）

器に絡む鳶の裏舞台のお話

牙を剥く黒蛇 1

「くそジジイいるか!？」

東都ガドリアの一角、アタシは石造りの店の中で声を張り上げた。

「うるせえ、蛇娘！ 怒鳴らんでも聞こえとるわい」

禿げた頭に、白い顎鬚を蓄えたモルトの爺さんは、アタシに負けない声を張り上げて店の奥から顔を見せた。

「んで、用件は？」

上半身裸の爺さんの体の各所には、古傷が所狭しとある。目付きもなかなか鋭い。

当然と言えば当然だ。この爺さんはアタシの同業者……つまり盗賊だ。

「ルカンドだ。ちっと借りれねえかな？」

『双頭の蛇』を立ち上げてから、2年が経っていた。アタシは19に、ジンは15になっていた。

あの時拾ったガキどもも、なんとか使えるようになり今じゃ手下を何人が抱える身分になっている。

変われば変わるものだ。

「やい、蛇娘。てめえ、アイツは俺に弟子入りさせたんだろっが、今更どの面下げて借りに来てんだ、おう！」

「細けえこと抜かしてんじゃねえよ！ 花も恥らう乙女がこんなむさ苦しい所まで足運んでやってんだ。十分だろうが！」

「花も恥らうう？ ハツ、トチ狂ってんじゃねえぞ！ どこにそんな大層なもんがいるんだ？」

「てめえの目は節穴か？ いやいよ『炎の運び手』のモルトも墓場が近いらしいな！」

「やんのか、蛇娘！」

「やめとけ、くそジジイ。まだ長生きしてえだろうが！」

一触即発のアタシ達を、止めたのは揉め事の張本人だった。

「サギリさん！ どうしたんです？」

まだ幼さの残る顔に、人の良さそうな笑みを浮かべて、店の奥からルカンドが顔をのぞかせた。

「丁度良い、借りてくぞ。くそじじい！」

「待ちやがれ、話は終わってねえぞ！」

戸惑うルカンドの手を引いて行くこうとするアタシを、強引に引き止める。

「何の用で、わしの可愛い弟子を連れて行くつもりだ！ この人攫いめ！」

「師匠……」

目頭の潤んでいるルカンドを無視して、モルトを睨み付ける。

「決まってるんだろ、仕事だよ。仕事！」

「コイツは真つ当な職人として生きていく。そう決めてわしの所に預けたんだろっが！」

思わず舌打ちが漏れる。今更古い事を言い出しやがって。

「心配しなくても、二十日ほどで無事に帰してやる！」

睨み合う、アタシとモルト爺。それを打ち破ったのは店の外から、聞こえた能天気な声だった。

「サー姐まだ？」

小柄な体躯に、ルカンドに比べるとこちらは正真正銘の童顔。

「ケイフウ！」

驚いたのはアタシとモルトの間で困惑していたルカンドだった。

「……サー姐、遅い」

ぼそりと呟いて、日の光から逃れるように日陰に入り込んでいるのはサイシャ。どんよりと暗い雰囲気そのままの、真つ黒な服で体の凹凸を隠している。

「サイシャまで！」

「ルカく久しぶりい」

「……よお役立たず」

へにやり、とした笑顔を見せるケイフウと暗い瞳で見上げるサイシャ。

「変わらないね、二人とも！」

弾ける様な笑顔のルカンドを横目に、アタシは舌打ちする。

「なんだなんだ、『双頭の蛇』の幹部連中が揃いも揃って！」

困惑するモルトに顔を向け、ケイフウが屈託の無い笑顔を見せる。

「遊び、ルカンド一緒、ロクサー又行こう」

緊張感のかけらも無いケイフウ。

「……王都、殴りこみ」

暗く笑うサイシャを横目で見て、アタシは思う。コイツらの育て方をどこか、間違っただろうか？

「お前ら、さっきアタシの話を聞いてたか？ 王都へは偵察に行くだけだ！」

「美味しい物、食べるう」

「……ついでに、殺せば良い」

疲れる。それがアタシの正直な感想だった。

「まあ、そういうわけでまともなルカンドを連れて行くからなっ！」

「まあお前らが揃ってるなら心配もあるめえが……」

ふと、気づいたようにモルトは疑問を発する。

「狼野郎はどうした？」

「ジンにいならあ、外で」

「……馬車」

ルカンドの顔に花が咲く。

「ジンさんも？」

脱兎の如く駆け出すルカンドを、モルトは苦笑しながら見つめていた。アタシもだが。

「まあジンがいるなら、仕方ねえか」

「アタシよりジンの方が信用あるなんて、納得いかねえな」

「きっちり二十日で帰せよ。アイツはわしの弟子の中でも中々見込

みがある奴なんだ。教えることが山ほどある！」

「道楽じじいが！ 本業もそれぐらい頑張りやがれってんだ」

そう言っつて店を後にしようとするアタシに、モルトが声をかける。

「ちょっと待て、蛇娘」

「まだ、なんか用か？」

棚をごそご漁っていたと思ったら、包みを投げてよこす。

「狼野郎に渡しとけ」

中から出て来たのは、双振りの剣。

「小太刀つて短剣と長剣の中間の剣だ。極東からの流れ者に聞いて作ってみたから試しに使ってみろってな」

「随分、うちの子を評価してくれちゃってんだねえ」

「デイドの件じゃ随分世話になったし、てめえみたいなのについてくっただけで、気苦労が絶えないだろうからな」

しみじみと頷くモルトのじじい。

「さっさとくたばれ！ くそじじい」

「てめえも、手下に苦労ばっかりかけてんじゃねえ！ 蛇娘」

挨拶を終えてアタシは外に出た。

外に止めた馬車には、ジンに抱きつくルカンドと、困ったようなジン。

自分も抱きつくこうとするケイフウ、暗く笑うサイシャの姿があった。

「さつさと、馬車に乗りやがれ、出発するよ！」

手下どもに、アタシは声をかけた。

王都ロクサーヌ。

富と政治の中心、文字通りこの国の心臓部というやつだ。アタシには因縁深い場所だが、まあそれはいい。

ロクサーヌは遠方から見れば、城壁に囲まれた円形の都市だといふことがわかる。東西南北に、血管の役目をする街道を通している。城壁のすぐ内側には高い塔が、一定の間隔をいて聳えたつ。街道沿いの塔には鐘が設置されていて、日の出と、日の入りの一日二回、その鐘を鳴らして城門を閉める合図としていた。

四角く削りだした石を積み重ねた城壁は、内と外の二重をなし、広い城壁の上には街の外周をぐるりと一周できる通路が通っている。外からは見えないが、街の中央には四方へと延びる街道が合流したところに広場が設けられている。月に二度開かれるバザーは国内からはもとより遠く、自由都市群からも商人が品物を持ち込む。広場から少し北よりは、街を治める貴族達の住処となっている。

荒地からロクサーヌへ至る道には、峻厳な山が立ちはだかる。そのせいか、ロクサーヌへ入ると気候ががらりと変わる。

「サー姐、緑一杯！」

山を越えて、下り道に入ると緑が増える。荒地にはないその光景に、ケイフウが騒ぎだす。

穏やかな風と、温暖な気候がこの地方を楽園にも似せていた。

「……温いね」

ぼつりとサイシャが呟く。

「凄い」

感動とともに見守るルカンド。

三者三様の反応を示しながら、暖かな季節に抱かれるロクサーヌに入る。

正直、アタシはロクサーヌに入るのに気が重い。

「ジン、アタシは少し用事があるから、こいつ等しばらく頼むよ」

城門を抜けて、街の中に入る。一応表向きは商人ということになっているが、役人に袖の下を渡すのも忘れない。

御者台から、飛び降りて馬車をジンに任せたアタシは貧民街の一角へと向かう。

手紙は出しておいたから、大丈夫だろうとは思う。

思うけど、長らく留守にしていた為の反応が怖い。

整備された表通りから、暗い路地を抜ければ、そこは混沌と猥雑が支配する世界だった。

怪しげな露天が並び、目つきの悪い奴等がたむろする。露骨に刃物をチラつかせる者もいれば、異端とされる宗教の信徒どもが徒党を組んで練り歩き、傭兵崩れや、凶状持ち、ありとあらゆる人がこ

ここに面を見せていた。

そんな中を抜けて、アタシは一軒の宿屋の前に立つ。

柄にもなく緊張しているのがわかる。

細く息を吐き出して、ぎい、と鳴る立て付けの悪い扉を開けた。

一階は酒場。二階は宿。高級な宿でないことは、木造の作りを見てもわかる。所々に隠せないほどの疵や、染みがついている。板張りの床は、踏めば悲鳴のような軋んだ声をあげる。いくつかテーブルと、それを囲む椅子。直前まで、宿泊客が昼食でも食べていたのだろう。テーブルの上にはまだ、片付けていない陶器の食器が並んでいた。

「変わってないなあ」

ぼんやりと呟いて、カウンターの方を見れば、アタシを見つめる女性の姿。その人のほうへ近寄っていく。

銀色の波立つ髪を、肩口で切りそろえて、後ろで一つにまとめてある。瞳の色は、翡翠の緑。

前よりも、多少痩せていた。

少し、皺が目立ってきたんじゃないだろうか。

怪訝な表情の女性の前で、アタシは旅用のフード付きのローブを脱ぐ。

アタシを見つめていた女性の瞳が、驚きに見開かれ、その口は懐かしい声でアタシの名前を呼んだ。

「サギリっ!」

「ただいま、ロメリア」

軽い身のこなしで、カウンターを飛び越える。

「本当に、本当にサギリ？」

アタシの体を所々触って確かめるロメリアに、苦笑する。

「本物だよ。それとも偽者でも出たの？」

ぎゅっ、とアタシを抱きしめるロメリアに身を任せた。アタシに残された最後の、場所だ。

「バカ！ 心配したんだから……」

「うん」

アタシはこの人だけには、頭が上がらない。

実の母ではないけれど、アタシを愛してくれる人だったから。

「ベイシユは何も言わないし、貴方は置手紙一つ残して出て行くし

……」

「ごめん、心配かけたね」

涙にぬれた目じりを拭って、ロメリアはアタシを見つめる。

「今までどこにいたの？ 戻ってきたからには、一緒に暮らせるんでしょ？」

「ごめん、今はまだダメなんだ……」

表情を曇らせるロメリア。

「今日はロメリアの様子を見に来たのと、ベイシユに話があったきたんだ。いるかな？」

ロメリアのの眉間に皺が寄る。

「今ちょっと出てるわ。戻ってくるまで、お茶にしましょう……その位はいいわよね？」

甘えそうになる心を叱咤する。まだ、戻るわけにはいかない。

「うん」

牙を剥く黒蛇1（後書き）

モルトのじいさんの呼び方

サギリ〓蛇娘

ジン〓狼野郎

ケイフウ〓ちび

サイシャ〓毒蛇

ルカンド〓ルカ

牙を剥く黒蛇2

馬車は、さる貴族の屋敷の傍に止められていた。

屋敷の中には、花咲く庭園。その庭を抜けて、一人の少女が蔦の絡みついた門から出て行くところだった。

赤い髪の少女。

「ジンにい、あれ〜」

「……敵、だ」

「何の話です?」

「お前ら、引っ込んでろ」

幌の隙間から顔を覗かせる三人を、押し込み、ジンは屋敷を眺めた。

「アトリウス・ツラドか」

御者台に座り、馬車を動かす。

がさがさ、と音がして、御者台にサイシャが登ってくる。

「……ジン兄、誰か、来てる」

体を寄せ、小さく囁く様な声に、ジンは黙って頷いた。

徐々に馬の速度を調整しつつ、でたらめに角を二度曲がる。そして幅の広い道に出た瞬間、ジンは馬に鞭をくれた。

「ルカンド、代われ」

幌の隙間から顔を出していた、ルカンドを引きずり出して御者台に座らせ、手綱を握らせる。

「次の角を、右だ」

必死に頷くルカンド。

「サイシャ、ルカンドと行け」

不満げな視線を無視して、ケイフウに声をかける。

「いくぞ」

至極落ち着いた声音。

「ひよい！」

右に曲がった馬車から、ジンとケイフウは飛び降りる。

旅装のローブが風になびく。ジンとケイフウはそのまま歩き出した。追ってくる者を誘うように、細い路地に入り込む。

二つ三つ、角を曲がり、さらに薄暗い路地へ入る。

煉瓦作りの家々に囲まれた路地は、足元に薄らと冷気を感じさせるほどに冷えていた。鬱積したような闇が視界を、思考を暗いほうへ押しやる。人通りなど既に絶えて久しい中、ジンは冷たい煉瓦の壁に手をつけてケイフウに声をかけた。

「やるか」

気配を探れば未だに誰かが追ってきている。周囲にいるのは、自分たちと追跡者の気配のみ。

「どばあだね」

要領を得ないケイフウの言葉にジンは苦笑する。

念のため、角を曲がったところでジンとケイフウは仕掛けた。

敢えて道の真ん中、見えやすい位置にケイフウは立ち止まる。にへらあ、と緊張感のない笑みを顔に浮かべ追ってきた人を確認する。

「な、お前……」

「ねえ、おじさんたち、何か用？」

無邪気なまでの問いに、追跡してきた三人の方が驚き動きを止める。

「これで全員か？」

後ろから響いた氷の様な声に、先頭の男が振り返った途端、彼の視界は仲間の首から吹き上がった血飛沫で遮られた。

「ねえ、おじさん」

何かが倒れる音に振り返れば変わらぬ笑顔でケイフウが問いかけた。既に足元には、一人転がっている。

「何の用？」

追っていた男は、反射的に後ろに下がろうとし服の布越しに刃を感じて踏みとどまった。

「言え」

拒否を許さないジンの声に、震えながら追跡者は口を開いた。

「貴様らが、屋敷を嗅ぎ回っていたから、調べただけだ。他に大意はない」

「そうか」

どちらでもいいと思いながら、突き出そうとしたジンの刃を止めたのは、視界に入った一人の男だった。

短い黒髪に、所々白いものが混じり始めた中年の男。その体軀は大きく、人好きのする笑顔。

だが、ジンには一目見てその男の危険さがわかってしまった。

そして何より、ジンはその男が近づいてくるのさえ感じられなかったのに驚愕していた。

あの笑顔の奥にしまっているのは、恐ろしく凶暴な素顔。腰には黒塗りの鞘に収めた、東方伝来の刀。着崩すように、着物を纏い、左手には酒の入っている瓢箪。

「ありや、コイツぁ大変だな」

偶然居合わせたかのように、その男は白々しく口を開く。

「退くぞ」

「え？」

ケイフウの疑問を視線で黙らせる。追跡してきた男を放置して、じりっ、と後退りする。

「行け」

追跡者にも聞こえぬよう、ケイフウに小声で囁く。そうしてケイフウを逃がしておいて、改めてジンは目の前の男を見た。もはや追跡者は二の次だ。

「そんなに警戒するなよ、兄ちゃん。取って喰いやしねえよ」

沈黙を守るジンに、男が不敵に笑う。

「兄ちゃん、他所もんだろ？俺あ親切だから忠告してやること思ってたねえ」

モルトから受け取った小太刀を、構えて男を観察する。

殺せるか、否か。

重要なのはそれだけだった。

「そこに転がってやがるのは、オウカって野郎の手下どもだよ。知ってるか？この街の半分の支配者さ」

目の前の警戒を緩めず、ぎろり、と立っている男に視線だけを一瞬向ける。

「命が惜しいなら、さっさとこの街から出ることだ」

今夜の夕食を聞くような、他愛のなさで男は言った。

「ああ、それとなそこの男は置いていってもらいたいんだが、嫌だとは言わないよな？」

念のため、ジンは追跡者の男たちを襲うとき、互いの名前を呼ばなかった。フードも被ったままだ。目の前の男が、その気にならない限り追ってくる手段はないだろう。

「わかった」

短く言葉を切ってジンは背を向けた。背中に最大限精神を集中させ、追跡者と邪魔をした男の動きを見逃すまいと歩いていく。結局、ジンを追うような仕草はどちらにも感じられず、殺戮の路地裏からジンは抜け出してケイフウと合流した。

「……………撒いた」

御者台の端に座り、なるべく距離をとりながらサイシャは口を開いた。

徐々に馬の速度を落とし、ルカンドは人通りの多い場所へと向かわせながら、ルカンドは疑問を口にする。

「それは良かったけど、なんでそんな端に？」

「……………役立たずが、移る」

仄暗い湖面のような視線を、前に向けたままそっけなくサイシャは言つて捨てた。一方のルカンドは、その程度で顔色を変えたりはしない。

「相変わらずだね、本当に」

ため息一つと交換に、不快な気分を追い出した。

「とりあえず、ジンさん達と合流しなきゃいけないけど、何か聞いてる？」

蛇が獲物を絞め殺すような、粘りつくような視線をサイシャはルカンドに向け、また前を向く。

「……何も」

無造作に伸ばされた黒髪、首から足元までを覆う身体の凹凸を隠すような黒い服が、風を受けて揺れるのが、ルカンドの視線に入る。一年近くも離れていたのだが、サイシャは女らしさが出てきている顔にも、身体の線にしても、ルカンドにはそれが、少し気恥ずかしかつた。

「……戻る、か」

「あのお屋敷に？」

黙つて頷くサイシャに、ルカンドは否定の言葉を吐き出す。

「危険すぎるよ、それにジンさん達だってあそこには行かないと思う」

サイシャの眉間に皺が寄る。

「……探す」

「馬車で走り回って行き違いになるのが怖いよ。ここはガドリアじゃないんだから」

眉間の皺が深くなる。不機嫌の度合いが釣上がっているのを感じ、ルカンドは身の危険を感じ始めた。サイシャは、一切の手加減というものを知らない。毒、罠、不意打ちそれらを駆使して、倒すと決めたものを追い詰めていく。一切の情を感じさせないその姿は、二年間を一緒に過ごしたルカンドにさえ、恐怖だった。

黙りこむサイシャをそのままに、ルカンドは考えを巡らせる。ジンならどうするだろう、と。

「広場の方に行って、ジンさん達を待とう」

怪訝な視線を向けるサイシャ。その視線の中に、疑問以外の殺意とか敵意とか、良くないものが感じられたのは、果たしてルカンドの思い過ごしだっただろうか。

ルカンドは背中に冷たい汗を感じながら、広場に向かって馬車を走らせた。

柔らかな日差しが、湧き上がる噴水の水に当り煌く。屈強な男たちが器を担ぎ上げた彫像。その上から吹き上がる噴水は広場の中央にあり、石の敷き詰められた舗装された広い道の脇には、露天で物売る人々がひしめいている。貴族の邸宅街が立ち並ぶ町の北部と平民の住宅が密集している街の南部。その境界に、この広場があった。

馬車を脇に寄せて、御者台の上でぼんやりと、流れていく人を眺

めていたルカンドに、サイシャの視線が突き刺さる。

「……おい」

「なに？ ジンさん達ならまだ時間がかかると思うよ」

恐らく、追っ手と戦って始末するつもりなのだろう。ここは街中だ。荒地のように、死体を捨てておけば獣が始末してくれるわけもない。それを考慮に入れば、もう少し待つべきだろう。

だがサイシャは、それを考えに入れてないらしい。いや、入れていたとしても気にしないのだろうか。非難めいた視線を、遠慮なくルカンドに向ける。サイシャの不機嫌が徐々に熱を帯びていくのを感じながら、ルカンドは一刻も早くジンが来ることを願っていた。

「貴様ら、ここで何をしている？」

鉄と鉄の擦れる鉄の音と、共に聞こえたのはそんな声だった。

来るには来た、飛んで火にいる夏の虫が。

御者台から、見下ろせば鉄色の鎧を纏った見回りの騎士達の姿がある。手には鋼鉄製の槍を携え、厳しい顔からは不振の色が滲み出ていた。

咄嗟にルカンドが視線を向けたのはサイシャ。不機嫌に引き結ばれていた口元が、三日月形に開いてく。

ルカンドは、御者台から立ち上がるうとするサイシャの腰にしがみ付く。

ぶつかる視線。

憂さ晴らしの相手が来たと、喜ぶサイシャの視線は攻撃的に笑う。普段なら、引き下がるはずのルカンドは、サイシャの視線を受け止めて退かなかった。

しばらくお互いに無言で睨み合うが、腰を下ろしたのはサイシャ

だった。

「何をしているかと、聞いておる！」

ルカンドは、ため息をつくと不機嫌さを心の奥底に隠し、笑顔を騎士に向けた。

それからのルカンドの弁舌は、聞いてるサイシャの方が圧倒されてしまうぐらいのもだった。

曰く、彼らはガドリアから来た大きな鍛冶屋の見習いである。店を出そうと物件を見回る途中で疲れて休んでいた途中で、サイシャは彼の妹であると。流れるようなその説明に、騎士達の不信の色は次第になくなり、精神を病んだ妹の話となれば、同情の視線すら向けてくれた。

最終的に、肩を叩いて励まされ彼らは騎士の詰問から解放されたのだった。

「やれやれ」

息をついたルカンドに、サイシャが声をかけた。

「……嘘つき」

ルカンドは晴れ渡る青空を仰ぎ見て、盛大にため息をついた。

文句の一つでも言ってやろうと、隣のサイシャに顔を向ければ、なぜか彼女はルカンドに寄り添うように座っている。ルカンドの無言の疑問に答えるようにぶっきらぼうにサイシャは言い捨てた。

「……妹、だろ」

騎士に説明するとき、精神的に病んだ妹だとサイシャの事を説

明したのだ。

「まあ、そうだけど……」

急に彼女の身体の感触が蘇って来て、ルカンドは頬を染めた。
結局ジン達と合流できたのは、そのすぐ後だった。

牙を剥く黒蛇2（後書き）

温暖なロクサーヌの気候はガドリリアを中心とする荒地とは天地ほど
も違います。

緑の芽吹き花々は咲き乱れ、豊富な食料を生み出せる土地。

牙を剥く黒蛇3

ジン達が、宿を決めてサギリと合流したのは日が暮れ、塔の鐘が鳴り響く時刻になってからだった。

「サギリ、話がある」

ルカンド達が眠りについた後、ジンはサギリに声をかけた。

「ああ、アタシもだ」

二人は部屋に入りテーブルを囲んで椅子に座る。

「で、話つてのは何なんだ、ジン？」

「今日アルトリウスの屋敷を見回ったら、つけられた」

眉間に皺を寄せるサギリを確認しつつも、ベットで三人一緒に眠るルカンド達に視線を向ける。サギリもそれを目にして、無言で先を促す。

「二人始末したところで、妙な男に邪魔されて一人残した」

「どんな奴だ？」

「刀を差した年かさの野郎」

ふと、白い指先を自分の細い顎に当てて、考えると知り合いの一

人が思い浮かぶが、慌てて打ち消した。

「まあそんなことはないか」

「知ってる奴か？」

ジンが怪訝そうに聞き返すが、苦笑して答えようとはしなかった。

「アトリウスの娘は確認できたのかい？」

頷くジンに、サギリは身を乗り出した。

「どんな女だった？」

「赤い髪の女で、歳はルカンドと同じぐらい」

「それだけ？」

頷くジンに、サギリは表情を顰める。

「まあいいさ。次はヘルキオスの息子の方だ」

「顔をかめるだけか？」

「ああ、しっかり頼むよ」

黙って頷いたジンだったが、再びサギリの方を見る。

「気乗りがしないなら、今回の仕事は止めよう」

瞬間、サギリの手元から双剣の一本が引き抜かれ、ジンの喉元に突きつけられる。

「アタシに指図すんな、ジン」

揺るぎもしないジンの視線に、ため息をついてサギリは得物を引いた。

「別に、不満があるわけじゃない。アタシがやる気にならないのは仕事とは別の理由だ」

部屋に一つしかないランプの明かりは、椅子の上で片膝を抱えるサギリをぼんやりと映す。

「なあジン。お前、もしアタシの所に居なかったら、何をしてた？」

明かりを受けて、表情を変える宝石のような輝くサギリの漆黒の瞳が揺れていた。

「死んでた」

その答えにサギリは苦笑する。

「じゃあ、もし生まれ変わったら何がしたい？」

「今のままで、いい」

「そうか……」

そう言ったきり、サギリは黙った。ジンも黙っていた。

「もう、遅いな。ジン先に寝てる、明日もある」

分かったと頷いて、席を立つジンを見送る。

ジンが去って一人になると、サギリは双剣を引き抜いて刃に映る自分を見つめた。

「アタシは、進むだけだ」

静かに呟いて、テーブルに突き立てた。

その日、街はヘルキオスの私兵が溢れていた。正確には、ロクサーヌの北、貴族の邸宅が立ち並ぶ普段なら喧騒とは無縁のその場所に、兵士が慌しく行き交っている。未明から始まったその喧騒は、既に私兵同士の衝突という形で、戦の様相を呈していた。

花咲き乱れる庭園も、どんよりと曇る空に輝きを失っていた。

ルクがその知らせを受けたのは、泣き出しそうな空に辟易して室内で編み物をしていた時だった。

ヘルキオス・ヘルシオ、兵をもってアトリウス・ツラドを誅せんとす。

カルの父親が、ルクの父親を殺そうとしている。現実感の沸かない報せに、ルクは呆然とした。

「カルと殺し合うの？ お父様は」

声に出してみても、その恐ろしさに身体を締め付けるように腕を抱

いた。

「ご心中お察しいたします」

声をかけたのは、報せてくれた若い騎士だった。

「……それで、お父様は？」

「はっ、アトリウス様に置かれましたは、奮戦しておられますもの、不意打ちにより形勢悪く、まもなくこちらにおいでになるものと思われませう。付きましてはお願いの儀が」

そう言つて騎士は一層頭を垂れる。

「ルク様に置かれましたは、早々にこの邸宅より立ち退かれ何処かへ落ち延びて頂きます様」

一息に言い切つてから、騎士は膝をついて最上級の礼を示す。

「どうか」

ルクはその騎士の態度に、一度睨を伏せた。

「それは父の命令ですか？」

言葉に詰まる騎士に、ルクは優しく微笑む。

「違うのでしょうか？ 貴方の優しさには感謝致します。ですが勝手な事をしては、貴方が叱られます」

何かに耐えるように騎士は、拳を握り締める。

「父は、私の事など何も言わなかったのではありませんか？」

窓から見える庭園、幸せの象徴であったはずの花の園が、色褪せて見えてしまう。

「そ、そんなことはありません！」

叫ぶように言ってしまうってから、騎士は己の失態に気が付いた。

「恥じ入ることはないですよ。情の薄い方ですからね、お父様は」

「どうか、お願いします。お逃げになってください！」

「ありがとうございます。騎士様、良ければお名前を聞かせてくださいませんか？」

「ウィンベル、と申します」

にこり、と微笑むとルクは椅子から立ち上がる。

「ウィンベルさん、私はアトリウス・ツラドの娘なのです。逃げ場は、どこにもありません」

跪くウィンベルの傍まで行くと、膝を付いた。

「私を心に留めて置いて頂いて嬉しく思います」

驚きの余り頭を上げてしまうウィンベルに、ルクは胸の前で両手

を組み合わせせて祈りを捧げた。

「貴方に、幸運を」

立ち上がり部屋を去るルクを、ウインベルは呆然と見つめていた。ウインベルが放心状態から戻ったのは、庭を駆け去る使用人たちの、慌しい声を聞いてからだった。

「これは……」

ルクが去った扉を開け、彼女の姿を捜し求める

。 やつと見つけ出した彼女には、侍女の幾人かですがり付いて泣いていた。彼女はその一人一人を説得して、立ち上がりせ僅かばかりの金貨を握らせると逃がしていた。ウインベルはその光景を遠目から見て、ただ立ち尽くしていた。

アトリウスがルクの邸宅に追われるようにして入ったのは、それから間も無くの事だった。少ない手勢に守られて敗戦の将というべき有様。昨日まで、ロクサーヌを二分していた権力者の面影は既くない。屋敷を囲むように、私兵を配置し、館の中庭にも兵士を配置した。花になど構う余裕はなく、カルとルクの思い出の庭園は無残に踏み荒らされる事となった。

攻め寄せるヘルシオの兵達は、肉に群がる飢えた獣のように、執拗で容赦がなかった。衆を頼み押し寄せる。その様子をアトリウスは邸宅の二階から見下ろしていた。傍に控えるのはウインベル。

「それで、娘は逃げなかったのか」

落胆ともいえるほど、その声は疲れていた。

「申し訳もございません。私の失態でございます」

ただ平伏するばかりのウィンベルに声をかける。

「仕事にかまけ、あれにはほとんど会う機会もなかった。情の薄い父と呼ばれても、言い訳できぬ」

白く染まった頭髪を、撫で付け黒い鎧姿も厳しいアトリウスは自嘲気味笑う。

「しかし、自身よりも侍従を逃がすとはな。わしには、過ぎた娘だ」

皺の刻まれた表情は、娘の顔を思うときだけ緩む。

「ウィンベル、娘を連れて逃げよ。逃げぬと駄々を捏ねる様なら、縄で縛ってでも連れて行け！ 無事な兵を20ほど連れて行け……必ずだ。頼むぞ」

「20も連れ出しては、こちらの守りが！」

「良い、もはやままならぬ」

目を閉じるアトリウスに、意志の固い事を悟るとウィンベルは固く拳を握り締めた。

「必ずっ……」

ウィンベルが立ち去った後、アトリウスは迫るヘルシオ家の軍勢

を見下ろした。

「クッククク……ヘルキオスめオウカなどに誑かされおって、次は己の番だと知れ！」

立てかけてあった戦斧を持つと、兵の戦う前線へ向かう為、アトリウスは邸宅を出た。

若き頃より、先々代の王の下で、先代兇王と呼ばれたヘルキオスの兄の下でも、戦斧せんぶを振るってきた。前線に出ようとする彼を止めようとする部下は居ない。アトリウスが見渡せば、代々使えてくれた者達ばかりだった。

「雑兵どもに、武人の生き様を見せてやるうではないか！」

彼に続く騎士、私兵に声をかける。それだけで、部下の士気が跳ね上がり喚声が響く。

「代々ロクサーヌの武門を守ってきたツラド家の意地を、思い知れ！」

槍を持った敵を叩き伏せる。固い鎧でさえ、彼の戦斧の前では何の意味もなさない。

暴れる凶獣が如く、アトリウスは庭に侵入してきた敵をなぎ倒す。彼に続くのは百戦錬磨のツラドの兵士達、幾多の戦場で主と共に戦った彼らは、劣勢にも拘らず水を得た魚のように生き生きとしていた。

牙を剥く黒蛇4（前書き）

ほとんど毎度のことですが、残酷な描写があります。

牙を剥く黒蛇 4

裏門から20名の騎士を選びだし、ルクを伴って脱出を図ったウインベルは、邸宅で奮戦するアトリウスが敵の目を引き付けてくれたこともあって無事に包囲を突破していた。貴族達の邸宅が立ち並ぶロクサー又北部では、煉瓦作りの家が一般的となっている。家々には、庭が備え付けられており、庭と邸宅を囲むようにして高い壁垣で囲むのが一般的だった。

細い通路が幾重にも張り巡らされた、そこは初めての者が迷子になってしまうことも多々あるほどに複雑化していた。

その路地をルクを伴ってウインベルは進む。だが20人という人数は、敵を引き付けずには置かない。その敵を葬る度に、彼らの人数は一人、また一人と数を減らしていった。ルクは脱出に抵抗した為、已む無く眠らせてある。彼女を、馬の背に荷物のように乗せてウインベルはひた走った。

「頑張れ、皆もうすぐ平民区だ」

傷ついた仲間を励ましながら、薄暗い路地を進むウインベルの前に、二つの影が立ちはだかった。

一つはにへら、と笑う小柄な少年。くすんだ金髪の髪は、薄暗い路地でも目立つものだった。

一つは、収まりの悪い黒い髪を腰まで伸ばした女。整った顔立ちだというのに、その口元に浮かぶのは禍々しく歪んだ笑み。膝上までの黒いズボン、胸と肩周りを覆うだけの黒い服。それからすつきりと伸びるのは、白い手足。その手の先には双剣が握られていた。

「逃がすなよ」

ウインベルの後方に向かってかけられた言葉に振り返れば、そこにも二つの人影があった。

一つは、首から足元までを黒いローブで覆う小柄な少女。ただその目の下には隈があり、睨み上げる視線は、この世の全てを嫌悪するかのように澀み、濁っていた。

一つは、肩までの黒い髪を一つに束ねた、琥珀の瞳を持つ青年。鋭く、残忍な目つきは狼を連想させた。手に握るのは双振りの小太刀。

立ち塞がる彼らから、滲み出る異様な殺気に、敵だという事を否が応でもウインベルは認識させられた。

「敵だ、掛かれ！」

前後に一齐に攻撃を開始する騎士達。幾重の白刃が彼らを押し包み、無残に切り倒すはずだった。

しかし倒れたのは騎士達のほう、後ろに向かった三人は外傷もなく倒れ去り、前に向かった三人は、血飛沫を吹き上げて崩れ落ちる。

「あそぼ〜」

気の抜けたような笑みを向ける少年。手にしているのは紛れも無く血塗れた短刀。

「くっ……」

振りかぶった騎士の踏み出した足を踏み台にして、少年が頭上へと駆け上がる。

頸動脈へ一撃。

その後には血の花が咲いた。

後ろから迫った脅威は、小柄な少女の形を取っていた。黒い口ブから手を出せば、その手に握られていたのは投擲用の小剣。投げつけられたそれが僅かでも掠った者は、その場に痙攣して倒れていく。

「毒か！ 卑怯者め！」

その声に少女の濁った瞳が熱を帯び、口元は歓喜に歪む。

「……苦しんで、死ね」

瞬く間に、騎士達は倒れていく。

「いたぞ！ ツラドの残兵だ」

毒使いの少女の後ろから、ヘルシオ家の私兵達が迫る。だがその前に立ち塞がったのは、狼に似た青年だった。

一陣の疾風となって敵に向かう。彼が一閃する度に、ヘルシオの兵士達が壁に叩きつけられ、路地裏の壁には、潰れた果実のような醜い彫像が出来上がる。

「貴様ら、ヘルキオスの手の者でないなら、なぜ我らを狙う!？」

ウインベルは、迫り来る二つの死神に言葉をかけた。

「さあ」

無邪気に笑って、さらに一人を切り倒す少年。

「……どうでも、いい」

毒使いの少女は、心底興味なさそうに吐き捨てた。

「何が狙いだ！」

ルクを乗せた馬を背に庇い、ウインベルは剣を構えた。

「アンタの後ろのお嬢さんさ」

歪んだ笑みを貼り付けたまま、女が答える。

「それだけは、できぬ」

女の笑みが一層深くなる。

「そこなくっちゃね、やれケイフウ！」

「ひょい」

真下から迫る無垢なる凶刃の一撃目をなんとか、避ける。二撃目、顔の真横から振るわれた一撃を剣で防ぐ。

「およ」

攻撃が防がれたのを不思議に思っているのか、少年はウインベルの正面で立ち止まり首をかしげる。その隙に向かってウインベルは剣を振り下ろした。だが子供を斬ったという感触は無く、胸に熱を感じて見下ろせば鎧の隙間から突き立つ短剣が目に入った。

ぐらりと、力が抜けてウインベルは崩れ落ちる。

「ちつとばかり、時間かかりすぎじゃないのかい？」

ケイフウの頭に手を置いて、サギリは声をかけた。

「じらし、じらし」

「それは、忘れる！」

置いていた手を握って、ケイフウの頭を叩く。

「さて、盗賊らしく目的のものを頂きますか」

そう言って、ルクの元へ向かい彼女の長い髪を、切り取る。

「この女は、幌馬車にでも押し込めておきな。手え出すんじゃないよ」

歩き出すサギリの笑みは、深くなっていた。

左から槍を突き出す雑兵の首を刎ね、直後右から剣で斬りかかって来る者を叩き伏せる。

アトリウスは善戦していたが、疲労の色は隠すべくもない。部下の騎士達も次々に討ち取られ残るはほんのわずかとなっていた。

「御館様、そろそろ……」

全身に血を浴びた、老騎士がそっと囁く。

「すまぬな。苦勞を掛ける」

身を翻して、ルクの邸宅に戻る。最後まで付き従ってくれた私兵達に命じて、邸宅に火を掛ける。瞬く間に広がる炎を視界に納めつつ、屋敷の奥まった一室へ疲れた身体を運ぶ。

その部屋の扉を開けると同時に、誰も居ないはずの部屋に人の気配を感じてアトリウスは武器を構えなおす。

「何者だ!？」

「忘れちゃったのかい？ つれないねえ、アトリウス小父様？」

地獄の底から響くような笑い声が、サギリの口から聞こえた。

「そんな……貴様、生きていたのか？」

「生憎とねえ」

滴るような憎悪が、サギリの整った顔に笑みを形作らせる。

「なぜ、貴様……」

「そうそう、感動の再会で忘れる所だった」

そう言って、手にしていたルクの赤い髪の毛の束をアトリウスに投げる。

「アンタの可愛い娘さんだけだね。預からせてもらってるよ」

「ルクを、だと？」

娘の名前を聞いた途端、アトリウスの顔に朱が走る。

「貴様、わしの娘をどうするつもりだ!？」

「どうするっていうか、もうしちゃったんだけどね」

「な、に!？」

「良い声で鳴いてたよ。助けてっ! ってさあ!」

両手を広げて嘲るサギリに、アトリウスの戦斧が迫る。その一撃をすり抜けて、サギリが双剣を振るう。アトリウスの足が切り裂かれ鮮血が舞う。

「今でもアタシの手下どもが、アンタの娘相手にお楽しみかもねえ」

「うおおおお!」

獣の咆哮を上げて、再び襲い来るアトリウスの戦斧をかわすと、再び足を切り裂き、その背に回ると蹴り飛ばす。

「どうした、ツラドは武門の名家なんだろう? アトリウス小父様、こんな小娘に足蹴にされて悔しくは無いのかい?」

「魔女め!」

「ああ、その通り。今じゃ荒地の魔女って名乗らせてもらってるよ、戦斧を杖にして立ち上がり、痛む足を引きずってサギリに打ち掛

かる。

だがそんな攻撃が当るわけもない。再び足を切り裂かれる。膝を付くアトリウスに、近寄りながらサギリは口を開く。

「アンタにも聞かせてやりたかったねえ、あの子が獣みたいな男どもに」

振るわれる戦斧。

「犯されてよがる声ってやつをさ」

それをかわし、アトリウスの耳元で囁く。同時にアトリウスの腕にはサギリの双剣が突き立ち、肉を断ち切る。

「ぐう……貴様、なぜだ!？」

「なぜか？ わからないのかい？」

サギリの顔から表情が消える。

「お前を苦しめる為だよ。少しは味わえてるかい？ 絶望ってやつをさ」

「そんな事のために、娘を……ルクを！」

サギリの目が見開かれる。

「ああ、そうだよ。アンタの娘はもう戻らない。汚く陵辱されて死んでいく。アンタの所為で、ね」

泣き崩れるアトリウスに、サギリの悪意はとまらない。

「あの子をどうやって殺してほしい？ 壊れるまで男どもの玩具にされてゴミのように殺されるのが良いのか？ 四肢を一つずつ潰していつて殺すのが良いかい？ それとも生きたまま獣に食わせるのがいいか？」

「お、おのれ……」

苦悶に満ちたアトリウスの声にサギリは嬉々として、滴る悪意を向ける。

「それともやつぱりアレか？ 血を抜き出せるだけ抜いて殺してやった方が、いいのかねえ？ アタシの姉さんを殺した時みたいさあ」

「おのれええ！」

血を撒き散らす足を気力で動かして、アトリウスは戦斧を振りかぶった。笑う魔女に向かって、振り下ろしたそれに、手応えはなく湧き上がってくるのは猛烈な吐き気。

「ごぼつ、と吐き出したのは赤黒い彼自身の血。気が付けば、腹部に激烈な熱と痛み。」

「なあんてねえ」

崩れ落ちたアトリウスに、振り上げた双剣を突き立てる。

「アタシが、お前らと同じことをするわけがないだろう？」

胸に。

「アタシが」

腹に。

「アタシが」

喉に。

「アタシが!」

眼球に。

「アタシがあ!」

何度も何度も突き立てる。血が飛び跳ね、サギリの顔に、身体にかかるとも構わず幾度も突き立てる。既にアトリウスの瞳に光は無く、命が無いのは分かりきっていた。だがそれでもサギリは刃を突き立てた。

「はあ……はあ……くそっ!」

屍となったアトリウスを蹴り飛ばす。

「サギリ」

声をかけたのは、ジン。

「なんだ」

答えたサギリの瞳は底知れぬ闇を映していた。

「そろそろ戻ろう、火の回りが早い」

頭を冷やして周囲を見渡せば、煙が充満し始めていた。

「……そう、だね」

苦悶の表情で屍となったアトリウスを見下ろし、立ち上がった。

「くだらねえな」

ジンの隣を歩きながら、サギリは一人呟いた。

牙を剥く黒蛇4（後書き）

この小説では、善意の人ほど速やかに死にます。

初陣 1

街で起こったツラド家追い落としの謀略から半年、カルとシユセは私兵の増強に勤しんでいた。一度解雇した者にも、密かに渡りをつけ金を握らせる。そうして実際に雇っている人数以上の私兵を抱えることに成功していた。

その数が500を超えた所で、カルは初陣を迎えた。実際に引き連れるのは、200名ほどだが、選りすぐった精鋭であることに違いはない。ヘルキオスの率いる全軍の二十分の一と言っても、立派な戦力として成り立つ。

街の北部、自由都市群と自称する者達の旗が川を挟んで対岸に舞めいている。小高い土手の上、風にたなびく貴族の紋章旗。二つの槍を組み合わせ、双方に蛇を巻き付かせる。その凶柄を頭上に見やり、カルは再び敵を見やる。

漆黒を基調として朱を織り交ぜた防具を纏う。黒い鎧に、炎を意匠した文様を各所に鏤め、プレートにはスカルディアの紋を彫り込んでいる。戦馬の鞍には、特別に造らせた三叉の槍を据え付けたカルは精悍という言葉がしっくりくる。

「お見合いだな、まるで」

吐き捨てるように出た言葉に、横に駒を並べたシユセが苦笑した。白亜の鎧に身を包み、だが今は腰に無骨な両刃の大剣を帯びる。戦場で使う、鉄をも押し潰すモノだ。

「そう仰いますな。被害が出なくてよろしいではありませんか」

「それでは戦にならぬだろうに」

ふん、と鼻を鳴らす主を宥めるようにシユセは言葉を選ぶ。

「ご活躍されたとて、手柄は全てお父上様のものです」

お父上、と言う言葉に強い視線でシユセを見返すカルだが、シユセは気にせず言葉を続ける。

「ここはどうか、御自重を……」

川を挟んで両岸に陣を敷き十日余り、それぞれの陣地に引きこもったまま動きはない。

「いつそのこと、ヘルキオスの天幕を攻めてみようか」

ヘルキオスの天幕は陣地の中央に位置しており、陣地の最後尾にカルの天幕が留め置かれるようになっていく。

「余程、私に手柄を立てさせたくないに見える」

冷たく笑うカルに、困ったようにシユセは笑う。

「戦う気がないのなら、さっさと引き上げればよいものを……」

「誰かに聞かれると厄介です。余り大きい声でそのようなことは……」

「分かっている。お前だけだ」

それにしても、とシユセは対岸に視線を向ける。

「敵は随分数を集めてきましたね。こちらの二倍近い」

「見た目だけ、と言うことも考えられるがな」

「どちらも攻めたくとも、攻められないのでしょうか」

「臆病者共め」

「カル様……」

劣るようなシュセの言葉に、幾分か反発を覚えながらカルは視線をヘルキオスの陣地に向けた。

「シュセ、同行せよ。このくだらぬ戦から離れるぞ」

主従は馬を走らせ、ヘルキオスの天幕へ向かう。この陣地の主の天幕は他のどれよりも大きく、豪華なものが当てられていた。入り口には衛士の姿があるが、それを無視するように、カルは天幕へ向かう。

「入るぞ」

短く言葉をかけて、カルはシュセを連れて中にはいるが、漂う酒の香りにすぐに顔を顰める。

「お、これはスカルディアのご子息殿。良いところへ参られましたな」

酒盛りをしていた下級貴族の一人が、カルへ声をかける。酒盛りの中心にはヘルキオスが座り、酔いつぶれた様子の者も多数見受

けられる。舌打ちと共に、声をかけた下級貴族を睨みつける。黙り込むその男を尻目に、ヘルキオスに視線を向け直す。

「……何という有様ですか、父上」

侮蔑も露わな視線を受けて、ヘルキオスは不快な様子を隠そうともしない。

「何の用だ？」

「何の、ですと？ 決まり切っているではありませんか、なぜ戦をなさらないのです？」

「戦ならしておる、今軍議の真つ最中だ」

「これが、軍議ですか」

強かに酔った貴族達を見渡す。

「ふざけるのも大概になされよ！ 戦をなされる気が無いのなら、私に兵権をお渡し遊ばし願いたい。この戦三日と待たず終わらせて見せましょう」

烈火の如き勢いのカルに、ヘルキオスは手に持っていた杯を投げつける。飛来する杯に、隣に控えていたシユセは大剣を抜く。鞘から抜き放たれたその大剣は、重厚な風音を伴って空中にある杯を粉碎する。

その威力と扱った者の持つ技量に、その場に沈黙が降りる。面子を潰されたと感じたのはその場の誰もが同じであったが、カルの傍らに控える女騎士の大剣がいつ自らの身に降りかかってくるかもし

れないと言つ恐怖に、竦み上がる。

「去れ！ 貴様の魂胆は見え透いておるわ！」

萎縮する貴族達の中で、怒りを露わにしたのはヘルキオスだった。しばらく無言で睨み合う父と子。先に言葉を発したのは子の方だった。

「では、お言葉に甘えます。帰るぞシユセ」

身を翻し、天幕から出て行くカルの姿を眺める貴族達の中から、やっと飲み直そうと言つ声があがる。同意の声と共に、再び開かれる酒宴。だがヘルキオスだけは、鬱々として楽しめ様子だった。天幕を出た後、無言のまま戦馬に乗るカルにシユセが続いた。大仰な天幕を出てしばらく経つとシユセが駒を寄せてカルに小言を言う。

「余り無茶をしないでください」

「許せ、だがおかげで少し胸のつかえが取れた」

「またそんなことを……」

「さて、街へ戻るか。こんな所で無駄に兵と時を費やすわけにはいかぬからな」

二人駒を並べて、カルの陣営へと向かう。

「折角の初陣でしたのに、残念ですね」

「夜までには荷を片づけさせよう。明日にはここを立つ。できるな？」

シュセに本心を言い当てられたとき、カルは強引に話題を変える。それを知っているシュセだけに苦笑しながら、それに合わせる。

「命令とあらば」

馬上で礼をしてシュセは、私兵を指揮するため馬を駆けさせる。

真昼の太陽が揺らめく、生ぬるい風が川を渡り、雲は急ぎ足で空を駆ける。

「初陣か……」

もし、母が生きていたら喜んでくれただろうか。それとも心配してくれただろうか。下らぬ感傷だと、思いながらも尚考えずにはいられないその想い。

忘れはしない。この痛みも、憎しみも。身に宿る力、それを解き放つ場所は、確かに此処にあるのだ。全ての敵を見渡し、カルは自らの陣営へ駒を進めた。

初陣1（後書き）

ロクサーヌを囲む状況について。

東西南には、それぞれガドリア、ベルガデイ、ジエノヴァがあります。これからいずれもロクサーヌの支配下にある都市ですが、北を接するポーレは敵対関係です。

初陣 2

その伝令が来たのは、夜半をすぎた頃だった。

「急な伝令とか……?」

使者からの口上を聞き終え、命令の羊紙を受け取るとカルはシュセにそれを伝えるべく、自身の天幕に彼女を招いた。

「ああ、これを」

そう言っただけで差し出された羊紙に目を通すシュセは、読み進めるうちに目を見開くことになった。

「なんですかこれは!?!」

思わず、声が高くなるシュセにカルは冷たい笑いを返す。

「私に死んで来いと言っただろう」

「笑い事ではありません。僅か200の兵で、対岸に渡り全軍が渡るだけの橋を建設せよなどと……この命令はお断りください!」

「命令は勝手に断ってはまずかろう」

「敢えて言わせて頂きますが、対岸に渡ったら最後、敵が妨害をしないことは考えられません。わたくし達には、すでに撤退の命が下っているのです。わざわざ危険に身を曝すなどおやめください」

カルに詰め寄るシュセの肩に、優しく手が置かれる。

「私とお前が鍛えてきた兵は、それほどに軟弱か？」

「そんなことはありませんが……」

言葉に詰まるシュセを、カルの強い視線がとらえる。

「心配するな。私は無駄が嫌いだ、兵の命も、時も決して無駄には使わぬ」

主に自信を持ってそう言われてしまえば、シュセとしては引き下がらぬ訳にはいかない。

「では、策がおりなのですね？」

頷くカルに、シュセの気持ちが解れる。

「できれば、お聞かせ願えないでしょうか？」

カルの策を聞き終えたシュセの表情には、戸惑いが浮かんでいた。確かに成功すれば、橋は架かるだろう。だが、あまりにも分の悪い賭けだとも思う。

「周辺の地理を、私兵達に叩き込まねばなりませんね」

苦笑に近い形で笑みを作るシュセ。

「荷はここに置いていく」

構わないな、と確認されて頷くシュセ。策は急速に、肉を付け始めていた。

その夜のうちに、カルとシュセに率いられた150程の私兵達は、両陣営が対峙する遙か上流へ向かい川を渡った。

鎧は付けさせず、武器だけを持たせた渡河に不安を表す者も、率先して範を示すシュセやカルに黙って従う。明かりを持たせず、全員を丈夫なロープで結びつつ、渡河を終わらせた。

「地図を覚えているか？」

カルの声に頷くシュセ。

「この地点より北には、自由都市群の一つポーレがあります。距離は日にちにして、ざっと徒歩で二日」

薄闇の中で見渡す周囲は、広い草原。だが、ポーレの周囲には森が広がり身を隠すには最適だった。

「残った部下には5日したら橋を造り始めるよう言い含めてあります」

よし、と頷いたカルは付き従ってきた部下に顔を向ける。

「これより、ポーレに向かい駆ける！ 遅れるな」

息を呑む彼の部下に、シュセの叱咤が続いた。

「この戦は、速さが勝負だ。死ぬ気で駆け抜け抜けスカルディアの旗に勝利を捧げて見せる！」

静かなざわめきが広がり、収束していった。漲る気迫が夜の闇に、立ち昇る。

「いくぞ！」

三叉の槍の穂先に示された勝利に向かって、150人と二人は闇の中を駆けた。

自由都市群の陣営地には六千を数える将兵がいた。睨み合う貴族達の連合軍のおよそ二倍の兵達を補うためには、恒常的な兵站が必要とされた。

つまり食糧だ。その軍には血液とも言える食糧を、自由都市群では近くの都市、つまりポーレからの輸送に頼っていた。

だが、二日前からその食糧が全く届かない。ポーレを出たという連絡もない。それを受けて自由都市群は揉めた。

食糧の備蓄が無いわけではない。だが、六千にも上る兵を飢えることなく食べさせていけるかどうかの自信がなかったのだ。

もし、仮にポーレが裏切って貴族連合に着いたのであれば、対陣している彼らは背後を衝かれ挟み撃ちを食うことになる。自由都市群の旗を掲げてはいるものの、彼らとて通商で結びついただけの街同士なのだ。

貴族の下につくよりはマシ程度の認識で繋がる彼らに、信頼関係など築けるはずもない。更に悪いことに、ポーレの代表は陣営地にはなく補給の指揮を執るために、ポーレの中に留まったままだった。それがまた、彼らの疑心暗鬼に拍車をかける。

結局対岸線から引き上げて、よりポーレに近い所まで陣営地を引くと言うことで軍議は決着を見た。

「ポーレをすぐさま撃つべし」

「違う補給線を探すべきだ」

「まずは、食糧が届かぬ原因の究明を」

様々な意見の折衷案をとった形の、その決定はカルとシユセの思い描いた理想の形として結実した。彼らはポーレの森に潜み、補給のために街を出た部隊、連絡のために遣わされた使者を片っ端から襲撃していたのだ。

自由都市群が、対岸沿いを離れた隙を狙って予て伏せさせ、橋の材料を造っていたカルの私兵達が橋を造り始める。部分ごとに分かれたそれを組み合わせ、移動には川そのものを利用した。

通常よりも何倍もの速度で仕上げられた橋は、大軍が渡るに相応しい威容を、貴族連合軍の前に表したのだ。もっとも深いところで人の背丈程もある深さ、吊り橋ではとても不可能なその幅を克服するために、カルは木で簡易な箱を造った。石をその中に敷き詰め、重しとする。箱と言っても、人が二人はまるまる入れるだけのものだ。それを何十も用意し、橋の足にする。箱の周りには、流れを緩やかにするための柵を張り巡らせ、一つの箱が完成する。

足と足の間を、予め用意しておいた部分を組み合わせ、橋を作り上げてしまった。軍装に身を包んだ兵士が乗っても崩れないだけの堅牢な橋を。

一方ポーレで敵の補給を潰していたカル達も、自由都市群がポーレに接近するのを知って、夜陰に紛れて逃走を図り見事に帰陣した。

カルは戻ってきた。疲労と充足感、そして勝利と言う名の獲物を

連れて。貴族連合の陣営地に戻ったその足で、彼はヘルキオスの天幕へ向かう。私兵達には怪我人の介抱と、カル達の天幕の設営を命じシュセだけを伴った。

大仰な天幕の中へ入ると、そこには既に酔い潰れた貴族はなく各々の鎧姿も敵めしい彼らが、地図を睨みながら椅子に腰掛けていた。

「おお、カル殿」

漣のように広がるざわめきを意に介せず、カルは与えられた席に着いた。シュセはその席の傍らに控える。本来ならば、命令を下したヘルキオスからの労いの言葉の一つもあるべきなのだろう。だが、盟主と末席の間にあるのは冷え切った沈黙だけだった。

「……全員が揃ったようなので、軍議を始めたいと思う」

ヘルキオスの言葉に、ざわつきが静まる。

「さて、問題はこの戦をどうするかだ」

攻めるか、引くか。攻めるならどのようなようにして攻めるのか、つまり最初から作戦の練り直しと言うことだ。もちろん、その中にはカルの用意した橋も計算に入っている。自由都市群は、ポーレからの補給が再開し、六千の兵を南下させ始めたということだ。

カルは終始この会議では沈黙を守った。貴族達の誰に何を聞かれなくても、若輩であることを理由に発言を拒否し続ける。

「カル殿は、先の戦功で満足してこれ以上の戦果をお望みでないのでは？」

業を煮やしたヘルキオスの侍従が、嘲笑の混じった声を彼の主

の耳に吹き込む。

「かもしれぬが……」

同じく嘲笑の形を取るヘルキオスの口の端とは裏腹に、視線だけは厳しさを含んだまま沈黙を守るカルを射る。我慢ができなくなった彼は、とうとう息子に声を出すことを許した。

「発言を許す。カル・スカルディア。貴公の存念を述べよ」

それでは、と前置きしてカルが口を開く。彼の考えを聞いた貴族達は、一様に沈黙を余儀なくされた。

「一歩間違えば全滅してしまいます。あまりにも危険なのは……？」

「敵に対して少ない戦力。見渡す限りの草原、この条件の中で、どうやって決戦以上に有効な戦術がありますか？」

貴族の一人の弱気な質問をカルは一蹴する。カルの献策は不満と不平のうちに貴族達に根を下ろした。

「望むところではないですか」

そういう者も手柄を欲してのことであってカルの策を支持しているのだ。未だに去就を決めきれない者もある。一様に視線は盟主であるヘルキオスに向かう。

「なるべく早くに決めねばなりません。彼らが対岸に戻ってくる前

に」

ダメ押しとばかりのカルの発言に、賛同した貴族の幾人かが頷く。

「分かった。出発は今晚未明、各々仕度を怠るな」

ヘルキオスの発言で全ては決まった。

大仰な天幕を出て、自分の天幕へ向かうカルにシュセが小声で話しかける。

「どうしてあのような策を……？」

危険極まりない。ここは橋を壊して退却すべきだったのだ。確かに橋を造った本人からは言いづらいことだが、敵と味方との人数差を考えれば歴然だった。

「機会だ」

びくりと、身体に雷が走ったようにシュセの表情が固まる。なんの、とは聞くまでもない。ヘルキオスを殺す、その機会がその決戦の最中にあるという。

それを告げたカルの表情は動かなかった。夜の帳が落ち始めた周囲は薄暗く、真昼に始まったはずの軍議が予想以上に時間を取ったのが分かる。後ろから差し込む夕日に遮られカルの表情はシュセからは見えない。

まさか、この無謀な命令を受けたときからカルはこの機会をうかがっていたのだろうか。そう考えるとシュセは、冷たさを含んだ風に吹かれたように震えた。

初陣 3

緑の絨毯が敷き詰められた草原、所々に岩と高い木をぽつんと残す他は、遠く地平までそれが広がる。吹き抜ける風は砂の混じったようにざらつき、未だ昇りきらないの太陽は濁り錆び付いた赤。

風に揺られた貴族の連合軍の紋章旗だけが、風の中を勢いよく泳ぐ。

大地の上には、戦馬を縦横陣に並べた貴族連合軍。

煌びやかな戦装束に身を包み、己の手勢を指揮するのに余念がない。その後ろに控えるのは長弓を構えた従者が侍り、雲が走る空を目がけて狙いを定める。

その陣の中カルは、沈黙のうちに自分とヘルキオスの位置を確認する。扱いは名誉ある戦死ということになるだろう、多少不満ではあるが、仕方ない。問題は、目の前に広がる自由都市群だった。既にこちらが着陣し終えたというのに、予想以上に彼らは着陣に手間取っている。こちらから攻めてくることなど、予想だにしていなかったに違いない。これではカルが予想をしたほどの乱戦にはならないかもしれない。

響き渡る出陣の銅鑼の合図がカルの鼓膜を振るわせる。青い空を切り裂く火矢がヘルキオスの場所から放たれる。

刻は来たのだ。

横一列に広がった戦馬の群れが一斉に駆け出す。最初は緩やかに、そして徐々に速度を増して、最後には怒濤の如き瀑布となって敵陣になだれ込む。空を駆けるのは矢の群れ。騎馬の後方に控えた長弓兵によって射られる死を伴う雨が、自由都市群の將兵に降り注ぐ。

シュセはカルが率いて来た私兵の全てを預かって、戦場の中にい

た。カルは乱戦に紛れてヘルキオスの首を取りに行くと言った。危険だと、押し止めようとした彼女をカルが撥ねつけたのだ。感情に流されるわけでもなく、冷静に獲れると判断したカルの表情に、結局は押し切られてしまった。

「カル様、御武運を」

一人呟いて、戦馬の手綱を握り直す。片手には鞘から抜きはなつた無骨な大剣。それをまっすぐ正面に向けて私兵達に叱咤の声をかける。

「続けえ！」

凜とした声音に、奮い立つカルの私兵。風切る火矢が放たれるのを視界の隅に納め、白亜の騎士は喚声と悲鳴の入り交じる戦場へ分け入っていった。

どこだ、心の中で反芻しながらカルは血走った視線で兜の奥から戦場を見渡す。乱戦にはならないかもしれないと予想はしていたが、それは大きく裏切られることになる。やはり数の差は大きい。当初圧倒的優勢で推移していた状況は、数の圧で持ち直し今や伯仲していると言っている。

敵も味方も血飛沫を浴び、頭上に翻る旗さえなければ誰が誰なのかも判別できそうにない。狂ったような声を上げた雑兵の槍を難なくかわし、三叉の槍で突き伏せる。正面から横から、また後ろから四方から襲いかかる敵は思いの外厄介だった。技量的には大したことはない、ただその数が、ヘルキオスの位置を見失わせていた。

馬上から引きずり倒される騎士、手を切り落とされ蹲っている所を騎馬に踏みつけられ絶命するどこかの侍従。弾む息と、悲鳴、ぶつかる鉄の音だけが耳に聞こえる。

どこだ、ヘルキオスの旗は？ 更に正面から剣を振るって来た

騎士を二人、横になぎ倒す。更に一人、盾を持った騎士を葬った所でそれは見えた。

見間違うはずもない憎むべき敵。

ヘルキオスの元から、こちらに向かって走ってくる一騎が目に入る。気づかれたかと、握った槍に力を込める。

「カル殿、撤退だ！ ヘルキオス様が指示を出された！」

まず声が届き、そして伝令の一騎はカルスの横を通り過ぎていった。伝令の音が聞こえたのか、先程まで見られなかった動揺が周囲に広がる。自由都市郡の本陣付近で喚声上がるのと同時に、どっと崩れたつ味方。

「いけ！」

それを視界の隅に収めながら馬に声をかけ、一気にその旗へ迫る。周囲は乱戦、脂肪に膨らんだ身体に華美な装飾を持った鎧を纏い、手には戦斧を振り回す。血にその華美な装飾は元の輝きを全くなくしてしまっている。ヘルキオスの側に控えるのは、旗持ちの侍従が一人とその身体を守るべく戦っている騎士が二人だ。思わず口の端がつり上がる。

やれる。お前の敵を獲れるぞ、ルク！

頭上に振り上げた槍を、護衛の騎士の一人に振るう。鎧の隙間首にめり込む感触を確かめると、返す刀でもう一人の騎士を掬い上げるように肘から先を刎ねる。戦馬を素早く移動させて、侍従を後ろから刺し貫く。ぐらりと倒れるヘルキオスの旗。

一つ呼吸を置いて戦斧を振るうヘルキオスに声をかけた。

「へエルキオス、その首もらい受ける！」

振り返ったへエルキオスの表情に、恐怖は無かった。あるのはただ、憎しみと……。戦馬の腹を蹴り、一直線に敵へ向かう。右手に宿る刻印から、力が溢れる。放たれた三叉の黒槍は、豊かなへエルキオスの身体を易々と貫いた。

周囲の喚声はまだ高く、戦況は一進一退。敵の壁をなかなか抜けられずに、内心苛立ちを覚えながら、シュセは手にした大剣で次々に敵を葬る。元々屈強な男の兵士ほどの腕力がないシュセは剣の重心を利用して、巧く扱う。

無駄な力を使わないシュセの大剣は吹き寄せる暴力という風を、捌く。加えて右手に宿った刻印。要所で使うそれは、幾人もの敵を弾き飛ばす。

まるで見えない手に守られているかのように、シュセは敵陣を深く抉り取って行く。そして彼女に付き従った私兵達と、敵として向き合った兵士達には同じことを考える。まるで古に聞いた女神のようだと。敵には畏怖を、味方には鼓舞を同時に与える白亜の騎士は何度目かの槍襖を突破して、主の姿を見つけた。

「シュセ、引き上げるぞ」

怒声轟く戦場で、シュセが聞いた声は怖ろしい程に冷たかった。

「はい」

見上げれば錆びを落とした太陽は中天に輝き、風はすっかり止んでいる。

「他の者共には既に撤退を呼びかけた。殿は私が務める。お前は早く兵をまとめて橋を渡れ！」

呼び止める間もなく、二人の敵を貫くカルの様子に、シュセは私兵達に撤退を命じる。

「橋に向かって走れ！」

シュセ自身は、私兵の中に遅れた者が出ないよう最後尾で、追ってくる敵を迎え撃つ。その遙か後ろ、追撃してくる敵の猛追を一身に受けてカルは槍を振るっていた。追撃してくる敵の数は、渡り終えた味方の分も併せて、何十倍もの圧力を伴ってカルとシュセに襲いかかる。

急げと声を枯らして、私兵達を急き立てるが彼らも体力の限界。それは分かっている。だが、早くしなければカルが……。遅々として進まないように思えた私兵達の渡河作業も完了し、振り返ったその先でカルが、敵の濁流に呑み込まれた。

「！ つ…………カル様！！！」

右腕が焼け爛れるような熱を持つ。握った血と油に汚れた大剣を翳すと、熱は腕からゆらりと移動を始める。鋭い衝撃が左の肩を襲う。鎧の隙間に突き立つ矢。

こんなものに、心の中で呟くとシュセは視線を元に戻す。

「どけええ！！！」

剣先に溜まった力を一気に解放すると、視覚化出来るほどの幻想の盾が押し寄せる濁流を、割った。

その中を突つ切る戦馬、背に乗せるのは無惨に砕けた鎧を申し訳程度につけたカルだった。馬の背に身体を縮め、必死で橋へ向かう。カルの戦馬がシュセの側を駆け抜けるその一瞬。主の無事をシュセは確認し、敵に背を向けた。

橋に響き渡る蹄の音。二頭並んで駆け抜けるその後を、狭い橋を押し合いながら敵が迫りくる。後少して橋を、渡り終えるその時になって、嘶《いなな》くシュセの戦馬。見ればその尻には矢が突き刺さっている。

いけない、と思ったときにはシュセの身体は橋の上に投げ出されていた。息が出来ない苦しさと共に、鼓膜を揺らす敵の声。かろうじて手放さなかった大剣を両手で構えようとして、左手が拳がらないことに今更気が付いた。

立ち止まるか、走るか。自分とカル、秤にかけるまでもなかった。シュセは立ち止まり迫りくる敵に向けて大剣を構えた。

「カル様、お許しを。どうかご無事で！」

小さく呟いた。覚悟を決めた彼女の身体が、後ろからの強い力で宙を浮く。

「うおおおー！」

驚愕に振り返れば、片腕だけで彼女を自分の戦馬に乗せようとしているカルの姿が映る。カルのこれほど必死な声を聞いたことはない。全力を出している彼の顔には朱が走り、酷い苦痛を押し殺す奥歯は噛みしめられている。

「乗れ！ シュセ！」

先ほど決めたはずの覚悟が、一瞬にして崩れ去る。迷う暇など無

かった。シュセは剣を捨て動く右腕で、カルの戦馬に飛び乗った。橋はもうすぐ対岸につく。だというのに敵は追撃をあきらめない。二人を乗せた戦馬は徐々にその速度を落として行く。

このままでは、とシュセが降りようと考えたときカルは背後のシュセに向かって、荒い呼吸の中から言葉を与える。

「私より、先に、死ぬのは、許さぬ。そう申したはずだ……！」

振り返ったカルの顔には、微笑が浮かぶ。必ず助かると信じ切っている自信に溢れたその表情に、シュセは黙って頷く。

前を見れば、私兵達が弓を構えているのが見える。助かったのだ。カルの腰に回した手に力を込め、カルの背に額を付けてシュセは小さく呟いた。

「……はい」

賊都 1

「ロクサーヌで内乱？」

薄暗い食堂に響いた、この城の主の声。食事をしていた手を止めて、視線を上げる。

「はい、なんでも……あのヘルシオ家とツラド家が争っているとか
太った使用人のような男は、手をすり合わせ尻尾を振る犬もかく
や、というほどに愛想笑いを浮かべている。」

「ヘルキオス卿と、アトリウス殿がな……」

くっ、と短い笑いが城の主の口から漏れた。発作のような晒い。

「ロクサーヌを守る二人が潰し合うとは、いよいよ王都も危ないな」

「はい、それに引き換えガドリアは大変な栄えよう……これもひと
えに閣下の日頃の治世の賜物にございましょう」

齒の浮くような世辞に、主は軽く頷く。

「それで、どっちが勝ちを拾った？」

「それがヘルシオ様ということですよ」

ほう、と主は一つ息を吐く。

「武門のツラドが潰えたか……」

考え込むように腕を組み、鋭い視線を小太りの男に向ける。

「分かっているとは思いますが、くれぐれもこのこと他言するでないぞ」

「もちろんでございます、閣下に不利益になることなど、私がするわけがございません」

満足げに頷いて、主は食事を払いのける。

「時は、満ちたな」

ルクが瞼の裏に日の光を感じ軽い目眩を覚えながら目を覚ますと、まず目に入ったのは見慣れぬ天井だった。

ぼんやりとする意識で視線を巡らせれば、続いて目に入ってきたのは、自分を見下ろしている子供。

男の子だ。くすんだ金色の髪に、垂れ下がった目が優しい印象を与える。ふっくらとした頬が、触ったら柔らかそうだった。

視線が合うと、男の子は目を見開き驚きを全面に出す。キョロキョロと左右を見回して困ったように眉を顰める。

まるで昔のカルみたい　カル……。

そこまで考えて、ルクの思考は一気に覚醒しベッドから跳ね起きてしまう。途端に頭の中を鷲掴みにされ揺さぶられたかのような不

快感が襲ってくる。

「くっ、うっ……」

口から漏れる苦悶の声に自分が生きていることを自覚する。頭を揺さぶる不快感が徐々に去っていくのと同時に、部屋の中の様子が目に入ってきた。

小さな部屋だった。使い込まれた堅いベッドに簡素なシーツ。広くはない部屋に扉と窓は一つずつ。小さなタンスが一つ、丸く小さなテーブルと椅子が二つ。それがこの部屋の家具の全てだった。ルクの基準からいえばそれは相当に粗末なものだった。

「私は」

どうしたんだっけ？ そう考えて、記憶を手繰り寄せる。目まぐるしくよみがえる記憶に衝撃を受けながらも確かめなければならなかった。

「お父様は」

ツラドの騎士達は、どうしただろう。

「あ、あの」

戸惑いを含む自分以外の声で我に戻る。

「え？」

覚醒からの混乱で、少年の存在をすっかり忘れていた。

「だいじょうぶ？」

戸惑うように、必要以上にゆっくりと聞いてくる。様子を窺うように見上げる瞳の色は、無垢なる灰色。

「うん、あのお父様は？」

「え？」

少年の戸惑いが困惑に変わる。

「居ないけど……」

悲しそつに俯く少年を見てルクは自分の失敗と状況を臆気ながら、理解する。

「ごめんなさい、アトリウス・ツラドと言う方を知ってる？」

ぶんぶんと首を振る少年に、ルクは続けて質問する。

「それじゃ、ここはどこかな？」

唸りながら、首を傾げる少年にルクは困惑する。この少年は何も知らない。という一事がルクの心を焦らせる。なぜ騎士達は居ないのか、考えれば考えるほど悪い方に思考が向かう。

ここから出て見ようと決心するまで、長い時間は掛からなかった。ベッドから降りようとするルクを少年は止めようとした。

「だめ、ルカが起こしたらだめだって！」

間延びした口調はこの少年の癖なのかもしれない。両手を広げて立ちふさがる少年に、ルクは優しく言った。

「大丈夫。ちよつとだけだから、ね？」

少年は唸りながら、首を傾げてしまふ。その隙にルクは扉に向かう。素足に床の冷たさが心地良かった。

ぎい、と鳴る扉を開けば突き刺さる太陽と共に肌を包む熱気。そして青い空が彼女を迎えた。眼下に広がるのは土と石で造られた背の低い家々、遠くには岩から削りだしたような城が見えた。

ベランダの足元から吹き抜ける風に自分が質素なワンピース姿なのに気付く。そしていつもの癖で髪を束ねようとし、髪が短いのも気付く。

こんな場所に見覚えは無かった。監禁されている訳ではないようだが、明らかにロクサーヌではない。

「もう良い？」

困ったように服の裾を掴む少年に促され部屋に戻り、ベッドに腰掛けた。

手持ち無沙汰なのだろうか、少年はルクを窺うようにチラッと見ている。部屋を歩き回る。

知らない、こんな街は知らない。

やってきたのは、漠然としすぎた感情の波。大きすぎるそれは、混乱よりも冷静さをルクに運んで来た。

なにも、知らない。わからない。なら……。

「ねえ、君」

名前を呼ばれ、少年は驚いたように立ち止まる。瞬きして、ルクの次の言葉を待つ。

「名前、教えてくれないかな？」

考えないと。

おずおずと少年は口を開いた。

「ケイフウ」

「私はルク」

頬を染めるケイフウにルクは自分の隣を叩く。

「こっち来ない？ お話しましょ」

こくり、と頷いてケイフウはルクの隣に座る。隣から見上げる汚れない視線に、ルクは微笑み返す。

「ケイフウは私が、どうしてここにいるか知ってる？」

私は、生きているんだから。

「えつとね、サーねえが、連れてきてサイシャが着替えさせて、ルカが起こすなって言ったの」

嬉しげに話すケイフウの話は、ルクの知らない名前ばかりだった。

ルク ひいてはツラド家に味方する者達だろうか？ ルクは心の中
で否定する。身も知らない者が自分を救ってくれる程今の自分を
巡る状況は良くはないはずだ。

では、なぜ？ あの状況で自分を連れてきたのだから、お金では
ない。

ではなぜ？ 繰り返す問いにやはり答えは出ない。

「分からない？」

ケイフウは悲しげに俯き、それに気付いたルクは考え込んでいた
難しい表情を、困ったような笑顔に変えた。

「そんなことは無いけど……」

「ケイフウね、よく言われるんだ」

足をぶらぶらと動かしながら、悲しげに話を続ける。

「ケイフウは馬鹿だから、話が分からないってさ。ねえルクもそう
思う？」

不安に揺れ動くケイフウの灰色の瞳に、カルの面影が重なった。

あの美しかった母親を失った時のカル。外の世界に怯える雛鳥のよ
うに、小さく、その身を震わせながら縋るような眼差しを向けてい
たカル。

不意に、ルクはカルを失ったのだと突きつけられた。ほかの誰で
もなく、自分自身に。

気がつけば、ルクはケイフウの小さな頭を胸に抱いていた。

「ルク？」

いきなりのルクの行動に、戸惑いながらケイフウはルクを呼ぶ。

「ごめんね、ケイフウ……もう少し、こうして……」

こみ上げてくる感情を我慢してそこまで言ったが、その先は嗚咽に取って代わられた。

後から後から零れ落ちる涙。拭う余裕もなく、ケイフウを抱く手に力が籠もった。

「ルク、泣いてるの？」

溢れ出す思い出がルクを泣き止ませない。

「だいじょうぶだよ」

ルクの腕中から必死に手を伸ばし、ケイフウはルクの背を撫でた。

「ジンにいがね、ケイフウが怖い夢を見て泣いたときに、こうしてくれたの」

壊れ物を扱うかのような優しい手つき。

「ケイフウが守ってあげるよ」

ほんぽん、と背を叩き、撫でる。相手を安心させようとする精一杯の行動。それが嬉しくてルクはまた泣いた。悔しくて、悲しくて、嬉しくて、泣いた。泣き尽くして涙が枯れる頃、窓から差し込むのは西日になっていた。

差し込む西日が、夕闇に変わった頃ルクとケイフウのいる部屋にルクアンドが戻ってきた。ぎい、と立て付けの悪い音を軋ませて扉を開けば、ベッドでは折り重なって眠るルクとケイフウの姿にルクアンドは苦笑した。

「起こすなって言ったんだけどなあ」

頭を搔いて、眠っているケイフウの頬を軽く叩いてやる。

「ん、ん〜？」

寝ぼけ眼のケイフウ。

「ケイフウ、言い付け守らなかったのかい？」

ぶるぶると首を振るケイフウに、暖かいが困った笑みを見せて、ルクアンドはルクを見た。頬には涙の筋が見える。

「女の子を泣かしたの？」

「違うよ、ルクを泣かしてなんていないよ！」

向きになって反論するケイフウの様子を静かに、ルクアンドは見守った。

「まあ、ケイフウがそんなことするとは思ってないけどさ……ちょっと手伝って彼女がベッド落ちないようにしよう」

ケイフウは頭のほうを、ルカンドは足を持ってルクをベッドの真ん中に寝かせる。

「結構重いな」

ルクを寝かせると、ルカンドはシーツを彼女に掛け、椅子に腰掛けた。

「それで、彼女何か言ってた？」

「ルクね、何も言っていなかった」

彼女の名前はルクなのか、とルカンドは改めてベッドで横たわる少女を見た。同年代の少女と言えばサイシャ位しか知らないが、ルクと言う名前の少女は明らかに自分たちとは違って見えた。ふっくらとした白い頬も、艶やかに輝く赤い髪も、女性的な身体の線もサイシャやサギリとは違うものを感じる。

「ルカ……」

おずおずとケイフウは声を掛ける。

「ん？」

「ルクのこと苛めない？ ケイフウ、ルクのこと好き」

「そうだね、サギリさん次第だけど……出来れば友達になってみたいね」

「うん！」

嬉しそうに、頷くケイフウに笑顔に向けてルカンドは、涙の跡が残るルクの寝顔を見つめた。

泣き疲れて眠ったルクが目を覚めたとき、まず目に入ったのはケイフウのあどけない寝顔。その頬に手を伸ばそうとして、部屋の中が明るいことに気がついた。寝返りを打って、光を見定めようとしたとき、知らない声が聞こえた。

「目が覚めた？ ルクさん」

ハツとして、ベッドから身を起こせばベッドの前に男の子がいる。赤銅色の髪を、緩やかにうねらせ後ろで一つにまとめている。暗闇の中で瞳の色は見えないが、顔つきからして同年代だと思う。雰囲気としては貴族よりも騎士に近いものを感じさせた。粗末な薄い服を着ているが、だからこそしっかりした男の子の体付きを見取れる。

「初めまして、ルカンドです。ルカと呼んでね」

微笑む笑顔は柔らかい。ケイフウが無邪気とするなら、ルカンドと名乗ったこの少年は、他人を安心させる笑顔だ。

「ルク……です」

家名は名乗らないほうが良いだろう、と判断して名前だけを名乗

った。不快感を感じさせただろうか、ルカンドを見つめるが彼の表情のどこにもその影すらなかった。

椅子を引き寄せて、ベッドの傍に腰掛ける。

「さて、と……聞きたいこともあると思うけど、まずは何か食べない？」

悪戯好きな少年のように笑って、ルカンドが提案する。

「でも……」

「遠慮する必要はなし！ 実は僕の方がお腹空いていてさ。一緒にどう？」

「？」迷惑でないのなら……」

「良かった。それじゃ持ってくるね」

部屋の扉を開けて、外へ出て行くルカンドを見送ってケイフウの寝顔を見下ろし、そっとくすんだ金色の髪を撫で、震えそうになる自分を叱咤する。

大丈夫、大丈夫。

呪文のようにそれを繰り返して、逃げ出しそうな自分を押さえ込む。怖いのだ、彼の口から語られるであろう事実が。

それを自分が受け入れられるかどうか。

しばらくすると、扉を背中を押して、両手に木製の食器を持ったルカンドが戻ってきた。

鼻腔をくすぐる美味しそうな香りに、ルクの腹がなる。

「召し上がれ」

くすり、と笑うルカンドにルクは顔を赤くする。
暖かなスープを飲み、パンを小さくちぎって口に運ぶ。次第にその動作に夢中になりながら、視線と耳を向ける。

「聞きたいことは沢山あると思うけど、まず僕の話聞いてくれな
いかな？」

頷いたルクを確認して、ルカンドは話を進める。

「まず僕は君がどうしてここに来たのかは知らない。多分、サギリ
さんしか理由は知らないんだ。だからそのことは直接聞くと良いと
思う」

確認するようにルクの瞳を見つめる。

「サギリさんは、今他所に行っていてしばらくは戻らない。その間
は僕らが君の世話をさせてもらうよ。それで良いかな？」

ゆつくりと、だがしっかりと頷いたルクに、ルカンドは優しく
微笑んだ。

「それじゃ、君はこれから僕らのお客様だね。よろしく」

差し出される手を見つめていたルクは、恐る恐るその手を取る。

「今日の所はこれで、また明日にでも街を案内するよ」

言いおいてルカンドは立ち上がる。

「食器はテーブルの上をお願い。明日には片付けるから」

じゃあね、と言いおいて、そのまま立ち去ろうとするルカンド。

「あのっ、一っだけきいても良いでしょうか？」

その背に向かってルクは勇気を振り絞って声をかけた。

「ここは、どこなのですか？」

振り向いたルカンドは、変わらぬ笑みを向けた。

「ここはね、ロクサーヌの東。荒地を越えた場所にある边境都市。
ガドリアさ」

賊都2

随分遠くまで来てしまった。

ガドリアという名前聞いたとき、ルクが抱いたのはそんな感想だった。ロクサーヌからほとんど出たことのない彼女にとって、不毛の荒地を越えた先にあるガドリアなど話に聞く自由都市郡と同じ位に遠いという感覚しかない。

ぼすん、と固いベッドに倒れこむ。

「お父様……ウィンベルさん、私は生きています」

窓から差し込むのは、白々とした月光の明かり。

無邪気に眠るケイフウに身を寄り添わせ、ルクは目を閉じた。

周囲に夕闇が迫る頃、ガドリアの町に火が灯る場所がある。篝火を軒先に並べ、店に並ぶ商品を艶やかに、美しく見せようと夜の闇を照らす。

飾り立てた指先、結び上げられた美しい髪が白い肌に掛かる。はだけた服の合間から覗くのは、豊かに膨らんだ胸の谷間。

金と交換で一夜の夢を売る場所。そこにルクはいた。

「あのさ、ケイフウ」

「うん？」

にへら、と気の抜けたような笑みを浮かべて振り返る彼は至っていつも通りだ。ただその彼に手を引かれているルクは、先ほどから恥ずかしさのあまり左右を見ることさえできない。

「確かにその、外に出たといって言ったんだけど……その」

ちらりと周囲を見て、俯いてしまう。周囲には、露骨に寄り添う男女の姿。男の手はいやらしく、女の体を撫で回し服の中にまで入っていつてしまっている。女のほうは、微笑すら浮かべてそれを受け入れている。

「お仕事～お仕事」

にっこりと、微笑んでルクの手を引いて歩き出してしまふ。

「うう……」

なるべく地面だけを見るようにして、ルクはケイフウについて行く。

「あんなこと、カルにもさせたことないのに……」

誰にも聞こえないように呟いて歩いていくと、急に前を歩くケイフウが立ち止まった。何事だろうと、恐る恐る視線を上げてみれば、ケイフウの前に柄の悪い男の一人。男の背後には立派な門構えの店がある。赤い柱に緑の螺旋図、二階建ての建物は滲み出るいかわしい雰囲気誇るかのよう、そこに在った。

「おい、何店の前で立ち止まってんだ？ 邪魔だから失せる」

柄の悪い言葉が、ルクを萎縮させるがケイフウは全く意に介さな

い。

「ケイフウ、お仕事に来たの」

「仕事お？」

そこで、初めて男はルクの方を凝視する。

「はあくん、なるほどなあ」

品定めするように上から下までルクを見回し、ケイフウに向かって、にやけた笑みを向ける。

「なかなかの上玉じゃねえか」

ルクを振り返り、ケイフウは無邪気に笑う。

「ルク、上玉褒められたよお」

「え、そうなの？」

頷くケイフウに、彼女は目付きの悪い男とケイフウを交互に見た。その様子に、柄の悪い男は笑い出す。

「良い娘じゃねえか」

だがな、と言い置いてケイフウを睨む。

「生憎とここじゃ、紹介状のねえ奴は駄目なんだ。さっさと帰えんな」

「駄目だよ、ケイフウお仕事だもん！」

頬を膨らませて、食い下がるケイフウに、柄の悪い男は一つ舌打ちする。

「駄目だって言ってるんだろっが！」

凄む男を前にしても、ケイフウは全く怯まない。二人が騒いでいる間に店の奥が騒がしくなる。しかし二人はそれに構わず、言い合いを続けていた。

立派な門が、がらりと音を立てて開く。

「まずいつ！」

ケイフウと言い合いをしていた男は、そう言うときすぐさま腰を曲げて頭を下げる。

「お疲れ様でした！」

声を張り上げる男に、軽く頷いて出てきたのは恰幅のよい客と、その客に寄り添う妖艶な銀色の髪の女だった。しなを作って、客の耳元に女が唇を寄せる。吐息がかかるほどの距離で囁かれ、客は満足げに笑って帰っていった。

「またのお越しを！」

門番の男が腰をかめたまま、声を張り上げた。女は、恰幅のよい客が見えなくなると、ため息をついて店に戻ろうとする。と、そこで何かに気が付いたように、足を止めた。

「ジル姐さん、何か？」

怪訝な顔をした柄の悪い男に目もくれず、女はケイフウを見ると顔に花が咲いた。

「あれ、ケイフウ？」

男が驚くまもなく、ジルはケイフウを抱きすくめてしまう。艶やかな服が土に付くのも構わずに、膝を折りケイフウに頬擦りする。

「やだあゝ久しぶり、元気だった？」

につこりと笑って頷くケイフウに、ジルは頬を染める。

「今日はケイフウが来るって聞いて、皆で楽しみにしてたんだよ」

先ほどの男に見せたのとは別の、心からの笑顔がケイフウに向けられる。

「……ところで」

そして視線を巡らせ、ケイフウと手を繋いだままのルクに行き着く。

「この子は？」

「友達」

その言葉に、ジルのルクを見る視線が厳しくなった。

「友達、ねえ」

先ほどの男とは異なり厭らしさはないが、品定めされるように頭
の先から爪先までをじっくりと見られる。

「ま、いいわ。どうぞ中へ」

立ち上がり服に付いた埃を払うと、ジルはケイフウを手招きしル
クもそれに続いた。後には門番をしていた男だけが呆気に取られて
立ち尽くしていた。

店の中は、外よりもなお過激だった。漂う紫の香、薄っすらと汗
の浮いた白く滑らかな肌に、男の指が食い込む。漏れる嬌声。ルク
は身を小さくし、さらにケイフウの背中に寄り添うようにしてその
中を歩いていく。

「おや、いらっしやい」

店の奥から姿を見せたのは、中年の女だった。

ジルに手を引かれ、笑みを崩さないケイフウ。その彼を無遠慮に
上からしたまで嘗め回すように見ると、ぷいっと奥へ引っ込む。

「遊びに来てるわけじゃないんだ。ぐずぐずするんじゃないよ!」

奥から顔だけを向け、ケイフウに向かえって怒鳴った。ケイフウ
の耳元に、ジルとケイフウは一言一言言葉を交わし、離れる。

「その娘は何なんだい？」

中年の女の問いに、ケイフウはにへら、と屈託のない笑みを向ける。

「お仕事。ケイフウとルク一緒！」

「その子があ？」

疑わしげにルクを見た中年の女だったが、何も言わず奥の部屋へ消えて行った。

奥の部屋に入れば、そこは娼館とは思えないほどに殺風景な場所だった。机が一つあり、それに椅子が一つあるだけ。部屋自体は大きくはないが、それにしても家具は少ない。

「給料は、一人分しか用意してないからね」

にこにこ顔でケイフウに、一つ舌打ちをして中年の女は部屋から去った。

「ルク、ここでお仕事」

残されたのは二人。椅子を勧められ、戸惑いながらも座る。

「ここで、何をするの？」

えへへ、と笑うケイフウがルクの頬に口付けする。

「え？」

突然の事に戸惑うルク。

「贈り物」

軽い足取りで、扉の奥に消える。それを見送ってルクが触れてた頬は、心なしか熱かった。

しばらくぼんやりとしていた彼女が我に返ったのは、扉をたたく音。反射的に返事をしてしまい扉が開かれれば、入って来たのは食事だった。

ロクサーヌでは見られない食材を使った豪華なものに、ルクの視線は釘付けられる。その食事が机に並べられ、最後に姿を見せたのは椅子を持ったケイフウ。

「ルク食べて、贈り物」

持ってきた椅子に座り、灰色の瞳を輝かせてルクを見つめる。

「その、良いの？ こんな豪華な食事」

ケイフウ達が普段食べている食事とは比べ物にならない、豪華な食事。それに目を見張りながら、食事とケイフウを交互に見比べる。

「うん！」

満面の笑みを浮かべて頷くケイフウに、ルクはそれじゃあと言って口をつけた。

「美味しい」

「ほんと！？」

にこりと微笑むルクに、ケイフウは嬉しそうに笑う。

「ケイフウ！」

ドンドンと叩かれる扉の音。静かだが切迫した声が扉の反対側から聞こえる。

「あ、お仕事だ」

ぴょん、と椅子から軽やかに飛び降りたケイフウは扉を開ける。

「二階の客、ちょっとお願いね」

呼んだのは、銀の髪を結い上げたジル。その柔らかい視線が、ルクに行き当たったとき途端に硬く厳しいものに変わる。

「うん、ルクちょっと待っててね！」

なんでもないことのように、言ってケイフウは出て行った。

「良い身分だね。男に食わせてもらってさ」

ケイフウを見送ったルクと、ジルの間に流れるのは寒々しい空気。扉を後ろ手に閉め、ルクとジルは向かい合った。食事の手を止め、ジルを見返すルク。

「私に、何か御用ですか？」

「……別に、ただ少し気に入らないってだけでね」

鼻にかかる声、ねっとりとした笑みがルクに向けられる。

「私の何が気に入らないと言っんですか？」

「あんたが、口になっている料理……いくらすると思っ？」

押し黙るルクに、ジルは勝ち誇ったように言い放つ。

「ねえ、お嬢ちゃん……男娼つてのを知ってるかい？」

睨むルクの視線を鼻で晒い、ジルはルクを見下ろす。

「男相手に、男が酒の相手をするのさ……もちろん、その先もね。わかる？」

「それが、何なんですか？」

腕を組んだジルは、扉に背を預けている。ルクの脳裏に浮かぶ、嫌な想像を打ち払うかのようにジルを睨みつける。

「男娼つてのは、子供が務めるのが普通でね。想像できる？ 汚らしい親父どもにさ、口を吸われ、痛がるのを無理やり組み敷かれるんだ」

「だから、それが何なんですか！」

「察しが悪いっつてのは、罪だね。普段じゃ食べれない豪華な食事。可愛いケイフウ……さて彼はどうやってお金を稼いでいるのでしょうか？ しかもこんな場所で」

「まさか……」

にやりと、笑うジルに勝者の笑みが漂った。

「やめさせて!」

「別に、あたしが無理やりケイフウに仕事をさせてるんじゃないさ。進んでやってるんだから、あたしらがどうこう言っことじゃないだろっ?」

「やめさせて!」

絶叫に近いルクの声を聞いても、ジルは薄ら笑いを浮かべている。

嫌だ。私の為に、誰かが死ぬのは。誰かが傷つくのは。

「嫌だね」

降りてきたのは、ルクの心の思いなど伝わるはずのない無情な声。その一言を聞いたとき、ルクの心で何かが弾けた。椅子から立ち上がると、泣き出しそうになる心を叱咤してジルの前に迫る。

頭一つ分高いジルを睨んで、ルクは有らん限りの気迫を込めた。

「どいてください! ケイフウと一緒に帰ります」

「ハン! 寝言は寝て言いな。お嬢ちゃん」

直後、ジルの頬に走る衝撃。

ぱん、という乾いた音にジルの視界はぶれた。

「どきなさいっ！」

「つく、このガキ！」

力任せに引つ張った衣装は乱れ、張られた頬は赤く腫れ上がる。上になり下になり、互いに髪を引つ張り合う。

「あの子が、どんな境遇で、どんなことをしてきたのか、あんたに分るのかい！」

ルクに馬乗りになったジルが、ルクの頬を張る。

「あんたみたいなの、お嬢が！ ええ！？」

下になったルクは、ジルの長い銀髪をめちやくちやに掴み引つ張る。

「つく……」

軽くなった体の上のジルの頬をルクが押しつけると、今度はルクが上になる。

「知らない！ ケイフウが、何をしても、何をしても、関係ない！」

一層力を込めた一撃がジルの頬を打った。

「私はケイフウの友達なんだから！」

そういうや、否やルクは扉に向かって走る。ジルをその場に残し、乱れた服もそのままにルクは二階へ続く階段を駆け上がった。目に付く扉を、片っ端から開け放つ。

「ケイフウ!？」

男女の交わりを見ても、顔を赤くする余裕もない。開けては次の扉に向かい、後ろから聞こえてくる怒号も無視する。

突き当たりの一段広い部屋が目につく。ついで目に入るのは人だかり。はやし立てるような声。娼館には相応しくない喧騒。

「どいてー!」

その合間を抜けて、ルクが目にしたのは捜し求めていたケイフウの姿。

「「え?」「」

間の抜けた声が二つ重なった。

「ええっと、それじゃケイフウは用心棒のお仕事で……」

うんうんと頷くケイフウは笑顔だが、後ろに控える中年の女は文字通り鬼の形相をしている。

ルクは、最初に案内された殺風景な部屋に、連れ戻され石の床に

正座をさせられていた。

「男娼とかじゃ……」

「だれがあ？」

んん？ と天井を見上げるケイフウに、ルクの隣から忍び笑いが聞こえた。横目で睨みつけられ、ルクと同じく酷い格好のジルがつくつと笑いながら正座している。

「ジル……」

中年の女は、こめかみに浮かんだ青筋がいつ切れてもおかしくない。

「いやぁ………すみません。女将さん、ちょっとからかいたくなって」

「ちよつとお？ 一体いくら店の損害が出たと思ってるんだい！ この馬鹿娘が！」

女将さんと呼ばれた女の怒りは、ジルだけに留まらない。

「ケイフウ！ 責任は取ってもらってからね、今後一月用心棒代はなしだ！」

ええ〜と嘆くケイフウも、女将の視線の前には効果がない。

「ジル、今日は休んどきな！ そんな顔じゃ売り物にもなりやしない」

「はあ〜い」

能天気な声に、怒りが爆発しそうになるのをようやく堪えた女将は、肩を怒らせて部屋を出て行った。

「いや、しかし傑作だったね」

くつくつと笑いながら、ジルは足を崩して頬杖をついた。

「どきなさい、ぱーん!」

ルクの声を真似てジルはおどけ、ケイフウはそれを興味深く見ていた。

「なあに拗ねてんのよ、ルクちゃん」

そっぽを向いていたルクの体に、ジルの腕が絡みつく。

「触らないでくださいっ!」

「触らないでください、だって可愛い〜」

猫撫で声で、ルクの体をまさぐる。

「ちょ、どこを……んっ!」

胸を触られ、言葉にならない叫びを上げるルクにジルは囁きかける。

「あたし、ルクちゃんのこと気に入っちゃった。ねえお店に来ない

？ 大歓迎なんだけど」

「はわわ」

わたわたと、艶かしいジルといつもと様子の違うルクに、ケイフウは目を隠してあたふたとしていた。

「い、やです！」

「あっそ、残念」

あっさりとルクを解放し、今度はケイフウに絡みつく。

「ケイフウ、あの女に叩かれた所が痛いのお、舐めて慰めて」

「ジルさん！」

ルクの叫び声も意に聞せず、ケイフウを胸の中に誘う。

「ねえ、ケイフウ、あんなお子様なんかより、あたしの方がずっと良いコト教えてあげられるわよ」

「ジルっ！」

容赦のなくなったルクの声に、ジルは人知れず笑みを漏らした。

「きゃー、怖い、ケイフウ助けて！」

三人の喧騒は、夜が白けるまで続いた。

賊都3

ステンドグラスから入る明かりは、講堂内を明るく照らしていた。ルカンドは装飾を施された天井を一瞥し、誰にも気づかれぬように息を吐いた。

上座で兵士を侍らせているのは、この城の主ヘルベル・ジェルグ。細身の体と神経質そうな細い眉に、青白い顔。学者然とした風貌に、野心の炎が見え隠れする。

野心。そう、野心だ。それも無謀な類ときている。

心の中でため息を尽きつつ、ルカンドはこの不幸な晩餐会に招かれた者に視線を向けた。

顔に傷のある白い羽織を纏った男。

若いころはさぞ、美人であったのを偲ばせる中年の女。

小太りの商人。

そしてルカンド自身。

見渡して、ルカンドはもう一度ため息を吐いた。

「どうしたね？ 坊や溜息なんて吐いて食事が進んでないようだけ
「ど」

「いえ、緊張しているんですよ。艶花、ストリア同盟、赤き道の方
々と同席出来ることなんて滅多にないことですから」

中年の女の問いに、答えたルカンドは作り笑顔で対応した。

「モルトの爺様の弟子にしちゃあ、随分と世辞が上手いね」

色町を仕切る『艶花』のハンナ。

ルカンドは、表情を変えず頭の中だけで情報を整理していく。

「モルト様に、おかれましては日頃から鼻屑にさせて頂いておりま
す」

小太りの男が話しに入ってくる。

「こちらこそ、クルドバーツ様があつての私達ですから師匠もよし
なにと、言っていました」

ガドリアとロクサーヌを結ぶ商人達の連盟『赤き道』

「商人向きだな、若いの」

顔の傷を歪める様にして笑つたのは、白い羽織を纏う壮年の男。

「私は師匠を尊敬していますよ」

博徒達の元締め、シロキア。

「そうかい？ 職人や鍛冶やよりも向いてる職がありそうだな」

そして炎の運び手。鍛冶屋と職人を集めて作られた相互扶助組織。賊都ガドリアとは、良く言つたものだ。領主は現として存在するし、治世も領主の権限だ。だがしかし本当にこの街を支配しているのは、ここにいる4人だと言つて良い。そして、その4人で真つ当に商売をしているものはいない。

いや、正確にはルカンドはその代理だが。

「あの頑固爺は、くたばりそうかい？」

聞きにくいことをあつさりと聞くシロキアに、クルドバーツは丸い顔の小さな目を見開いた。

「いえ、持病が悪化しているだけです。2、3日中には復帰できるかと」

にこやかに答えるルカンドに、凄みのある笑顔をシロキアが向ける。威圧感にも動じず、ルカンドは微笑を絶やさない。

「ごほん、と咳払いの音が聞こえた。」

「……挨拶はその位でいいかな？」

視線を向ければ、まだ若い城主が口を開いた。歳は今年で27。

「昨年領主の地位を引き継いだばかりの、若様だ。青白い顔と、細い体が相俟ってひ弱に見える。」

特にルカンドを除いた海千山千の猛者達が相手では、余計に。

「ああ、こんなもんだ。モルトの爺さんは良い跡継ぎが居るらしい。どこかの誰かと違って、な」

シロキアの発言に、ハンナは頷き、クルドバーツは城主とシロキアを見比べた。露骨にルカンドを睨む城主ヘルベル。その視線にルカンドは困ったように微笑むだけだった。

「今日集まってもらったのは他でもない。ロクサーヌの内乱につい

て、耳の早い諸君ならご存知であろう」

「内乱なんて、恐ろしい。そんな話をするもんじゃないと思うけどねえ」

ハンナは、ああ怖いとわざとらしく身を竦めた。クルドバーツはそれを見て眉を潜め、シロキアは静かに笑う。

「艶花のハンナが、争いを怖がるとはな」

低く笑うシロキアに、ハンナは悪戯っぽく微笑む。

「争いが金を生むなら喜んで、参加するんですけどねえ。現実には往々にして逆。ああ嫌だ嫌だ」

「お二人とも、領主様のお話の途中ですぞ」

神妙に聞く姿勢をとるクルドバーツに、城主の視線が幾分和らぐ。

「……王都に内乱とは、国を傾ける愚かなる所業。もはや、中央に居座る十貴族に国を治める資格はないと思われる」

不穏な話にクルドバーツ以外の三人は、眉を潜めた。

「我らは、今後中央との縁を切り、より一歩進んで王都に攻め込もうと思う」

領主の傍らに控えていた兵士達が、がちやりと手にした武器を鳴らす。

「そこで、街を預かる諸君らにも我等の援助を頼みたい」

「援助ね」

呟いたシロキアの声に、兵士達が一步進み出る。

「代表の各々方には、兵と資金の提供を命ずる」

シロキア、ハンナ、クルドバーツ、そしてルカンドの顔を順番に眺め念を押す。

「よろしいですな、ルカンド殿」

年若く、反抗も少ないであろうと予想してヘルベルは問いかけた。領主としての権威を振り回して。

「お断りします」

だが、微笑を絶やさぬままルカンドははつきりと、拒否を示す。その余りにも、堂々した物言いにその場にいた全員は、視線をルカンドに向ける。

「王都で内乱を起すのは、国を危うくする。そう言われたのは領主様、貴方でしょう。なのになぜ兵を率いて王都を突かれるのか」

澁みなく言葉を並べるルカンドに、領主側は呆氣に取られ、シロキアは豪快に笑い声を上げる。

「全くその通りだ」

「き、貴様！ 僕は領主なのだぞ！」

激昂に任せ怒鳴る領主に、シロキア、ハンナの視線は冷たい。

「存じています」

それがどうした、とでも言うようなルカンドの言葉と、ほかの誰よりも冷たい視線に領主は怒りで言葉を忘れた。

「なればこそ、盟約を忘れてもらっては困ります」

「め、盟約だと……？」

ヘルベルはやっとそれだけ言って、ルカンドを憎悪の視線で射抜く。

ほう、と顔を見合わせたシロキア、ハンナそしてクルドバーツ。

「領主は街の代表の賛成なしに、課税は認められない。創設した当初からの盟約のはずです」

「税ではない。あくまで援助だ！」

「ですので、お断りします。援助とは命令されるものではないですよ」

「くっ……貴様っ！ たかが代理の分際で！」

その罵倒に、ルカンドはにっこりと微笑んだ。眼だけは、凍てつくような冷たさを湛えて。

「お話がそれだけなら、僕はこれで」

席を立つルカンドに、ヘルベルが吠える。

「貴様、無事に帰れると思っているのか!？」

肩越しに振り返り、ルカンドは笑顔の種類を変えた。

凍り付くような冷笑。獲物を狙う蛇が笑うような笑みに、媚びを売られるのに馴れたヘルベルの背に戦慄が走る。

「……準備はしてきたつもりです。僕が帰らない場合、炎の運び手は一切の仕事を停止し、双頭の蛇はこの城を出る荷を全て襲います」

「そんなことが、貴様に……」

「お忘れなく、領主様」

戸惑う領主に止めを刺すようにルカンドは言葉の剣を突き付けた。

「僕は荒地にのさばる盗賊で、炎の運び手の代表なんですよ」

ルカンドは固まる領主に、それ以上何も言わず立ち去った。

「……さてっと、私らも帰るかね」

よいしょ、と言いながら立ち上がる。

「まあ、白けちまったからな。おい、商人お前はあきんどどうする？」

「いえ、まだ食事も残っていますし」

クルドバーツの丸い体を見回してシロキアは鼻を鳴らした。

「それ以上肥えてどうするつもりだ」

辛辣な言葉に、照れたように笑いクルドバーツは食事を続ける。

領主ヘルベルは、怒りを含んだ視線だけを寄越して二人を見送った。

「モルトの爺様は、とんでもないのを跡継ぎに選んだもんだねえ」

2人きりになってから、艶花のハンナは苦笑した。

「最近見ねえ腹の据わったガキじゃねえか。若い頃を思い出しちま
ったぜ」

ぎらり、と抜き身の刃物を思わせるシロキアの視線。

「まだまだ、血の気が多いねえ……けど切れすぎる懐剣つてのは危
険じゃないのかい？」

「秘蔵つ子の出し方が、急すぎる気もしやがる……モルトの爺、案
外悪いのかもしれないねえな」

ハンナの視線が一瞬鋭さを増し、口元には薄い笑みが浮かぶ。

「だとすると、崩れるかねえ？ 15年以來の腐れ縁」

「爺には悪いが、あの馬鹿領主と潰し合ってもらおうか」

低く笑って、シロキアとハンナは城を出た。

食堂に残ったクルドバーツは、領主を宥めていた。

「全く、彼奴らは立場というものが分かっていない！」

テーブルを殴りつけてまだ食事の入った食器を叩き落とす。

「僕は領主なのだぞ！ ガドリアで一番偉いのだ！ なぜその僕に逆らうのだ！ そうであるうクルドバーツ！」

「仰る通りに御座います。特にあのルカンドとか言う小僧っ！ 領主様を蔑ろにすること甚だしい！」

身振り手振りを加え、クルドバーツは領主ヘルベルの怒りを煽る。

「忌々しい……何かよい手は無いものか」

脳裏に焼き付いているのは、獲物を狙うようなルカンドの視線。そして脅し文句だった。

「炎の運び手と双頭の蛇」

ヘルベルにとって厄介な相手だった。少ない税收の担い手である

炎の運び手と、それを食い散らかす双頭の蛇。

「何かあの小僧に思い知らせる手はないものか……」

ぎりつ、と親指の爪を噛みながらヘルベルは唸った。

「クルドバーツ、そなたは何かよき考えはないか？」

「そう……例えば、あの小僧の大切な者を傷つけてやればいかがでしょう？」

ほう、と笑ってヘルベルはクルドバーツの話に乗ってきた。

「小僧自身が害されたのならともかく、彼の個人的な繋がりがある人物というだけでは、炎の運び手も双頭の蛇も動きづらいのではないのでしょうか？ できれば、二つの組織に所属していない者がいいですな」

なるほど、と頷いて。

「しかし、そんな都合のよい者がいるだろうか？」

疑問を口にした。

「確かにいささか都合のよい話かもしれませんが、調べてみて損は御座いますまい。よしんば居なくとも、我らに損はございません」

なるほどと頷いて、ヘルベルは口の端をゆがませた。

「出来れば、女がいい」

くっ、と発作のように笑う。

「すぐに調べるといたしましょう」

傳くクルドバーツの瞳の奥底で、ちらりと意思の炎が揺れすぐに消えた。

食堂を早々に立ち去ったルカンドは、城門を出たところで大きく息をついた。

「はあ〜」

岩から削りだしたような無骨な城。その頭上に広がる蒼穹を見上げて陰鬱な気分を振り払う。

「ルカ」

陽射しから身を守るように、少女は城門に出来た日陰に身を潜ませていた。

「やあ、サイシャ……ただいま」

力無く笑うルカンドにサイシャと呼ばれた少女は怪訝な視線を寄せる。

「やっぱり、師匠の代理なんて引き受けなければ良かったよ」

弱音を吐く彼を、一瞥すると、同意とも否定とも取れる返事をした。

「ふうん」

「領主にも会ったよ」

二人並んで、城から街へ繋がる道を歩く。

「……どんな奴だった？」

その質問と同時に毒蛇と渾名される盗賊が表に出て来たことに、ルカンドは苦笑した。

意識はしていないが、もしかしたら自分も一瞬にして入れ替わる時があるのかもしれない、と。

「うん、サギリさんやモルトさんとは全く別の人種だね」

サイシャの新緑の瞳の奥に光が宿る。

「興味を持ってもらった所悪いんだけど、多分違うよ」

怪訝そうに、眉をひそめるサイシャに、ルカンドの苦笑が微笑へと変わる。

「サイシャの想像とは、かけ離れていると思う」

彼女の眉間の皺が深くなる。

「僕が睨んだら、怯えていたからね」

怒ってはいた。だがあれは怯えを隠すための擬態だと、ルカンドは見ていた。

「お前、睨めたのか」

サイシャの顔には、あまり見せない純粹な驚きの表情がある。

「睨むさ、僕だって！」

大袈裟に傷付く風を装って、言い返すルカンドにサイシャの視線は好物の食べ物を目の前にした子供のように輝く。

「やってみろ」

声音は相変わらず、静かなものだったが瞳の奥は期待に揺れる。

「サイシャに？」

頷くサイシャ。

「何を期待しているの？」

「いいから、やれ」

「まあいいけど」

減るものじゃないし、とルカンドはヘルベルにしたように、サイシャを見る。

「……ルカ、私を馬鹿にしてる？」

だが、返ってきたのは失望混じりの声。

「大真面目だよ」

ふん、と鼻を鳴らすとサイシャの歩調が速くなる。

「さつさと、行くぞ」

ゆっくりとした下り坂を独りで下っていくサイシャに、ため息をつきながらルカンドは彼女に追いつくため歩調を速めた。

「何怒ってるのさ？」

追い付いたルカンドの、戸惑いの混じる声にサイシャは振り返る。

「……何？」

振り返ったサイシャの思ったより強い視線に、ルカンドは困惑する。

「わからないなら、良い」

それ以上何も言わず、歩く早さを元に戻すサイシャ。

そう、と言ってルカンドは視線を近付いた街に向けた。

「そう言えば、四役が来てたよ」

「今は、三人だろ」

シロキア、ハンナ、クルドバーツそしてモルトを街の四役と呼ぶ。
「分かってるよ」

僕じゃまだまだ、ってことは。その言葉を飲み込んで、ルカンドは話を続ける。

「サイシャはハンナさんと面識あったよね」

確認するルカンドに、彼女は頷かいた。

「シロキアさんは老侠客って言うのかな、貫禄あったし、クルドバーツさんは喰えない感じだったよ」

興味をそそられたらしいサイシャは、肩に掛かる癖のある黒髪の間からルカンドを覗くように見た。

「ロウキョウカクって、何だ？」

うん、と頷いてルカンドはサイシャの新緑の瞳に視線を合わせた。

「侠客って言うのはね、受けた恩を大切にする人達だよ」

「ふうん？」

「受けた恩のために、命を掛けるって所は似てるかもね。サイシャと」

ルカンドの言葉に引き込まれるように、サイシャは歩く速度が遅れだし、自分の頭一つ高いルカンドの顔を見ていた。

「お前は違うのか？」

刃物のように鋭く、急所を付く問い。

「難しいね」

その問いから、ルカンドは逃げ出そうとし。

「……じゃあ、ルカはサー姐やモルトの為に仕事はしないのか？」

失敗した。

「どうだろうね」

困ったように笑うルカンドにサイシャの視線が突き刺さる。

「……ルカは兄妹だ。だから殺さない」

溜め息を吐くと、彼は頷いた。

「けど、敵は殺す」

熱に浮かされたような虚ろな笑みが、サイシャの顔に浮かぶ。

「サイシャ、駄目だよそんな考え方じゃ。敵は殺さないで、利用しなきゃ」

笑みを絶やさず、だがきつぱりと否定するルカンド。

「お前の考えは、難しい」

拗ねたように、ルカンドから視線を逸らしてサイシャは呟いた。

「僕に言わせれば、君達は簡単に殺しすぎるよ」

前を向き、サイシャはルカンドの言葉を考えた。

「そんなことは……ない」

「本当に？」

重ねて問いかけて来るルカンドの銀色の瞳を見返す。

「多分」

「サイシャ、僕は人を殺すのが嫌いだよ」

「知ってる」

頷いたサイシャは、彼の次の言葉に目を見開く。

「人を殺すサギリさんも、ジンさんも、ケイフウも……君も、嫌いだ」

「お前っ！」

「だからさ、なるべく人は殺さないでよ。サイシャ」

足を止めた二人を強烈な陽射しが照らす。哀しげなルカンドの視線と苦痛を押し殺したかのようなサイシャの視線が、絡まって離れた。

「……サー姐に、今のことを」

「言わないよ。サイシャだけだ」

俯いたサイシャに、被さったのはルカンドの声。

「……お前は、我俣だ」

ぶいっと、顔をそらしてサイシャは歩き始めた。

「我俣か」

そうかもしれない、と考えながらルカンドは歩き出した。

賊都 4

その小さい舌打ちは、隣に並ぶ大切な人に聞こえないように。

だが、心に巢食った不愉快な気分はどうすることもできなかった。

「ルカンドさん」

街の雑音の中でもはつきりと聞こえる高く、軽やかな声。呼びかけられる声に、隣のルカンドが顔を綻ばせる。鮮やかな赤い髪、ふつくらとした頬は上品に微笑む。肉付きの良い体は不自由とは無縁そうである。

サイシャは自分とはあまりにも違うその姿を帽子で視界から追い出した。

「サイシャさんも、今日はどちらまで？」

「……城」

ささくれる気持ちを表に出さないように、慎重に口を開いた。ルカンドの視線を感じたが、サイシャは努めて無視を決めた。

「そう、ですか」

「ルクさんは？」

ルカンドの柔らかい声に、心のささくれが大きくなったような気がした。

「私はケイフウの、差し入れです」

手に持ったバスケットを見せるルクの表情は明るい。

「一人で大丈夫？」

気遣うルカンドの声に、サイシャは視線を上げた。

「そんなこと、してる暇あるのか？ 領主に呼ばれたんだろ」

極力ルクに視線を合わせないように、ルカンドを見る。

「僕、あの人苦手なんだよね」

苦笑して、ため息をつくルカンドを少しだけ睨む。

「少し時間もあるし、ケイフウの所に寄って行くぐらいは大丈夫でしょ？」

小さくサイシャに耳打ちしたルカンド。盗み見るようにルクをちらりと見てから、サイシャは今度こそ舌打ちした。無邪気に疑問の表情を浮かべるルクの脇を、通り過ぎ。

「……………先に行く」

「それじゃ、ケイフウの顔を見に行こうかルクさん」

並んで歩く二人に背を向けて、サイシャは城へ向かった。

強い陽の光を、忌々しく思いながらサイシャは城へと至る長い坂を上りきった。

黒い帽子に黒く長い服を引きずるように歩いていたサイシャが、吹き抜ける風に見上げると汗ばむ肌に、風が心地良い。

「……………雨か」

青い空の片隅を侵食するように、黒い雷雲は東の空にあった。

見下ろす街並みのどこかに、ルカンドとルクが二人きりで見ると、思うと焼け付くような焦燥を感じる。舌打ちしたくなるのを堪えて、湿り気を帯びてきた風を露出の少ない肌と、風にたなびく服で感じた。

惨めな嫉妬など、この強い風に吹かれて消えてしまえば良いのに、と心の中で思っただけで薄く眼を見開く。

自分の手を見れば、切り傷や薬の染みで汚れている。筋張った手。肌の色は健康的とは程遠く、顔の作りに関しては言うまでもない。

「……………貴族様か」

奴隷になどならず、ここにも来なければ……………そこまで考えてサイシャはため息を吐いた。

「馬鹿」

自分を罵倒して、緩く頭を振った。あるかないかの僅かな記憶など、頼るに値しない。今の自分には、力がある。頼るべきは毒蛇と忌み嫌われる自分の力。

ルカンドを、ケイフウを、昔救ってくれた恩人を助けていける力だ。

息を吐いて、城の前にいくつもあるゴツゴツとした岩に腰をかけた。瞼を閉じて、周囲に気を配る。風を感じつつ、時間が経つのに任せていたがサイシャは不意に瞼を上げた。

「……遅いな」

ルカンドの笑顔を脳裏に描くと同時に、ルクの無邪気な笑顔も浮かび上がってくる。

忌々しい想像に舌打ちをして、サイシャは眼下に見下ろせる街を見た。

サイシャの新緑の瞳にそれが映ったのは、彼女が街を見下ろしてからすぐのことだった。陽射しを受けて立ち上る陽炎を蹴散らすように、砂煙を上げて疾駆する馬車。

何かに追われるように御者は馬を責め、ひたすら城へ向かってくる。御者は城門の脇で佇むサイシャには目もくれず、一気に城門をくぐり抜けた。

すれ違いざま見えた紋章は、角を振りかざす牡鹿。

領主ヘルベルのものだった。

ガドリアでは馬車は、商人が金持ちしか使わない代物だ。領主が持っているのは不思議ではないとして、何故あんなに急ぐ必要があるのか。

通り過ぎた馬車の影を目で追いながら、サイシャは不吉な予感に眉間にしわを寄せた。

「それにしても……」

通り過ぎた馬車の事を一旦脇に置き、サイシャは再び眼下の街を見た。随分ゆっくりと歩いてきた筈なのに、ルカンドは姿すら見せない。

ルカンドがルクに甘いと思うが、領主との会見を放り出すよう

な事はしないはずだ。

「迎えに、行くか」

自分に言い聞かせるように呟いて、サイシャは登ってきた坂道を引き返した。

取り敢えずケイフウの所だろうか、と街に戻ってきたサイシャが目指したのは、色町に程近い酒場だった。

迫り来る人並みを縫うようにして、酒場へ向かう。中天にあった太陽は西へ傾きはじめ、東にあった雷雲は薄い手を伸ばし始めていた。

剥き出しの地面がたてれば砂ぼこりを避けるように、サイシャは目的の店に体を滑り込ませた。

「いらつしゃい」

石と木で出来たカウンターの向こう側から、不景気な声で出迎える店の主。中年に差し掛かったその男に声を掛ける。

「ケイフウは？」

「さつき、赤毛の子が迎えに来てたよ」

まだ契約の半分だったのに、とボヤク店の主にサイシャの視線が鋭くなる。

「それ、いつ頃？」

「あゝ少し前さ」

邪魔した、と店を出るサイシャに店主から声がかかる。

「そう言えば、随分焦ってたみたいだが、痴話喧嘩なら程々にな」

下卑た笑いとその言葉を黙殺し、サイシャは店を出た。いやな予感だけがどンドン胸に広がる。

苛立つ心のままに、足元の小石を蹴飛ばした。

「……城へ行ってみるか」

もしかしたら全部自分の勘違いで、何事もなくルカンドは城にいるかもしれない。またあの坂道を上るのは憂鬱だが仕方ない、とサイシャは一つため息をついた。

遠くに見えたはずの雨雲は、既に頭上で厚さを増し空は暗くなっていた。

モルトの鍛冶屋の前、土砂降りの雨に濡れてサイシャが立っていた。結局、城では門前払いを食らいサイシャは心当たりの最後となるモルトの店にいた。

入れば静まり返った店の中、いつもある熱気が微塵も感じられな

い。

何かが起こったのだ、と思いながら雨に濡れた足を進めていく。

「誰か、いるか？」

慎重に声を出す。服の裏に仕込んだ小剣に手を伸ばしながら、奥を伺う。奥で息を潜めたような気配に、意識を研ぎ澄ます。

ガタリ、と音が聞こえた。

瞬間、サイシヤは奥へ続く通路を駆け抜けた。潜んでいた者を壁に押し付け、首筋に小剣を突き付けて。

「…………お前、何してる？」

目の前で、張り付けられているルクに問い掛けた。

「サ、サイシヤさん…………！？」

姿勢はそのままに、サイシヤは目を細めた。

「ルカは、ケイフウは？」

ルカとケイフウの名前を聞いた途端、ルクの双眸からは大粒の涙が流れ落ちる。

「泣くな、ルカとケイフウはどうした？」

荒れ狂う感情を押さえ込み、無表情を装ってサイシヤは詰問する。嗚咽混じりに答えるルクの返事に、サイシヤは目の前が真っ暗になった。

「ルカが、さらわれた…………？」

構えていた小剣が、床に落ちた。

「ごめん、なさい…………」

その言葉に、サイシャの真つ暗な視界が、炎よりも赤い怒りに塗り替えられる。

「お前……お前のせいなのか!？」

ルクの白い首筋に肘を押し当て、苦しげに歪むその顔を睨み付ける。

「サ、イシャ、さん」

抵抗せず、次第に青白くなっていくルクの顔色を睨みながら、サイシャは荒い息を吐き出していた。

「ルク！」

その声と共に、彼女を押しさえ込んでいたサイシャにケイフウが飛び付いた。

「くっ!? どけ、ケイフウ！」

腰にしがみついたケイフウを振り解こうとしているうちに、ルクは体を折り曲げる。そして、喉を押しさえて激しく咳き込みむせる。

「サイシャ! 落ち着いて」

ケイフウはいつもの笑顔を消していた。雨に濡れたケイフウはサイシャには涙を流しているように見えて、膨らんだ怒りが萎えて行くのを自覚しないわけにはいかなかった。

「……ケイフウ、ルカは？」

何とか平静を取り繕いサイシャは答えを求めた。

うなだれ黙って首を振るケイフウに、萎えたはずの怒りが頭をもたげる。

噛み締める歯ぎしりの音が聞こえそうなサイシャは、だがその怒りを抑え込み息を吐き出した。

「……で、やったのはどいつだ？」

横目で、ルクを伺いケイフウは再び首を振った。

「……じゃあ何か、お前はルカがさらわれたのを目の前で見てながら、何もわからず自分可愛さに逃げ回ってただけなんだな！」

深緑の瞳が、ルクを捉え堪えきれない怒りに揺れる。

「サイシャ、ルクが可哀相だよ」

悲しげに呟いたケイフウにサイシャは視線を向けた。

「可哀相だと？ コイツとルカのどっちが大事なんだケイフウ！」

ルクを指差して、叫びケイフウに詰め寄る。

「それは……」

俯くケイフウに、サイシャは塗れた黒い帽子をくしゃりと握り締め、叩き付ける。

「もう、良い！ ルカは私が助けるっ！」

心の奥の何か大切なものに、ひびが入ったような悲しさが、サイシャに怒りを覚えさせる。手負いの獣のように荒い息を吐き出し視界に入る全てを睨み付ける。

「サイシャー！」

「サイシャさん！」

呼び止める声さえも、不快な雑音に感じつつサイシャはモルトの店を出た。

降りしきる雨の中、向かったのは自分たちがよく使うアジトのひとつ。

雨に濡れた衣服を構いもせず、サイシャは寝台の下から得物を取り出す。小瓶に詰められた毒薬と、何本もの小剣、小道具。それを黒いローブの裏側に仕込み必要ないものを片付ける。

「さて……」

見渡した部屋の中、そこはどこにでもルカとケイフウの思い出があった。不意に、胸を締め付ける思いにサイシャの視界が曇る。

「ルカ……無事だよな？」

両手で持った小剣に縊るように、握り締める。

「どんなことをしても、お前を取り返してやる」

少しだけ、サイシャは泣いた。雨に濡れた頬に、熱い涙が伝う。その涙を振り切って、サイシャはアジトを出た。

賊都4（後書き）

寝ぼけて投稿してしまい、後で見返したら所々おかしい部分があったので修正いたします。既に読まれた方には、まことに申し訳ありませんでした。

賊都5

向かったのは色町一の格式を誇るハンナの店。

時刻は西の空に黄昏が迫る頃、色町は次第に目覚めようとしている時だった。降り続いた雨も上がり、西日が街全体を包み込む。

店が軒を連ねる表通りから、少し裏へ入った路地に柄の悪い者達があたむろしている。彼らは、いくばくかの金と引き換えに、質の悪い客の相手をするゴロツキどもだった。それは、ハンナの店とて例外ではない。店の裏手に寄り集まり、短剣を研ぐ者、簡単な博打に興じる者などその数は六人を数えた。

最初に気付いたのは、短剣を研いでいたゴロツキだった。先刻までの雨でぬかるんだ地面、だがそれを踏む水音を全くさせず、差した影に視線を上げる。

一見してそれは子供だった。雨に濡れた重そうな服を引きずった小柄な体躯。目深に被った黒い帽子は表情を隠し、体の凹凸を隠す服と相俟って性別の判断を付けがたくしていた。

かろつじて濡れた黒服の胸にあるわずかな膨らみで、それが少女なのだと当たりをつける。

「……おい」

少女が発したのは感情を伺わせない声。その物言いは、炉端の犬に話しかけるようなぞんざいなものだった。

「なんだ、てめえ」

研いでいた短剣を少女に突き付けドスの聞いた声を出す。刃物をちらつかせて脅せば、逃げるにせよ、泣き出すにせよ、すぐに反応があると期待したゴロツキの予想は、容易く裏切られた。短剣を

突き付けられた少女は、まるでそれが見えないかのように平然と言葉を次ぐ。

「店に、ジルはいるか？ いたらすぐに取り次げ」

傲然と自分達の飼い主を呼び捨てられ、黙っていられるほど、そのゴロツキは気が長くなかった。

普段なら、少女相手に刃物を振るうなど多少は躊躇うはずの行為を怒りが後押しする。振りかぶり、目深に被った帽子の鍔目掛けて短剣を振り下ろす。

殺すつもりなどは最初からないが、脅しとしては充分な一撃。だが、その脅しが少女の帽子に届くより先に、少女は服の下から抜き出した小剣を一閃した。

「ぐつうあぁ！」

掠っただけの一撃がゴロツキの全身に耐え難い痛みと、痺れをもたらした。叫び声を上げて、地面に崩れ落ちる。崩れ落ちたゴロツキが、転がった地面から見上げた少女は、一瞬だけ視線を合わせた後、博打を打っていた仲間の元に向かって歩き出す。

博打を打っていたゴロツキ共は、既に手に刃物を持って少女を取り囲んでいた。

「……ジルを出せ」

手にした小剣を、鞘に収めて少女は要求する。だが、ゴロツキ達は既に仲間をやられ、少女を取り囲んでいるのだ。引き下がる理由も、必然性もない。

「ふざけんな！」

一喝と共に降りかかってくる短剣をかわすと、少女は鞘から小剣を勢い良く抜き放つ。

その拍子に、ゴロツキ共の顔に水滴が当たる。雨は既に止んでいたが、先程までは降っていたのだ。何かの拍子に、水滴が当たっても不思議ではない。

問題は、その水滴が当たったゴロツキ共が、呆気なくその場に昏倒してしまったことだ。

「な、なんだ!？」

怯えた声を出したのは、幸運にも水滴の被害に合わなかったゴロツキだった。少女は止まらず、倒れているゴロツキを踏み越えて店の方に足を進める。

その少女が一步近づいて来るたび、残ったゴロツキは追い詰められる。

まるで、断崖絶壁の上に追い詰められたかのような後のない恐怖。その恐怖に耐えられなくなり、自暴自棄の反撃にでようとしたゴロツキは背後から聞こえた声に動きを止めた。

「なにやってんだい」

明るい声に、ゴロツキとサイシャの視線は自然と吸い寄せられる。

「姐さん!」

助けを見いだしたような切羽詰まった声に、銀色の髪を結ったジルは苦笑する。手には煙管を弄び、煌びやかな着物の上から透き通る羽衣を纏っていた。

「……ジル」

サイシャが鰐広の帽子の奥から、妖艶な出で立ちのジルを見据える。

「サイシャ、良く来たね」

ゆったりと微笑みながら、視線はサイシャの手元の小剣と鞘に吸い込まれる。

「取り敢えず、中に入りなよ」

煙管で店を指差し、まだ健在なゴロツキに声を掛ける。

「すまないねえ、あたしの知り合いんだけど変わり者でね」

懐から幾許かの金を出しゴロツキの手に握らせる。

「これで好きなお酒でも呑んでおくれ」

ずっしりとした手の中の重みに、ゴロツキはジルと金を見比べる。

「昏倒している奴らには、水をなるべく多めにね。そうすれば明日には良くなるから」

言い含めて、ジルはサイシャを伴って店の中に消えた。

「なんとということをしてしまったのです!」

悲鳴に近いクルドバーツの声が、薄暗い地下牢に響き渡った。

「少し、平静になれ」

彼の隣で落ち着き払っているのは、城の主ヘルベル。

見つめる視線の先には鎖で壁に繋がれ、痛めつけられたルカンドの姿があった。

「双頭の蛇と炎の運び手を正面から敵に回すつもりですか!？」

落ち着いてなどいられるはずがない。炎の運び手が敵に回れば、クルドバーツは不利益を導いたとして連盟の代表を追われるのは確実だし、もっと悪いのは双頭の蛇だ。

彼らが現れる数年前まで、荒地を支配していたのはデイドと呼ばれる狂人もだ。異常食欲の塊のような奴らは、荒地を渡る商人達の天敵のようなものだった。出会えば、商品どころではなく自身まで喰われてしまう。

どこから湧いて来るのか一向に数が減らない奴らに、優れた統治者だった前の領主さえ匙を投げたのだ。

それを、双頭の蛇は駆逐しつつあるという。現に連盟に上がる被害は減少しているし、それに変わる盗賊の被害はあるが極々少ない数だ。

双頭の蛇を束ねるあの女。黒い髪のスギリ。クルドバーツは荒地の魔女だけは敵に回したくなかった。

「お考え直してください。危険すぎます」

クルドバーツとしては、釘を刺しておきたかっただけなのだ。荒地から勢力を伸ばし、ガドリアを飲み込もうとする双頭の蛇。また、

その武力を背景に街での地位向上を狙う炎の運び手。

それを領主の勢力とぶつけることにより、双方の力を割く。小さな反目程度で十分。その隙にこそ乗じる機会があるというもの、全面的な抗争など望んではない。

「何を恐れることがあるのだ、蛇など高々二十名程の集団なのだろう?」

貴様の父親が、街の協力と二百の兵を率いても討伐出来なかったデイド共を追い詰めている奴らだぞ! 心の中で罵倒し、クルドバーツは一瞬だけヘルベルを睨んだ。

「それに、もう解放などしても無駄であろうよ」

神経質そうな細い眉を釣り上げて、発作のように短く笑う。

「どついうことですか?」

「何せ、僕自身が懲罰を加えてやったのだからなあ。例え解放されたとしても……」

手遅れ、という言葉がクルドバーツの脳裏を掠めた。

じやら、という重い硬質な音が牢の中から聞こえ、クルドバーツはハツとして視線を向ける。

「目を覚ましたか? 薄汚い蛇め」

心底見下し、口元には淡い笑いを浮かべたヘルベルがルカンドに問いかける。薄く目を開いたルカンドは領主とその隣にいるクルドバーツを視界に収めた。

そのルカンドを視線を合わせたクルドバーツは、踏みしめているはずの石の回廊の感覚が消え失せて行くような気がした。太った体躯を縮めるようにして、申し訳なさそうにクルドバーツはルカンドを見る。そして視線を巡らせ、ヘルベルを見た。

いつそ、この男を毒殺してしまおうか。

脳裏に浮かぶのは、前領主を毒殺した記憶。ここにいる、ヘルベルと謀って……。

打算と保身、天秤に架けるのは危険と対価。

目まぐるしく回転するクルドバーツの脳裏を知ってか知らずか、ヘルベルはクルドバーツに笑いかける。

「何を恐れているのだ、僕の父を殺した大逆の罪人がこんなところで怖気づいてしまったては困るなあ」

引き攣る笑みをクルドバーツは、ヘルベルに向けた。

「お戯れを、仰いますな」

「戯れなどではないぞ」

にこりと笑うヘルベルに、クルドバーツは背筋が寒くなるのを感じる。

「お前が僕を裏切るなら、処刑にするなど……うん？」

首をひねって、ルカンドを見つめるヘルベル。

「おお、そうだ！ 処刑だ」

まるでとっておきの遊びを思い出したかのようなヘルベルの嬉しげな声。

「は？」

要領を得ない彼の言動に、クルドバーツは首を傾げた。

「処刑よ、この薄汚い蛇を大々的に処刑して、老いぼれやアバズレ女への見せしめとしようではないか」

「なっ……」

クルドバーツは言葉を失った。無謀などというものではない。破壊への道突き進んでいるとしか思えないヘルベルに、クルドバーツは感じたことの無い種類の恐れを感じた。

「はは、そうと決まれば布告を出さねばな」

嬉しげに石畳を踏みしめる音が、地下牢に響く。階段を上っていくヘルベルの背を見つめ、牢の中のルカンドを一瞥し、クルドバーツはヘルベルの後に続いた。

「……なんのつもりだ？」

サイシャは周囲を見渡してジルに声を掛けた。通されたのは店の地下。上では華やかな女性達が客の懐を巻き上げようと笑みを撒き

散らして居るはずだ。

草が甘い蜜で虫を誘い捕食するように、その内分では華やかさとは無縁の装飾のない石造りの壁がサイシャを出迎えた。

「なんのつもりだった？ それはこっちの台詞でしょうが！」

薄暗い地下室に、蝋燭の灯がジルの吐く息に揺らめく。

「あたしの雪華に何するんだい。あんなのでも、役には立つんだ」

苦笑とも取れる薄い笑いをジルは漏らしたが、サイシャは応じなかった。

「ルカが攫われた」

目深に被った帽子の為に、サイシャの表情はわからなかったがその声は震えていた。ただジルにはその震えが、サイシャの悲しみから来るものなのか、怒りから来るものなのか判断が付かなかった。

「……そう、で？」

サイシャが訪ねてきた理由を察してはいたが、敢えてジルはサイシャが口にするのを望んだ。

「知っていることがあれば教えてほしい……頼む」

「あんたが、あたしに頭を下げるなんてね」

ジルは気付かれないように小さく息を吐いた。

「……けれどそれだけじゃダメだ。情報がほしけりゃ、対価を払いな」

顔を上げるサイシャにジルは厳しい表情を崩さなかった。

「金か？」

噛み締めるように、唾棄するようにサイシャが言った。

「ああ、そつだよ。もしくはほしい情報と釣り合うような情報でも良い」

グツとサイシャが、奥歯を噛み締める音が聞こえてきたような気がジルにはした。

「……金は、ない」

「なら」

「情報がある」

顔を上げたサイシャと、ジルの視線が交差する。深緑の瞳に宿るのは、狂気に似た熱情。

「……ツラド家の遺児の行方」

ほう、と息を吐くジルは脳裏でその価値を考えた。

「ル力を攫った奴の値段と釣り合うか？」

淡々と告げるサイシャに、ジルはそれが嘘の情報ではないのだと
考えを固める。

「そうさね、まあハンナの女将さんに目通りするぐらいには価値が
ありそうだよ」

にんまりと笑うジルに、サイシャは無言で頷いた。

「それじゃ、女将さん呼んでくるからここでしばらく待ってなよ」

ルカ。私がお前を助ける。誰を裏切っても、何を犠牲にして
もだ。

心の中で自分の覚悟を確かめ、サイシャはジルに気づかれぬ様に
小剣を握り締めた。

賊都6

乾ききつた大地に、荒い風が吹きすさぶ。

砕けた岩、どこまでも続く鉛色の空が遠く見える境界の山脈まで続いていた。潤いを忘れた大地には背の低い枯れ木が点在するばかりで、目を楽しませるものは何もない。

およそ、人が生きるには不便しかないような場所で響いた声は地を揺るがす怒声と断末魔の悲鳴だった。

「オオオオオオオ！」

獣の咆哮が迸る。襪褌布を巻きつかせただけの巨躯、手にするは無骨な造りの。だがそれゆえに実用のみを考えられた戦斧。

吹きすさぶ風を掻き切るように振り下ろされたその先に、黒い髪を靡かせた女が立っていた。

振り下ろされる凶器を迎え撃つように、無手の左腕を振り抜く。

それだけで、岩をも砕くはずの凶器は強大な力に横から弾かれた。

「グウオオ！？」

理性を感じさせない赤い瞳。それを女に向けて、弾かれた凶器を再び振るおうとする。だがそれは女が何気なく突き出した右手に遮られた。

握られていたのは、磨きぬかれた短剣。だが、それ自体が巨躯の男の動きを止めたのではない。それが男を刺し貫くには、遙かには距離が足りない。その短剣を覆う見えない何かを男を刺し貫いていた。崩れ落ちる巨躯の男を確認すると、女は口元を僅かに弦月に歪ませた。

「……38匹」

黒曜石のように光る瞳を転じて周囲を見渡せば、連れが未だ獣どもを駆逐している最中だった。

全身を駆け上げる熱。それを意識的に集約させ、脳裏に形作りしは精密な刃の造形^{かたち}。目に見えるほどに、描いたその刃を全身を駆け抜ける熱と混ぜ合わせ体の外に放ってやる。

吹きすさぶ風を割って、それは敵を押し潰す。悲鳴と臓物を撒き散らした敵は、崩れ落ち鼓動を止める。周囲を見渡せば、未だに敵意を剥き出しにするデイド達が手にした武器を振り上げて向かってくる所だった。

自然と緩む口元からは、凶暴な感情が吐息とともに流れ出していた。

「グウギヤアア！」

背後で獣じみた悲鳴が起こる。気配を感じていたよりも、遙かに近い距離に振り返れば黒髪を靡かせた女が不敵な笑みを浮かべて立っていた。

その女の背後には、無残に切り裂かれたデイドの姿。

「ジン」

吹きすさぶ風さえも従えるように悠然と。だが荒々しいその場を統べるに相応しい暴の威風を伴って黒髪の女　サギリはジンに歩み寄った。

「さつさと片付けるよ」

岩場を駆ける鹿のような軽やかな動作で、ジンのすぐそばを駆け抜け、囲みを作るデイドに向かう。降り注ぐ一撃を当然のようにすり抜け、敵に見舞うのは必殺の一撃。

上がる悲鳴と同時に、デイドが崩れ落ちた。

「
ああ」

眩しそうに、目を細めてからジンはその後姿を追った。

「まったく、ちつともまともなもんがない」

干し肉を噛み千切ろうと歯を立てながらサギリは愚痴をこぼした。周囲よりは一段高い岩の上、眼下に見下ろすのはデイド共の死屍累々とした有様だった。

「ここんところ、狩りすぎちまったかねえ？」

どう思う？ と岩に背を預けて小太刀の手入れをしているジンに問いかける。

「さあ、な」

気のない返事に、サギリの舌打ちをした。

「チツ……まあいいさ。それより勝負の内容は忘れちゃいないだろうね?」

「負けたほうが、秋春亭の料理を奢る」

ガドリアにある高級宿秋春亭。そこ、料理を思い出してサギリは鼻を鳴らす。

「ふふん、アタシはさっきので45匹まで伸ばしたけどねアンタはどうなんだい?」

自信に満ちたサギリとは、対照的に苦虫を噛み潰したようにジンの表情は暗い。

「……言いたくない」

「おやく? 早くも敗北宣言かい?」

ジンは口をへの字に曲げて、手入れの終わった小太刀を仕舞い、視界からサギリを追い出す。何も言わないジンに、サギリは執拗に攻撃を加えていた。やがてそれにも飽きたのか、サギリは息を吐くと、鉛色の空を見上げた。

「あー……腹減ったし、そろそろねぐらに戻るかあ」

心底やる気を感じられないサギリの言葉に、ジンも賛成する。

「そうだな」

昨晚からずっと、ディードどもを追い続けて来たのだ。疲労も眠気も、限界を迎える前にねぐらに戻った方が良くと考えジンが立ち上がる。

「よつと！」

立ち上がったジンの背に、ぶつかるといっていいほどの圧倒的な重量。

何だ！？

一瞬何もかも忘れ地面に倒れこみながら、それでも後ろを振り返ろうとしたジン。黒くふさがれる視界に、混乱はさらに深くなり、無様に地面に前のめりに転ぶ。地面につく両手、視界は一気に地表へと移り、咄嗟に腰の小太刀に伸ばした手が柔らかい何かに当たる。肩から、垂れるのは自分のものではない長い黒髪。

「……………おい」

怒りを押し殺した静かな口調で、背中に乗っている暴君に声をかける。

「なあに？」

甘い吐息がジンの耳朶をくすぐり、首に回されるのは細く白い腕。腰の辺りに撒きついてるのは、しなやかな足。くすぐすと笑うその声に普段は感じない艶めかしい女を感じる。

「なあに、じゃねえだろうが！？ 重いんだ、降りろ！」

ジンは背中に感じる女の体を、敢えて無視して声を荒げた。

「なんだよ、せっかくアタシを背負って行く素晴らしい役目を与えようとしたのに」

首に巻きついた腕を引き離し、背中に乗ったサギリを追い払う。

先ほど感じた濃密なほどの妖艶さは息を潜め、悪戯っぽく黒曜石のような瞳を光らせたサギリが不満の声をあげる。

「疲れてんだよ」

そっぽを向いて、歩き出そうとするジンに。

「やれやれ、アタシ一人背負えないようじゃいつまで経ってもアタシより強くなんて、なれないんじゃないのかね？」

地面に座り込んだまま、じゃれ合いに似た安い挑発を投げかける。

「うるせえ」

拗ねたように口を尖らせたジンは、一人で歩き出す。

「さっさと、戻ろっぜ」

背を向けたままジンはサギリに声を掛けた。手をさしのべることは無かったが、その背はサギリが来るのを待っていた。

いつの間にか、自分よりも大きくなってしまったジンの背中を眺める。

殺すか殺されるか、それだけの関係だったはずなのに、いつの間にか淡い絆のようなものが出来始めている。

妙にくすぐつたいそれに、サギリはくすりと微笑みを返した。

寄り添った岩の隙間に手を加えたねぐらにサギリとジンが戻ったのは、辺りに夜の帳が降り始めた頃だった。

連絡の為の鳥がいるほかは、藁の寝台があるだけの簡易なねぐら。乾燥した食糧を僅かに持ち込み、10日から20日に掛けてデイド共を狩るのがサギリとジンの日課だった。

「寝るか、寝る、寝るぞー……」

ぶつぶつと独り言を呟きながら、サギリは藁の寝台に倒れ込む。

「あー……ジン、アンタも寝る」

倒れたまま手招きして、ジンを招き寄せると手の届くところで、一気にその体を寝台に引き込む。倒れるように寝台に入ったジンの腕を枕代わりにして、サギリは深い夢の中へ堕ちていった。

ばさり、と鳥の羽ばたきの音がする。

まどろみの中にいたサギリはその音に、睡魔からの覚醒を促された。

「……んっ、くそ」

目蓋を手の甲で擦りながら、体を起こす。気だるい体に悪態をつきながら、連絡のための鳥が巣を作っている場所へと向かった。

止まり木の上で餌を啄ばむ連絡用の鳥。その足元には小さな筒とそれに収まる程度の便箋びんせんが入っている。欠伸をかみ殺してその便箋を広げてみれば、書かれてあるのはガドリアの混乱とルカンド誘拐

の一報だった。

「何かあったのか？」

食い入る様に便箋を見つめていたサギリの後ろから、寝台から起きて来たジンが声をかける。

「ああ、ちょっと嬉しいことになってるみたいだよ」

便箋を一瞥して、ジンの眉間には深いしわが刻まれる。ジンが便箋に視線を落としている間に、サギリは投げ捨てるようにして置いてあった荷物をまとめ黒い外套を身に付ける。

「ジン、さっさと支度しな。ガドリアへ魔女の帰還と行くつじやないの」

くすり、と笑うサギリに焦りの色はない。どこかその事件を楽しむかのような余裕を持って、彼女は荒地の奥から身を翻した。

「汚い所で悪いが、しばらくはここを使ってくれ」

時折混じる咳に悩まされつつ、モルトは普段使わない部屋の一室を開けた。仕事場では傷跡の残る上半身を惜しげもなく晒す彼も、病床の身にあっては薄手のチュニックを纏うだけ。鋭い眼光は未だ

衰えは見せないものの、その中にある光はいつもよりも弱い。

「……ありがとうございます」

深々と頭を下げるのは、鮮やかな赤い髪をしたルク。声に力はなく疲労の色は隠すべくもなかった。

「ルク、少し休むと良い」

頭を下げるルクの横から、頭ひとつ小さいケイフウが心配そうに声をかけた。

「うん、ありがとう」

痛々しい笑みをケイフウに向けて、彼女はその部屋へ入っていった。

229

「それじゃお言葉に甘えます。大事なときにごめんなさい私だけ……」

「今はゆっくり休みな」

幾分か和らいだ眼光のモルトが、声をかける。

「ケイフウ、外に居るからね」

真摯に見上げてくるケイフウに、頷きを返してルクは部屋へ下がった。

彼女が重い扉を硬く閉めると同時に、モルトは深いため息をついた。

「まったくどうなってんだ。おちおち寝てもいられねえ」

「ごめん」

しゅん、と叱られた子犬のように項垂れるケイフウ。

「ま、お前さんの所為じゃねえんだろうけどよ。ルカの奴は攫われ、サイシヤは行方知れず、おまけに四役の連中と城のボンボンがきな臭いと来たもんだ」

深く息をついて、軽く咳き込む。

「何がなにやら、さっぱりわからねえな」

「うん……」

それに、と言い置いてモルトはルクが消えた扉を睨む。

「あの娘だ。今回の件とは関係ないにしても、隠し事がありそうだな」

「ケイフウ、わかんないけど……ルクのこと好きだよ」

その答えにモルトは苦笑をもらす。およそ彼の知るどんな盗賊とも似つかないこの少年。彼の腕を知っているはずのモルトでさえ、時々盗賊であるのかすらも、疑ってしまう。

「まあ、とりあえずお前さんとこの親玉に連絡は付けておいた。とりあえずは静観しつつ情報を集めにやなるめえよ」

「くり、と頷くケイフウ。

「お前さんところの若いのを使って、うちの奴らに連絡を付けても
らえるか？」

唸りながらも、頷いたケイフウ。

「それじゃ頼むぞ」

「うんっ！」

脱兎のごとく駆け出して、ケイフウは彼の手下の元に向かう。

それを見届けてから、モルトは激しく咳き込んだ。口に当てた手
には、滲む血。

「炎の運び手のモルト様も、そろそろ年貢の納め時ってか……？」

不治の病。

散々あくどいことをやってきたのだ、死ぬ覚悟はできている。だ
が、と諦めそうになる思考に歯止めをかける。

「まだ、死ねねえだろう？」

自身の吐き出した血痰に問いかけるように、咳く。老いさらばえ
たこの体だが、まだまだ若い奴らの為にかかできるはずだ。いや、
しなくてはならない。

こんな所で簡単に病で死ぬなどと、そんな安易な死に方が赦され
るほど自分はまともな人間ではないのだ。

口の端についた血を腕で乱暴に拭いながら、モルトはルクの部屋

の前を離れた。

サイシャが一人城へ向かったとの報せがもたらされたのは、それなら間もなくの事だった。

領主の城へ続く道。日は既に落ち、周囲は暗闇と吹き荒れる風が支配する。領主の城の門にだけ篝火が焚かれ、闇の中にぼんやりと浮き出ている。その城門に掘り込まれているのは、炎に照らされた領主の紋。

「角を振りかざす牡鹿……」

その道をゆつくりとサイシャは登る。心に吹き荒れるのは、耳に入る音など漣にすら感じられない程の暴風。思い出すのは、すれ違ったあの馬車。

この世の全てに悪意を向けるかのような暗く、深い眼差しを城へ向ける。ハンナの元で得た情報だった。ルカンドを攫ったのは二頭立ての馬車、紋章は振りかざす牡鹿の紋。

ぎりっ、と音がするほどに奥歯をかみ締める。

「ルカ……」

サギリのものであるはずの、ルクを売ってまでも手に入れた情報。良くて叱責、悪ければ殺されても文句は言えない。

それでも、サイシャは引き返すことができなかった。

闇に溶けるような黒衣を纏い、黒い鍔広帽子を被る。ゆつくりとした足取りは、あふれ出しそうな感情を抑えるために。

登りきった坂の上、漆黒の闇にそびえる城門とそれに守られた城郭を見上げる。風に飛ばされないように、帽子の鍔を押さえ目を見開いて、自身の敵を見定め足を踏み出した。

賊都6（後書き）

ユニークが1000HITしていました。

拙い小説ですがご覧になられた方には、ありがとうございます。

週一のペースを守れるように更新していきますので、どうぞよろしく
お願い致します。

賊都7

「何者か！」

上がる誰何の声に、サイシャの気持ちは城門から二人の門番に吸い寄せられる。

「……誰にもやらない。私の姉弟」

かがり火に照らされた焦点の合わない視線、虚ろに呟かれた言葉に、怪訝に顔を見合わせる門番。それに関知せず、サイシャは宣戦を布告した。

「……ルカンドを、返してもらおうぞ！」

言葉と同時に投擲する小剣が門番の頬を掠める。苦悶の声を上げる同僚を一瞬だけ振り返った門番の一人は、足に感じる熱に視線を転じた。

自分の太ももに生えた異物 鋭利な刃物が突きたっているのを目撃する。反射的に喉の奥から悲鳴がもれそうになり、だがそれが出来ないことに気付く。

突き立ったその瞬間から、体内を侵蝕する毒。それが見えない腕で、敵を締め付けるかのような効果を發揮する。

門番の二人は悲鳴すら上げることなく、その場に崩れ落ちた。倒れた門番から鍵を奪いサイシャは城内へと、侵入を果たした。

「なんだと!？」

サイシャが一人城へ向かったとの報せに、モルトは驚愕を隠しきれなかった。病床にあるのも忘れて手下を怒鳴る。報せを入れてきたのが雪華のジルと言うことだったのが気になるが、サイシャが城へ向かったのが事実ならば静観しておける状況ではない。とにかく急がなければサイシャが危ない。

「ケイフウを呼べ。サイシャの居場所が分かったってな」

手下に指示を出してから、モルトはルクのいる部屋に向かった。モルトだと、声を掛けてから部屋の中に入る。赤く腫らした目元から、彼女が泣いていたのにモルトは気付く。

だが、それをはねのけるように背筋を伸ばしてモルトを出迎えたルク。そんな彼女の態度の中に、否が応でも気品と言うものを、感じずにはいられない。

「サイシャの居場所が分かった。おそらくは、ルカンドもいるのだろっ」

黙って頷くルク。

「ケイフウを借りていく」

「はい」

厳しい表情を崩さずに、モルトは告げた。

「心配せんでも、奴らを殺すような真似はせん。必ずつれて戻ってくる」

突き放したような、だけど温かい言葉に亡き父を彼女は思い出した。当時は冷たさだけを感じたものだが、亡くしてしまった今更それを感じる。

「はい、モルトさんもう無事で」

凜とした言葉に、僅かにモルトは笑った。不安で押しつぶされそうなはずの少女が、自分の無力感と毅然と戦っている。生まれの差とは思いたくない。彼女自身の強さだとモルトは思うことにした。

強く頷いて、彼は部屋を出る。帰って来たケイフウに事情を話しサイシャとルカンドを救い出す為に城へ向かった。

モルトとケイフウがルクの潜む家を出たのを、ジルは見張りの報告から知った。

「こつも単純だと、仕事が楽で良いねえ」

その報せを聞いてジルは物語に聞く淫魔のように笑う。率いてきた雪華の手下に声を掛けてルクの隠れている家へ向かう。

「行くよ。金の卵を捕まえにさ」

いつものように艶やかな衣装を纏い、結い上げた銀の髪は糸のようにさらりと夜風に流れ、手には細工も見事な煙管を弄ぶ。率いてきた手下の数は30を越える。それぞれ得物を手に、凶悪な表情を並べていた。

色街と異なり、鍛冶屋が軒を連ねるこの辺りの夜は早い。既に灯

りがある家の方が少ない街並み、青白い月光が襲撃者達の横顔を照らしていた。

どうしてこうなってしまったのだろうか。ルクは与えられた部屋で物思いに沈んでいた。思いは胸の中で堂々巡りを繰り返し、出口を見つけられそうに無かった。

「こんばんは」

硬質な扉をたたく音と共に聞こえてきたのは、聞き覚えのある明るい声。

「ジル？」

「あつたりい」

酔っ払ったかのように陽気な返事が、扉の向こう側から聞こえる。

「開けてくれる？」

「うん……」

ルクは嬉しかった。ここで一人でいるよりは、いつでも明るいジルと一緒にでもいた方が気が紛れると思ったからだ。

扉を開けた先には、酒瓶を片手にジルが立っていた。

「あら、今一人？」

「うん、ちょっとね」

部屋に上がるとジルは遠慮なく寝台に腰掛け、テーブルを引き寄せる。

どこからともなく取り出した二つのグラスに、並々と注がれる深紅の液体。

「私お酒なんて……」

「まあ、そう言わずに」

ルクの抵抗をなし崩し的に排除して、彼女にグラスを握らせた。

「たまには、必要なものよ。大人のたしなみね」

一人納得して、ジルは頷く。断り辛い勧めに曖昧に頷くと、ルクは一気にグラスを煽った。

途端に噎せるルクの姿にジルは声を上げて笑った。

「あははは、ルクお酒はもっとゆっくり飲みなさいよ」

心底楽しそうに笑いながら、目尻の涙を拭う。

「ジル、もしかしなくても酔ってる？」

冷静に見れば、酒瓶の中身が注いだ分を差し引いても、何やら少ない気がする。

「そんなわけないでしょ」

にんまりと笑いながらグラスを煽る。

「……あれ？」

くらりと、ルクの視界が揺れる。霞がかかったかのように考えがまとまらず、床を踏みしめているはずの足は羽毛を踏んでいるように頼りない。

床に膝をつき両手を支えに、なんとかジルを見る。

「私、どうして」

「あら、酔っぱらっちゃったのね」

ルクの姿を見てもジルは全く動揺しない。むしろ当然だと言わんばかりの態度をとる。

「よ、うっ」

初めて酒を口にした彼女。一気に襲い来る臉の重みと、呂律の回らない事態に陥っても、そう言ったものかと考えてしまう。

「心配いらないよ、少し寝て起きれば良くなるからさ」

コクリと頷き、ルクは崩れ落ちた。

「ごめん、ね……ジ、ル」

「なあに、気にしなくていいさ……謝るのはお互い様だからね」

自身のグラスに残る酒を緩やかに飲み干し、崩れ落ちた彼女に意

識がないのを確認して、ジルは手下に彼女を運び出すように命じた。

『人を殺すのは嫌いだよ』

脳裏に響くルカンドの声に、サイシャは舌打ちする。周囲には鎧を纏った城の兵士達が遠巻きに囲み、足元には毒で動けなくした敵が転がる。

「……いまさら」

怒声を上げて剣を振り上げる兵士の動きに合わせて、少剣を投擲する。鎧と鎧の僅かな隙間に吸い込まれ崩れ落ちる敵。

押しているのはサイシャだ。それは彼女自身が感じていた。何十人という敵を戦闘不能に追い込み、城の内部を進んでいた。

増援を呼ばれないうちはまだ余裕があった。しかし、増援が増援を呼び、今ではすっかり包囲されてしまっている。

まだ余裕はある。だが、進めない。このままでは、彼女の体力が先に尽きてしまうのは火を見るよりも明らかだった。

逃げる、という選択肢が脳裏を掠める。

「退けるかっ！」

その考えを振り払うように勢い良く、囲みを作る兵士達に向かって駆け出した。鞘に収める短剣、抜き放つその短剣から滴る水滴が飛翔する。

仕込みを凝らしたその武器に、どつと兵士達の輪が崩れる。水滴が肌に付着した者がその場に昏倒し、囲みにできたその隙間にサイシャの小さき体が入り込む。

振りかざされる白刃、その間隙を縫ってサイシャは囲みを突破する。所々に焚かれた明るい篝火。その届かない所を目掛けてサイシヤは石畳の回廊を駆け抜けた。

乱れる呼吸、なんと曲がったか正確な数を忘れてしまった曲がり角。

「なんて広い……」

思わず弱気が口から零れる。そんな自分に苛立ち、兵士の声を通りの先から聞こえてくるのに反応し、物陰に身を潜める。

徐々に追い詰められていくことへの苛立ちに似た焦燥感。敵を倒せば倒すほど、手持ちの武器は心もなくなっていく。

「居たぞ、こつちだ！」

響く声、複数の足音にサイシヤは舌打ちした。一箇所にも長くとどまる事もできない。囲まれる前に動く、それを繰り返して城内を風潰しに探していくしかない。

声が聞こえてきたのとは反対側へ走る。

薄暗くなっている廊下の曲がり角、後ろから迫る足音に注意力を取られてしまったサイシヤはぶつかってしまった兵士に目を見開いた。

だが、驚いたのは兵士も同じ、見ればまだ少年といえるほどの年齢の兵士だった。

「うあああああ！」

手にした槍を叩き付ける兵士、迫る柄に咄嗟にサイシャは狙いも定めず手に持っていた短剣を振りぬいてしまった。

手に残る生き物を切ったという感触と吹き出る赤い血潮。

『人を殺すサイシャも嫌いだ』

ルカンドの声が脳裏に木霊する。喉を切り裂かれた兵士は崩れ落ち、サイシャはその返り血を一身に浴びた。

「……母さん」

最期の一言がサイシャの心をかき乱す。

呆然と殺してしまった少年の亡骸を見下ろす彼女の背に、怒声と共に背後から迫った敵の一太刀が浴びせかけられた。

賊都 8

鉄格子越しに横たわる赤髪の少女を眺める。手にした酒盃になみなみと果実酒を満たし、その芳醇な香りを愉しみながら一口、口に含んだ。

掴みのチーズを頬張り、再び果実酒を飲み干す。

「ねえ、ルク……あたしは、蛇が怖いのだ。女将さん程に、雪華と四役の力を信じてないんだ」

いまだ意識のない彼女に向かって、ジルは一人呟いた。

「雪華の頭なのに、情けない話だけどねえ……」

苦笑とともに、不安という名の毒を吐き出す。

「あんたは、あたしの切り札さ。可愛いルク……」

横目で彼女を伺うと、床に漂う冷たさにルクが身じろぎした所だった。

鼻につくのは、むっとするほどの酒気。そして鼓膜が捉えたのは、酔ったような明るい声。

「目が覚めたあ？」

目の前には、鉄格子。その向こう側に背もたれに寄りかかりながら、酒盃を飲み干すジルの姿があった。

「……ジル？ 私なんで」

周囲をひとしきり眺めてみる。

薄暗く、今にも崩れてしまいそうな地下牢。ところどころ砂の侵食が見られる石壁に、蠟燭の火が灯る燭台。

「ここはねえ、本当は性質の悪い客を閉じ込めて頭を冷やさせる場所なんだけど、今夜は貸切さ」

どこか心ここに在らずといったジルの言葉。それにルクは周囲を見渡していた視線を、彼女に向ける。

「ルク……ルク・ツラド」

久しぶりに聞いた自分の家名。戻ることのないそれに、ルクは目を見開いた。

「なんで、ジルが」

ふふつと、寂しげに微笑してジルは言葉を次ぐ。

「まさか、こんなところにいるなんてねえ。双頭の蛇がロクサーヌで動いてたから何かあるとは思ってたけど」

朱の差す頬、艶然と微笑みながらジルはルクの表情を覗き込んだ。

「ジル、何が目的なの？」

「目的……そうさね、お金かね」

ぼんやりと答えるジルに、ルクは俯いて唇をかみ締めた。

「私はジルのこと、友達だと思ってた……」

「あたしだって思ってるさ。……ねえルク、友達を失うのは辛い？」

その言葉に、反射的に顔を上げる。

「当たり前じゃない、何言ってるのよ!？」

自分を攫ったのがジルだと言うことが未だに信じられない。ふむ、と考え込んでからジルはルクに視線を向ける。

「ねえ、ルク」

激昂するルクに対してあくまで静かに、暗い地下牢よりもなお暗い胸の内から浮かび上がってくるように彼女は声を出した。

「友達つてのは、お金より大事なのかねえ？」

「バカな事言わないで、当たり前じゃない!」

怒鳴るルクを冷然と見下ろし、ジルは疑問を投げかける。

「あなたにはスカルディア・ヘルシオ両家の連名で莫大な懸賞金が懸かっている。ルク・ツラドを見つけ出してロクサーヌに連れて行けば、あたし達にも多少の金は回ってくるってもんさ」

暗い笑み、そこからでた名前にルクの背筋に怖気が走る。

「スカルディア……」

カルが自分を殺そうとしている。その事実にも、ルクは首を絞められたかのような息苦しさを覚えた。

「カルが……」

俯くルクに、ジルは言葉を重ねる。

「サイシャとルカンドは死に、双頭の蛇の力は半減する。あたしら雪華はあんたを売った金で更に力を増すだろう。荒地から這い出てきた蛇は、雪の華に凍えてもらおうって寸法さ」

俯いたままのルクにジルは溜め息を吐く。
だが。

「……と言うのが女将さんの考えだろうね」

だが、そう上手くことが運ぶだろうか？ 相手は荒地を統べる魔女と呼ばれる女だ。血と暴力のみが支配する不毛の荒地。生きているのは食人鬼^{デイト}か、そこに捨てられたゴミを漁る餓鬼どもだけだ。

「え？」

そのルクの態度に、ジルは眉を顰める。

「ちょっと、あたしの話聞いてたの？」

綺麗に結った銀の髪をかきあげて、ジルは口を尖らせた。

「ジルは私を売ったんじゃない……？」

深い息を吐いて、じと目で睨む。

「あたし最初に、友達だと言わなかった？」

「だって、友達よりもお金が大事だって」

首をひねり、虚空を睨むとジルは思い付いたように手を打った。

「ああ、女将さんのことだよ。モルトの爺さんとは十年來の友達なんだってさ」

「じゃあジルは」

「ああつと、勘違いはしないでよ。あたしは雪華を率ってるんだ。艶花のハンナに逆らうなんて出来ないよ。今のままじゃどうしたってあなたの敵さね。内心どうあろうとね」

「うん」

しよげた様子のルクに、姉のようにジルは助言する。

「だからね、あんたにはそこをなんとかしてほしい」

そう、だからこそルク・ツラドに意味がある。

「え？」

「だからさ、あんたにはうちと蛇の仲の修復を頼みたいのさ。まあひいては、女将さんとモルトの爺さんの仲をね」

「私が？」

啞然とするルクに、ジルはにこりと微笑む。

「そう、大人はなかなか動き辛くてね」

でも、と言いよどむ彼女にジルは畳み掛ける。

「出来なきゃ、あんたは死ぬだけさ。ね、やるしかないだろ？ あ、ちなみにね、あの人たちの機嫌を損ねてもやっぱり地獄を見るから気をつけなさいな」

しばしの沈黙の後、ルクは口を開いた。

「前からこれだけは言おうと思ってたんだ……」

「うん？」

キツとしてルクは顔を上げる。

「この、性悪女！」

聞くに耐えないはずの罵詈雑言。それが彼女を通すだけで、なぜこつも好意的に聞こえてしまうのか。内心で自分自身に苦笑しつつ、ジルは表情だけは不敵に微笑んだ。

慌ただしく行き交う兵士達の合間を縫って、商人クルドバーツは

与えられた客室に戻った。その部屋に誰もいないことを確認して、小太りの体を揺らすようにため息をつく。

愚鈍なだけのお飾りとして祭り上げたはずのあの若い領主。だが、自分達は選択を間違えたのではないか？

その思いが冷や汗となって背中を伝い落ちる。冷ややかに自らの父を殺したことを誇るあの視線。破滅を弄ぶかのような思考。

いや、問題なのは彼が弄ぶ破滅が自身を巻き込むのを恐れていない所だ。

一言で現すなら、狂気。

理解できない故に、クルドバーツはかの領主を恐れた。

ぶるりと、全身を震わせると寝台に向かう。天蓋付の豪華な寝台だった。絹の敷き布と掛け布は皺一つなく整えられ、枕には羽毛の柔らかさ、広さは大柄な彼が寝ても満足を得るに充分だった。

その寝台をクルドバーツはずらす。腰を屈めた小太りの体はまるで牛のようだ。下から現れた絨毯を探れば、鉄製のフックがある。

それをなでると、彼は一つため息をついて立ち上がり全てを元に戻した。この城のことなら隅から隅で知り尽くしている。

ごくりと生睡を飲み込み、これから誰に味方するのか、どう行動するのかを考えた。

背中に走る激痛。あまりの痛さに、痛みを感じているのかさえも曖昧になる。そしてその中で感じる圧倒的な熱。体の中に火鉢を通されたような熱さに、サイシャは呻き声を上げた。

「ははっ！ 討ち取ったぞ」

背中から聞こえた不愉快な勝ち鬨に向かって、短剣を振るう。振り抜いた短剣、手応えを感じる余裕すらなく振り向いたその先に、血塗れた剣を握った兵士の屍があった。

「はぁー……はぁー……くう」

荒い息、落ち着こうとして深く息を吸った所で背中に激痛が走る。耐え難い苦痛に、彼女は壁に手をついた。

走れるか？

自問して、一歩足を踏み出す。

鼓動が早い。痛い。痛い痛い痛いっ！

単語が頭の中に浮かび消えていく。息だけが荒い。

「ルカ」

その名前だけを頼りに、彼女はまた一歩踏み出す。奇跡的に出来た敵の空白。霞む視界を酷使して前を睨む。

「ルカ」

助けなければ、その思いが足を踏み出させる。

「私の姉弟……」

壁に付く手を支えに、また一歩踏み出す。

「居たぞ！」

その声に壁から手を離し、ふらつく足と揺れる視界で短剣を構える。

震える唇を堅く結ぶ。倒れるようにして前に進む。敵までの距離が果てしなく長く感じられた。

サイシャは残りの小剣はいくつだったかと考えて、止めた。この分では後何回も、投げることは出来ない。

体を少しでも動かすだけで、悲鳴をあげる背中への傷。その声を無視するように小剣を握り締め、死に物狂いで投げた。

「ぐう……うあああ！」

走り抜ける激痛を奥歯を噛み締めることで耐える。硬質な音と共に堅い鎧に弾かれたのが二つ。隙間に吸い込まれるもう一本が敵を一人動けなくする。

振り下ろされる槍の穂先に、鰐広の帽子が巻き込まれる。癖のある黒髪が乱れ、だがサイシャは止まらない。いや、止まる余裕など無かった。駆け抜けざまの一閃。

手応えだけでもう一人の方を向き直る。突き出される長剣が彼女の髪を掠めて通り過ぎた。出来た懐の空間。そこに体を滑り込ませ勝利を確信して、短剣を突き出す。

ガツリ、と硬質な音を立てて噛み合う刃と刃。サイシャが見上げる視線の先に、鎧の合間から覗く笑う兵士の野卑な顔があった。

「くっ……」

避けないと。

考えて、足に力を込めようとして崩れ落ちた。かいくぐった長剣が戻ってくるのに、短剣を勘で合わせる。

吹き飛ばされる小柄な体躯。力を受け流すこともできず、直撃を受ける。短剣から伝わる衝撃に、視界が歪む。

「　　っはあ！」

息が出来ず、苦痛に喘ぐ。視界は生理的な涙で滲み、悶えるように体が震える。

動けないサイシャにゆっくりと兵士が近寄る。勝利を確信した笑みを浮かべる長剣と短剣の二刀使い。

息も出来ず体は満身創痍、体力はなしに等しい。だが、それでもサイシャは立ち上がるうとした。手に握るのは、折れた短剣。それを床に突き立てようとして失敗する。痙攣する腕と、非力な彼女の力では叶わぬ事だった。

兵士は折れた短剣を杖にしようとする彼女を嘲笑いその短剣を蹴り飛ばす。潰れるようにして、倒れ込むサイシャが短剣の鞘を投げつける。片手でそれを払いのければ、その手に染み込む透明な水滴

「死ね」

兵士の無慈悲な声が降ってくる。振り上げたのは長剣、勢い良く振り下ろされたそれは、ガツリと固い床を叩いた。

「ぐっ……」

歪む兵士の視界。揺れるその向こうで、サイシャは立ち上がった。荒い呼吸は相変わらず、ふるえの走る腕で自身を支えて立ち上がる。

無言で二刀使いの兵士を見下ろし通り過ぎる。とどめを刺してい

る余裕すらない。歩くのがやっとのサイシャの前に槍と革の鎧で武装した、軽装の兵士達が現れる。

逃げる体力すらないサイシャは、それでも彼らを睨み付けた。自身に向けられる槍の穂先。逃げるすべはなく、死を運ぶ槍を見つめるサイシャの耳に、彼女を呼ぶ声が聞こえた。

ざわりと、槍の列が乱れる。その後ろ、影が血風を伴って躍っていた。

「サイシャ！」

聞こえたのは、姉弟の声。その声が聞こえた瞬間、サイシャの意識は途切れた。

躍る長剣が兵士の首をはね飛ばす。吹き上げる血潮が他の兵士達の目をくらませ、犠牲者の数を更に増やしていく。小柄な体躯に不釣り合いな長剣。それがまるで剣舞のような軽やかさで振るわれる。

「ケイフウ余り出過ぎるな！」

剣舞うケイフウの後ろ、こちらは屠殺の戦斧が振るわれる。モルトの柄の長い戦斧がうち漏らした兵士を肉塊に変えていく。重く激しい一撃が容赦なく、兵士の頭蓋を割り、返す刀で腕をもぎ取る。

「サイシャが！」

切羽詰まったケイフウの声に舌打ちすると、モルトは猛然と兵士達を薙ぎ払う。

「行けっ！」

モルトが薙ぎ払った兵士の体が宙を舞う。それを盾にして、一直線にケイフウはサイシャを襲おうとする兵士達に打ち掛かった。舞う長剣が死を撒き散らす。鎧どころか、身体の弱点を正確に突いてくる彼の長剣。

縦横無尽に振るわれる彼の長剣が兵士達の列を断ち切り、サイシヤとの間に割り込んだ。

「サイシヤ大丈夫？」

問い掛ける声に余裕はなく、倒れ伏した彼女から返事が戻ってくることもまたなかった。背中には肩から斜めに走った傷。かなり危険な状態だとケイフウは思った。

「ケイフウ、サイシヤは!？」

ぜえぜえと、息を切らしたモルトがケイフウの背を庇うように、兵士達の前に立つ。

「まだ生きてる!」

ケイフウは長剣を置いて、サイシャの横に屈み込む。怒鳴るような声に、モルトは頷いた。

「引き上げるぞ! サイシヤはわしが背負う。退路を開け!」

「うんっ!」

長剣を持ち直すと、ケイフウは兵士に向かって駆ける。独楽のよ

うに回転し、勢いをつけて兵士達を斬り捨てていく。小柄なケイフウの長剣が真下から膝を絶ち腕を切り裂く。瞬く間に三人を斬り倒し、怯んだ兵士を更に二人葬る。

「年寄りより先に死ぬなんて罰当たりなことは、してくれるなよ」

蒼白なサイシャの顔色、モルトは彼女を背負うとケイフウの開いた血まみれの退路を走り出した。

ケイフウ達がサイシャと合成したところ、城の主であるヘルベルは博徒の元締めであるシロキアと向き合っていた。

「随分騒がしいみたいだなあ」

「すぐに収まるでしょう」

呑気なシロキアの問に、ヘルベルは落ち着いて答えた。その答えに、シロキアは珍しいものでも見るように、横目でヘルベルを観察した。

最初に見たときは、ただの愚物だと思ったが意外と胆力がある。それに目つきが違った。以前よりも、遥かに陰の光が強い。

「何かあったのかい？」

「いえ、特に」

答えるヘルベルの口元には陰惨な笑い。以前には見られなかったものだ。少なくとも、自分の前では……そこまで考えてシロキアは

話題を変えた。

「ところで今日は何の用だ？ わざわざ呼びつけたんださっさと用を言え」

「実は近々布告を発しようと思ひまして、シロキア様に意見を伺おうかと」

「布告？ んなもん勝手に出せば良いだろう」

「そう言わずに是非。若輩者ですので、不備が心配なのです」

「まあいいさ。でどんな布告だ？」

シロキアは再び認識を改めた。なかなかどうして、執拗さが滲みでている。傲慢な本性を何に拠ってかは知らないが、うまく押さえ込んだものだと感じる。

ルカンドの言葉が槍とするなら、ヘルベルは縄か鎖だろう。質の違いはあれ、二人とも稀有なものだ。更に不敵に笑う表情からは不気味さを感じさせ、今までに感じない圧力のようなものを感じる。

「賊の処刑。日時は八日後になりましょうか、明け方に行います」

「そんなものに、布告を出す必要があんのかね？」

「ええ、もちろん」

口元に刻まれた陰惨な笑いが深くなる。

「罪人の名前はルカンド。罪は窃盗、殺人及び不敬罪」

「……なんだと？」

ぎらり、と音がするほどにシロキアはヘルベルを睨みつける。だがそれにも動じず、再びヘルベルは口を開いた。

「何かご不満でも？」

その言葉が終わると同時に、ヘルベルを守る近衛の兵士が床を踏み鳴らす。

「ガドリアの四役の顔に泥を塗るってんだな？」

顔の古傷を歪ませて、シロキアは凄みのある笑顔を向けた。

「もはや、四役の時代ではないでしょう。これからは二人で街を仕切って頂きたい」

「炎の運び手は良いとして、ほか一つはどこを潰すつもりだ」

冷笑を浮かべて、ヘルベルは口を開く。

「商人達の連盟、赤き道。彼らには消えてもらいたいと考えています」

その答えに、シロキアは眉を顰める。

「何故だ？ クルドバーツはてめえにべったりだろうが」

ああ、と呟いてヘルベルは発作のような断続的な笑い声をだした。

「シロキア様は彼の目を見たことがありますか？ あれはね、臆病者の目なんですよ」

「臆病だと？」

古傷を撫でながら考え込むシロキアに、ヘルベルは告げる。

「僕は、よおく知ってますよ。あの類の目はね、人を裏切らずには居られない」

ふん、と鼻を鳴らすシロキア。

「ご高説傷み入るがな、艶花のハンナはどうなんだ？」

「彼女とは話がついていますよ、色街の全てを彼女の物に、と言う条件でね」

双頭の蛇が勢力を伸ばす過程で、最も被害が大きかったのが色街だった。ハンナならやりかねないか、とシロキアは思考を切り替える。

「それで、俺には何をくれるんだ？ 領主様よ」

「モルト亡き後の炎の運び手」

シロキアの鋭い視線に、ヘルベルは暗く底冷えのする瞳を向けた。

「布告は、ハンナ様シロキア様の名前もお借りします」

「構わねえぜ」

口の端だけで笑ってシロキアは同意した。

「治まったようですね」

「……そうだな」

視線は互いに外さず、外の喧騒が治まったのを確認する。

「俺あ帰るが」

一呼吸置いて、シロキアは領主に問い掛けた。

「そんなに戦がしてえのかい？」

その問いに、嬉しげな笑いだけが返ってきた。

賊都8（後書き）

誤字脱字などお知らせしていただければ幸いです。

賊都 9

駆け抜ける様子は、鎌鼬のように素早く鋭い。ケイフウの長剣が向かいくる兵士の波を捌いていく。後ろからは、戦斧を血に染めたモルトが猛牛もかくやと言う勢いでそれに続く。

「数が、多いか」

ケイフウがうち漏らした敵を葬りながら老盜賊は愚痴をこぼした。彼の前に行くケイフウにも疲れの色が見え始めている。荒い息づかいだけが小柄なケイフウの疲労を主張していた。

「頑張れよ、後少しで出口が見える！」

「うんっ！」

城は広大だが作り自体は単純だった。モルトは入り口であり唯一の正規門へ向かっていた。だが進めば進むほど、兵士の数が多くなつていく。

彼の中に焦りが生まれる。このままでいいのか、それとも隠し通路を使うべきか。だが隠し通路と言っても、今でも健在とは限らない。さらに隠し通路を抜けるには、また城の内側へ向かわなければ

「爺、さん」

モルトの背中から蚊の鳴くような小さな声が聞こえた。

「サイシャ目が覚めたか!？」

足を止めずに、声だけを掛けた。うなづく気配に、安堵の息をつく。

「ルカは？」

「心配ない。助けは出してある」

それはモルトの嘘だった。サイシャを助け出すのに精一杯で、とてもルカンドにまでは手が回らない。部下たちはモルトとケイフウを城内に引き入れるための囿として使ってしまった。

「そう、か」

安心したのか彼女がモルトの肩に捕まる力が弱まる。

「しつかりしろ！ お前はもう一度あいつに会って思いを伝えなきゃならん！」

「そんな、ものはない」

静かだがはつきりと拒絶をするサイシヤ。

「自分でもわからねえのか？ 見てるわしらにはお見通しなのに、毒蛇の恋つてのは難儀だな」

「くそじじい」

にやりと、モルトは口の端を血に汚れた髭ごと歪めた。

「その意気だ。気持ち強くもてよ！」

二度三度咳込むとモルトは前を走るケイフウに声をかけた。

「進路変更だ！ 付いて来い！」

迷うな、とモルトは自身に言い聞かせた。荒地に捨てられた少女と少年、その小さな命を背中に感じる。

よく育った……だから生きる。こんなところで死んじやあならねえ。老いたわしではなく、若い者にこそ未来は必要なのだ。

「抜け道を使うぞ」

兵士の突き出す槍をかわし、脳天に戦斧を叩き込む。そのまま兵士ごと戦斧を振るえば兵士は回廊の壁に叩きつけられる。

物言わぬ屍となり果てたそれを一瞥してモルトは茨の道に似た回廊を駆け抜けた。

部屋の外のざわめきが大きくなるのに胸騒ぎを覚えて、クルドバ―ツは扉を僅かに開き、見た。

直後飛び散る血潮が顔に降りかかる。

「ひっ……」

策を巡らせはしても、根は小心者である。引きつった悲鳴を上げ、

尻餅をつく。

まるで見計らったように乱暴に開かれる扉。とつさに目を瞑った闇の中で、クルドブーツは太い声が降ってくるのを聞いた。

「よお、ヒヨッコ」

細い目を見開いた先には、悪鬼が如くモルトが戦斧を構えていた。白いはずの口髭は他人のか自身のか判然としない血で汚れ、所々全身にある古傷と相俟って満身創痍にも見える。

その悪鬼がごとき様相に、にやりと笑いかけられたのだから堪らない。

「ひっ……」

陸に揚げられた魚のように、口を開いては閉じ、閉じては開いた。「ケイフウ、早く来い！」

部屋の外からは断続的な悲鳴が聞こえる。

ケイフウ……双頭の蛇！？

その思考がクルドブーツの奪われていた言葉を引き戻させた。

「寝台の下に階段がある」

ほう、とモルトが外に向けていた視線をクルドブーツに向けなおした。

「命乞いにしちゃ、利口なやり方だ」

「違う。取り引きだ」

クルドブーツは地獄を抜け出してきたような迫力に負けないように、腹の下に力を込めてモルトを睨む。

「階段の前には、鉄の扉がある。フックがついているが、小さくて人の力じゃ開かないように改造してある」

普段の丁寧な言葉遣いをかなぐり捨てて、細い目に力を込めた。背中を伝う脂汗を無視して言葉を続ける。

「それを開けるための術は私が知っている。いや正確には持っている」

「……分かった、で対価は何だ？」

一瞬の沈黙の後、モルトは答えた。ここで、無駄な時間を食うわ

けにはいかない。ケイフウが切り倒してはいるが、すぐに兵士たちは押し寄せてくるだろう。

寝台の下から現れる鉄の扉に、懐から取り出したフックを括り付ける。

「赤き道と双頭の蛇の仲を取り持つてもらいたい」

がつりと音を立てて重々しい鉄の扉が開いた。

「一つだけ聞くぞ」

「何か？」

寝台を半開きの扉の前に動かすクルドバーツは、モルトに背を向けて答えた。

「わしをなぜそんなに信用する？」

抜け道を確認したあとで、クルドバーツを殺すことだってありえる。

「あなたが職人だからだ」

細いクルドバーツとモルトの視線が交差する。モルトが盗賊だということとは、クルドバーツはわかりきっていた。わかりきってはいたが、クルドバーツは敢えて職人と言った。商人も職人も、第一に重んじるのは信頼。

好き好んで盗賊などになったわけではないモルトの、心を汲んだ言葉だった。

「サイシャ、少し降りてろ」

サイシャを床に下ろすと、モルトは扉の外で奮戦するケイフウの元に走る。

「何を、そんなことをしてる暇は」

「黙ってる、ひよっこ！」

クルドバーツの言葉を遮り、モルトの怒声が響く。

「わしは、馬鹿だが義理を通すことぐらいは知っている！」

そう言うなり、両手で戦斧を小枝のように振り回し、兵士を薙ぎ倒す。隙の大きな大技だがその隙を埋めるように、ケイフウが長剣を巧みに操り敵を寄せ付けない。屍を乗り越えその上に更に、屍を

重ねていく。

逃げようとする兵士の背中に戦斧が滑り込み、戦意を失った兵士にとどめの一撃を見舞う。殺戮の名を冠するに相応しい力でモルトは敵を駆逐して行った。

周囲から敵の姿を一掃し、モルトはケイフウを伴って部屋に戻った。

「……礼を言う、クルドバーツ」

「御代は、高くつきますよ。さあ、早く！ 貴方達が行った後に私は領主の元へ駆け込みます」

不敵に笑うことを返事としてモルトは抜け道を下っていった。

「ほう、してその抜け道は？」

玉座に腰掛け、領主ヘルベルはクルドバーツの話聞いた。その、よくできた作り話を信じた振りをしていた。

「はい、それはもう兵士の皆様方が既に後を追ってございます。いずれ領主様の前にかの者らの首級を取ってまいることでしょう」

精一杯の愛想笑い、いかにも怯えているという風を装いクルドバーツは答える。卑屈を装うその態度に、ヘルベルの口元には淡い笑みが浮かぶ。

「そうか、それは大儀だが……なぜ賊が城の抜け道を知っていたのかな？ 手引きしたものがあのではないか？」

ヘルベルの瞳に浮かぶのは残忍な光。それに心底怯えるように体を震わせて、クルドバーツは口を開いた。

「ぞ、賊めは、炎の運び手のモルトでございました。り、領主様はご存じないかもしれませんが、我ら四役は城の改修にも携わっております。それゆえに……」

ほう、と玉座の背もたれから体を起こす。

「それは容易ならぬ事態だ。つまり僕は、この城の中でさえ安心して眠れぬことになるな」

「は、はあ……」

言葉を濁すクルドバーツに、ヘルベルは怪しい笑みを向けた。

「貴様も不安だろう？ いつなんどき、賊が寝台の下より這い出してこぬとも限らぬのだから」

「は、はい。それはもう……」

満足そうに頷いて、ヘルベルは手を鳴らす。居並ぶ近衛兵の一人が一步踏み出してくる。がっしりとした体格の巖のような男だ。

「バーン、貴様に我が客人たるクルドバーツ殿の護衛を任せる。精鋭100を率いて、彼を護衛せよ。これは領主命令だ」

「ハッ！」

よく訓練された野太い声で答えて、バーンと呼ばれた近衛兵は居住まいを正して礼をした。

「自宅はもちろんのこと、店の方も警備してあげなさい」

「ハッ！」

「ありがとうございます。領主様の御慈悲は、ガドリアの天よりも高く、風よりも強く身に刻みまます」

怯えと軽蔑を内々に秘めながら、クルドバーツはヘルベルの前から退出した。

半ば脅しのような格好で、ジルからモルトとハンナの仲の修復を頼まれたルクは途惑いながらも色街からの帰途についた。

胸を締め付けるのは、捕まったルカンド。そして彼を助けるために戦っている友達のことだ。

「できることを、しなきゃね」

ルクは自分を励ますように呟いてから、胸の前で震えそうになる両手を握り締めた。色街からの帰途を心配してジルが付けてくれた護衛の人は、彼女自身が先ほど帰ってしまった。一人で歩き、考えなかった。

ジルがくれた期限は四日、それ以上は待てないそうだ。

命を狙われる、とは別の理由でルクがジルのお願いに尽力するつもりになったのは、ひとえに自分の無力さ故だった。

ガドリアに来て出来た友達。

その彼を救うために、ケイフウやサイシャやモルトは武器を取って戦っている。だが彼女は武器など持ったこともないのだ。では、そんな自分が友達を助けるために、何ができるのだろうか？ その思いに至った時、ルクはジルの頼みを受けようと決意した。

月明かりの照らす鍛冶屋通り。

やがて、炎の運び手の隠れ家として使っている一軒が見えてきた。彼女が攫われた家と言い換えてもいい。ぼんやりと明かりのついているその家を見た瞬間、ルクは息を呑み、次いで走り出していた。

「ルカンドさん！」

乱暴に扉を開けると同時に、名前を呼ぶ。だがそれに答える声はなく、中にいた人々は呆然と彼女を見返した。そこにいたのはモルトの部下たちだった。ケイフウとモルトが城へ侵入するための囮となった者達である。

「これは、お客人……お見苦しい所を」

年かさの一人が立ち上がり、ルクの前での無作法を詫げる。見れば彼らは、怪我の治療をしている所だった。

「あ、いえ、お邪魔して申し訳ありません」

彼女は邪魔にならないように部屋の隅で彼らの治療を見守ることにした。だが彼女には時間がないのだ。後四日で再び彼女は捕らえられ、友達にも会えなくなる。

結局ルクは自分の為にはしか動いてないと自覚すると、溜め息をついた。目の前で苦しんでいる人が居るというのに、考えていること

たとえば、自分のことだけだ。

「私って、最低……」

自分自身が物凄く醜い生き物に見えてしまう。

「何が傷付く人を見たくない、よ」

かつて自分が抱いた想いさえ滑稽なものに思えてしまう。

だが、と彼女は自分の中のもう一つの感情も同時に自覚していた。

なぜかは分からない。だが、確かにルクは胸の奥に怒りに似た熱を感じていた。

「私に、できること」

少なくとも、ここで膝を抱えていることじゃない。

ルクは立ち上がると、怪我人の治療を手助けするために、彼らの中に分け入って行った。

賊都9（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

「湯だ、こつちに頼む」

「はい！」

その声に答えてルクは沸かした湯を桶に入れて運ぶ。怪我人の中を縫うようにして忙しく行き来していた。

「新しい布足りねえぞ」

「今行きます」

軽い切り傷から、矢傷まで様々な傷の治療を目にする。初めは戸惑い、流れる血に怯えた彼女だったが、次第に慣れていった。

治療する側もされる側も元々盗賊。荒っぽい治療だが、そのぶん早く最低限の応急処置にはなっていた。

「もういいぞ、少し休んでくれ」

主に治療を担当していた年配の男に言葉をかけられるが、彼女はその言葉に抗った。

「私まだ大丈夫です」

クタクタに疲れてはいたが、それよりも胸の奥の熱の方が大きかった。そんな彼女に年配の男は、厳しい口調で言い放つ。

「好意は嬉しいがね。もうあんたにできることはねえんだ。さっさと休んでくれ」

厳しい言葉に俯くルク。了承の返事をしようとした時、隣から声がかかる。

「素直じゃねーな。レギー気遣ってるならもつと言いようがあるだろっが！」

ルクと年配の男　レギーのやりとりを聞いていたモルトの配下の中から声がかかる。からかい半分の口調だが、それに続いて別の方からも声があがる。

「そっだそっだ！　年甲斐もなく照れてんじゃねー！」

途端に起こる笑いの渦。その中で、レギーは熱があるかのように顔を赤くして喚いた。

「黙れ！ てめえら、怪我人は静かにしてやがれ、傷口が開くだろうが！」

その様子が余りにも楽しそうで、思わずルクはくすりと笑ってしまった。

「まったく、いつまでたってもガキのままなんだからな。参っちゃまうぜ」

頭を掻きながらルクの方に振り返ると、レギーは先程よりも幾分柔らかい口調で話しかけた。

「と言うわけだ。あんたが居ると奴らが興奮しちまってなかなか休まねえから、少し休んできてくれや」

「それはおめえもだろうが！」

すぐに入る茶々を華麗に黙殺すると、レギーはルクの背を押した。

「あ、ずりいぞレギー！ 俺の聖女様に汚え手でさわんじゃねえ！」

レギーは悲鳴混じりの罵声を聞き流し、ルクの部屋の前まで来ると、丁寧に扉を開ける。

「私、お邪魔でしたでしょうか？」

困惑気味に尋ねた彼女に、レギーは笑みを見せた。人好きのするような柔らかい大人の笑みだ。

「いや、充分よくやってくれたさ、礼を言いたいぐらいにな」

「だったら」

「だからこそ！ しっかり休んで疲労を抜いてくれ。怪我の治療は明日からも続くからな、しっかり頼むぜ。聖女様」

にやりと笑うとレギーはまた、怪我人達の中に戻っていった。

部屋の中に戻り、ルクは寝台に横たわる。レギーには強がったが体は正直だった。もしかしたら、それさえも見抜かれていたのかもしれないが、彼女は眠りを誘う睡魔に身を任せた。

ルクが疲労の誘う心地良い微睡みに身を委ねていると、なにやら隣の部屋が騒がしく感じる。意識がはつきりとしてくるほどに、明

瞭となる雑音に彼女は重い体を起こす。

「なん、だろ？」

閉めた扉の隙間から漏れる灯りを頼りに、扉を開く。

そこは蜂の巣を突つついたような騒ぎだった。一重二重になって、誰かを取り囲んでいるモルトの部下たち。その隙間を潜り抜けて、ルクは騒ぎの中心へ向かった。

「治療の邪魔だ！ さっさと散れ！」

レギーの怒鳴り声が聞こえる。

「レギーさん、どうかした……」

の、と言いかけて彼女は絶句した。床で治療を受けていたのは、満身創痍のサイシャとモルトだった。

「ルクか」

モルトが弱々しい声を上げた。

いつもとは余りに違う弱々しい姿に、ルクは言葉がでず、ただ頷くだけだった。

「すまん」

薄い笑みに彼女は、モルトの容態が悪いのを知った。とっさにレギーの方を振り向くと、彼は視線をモルトに向けた。

「肺の病だ。無茶しやがって……死にてえのか!？」

厳しい口調とは裏腹に、モルトに触れる手は慎重で丁寧だった。

「治るんですよね？」

「……わからん」

「そんな……」

言ってしまったから、ルクはレギーから鋭い視線を向けられた。

彼女は自分の言葉を即座に後悔する。助からないのだ。恐らく、サイシャを助けに動いたのさえ最後の力を振り絞って行ったのだろう。俯いた彼女の腕をモルトの傷だらけの腕が掴む。

「ルカは、必ず助ける。言えた義理じゃねえが、少し時間をくれ」
病み衰えたモルトの手に力はなかった。

薄暗い地下牢。鎖に繋がれたルカンドは鉄格子越しにヘルベルの訪問を受けていた。

「やあ、元気かね？ 薄汚い蛇殿」

ヘルベルは薄い笑みを口元に浮かべて、ルカンドを見下ろす。その隣には奴隷だろうか薄汚い少女を一人連れていた。

無言で見上げるルカンドに、ヘルベルは陰惨な笑みを隠そうともせずに言い放つ。

「処刑の日程が決まったよ。十日後だ」

ルカンドの顔色を伺いながら、言葉が続ける。

「……それと、先程賊が城に侵入してね、確か毒を使う薄汚い少女だ」

ルカンドの目に僅かながら動揺の光が走ったのを、ヘルベルは見逃さなかった。

「まあ、今僕がここにこうして無事に君と話していることから分かるように……賊は撃退したのだがね」

「それで？」

掠れた声で質問するルカンドにヘルベルは喜悦を露わにする。

「ふふん、やつと興味が出て来たかい？ まあ心配しなくていいよ、賊の少女は深手を負っているが城外へ逃げたらしい」

感情を面に出さないようにしながらも、安堵の息が漏れてしまうルカンドに、その声は降ってきた。

「で、だ」

抑えきれない喜悦に歪むヘルベルの表情。

「許せないだろう？ 領主に逆らったのだから罰を与えねば。だが罰せられるべき者は逃亡してしまった」

発作のような笑いが、漏れてくる。

「つまり、他に罰を受けるものが必要なのだ」

その言葉にルカンドは軽蔑の籠もった笑みを向ける。理由を付け

てはいるが、つまりルカンド自身を痛めつけたいのだろう、と。

「好きにすればいい」

そのルカンドの答えにヘルベルは声を上げて笑った。

「そうさせてもらおう」

言つや否や、傍らに控えていた少女を張り飛ばす。倒れてしまい目を見開いて驚く少女と言葉を失うルカンド。

「何、を？」

呟いたルカンドに、ヘルベルは嘲笑を向けた。

「何を？ 僕は言つたはずだが」

罰を与えると。陰惨な笑みを顔に貼り付け、倒れた少女を打ち据える。

「い、嫌、何をなさいます領主様！」

打たれることを、恐れて縮こまり助けを求める少女。だがヘルベルは、そんな姿を楽しむように更に痛めつける。頬を殴りつけ、それに満足出来ないのか少女の衣服を破り捨てる。その華奢な体を、飽きるまで殴りつけた。

身を庇う少女の細腕を掴み、思い切り踏みつける。

「あああああああ！」

悲痛な叫びと共に、少女の腕はあらぬ方向へ曲がってしまふ。

「……なぜ、こんなことをするっ!？」

恍惚の表情を浮かべながら小さくなって震えている少女を見下ろすヘルベルに向かって、ルカンドは声を荒げた。

「その子は、何の関係もないだろう!？」

ルカンドは彼女と面識がなかった。

「何故、だと？」

傷と破れた衣服でぼろ布のようになった少女。その髪を、乱暴につかみ上げる。

「あ、うっ……」

僅かに、呻き声を上げるがもう少女に抵抗する気配はない。

「この娘は僕の奴隷だ。どうしようと君に関係はあるまい」

それに、と言い足して鎖に繋がれたルカンドに少女の顔を近づける。

「こうした方が君の矜持を深く傷付けるかと考えたのだがねえ」

その言葉に、ルカンドは呆然とヘルベルを見返した。

「たった、それだけの為に……？」

沸々と、煮え立った湯のようにルカンドの中に憎悪が湧き上がる。

「……あなたは、他人の命を何だと思っているのですか!？」

自身を痛めつけられても感じたことのない圧倒的な感情がルカンドを飲み込む。

「他人の命だろう？ 自分のものですらないそれが奪われたとて何を怒る？」

高い嘲笑の声。得体の知れないものに抱く嫌悪そのままにルカンドはヘルベルを睨み付けた。喜悦に歪むヘルベルの口から、笑いが漏れ出してくる。

「やっとそんな目を向けてくれたねえ。ルカンド君といったら醒めた目しかできないのかと思っていたが……この奴隷は充分役に立ってくれた」

「なら、すぐに解放してやればいいだろう!」

吼えかかるルカンドに、ヘルベルは嘲笑の籠った視線を向けた。

「しかし、この腕ではね」

少女を床に投げ捨て、ヘルベルは懐に手をやった。

「……だい、じょうぶ、です。ご主人さ、ま。私はまだ、働けま、す」

傷だらけにされたその体で気丈にも少女は、ヘルベルに擦り寄る。

「おお、なんと健気な！ 僕はお前のような奴隷をもて嬉しいよ」
足にすがりついた奴隷の背に手を回し、抱きしめるかのような格好になる。だがルカンドはヘルベルが懐から取り出した凶器を見逃しはしなかった。

「やめろ!」

ルカンドの叫び声が地下牢に響く、少女の背中に突き刺さる。あ

ふれ出す血は床を染め、細くなった息は彼女の命が尽きる事を嫌でも彼に知らせた。

「お、おまえええ！」

激しく鎖を鳴らしヘルベルに詰め寄ろうとするルカンドに、高笑いだけが返される。少女の血に塗れた手を、まるで汚物を払うように振り払いヘルベルは立ち上がった。その拍子に、彼にもたれかかる格好になっていた少女が床に落ちる。

「最期まで役に立つてくれたなあ、そうだからからは毎晩こうして君の前で奴隷を殺して見せてあげようか？ 君がどんな風に僕に赦しを請うか今から楽しみで仕方ないよ」

では、といってヘルベルは立ち去る。自分が殺した少女の命など、使い捨ての道具でしかないのだとその背中には語っていた。

玉座の間、先代が心血を注いで作ったその空間に身を置きヘルベルは報告を聞いていた。

「クルドバーツめは、屋敷に閉じ込めております。店の方は、問題なく運営しているようですので、赤き道の後任を探すだけで事は済みそうです」

報告しているのは、クルドバーツの護衛を命じられたバーン。

「貴様の意見はいい、事実だけを述べる」

傲岸な態度を崩さず、精巧な彫刻のように飾り立てた玉座からヘルベルは部下を見下ろした。

「失礼しました」

純朴として、頭を垂れるバーンは一度頭を下げた後、報告を続けた。

「クルドバーツは屋敷に監禁中、彼の店は依然と変わった様子はないし」

野太い声で、簡潔に言い直すバーン。

「警戒を怠るな、他の四役からの使者と言えども決して通すでない」
「御意」

踵を返すバーンが、角を振りかざす牡鹿が彫り込まれた扉を開けて、ヘルベルの前から去る。

「これで、クルドバーツは抑えた」

天井に描かれた弓引く天使達。

「モルトの後継者は六日後に死ぬ」

妖艶に微笑んだ天使が狙いを定めているのは、暗闇に沈む悪魔。

「後は、おいぼれのシロキアに欲に目がくらんだハンナか」

荘厳なその絵をゆっくりと仰ぎ見たヘルベルは憎悪を込めて笑った。

「四役め、皆殺しにしてやるぞ」
その宣言は天井に描かれた悪魔よりも暗く、天使よりも尚凶暴だった。

目が覚めて最初に感じたのは痛み。背中に焼けた鉄の棒を差し込んだような、耐え難い熱を伴って痛みが背中で鼓動する。

「くっ……」

徐々に開けていく視界の隅で、サイシャは自分の名前を呼ばれるのを聞いた。嫌な女の声の聞いたと思い、瞼を閉じる。

「サイシャさん!？」

駆け寄ってくる足音に一度閉じた重い瞼を開ける。

「サイシャ、無事？」

ケイフウの高い声。

「傷の痛みはどんな感じだ？」

モルトの部下のレギー。

「……痛い」

他に言葉が見つからない。それほどに的確に言い表せているとは思えないが、口を動かすのでさえ疲れるのだ。

「じじいは？」

「……無理が祟って寝込んでるよ」

舌打ちとともに、聞こえた藪医者言葉にサイシャは苦笑する。

そつだ。一番肝心な奴の声を聞いていない。

「……ルカは？」

サイシャを覗き込むケイフウに問いかける。

「えつと、その……」

下を向き、俯くケイフウの姿に胸に黒いモノが去来する。

「……ルカ、は？」

レギーのほうへ顔を向ける。悪い冗談なら止めてくれと、言い聞

かせて嫌な予感を追い払おうとする。

「……アイツも怪我しててな、今は起き上がれねえ。お前の方が直つたら見舞いに行きな」

「……本当、なんだな？」

凍りついたように動かないレギーの瞳を見返しつつ、サイシャは確かめた。

「ああ、本当だ」

ぎこちない笑みを浮かべるレギー。

「つく……あああつ！」

「何してる！？ てめえ自分の怪我の度合いが分かってんのか！」

「サイシャ！？」

怒鳴る藪医者の手を払い、サイシャは立ち上がるうとした。動かすたびに、悲鳴を上げる体。寝台から上体を起こそうとする腕に力がない。だがその腕を無理やり動かし、サイシャは体を支えた。

「サイシャ！？」

「サイシャさん！？」

「黙ってる！」

ケイフウとルクを視線と殺気で黙らせる。

寝台から降りようとする彼女の肩を抑えるレギーの腕。まるで彼自身が傷ついているかのような悲痛な表情で、必死に彼女を止める。

「止めるんだ。今度こそ死ぬぞ！」

「どけ！」

押せば倒れるサイシャの肩を、レギーはそれ以上押すことが出来なかった。だからといって、引くなど論外。藪医者という自覚はあるが、それでも医者は医者だ。

錯乱していると言ってもいいサイシャ、それを見て取ったレギーは無駄と思いつつも説得を続ける。

「だがやはり、その説得に耳を貸すようなサイシャではなかった。

「ルカ、ルカを、私は助けるんだっ！」

傷ついた体を動かすのは強迫観念にも似た激情。押さえ込むレギ

「の腕を振り解こうとして、背中 of 傷口が開く。包帯の上から、赤い染みが広がるのが見える。」

取り憑かれたかのように、髪を振り乱しレギーの腕を振り解こうとする。その鬼気迫る様子に、レギーは目の前にいるのが少女だという事も忘れ、恐怖した。見据えるサイシャの瞳は、狂気の輝きを放つ。

まるで蠟燭の火が燃え尽きる前の、一瞬の輝きにも似たそれに、レギーが恐怖とともに見蕩れた瞬間、サイシャはレギーの腕をすり抜けた。

触れれば倒れてしまいそうな、体を引きずり扉に向かう。彼女の肩に触れようとした、レギーをサイシャは視線だけで制した。

「邪魔したら……殺す」

命のやり取りを、何度も経験しているレギーですら一瞬息を呑んでしまうほどに強い言葉と視線。

あまりの痛さに、彼女の瞳からは止め処なく涙が溢れ、零れ落ちていく。だがそれでも前を指す意思には一片の曇りすらない。吐き出す息は、痛みと共に溢れ出す激情を吐き出す。真っ赤な炎が燃え盛るように、瞳に揺らめく炎。

扉を抜けた先には、荒く吹きささぶ風と夜の闇。

サイシャという手負いの狂獣は、檻を抜け出しその先で。

「なんだい、そのざまは？」

漆黒を纏った魔女に会った。

荒々しく吹きささぶ風さえも従えて蛇達の主は笑っていた。

「サー姐え……？」

口について出た言葉。それが、その響きが、燃え盛る一方だった感情の炎に一滴の理性をしみこませた。たった、一滴。だがそれが、今まで炎の下で抑え付けられていた不安や悔恨を呼び起こす。

「ああ、なんだい？」

今まで誰も寄せ付けなかったサイシャの狂気が鎮まりをみせる。

「サー姐え」

「ああ」

俯き震えるサイシャのか細い肩。返されるのは、闇のように全てを包み込むサギリの声。

「……ル力が、さ。さらわれ、ちゃったんだ」

「そうかい」

俯いたサイシャから聞こえるのは、鼻を齧る音。

「……それでさっ……私、頑張ったんだけど……だめで」

言葉の間から、漏れる嗚咽。

「サー姐え……」

顔を上げたサイシャは、縋り付くように細い声が紡がれる。

「助けてよ……ル力が、ル力が、ひつく……し、死んじゃうよ……」

……助けてよ、サー姐え……」

その場に崩れ落ちるサイシャを、しっかりと抱きとめてサギリはレギーに彼女を手渡す。

「しっかりと頼むよ、藪医者」

腕の中の少女を見下ろすと、レギーは頷き漆黒の魔女に問い返した。

「……で、アンタはどうするんだ？」

その問いに、魔女と畏れられる女は口の端を弦月に歪めた。

「決まってるだろう、双頭の蛇アタシドラに喧嘩を売った身の程知らずに、きつちりとツケを支払ってもらおうのさ」

黒曜石の瞳には、サイシャの狂気が乗り移った様な炎が揺れていた。サイシャのように声を荒げるではない。だが、確かにレギーはサギリの言葉にサイシャ以上の恐怖を感じた。

賊都 12

扉のノブに手をかけて回す。ガチャリという音と共に鍵が開き、扉を開こうとして何か硬いものにぶつかつた。

小太りの体を小さくしてクルドブーツは溜息をついた。

窓から外を見下ろせば、蟻の這い出る隙間もないほど周囲には兵士たちが待機している。夜ともなれば篝火を焚き、その警戒は厳重を極めていた。

ある意味領主よりも厳重な扱いを受けていると行って良い。ただ、その警戒の視線が彼自身に向けられていることを除けばだが。

「やられた……」

今日だけで何度目かわからない溜息をつき、長椅子に腰掛けた。向かい合う二つの長椅子の間には背の低い机があり、酒瓶が置かれている。彼が飲むには少しばかり強いそれを、一気に飲み干すと、長椅子の背もたれにぐったりと体重をかけた。

領主の城から自宅に戻つてすぐ、彼は近衛騎士のバーンにより自宅の一室に監禁されてしまった。当初こそバーンに抗議し、なんとか自由に行動できるようにと図つたが無駄だった。目の前に良く磨かれた槍の穂先を突きつけられ、脅迫じみた言葉で警護の必要性を説かれては反抗することもままならなかつた。

彼の店の者も、始め兵士達と揉めたようだがここ二日はそれもない。

「野蛮な、賊どもめっ！」

吐き捨てるると再び酒盃を煽る。

愚痴を肴に、強い酒を飲み干すと彼は寝入ってしまった

がチャリ。

ぼんやりとする頭でその音に気がついたのは、彼の体を撫でる冷たい夜気が覚醒をせつついていたからだ。

ぼすん。

誰かが彼の前の長椅子に腰を下ろす音がした。

「ぬう……」

割れるように痛む頭を振りながら、クルドブーツは周囲を確認する。

月明かりさえ入らぬ真つ暗な部屋。

いつの間にか、夜半を過ぎたようだった。起き掛けのぼんやりとした視界で、正面に座っている人物を見定めようと、目をこする。

「よお、お前がクルドブーツだな？」

聞こえてきた声は若い女のものだ。

「……誰だ、いや、どうやってここまで来た……？」

「ハン、決まってるんだろ。邪魔な奴は潰して来たんだよ」

人を食った物言いに、ひやりとクルドブーツの背を冷気が撫でた。

「それより、アンタがクルドブーツで間違いないんだな？」

恐る恐る頷くクルドブーツに、闇の向こうの女が笑う気配があった。

「アタシはな、双頭の蛇のサギリってもんだよ」

クルドブーツの回っていたはずの酔いが、引いていく。

「荒地の、魔女？」

「ああ、そうだよ」

「なぜ……」

「お前に出してもらいたいもんがある」

低い机に足を上げ、背もたれに体重をかける。

「何を……？」

「金だ」

「……どれほどの？」

商人らしい目ざとさで、瞬時に考える。

「色町を買い取れるだけの、だ」

「それは……」

言いよどむ、クルドブーツ。

「アタシは相談してるんじゃない。お前の全財産振り絞るれば、そんなくらい用意できるはずだ」

傲慢だが鋭く急所を突いてくるサギリの言葉にクルドバーツは唖った。

「なあ、クルドバーツ。王都ロクサーヌで、未亡人が殺されるってのはよくあるのかい？」

「は？」

悪戯を仕掛けるような笑みでサギリは言葉をつなぐ。

「何、例えばの話さ。貴族の未亡人に入れあげる商人がいたとしてだ、悪い盗賊が目を付けたら大変だよなあ？」

「な、にを」

「例えば、その商人が贈ったこんな首飾りがアタシの手元になれば……クルドバーツ、お前の気持ちは少しは変わるのかい？」

血濡れたそれを無造作に投げると、サギリはクルドバーツに迫った。

彼の脳裏に浮かぶのは、長年慕い続けた儂げな愛する人の笑顔。

それが血に濡れて物言わぬ死体となったところを想像してしまった。

「か、彼女に何をした!？」

机に手を叩き付け、立ち上がるクルドバーツに荒地の魔女は、静かに笑った。

「落ち着きなよ。お前が、頷きさえすれば何も起きはしないさ」

取り乱すクルドバーツにサギリは表情を緩めたが、彼女の黒曜石の瞳だけは笑わずに彼を品定めしていた。

「返答は？」

まるで喉元に刃を突きつけられているような圧迫感がクルドバーツを襲う。

だが、それ以上に彼を悩ませていたのはロクサーヌに居る想い人の事だった。

「……分かった。だが、くれぐれも彼女には……」

彼女が自分の弱点だと自ら告白するようなものだったが、それで

もクルドブーツは言わずにはいらなかった。

「お前の心がけ次第だよ」

ふわりと、サギリは席を立つ。夜の闇に紛れるように彼女は立ち去った。

薄闇の中で今の出来事が悪い夢だったような感覚にクルドブーツは支配されていた。ふと思いついて彼女の去った扉を開いてみる。

「うつ……」

そして思わず彼はその光景に絶句した。

横たわるヘルベルの近衛兵達。そのどれもが、闇の中に黒々とした血を流し物言わぬ屍になり果てていた。

身の毛もよだつその光景に、クルドブーツはただ立ち尽くしていた。

ガドリリアの家々の背は低い。それは吹きすさぶ強風と砂嵐に拠る所が大きく、故にガドリリアの家々はほかの地域に比べて地下に発達を遂げていた。だが、いかに地下に発達しようとも、手作業では限界がある。堅い岩盤が深く掘り下げることが拒み、砂礫質の土壌が地下室の幅を抑えた。人の目を盗み開催される賭場などというものは、広い土地が必要になってくる。シロキアの屋敷に庭があるのは、地下にある広大な賭場への負担を減らす目的があった。

ガドリリアで最も広い敷地を持つシロキアの屋敷。長大な砂除けの防風林に庭を抱え込んだその屋敷において、その騒ぎは起こっていた。

「くそつたれ！ どのどいつだ!？」

シロキアの手下は夜の闇に向かってはき捨てる。賭場の元締めとして、十年来ガドリリアの裏を仕切っていたシロキア。その彼の屋敷に真正面から殴り込みを掛けるなどという無謀な者は、ここ数年来なかった。

> 炎の運び手<のモルトは病に倒れ、> 赤き道<のクルドバーツは領主に軟禁、> 艶花<のハンナとは同盟関係にある。その状況下で、未だ健在のシロキアに喧嘩を売るということはガドリリア全体を敵に回すことに等しい。

だが、それを。

「ケイフウ、右だ。行け！」

たった二人で、やってのける者が居た。

篝火が焚かれた庭。僅かに残った闇の中、その隙間を縫うようにしてケイフウとジンはシロキアの屋敷に奇襲を掛けた。闇に溶けるような黒の衣装を纏い、ジンの声音はあくまで冷たく低い。

その声に従い、ケイフウは群がる敵を払いのける。

斬るよりは叩き折るといふ機能を重視した刀身の厚い剣を自在に操り、独楽のように回転するさまは、まるで舞踊のようですらあった。

剣を振るい、槍の隙間を縫って走り、斬撃をかわして跳ぶ。剣戟の合間をすり抜け血飛沫を彩りとして、小さな剣士は跳躍する。突き出される槍の穂先を叩き折り、左右から同時に迫る斬撃をかい潜り、正面から体ごとぶつかってくる敵の足を切り払った。

一人光を浴びる主役のように、ケイフウは死の舞いを踊り続ける。

篝火の明かりが照らす舞台では、ケイフウの剣舞が続く。

その喧騒を聞きながら、ジンはシロキアの寢所へ向かっていた。

ケイフウがあればほど派手に撃ち合っているのは、護衛達の耳目を集めるためだ。光の中のケイフウに視線が集まる中、ジンはその光が落とす闇の中を進んでいた。ガドリリアでは高価な木造の屋敷。長い渡り廊下を渡った先に別棟として建てられたシロキアの寢所があった。

遠くに聞こえる喧騒に、シロキアは寝台を抜け出していった。別棟として作らせた寝所の外。昼ならば陽光に照らされた、緑の木々が目を足しませるであろう庭園から身震いするほどの殺気を感じる。その殺気に、自然と頬が緩んだ。

幾年振りだろう、これほどまでの殺気を向けられるのは。護身用の太刀を手に取り、白い上着を羽織って扉を押し開けた。そうして見たジンの姿にシロキアは視線を奪われた。正確にはその瞳に、だ。闇の中、呪いのように禍々しく赤く光るジンの瞳。

「デイド……」

思わず自身の口から漏れた言葉に、シロキアは我を取り戻す。デイドであるうはずがない。彼らは群で動き、理性などと言うものは持ち合わせていない怪物のはずなのだ。

「てめえ、一体」

ひゅん。

と風を切る音がシロキアの頬を掠めた。

かつん。

とシロキアの後ろに突き立つ投擲剣。

「荒地の魔女からの伝言だ」

シロキアの言葉と思考を切つてジンは口を開く。

「牙を忘れた犬に告げる。獲物に噛み付く楽しさを思い出させてやる。三日後宵の口、重なる大岩の麓に来い」

ジンから発せられる殺気の密度は更に濃くなって、暗闇を重くした。

だが、それ以上何もせず彼は踵を返す。ジンが見えなくなって初めて、シロキアは自分が震えているのに気がついた。

「……野郎、このままで済むと思うなよ」

手にした太刀を砕けるほど握り締め、顔は怒りのために鬼のように赤く染まる。

「おちよくりやがってえ……ガキどもが！」

目の前に敵が居たならば、睨み殺せそうなほどの視線。ケイフウを退けて戻ってきた護衛にシロキアは告げる。

「お頭、殴り込みはなんとか退けました。これからその、搜索に…

…」

「……手下を集めろ」

地の奥底から響くような声に、シロキアの手下は伏せていた顔を上げる。

覗き見たシロキアの顔。その頬から流れ出る血を拭いもせず、怒りに燃える瞳を闇の中に投じていた。

結び上げた銀の髪の間から覗く眉間にしわを寄せ、ジルは報告を聞いていた。なるべく表情を表に出さないように気をつけてはいるのだが、あまり効果はなかった。

「……なんだかねえ」

ため息を吐いて、報告に来た手下を下がらせる。

荒地の魔女が戻ってきてから一気に事態が思惑を外れて動き出してしまった。まさかいきなり領主に喧嘩を売るとは、度胸があるなんてものではない。

「トチ狂ってるのかねえ……サイシャの主人は」

炎の運び手に恩を売りつつ、現状維持……というのがジルの絵図だった。できれば、双頭の蛇の力は殺ぎつつ、だ。その為にわざわざルクを攫い、更に恩を売ってモルトの元に戻すなどという面倒なことをしたのだ。

なのに。

「ぶち壊し、か」

啜えた煙管から、紫煙を吐き出す。モルトが自らサイシャを救いに行くというのも予想外だった。そのせいで今や>炎の運び手<と>双頭の蛇<は荒地の魔女が完全に握っていると言っても過言ではない。

「ジル姐さん」

ぼんやりと、揺れる紫煙を眺めていたジルはその声で視線を戻す。

「ん〜？」

「ハンナの女将さんがお呼びです……その、えらい剣幕で」

「はいよ」

やれやれ、と火を捨て煙管をしまつ。痼癢を起こすのは良く分かる。だが、だからといって気分が良くなるというものでもない。

「全く、厄ごとばかりを運んできやがるねえ荒地の魔女は」
優美な裾を翻し、ジルはハンナの元へ向かった。

簡単な事務机に、雑然とした部屋。

イライラとした様子でその机の周りをハンナが歩いていた。皺の目立つ顔を歪ませ、視線は憎々しげに周囲を彷徨わせる。

「女将さん、着ましたよ」

「ジルっ！ どこほつつき歩いてたんだい!？」

普段と変わらない様子のジルの声音に、ハンナが過敏に反応する。頭一つ背の高いジルを威圧するように、ハンナがつかつかと歩み寄り睨みあげる。

「たった今シロキアから、報せが来た。あの小娘やつてくれたよ！

ああ、忌々しい！」

近くにあつた置物を引つ叩き床に落とす。

「何をですか？」

ハンナの落とした置物を拾おうと手を伸ばしつつ、聞き返す。

「シロキアに喧嘩を吹っかけやがった。シロキアは戦だと息巻いているし、ああ、もうガドリアを火の海にするつもりかい!？」

置物を拾い上げ、元の場所に戻しつつジルはハンナに視線を向けた。

「それで、どうしますか？」

至極簡単に聞き返すジル。その彼女をハンナは忌々しげに睨んだ。

「随分、余裕じゃないか、え？」

「あたしまで一緒になって騒いでも、仕方ないですしねえ」

肩を竦めるジルに、ハンナはため息を吐いた。

「ありがとうよ、全く私や良い娘をもつたもんだ！」

少しの感謝もない風に、どなるハンナに。

「どういたしましたで、それでどうします？ あたしは炎の運び手に付くのも、ありだと思えますけど」

さらりと、ジルは切り替えした。

「……いや、やっぱり博打は踏めないね」

騒いでいたハンナから一転して、その声は低く重かった。

「そう、ですか」

一瞬ジルの顔に痛々しいものが奔ったが、すぐにそれを打ち消すと、からっとした声で、言葉を続ける。

「それじゃ、襲いましょうか。炎の運び手」

「雪華だけでかい？」

「ええ、まあどつちかに付くならはつきりさせておいた方が良いでしょうね。できるだけ被害を少なくするなら、あたしらが出張った方が良いかと」

ハンナは椅子を取り出して、机の前に座り込む。額に手を当て、俯いてしまう。

「……また、金がかかるねえ」

顔を上げたハンナの口元には苦い笑みが浮かんでいた。

「素直じゃないですね」

「意地っぱりなのは、あんたもだるうに」

どちらともなくため息をつく。

「ジル、今回は私も出るからそのつもりで頼むよ」

「……はい、女将さん」

静かにうなずくと、ジルは準備をするためにハンナの部屋を出て行った。

「モルト……」

一人になった部屋、小さく呟かれたその言葉は誰にも聞かれることなく消えていった。

夜半、ガドリアの夜は冷える。

透き通った空気は天に瞬く星の姿を明らかにし、降り注ぐ月光は静かに大地を照らしていた。

傷病者の介抱を終えて、ルクは一人星を見上げていた。思い返すのは、怒り狂うサイシャを止めたサギリのこと。

「あれが、サギリさん」

腰掛けた岩の冷たさが、ついた掌を通して体に染み渡る。圧倒的な存在感、サイシャに掛けた言葉は優しく包み込むようなものだったのに、思い返せば背筋を凍らす冷たさを呼び起こす。

そして。

「お父様と、ウィンベルさんの行方を知っている人」

怯んではいけない。ガドリアに来て学んだことだった。他人は無条件に優しくはないけれど、無闇に恐れてはいけない。

ふう、と考えを切り替えるために息を吐き出す。

「私はあの人の、何が怖いんだろう……？」

たぶんそれは真実を握られていることから来る恐怖なのだろう。

自分がなぜここにいいのか、皆はどうなったのか。

ぶるり、と一度身を震わせた。

「弱気になっちゃ、だめ」

言い聞かせる言葉と共に、自分の体を抱きしめた。

強く心を持たなければ、負けてしまいそうだった。

「よしっ！」

腰掛けた岩の上から、降り立つ。

「ん？」

そのルクの瞳に、夜の闇を染める火の明かりが見えた。遠めに見えるそれは、どんどん数を増やし、周囲を照らしていく。その中に刃の煌きを見つけたとき、ルクは反射的に身を翻した。

「レギーさん！ レギーさん！！」

サイシャの看病に追われ、先ほどやっと眠りに付いたレギーをたたき起こす。

「なんだ、また、怪我人か……？」

寝ぼけ眼を擦りつつ、レギーは起き上がる。固い床に雑魚寝していた為に固まった体の節々を動かしながらルクの方に視線を向けた。「そうじゃないの、外！ 松明の明かりが……」

「松明……？」

疲労と寝不足ではつきりしない頭を抱えながら、レギーは外に出た。

一瞬の静寂の後、レギーの大喝が仲間に向かって発せられた。

「起きろ野郎ども、敵襲だ！！」

その声に応えて炎の運び手達が悪態と共に起き上がる。携えるのは、歪に光るそれぞれの武器。その得物の光に負けない程に、彼らの瞳もぎらついていた。

「全く、こんなときにどこのどいつだ！」

レギーも悪態をつくど、ルクを引つ張り家の中へ入る。

「いいか？ どこのどいつだか知らねえが炎おれたちの運び手に仕掛けてくるってことは相当の覚悟があるってことだ」

言葉を切って、ルクの瞳を覗き込む。

「乱戦になつちまえば、お前を守るかわからねえ。悪いことは言わねえから、頭のところに行つてろ」

「……うん」

唇をかみ締めるルクに対して、レギーは彼女の頭をなでた。

「気にするな、人には向き不向きがあるんだからな……さあ、いけ！」

追い立てられるようにして、ルクはモルトの眠る一番奥まった部屋に移動した。

騒ぎを増す扉の向こうを気遣いながら、ルクはモルトとサイシャの眠る部屋に居た。二人とも重症でとても戦いには参加できないだろう。

レギーの話によれば、麻酔で眠らせているそうだ。

「ケイフウ、ルカンドさん……」

高まる部屋の外の喧騒に、ルクは耳を塞いだ。

鍛冶屋の建ち並ぶ通りにはジルとハンナ率いる雪華が犇^{ひし}めいている。その松明の明かりから逃れた闇の中、ケイフウとジンは潜んでいた。

シロキアを挑発し、隠れ家の一つでケイフウの治療をして戻った所でこの騒動に出合ってしまった。

「どうしよう……ジンにい」

腕にすがりつくケイフウの頭を撫でながら、ジンは群れの頭を殺すことだけを考えていた。群れは統率するものを失えば崩壊する。

繰り出している者らの衣装に花の印を見つけて、それが雪華なのだと当たりを付ける。

「雪華のジルか」

ぽつり、と咳かれた名前にケイフウが反応する。

「え、ジルが？」

「もしくは、ハンナだな」

俯いたケイフウにジンははっきりと告げる。

「ケイフウ……群れの頭をを殺すぞ」

唇を噛み締め、目に涙をいっばいに溜めながらケイフウは頷いた。

「よし、行くぞ」

煌々と照らす通りへ二人が身を躍らそうとした直後。

「待った」

後ろから聞こえた声に足を止めた。

「サギリ……」

「何やってんだい、こんな中出て行って無事で済むと思ってんのかい？」

溜め息を吐きつつ、双頭の蛇の頭はジンに詰め寄る。

「ちいと、自惚れが過ぎるんじゃないかい？ ジン」

「俺は」

「それに、こんな足手まとい連れて」

ケイフウの頭を鷲掴みにして引き寄せる。

「みんながみんな、アンタみたいに怪我に強いわけじゃねえんだ。

少しは労んな」

引き寄せられたケイフウの服の下からは真新しい包帯が幾重にも巻かれていた。

「ケイフウ、大丈夫だよ！」

「いいや、駄目だ」

「ジン、今仕掛けるのはアタシが許さないよ」

「サギリ……」

「仕掛けるのは、奴らがねぐらを攻め始めてからだ」

「仲間を見捨てるのか？」

「勘違いすんな、炎の運び手達には困らなくてもらうだけさ」

「……助けるんだな？」

鋭さを増すジンの視線、無言で継る様に見つめるケイフウの視線を受けて、サギリは薄く笑った。

「ああ、そのつもりだよ」

「解った。お前の指示に従う」

「ハン、当然だね」

息を殺し、三人は獲物の動きを見守った。

ガツリと矢が壁に突き立つ音が聞こえた。

「いよいよ、始めやがったか」

格子を下げた窓の外、暗闇の中に無数の炎が揺らめいていた。レギーは壁に背を預け、格子から覗き見た。手にするのは使い込まれた弓。

「モルトの頭は、病だし双頭の蛇野郎どもはどこに消えたかわから

ねえと来たもん」

相手から射込まれる矢の間隙を縫って、レギーは矢を射た。
「だつと！」

遠くで聞こえる悲鳴とすぐに射返される矢に、舌打ちする。

「医者が人殺しとは、世も末だな」

「愚痴がでるぐれえなら、余裕だな！」

降り注ぐ矢の雨に、仲間からも声がかかる。

「口より手を動かせボケども！」

言うなり、再び射られる矢。上がる悲鳴に、擲楯が飛ぶ。

「医者辞めて、狩人にでもなつたらどうだ!？」

「人でも狩れつてか!？」

怒鳴り返すレギー、同時に射られる矢。生まれる悲鳴に仲間からは、口笛と囃し立てる声が返された。

一段と激しくなる矢の雨にレギーは舌打ちしつつ、外を覗き見た。

「おい、奴ら来るぞ！」

迫りくる雪華の人並み。矢を射掛けるのをやめて、接近戦で勝負を決めに来るつもりらしい。

「てめえが頑張りすぎるからだろうが、怪我したらしっかり治せよ！ 藪医者！」

人数差を考えれば絶望的な戦い。だがそれでも絶えない仲間の軽口に、レギーは苦笑した。

薄闇の中、隣の部屋からの喧騒にモルトはゆっくりとだが意識の覚醒を促される。

「む……ぐう……」

無意識に漏れる苦悶の声に、ルクはモルトの手を強く握った。

「モルト、さん？」

闇から開けた視界。

「ルク、か？」

モルトの手を握り頷くルク。

「気分は、どうですか？」

モルトの体を案じるルクに彼は笑みを返した。

「外がうるさくて眠れねえな」

太い笑みを浮かべると、上体を起こす。慌てた様に、その背に手を回すルクだったが、彼女の手を借りることなくモルトは体を起こした。

「外は、どんな具合だ？」

「……さつき二回目の突撃を追い散らしたところだ」

聞こえた声は、眠っているはずのサイシャのもの。不機嫌に低められたその声に、モルトは苦笑しルクは目を見開いた。

「朝までは目を覚まさないってレギーさんが言ってたのに……」

「藪医者言うことを真に受けちゃあいけねえな」

口の端を歪めるモルト。

「私の体は、毒も薬も効かない。そういう風に変えてきたんだ」
酷くあっさりど、告げるサイシャ。

「しかし、二回目か……相手はわかるか？」

「さあ？」

考え込むモルトに、サイシャの返事は素っ気無い。

「ルク、わしに手を貸してくれ」

「だ、だめですよ！ 皆どれだけ心配したと思ってるんですか！」
ルクの肩に置かれたモルトの手。そこから伝わるモルトの熱に負けないようにルクは気持ち強く持った。

「やめときなよ、爺さん……痛っ」

寝台から起き上がるサイシャの瞳がルクを見つめる。背中を気にしながらも、彼女は黒の衣服に袖を通した。

「私達のと、コイツは違うんだ。分かってくれって言ったって無駄さ」

寝台から降り立ち、一度だけ、ふらりと体が揺れる。

その姿に、ルクの中の怒りに似た感情が燃え上がる。ツカツカとサイシャに歩み寄ると、思い切り頬を張った。

「なんで、貴方は……!!」

「このっ……」

歪むサイシャの口元。敵意をありありと示す表情に、大抵の者は恐れをなすだろう。だが、それを真正面から見返し、ルクは涙を溜めながら彼女と向かい合った。

「そんな無茶ばかりするんですか！ そんなに私やレギーさんや、ルカンドさんが信じられないんですか!？」

「私が、ルカを信じてないってのか!」

胸ぐらを掴み、睨み上げるサイシャにルクは毅然と言い返した。

「信じてませんよ！ 独りでお城に行つたのだから、ルカさんがどこかでもう生きてないと思つたからでしょう!？」

サイシャの手を払い、彼女の肩を掴む。

「ルカがさらわれる原因になつたお前が、ふざけた事を言つてんじやない!」

振り払われたルクの手。僅かに止まり、俯くルク。だが再びサイシャの瞳を見返すと、一気に思いの丈をぶつけた。

「そうです。私が居なかつたら、ルカンドさんは攫われる事なんか無かつた……だからこそ、私が一番あの人を信じていなきゃいけないんです！ ルカンドさんが戻つてきた時に、おかえりなさいってみんな無事ですつて言つてあげたいんです!」

サイシャに振り払われた手を再び彼女に伸ばす。

「だから、サイシャさん無茶はしないで！ 貴女が居なきゃルカンドさんだつてきつと泣いちゃうから!」

伸ばした手は、小柄なサイシャの背に周り彼女を抱きしめた。

ルクの腕から伝わる温もりに抱きしめられながら、サイシャは動けずにいた。圧倒されてしまった。弱くて何も出来ない良いとこ育ちの女だと思つていたルクに、その思いに彼女の怒りが吞まれてしまった。

不思議と、サイシャに悔しさは無かった。それは多分、ルカンドが泣いてしまうと言うその情景がありありと思い浮かんでしまったからだと思われた。

ルカンドが泣くのは、嫌だなと納得してしまったのだ。

抱きすくめられたまま、ルクを見上げればグジグジと泣いている。

「……放せ、バカ」

「嫌だ、サイシャさんが無茶しないって言うまで放さない！」

「背中が、痛い」

「え、あ！ ごめんなさい！」

飛び退くように、サイシャから離れたルクにサイシャは溜め息を吐いた。

「誰かさんに、背中を傷を広げられたから私は寝てる。爺さん後ろしく」

それだけ言うと、事態を飲み込めないルクを置き去りにして寝台に傷付いた身を横たえた。

「大したもんだな」

ルクは掛けられた言葉に、曖昧に頷いた。

「さあて、折角養生するつてえ悪ガキの為にジジイが一肌脱ぐか」

「だ、だめですよ！ 病気なんですから！」

立ち上がるうとするモルトを支えながら、ルクは再び彼を寝台に寝かせつけようとするが、年の分だけ彼は老獺ろうかいだった。

「心配いらねえよ、相手がどこだろうとわしが出て行けばこの争いは終わるさ。派手に動きもしねえし、大声もださねえ。少し顔を出すだけだ。な、それなら良いだろ？」

「え、でも……」

「おめえだって、無駄に血が流れるのは好きじゃねえだろ？ ましてや、戦ってるのはわしの弟子どもだ。な、少しだけだ」

「なら、なら私も一緒にいきます！」

「む、けどなあ」

戸惑うようなモルトに、ルクは詰め寄る。

「すぐ終わるんですよね？ 危険はないんでしょう？ なら、私も行きませす！」

「分かったよ」

ルクはモルトの肩を支えながら、喧騒と怒号飛び交う隣室へ足を踏み入れた。

狭い入り口から、殺到してくる雪華の荒くれ者。

入り口はひとつしかないのだから、守る側にとっては守り易く、その分有利だった。

しかしそれも、数の不利を覆すまでには至らない。

弓が得意なレギーでさえも、弓を短剣に持ち替えて応戦する。

扉の奪い合いからその戦いは始まった。味方の血で濡れ、更になの上から敵の血を浴びる壮絶な混戦。傷を負わない者は皆無の状況で、レギーの目の前で仲間が斬られる。

敵の刃を受け止めている仲間の脇から、敵へ向けて短剣を突き出す。

わき腹をえぐり、悲鳴を上げる敵の顔をすぐ近くで見ながら、その体を突き飛ばす。だが、徐々に数の差に負けて、部屋の中へと押し込まれていくレギー達。扉の位置を確保した雪華は一気に攻め寄せようとはせず、ジリジリと間合いを計るように徐々に迫る。

「こんばんは」

今すぐにでも、殺し合いの始まりそうな一つ屋根の下に。能天気とも言える声が聞こえた。

一瞬の静寂の後、漣のように炎の運び手達の間で動揺が広がる。

「雪華のジルっ……」

煌びやかな衣装に、結び上げられた銀の髪。片手には煙管を持ち、それを紅を塗った口元に当てている。娼館で見かけるのと寸分違わぬ立ち姿、唯一相違があるとすれば煙管を持って居ない方の手で、一振りの小剣を持っていることだろうか。

「そろそろ諦めて降伏してくれないかねえ？ 悪いようにはしないよ」

立ち上る紫煙に目を細めながら、ジルは炎の運び手達に問いかけた。

「へっ……おとといきやがれ！」

ジルに向かい投げられる手斧。正面から迫るそれを、最小限の動きで避けるとジルは気だるそうに首を振った。

「やれやれ、どうしてこう男つてのは馬鹿ばかりなのかねえ」

トンと、煙管から火を落とし手下に命令を下す。

「やっちまいな」

ジルの手にしていた小剣が、銀色の軌跡を伴って先程彼女に手斧を投げた男を貫く。双方とも上がる雄たけび、血で血を洗う戦いが幕を開けた。

「ち、なかなか崩せないね」

軽く舌打ちして、ハンナは闇の向こうに佇むモルトの隠れ家を睨んだ。

既に手下を突撃させたのは三回を数える。厄介な矢も黙らせ、満を持しての突撃を、三度までも防がれた。怪我人の数も、三十名近くになるが同等の被害は与えている。全体の数からすれば、まだ余裕のある数字だ。

「次こそ、落とさなきゃあね」

気に掛かるのは、蛇の動向。

突撃させた手下の話によれば、敵の中に双頭の蛇は混じって居なかつたらしい。

好都合だった。蛇と炎の運び手を別々に葬れるなら、それに越したことはない。だから、できるだけ早く。炎の運び手を片付けなければならぬ。

「ジル、仕度は出来てるんだろうね？」

「ええ、大丈夫ですよ」

店に出るのと同じ格好でジルは佇んでいる。

「隙間なく、囲んでますし……さつき死合ってみた感じだと後一回が限界でしょうね」

煙管を弄びながら、気だるげにモルトの隠れ家を横目で流し見る。「そうかい……腕の良い奴を全員連れていきな。次で必ず決めるんだ」

「はいはい」と

軽く頷くと、ジルはハンナの周囲にいる雪華の精鋭に声をかけた。「それじゃあんた達、ちゃっっちゃと片付けるよ」

一歩隣室に足を踏み入れたルクはその惨状に目を見張った。

「レ、レギーさん！」

誰の血か分からないほどに、濡れたレギー。その彼が手当てをしている男には、手首から先が無かった。

「モルトの頭……」

ルクの声に反応して振り向いたレギーは、呆然とモルトを視界にいった。

「くっ……病人は寝てやがれ！」

一瞬迷い、それを振り払うようにレギーは怒鳴る。

「頭あ……」

「……親方」

レギーの声に反応したのか、そこかしこから傷つき動くこともままならない彼の弟子たちの声が聞こえる。呻き声と大差のないその声に、モルトは眉をしかめた。

「すまねえな、苦労ばかりをかけちゃって」

柄の長い戦斧を杖代わりに、立て籠もっていた部屋から出て行くとする。

「モルトの頭っ！」

治療をしている男から、顔を上げずにレギーは声を張り上げた。
「死ぬんじゃねえぞ！」

思うとおりに行動できない歯がゆさ、胸一杯に広がるそれを飲み下しレギーは叫んだ。

「わしを、誰だと思ってるんだ。臥せようが歳食おうが、炎の運び手の頭だぞ」

背中越しに答えて、モルトは扉を開ける。

「ルク、ありがとうよ。もう十分だ」
「嫌です！」

モルトの肩を支える手に力を込める。

「モルトさんが、ちゃんとみんなの所に戻るまで見張っていますから」

見上げる真剣な瞳に、モルトは苦笑した。

「わしが、30年程若返ったなら口説いておったな」

「へ？」

豪快に笑い、モルトは十年來の友人が率いた雪華と向かい合った。

雪華の精鋭を率いてモルトの隠れ家を襲おうとしたジルは、その崩れかけた扉から出てくるモルトとルクを見つけて眉を顰めた。

「降伏しますって顔じゃないねえ」

面倒ごとがまた増えたと、心の中でぼやきながら二人に対峙する。今にも二人に襲い掛かりそうな手下を睨んで下がらせる。

「何のようだい？ 降伏しますってんなら歓迎なんだけどね」

モルトが襲い掛かってきても避けれるギリギリの距離を保ちつつ、表情には妖艶な笑みを浮かべる。煙管を片手で弄び、もう片方の手は二人から見えないように短刀を握る。

「ジル、もう止めようよ。こんなことしたって何にも……」

モルトを支えながら、ルクは言葉を発した。

「それがそうも行かないのさ。まあこっちの事情で申し訳ないんだけど、シロキアの所が殺気だつててね」

肩を竦めながら、間合いを計る。

「双頭の蛇を皆殺しにしてやるって息巻いてるのさ」

「ハッ、シロキアめ。無駄に血の気が多いのは直つてねえな」

口元を歪めて笑うモルトに、ジルは苦笑を重ねた。

「まあそんなわけでね。あんた達の首が」

瞬間、抜き打たれるジルの短刀。

「要るってわけさ！」

鞭のように撓る腕が、最短距離を走りモルトの首筋へ喰らい付くようにする。

「モルトさん！」

飛び散る鮮血。

「っち……」

舌打ちはジルからもれた。彼女の放った突きはモルトの首筋に至る手前、鍛冶仕事で固く傷ついたモルトの手を貫いていた。

「……おめえさんは、ハンナの娘だったか？」

「うちの所はね、拾われた娘や売られてきた娘は皆女将さんの娘だよっ！」

そのまま喉を刺し貫こうと力を込めるジルの手を、串刺しにされた手でそのまま握る。

「くっ……」

ジルの短い苦悶の声。握られた手が、ビクともしない。それどころか、傷口を広げることが覚悟の上で、潰れるほどの力で握り締めてくる。

煙管を懐に瞬時に仕舞うと、もう片方の手にも短刀を握り、素早く自身を掴んでいる腕に向かって振りぬく。

その刃を避けるように、モルトがジルの腕を解き放ちジルはモルトから距離をとった。

「やれやれ、死にそうな面してよくもやってくれるねえ」

握られた腕を擦り、両手に短刀を握ってモルトを見据える。

「ジルっ！」

「黙つときな、ルク。これはね、炎の運び手と雪華の15年来の決着なんだ」

低められた声音に、目つきの変わったジル。刃のように鋭い視線は、ルクの知っているジルとはまったく別人のものだった。

「お嬢ちゃんが良く吼えるじゃねえか」

ルクを自身から遠ざけるとモルトは長柄の戦斧を構える。

「わしは、ハンナに用事があるだけだ。そこを通してもらうぞ」

「生憎と女将さんは甘くてね。あんたに会って折角断ち切った情に絆されちまうとも限らない。ここで死んでおくんなさいな」

腰を落とし、短刀を構える。優美な衣服の下から艶かしい白い足が覗き、短刀の剣先はモルトの首に向けられる。

「姐さん……あつしらも」

「下がってな！」

手助けに入ろうとする手下を一喝して、雪華のジルは炎の運び手のモルトと対峙した。

「邪魔は入らない。さあ、モルトの小父さん、あたしの手で死んでくださいな」

殺気を込めた視線ですらも妖艶に、ジルはモルトに向う。

地を這うように走り、下からの一閃。

ガツリと長柄に受け止められるのを確認して、顔に向かって横から一撃。舞姫のように、くるりと回ってさらに突きを繰り出す。さらに翻る裾の合間から、遠心力を利用した蹴りを放ちモルトに反撃をさせる間を与えない。

息もつかせぬ攻撃、その合間の僅かな隙を突いてモルトが戦斧を一閃する。豪風を伴ったその一撃に、ジルの舌打ちが漏れる。

「ちっ……」

その一撃で結っていた髪の毛の留め金を弾き飛ばされ、銀色の長い髪が背に掛かる。流れる冷や汗を無視して、振り抜かれた戦斧の戻っ

てくる前に、再び暴威の斧の間合いに身を躍らせた。

綱渡りをするような攻防を止めたのは、雪華から聞こえてきた悲鳴だった。

「双頭の蛇だっ！」

後ろから聞こえてきた叫び声に、モルトの間合いから素早く飛び退くとモルトを睨みながら、ジリジリと後退を始める。

「手は出さなくていい……けど、困んで逃がすんじゃないよ」

率いてきた手下に声をかけると、瞬く間に身を翻しハンナがいた場所へ駆けて行った。

賊都15(後書き)

PV10・000HIT致しました。

ご愛読ありがとうございます。

何分忙しく執筆が滞りがちですが、今後とも何卒ご贔屓にお願いします。

「くそっ……あたしとしたことがっ！」

雪華の手下を掻き分けて進みながら、ジルは齒噛みした。蛇の動向には注意を払っているつもりだった。

なのに、肝心なときにこのざまだ。

モルトとの戦いに熱くなりすぎ、ハンナの周囲の警戒を怠ってしまったのが拙かった。

長い髪が乱れるのも構わずジルは駆けた。

もし、女将さんに何かあつたら……。

唇をかみ締め、ジルはただ早くハンナの元にたどり着く事だけを考えた。

「よお、雪華のジルさんじゃないか」

ハンナの喉元に無骨な短剣を突き付け、サギリは口元を歪めた。

「あんたの女将さんが、危ないって時に随分遅い登場だねえ」

嘲笑うサギリの背後では、魔女の狼が睨みを効かせ、サギリとジルの間を遮るようにケイフウが身の丈に合わない長剣を構えていた。「女将さんを放しな！」

「嫌だね」

ハンナの首筋に短剣の刃を食い込ませながら、サギリは口の端を歪めた。

「お前こそ得物を捨てなまさかコイツを見捨てるってえことは、ないだろう？」

なんとか隙を見つけたいジルと、笑みを見せる余裕のあるサギリ。その間に割り込んだのは、ハンナの静かな声だった。

「やっちまいな、ジル」

「艶花のハンナも地に落ちたね。てめえの手下の事もわからねえとは……あれはお前を殺す覚悟なんて持てねえさ」

嘲笑うサギリは、ハンナの首筋に押し当てた短剣を僅かに引いた。現れる赤い線と、一筋の血。

「女将さん！」

ジルの悲鳴が響き、サギリの笑みが深く禍々しくなる。

「得物を捨てな！ ジル！」

「捨てるんじゃない！ 私ごと双頭の蛇を皆殺しにするんだ！」

相反する二つの声にジルは頭を抱えた。頭を占めるのは、ハンナが死ぬかもしれないということのみ。

激しく頭を降り、耳を塞いでその声から逃れようと必死に抵抗する。長く銀の髪が、顔にかかり張り付くのも厭わず振り乱す。

「あたしは……」

涙と共に瞳に浮かぶのは、狂気の光。怪しく光るそれが、サギリを睨み据える。

ゆっくりとジルの手が拳がる。握られているの短剣が、松明の火を反射して、鈍く光る。

「やめねえかつ！」

一喝する野太い声に、ジルが振り下ろそうとしていたその腕は、ビクリと動きを止めた。

「おやおやモルトのジジイじゃないか、とっくにくたばったと思ってたんだが無事で何よりだねえ」

嗤うサギリと、後ろを振り返るジルが見たのは、ルクに支えられたモルトの姿。

「動かすなって言っただろうに！」

舌打ちを一つすると、ジルはサギリを睨み付けた。

「蛇娘、ハンナを放せ！」

病に蝕まれているとは思えないモルトの声に、ハンナの首筋に短剣を当てたまま、もう片方の手でサギリは頭を掻いた。

「ち、しくったなあ」

誰にも見せないように俯いて、呟かれたサギリの言葉はハンナにだけ聞こえた。

驚いたのはジルだ。

モルトの言葉の意味する所が理解できず、一歩引いてモルトサギリを交互に見返す。

「一つ貸しにしとくよ。爺さん」

あっさりとはンナの首から短剣を引くと、サギリはハンナの背に短剣を押し付けながらハンナとモルトの間に居る雪華の雑兵を睨み付けた。

「どきな！」

発する暴威に似た威圧。それに、自然と道ができる。

「さあて、数年ぶりの再会といこうか」

ハンナの背を押しサギリの声は、当の本人に届いていなかった。

ハンナの瞳が捉えるのは、病に蝕まれたモルトの姿。そのみが彼女の全ての思考を奪っていた。

ふらふらとモルトに近寄るハンナと、ルクから離れて一人杖にすがり歩くモルト。

ハンナがジルの横を通り抜ける。

ジルが目に入っていないハンナに、ジルもまたハンナに掛ける言葉を見つけれなかった。

そのジルの目の前に迫るサギリ。歩みを止めよとしないサギリに、咄嗟にジルは短剣を突きつけた。

「動くんじゃないっ！」

小さく囁くような大ききさで、だが必殺の気をこめたジルの声。

サギリはにやり、と嗤いその場で動きを止めた。

つい先ほどまで、殺し合いをしていた人の群れはその光景をただ声もなく見守っていた。

雪華の兵たちに囲まれた中央、人だかりの中二人はただ見つめ合っていた。

互いに言葉を捜すように、ただ相手の姿を労るように見つめあう。「そんなに、なっちまって……」

先に言葉を発したのはハンナだった。涙で掠れるその声に、日頃のハンナの事を知っている雪華の手下達は、信じられぬものでも見るような面持ちだった。

「だいぶ、年を取っちまったからな」

答えるモルトの声には、隠し切れない疲労と苦痛の色がある。だがそれを、押し殺してモルトは笑った。

「ここいらで、手打ちってことにしねえかい。ハンナ」

親しみをこめた優しいモルトの声に、若い娘のようにハンナは俯き答えない。

「おめえさんが金に拘る理由をわしは、知っている」

ハツと顔を上げるハンナの顔に浮かぶのは、後悔の念。

正しいと信じてても尚悔いの残る自分の生き方、その苦悩の色だった。

「モルト……」

呟かれた言葉に力はない。

「ジルを見れば、おめえさんの正しさがわかるってもんだ。なあ？ 立派に育った娘じゃねえか……だからもう、肩の荷は降ろしちまっつて良いんじゃないかねえのかい」

ガドリアに打ち捨てられた子供を引き取り育てる。口で言うのは簡単だ。

だがその為には金が必要だった。何にもまして莫大な金が……。その金の為に、ハンナは愛する男を裏切り、育てら子供らで色町を仕切り、金を生み出してきた。ハンナ自身それを何度後悔しただらう。

ただ、他に選ぶ道がなかった。

目の前で死んでいく子供を助けるためには……。

ぐつとかみ締めたハンナの口から漏れるのは、声にならない声だった。

「モルト……私は」

かつて愛した優しさが、ハンナの乾いたはずの心に染み入ってくる。捨てたはずの涙はとめどなく、殺し続けてきた後悔の感情は胸を打つ。

肩にかかる、モルトの手にそつと自らの手を重ねるとハンナは声を絞り出した。

「……艶花のハンナは、今日を持って引退させてもらうよ、ジル」

黙って二人を見守っていたジルは、静かに頷いた。

「はい……」

それが、育ててくれた親に対する恩返しだと信じてジルは頷いた。「んで……この喧嘩まだ続けるのかい？　ジル」

面白そうに事態を眺めていたサギリの言葉に、ジルは振り向いた。「まあ、女将さんが引退しちまったんだ。うちの負けってことで良いさ……新しい艶花も決めなきゃならないしね」

振り向いたその顔は、いつもの油断のならないカラツとしたジルだった。

「ただ、あんたらが続きをしたいってんなら……相手になるよ」

妖艶に笑い、サギリに微笑む。

「けっ、アタシらそんなに暇じゃないのさ、シロキアの爺に引導を渡さなきゃならないんでね」

「ふう〜ん……それじゃあたしらは帰るよ」

「好きにしな」

「引き上げだ！」

ジルの一声で、雪華は引き上げていく。怪我をしたものに肩を貸し、歩けないものを背負いながら。

次第に遠くなる松明の火、やがてそれは完全に闇の中に吸い込まれていった。

賊都16(後書き)

やっと更新です。
遅くなり申し訳ありません。

賊都17

ハンナの引退から一日。

サギリの示したシロキアとの対峙の当日、その知らせはシロキアの耳に入った。

「ハンナが、引退だと？」

頬にある大きな傷痕を歪めながら、シロキアは笑った。

「あの強欲ババアがな……結局ガドリアを仕切れるのは俺だけってわけだ」

心底可笑しそうに笑うシロキアの目だけが、爛々と獲物を狙う獣のように輝いていた。

「双頭の蛇のガキどもを血祭りにあげるぞ！」

集めた手下は300を上回る。

博徒はもちろん、腕っ節に覚えのある工夫や、流れ者の用心棒など手下の種類は多岐に及んだ。賊都と呼ばれるガドリアで、10年来中心に座り続けた男の重みが、空間を歪ませるような圧力となって手下達を震え上がらせる。

「戦だ、野郎共！」

「おう！」

振り上げた太刀に、手下達の喚声が重なる。

まだ中天に日は高く、彼らの活動する時間には早い。

だが、高まった威勢はそんなことをお構いなしに徒党を組ませ街の中を練り歩いていく。手にするのは、抜き身の刀や槍。陽の光を受けて輝く凶器を、威嚇するように見せ付ける。

その行列の中心白い羽織を纏い、手には白木鞘の太刀を持ったシロキアが悠然と進んでいた。未だ黒々とした頭髪は短く刈り揃えられ、羽織の下には木綿の着流し姿。爛々と輝く目には凶気に似た残酷な光。

飢えた狂犬のごとき様相で、シロキアは獲物を求めて彷徨っ

た。

「何やってんだかね」

狂騒振り撒くシロキアの行動に、先ほど新たな艶花に就くことに決まったジルはため息をついた。遠めに眺めていてさえ、その威容は良くわかる。ガドリリアの実質的な権力者だからこそできる芸当なのだろう。

だがきつと、あの荒地の魔女はそんなものには怯まない。

先日対峙した、あの容姿。

まるで……御伽噺に聞いた王のような威風だった。

ふと、そこまで考えてジルは苦笑する。

「……あたしも、毒気に当てられちまったかね」

こんなことじゃ、サイシャ達のことを笑えない。

ガドリリアに吹く風が、ジルの降ろした長い銀の髪をそつと撫でた。

「ほう、四役の一角が落ちたか」

にやりと、頬を歪めて嗤うのは玉座に座るヘルベル。頬はこけ、以前よりも目に宿る狂気の色は濃くなっている。笑う口元は禍々しく、三日月のように撓む。

報告に来た近衛騎士バーンですら、自らの主の変貌に目をあわせられない。

それ程の異常な雰囲気。

「やはり問題は蛇か」

「そのように心得ます」

愉しげに嗤う声からは、不安の色はない。だが、だからこそ怖ろしいとバーンは感じた。

「して、あの豚は見つかったのか？」

「いえ、クルドバーツは以前姿を見せませぬ。店の方も監視を続けていますが、そちらに表れた様子もなく……」

「なるほどなるほど……逃げ出した、か」

クツと短い発作のような笑い声が響く。頭を垂れたままのバーンに対して、ヘルベルは無邪気に言葉を掛けた。

「ご苦労。蛇と老いばれ……どちらか生き残った方に向けて兵を出すぞ。準備を怠るな」

「御意」

実直に頷くバーン。

「愉しくなってきたではないか、なあ？」

主のその言葉に冷たい汗が背中を伝う。意味などない戯れのような言葉、だがその行間に潜む冷たい毒がバーンの胸を締め付ける。

「ヘルベル様」

身の内の勇を奮い起こし、バーンは主に声を掛けた。

「なんだ？」

宙に浮いた言葉に、地を這うバーンの言葉が続けられる。

「四役を廃した後、ガドリアは収まりますでしょうか？」

「さあ、どうでも良からう」

にやりと、気の触れてしまった者のように笑う主の姿。

「……はっ、無用なことを聞きました。お許しを」

再び頭を垂れるバーンに、ヘルベルは退出を命じた。

辺りにはまだ血の臭いの漂うモルトの隠れ家。

負傷したものは粗方手当てを終え、動かせるものは他の隠れ家へ移していった。動けない程重症な者は、そのまま寝かせられていたが、その周りを忙しくルクが走り回る。

レギーの助手として、怪我人の手当てに文字通り目の回る忙しさだった。奇跡的にあれ程の斬りあいの中で死者は一人も出なかった。突撃は熾烈を極めたが、雪華の撤退の早さもあって命を取り留めるものが多かったのだ。

その手当ても一段落しルクは目当ての人物を捜し求める。

「サギリなら奥の部屋だ」

冷たい落ち着いた声に振り向けば、琥珀色の刃のように鋭い瞳をした青年が壁に背を預けながらルクを見ていた。

「あの……」

「目が追っていた」

端的に、必要な答えだけをくれるジンは、言い終わると壁から背を離す。

「いえ、貴方のお名前は？」

「……ジンだ」

そのまま怪我人の間を通り抜け、外へと消えた。その後姿を見つけていたルクに、レギーが声を掛ける。

「あいつは変わり者だからな、あんまり気にするんじゃねえぜ」

「変わり者？」

首をかしげるルクに、レギーは血で汚れた白い衣服を脱ぐ。

「狼さ、人を寄せ付けず魔女にだけ懐いてやがる」

ふん、と鼻を鳴らすとレギーはうめき声を上げる怪我人の診察に向かう。

奥の部屋には、サイシャとサギリがいた。

「失礼、します」

寝台に腰掛けて、寝たままのサイシャと喋るサギリに声をかける。

「サギリさん……お話があります」

「あん？」

やれやれと、頭を掻くと寝台から腰を上げる。その腕をサイシャが捕まえる。

「さー姐」

「今は寝てな」

ぼんぼんと、気安くサイシャの頭を叩いてサギリはルクの前に立つ。

「なんだい、お嬢ちゃん」

「ルク・ツラド……と申します」

「知ってるよ」

面倒臭そうに、ルクの青い瞳を見つめ返すサギリ。サギリの黒曜石の瞳は、全てを飲み込む黒の色。

その瞳の深さに、ルクは恐怖する。しかし、その恐怖を飲み込んで口を開いた。

「私の、ツラド家がどうなったか教えていただけませんか？」

真剣な眼差しを、硬質な宝石のような瞳が受け止める。

「滅んだよ」

端的な、だが何より重い一言。

「ツラド家の騎士達は……？」

「全滅さ、一人も生き残っちゃ居ないだろうね」

薄々考えてはいた。だが、その事実は余りに重い。

「……最後に一つだけ、貴女はどうして私をここに連れてきたんですか？」

にやり、と陰湿に粘り付くような笑みを顔に浮かべサギリはルクの耳元に顔を寄せる。

「決まってるじゃないか……金になるからだよ」

「……貴女の思い通りには、なりません」

サギリの悪意を跳ね除けるような強い視線。泣き崩れると思っていたサギリは、ルクの思いのほか強い心に戸惑った。

「ま、好きにしてみな。アタシの邪魔をしないなら、しばらくは放っておいてあげるよ。アタシは忙しいからね」

笑顔の質を変えてそれだけ言うとサギリは部屋から出て行った。

サギリが出て行くことを確認すると、ルクは俯いてしまう。ぼやける視界に、ルクは自分自身が泣いている事を悟った。

かみ締めた嗚咽が部屋に響く。

その声を、サイシャは寝台に横になったまま無言で受け止めた。

「ルク、どこ行った？ 診察手伝えてくれ！」

隣の部屋から響くレギーの声に、涙を拭く。

「はいっ！」

気丈に振舞うルクに、サイシャが声を掛けた。

「……おい」

寝台に横になったままルクに背を向けてはいたが、サイシャの声はルクに向けられている。

「え？」

「サー姐は、あんまり素直じゃない。それだけだ、行っちまえ」

軽い舌打ちを伴った言葉。だがその内包する気遣いに、ルクは驚き嬉しくなった。

「……うん、ありがとう」

返事はしないサイシャの背に微笑みかけると、ルクはレギーの手伝いに隣の部屋に行った。

「……バカ」

一人のなったサイシャは、小さく自分自身を罵った。

少し軽くなった心が、妙にくすぐったかった。

モルトの隠れ家から出たサギリは、外で待っていたジンと合流する。そのジンの琥珀色の瞳が自分を非難しているように見えて口を尖らせた。

「なんだよ、文句でもあんのかい？」

「別に」

立ち止まらずに、ジンの言葉を聞くと軽く舌打ちして、イライラと頭を掻く。

「じゃ、アンタはなんでそんな目でアタシを見てるのさ」

眉間に皺をよせ、泣き出しそうな瞳でサギリを見るジンにサギリは食って掛かった。

「なんでもない」

「フン！ アタシがあのお嬢ちゃんを挑発したのが不満そうだね？」
笑みを浮かべるサギリ。

「ああ」

そう言ってサギリの隣りに並ぶ。

「アタシが初対面の奴を挑発するのはね、怒ればそいつの本性が見えるからさ」

意地の悪い笑みが彼女の顔を覆う。

「俺の時もか？」

「当たり前だろ？」

一拍の間を置いて、ジンはサギリに問いかける。

「……どうだった？」

くすりと微笑みを零してサギリは皮肉げに口元を歪めた。

「ああ……噛み付くことしか考えない獣だったよ」

からかうような、愉しげに聞こえるサギリの声にジンは軽く舌打ちした。

「悪かったな」

じゃれ合いに似たやり取り、それを噛み締めジンは前を向いた。
「さあて」

ジンの様子を観察すると、サギリも前を向く。
「シロキアの爺さんに引導を渡して、手に入れるかあ！」

チラリと、僅かに寄せられるジンの視線。それを感じながら、サギリ愉しげに口元を歪めた。

「アタシらの故郷ってやつをな！」
力強く頷くジン。

晴れ渡る蒼穹に、サギリの声は吸い込まれていった。

遠くで聞こえる喚声、怒号が風に乗って聞こえた。

「チツ、どいつもこいつも！」

「胴元！ 五番組が敵に襲われています！」

シロキアは300人にも及ぶ手下を五つの組に分けた。万遍なく兵を配したそれぞれ組に、街中を練り歩かせた。

蛇を挑発していぶりだす。見つけた蛇を五つ組の兵を使ってなぶり殺す。

単純故に、穴の少ない作戦。

だが、場所が悪かった。シロキアが襲撃を受けたのは街の東側、色町が犇ひしめく界限だった。

色町は元々入り組んだ作りになっている。客同士のトラブルが起こらないように配慮した結果、色町全体は細い路地を幾重にも張り巡らせた迷路に近い構造になっていた。

蛇を燻り出すのと、色町を仕切るジルに自身の力を誇示する目的もあって悠々と練り歩いていたシロキアの五番組にケイフウ率いる双頭の蛇が襲い掛かった。

薄暗く大人二人がやっと通れる程度の狭い路地から突如として長剣が突き出され、瞬く間に二人が切り倒される。援護するのはケイフウの手下二人。といっても、ケイフウ程に使える手下はいない。

精々がケイフウの邪魔にならないように、後ろから投擲剣を投げる程度だ。

しかし、それでもあるとないとは段違いだった。

シロキアの手下が得物を振りかぶった瞬間、目の前を投擲剣が横切り一瞬動作が遅れる。

その間に、ケイフウの剣が入り込む。

「くそつ、いったん退け！」

シロキアの手下から声があがる。その声に合わせて、ケイフウとその手下は路地を走り去る。

「逃げたぞ、追え！」

ケイフウが背を向けるや五番組の者達は、その姿を追う。

迷路のような路地を何度か曲がるうちに、五番組の先頭はケイフウの姿を見失ってしまった。

「ぎゃあああ！」

悲鳴。

「いたぞ、後ろだっ！」

声が聞こえたのは五番組の最後尾。追うことに夢中になっていた五番組の先頭と、最後尾ではいつの間にか相当の差がついてしまっていた。路地に無造作に立つ五番組の者達に、後方からケイフウが再び襲い掛かる。

「た、助けてえあ！」

悲鳴もろとも、ケイフウの長剣がシロキアの手下を切り裂く。味方が多いために満足に得物を振るうことができず、次々ケイフウの長剣の餌食になっていくシロキアの手下。

「に、逃げるああ！」

敗色濃厚になった彼らを繋ぎ止める者はなかった。シロキアの率いる一番組ならともかくも、彼らに目の前のケイフウきょうふうを退けるものはない。

一人が叫びだせば、五番組の者達は次々とケイフウに背を向けて逃げ出す。やがて、路地にはケイフウに斬られた手下だけが転がる

だけになっていた。

「五番組が？」

報告に来たのは、シロキアが五番組を任せていた手下だった。

「はい、兵隊どもが浮き足立ちまいました……俺にはどうする」とも

「ほお……そうかい」

にやりと、笑うシロキアの顔には凄みのある笑顔が浮かぶ。

「で……てめえは一体なんで戻ってきたんだ？」

「え、そ、そりゃあ……胴元に報告しなきゃならんと思ひまして……」

シロキアの頬にある古傷が歪む。

「そうか。ご苦労だったな」

言葉が終わると同時に、シロキアの手にある白木作りの鞘から太刀が抜き打たれる。

ぶしゅり。

音がしたのは、報告に来た手下の喉元。

「え……？」

自身に何が起こったのかわからず、間の抜けた声を出した手下は、シロキアの、白の羽織が血で染まったのを見た。

どさりと倒れる手下を、怒り狂う瞳で見下ろしてシロキアは吼えた。

「いいか、てめえら！ 敵を見て逃げるなんざ俺の手下にやあいらねえぞ！ 死にたくなきゃ蛇どもの屍を引きずって来い！」

長年シロキアの手下をしている取り巻きまでもが一瞬それに息を呑み。

「おう！」

恐怖と興奮がない交ぜになった、鬨の声をあげた。

「くっ……」

路地に潜み、シロキアの手下を翻弄していたケイフウだったがその体は既に傷だらけだった。一番大きな傷は肩を槍で切り裂かれた傷、穂先が肩を掠めたただけだったが、体の小さいケイフウにはそれで充分重症といえた。

他にも無数に細かな傷がある。小さな傷から血が流れ、それが乾いたと思っただけですぐにまた傷が出来る。戦い続けているということが血を流し続けているようなものだった。

「ケイフウさん、そろそろ引かないと」

ケイフウの手下の一人が、小声で囁く。

「うん……」

ケイフウの返事が重いのは、周りが囲まれつつあるのを知っているからだ。五番組を壊走させたところまでは良かったのだが、その後残った四組はシロキアから直接指示を仰ぎ始めた。

街を練り歩くよりも、ケイフウ達を追い詰めることを優先したシロキアは、薄暗い路地のひとつひとつを念入りに潰して行く。徐々に囲い込まれ、身動きが取れなくなっていくケイフウ。だが北の方角の抜け道だけが、開いている。

「北の抜け道がまだ使えるはずです、行きましょう」

「うん！」

迷っている暇はない。

頭を振って迷いを振り切ると、ケイフウは手下を連れて路地の抜け道を走った。

賊都 19

歪狭わいきょうに曲がりくねる抜け道をケイフウ達は走る。大人なら、身を縮めて通ることがやっとの狭く暗い道。だが、その道こそが唯一彼らを生還させる道だと信じて駆け抜ける。

「もう直ぐ、でるよ」

後に続く二人は黙ってそれに頷く。二人は顔立ちも、体格もケイフウより僅かに大人びているが、同年代らしかった。

歪狭な隠し通路を全速力で飛び出たケイフウを出迎えたのは、煌めく白刃。

それに反応できたのは彼にとって本能に近かった。背負った長剣を最速で抜き放ち、重さに任せて白刃ごと敵を叩き潰す。

「止まるな！」

後ろを走る二人に声をかけると、斬り捨てた敵の脇をすり抜けた。畏だ！

わぁ、と上がる周囲の喚声にきつく唇を噛んだ。シロキアはワザと北の包囲を緩くして、ケイフウ達を誘い出したのだ。既に通ってきた抜け道は塞がれていた。押し包まれて殺されたくなければ、突破するしかない。

「走れ！」

祈るような気持ちで命じたケイフウの声に、聞き覚えのある悲鳴が重なった。振り返れば、付き従って来た二人のうち一人が敵に囲まれてしまっている。

「先に行つて！」 追い付いてきた一人の横をすり抜けざま声をかける。逆走するケイフウを信じられないように目を見開いて見た後、手下はケイフウの指示に従い包囲を突破した。

獣は爪牙を持ち、敵を引き裂く。物心ついたときから、殺戮の原野に生きてきたケイフウにとって爪牙とは身の丈と同じ程の長剣に他ならなかった。

本来ならば、巨躯の男が使つたために設えられたその武器は類い希な強度と重量を併せ持っていた。小柄なケイフウには大き過ぎる爪異常な腕の力でもない限り当然振り回される。

普通なら分不相応として武器を替える。だがケイフウは、巨大すぎる爪を扱えるだけの感性をもっていた。振り回されることを前提に、僅か力の流れに手を加えてやる。そうすることで長剣は、ケイフウの思い描く軌道を断ち切る爪となった。

長剣の重さは彼の非力を補い、強度は幾多の敵を向こうに回しても安心して叩き伏せるだけの余裕を生む。

手下を囲んでいる敵の背に、体当たりするように長剣を叩き付ける。さらに勢いを殺さぬように横にいた敵を斬り下げる。

魂を引きずり出されるような絶叫。

それに怯んだ敵を更に一人斬り倒す。瞬時に三人を殺され、ケイフウの手下を囲んでいた囲みが解ける。

「はやく！」

叫ぶケイフウに余裕の色はない。一時的に包囲を破ったとはいえ、綻びは直ぐに修繕されてしまうだろう。

「つく！」

手下を振り返ったケイフウは口から出掛けた言葉が凍りついてしまった。

目に飛び込んで来たのは真っ赤に染まった太もも。

腰から腹へ突き刺さった細い槍。立ち上がる事すら出来ず、這ってケイフウの近くに寄ってくる手下の姿。

間に合わない！

それどころか、手下の命は既に消えかけていた。

「ケイ、フウさん……」

細く吐き出される声、後に続くべき言葉も喋れないほどの重症。

ケイフウは決断を迫られる。

今ならまだ間に合う。包囲を突破して生き延びる事が、出来るのだ。手下を置いて行っても非難はされない。ここに残り助け出せた

としても、すぐに息絶える。

ぐっ。

血が滲むほどに唇を噛み締めて、ケイフウは周囲を睨み付けた。包囲は遠巻きに、ケイフウと手下を包み込む。

だが、地に着いた足は根が生えたように動かなかった。長剣を握り締め、胸の中でとぐるを巻く熱が吐息となって吐き出された。

「逃げるもんか」

呟くような小さな声には、不退転の決意があった。

その様子を遠く店の二階から眺めたジルは、重い声で一人呟いた。「ケイフウ、あんた……」

思い出されるのは、数刻前にケイフウが訪ねてきた時のこと。用向きは同盟の締結だった。

手土産として持参した金は相当な金額だった。色街の大半の店を買い取れるだけの支度金。

だが、ジルは同盟の話に首を縦に振らなかった。

確かに、先の騒動でジルが双頭の蛇の実力を見直した事は確かだった。サギリを始めとする個々の実力なら、ガドリア随一だっただろう。四役のうち武闘派と呼ばれていたシロキア一家ですら、あれほどに粒揃いではなかった。

しかし、ジルにはどうしてもあの荒地の魔女が信用できなかった。

薄く微笑を湛える口元。美しく整った顔立ちに禍々しい気配。

思い返せば、返すほど背筋に冷たい思いが流れ落ちていく。

組織の長として、初めてわかるその配下を危険に晒すことの重み。言い換えれば艶花の重みが、ジルの細い肩に押し掛かる。

「若女将」

考えごとの途中で後ろから声が掛かる。艶花を継いでから、ジルはそう呼ばれるようになっていた。

未だ慣れないその呼び名に、ジルは振り向いた。

「赤き道のクルドブーツ様が、おいでになってますが」

少女と呼べる年齢の配下の報告に、首を傾げる。

「クルドブーツが、ねえ」

商人達の連盟である赤き道。ガドリアの混乱の中で領主に力を削がれたはずの勢力。

「客として、じゃないよね？」

客としてもてなしたこともあるが、それ程入れ込んでいる様子もなかった。

「なんでも、艶花に要件があるとか……それと」

「それと？」

一旦言いよどむと、配下は意を決したように顔を上げる。

「随分、みすばらしい格好です」

ふむ、と煙管に火を落とす。吐き出される紫煙が青い空に消える。

「窮鳥が懐に入ってきたのかね？」

「きゆう、ちよう？……あっそうか」

報告に来た配下に視線を向ける。その視線を叱責と勘違いしたのか、少女は身を縮ませた。

「申し訳ありません」

「いや、あたしらはもつと大きくならなきゃならない。そのためには、若いあんた達みたいのがもつと頑張ってくれなきゃね」

艶然と微笑んだジルに、少女は力強く頷く。

「はいっ！ あの、それと」

「なんだい？」

「若女将も、充分若いと思います！」

思わず嘖き出してしまったジルに、少女は慌てたように言葉を重ねる。

「ありがとうよ」

目に涙を浮かべるほど、笑ったジルは少女に背を向けて視線を獣同然に暴れまわるケイフウに向けた。

「そうだね、あたしらはまだ始まったばかりだ」

口元に浮かぶのは、肉食獣を思わせる獰猛な笑み、視線は暖かく慈愛に溢れる。その危うい均衡が艶花のジルの微笑みを美しく際立たせていた。

「あなた、名前は？」

「はいっ、ナルニアです」

元気良く答えるナルニアに、ジルは暖かい笑みを向けた。

「クルドバーツには、暫く待つように伝えておくれ。必要なら部屋を用意しておくこと。それと……」

一度、目蓋を閉じて息を吸い込む。同時にケイフウに背を向けてジルは歩き出した。

「雪華の皆に伝えな！ シロキア一家に色街のしきたりってのを教えてやるうじやないか！」

その意味を理解したナルニアは背中に雷が走ったように立ち上がり、声を張り上げて返事をした。

賊都19（後書き）

サイトがリニューアルされたので、短めですがお試し投稿。
後6話ほどで賊都編完結予定です。あくまで予定は予定です。

賊都20

風を薙ぐ剛剣が肉を断ち切り、舞い上がる血飛沫は地面を濡らす。先ほどまで息をしていた配下はケイフウの足元にたどり着くと、息を引き取った。

だがケイフウは暴れまわる野獣のごとく剣を振るう。最早逃げ道はない。幾重にも包囲され、事前に示されたサギリとの集合地点は、遙かに遠い。後は押し包まれて殺されるだけ。

それでもケイフウは、その場所を動かなかった。足元には死んだ配下、周りを囲むのは餓狼の如き敵の群。

何度敵を倒しても、新たな敵が沸いてくる。ケイフウの四方から繰り出される白刃。一度でも当たってしまえば致命傷を負いかねない一撃。それをかわし続け、敵を斬り倒す。

次第に息は乱れ、吐き出す息は火のように熱くなる。

剣を握る手には既に感覚などない。気を抜けばすぐにでも倒れてしまいそうだった。のし掛かる極限の緊張感、迫り来る刃に身を任せて全てを終わらせたくなる。

「ハッ、ハッ……」

正面、横薙ぎの戦斧に剛剣を合わせる。弾かれる勢いを利用して、右から迫る槍をへし折った。

向き直り、後方から迫っていた長剣を下から弾く。頭上に上げた剛剣をそのまま左へ振り下ろし、背後を突こうとしていた敵を頭から叩き潰す。

荒い息、吐き出される熱い吐息は体力諸共ケイフウの心までも持つていきそうになる。

甘い死の誘惑に、ケイフウはその小さな体で必死に抗った。

だがそれも限界。

剣を持つ手は痺れ、持ち上げることすら困難になっていた。薄く霧がかかったようなぼやけた視界。剣を杖に、震える足でなんとか

立っている。

そこに、繰り出される短槍。

立っていることすらまならないケイフウに向けて正面から放たれた凶刃が、彼の喉元を狙って繰り出される。

その槍に向かってがくりと崩れ落ちるように前傾になり槍の下を潜る。

槍使いの体と、ケイフウの体が交差した一瞬。槍使いの胸は深々と切り裂かれていた。そのままケイフウは崩れ落ちると、また剣を杖にして立ち上がる。

「しぶてえな」

吹けば飛ぶような格好のケイフウを眺めてシロキアは苦々しげに呟く。

双頭の蛇の幹部。

邸宅に侵入してきたときから、遣える方だとは思っていたがその実力はシロキアの予想を超えていた。

ケイフウの奮戦が先程まで怒り狂っていたシロキアの脳裏に、理性という名の冷気を吹き込む。

「しかし……」

シロキアの脳裏によぎる疑念。周囲は確かに入り組んでいて奇襲に向いている。

だがケイフウがあそこまで必死に戦う理由はなんだ、と。

(逃げ損ねた手下のために戻った……なんて、甘ちゃんじゃねえよな)

周囲を囲むのは、色町。二階建て、三階建ての娼館が密集するガドリアでも特異な場所だった。

シロキアの威勢を見せつけ、ハンナの時代と変わらぬ同盟関係を維持する目的で練り歩いて来た。

だが。

(ガキを追いたて、数の有利を發揮しやすい場所まで追い込んだ所までは、計算通りだったが……)

ぐるりと、周囲を見渡して一抹の不安がよぎる。

シロキアとケイフウ達の戦っているのは色町北側の広場ともいべき場所。そこから周囲には細く長い路地と娼館が立ち並ぶ。そこにシロキアの率いてきたほぼ全軍がいることになる。

細い路地は、高い娼館の壁に出来る影で薄暗い。

確かにハンナの時代は同盟を組んでいた。だがそれとて元は敵同士……動きの読めない新しい艶花の下で雪華がどう動くかは、シロキア自身にも判断がつかない。

シロキアの視線が細い路地の闇を睨み付ける。

その闇の中に、もし雪華が潜んでいるとしたら？

ケイフウの奮戦は包囲を完成させるための時間稼ぎだとしたら？

(俺たちは全滅するっ！)

流れる冷や汗に、シロキアは犬歯をむき出しにして戦うケイフウを睨み付けた。

ガドリアと言う街で、十数年中心であり続けたシロキアは自分の勘というものに、ほとんど絶対的な信頼を置いている。

その勘が、危険だと警鐘を鳴らしていた。

「おい、三番隊と四番隊に指示を出す」

手近に居る部下に声をかける。

「三番隊は、南へ行け。艶花のジルの動きを見て来い。四番隊は北だ。警戒しろ」

「しかし、胴元……北には街の外に抜ける門ぐらいしかありませんし、その先は重なる大岩ですぜ。それに今三番と四番を抜きますと万が一ガキを仕留め損なうってことも……」

「言われた通りにしやがれ！ さっさと行け！」

シロキアの判断にそれ以上の根拠はいらなかった。三番隊と四番隊を、それぞれに向かわせ退路を確保させる。忌々しいことだが、ケイフウ一人の命などはこの際どうでもよい。

大事なものは、常に最も強くあることなのだから。

重なる大岩、町の郊外にあるその場所からサギリは手下を率いて全力で街に向かっていた。ガドリアでは高価な馬に乗って、ジンと手下を十数人連れただけでケイフウの元に向かう。

「ちっ……あの、バツカが！」

何度舌打ちしてみても、気分が晴れない。

予定の時刻を過ぎても戻らないケイフウに、サギリが段々と苛立ち始めた頃。駆け戻ってきたのはケイフウの手下の一人。肩に傷を負いながらも、必死に駆け通して来た彼の情報はサギリの求めていたものだった。

ケイフウが手下を見捨てられずに、敵の只中に残った。

「だから、ガキは嫌いなんだっ！」

予定では大岩に誘い込んで、投石で数を減らし、一気にシロキアの首を取るつもりだった。

「熱くなるな」

サギリの隣を走りながら、声をかけるのはジン。

「……こっちの予定がご破算だよ」

口元に笑みを浮かべ、視線は怒りに燃えるサギリはジンを睨み付ける。

「じゃなんで助けに行くんだ？ 見捨てればいいだろう」

だがその視線を平然と受け止め、普段と変わらぬ口調で、家族同然に育ってきた手下を見捨てると言うジン。

「あいつが居なきゃ、アタシのもっと予定が狂うんだよ！」

「そういうことにしておくか」

一層強く睨み付けるサギリに、ジンは口元を歪めて笑った。

「昔あいつを助けてくれって泣いてたのは誰だったかねえ？」

その余裕の表情が癪に障ったサギリは、視線を明後日の方に向けて口元を歪める。

「ぐっ……そんなことは忘れた！」

途端に言葉に詰まるジンを横目に、サギリは大仰に手を広げると更に続ける。

「そうかい？ アタシは鮮明に覚えてるけどね！ それからアంతはこう言った。ああ、偉大なるサギリさま！ 靴の裏でも舐めますからどうぞお助けくださいっ！」

「言ってねえだろうがっ！」

「覚えてンじゃないか」

「うるせえ！」

「っと……遊びは終わりだ」

前方に目を転じれば、ガドリアの威容が視界に映る。

「ケイフウめ……生きてたらこっつりお仕置きしなきゃねえ！」

「死んでたら？」

「そんなのは赦さない！」

サギリは後ろを振り返り、騎乗している手下に向かって声を張り上げた。

「さあて、野郎ども！ 予定とはちっと違うが、シロキアとの喧嘩だ！ あの老いぼれをとっちめて、アタシらがガドリアの主になるっ！」

前を向けば門はすぐ近く。

腰から短剣を抜き放ち慌てるシロキアの四番隊に向かって馬を駆る。

「続けえ、餓狼ども！！」

魔女の咆哮に、群れ続く狼達が付き従った。

賊都 21

最早力無く剣に縋るだけとなったケイフウ。その様子に、シロキアは凄みのある笑みを浮かべる。

「胴元、艶花が参られました」

ケイフウに止めを指そうと口を開きかけたところへ、手下の声がかかった。

「なにい？ ジルがか？」

手下の報告を聞きながら、シロキアは眉間に皺を寄せる。

もし包囲しているのなら不意打ちでシロキアを襲ってこそ、雪華の勝ち目は大きいはずだ。依然雪華の勢力は、シロキアの勢力には及ばない。

なのに、なぜジルは少数の手下だけを引き連れてこの場に来たのか。

「おやおや、随分物々しいねえ」

艶やかな衣装に身を包み、いつも通り煙管を手に紫煙を吹かすジルの姿に、黙り込みジルを睨み付けるシロキア。

その様子にジルは肩をすくめて苦笑した。

「そつちから呼び出しといて、随分なお出迎えですねえ？ シロキアの大旦那」

「ああ、すまねえな」

一旦視線を外し、シロキアは手下に耳打ちする。

「二番隊は、ガキを囲んどけ。手は出さなくて良い。一番隊は俺の周囲に集める」

シロキアの鋭い視線に、無言で頷いた手下は即座に駆け出す。その様子をジルは、見守り再び紫煙を吐き出した。

「それで、大事な用件ってのは何なんです？ こつちとしても忙しい身でねえ」

「いやいや、すまねえな。話つてのは、他でもねえ……うちと艶花の先のことだ」

「そんな話をここでする為に？」

視線を向ければ血生臭い匂いの漂う修羅場。中心にはケイフウ、それを取り囲むシロキアの手下達。折り重なる屍から流れ出る血潮が、昼間のガドリアの大地に吸われていく。

「ああ、大事な話だからな」

一段低くなったシロキアの声に、ジルは目を細めた。

「で、だ。同盟の証として……ほれ、あそこにいる半死半生のガキを一匹始末してくれねえか？」

顎で指す先にはボロボロになったケイフウの姿。

「行動で示せつて？……やれやれ、相変わらず血の気が多いことですねえ」

ため息を吐くと、ジルはシロキアに背を向けてケイフウの方に歩み寄る。彼女に従うのは雪華の精鋭20名ほど。

「お退き」

二番隊の囲む所を割って入り、ケイフウを中心として円になる。

精鋭達は抜刀し、ジルは彼らより一歩前に出てケイフウと真正面から向き合った。その周りを二番隊が囲む。

「ケイフウ……無理しちゃってまあ」

あきれたような声に、ケイフウから返されるのは荒い息遣いと視線のみ。笑う力すら残っていないようだった。

「あんたたち、わかってるね？」

背後に控える雪華へ声をかければ、返って来るのは小気味良い程の返事。

「はい、姐さん！」

「やれ」

冷たい言葉とともに雪華は反転し、一瞬にして斬り倒されるシロキアの二番隊。

「てめえ、ジル！」

遠くから聞こえる罵声に、ジルは紫煙をゆつくりと吐き捨てた。

「答えは、こうだ。色町の艶花あかしらを舐めるなクソジジイ！」

「やっちまえ！」

シロキアの声と同時に、ジルの手元から開戦を告げる小剣が飛翔する。ケイフウを守るように展開した雪華の精鋭が二番隊と切り結ぶ。

「ケイフウ、もう大丈夫だからね」

言うなり、一人の手下にケイフウを背負わせる。

「抜かるんじゃないよ！」

ジルの声を合図に細い路地へ向かって雪華の死に物狂いの逃走が始まった。

「ジルめ……」

怒りは相当なものだったが、予想をしていなかったわけではない。にやりと、雪華とジルに獰猛な笑みを向ける。

「ここで雪華を潰せば、ガドリアは全て俺の物だ！」

手下を捕まえると怒鳴りながら命令を伝える。

「三番隊を突っ込ませろ！ 四番隊も呼び戻せ！ 俺に逆らう奴は皆殺しだ！」

手に持った白木の鞘から太刀を引き抜き一番隊を率いて前に出る。

「うおお！」

「うらあああ！」

怒声が怒声呼び、血飛沫が舞う。シロキアの手勢は未だ200を割った程度は残っている。四番隊は北の警戒で使えないとしても、150は健在。ケイフウに大分減らされたとは言えシロキアの率いる数の圧力は未だ健在だった。

「出陣！」

シロキア一家の街での行動を知った領主ヘルベルは、武装させた兵士を町に向けた。

その数400に達する。クルドバーツの件で減った兵士と城を守る最低限の人数を割り引けば、保てる全軍への出撃命令だった。

先頭を進むのはバーン。行軍の中ほどには、豪華な戦装束に身を包んだヘルベルもいた。

バーンは全軍を街を南北に貫く大通りに集中させた。シロキアと雪華、更には双頭の蛇が争っているのは、大通りの北の突き当たりから東へむかった広場だ。

道幅一杯に武装した兵士たちが行軍する様は、ガドリアでは珍しい。それを見ようと道端や家の窓際は見物人で埋まる。

領主軍の多くの兵士にとってこれが初陣だった。数年前デイド討伐のために軍が組まれたが、それさえ怪物の討伐であったのだ。戦の出陣は初めてのものが圧倒的に多い。

ガドリアの領主の役割は、一言で言ってしまうえば四役の補助。故に兵士と言えども、人間同士の戦に馴れてはいなかった。

「これより、色街に入る。各々、心してかれ！」

大通りの終わり、後は入り組んだ色街へ進むだけ。

そんな中、400の兵士を率いるバーンだけが異彩を放つ。

堂々たる体躯よく響く声は勿論の事、元々は戦の止まない中央から流れて来た経緯もあり、立ち振る舞いには自信が満ち満ちていた。彼自身知らずの内に、戦に経験のない者達からは精神的支柱とされる。領主軍の誰の中にも、程度の差に関わらず彼が居れば大丈夫という安心感があった。

領主軍を繋ぐ一筋の線として、バーンはともすれば喧嘩馴れた賊徒に劣る兵士達を率いて混乱を極める戦場に分け入っていった。

一人、一人と脱落者が出る度にジルの心には抜けない棘が刺さるようだった。歩けばすぐのはずの路地までが、遙かに遠い。

「グアアア！」

悲鳴に振り向けば、また一人喰われていった。ケイフウを背負った一人を除けば、雪華に無傷の者は居ない。

路地と雪華の間に立ちはだかるのは、シロキアの二番隊と三番隊。背後から迫るのは、シロキア虎の子の一番隊だった。しかも、食いついてくる一番隊の先頭には狂犬の如き様相のシロキア本人が太刀を振るう。

「チツ！」

鋭い舌打ちと同時に、ジルの手元からは投擲用の小剣が、二本同時に放たれる。雪華の手下が戦う隙間を縫っての援護射撃。前と後ろに、しかも相手は戦の真つ最中の敵だ。

妙技と言っしかないジルの投擲術。だが、それとて劣勢な戦況を覆すには至らない。

「このままじゃあ……！」

誰にも聞こえないように呟いたジルの不安。雪華の大多数は、シロキアに気取らないように路地の奥に伏してある。

「ジル、ケイフウが防ぐから……降ろしてっ！」

雪華の劣勢を見たケイフウが、背負われたままジルに声を掛ける。

「……冗談じゃない！」

その一言でジルの覚悟が決まった。両手に握るのは、投擲用の小剣と短剣。

「あんたが出たんじゃ雪華の名折れじゃないか！」

ケイフウを背負った手下に前にでるなと命じて、前を遮る敵に向かう。

「シャキツとしな！ 蛇に笑われちまうだろう」

血飛沫に濡れる艶やかな衣装。手にした小剣を正面の敵に投げつけ射殺すや、その空間に滑り込む。

前と横。後ろ以外から迫る白刃の合間に身を踊らせ、更にシロキ

アの手勢を短剣で突き崩す。

ジルの突撃に勢いを得た雪華は、前に立ち塞がる敵に躍り掛かる。だがそれでも、後方から迫るシロキアの勢いが止められない。

北側からは、四番隊の喚声が聞こえる。

「くっ……」

一瞬、それに取り除かれたジルの肩を白刃が掠める。破れた衣装に、吹き出る赤い血。

足を止める間も無く、次々に襲い来る刃をいなす。止まった勢いを、シロキアは見逃さなかった。

「今だ！ 野郎ども、押し包みやがれ！」

俄然勢いを増すシロキアの手下達。

流石のジルでももうだめかと思った時、北から迫っていた四番隊から悲鳴混じりの声が聞こえた。

「双頭の蛇だ！」

シロキアを始めとしてその場にいる全員が目が北を向く。

その視線の先を、黒く長い髪を靡かせて荒地の魔女が突き進んでいた。逃げ惑うシロキアの四番隊を追い散らしながら、そのままの勢いでシロキアとジルの争いに割り込んでくる。

勢いを増した馬は、疾風のごとく背に乗る魔女を運ぶ。その馬の背の上から、荒地の魔女が獲物の群れを睥睨する。猛禽類のごとき視線がシロキアの上で止まったかと思えば、その端正な顔には嗜虐の笑みが浮かんだ。

見つけたぞ！

交差した視線。聞こえるはずのない魔女の声がシロキアの耳朵を打った。

賊都22

サギリの後ろに続くのは、一塊になった馬の群れ。ジンは獲物を求めて一直線に進んでいくサギリの背を、半ば諦めに近い気持ちで見送った。

背後を振り返れば率いてきた手下達がシロキアの手下達を蹴散らしている。馬上から振り下ろす剣の下に、悲鳴諸共敵を馬蹄に掛ける。

「5人付いて来い。残りはサギリの援護だ」

双刀を腰から引き抜き、馬首を雪華に向ける。

「獲物はシロキアだ！」

双頭の蛇の突然の乱入に、いち早く立ち直ったのはジルだった。敵の注意の逸れている隙に瞬く間に二人を斬って捨てる。

「余所見してんじゃない！」

敵味方の集まる注目の中、さらに一人を斬り倒す。それで、雪華は金縛りから解けたように、自分のやることを思い出した。

流れが完全に逆転した。

雪華はジルに率いられて、目的の路地にたどり着く。

歪狭な路地は、大人数を投入することなどできはしない。

「他の奴らに報せな、獲物はシロキア一家だ！」

自ら殿を引受け、部下に背を向けて命じる。横幅は大人が二人通れる程度の路地では長い武器は使えない。武器を使うとなれば、一人がやっつと言う狭さ。

それはジルの領域だった。

雪華を追って路地に入った者は、ジルの短剣に貫かれるか、小剣の餌食となるか、選択肢は二つしかなかった。

「若女将っ！」

切羽詰った声がジルの背後から掛けられる。

「なんだい!？」

敵の喉首を短剣で切り裂きながらジルは答えた。

「領主の軍ですっ! 数は400! 鎧を着込んだ兵士どもが……」

「なんだって!？」

目の前に迫る刃をいなしながら、ジルの頭脳は高速で回転する。

シロキア一家、雪華、双頭の蛇どれも戦い傷ついた所で、領主が出てくる。

このままでは、いずれの組織も潰される。

「ちっ……一体誰の書いた筋書きなんだろうっ!」

まともによっては勝ち目がない。

「引き上げだ! 雪華は兵士どもに見つからないように散らばれ! 機会を待つ!」

迫るシロキアの手下達を防ぎながら指示を下すと、自身も逃げにかかる。

「ヘルベルめえ……」

結局今回の、喧嘩で得た物といえばケイフウを通じた双頭の蛇との関係だけ。

流した血の量にジルは、齒噛みする思いだった。

魔女の乗る馬が一直線に向かって来るのを見据え、シロキアは太刀を低く構えた。

「シロキアアアア!」

よく響く魔女の声に応え、シロキアが咆哮する。

「来いやああ!」

シロキアの目前で嘶く馬。その前足に向けてシロキアの太刀が一闪した。

血を噴出し倒れる馬を横目に、魔女の姿を確認しようとしたが馬の背にはすでにその姿はない。

(上か！)

反射的に振り上げた太刀に、重い衝撃が走る。

腕まで痺れるのを堪え、見上げようとした瞬間、目の前に漆黒の魔女が降り立った。

「ガキがアアア！」

シロキアの目前で着地し、太刀を振り下ろそうとして魔女の短剣の方が早いと咄嗟に判断する。

魔女の右手に握られた短剣の一撃を、柄で受け止めたのは僥倖と
言うしかなかった。

「ちっ！」

鋭い舌打ちとともに、魔女の手が戻る。

その瞬間を狙って殴るように柄ごと腕を突き出した。避けるため
には退くしかない攻撃に、だが魔女は頭突きで応える。

ぼきりと、柄と魔女の額の間で潰れる指の音が聞こえた。

「ぐわっ！」

「くっ……」

だがよるめいたのは、魔女も同じ。その隙を狙って、下がりながら
魔女の頭を狙う上段からの一撃を放つ。

今度こそ、魔女は一旦距離をとった。

「餓鬼の喧嘩みてえな戦い方しやがって……」

折れた指を確認しながら、シロキアは吐き捨てた。

「ハッ、喧嘩にガキも大人もあるかっ！ 勝てば良いんだよ」

手にした短剣を構えつつ、荒地の魔女はシロキアを睨み付ける。

相手を見下し切ったような、口元をゆがめる笑み。普段なら叩き切
りたいはずのその笑みに、なぜか汚らわしさは感じない。

むしろ美しいとだけ、思ってしまう。その思いごと唾を吐く。

「抜かせっ！」

魔女の間合いからは、遥かに届かない距離。かろうじてシロキア
の太刀が届く範囲からシロキアが仕掛ける。だが、その攻撃は尽く
余裕を持ってかわされ、逆に隙を見て攻め入られる始末。

その攻防に、シロキアは我慢がならない。

「ぶっ殺してやるっ！」

再び太刀を構えなおすと、腰を低く落とし必殺の構えを取る。

「この街は、俺のもんだ……てめえら余所者なんぞに、くれてやるものかよ！」

血に塗れた太刀は銅剣のように鈍く光る。刃を横に、脇に構えた切っ先は相手の脇腹を指す。

「来な！ 老いぼれ！」

まるで太刀諸共一本の武器になったかのように無駄のないシロキアの攻撃。

最速で放たれた突きは、魔女の短剣と火花を散らし、脇腹を掠るにとどまった。

交差すると同時に放たれる魔女の膝がシロキアの顎を襲う。

鋭い舌打ちが双方から聞こえた。

「やるじゃないか、老いぼれ！」

血の流れる脇腹を撫で、付いた血を自身で舐め取りながら魔女は笑った。

「当然だ。てめえなんぞに、この街を渡してたまるかつ！」

シロキアの顎を狙った一撃は、彼の鼻頭を潰していた。その鼻を無理やり戻しながら、血を吐き捨てる。

「随分、拘るじゃないか。そんなにこの街が大事かい？」

顔に付けられた傷を歪ませ、凄みのある笑みでシロキアが応える。「俺の街だと言ったろうが！ 赤き道も、雪華も、炎の運び手も、

領主の野郎さえも。もちろんてめえらも、他所からの流れもんだろうが！」

己の身に宿る熱を吐き出すかのように、シロキアは饒舌になっっていた。

「だが俺は違う！ 俺はこの街で生まれ、この街で育った。この街の空気を吸い、この街の水で生きてきた！ それがだ、てめえらみたいな余所者に好き勝手にされちゃあ……堪らねえんだよ！」

太刀を握る手に力が籠る。

「ハッ、だからアタシらと喧嘩しようつてのわ！」

「そうよ、この街を好きにしたきゃ俺を殺してからにしまっ！」

いつの間にか、双頭の蛇とシロキア一家の頭首同士の一騎打ちに争っていた手下達の耳目が集まっていた。奇妙なほどの静寂の中、十数年ガドリアの中心に座り続けた男が全てを掛けて前に出た。

ジンは、ジル達雪華が無事路地に逃げ込んだのを確認して、サギリの戦う地点に向かう。

シロキアとサギリの決闘を流し見て、ジンはほくそ笑む。

事前に聞かされていたサギリからの予想通りの展開、後はこの決闘の邪魔をする者を彼自身が排除すればいいだけだった。

二人を囲み、見守るシロキア一家と双頭の蛇の手下達。

円状に見守る手下達の中から、スツとサギリに手を出そうと前に出る男をジンは斬り捨てる。

上がる悲鳴と血飛沫に、周囲がざわりと息を呑む。

「この戦いを邪魔する奴は、俺が殺す」

静かに、だが確かにこれ以上ないほどの威圧感を持ってジンは周囲を見渡した。

その威圧に周囲で動こうとするものは居ない。

口の端を歪めて笑うと、彼自身もサギリとシロキアの決闘を見守ることにした。

こと、喧嘩に関してはサギリは巧い。

本来なら、シロキア一家の数に圧倒されるはずの双頭の蛇の戦力だからこそ、大将同士の一騎打ちに持ち込んだのだ。数の差は問題にならない。求められるのは、頭首の力のみ。

戦争のやり方を聞いたジんに、サギリは戦争と喧嘩は違うと、笑って言った。

『戦争なんて大したもんじゃないさ。コイツは喧嘩だ。精々楽しく

騒ごうぜ！」

不敵に笑うサギリの言葉と笑顔がジンの脳裏に蘇る。

「楽しく、か」

目の前のサギリが一番楽しんでいるのではないかと、いぶかしみながら警戒を続けるためにジンは改めてサギリとシロキアの一騎打ちを見守る。

わき腹を切り裂かれたサギリは、壮絶な笑みを浮かべていた。喚き散らすシロキアの姿も見える。

「勝負あつたな」

小さく呟いて、退路を見つけようと視線を転じた先。

「放てえ！」

僅かに聞こえた声と共に、路地から放たれる矢が視界に飛び込んできた。

「サギリっ！」

思わず上げた声の先、降り注ぐ矢の雨はサギリとシロキアの間を割っていた。

無事の姿に息を付く間も無く、路地から鬨の声が上がる。

革の鎧に武装した兵士達。

雪華ではない。

「領主か」

敵だと、その言葉が脳裏を掠めた次の瞬間には、ジンの思考は落ち着きを取り戻す。

見渡す敵の数は、ひたすらに多い。シロキア一家よりも更に上かもしれない。

「……仕掛けはしておくもんだな」

シロキア一家の為に仕掛けておいた罠がこんな所で役に立つとは思わなかった。

後はどうやって誘い込むのか、それだけだ。

華々しい鎧姿の騎士が声を上げて兵士達を指揮する姿が見える。

「アイツか」

狙うのは、いつでも敵の頭であるべきだ。目の端でその姿を捉え
るとジンは、サギリとシロキアの向かい合う場所へ一直線で駆けた。

賊都23

突如の乱入。

それも、400という最大勢力をもつての介入に動揺が最も激しかったのはシロキア一家だった。頭首は双頭の蛇の頭との間で一騎打ちの途中。ほとんどのものはその一騎打ちを見守っていた最中に、矢の雨が降り注いだのだからたまったものではない。

悲鳴と、混乱が伝播し混沌たる有様だった。

あるものは抵抗し、あるものは逃げようともがく。それを規則正しく整列した兵士達の一群が、羊を狩るように殺していく。

崩れるシロキア一家。その中心の男は未だ己の中にある熱に突き動かされ双頭の蛇の頭と向き合っていた。周囲の喧騒も、築き上げてきた一家の悲鳴も、今は耳に入らない。

必要なのは、魔女の首。

狂犬を鎮めてくれるのは、ただ一つ。

視線の隅、魔女の首を取りに一歩前に出た所で黒い髪の男が脇を通り抜ける。怖ろしく素早い身のこなしに、シロキアは瞬間目を奪われた。

(あの時の……)

付けられた頬の傷が疼く。

「二対一つのも悪くねえな」

口の中で呟いて、片頬を上げて笑う。太刀を握る拳に力は満ち、血を求める熱い鼓動は鳴り止むことを知らない。

「胴元、領主の奴が裏切りやがった!」

後ろで聞こえる悲鳴に、太刀を一振りすることで答えた。

「邪魔すんじゃないねえ、良い所なんだ!」

「胴元っ!」

ひゅん、と風切る矢の音に振り向けば、手下の無残な姿が横たわっていた。

「ちっ……」

周囲を見渡せば見るも無残な状況。降ってくる矢を太刀の一閃で払いのける。

が、その合間を縫って腕に矢が突き刺さった。筆り取るように矢を抜くと。

「どいつもこいつも！ 邪魔だアア！」

ぶるりと、血を振るい魔女に背を向けた。

目の前に広がるのは整えられた陣形、一列に並ぶ槍の装列に向かって吼える。

気づけば目の前には獲物がいた。

「来いやアア！」

一列に並んで迫り来る槍を瞬く間に弾き、隙間に割って入れれば、後は滅多矢鱈に切りまくる。

敵の腕を、首を、胸を切り裂く。

「ふははは！ 良いじゃねえか、どこを向いても敵だらけだっ！！」
シロキアの腕が振るわれるたび、血を帯びた太刀が兵士の鎧を引き裂き肉を絶ち斬る。返り血に濡れたシロキアの表情は鬼が憑いたように凄愴なものへとなっていく。

領主が網なら、シロキアはそれに打ち込まれた一本の楔と言えた。整えられた槍列はその一点から、無残に瓦解していく。

逃げる一方だったシロキア一家も、頭首の獅子奮迅の戦いぶりに彼に続き出す。シロキアの食い破った槍列を手下達が、拡げて行く。「胴元を救え！」

「裏切り者を許すなっ！」

盛り返した勢いをそのまま乗せて、シロキア一家と領主軍は壮絶な正面衝突へともつれ込んだ。

膠着……否。やや押されている状況に、バーンは僅かに驚いた。

数の優位、そしてほぼ完全なる不意打ちに対して持ち直してくる

など予想外も良いところだったのだ。

「やはり、賊都の博徒シロキアか」

賊都最大勢力にして、その地位を十年来守り通してきた男。計算だけでは表せない力があるのだろう。そして領主軍の兵士の慣れの問題だ。

「中軍も投入する。左右に展開っ！」

自身の左右に待てる中軍を、シロキア一家の左右に走らせる。

「バーン様、シロキア一家の後方が開いています！ このままでは彼らをみすみす逃がしてしまうのではないでしょうか？」

部下の言葉に、深く頷くとバーンは鋭い視線をシロキア一家に向けてる。

前軍の三段構えの縦横陣をゆっくりとだが、確実に前進してくるシロキア一家は縦長の槍と化していた。

硬く鋭い穂先の役割をこなすのはシロキア。

「いや、このままで良い」

ならば、柄から崩せば良い。

個々の質で言うなら、恐らくシロキア一家に劣るであろう領主軍の兵士。優位な点といえば、統一された装備と数だ。そこをバーンはしっかりと弁えていた。

シロキア一家の左右に中軍が展開したのを見計らって号令を下す。

「中軍、殲滅せんめつしろっ！！」

号令の元に、前と左右から兵士の槍がシロキア一家を殲滅していく。

退路は後ろにしかない。

不満そうな部下の顔を見て、表情を崩さずバーンは淡々と語る。

「敵と戦う場合は敵になりきって考えねばならん。今回敵にとって問題となるのは、退路が無いということではない。むしろ退路があるということの方が問題なのだ」

「どうということですか？」

心底不思議そうに見上げてくる部下に、頷いてから続きを語る。

「見る、人は逃げ道が無いと分かればそれこそ死に物狂いで戦うものだ。だが、後ろには逃げ道があるとなれば……」

「生き残ろうと、それを目指して、殺到する……」

部下の答えに満足して、巖のような硬い頷きを返す。

「うむ！」

見る見るうちにシロキアに続く槍で言えば柄の部分が逃げ崩れていく。

「中軍、左は逃げ散った敵を追え！ 中軍右は包囲せよ！」

ひらりと馬上に身を躍らせると、崩れかけた前軍に向かって声を張り上げる。

「前軍、立て直せっ！ もはや敵に力は無いっ！」

指揮官の気迫が伝わったのか、崩れていた前軍までもが隊列を立て直す。

「この戦、もらっ」

バーンの視界の隅、疾風のごとき速度で迫って来たソレは、手綱握った彼の腕を弾き飛ばした。

「バーン様！？」

馬上から崩れ落ちたバーンの鼓膜に部下の声が遠く響いた。

シロキアは領主軍の只中を食い破っていた。

自身の後ろに続く者が、打ち減らされていくのを感じながらそれでも前に進むしかない。

「ヘルベルの小僧！ 出て来い！」

呼ばれる遠吠えは、敵の将には届かない。相変わらず現れるのは、いつ果てるとも知れない敵の群れ。後ろに下がるものなら串刺しにされること確実だ。

がぎいん。

と無残な音を残して、何十人目の敵を斬った衝撃に耐え切れず、太刀が根元から折れてしまう。

「くっ……」

名残惜しそうに握った太刀を一瞬だけ見つめ、敵に向かって投げ捨てた。

後は、手近な敵を殴り倒してその獲物を奪い、再び暴れまわる。だがもう後が続いて来ない。

シロキアに従ってきたはずの手下達は、遥かに領主軍の兵士の壁の向こう側だ。

如何に強かろうと、ただ一人。

次第に体力をすり減らされ、不意を突かれ長槍に右太腿を貫かれた。

「くっ……」

続いて左足。

如何にシロキアといえども、足を串刺しにされて動けるものではなかった。

「おのれえええ！」

獣の咆哮に、鬼気迫る表情。気の弱いものが見ればそれだけで失神してしまいそうなシロキアを、領主の兵士達が遠間から狙う。

近づきすぎれば、手に持った得物で殺される。

故に相手の間合いの外から攻撃できる長槍。

その卑屈さが、シロキアの怒りに火をつける。

痛みも構わず自身の足に突き立つ槍の柄を叩き切った。

だが、そこまで。

それ以上はどうしようもなかった。

動かぬ足は前に進まず、その場に身を崩れ落ちさせただけだった。流れ出る血が、熱と共に身を焼く気持ちすらも零れ落ちさせる。

「くっそたれ……」

あれ程漲っていた力さえ今はもう。

「なんだい、諦めちゃうのかい？」

その声は唐突に、嘲りを含んでいた。

振り下ろされる長槍と血煙を払い、狂犬の処刑の場に魔女が降り

立った。

「てめえ……なんで」

「アタシはね、獲物を取られるのが一番嫌いなんだよ」

両手に握るのは、短剣。こびり付いた血肉に、瞠目する。

（切り開いてきたつてのか、この兵士達の群れを…… たった一人、俺を追つて）

シロキアの背筋を駆け抜ける戦慄。

あまりにも大きすぎるそれは、自身の子供と同じぐらいの少女に
対して畏怖を抱かせる。

だがそんなものを素直に認められるほど、シロキアは老いては居
なかった。

「クツクツク、なら丁度良い。絶好の機会じゃねえか、殺せ」

「……昔、どつかで聞いたような台詞だねえ」

世間話でもするような暢気な声で、シロキアの前に立ち。

「さあて、どうしたもんかねえ」

白刃の海を睨んだ。

「まさか……俺を助けようつてのか？」

背中から聞こえた声に、魔女は視線を外さず応じる。

「悩んでる途中なのさ、ぶっ殺してやろうと思つてた奴は見るも哀
れな瀕死の姿。おまけに、人の獲物を横から搔つ攫う真似をしてく
れた奴らは、勝った気でいやがる……全く不愉快だね」

言葉だけを聴いているなら脱力感すら感じる。だがシロキアは、
その奥にある芯からの怒りに気がついた。背を向けてさえ、陽炎の
ように立ち昇る怒りを感じる。

真正面に居る奴らは、溜まったものじゃないだろう。その威圧に、
周囲の壁が一步下がる。

と、何かに気づいたかのように魔女の怒りの気が揺らめく。

「シロキア……アンタは運が良いらしい。どうやらもう少しは生き
られそうだよ」

シロキアと魔女を囲んでいた兵士の壁の一角が崩れる。

同時に敵の後方で、喚声とは違う声が聞こえた。

「てめえ……一体何を」

呆然とするシロキアの声を一笑に付すと、兵士の壁を突き崩して来た手下にシロキアを運ぶように命じる。

「さあ、掛かっておいで。ここからは、荒地の魔女が相手になるよ」

獲物を狩る猛禽類のような獰猛な笑みを浮かべ、荒地の魔女は微笑んだ。

賊都24

「あんな所で何してやがる!？」

呟いて、狭い路地から覗く先にはサギリの姿があった。

波のごとく押し寄せる白刃の合間を縫ってサギリの短剣が銀の軌道を描く。

血飛沫さえも彩りに添えて、荒地の魔女の舞いが死を誘う。断末魔を上げることすらも許さない圧倒的な剣舞。見惚れるほどの華麗な剣捌きが、死に神の鎌となつて幾多の命を奪い去る。

遠目から眺める彼女の姿は花のように美しかった。

血を浴びて輝く、飛び切りの徒花ではあったが。

柄にもない、とジンは首を振り、必要なことだけを考えようと努めた。シロキアの姿は既に見えない。領主軍に吞まれたのか、逃げ出したか。彼にとってシロキアは大した問題ではない。

領主軍の要はついさっき斬り倒した。命に関わるかどうかは分からなかったが、傷は与えたのだ。

後は一刻も早く彼自身が囷となつて領主軍を重ねる大岩まで引き付ければ良いはずだった。

「チツ……勝手に動きやがって!」

繰り出される槍の合間を縫ってサギリの下へ駆ける。彼女を幾重にも困む敵を切り伏せ、打ち倒し、背を蹴りつけやっと思り着く。

「遅いじゃないか」

ようやくサギリの間近に近付けば、掛けられたのは気安い軽口。だが、ジンは一瞬その横顔に見惚れた。顔には不敵な笑みを浮かべてはいるが、見た目ほど余裕があるわけではないのだろう。額に浮かぶのは玉の汗。周囲にわからない程度に乱れた息使い。

その全てに目を奪われる。汗の浮かぶ白い首筋に牙を突き立てて赤く滴る血を。

「ジン!」

名前を呼ばれた瞬間、ジンは我に返る。同時に思い切り頭を下げて、サギリの放つ小剣をかわす。

「危ねえだろうが！」

周囲の敵から繰り出される白刃を左の双刀で受け、右で跳ね返す。

「ああん？ ほけつとしてるほうが悪いんだよ」

「なんでここにいる！？ 予定が狂つちまうだろうが！」

背中合わせになりながら声を掛けた。

「野暮用さ」

つまらなそうに答える彼女に、ジンは小さく怒りの声を上げた。

「今の状況分かってんのか！？」

「敵とも呼べないような雑魚どもに囲まれてるだけだろ？」

その言葉にピクリとジンの口元が歪む。

「その雑魚どもに囲まれて、進退窮まっているのはどこのどいつだ！？」

「さて、そんな奴がいたかねえ？」

ジンの怒りはサギリの上を通り抜け、向かってきた敵に当たる。

「とにかく逃げるぞ、路地へ向かう」

「待ちなよ、逃げるならもつと良い道があんだろ？」

振り返ったジンが目にしたのは、爛々と光る瞳を敵に向け口元に不敵な笑いを張り付かせた魔女だった。

「バーンが負傷しただと？」

部下の報告に、ヘルベルは眉間に皺を作り次いで舌打ちした。

「役立たずめ。良い、僕が前線に出て指揮を執る」

青くなり思いとどませようとする部下を払いのけヘルベルが前線に立つ。

馬上から見下ろす戦の風景に、彼は眉をひそめた。見下ろす広場

では、半ばまで領主軍が押し込んでいる。だがその勢いはあまり強くない。

鼻屑目に見て五分五分、悪くすれば押されているのではないだろうか。

「後軍を前に出さず！」 たかが、賊徒相手に何を苦戦などしているのか。これからさらには中央を攻めなければならぬのに。

「前中軍後退！」

張り上げる声に、前軍と中軍の兵士達がじりじりと下がり出す。

変わりに、ヘルベルのそば近くを守っていた兵士達が進み出る。

「後軍、前へ！」

ヘルベルの号令の下、兵士達が動き出す。だがちょうど交代する直前、最も混乱が起きやすい時期を狙ったかのように兵士達が乱れた。

その合間を縫うようにして、二つの黒い影が疾風のように兵士の群れを突き抜ける。

「敵だっ！」

「抜けられた！」

兵士の叫び声が事態を把握していない他の兵士達に混乱をもたらす。

「くっ……静まれ！ 静まらぬか！」

ヒステリックに叫ぶヘルベルの声も、一度混乱に火をつけられた兵士達には届かない。

領主軍は若く体力のある兵士からなる前軍、ヘルベルの代になって抱えられた兵士からなる中軍、近衛を中心とした後軍、そして先代、先々代からの年配兵からなる予備軍からなっていた。

軍の編成を組織したバーンでさえ兵力として期待していたのは前から後軍であった。ヘルベルが前線に行き、その後ろを固めることになった予備軍、人数にすれば50人程が混乱を極める領主軍の中であって最も冷静に行動した。

元々、先代、先々代から仕えていた兵士達である。領主に対する

忠誠心は他の軍よりも高い。

尚且つ、先代や先々代の時代に培われた経験がものを言った。

「領主様の馬を下がらせる！ 槍構え！」

予備軍の隊長の号令の下に、一糸乱れぬ行動をとる。

「なにをする！？ 主は僕だっ！ 勝手なまねをするな！」

鞭を振り上げるヘルベル、だがそれに動じず彼の馬の轡を捕まえ、強引に後方に押しやる。

「列を乱すな……突撃い！」

黒い疾風となって迫る魔女と狼に向かって、隙間なく並べられた槍襖が一斉に前にでた。

「ちい！」

軽い舌打ちと共に、サギリとジンは左右に飛び退く。驚くほど隙のない密集隊形。そこから延びる槍は今まで突破してきたものとは全く違っていた。まるで丸楯の合間から覗くハリネズミのようなそれに、正面からの突破は無理だと悟る。

「ジン！」

掛けられた声に頷き、ジンは側面に回る。相手の得物は長槍、正面からの攻撃には強くとも、小回りは効かないはずだった。

だが、まるでジンの行動を読んでいたかのようにそのハリネズミが二つに割れる。未だジンの動きを追尾するが薄くなった槍袵に、ジンはいけると判断する。

槍と槍の合間を目指して全身のバネを使って一気に加速。流れる風景を置き去りにして槍の合間に体を滑り込ませた瞬間、ジンは全身の毛が総毛立った。

「くっ……」

何もかもかなぐり捨てて首をひねる、その直後ジン目掛けて楯の合間から槍が突き出された。頬を掠めた槍の穂先。そのまま、楯に

体ごとジンはぶつかつた。

痛みにかみ締める奥歯が鳴る。肺の中の空気は吐き出され、体と楯に挟まれた腕は重りを付けられたかのように痛む。

痛む腕を無理やり振るって槍の柄を叩き切り、楯を斬り付ける。

だが楯を斬り付けた瞬間絶妙に角度をずらされてしまう。それでは断ち切れない。

小さく舌打ちしたジンは、槍の柄を叩き斬ろうとすばやく目配せし、槍の穂先が全て天を指していることに気が付いた。

「なっ……」

ジンは頭上を仰ぐと同時に、楯を持った兵士達はその場にしゃがみこむ。

「せいっ！」

呼吸の合った声が聞こえたと同時に、振り上げられた槍が隙間なく振り下ろされた。

振り下ろされる槍の柄を見上げ、瞬時にジンは腹を括る。

退くのは間に合わない。

迎え撃つ！

頭上から降ってくる槍の柄に狙いを定めて双刀の小太刀を振りぬく。だがそれとて、全てを断ち切れるわけではない。

ジンの肩を、振り切った腕を、勢いがついた槍の柄が襲う。木の棒で思い切り殴られるのと同程度の衝撃が幾重にもなってジんに襲い掛かった。

振り下ろされた槍が一段落すれば、今度はしゃがんでいた楯達が再びジンを襲う。視界を奪うその楯の合間に槍が吸い込まれたと思えば、彼を狙って二本同時、三本同時に繰り出される。

ジンと言えども、避けるのが精一杯。

だが、ここで退けば勝機はない。

「退くぞ……ジン！」

いつの間にか、ジンの背後に回りこんでいたサギリが声をかける。

「くそっ！」

同時にジンは槍の間合いから、遠く飛びのく。

目の前には敵の頭がいる。それを目前にしての退却。

溢れ出す憎悪を瞳に宿らせ、ジンは眼前に広がる槍衾を見据えた。

「急げ！」

その声に促されるように、敵の頭とその防壁に背を向けた。気が付けば、抜いたはずの敵の軍勢がすぐそこにまで迫って来ている。

「なに、グズグズしてンだい！ さっさと路地に入りな！」

二人の襲撃者は路地の闇の中に消えた。

振り下ろされる鞭の音、風を切るそれが老兵士の背を打つ。

「貴様っ！ 一体何様のつもりだ！」

ヘルベルは先ほどサギリとジンを退けた予備軍の隊長を衆目の前で打ち据えた。

「申し訳……ごいません」

身を縮める老隊長に、ヘルベルはなおも興奮が収まらない。

「くっ……この戦が終われば覚えておれよ！」

余りの仕打ちに、兵士の中では目を背ける者が多々いた。

「良いか！ 僕に逆らうということは自ら望んで罰を受けるといふことだ。よく覚えておくが良い！」

吐き捨てるようにそう言うと、馬に跨る。

「シロキア一家と、蛇の行方は！？」

「この通りを北に向かった由にございます」

答えたのは中軍の隊長。

「よし、進軍するぞ！ 今度こそ生かして帰すな！」

血の滴る鞭を指揮杖代わりに、北を指し示す。その背後、予備軍は老隊長を初めとする負傷者の看護を続けていた。

「閣下……よろしいのですか？」

中軍の隊長が振り返りながら、そっとヘルベルに耳打ちする。

「構うものか！ 父上の配した軍など必要ないことを示す絶好の機会ではないか。やつらにはここで負傷者の看病でもさせておけ！ さあ、進軍だ！」

「はっ……」

ヘルベルは己の毒殺した父親の軍に守られていたことが許せなかった。

まるで……殺したにもかかわらず、未だに無能だといわれ続けているようで父を憎む感情そのままに、老兵を憎んだ。

八つ当たりにも近いその感情は、予備軍全体を憎むことに変わる。動ける300の兵を率いてヘルベルは、重なる大岩に向けて進軍を開始した。

ガドリアの住民からは『重なる大岩』と呼ばれるその場所は東都ガドリアの北門をまつすぐ進めば見えてくる。そこは石の墓場というにふさわしい場所だった。

天に向かって並び立つ石の木々。至る所で崩れかけ、または倒壊している古の彫像。

その中心に折り重なった巨大な岩が二つ存在する。岩に彫りこまれた階段は、岩の頂上にまで達する。はるか昔の祈りの場には、今二つの影がある。

その地域は平坦ではなく、小高い丘状になっていた。それがより一層、その二つの岩の神秘性を高めていたのだろう。丘の斜面には林立する石の木々。まるで、決して天に届かない石達の悲痛な叫びのように石くれたちは天に向かって立っていた。

「やっと、おいでなすったねえ」

眼下に広がるのは石の林を進む領主軍、その全景を見渡して荒地の魔女は口元を歪めた。

「油断しすぎて足元すくわれなきゃ良いけどな」

その隣で、同じく領主軍を睥睨するのは魔女の狼。

「獲物逃がしたからって拗ねるなよ、ジン」

「そんなんじゃない」

ジンの眉間に刻まれた皺が深くなる。それを見たサギリは分かりやすい反応に苦笑する。

「随分回り道を食っちまったが、予定通りさ」

「……さつき遣り合った相手」

視線は眼下の、領主軍に据えたままジンは問いかける。

「あん？」

「サギリならどうやって倒した？」

一系の乱れもない統率された軍隊。個人で戦うにはあまりに分の悪い相手だった。

「この状況が答えさ。陣形が厄介なら組ませなきゃ良い、人数が厄介なら一人一人殺せる位置まで誘き出せば良い……不満かい？」

「状況を作り出す……」

考え込むように眉間に皺を寄せるジン。

「アンタはどうしたいんだい？」

口元に漂うのは歪んだ微笑。だが、問いかける声そのものは春の日差しを思わせるほど優しい声音だった。

「……さあ、少し考えてみる」

「じっくり考えな。自分のやりたいことだしね……けど今は」

よいしょ、と腰を上げると階段を下る。

「魔女の釜に飛び込んできた獲物を料理しなきゃねえ」

吹き抜けるガドリアの風のような激しさを内包した声でサギリは晒った。

重なる大岩から降りたサギリを出迎えたのは、双頭の蛇の手下たち。未だ十台の少年達を率いて双頭の蛇はここまでのし上がってきた。

飢えた獣のようなぎらつく視線を受け流し、サギリは彼らの先頭に立つ。

「さあ、魔女の宴の始まりだ！」
ジンを筆頭に、狼たちが丘を駆け下りる魔女に続いて行った。

圧倒的な戦力差、にも拘らず領主軍は後退を繰り返していた。追撃の途中シロキア一家のほとんどは追い散らして戦力と呼べるものは残っていない。

最後までしぶとく残った双頭の蛇に鉄槌を下し、名実ともにヘルベルがガドリアを支配するまで後一步。だが、双頭の蛇を重ねる大岩に追い詰めたと思っていたのは領主軍だけであった。

彼らは誘い込まれていたのだ。

「何をしている……押し返せ！」

ヘルベルの苛立つ声も、むなしく響くだけだった。

地の利という点で、双頭の蛇は圧倒的な有利に立つ。林立する石の彫像に、満足な陣形は組めず更に上から攻めてくる双頭の蛇を止めるのは容易なことではなかった。組織の力が使えないのなら後は個人の力量に掛かってくる。

その点でも双頭の蛇は郡を抜いていた。

サギリとジンを先頭に二つの頭が競い合うように領主軍を侵食していく。

切り取られ、囲まれ、殺される。

その繰り返し、数に勝る領主軍を双頭の蛇が追い詰めていた原因だった。

より狭い場所へ領主軍は追い込まれていく。倒れた石の木を盾にしてなんとか双頭の蛇の侵入を防ぐのが精一杯。とても押し返す力は残っていない。

そして領主軍はある一点に追い込まれていく。

丘の中腹にある窪地、他よりは一段低いその場所へ領主軍は追い詰められていった。

「くそつくそつ！　なぜこうなるのだ！」

怒りに任せて怒鳴るヘルベルを、中軍の隊長達が何とかなだめる。
「閣下、ここは一旦お引きになって……」

「あの賊どもに背を見せて逃げろというのか！」
彼らの混乱が、一般の兵士達にも動揺を生んでいた。もともと彼らとて、街で暮らす住人であることには違いがない。四役が仕切り、領主がまとめるという形になれているのだ。城で暮らすごく一部の兵士を除けばこの戦いは領主の専横と映った。

彼らが頼みとするバーンは負傷して遙かに後方にいる。
「聞けえ！」

そんな彼らの頭上から、雷のような声が落ちてきた。

「今からアタシが10数える間に、武器を捨てる！ 捨てる奴は助けてやる！」

窪地にざわりと広がる動揺。姿の見えないその声に、窪地にいる兵士達は互いの顔を見合わせた。

「降伏勧告だと？」

姿の見えないその声に、ヘルベルは歯噛みする。

「10！」

がちやん、という音がして減らされる数に耐え切れなくなった兵士の一人が武器を捨てた。

それを待つていたかのように、一人一人武器を捨てていく。

「貴様ら武器を捨て！ 戦うのだ！」

隊長やヘルベルがいくら声を叫んでも、武器を捨てる者の数は一向に減らなかつた。それどころか、露骨に反抗するものまで現れ彼らは孤立していく。

「0……武器を捨てた奴らは、窪地の奥に集まりな」

ヘルベルと隊長達は窪地の前へと追いやられていた。その数30程度。ほとんどの者が武器を捨て、窪地の奥で大いなる怒りから身を潜めるようににして固まっていた。

それを見届けてから荒地の魔女は姿を見せる。後ろに従えるのは、ほとんど例外なく血を浴びた獣達。

「領主以外は殺して構わない、行け！」

放たれた狼たちは獲物に向かって丘を駆け下りる。窪地の奥で固まった投降兵達に見せ付けるように虐殺が始まった。

これまで数を頼んで戦ってきた彼らに、ほとんど抵抗らしい抵抗など出来るわけもない。立ち向かってきたものは真つ先に血祭りに上げられ、逃げようとしたものは僅かにその時が遅れたに過ぎなかった。

「ひいつ……！」

逃げようとしたヘルベルは、窪地を塞ぐ投降兵達の壁にぶつかる。

「どけ！ どかぬか！」

喚き散らすヘルベルの胸を、投降兵が押し返す。

やがて、部下達の流した血だまりの中に領主一人が取り残された。

「お前が領主か」

その血だまりの中を悠然と、荒地の魔女が歩を進める。顔に残酷な笑みを張り付けさせ、ヘルベルの全てを軽蔑しきったかのような棘のある視線を向けていた。

「た、助けてくれ……僕は」

「ああ、良いよ。命はな」

「え？」

その言葉に、その場にいる全ての者が瞠目した。

「道を開けてやれ」

投降した兵士達に命令すると、兵士達の壁はあっという間に開いていく。

「さあ、失せな。どこへなりと」

その声を待たずヘルベルは駆け出していた。

賊都24（後書き）

次回で賊都編終了します。

賊都25

ヘルベルにはその道が永遠のように長く感じられた。

荒れた道は、走ることを妨げるように石ころを撒き散らし、ガドリアの夕闇に吹き抜ける強風は、ヘルベルをあゝの魔女の元へと押し戻すかのように吹き付ける。

怖かった、恐ろしかった。今まで出会った中であれほど恐ろしいと思う存在など居なかった。

息が乱れるのもかまわず、ひたすら走る。怖いという感情が心臓を煽り立て足を勝手に運ぶ。

街が見えてくる。そこでやっとヘルベルは後ろを振り返る余裕が出来た。

「……追って、来ない」

吹き出す汗を拭い、重なる大岩を見る。そう思った途端、急に疲れが足にくる。重くなった体そのままにヘルベルは炉端に腰を下ろした。

「助かった、のか？」

そう思った途端乾いた笑いがこみ上げてきた。なにも考えず、ひたすら笑う。気が狂ってしまったかのように笑い続け、なぜ笑っているのか彼自身にも分からなくなってからようやく収まった。

ガドリアに再び視線を向けた、ヘルベルの視界に入ったのは領主軍の旗を掲げる予備軍。そして包帯を巻いたバーンの馬上姿。声もなく見守っていたヘルベルに彼らが合流する。

「閣下、ヘルベル様ご無事でしたか!？」

バーンは馬上からひらりと飛び降り、ヘルベルの前にひざを突く。「ああ」

いつもなら怒鳴り散らしていたはずのヘルベルの変化に、バーンは僅かに首を傾げた。

「残りの兵は……」

黙って首を振るヘルベルに予備軍の合間から、どよめきが上がる。無念そうに唇を噛みしめるもの、天を仰ぐものたちをバーンは鎮めヘルベルに向き直る。

「閣下、かくなる上は致し方ありません。和睦を進言致します。ですが今は何より、城へ引き揚げましょう」

「任せる」

足腰の立たなくなっているヘルベルを馬上に上げると、バーンは一路城へ進路を取った。

「ちつ……なんで俺が」

「それはあたしも聞きだいたいもんだね」

「私は特に、何も」

シロキア、ジル、クルドバーツがそれぞれ発言し全員がサギリを見る。

「何でつて言われてもねえ」

苦笑を張り付け、三人を見渡した。

「敢えて言えば、必要だから？」

「何のために？」

すかさずジルが鋭い視線を向ける。返答次第では即座に席を立ちそうなジルに向けてサギリは肩をすくめた。

今、サギリを始めとする三人はガドリアの高級宿秋春亭に雁首をそろえていた。

「アタシの可愛い手下を救い出すため、と言ったら納得してくれるかい？」

「ルカンドか」

苦々しい声を出したのはシロキア。

「おや、不服そうですね大旦那」

茶々を入れるジルに鋭い視線を向ける。それを軽く受け流しながらジルは微笑を浮かべる。

「そういうことなら、あたしに異存はないよ」

見込みがありそうだしね、と笑って煙管に火を灯す。高く揺らめく紫煙を怨敵であるかのようにシロキアは睨んだ。

「シロキアとクルドバーツには他にも話があるんだがね」

「愉快そうな話ではなさそうですね」

「神妙な顔で頷くクルドバーツ。」

「かもしれないねえ」

曖昧に頷くサギリは、椅子から立ち上がりシロキアとクルドバーツを見下ろした。

「アンタらアタシの手下にならないかい？」

その場に降りる沈黙は、始め言葉の意味を捉えきれない疑問。そして三人が言葉の意味を理解した後には、困惑が原因だった。

「……シロキア一家まるごとめえの手下になれってか？」

不穏な気配にクルドバーツは一步身を引く。だが逆にサギリは身を乗り出した。

「当たり前だろ」

「この俺が十五年来ガドリアを仕切っていたことも知った上での提案なんだな!？」

刃物じみた鋭い視線は直ぐにでもサギリを切り刻んでしまえばよかった。

「ああそうだよ!」

だが、サギリは腕を組んで逆にシロキアを睨み付ける。

「ふっ」

シロキアの引きつった頬から、誰もが怒号に備え身構える。

「はっはっはははは!」

だが、聞こえてきたのは聞いたことも無いような無邪気な笑い声。「この俺を手下にか、正面切って言われたのは初めてだぜ」

至極機嫌の良さそうなシロキアに、ジルとクルドバーツは呆気に取られていた。笑ってみせるといふ類の笑顔ではない。心の底から愉快そうに笑うシロキア。

そのシロキアが笑いを収めてサギリを見る。

「で、俺を手下にして何をしようってんだ？」

機嫌の良さは疑うべくも無い。だが、シロキアの一言で空気が変わる。

もし気に食わない理由なら今すぐにでも噛み付いてきそうな、凄みのある笑みがシロキアの顔に浮かんでいた。

だがその空気の中、いつもと変わらぬ余裕を見せてサギリが笑う。

「この国をいただく」

「この……」

「国だと？」

三者三様に驚く彼らの視線をサギリは受け止めた。

「不満か？ シロキア」

口の端を歪め、禍々しく笑うサギリ。だが彼女が纏うのは、紛うことなく圧倒的な威厳だった。歳などは関係ない。ただその器が他人を惹きつける。

「クツクツク……まさか国とはな」

笑いをかみ殺し、シロキアが椅子から立ち上がり痛む足を折り曲げて床に膝を着く。

「俺あ今まで生きてきて、他人に頭なんざ下げたことがねえ……だが、お前になら下げてもいい気がしてきたぜ」

ジルとクルドバーツが唾然と見守る中、シロキアはサギリを見上げる。

「ガドリアが博徒シロキア……謹んでサギリ様をカシラと仰ぎ、その手下にならせていただきやす！」

威儀を正し、まっすぐに見上げる視線をサギリは悠然と受けた。

「よろしく頼むよ」

「へい」

シロキアの返事を聞くと、サギリはクルドバーツに視線を向ける。「んで、アンタはどうすんだい？」

拒まれることなど考えもしない傲慢な、しかしそれゆえに美しい

笑み。

「私に拒否権などないでしょう。先の件で私の財産はほとんどが貴女の手元だ」

黒曜石のように輝くその視線を受けて、クルドバーツは渋い顔になる。

「ま、そう言うと思ってたよ、それじゃよろしく頼むよクルドバーツ」

「とりあえずは、道の確保からですかね……」
ため息と共に頷いて、クルドバーツは黙る。

「ついでにジルもなっておくかい？ アタシの手下」

「止めておくよ、うちはあんたの所が立ち行かなくなった時に乗っ取る計画なんだ」

にやりと、笑みを浮かべてジルはとんでもないことを口にする。

「そりゃ怖い、しつかり釘を刺しておかないとねえ」

不穏な言葉の応酬に止めを刺して、サギリは本題を切り出す。

「でだ、とりあえずアタシはこの領主の地位がほしい……分かるだろ？」

四人で囲むテーブルに片手を叩きつけて、サギリは四人を順番に見渡した。

「ルカンドを救い出す……大儀名分としちゃ十分だな」

シロキアが立ち上がり。

「やれやれ、金の工面が大変ですな」

クルドバーツが立つ。

「艶花も噛ませてもらうとするよ、勝ち馬には乗らなきゃね」

最後にジルが立ち上がった。

「仕掛けるのは明朝日の出だ。しつかり頼むよ」

その声を合図に、集会は解散した。

石畳を叩く靴の音。石壁に反響し、暗闇に吸い込まれていくよう

なその音をルカンドは聞くともなく聞いていた。手には鎖が巻きつけられ身動きが取れないようになっていた。

「く……」

体を動かそうとして口から苦悶の声漏れる。全身を痛めつけられてはいたが、特に酷いのは右足だった。殺されない程度に生かしておくのが、領主の意思だったのだろう。ナイフを突き立てられ、挟まれた右足は彼専属の医師によって最低限の応急措置がしてあった。

自分の意思ではもはや動かせない右足を引きずるようにして体を起こす。

鉄格子越しに見えるのは、領主ヘルベル。その背後に控えるのは近衛の騎士だろうか、がっちりとした体格の男が一人彼に付き添う。

「……四役を廃するのは失敗したみたいだね」

ヘルベルの顔色がいつにも増して悪いことを察しルカンドはかまを掛けてみた。

「貴様の、知ったことではない！」

そう言ったきり領主はルカンドの前から消える。石畳を荒々しく叩く音が徐々に遠ざかるのを聞きながら、ルカンドは痛みを息をついた。

「邪魔をする」

がちやりと、錠前が開く音がしたかと思うとルカンドの前に立つのはヘルベルと一緒にいた近衛の騎士だった。

「私の名前はバーンと言う」

痛みと疲労で全身に回る熱を押さえ込み、視線を上げる。

「何の御用ですか？」

「単刀直入に言おう。ヘルベル様を助けてやってくれ」

「この体を見て、あなたは尚ほくにその役目を負えと仰るのですか。消え入りそうなのに声はか細い。だが今にも消えそうなのに声に籠るのは、鉄をも焼き尽くす怒りの炎。痩せこけた体、力の入らない手足。そして、自分を苦しめるためだけに殺された少女達。目

蓋に焼きついたその死に顔が、ルカンドを地獄の業火に突き落とす。
「君の怒りは分かる……だが、それでもこのガドリアに領主は必要なのだ」

「お断りします」

バーンの眉間に皺がよる。だがソレを無視してルカンドは話を打ち切った。

「仕方ない、今日はお暇しよう。だが分かってくれ、これ以上血を流さぬためには双頭の蛇が矛を収めてくれる以外にないのだ」

バーンの語る言葉が領主側の勝手な言い分だと言うことはルカンドにも分かっていた。だが、人の血が流れるということは紛れもない事実だ。

敵であれ、味方であれ理不尽に唐突に振り撒かれる死。もしそれが自分の大切な人に降りかかるかもしれないと考えれば、自然と今の双頭の蛇の在り方に疑問を持つてしまう。

殺しすぎるのだ。誰も彼も簡単に。

鉄格子の前で錠前の落ちる音が聞こえた。

明かりが消えた牢の中、ルカンドはまどろみの中にいた。
夢に見るのは、サギリと出会いジンに救われた日のこと。

初めて人を手に掛け、盗賊へと墮ちた日のことだった。それが正しかったのか今でもルカンドは悩んでいた。あの日から数え切れないくらいの人の死を見て来た。

荒地を渡る商人、同じ盗賊、そして奴隷の子供。

なぜ彼らは死ななければならなかったのか、何が悪かったのか。いつたい誰が。

「うう……」

口から漏れたのは苦悶の声。目を開けるのも億劫で、ルカンドは目を閉じていた。静寂と暗闇の支配する牢屋では目を開けても見るべきものなど無い。いつもそうするように目を閉じていさえ居れば、

再び安楽な眠りに誘われるかもしれないと思ったからだ。

だが、その日は違った。

いつもは聞こえないはずの城のざわめきが地下の牢屋にまで聞こえてくる。

(何があつたのだろうか……?)

疑問に思いつつも、ルカンドは耳を澄ますだけに留めた。拘束されている上に、怪我まで負ってではできることなど高が知れている。

(人の争う声……?)

次第にそのざわめきは、地下牢に近づきつつあつた。

「ぎゃあ！」

悲鳴と共に、地上へと続く階段から人が落ちてくる音を聞く。

その後を追って、地下牢へ降りてくる気配があつた。

「っ！」

その気配が牢の手前で息を呑む。

牢屋の腐敗臭の中でも、嗅ぎ分けられる懐かしい香り。

がちやりと、鍵の外れる音がした。ゆっくりと近づいてくるその気配は、ほんの十日しか離れていなかったのに泣きたいほどに懐かしかった。

ふわりと、ルカンドを包み込む暖かな手触りにルカンドは目を開けた。

「サイシャ……」

「ルカ……」

サイシャの翡翠の瞳が潤み、目じりには光るものがあつた。

「みんな、待ってる」

「ごめん……迷惑掛けちゃって」

ルカンドの首筋に顔を埋め、サイシャはルカンドに抱きついた。

その日、ガドリアの領主ヘルベルは荒地へ追放され、新たな領主

の座には炎の運び手のモルトが就くことになった。

後日談

岩から削りだしたような無骨な城。

ガドリアの荒地を渡る烈風が、外観の華美な装飾を許さず、不要なものは全て剥ぎ取ってしまった為にそのような形となっていた。

その城の最上階、展望室のテラスから見下ろす風景は、荒地とその向こうにある境界の山脈を同時に見渡せ、反対側に目を向ければ切り立った崖とどこまでも広がる海を見渡せた。そして、眼下に広がるのはガドリアの街だ。

照りつける日差しを和らげるように、ガドリアの風が肌に心地よく吹く。

腰まである長い漆黒の髪を風に靡かせ、サギリはテラスからその風景を見渡していた。

「ガドリアの領主か、アタシも成れば一生楽に暮らせたのかもかもしれないねえ」

呟きに似た言葉は展望室の中に向けたもの。

「領主になりたきや最初からなれば良いだろ、なぜモルトの爺さんなんかに譲ったんだ」

不満というよりは疑問の声をジンはサギリに向けた。展望室の柔らかなソファには敢えて座らず、硬い床に座りながら得物の手入れをしていたジンは注意だけをサギリに向ける。

「一つは、恩返しさ。今回のことじゃ随分無理させちまったしね」
「柄にも無く良い心がけだな」

鼻で笑うジんに、サギリは肘掛にもたれ掛かりながら視線を向ける。

「もう長くは無さそうだからね、ハンナの婆さんと仲良くやってもらうぞ」

「爺さんが死んだ後は、必然的にルカンドにお鉢が回ってくる……」
ジンの投げた言葉をサギリは意地の悪い笑みを浮かべ、受け止め

た。

その沈黙を答えと受け取ってジンは言葉を続ける。

「ルカンドは、怒ってたな。あれじゃサギリの言うことを聞かないかもしれないぞ」

手を止めて、ジンはサギリを見る。

「アタシに反抗するなんて成長した証拠じゃないか、嬉しい事だよ。それにアタシはあの子のやることに文句をつけるつもりもないしね」

「反抗的な奴が好みなのか？」

「育ての親として、子供の成長は嬉しいもんだよ、アンタも含めてね」

「ガキ扱いするな、俺はもう大人だ」

鼻で笑うサギリからジンは、視線を手元の得物に戻す。

ジンが思い浮かべたのは先ほどルカンドとサギリの言い争いだっ
た。牢から出されたルカンドは、見るも無残にやつれ果て、そして
右足は使い物にならなくなっていた。

レギーの薦めで、今ルカンドの右足は義足になってしまった。あ
の足ではもう満足に戦えないだろう。

そのルカンドが治療を終え義足を引きずりながらサギリと出会っ
た途端言い争いを始めたのだ。

「あの子が怒ってるのはね、アタシにじゃないさ」

「あん？」

「自分の無力が堪らなく嫌なんだろうよ」

珍しく表情を消したサギリが、遠くを見て答える。

「ま、八つ当たりしてるようじゃまだまだガキだろうけどね」

「その為の次席領主、か」

領主の補佐を役割とする役職に、無理矢理サギリはルカンドを推
薦していた。

「ルカの奴に力があれば、人が殺しあわなくて良い世の中が来るだ
ろうさ」

「もし力がないなら？」

「その時はルカは死ななきゃならないだろうねえ」

強く力のあるものが生き残り、力のない奴らは死んでいく。荒地で培った双頭の蛇の掟そのままにサギリは言い切った。

「今度は、戦い方を教えてやれないな……」

「あの子だけの戦いさ、自分で選んだんだ」

モルトは病床にあり、実質的に政務を取り仕切るのは次席領主たるルカンドになる。それを思うとジンはひとつため息をついた。

「手助けぐらいは、しても良いだろうけどね」

苦笑して肩をすくめるサギリに、ジンは気の無い視線だけを向ける。

「……そういえば、あのルクとか言うガキはどうするんだ？ ロクサーヌに売り払うのか？」

「最初はそうしようと思ってたんだけどねえ……アタシが居ない間に巧い具合にルカやケイフウに取り入っててね」

「最近はいしゃや、ジルとも一緒に居るみたいだな」

「そういうとき。あの子だけが計算違いだったねえ……ま、しばらく放つとくさ。害は無さそうだし」

「まあ、そうだな」

「いろいろ使い道もありそうだしね」

「あの貴族のガキが、使い道か」

考える風に黙り込むジン。

「なあサギリ、本当に領主にはならないのか？」

「柄じゃないよ……アンタはなりたいたいのかい？ 次席領主」

一笑に付してジンは得物を仕舞い、サギリに背を向ける。

「柄じゃねえよ」

見えなくなるジンの背中に向かって、サギリは優しく微笑んだ。

「まったく、誰に似たんだか」

天高く広がる蒼穹が、サギリの後ろから風を運んでくるようだった。

「ジンにい〜！」

「こんにちは」

展望室を出たジンは、そのまま城を出ようとしたところでケイフウに声をかけられた。手には両手一杯の花を持ち隣には先程までサギリと話していたルクの姿。

「何してんだ？」

軽い足取りでジンの元へ走り寄って来るケイフウ。その頭をなでながらジンは二人を交互に見た。

「あのね、お葬式するの……キリクとヒルザのね」

しゅん、としゃげてしまうケイフウの隣でルクが話の補足をする。「お葬式のやり方を知らないと聞いたので、私が……ロクサーヌ式で申し訳ないのですけど」

キリク、ケイフウの手下の一人だった。ケイフウと共に色街で、シロキア一家を足止めしていたが、逃げ遅れて殺された手下。ヒルザは重なる大岩で領主軍との争いで命を落としたはずだった。

「葬式、か」

死んだ奴は獣の餌になる、それが荒地での常識だった。ガドリアでは申し訳程度に土の中に埋めるか荒れ狂う海に投げ捨てるか。どっちにしてもルクから見れば葬式などと呼べる代物ではなかったのだらう。

ジンは、ちくりと胸の奥が痛んだ気がした。

「ジンにいま一緒にどう？ お花でキリクとヒルザを飾るの」

弱い笑みを見せるケイフウの頭を撫でジンは首を振った。

「行く所があるからな、葬式の仕方は今度教えてくれ」

「うん！」

ルクと視線が会つと、彼女は少し怯えた様に身を竦ませた。

「ありがとう」

自然と出たその言葉に、ジン自身が驚いた。

「あ、はい」

戸惑った声を上げるルクは俯いてしまう。

「じゃ、ジンにい、今度ね！」

ルクの手を引いて去るケイフウを見送りながら、ジンは小さく呟いた。

「俺達は手に入れたのか？」

遠い昔に失ってしまった故郷を、大切な人を、守るべき何かを。

あの自身の命と引き換えに呪いを受け入れた不毛の荒地から、手にできる何かを手に入れたのだろうか。自身に投げかけた問いに、答えは返ってこなかった。

ただ、死んだ後に悲しんでくれる人がいたキリクとヒルザが少し羨ましかった。

ガドリリア城の敷地内、東に海を臨む荒地にケイフウとルクは向かっていた。ルクが提案し、領主となったモルトが最初に手がけた仕事、ガドリリアの騒乱で死んだ者達の共同墓地の建設だった。

実質的な指揮はルカンドに任されており、モルトはハンナに監視されながら病気療養をさせられている。

ルカンドは小高い丘の上にある城の敷地の一角を、墓地に改良した。

資金は元領主の財産を没収したものを当てたのだが、その額の少なさにルカンドとクルドバーツは頭を抱えた。そこで出たのが、双頭の蛇との抗争で降伏した領主軍の捕虜者だった。

彼らに捕虜からの解放を条件に、区画の整理を行わせ墓石を作らせ、墓地に関するあらゆることを任せて完成に漕ぎ着けたのだ。

「あ、ルカだ」

潮の香りが満ちる墓地にケイフウの声が響いた。

義足を補うための杖をつきながら、ルカンドは一つの墓石の前に立っていた。その隣には寄り添うようにしていつも通り黒の帽子と

黒い服をまとったサイシャの姿がある。

「やあ、ケイフウ、ルクさん」

ルカンドが解放されてから30日、解放された直後の幽鬼のような表情からはだいぶ険が取れてきていた。

今はもう微笑む笑顔は柔らかい。

ルクは解放された直後のルカンドを見て、言葉が出せなかった。

あの優しい笑顔を、完膚なきまでに叩き壊した虜囚の期間。

それを思ったたび胸が一杯になってしまつてまともにルカンドの顔を見られないで居た。無言で視線を向けてくるサイシャにも、目礼で返す。

「ルカとサイシャもお葬式？」

「いや、そんなものじゃないよ」

ルカンドの瞳に翳りが過ぎる。自身の為に奪われた命、身に余る罪を心を感じるルカンドは墓石に視線を落とす。

ルカンドの杖を持つ手に、サイシャの手が重なる。

「ルカ」

平坦なその言葉に、どれだけの思いが籠っていたのだろう。ルカンドは視線を上げて、サイシャに微笑んだ。

「大丈夫」

うなづくサイシャを見てケイフウは首をかしげる。

「そう？ ケイフウねルクにお葬式のやり方教えてもらうの」

ね？ と話を振られ二人に視線を奪われていたルクは慌てて頷いた。

「どうやればいいのか？」

両手に花を抱えたケイフウは、キリクとヒルザの墓の前に立つ。促されるまま、ルクはケイフウの手下の墓の前に立った。

「お花を、墓石に供えて……生前の事を語りかけてあげるの。私はあなたのことを忘れていませんよって故人に聞かせるために」

頷きながら話を聞いていたケイフウは、言われたとおり墓石に花を添えて生前の彼らのことを墓石に向かって語りかけた。

「キルクは、奴隷だったんだよね。ケイフウが三度目に襲った奴隷商人の馬車の中で……」

ケイフウの語りかけを聞きながら、ルカンドは墓石をひたすら見つめていた。そんなルカンドを見かねてルクは、勇気を出して彼に話しかける。

「その墓の主の方にも、語りかけてあげたらどうですか？」

その言葉に寂しそうにルカンドは笑う。

「名前も、知らないんだ……」

傷口をこじ開けるように、苦しげにルカンドは言葉をつむぐ。

「僕の目の前で、殺されたんだ。ヘルベルは僕を苦しめるためだけに、奴隷の少女を何人も手にかけて」

淡々と呟いているように見えて、その裏では押し殺した感情が爆発しそうだった。

「僕は、何もできなかった目の前で殺される彼女たちに何も……」

虚ろな視線が墓石の上を彷徨う。

「ルカンドさん……」

次の言葉を言うのにルクは自身の中にある勇気を振り絞られなければならなかった。言葉は暴力よりも簡単に、人の心を踏みにじる。「泣きたい時には、泣いてください。泣いて、それから謝って下さい」

無言でルカンドは虚ろな視線をルクにあわせる。

「ルカンドさんはそうすべきなんです。誰でもなくあなた自身の為に」

「ルク！」

サイシャからの制止の声を振り切って、ルクは続けた。

「あなたのせいで奴隷の少女が死んでしまった」

「ルク、お前！」

その決定的な一言に、サイシャはルクにつかみ掛かる。

「僕は……」

「ルカンドさん、死んだ人はもう戻ってこないんです、だからその

人たちの為に生きている私たちがしてあげられることは忘れないで居てあげることだけなんです」

ルクの叱責の声は、彼女自身のしゃくりあげる声に変わる。

「泣いてくださいルカンドさん。その少女の事を忘れないで居てあげてください、私たちにはそれぐらいしかできないんです、お願いします……」

涙で掠れるルクの言葉を最後まで聞かないうちに、ルカンドは墓石の前に片膝をついた。

「ごめんよ……ごめん……」

かろうじて聞き取れた言葉はそれだけ、後はもう堤防が決壊するようにルカンドは泣き崩れた。顔を両手で覆い人目も憚らず泣きじやくる。兄弟同然に育ったケイフウやサイシャでさえルカンドの泣く姿に呆然としていた。

いつしか風の向きが変わっていた。

荒地から吹いてきた西風が、東の海からの風に代わる。

沈む夕焼けが海を赤く染めていた。

泣き疲れたルクと、ルカンドは、涙で腫れた目を擦っていた。

「潮風が染みるね……墓地の間間違えちゃったかも」

「お前が泣くところ、初めて見たな」

落ち着きを取り戻したルカンドに、サイシャから声がかかる。

「ルク大丈夫？」

心配そうに声をかけるケイフウに頷いて、ルクは墓石の前に片膝をついた。

「お葬式の最後にね、故人に祈りを捧げるの……一緒にしよっか」

ルクは片膝をつき胸の前で両手を合わせる。

その彼女に、ケイフウもルカンドも、サイシャも従った。

「亡き魂に安息を、彼らの魂が安らげる場所にたどり着けますよう」
ルクは祈りの言葉を口にして黙祷を捧げ、ほかの三人もそれにな

らった。

「そろそろ帰らなきゃ、日が暮れちゃう」

ケイフウの声に、ルカンドが頷く。

「今日はサイシャの料理食べてみてよ、格段に進歩してるから」

「うるさいっ！」

「きっとケイフウの方が上手だよ！」

じゃれ合いに似た言い合いをしながら墓地を離れるケイフウとサイシャ。

「ルカンドさん」

共に離れようとするルカンドをルクが呼び止めた。

「なに？」

「あのね、ほんととはもっと早くに言わなきゃいけなかったんだけど」

夕日を背に俯くルク。

「私臆病で、それでね」

「うん」

それは出会ったときのような優しい笑み。

「おかえりなさい」

ルカンドの優しい笑みに答えるように、ルクは泣きそうなほど満面の笑みを浮かべた。

「うん……ただいま」

やっと帰ってきたその笑顔に、ルクは心からの笑顔を贈った。

後日談（後書き）

余談

ルクとルカンドから遠ざかる二人は小声で囁きを交わしていた。

「良いの？ サイシャ、ルカから離れちゃって……」

「良いんだよ。今回だけは……」

「ふん」

不思議そうにサイシャを見上げるケイフウに、彼女は意味深な笑みを返した。

ということ、魔女の系譜＜賊都＞編終了いたします。

次回からは、王都ロクサーヌでカルとシユセを主人公に据えた物語になると思います。ここまで読んで頂いた方に感謝を。

では、次回もお楽しみください。

謀略の使徒1（前書き）

カル、シュセをメインに据えて物語が進みます。

舞台は王都ロクサーヌ、時間軸的には賊都の少し後の物語です。

戦を終わってロクサーヌに帰還するカルとシュセを待っている者は…

…。

では、お楽しみください。

謀略の使徒 1

歩む足取りは重く、うつむき歩く様は葬列に似ていた。いや、事実その退却は葬列といった方がよいかもしれない。盟主たるヘルクオスを失い、その他の諸将を失った敗残兵の群れ。

その中であつて、他の兵士よりは幾分マシな状態を保っていたのはカルの私兵達だった。傷付いた他の貴族の私兵達に手を貸し、整然とはいかないまでもカルの指揮下にまとまりを見せていた。

「て、敵だ！」

その列の後方、砂塵が見えた。拳がった声は、瞬く間に兵士の間
に動揺となつて広がつていく。

「落ち着け！」

一喝したのは、怪我人に肩を貸していた若者だった。

「あれは味方だ！」

「てめえみたいな若造に何が分かる!？」

年長の兵士の声に怯むことなく、若者は言い返した。

「先頭を見る！」

戦々恐々としている兵士達の後方から濛々たる砂塵を上げて迫つてくる騎馬隊。その先頭には白亜の鎧を身にまとつた騎士の姿があった。

「白き戦乙女だ！」

カルの私兵達の中から歓声があがる。戦場で不可思議な力に護られた彼女は兵士達の間で古の女神になぞらえてそう呼ばれていた。

彼女が行軍の最後尾に追い付く。と、同時に不安そうな兵士達を見渡して一人の若者に目を留める。一瞬驚いたように柳眉を跳ね上げるが、直ぐに平静を取り戻し彼の前まで駒を進める。

兵士達が平伏する中、若者は立つたままだ。彼の袖を無言で引く張る者も居たが、若者は意にかえさない。

兵士達の誰もが無礼者と斬り捨てられると身構えた時、白き戦乙女と呼ばれた彼女が駒からひらりと降りて、若者の前にひざを突く。「殿下、シユセ・ノイスター只今戻りました」

「ご苦労、後方の様子は？」

その様子に、その場の兵士達は言葉を無くし瞠目した。

「あ、あんた……一体」

辛うじて若者に肩を貸してもらっている兵士が声をかけた。

「このお方は、カル・スカルディア殿下だ」

答えたのは、シユセ。鋭い視線と共に言葉を掛けた。

「なんで、そんな人がこんな所に……」

馬を持つ多くの貴族は既にロクサー又に帰り着いているだろう。

城壁を頼りに枕を高くして眠っているはずだ。

「私は」

湖水のように輝く青き瞳に、一瞬翳りが走りそれを振り払うかのようには決然とカルは言い切った。

「お前たちを見捨てはせぬ！ お前たち全員を生きて王都までつれて帰る」

膝を付いていたシユセが立ち上がり、率いて来た騎馬隊に命じる。「馬に負傷者を乗せてやれ、無事な者は全員下馬して後、徒歩にてロクサー又に向かう！」

彼女自身も馬を下りて、負傷者に手を貸す。その様子に、兵士達の群れの中から啜り泣く声が聞こえる。

私兵は負け戦なら見捨てられて当然。カルとシユセの行動の方が異端なのだ。だが、だからと言って見捨てられた者が納得できようはずもない。

「さあ、頑張れ！ 敵の追撃はない。私達のロクサー又までは後少しだ！」

よく通るカルの声に、敗残者達の群れは顔を上げた。歩む足取りは遅くとも確かなものになっていた。

王都ロクサーヌでは先に帰還した貴族達により自由都市群との戦いに敗れ、盟主たるヘルキオスの戦死も告げられていた。

だが、カルがヘルキオスを討ち取ったと言うことは一部の者の間にのみ伝えられた。その知らせを聞いたのは、ロクサーヌを仕切る十貴族達。戦死したヘルキオスも政変に敗れたアトリウスも十貴族であった。

窓にはカーテンが引かれ、部屋を照らすは煌々とした蠟燭の火。円卓に居並ぶは老獺を絵に描いたような海千山千の貴族達だった。

「小僧の罪は明らか！ 即刻首をはねるべく衛士を派遣すべきだ」
憤る貴族の一人の言葉に、他の貴族達も頷く。

元々が華よ蝶よと育てられた貴族達だ。ヘルキオスの時代に抑えつけられてきた分だけ、その憎悪は激しい。

「この機会に、ヘルシオ家、スカルディア家から政治の主導権を取り戻し、元来の共和制に戻すべきだ」

建て前はともかく、実際に街を仕切っていたのはヘルシオ家のヘルキオス。ヘルキオスと姻戚関係を結んだスカルディア家、そして存命中はツラド家のアトリウスであった。

スカルディアの当主であったカルの母が死んで後、実権を握ったのはヘルキオス。カルがまだ未熟ということで、スカルディアの家を仕切っていた。つまり、ヘルキオスの一人勝ち状態だったのだ。それを苦々しい思っているのは、十貴族達全員の思いだった。

そしてカルはスカルディアとヘルシオの血を引いていた。貴族達にすれば当然面白くない。

「即刻処刑と言うのは、いかななものか」

カル殺すべしの空気の中、口を開いたのは現在は八人に減った彼らの長老格ジェルノ家のオウカ翁。しわくちゃな顔の中に温和な笑

顔を浮かべ話を切り出す。

「ヘルキオス殿には二人の庶子がある、そこをよく考えねばのうざわり、と貴族達がざわめいた。

「なるほど……」

何人かが納得したように頷く。

「では、そのように」

オウカの一声に会議は閉会となる。

彼の指示の下その知らせには直ちに箝口令が敷かれた。

表向きは、勝利の余勢を駆った自由都市群に付け入られるのを防ぐためと言う名目だった。だがその実、彼らの目的はスカルディア家と政変の後なし崩し的にヘルキオスのものになっていたツラド家の財産だった。

ヘルキオスにはカルの他に二人の庶子がいた。側室のウエンデイの二子カリオンとアクサスの兄弟だ。だが共に10歳と9歳のまだ幼い兄弟である。側室のウエンディは、カルのスカルディア家のように名門の出ではない。

そこに、彼らの思惑が入り込む余地がある。カルと彼らを争い合わせ漁夫の利を狙ったのだ。カルが倒れるなら、協力の見返りにツラド家か、スカルディア家の財産を要求出来る。もっと良いのは、共倒れになってくれることだ。

主なき家など、老獪な貴族達にはハイエナの目の前に差し出された肉に過ぎない。ウエンディを焚き付けカルに敵対させることなど彼らにとっては、赤子の手をひねるようなものだと考えていた。

遠く見える白い城壁に歓声が上がる。誰も彼もが疲れ切っていた。武器と呼べるものはほとんどない。ここ数日、食つや食わず、全員で少ない食糧を分け合っただけでここまでできたのだ。

「ロクサー又だ！ 帰ってきたぞ！」

涙の混じるその声は、全員の思いを代弁していた。愛しき王都口クサーヌ、愛する家族の待つ都。砂漠でオアシスを見つけたような感動が全員を包んだ。街に着くまで、そこまでの苦勞が嘘のように彼らの表情は明るかった。街に着けば、この奇特的な貴族と会うことなど出来ない兵士達は、積極的に彼に話し掛けた。

またカルにしても、普段の貴族達に向ける仮面のような表情は捨てて、彼らと冗談を言い合い、笑い合った。その様子をシュセは一歩引いて優しく見守っていた。

街に着くと、兵士達は目に涙さえ浮かべて別れを惜しんだ。

「殿下、俺達が帰ってこれたのはあなたのお陰だ。もし、俺達で役に立つことがあればなんなりと言ってくれ」

年かさの兵士が代表して別れの言葉を掛けた。

「そうだな、是非役に立つてもらおう」

人によつては恩着せがましい言葉なのだろう。だが、それを感じさせない若さ故の爽やかさがカルにはあった。

「おうよー！」

笑つて兵士達は別れていく。その後ろ姿を見送つてカルは自らの私兵達にも解散を命じた。

「ご苦勞だった、しばらくは戦もない。ゆっくり休んでくれ」

カルの言葉に、私兵達はざわめき歓声を上げた。

「各々重い負傷者は明後日以降に申し出よ！ スカルディア家より一時金を支給する」

後を受けたシュセの言葉に、私兵達の歓声はより高くなった。それを背にカルとシュセは屋敷へ戻る。

「お前にも、苦勞をかけた。今日はこのまま休んでかまわないぞ」
出迎えの使用人たちに武具を渡したカルはシュセに優しい声を掛ける。

「お言葉に甘えます」

戦の後、シュセは努めて彼と距離を取ってきた。自室として与えられている部屋に戻つて鏡を見れば、目の下に隈を作った汚らしい

女が映っていた。

「醜いな……間違えるなよ、シユセ・ノイスター。お前はカル様の忠実な騎士だ」

自嘲気味に口の端を歪めて、鏡の中の自分を罵った。鏡から目をそらし、自分の手のひらに視線を落とす。

カルに掴まったあの温もりが、未だ残っているような気がして、彼女は強く拳を握った。

一方、自室に戻ったカルは柔らかい寝台に身を横たえた。

「お前たちを見捨てはせぬ、か」

自嘲気味に口の端を歪めて、顔を右手で覆う。

「あのものたちを窮地に追い詰めておいてよく言う……」

ヘルキオスを討たねばならなかった。それに後悔はない。

だが、自分の復讐の為にどれだけの血が流れたのか。罪のない口クサーヌの民を何人犠牲にしたのか。

「……とても、許せぬ」

ならば、せめて彼らの死が無駄死にでなかったことの証を建てねばならない。でなければ、自分自身を赦せそうにない。

「この手で、国を」

遠く自由都市群の果てまでも続く巨大な国を。誰もが安心して、平和を享受できる国を。

「この腕で……」

伸ばされた腕に掴むのは、今はまだ虚空のみ。

カルの右腕に刻まれた刻印が、僅かに疼いた気がした。

謀略の使徒2

後に、その地の名前を取ってポルフロントの敗北と呼ばれる戦いから十日が過ぎた。

カルがロクサーヌに帰還し、落ち着きを取り戻しつつあったある日。

ここ数日の日課となっている負傷兵の慰問へ向かおうとしたシュセは、スカルディアの屋敷から出てきた所を一人の男に呼び止められた。

「失礼だが、こここの屋敷に縁のある方だろうか？」

ぎこちない言葉遣いに、シュセは眉根を潜めながら男を観察した。日に焼けた肌、赤銅色の髪を無造作に束ね目には猛禽類のような鋭さがある。背丈は見上げるほど高く、胸板は厚く引き締っていた。見るからに歴然の戦士といったような風情を漂わせたその男は、引きつりそうな愛想笑いを浮かべつつ、シュセを見る。

「そうですか……何か？」

拒絶の意味をこめた低い声で、シュセは応じるが男は全く無頓着だった。

「いや、怪しいものではないのだが」

そう言われても十分に怪しい。服は富裕な商人か下位の貴族が着るような物だが、それを着ているのが貴族よりはゴロツキに近い人相だ。よく見れば精悍と見れなくも無いが、引きつりそうな愛想笑いが全て台無しにしている。

例えるなら、獲物を狙う盗賊の頭目……そのようなことを心中で考えながらまじまじと男を観察するシュセに男は困ったように切り出した。

「カル・スカルディア殿下に面会を申し込みたいのだ。なにぶん君のような少年に頼むのは気が引けるのだが、大貴族に伝などないもので」

少年、という言葉にピクリとシユセの柳眉が跳ねる。今日のシユセは鎧姿ではない。髪を束ね、腰に細剣を帯び、それを扱うために貴族の少年のような格好をしていた。だが彼女の表情の変化などお構いなしに、男はひたすら喋る。

「……であるからして、おっとどこへ行く!？」

無言で立ち去ろうとしたシユセの前に、大男が回りこむ。

「用事がありますので、失礼します」

冷然と告げて歩き出そうとするシユセの腕を男の巖のような腕が掴んだ。

「こつちも遊びでやってるんじゃないんだ」

愛想笑いから肉食獣のような笑みへ、男の笑いが変化する。こちらが本性かと、腕を捕まれたまま男を睨みつける。

「力づくで言うことを聞かせるって手もあるんだぜ？」

野卑な言葉使いが妙に似合う。やはり盗賊の類かと、シユセは一つため息をついて男に向き直る。街の治安を預かる巡回の衛士が通りかかるのを視界に納め。

「そうそう、大人しく言うことを聞いてくれれば」

「きゃー!」

シユセは自分が思う最大限の女らしく叫び声を上げた。

「どうなさいました!？」

「な、なにい!？」

駆け寄る二人組みの衛士に、狼狽する男。

「痴漢です!」

びしりと指差して男を衛士に突き出す。

「な、違う俺は!」

途端に背を向ける男に衛士が駆け寄る。

「さて、貴様! その卑劣漢!」

「婦女子に乱暴を働くなど、男の風上にもおけぬ!」

それぞれ正義を背にした衛士二人が、男を捕縛しようとして駆け寄る。

「ち、くそう! うわっ!」

シユセの腕を放し駆け出そうとする男の足元に、スツと彼女のブーツが伸びた。体勢を崩し、ころぶ男に衛士の二人が素早く縄を掛ける。

これでもかと言わんばかりに幾重にも撒かれた捕縛用のロープ。その縄に締め上げられながら恨めしげな視線を向ける男に、シユセは冷たい微笑を向けた。

「おお、シユセ殿ではありませんか！」

男を捕縛した衛士達は、スカルディアの家門に属する者達だった。シユセ殿に痴漢を働くなど、万死に値しますな！」

立派な髭を蓄えた衛士の丁寧な言葉使いに、男は目を丸くしてシユセを見つめる。

「ええ、女の敵ですね」

軽く答えるシユセに、ふむふむと頷きながら衛士は男の処遇を聞く。

「してこの卑劣漢をどのように致しましょう？ シユセ殿に卑劣な行為に及ぼうとしたのです。裸に剥いて外壁の上から逆さ吊りにして今後の見せしめにしましょうか？」

冷や汗を掻く男を一瞥して、シユセは頭を振った。

「そこまでしては可哀想です。スカルディアの屋敷の地下牢に、とりあえずは拘留ということでは」

「おお、さすがシユセ殿は慈悲の心を知っておられる！」

「貴様もシユセ殿に礼を言わぬか！」

感嘆する衛士達は、男を小突きながらシユセに礼をして立ち去った。

「この男がシユセを襲った犯人か？」

スカルディア家の地下牢。

私兵の慰問から戻ったシユセは、カルに呼ばれる。男のことなど

忘れかけていた彼女は半ば強引に地下牢まで連れて行かれた。

「ええ、間違いはありません」

しゅん、と悲しげな顔をするシュセ。

「だから違うんだって！」

鉄格子越しに、未だ幾重にも縄を掛けられた男は、必至の抗弁をする。

「我が家の者を襲うとは、言語道断。本来ならば外壁の上から首を吊らせる所だが、シュセのたつての願いにより」

「だから俺の話聞けっ！俺はグスノウ家のエルシド！カル・スカルディアに会いに来ただけだ！」

カルの言葉を遮り、男が叫ぶ。

「カル・スカルディアに会ってどうするつもりだ？」

湖水色の瞳を面白そうに細めながら、カルは問いかけた。

「陳情つてやつだよ。牢に繋がれた友人を助きたい」

ほう、と呟いてカルは考えよときの癖で腕を組む。

グスノウ家といえば、何年も前に没落した貴族の家だ。

「ふむ、良かったな念願かなったぞ」

「なに？」

心底意地の悪い笑みを浮かべて、カルは笑った。

「お前の目の前にいるのが、カル・スカルディアだ」

その後、一刻二時間に渡る取調べを経て、エルシドはやっと牢から開放された。

グスノウ家に関する資料をシュセから受け取り目を通したカルは、エルシドを風通しの良い部屋に案内させた。十数年前に没落した貴族の家で、確かにエルシドという名の三男が存在していた。年齢は28歳、家が没落の後は家の再興を目指すわけでもなく傭兵をして現在に到る。

金次第で自由都市郡に雇われることもあり、ロクサーヌよりは自

由都市郡での知名度の方が高かった。

「それで、誰を助けたいのだ？ エルシド・グスノウ」

風通りのよい部屋に通されたエルシドに、カルはいきなり本題を切り出した。

柔らかいソファに姿勢を正したエルシドが座り、その正面にカルが座る。真剣なエルシドの眼差しに、カルとシュセは視線を交わした。

「友の名はヘリオン、ヘリオン・レーング」

「レーング家と言えば下級貴族の家柄で、ヘルシオ家の派閥ですね。無表情にエルシドを睨みつけ、シュセはカルに耳打ちする。

彼女に軽く頷いてカルはエルシドに視線を戻した。

「なぜ、私なのかな？ 傭兵隊長ともなればそれなりに伝手はある」

「俺の正体を知っていたのか」

顔に不快感を浮かべながら、エルシドは視線を逸らす。

「色々話は聞いている」

その擲掄に、眉根を寄せる大男。粗雑な行いとその武勇で有名な男だった。ガリガリと首筋を搔くと座っていたソファに脱力したように体を沈める。

「ならこの堅苦しい口調も止めさせてもらうぜ」

その余りの変わりように、シュセは柳眉を吊り上げるがカルは意に介さずエルシドを見守った。

「あんたの噂を兵士達の間で聞いたからさ。慈悲深い若君だつてな」にやりと、野性的な笑みを浮かべて背もたれから体を起こす。

「ヘリオンはヘルキオスに意見して投獄された。救い出せそうなのは、スカルディア家のあんなだけだ」

「罪状は？」

「終獄」

終身刑。ぶつかるカルとエルシドの視線が刃で切り結ぶ。

「私にヘルシオ家の派閥と争えと？ 私がこれからヘルシオの家督

を継ぐことを承知の上で言っているのか？」

終身刑以上の罪の決定には、十貴族もしくは、その代理が立ち会うことになっている。ヘリオンを牢から解き放つ為には、彼の罪を取り消さねばならない。それはつまり、案件を担当した貴族の顔に泥を塗ることと同義だ。

これから取り込む派閥の中に不穏分子は抱えたくはない。少なくとも、普通はそう考える。

「このままじゃ、お前さんはヘルシオの家を継ぐ前に、あちこちから伸びたハイエナの牙でなぶり殺しにされると思うがね、その為にもヘリオンの奴は助けた方が良いはずだ」

「ヘリオンを牢から出すことで、彼の協力を得るのは当然として…

…」

一度瞼を伏せ、再びあげる。

「頼みに来た、お前は私のためになにをしてくれる？」

カルの冷たく光る青の瞳がエルシドを見据える。その強欲ぶりに、エルシドは苦笑した。

「あんたは戦が下手だからな、この腕でどうだ」

二の腕を軽く叩くエルシド。

「兵を任せよ、と？」

「ああ、そうだ」

「面白いことを言う」

軽く笑うカルに、エルシドは野性的な笑みを返す。

「では自慢のその腕、試させてもらって良いかな？」

笑みを絶やさず、カルはエルシドを見る。その笑顔の中で目だけが笑っていないことにエルシドは気がついてた。

「ああ、なんなりと」

だが不敵に笑って応じる。部屋の空気が軋みを上げて重たくなつた気がした。

「ポーレを攻略できるか？」

言葉を発したそばからカルの顔に笑顔はない。

ポーレは自由都市群側の都市国家。ロクサーヌからもっとも近い要の都市だ。

「殿下！」

シュセの声を、カルは片手をあげて遮った。

「どうだ？」

エルシドはカルの整った顔を凝視した。年齢を感じさせない迫力がカルにはある。もしかしたらそれが、民を率いる者と、兵を率いる者との違いなのかとエルシドは思った。

「できる」

「もし、それが叶ったならお前の友は必ず助けよう」

その言葉を聞いてエルシドは立ち去った。

彼が居なくなった後、シュセは書類に向かい合うカルに問い掛けた。

「ヘリオンと言う男の資料を集めてくれるか？」

「本当に、できるとお思いなのですか？」

眉間にしわを寄せ、困惑気味にシュセは聞いてくる。

「さあ……だがヘリオンと言う男に多少興味が湧いたのは事実だ。

それが狙いなら、あれは大した男だが」

苦笑して再びカルは書類に顔を向けた。

既に夜の帳が降りて久しい。

部屋に焚きこめるは、魔性の香。この部屋の主は貴族の夫人達の間で流行の髪型に、体の線を強調するようすらりとした服を着こなしている女性。喪に服するためか、その顔は黒いヴェールで覆われていた。

指には大きな宝石のついた指輪、胸元を飾るのは真珠のネックレス。自身を飾り立てることを無上の喜びであるかのように、彼女は

至る所に宝石を散りばめていた。

その姿に、初めて彼女を訪ねた貴族の優男は息を呑む。優雅な立ち振る舞い、だがその隅々から立ち上る退廃的な雰囲気は彼女を喪中の妻よりは娼婦のように見せていた。

「ウエンデイ様」

その姿に見惚れながら、客人は何かしら危険なものを感じていた。例えるなら、底なし沼のように、一度近付いたら逃れられないような。

客人は座っていた椅子から立ち上がる。

要件だけ済まして帰ろう、そう思い彼女の前にひざを突く。

「我ら十貴族は、あなた様への支援を惜しみません。ヘルキオス様の仇を討ち、カリオン様をヘルシオ家の跡継ぎに」

つと、椅子に腰掛けていたウエンデイは目の前にひざを突く貴族に靴を脱いだつま先を差し出す。

「ティザル、そなたの舌はそのような戯れ言を言うためにあるの？」
ティザルの目の前に差し出された足は、妖しく白い。その白い足にティザルの意識は吸い寄せられ、次第にぼやけていく。名前を呼ばれた瞬間、背骨を怪しい快感が走り抜けた。

「違うであろう？ そなたの舌は、妾を悦ばせる為にある……そうではなくて？」

ぞくり、とティザルの背を撫でたのは快楽か、それとも妖婦と呼ばれる目の前の女への警鐘だったのか。

だが、ぼんやりと霞む思考ではそれ以上考えられない。目の前にある白い足に全ての意識が吸い寄せられる。

「欲しい？」

唐突に降ってきた声に、ティザルは意識せず激しく頷いた。血走する目に映るのは、ウエンデイの艶やかなつま先。いくらあふれ出る唾を飲み込んでみても、渴きは酷くなる。

「ハア、ハア……ッハア」

犬のような荒い息づかい。誰かと思えば、ティザル自身の口から

溢れ出ていた。

「可愛いこと」

ウエンディの声に鼓動は早鐘を打ち、手足が震える。

早く、ハヤク、ハヤク！ 欲しい、欲しい、欲しい！

思考を支配する言葉。何故、これほどまでに乱されそして我慢しているのか、既にティザル自身ですらもわからない。

「お舐め」

氷よりも冷たいウエンディの言葉と同時に、ティザルはウエンディの足にむしゃぶりついた。

欲しい、もう何も考えられない。

ぺちや、ぺちや。

涎を垂れ流しながら、丁寧にウエンディの足の指を舌でなぞる。

指の間はもちろんのこと、整った爪の合間にまでも舌先をのばす。

「ハア、ハア……う、ハアハア」

ぺちや、ぺちや。

指を口に含み、舌の上で丁寧に転がしながら味わう。ベトベトになったウエンディの足を、その自身の粘液ごと舐め回す。

ティザルの舐め回すままに任せていた足をウエンディはひいっと引いた。

「フッフ、あなた達の目的は妾とあの坊やのつぶし合いでしょう？」

「あつ、あつ」

まるで子供のように、その足を追うティザル。

「答えなさい、企てたのはジェルノ家のご隠居ね？」

激しくティザルの顔が上下する。

「困ったものね、でも……」

ルージユを塗った唇を自身の舌でなぞる。

「カルの坊やは、欲しいわね」

カルが自身の足に舌を這わせる姿を想像して、ウエンディはうつとりと微笑んだ。

「ねえ、ティザル。今度は十貴族の別の殿方も連れてきてね」

ウエンディの足を舐める下僕に向かって、彼女は妖艶に微笑んだ。

「ほう」

シュセの差し出す書類に目を通したカルは、感心したような溜め息を吐いた。

「ヘリオン・レーング、なかなか見所のある方の方のようですね」

最近書類を見る度に眉間のシワが寄るばかりのカルが、珍しく眉間にシワを寄せない。

「会ってみるか……」

未だヘリオンの経歴を書いた羊紙を見ながら、カルが呟いた。

「会うなら、明後日以降になりますね」

今日と明日の予定を確認しながら、シュセは優しく微笑んだ。

今日ばかりは、シュセの笑顔が憎たらしいと思いつつカルは書類と再び戦い始めた。

謀略の使徒3

薄暗い地下道に、篝火が影を作る。

その密閉された強烈な臭気にカルは顔をしかめた。

「臭うな」

その言葉に案内をしていた牢番があせった声を出す。

「も、申し訳もございません……なにせ貴族の方々が訪れるような場所ではないため」

「いや、良い」

どこまで続きそうな言い訳をその一言で断ち切ってカルは黙々と歩を進める。

「こちらでございます」

背の低い牢番に案内されてきたのは、終獄の刑に処せられた者が入れられる区画。鉄格子越しに、ひよろりとした男がカルから背を向けて正座をしていた。

「おい、ヘリオン！ 貴様に面会だ、粗相の無いようにな！」

牢番はヘリオンを怒鳴りつけると、カルに振り向き愛想笑いを振りまく。

「どうぞ、ごゆるりと」

そのあからさまな態度の違いに眉根を潜めながら、カルはヘリオンと呼ばれた男に視線を向ける。

「お前がヘリオンか？」

ゆっくりと振りむく男の、瞳は刃を思わせる銀の色。長い獄中の生活に、体中の肉が削げ落ちているにもかかわらず、吊り上がった切れ長の瞳だけは爛々と輝く。

「そういうお前は、スカルディアの新しい当主か」

言い当てられたカルは目を見開く。その様子をヘリオンは僅かに口元を歪めただけで笑った。

「不思議がることは無い。牢の中と言えども耳があれば噂話ぐらい

は聞こえる」

静かな声音、獄中の空気とはかけ離れた整然とした物言いにカルはヘリオンという男の認識を改めた。

「有能な官吏だったそうだな」

シユセに命じて揃えたヘリオンの履歴。ヘルキオスに牢に入れられるまでは、官吏の中でも異例に若い出世を遂げていた。下級貴族であるレイング家では家門の力で出世するわけにはいかない。家の力ではないとすれば、この目の前の男が優秀であることの証明と言えた。

「昔のことだ」

さしてそのことに拘る風も見せず、ヘリオンは言葉を切る。

「単刀直入に言おう」

威儀を正し、カルはヘリオンに向き直る。

「牢から出たいか？」

終獄の刑に処せられた者には、あまりに魅力的なその提案を。

「いや」

だが牢の中の男は拒絶した。

「なに？」

「牢から出た所で、お前に使われるのだろう？ どこから私のことを聞き込んで来たのかは知らないが沈む船に便乗するつもりは無いのでね」

「なにっ」

受け入れられて当然と思っていた提案を拒否されカルに、僅かに声を漏らした。

ヘリオンの侮蔑も露な言葉に、カルは胸の内に燃える炎を何とか抑え込む。今までこうもあからさまに侮蔑の言葉を投げられたのはヘルキオスだけだった。

「なぜ私が、負けると分かる」

怒りを押し殺した声は低く牢の薄い闇を震わせた。カルの内心を知ってか知らずか、ヘリオンはその問いを鼻で笑う。

「分からないか、それも仕方あるまい。お前は早晚殺される。いや、殺されはしなくても、奴隷の身分に落ちるだろう……十貴族とお前の義理の母によってな」

ぎりつと奥歯をかみ締めていたカルが吼える。

「その程度のこと、私がわからないと思っているのか！」

だが牢の中の囚人から返って来たのは笑いを押し殺した声。

「では聞くが、どうやってお前はその鬭争に勝ち残るつもりだ？」

兵を使えば戦の後間もないロクサー又は自由都市郡に干渉を受けるよしんば自由都市郡からの干渉を防げたとして、東のガドリア、西のヴェルガンディは王都の味方ではないぞ」

「……くつ、自由都市郡には既に手を打っている。東のガドリアと西のヴェルガンディにも手は打つつもりだ」

ふん、と鼻を鳴らしたヘリオンは口元を歪めただけの微笑を返す。

「なら、私は必要あるまい。お前の手は足りている、話がそれだけなら早々にお引取り願おうか」

くるりと、カルに背を向ける。

その背を睨みながら、無言でカルはきびすを返す。

カルの荒い足音が牢屋の向こうに消えてから、ヘリオンは誰にも聞こえないように一言呟いた。

「スカルディアの新しい当主、か」

「ふう〜ん……あの坊やがヘルキオス様を、ね」

暗い部屋いに満ちるのは、魔性の香と淫靡いんびな水音。

「は、はい……戦場より帰還した貴族から、の報告によれば」

足元に跪き、愛撫を待つ僕しもへに向かって、ウエンディは続きを促すように顎をしゃくる。

「なるほどなるほど、意図的に情報を隠しているのは、妾めかけが勝ちすぎるのを防ぐ為……違つかしら」

「はい……仰るとおり、でじやいます」

日頃の横柄な態度の反動のように、必要以上に卑屈に振舞うティザル。ウエンディの白いふくらはぎに頬を擦り付けながら、微笑むウエンディを見上げる。

「悪いけど、ご老人の思惑に乗るつもりはないわ……それに父親殺しなんて、そんな面白そうなこと黙っていられそうにないし」

扇で口元を隠すウエンディに、ティザルは濁った瞳を向ける。

「ウエンディ様……」

上ずった声をあげるティザル。

「そうね、そろそろ踏んであげる」

にんまりと笑うウエンディに、ティザルの興奮の声が重なった。

翌日から、ロクサーヌの貴族の間にはカルがヘルキオスを殺したのだという噂が広まった。もちろん噂を広めたのはウエンディである。家人達を使い、出入りの業者にそれとなくこんな噂がある、という風に囁いたのだ。

人は噂好きである。とかく自分達にはあまりかかわりの無い身分の高い者の話は好物と言っても良い。

それを聞いて苦い顔をしたのは十貴族達もカルも同じだった。街を取り仕切るものとしては、不用意な噂で折角カルからヘルシオ家とツラド家、あわよくばスカルディア家を奪い取る機会を逸してしまつのを恐れた。

カルの方は、ヘルキオスを殺したのは事実だったが出来ればばれずに済ませたいことだった。カル自身後悔はしていない。だが外聞が良いこととは言えないからだ。下手をすればスカルディアの家督を奪われそれを防ぐ為に兵を起こさざるを得なくなる。いくらスカルディアの私兵が精強を誇ると言っても、それを行えばロクサーヌを戦火で燃やすことになる。ルクを失ったあの日のように。

硬質な扉を叩く音。

「入れ」

開いた扉から入ってきたのは、例の少年の格好をしたシュセだった。

「失礼します」

軽く頭を下げたシュセにカルは頷きだけで答える。

「やはり噂の出所はウエンディ様のようです」

スカルディアの私兵では目立ちすぎるため、以前助けた他家の兵士を使ってカルは噂の出所を探った。

「それと、ウエンディ様の邸宅に最近頻繁にケリミオ家のティザル様が入りまわっている様子。恐らく、ウエンディ様に良からぬ事を吹き込んだのは彼ではないかと」

「十貴族か」

シュセの報告に、呟いたカルの声は苦い。

脳裏によぎるのはヘリオンの言葉。

「くそ」

小さく舌打ちしたカルにシュセが目を見開く。

「何かお心に障ることも？」

カルが彼女の前で露骨に悪態をつくのは珍しい。余裕があるときなら、皮肉を言うこともあるが直情を露わにすることはなかった。それだけ余裕がないのだろう。

「いや……」

シュセにその感情を見せたことを恥じるように顔を背けた。

「カル様、お命じくだされば兵を率いて十貴族諸共、ウエンディ様を葬ることは可能ですが」

彼らが兵を起こす間もなく全員を捕らえられれば、あるいは自由都市群の干渉を受けないのではないだろうか、と悪魔の誘惑にも似た考えが浮かんでは消える。

「いずれは彼らを葬り去るつもりだが、なるべくなら兵は使いたくない」

「そう、ですか……」

俯く彼女を励ますようにカルは彼女に声を掛けた。

「白き戦乙女の出番はまだ先になるな、今のうちに怪我を治しておいてくれ」

「御意」

くすりと笑いシュセは頭を垂れる。

「そういえば」

下げた頭を上げて、シュセは問いかけた。

「ヘリオン殿はいかがでした？」

その質問に露骨に眉をひそめてカルはそっぽを向く。

「バカにされただけだったよ」

子供っぽいその仕草にシュセは、嘖きだす。

「それはようございました」

「なにがだ!？」

自分の口からでた語調の強さにカル自身がハツとなる。

「カル様、あなた様は確かに同年代の貴族達とは、比べられないほど優れておいでです」

シュセは優しい笑みを浮かべながら、カルに話しかける。

「わたくし自身、誇りに思います。ですが、全てにおいて他人より優れる必要は必ずしもないではありませんか？」

「それは……」

「カル様が何をなされようと、わたくしがお守りします。至高の座までの道は、必ずわたくしが……ですから自信をお持ちください」

慈母のように優しく諭すシュセの言葉に、カルは一度俯いて腕を組んだ。

「ヘリオンに頭を下げよ、と言うのか」

「優れた者に頭を垂れるのは恥ではありませんよ、ましてやカル様自身が認めたものならば、なおさらです」

すうっと息を吸い込むと、カルは大きく息を吐いた。

「……わかった」

「はい、ではわたくしはこれで」

退出するシユセの背中に、カルは言葉をかけようとして思いとどまった。

彼女の気配が部屋の外から消えると、ため息をついて窓の外を眺める。

「教え諭されているようでは、また振られてしまいそうだな……」
窓の外に広がる夜の闇に向かって皮肉を言った後、カルは再び書類に向き合った。

先の戦から、胸のうちで彼女の占める割合がいや増している。その感情を恋と呼ぶのか、家族に感じる愛情なのかカルには判断がつきかねた。

だが、どちらにしてもシユセがカルにとって大切なのだということに変わりはない。

「ルク……」

かつての最愛の人。彼女が残した心の傷跡に、ゆっくりとだがシユセを思う気持ちが入り込んでくる。それが許されざることのようないきがしてカルは仕事に没頭した。

謀略の使徒 4

ロクサー又郊外に広がるスカルディア領の整理、不正代官の摘発などカルには片付けなければいけない書類が山のようにあった。一日の大半はこの手の業務に費やされ、それが終わってからは体の鈍らない程度に槍を扱う。

新米の当主は仕事が多いのが当然だが、カルの場合はそれがさらに酷かった。元々ヘルキオスが死ぬまではスカルディア領の管理は推官すいかんと呼ばれた官僚によって行われていた。

彼らは、ヘルキオスのヘルシオ家から選ばれてその役職に就いていたのだ。元々カルに不信感を抱いていたヘルキオスはスカルディアの推官を一人も選ばなかった。それだけでなく、カルが推官を組織することさえも禁じていたのだ。

ゆえに、普通の上級貴族の家には必ずいるはずの官僚集団をカルは持っていないことになる。小さな領地しか持たない下級貴族ならまだしも、上級貴族であるスカルディアの領地はあまりに広がった。

自然カルの仕事量は膨大なものとなる。
十貴族や、ウェンディを相手に戦うには分が悪すぎた。

薄暗い牢屋、響く足音が自分の鉄格子の前で止まったのを認めると、男は眉をひそめた。

「客の多いことだ」

きつとあのスカルディアの当主のせいだと考え、誰にも聞こえないように一人ごちして、寝たふりを決め込む。

「おい、ヘリオン！ 起きねえか！」

いつものように怒鳴る牢番の声に辟易しつつ、振り返る。

「貴様が、ヘリオンか」

若い貴族と、中年の貴族の二人連れ。

「いかにも」

ヘリオンは不機嫌な声を隠そうともしない。

「こちらにおわすは、ラストゥー又家のバトウ様と」

中年の貴族が鼻を鳴らす。

「ケミリオ家のティザル様だ。知ってるだろう？ ロクサー又を治める十貴族様だ。てめえなんかとは違う本物の貴族様よ。さあ、挨拶しねえか！」

若い貴族は鼻にハンカチを当てたまま、不躰な視線だけをよこす。
「何用で？」

端的な問いにバトウの目尻は釣り上がり、ティザルは汚物を見るような嫌悪感をむき出しにした視線を向けてくる。

「あの小僧……カル・スカルディアとは何を話した！？ 言わねばただでは済ませぬぞ！」

怒りに顔を歪めたまま、バトウは怒鳴り散らす。

「特に何も」

「牢番っ！」

いっそ冷淡ともいえるヘリオンの言葉が、バトウの怒りに火を注ぐ。バトウの荒げた声に牢番の背中に電気が走る。

「は、はいっ！」

「この罪人に、俺自ら処罰を下すっ！ 鞭を持てい！」

ちらりとヘリオンを見、それからティザルに視線を向けると、牢番は拷問道具をとり走り出す。

「全くいかに会議の結果とはいえ、なぜこんな臭い場所に来なくてはならぬのだ、忌々しい！」

地団駄を踏むバトウを横目に、ティザルは隠した口元に歪めた笑みを浮かべる。

「素直に話した方が良いと思うが？」

忠告の言葉には嘲笑の色がある。明らかに面白がっているティザルに、ヘリオンは口元を歪めただけの嘲笑を返した。

「きさま……」

途端にティザルの声音が変わる。嘲笑から一転して、怒りに染まるティザルの表情。

「牢番め、何をしておるか！」

がつん、と鉄格子を蹴り付けながらバトウは犬のように吠えた。

「バトウ様！ ティザル様！」

「おお、やっときたか」

目の前の獲物を^{なぐる}蹴る愉しみに、牢番の声が上ずっていることにも気づかないバトウ。対してティザルはそれでもまだ冷静だった。

「なんだか様子がおかしくはありませんか？」

怪訝な視線を向けながら、走りよってくる牢番を伺う。

「ス、スカルディアの当主さまが！」

「なにっ!？」

目をむいたのバトウ、かろうじて取り乱した様子を押しさえ込むティザル。互いに目配せして頷くと、二人は牢番に言い渡す。

「ここで出会うのはいかにもまずい。我らはこれで退散する。後は貴様がなんとかしろ」

「へ？ へえ！」

頭を低く下げる牢番を尻目に、バトウとティザルは入ってきたのとは反対側の出口へ向かって走っていく。足音が聞こえなくなるまで頭を下げ続けていた牢番の背に、今度は別の靴音が響いてくる。

「おいでなすった。ヘリオン、てめえも余計なことは言っんじゃねえぜ！」

肩をすくめるヘリオンを一瞥して、牢番はカルの出迎えのために駆け出した。

「これはこれは、スカルディア家のカル様、このような所によくおいでくださいました」

必要以上に丁寧な言葉使い、だがその言葉に含まれる感情が昨日とは異なっていることに、カルは気がついた。

「誰か、来ていたのか？」

「え、いえいえ滅相ありません」

カルは目を細めて、脂汗を流す牢番の表情を見守る。獄に繋がれた者の家族だろつと、見当を付けてそれ以上の追求はしなかった。

「ヘリオンに用がある。通るぞ」

牢番の返事も聞かずに、かがり火の照らす牢の中を歩を進めていく。

「あ、お待ちを！」

追いつがるようについてくる牢番をつれて、カルは再びヘリオンと面会をした。

「外せ」

「しかし……」

食い下がるうとする牢番はカルの氷点下の視線に耐えかね、牢番はすぐすごと席を外す。

「ふむ……複雑なものだ」

鉄格子越しにカルを見上げるとヘリオンは一人嘆息した。

「何がだ」

「お前のせいで十貴族の馬鹿どもに絡まれたが、あいつらを見た後でお前を見れば、お前のほうが上等に見えてしまう。全く困ったものだよ」

苦笑いを浮かべるヘリオンに、だがカルは眉根を寄せただけだった。

「私の動きは監視されている、ということか」

「当然だろう、お前だつてしているはずだ」

「それはそうだが……」

「相手には自分ほどに優秀なものは居ない、とでも思っていたか？」
「からかいの言葉に、ぐつと奥歯をかみ締めてカルは耐える。

「ああ……自惚れていた」

「ほう、他人の意見を聞くか。昨日の今日でどうした心境の変化だ？」

意地の悪い笑みを浮かべるヘリオンに、カルは鋭い視線だけを向

ける。

「今日は、お前……いや、ヘリオン・レーング殿に頼みがあった」

汚い廊下に片膝を折り、頭を下げる。

「私は未だ若く、未熟なところも多々ある。だが必ずこの地に未だ誰も見たことの無い巨大な国を築く。その為に力を貸してほしい」

カルとヘリオンの間に降りる沈黙。その間カルは頭を下げたまま、ヘリオンはカルをじっと見つめていた。

「誰の入れ知恵だ？ お前がそんな殊勝な人間でないのはわかってるつもりだが」

カツと胸のうちから湧き上がる怒りを押し殺し、震えそうになる手を硬く握り締める。

「是非にお願いする」

「ても動かない様子を見せるカルに、ヘリオンはため息をついて問いかけた。

「別に断ってるわけではない。私はただ、誰の入れ知恵をお前が素直に聞き入れたのか聞きたかっただけだ」

「……護衛の騎士」

「噂に聞く、白き戦乙女か」

カルの沈黙を答えとみなして、ヘリオンはため息をついた。

「そういう人間は大切にしなければいけない」

ヘリオン自身にも思うところがあるらしく、その声音は沈んでいた。

「なぜ私を召抱えたいと思ったのだ？」

「我がスカルディアには、推官が居ない。推官は他家からもらうわけにもいかず、もしもらえたとしても、今の私の状況を鑑みれば他家から貰い受けるのは危険に過ぎる」

「当然だな、自分の家の管理を任せてる奴を他所になどやれるわけがない……そこで牢に繋がれている私というわけか」

「そうだ」

再度ため息をついて、ヘリオンはカルを見た。

「その騎士によく感謝しておけよ」

「では……」

「手続きは任せる、ここから出た後は主従ということになるな」

スツと立ち上がるカルに背を向けて、ヘリオンは藁を敷いただけの寝台に寝転んだ。

煌々と部屋を照らすのは、ランプの光。ロクサーヌではまだ珍しい灯油を使っていた。外では既に夜の帳が降りている。窓から漏れる光につられた虫達が、窓ガラスにぶつかり僅かな音をたてていた。「ヘリオン・レイングか、確かに優秀な推官じゃったが、どうにも肝が座り過ぎていてな」

しわくちな顔をにんまりと笑いの形にして、古い記憶を引き出すように、オウカ翁は首を傾げた。

「その者を家臣に引き入れようとしているのだな？」

年配の貴族の質問にバドウが意気込んで立ち上がる。

「そのようなのです、ヘリオンという男聞けば優秀な推官だったとこのこと急いで始末しなければ、小僧が力をつけるやもしれません」
まくしたてるバドウとは対照的に、ティザルは沈黙を守ったままだった。

「ティザル殿のご意見は？」

年配の男が話を向けると、ティザルはゆっくりと立ち上がり口を開いた。

「まず、排除するならレイング家からでありましょう。当主ではないとはいえ、あの男も誇りある貴族の端くれ。悲嘆にくれた後に、虫けらのごとく殺してこそ我らの力を示せるというもの」

しゃべるうち、熱に浮かされたように興奮しだすティザル。顔は紅潮し、身を乗り出してしゃべり続ける。いかに自分達上級貴族が

誇り高く、いかにそれ以外が墮落しているか、その話を滔々と説き続ける。

十貴族達には幼い頃より聞き慣れた話だったが、それゆえを受け入れてしまう。

身分高きゆえに貴族。生まれが全てを決める。

そのうち、ティザルの熱が伝わったのかレーシング家を排し、ヘリオンを殺すべきとの声が高くなっていった。

「さあ、オウカ翁評決を採りましょう！」

その声が高くなったのを確認し、ティザルはオウカに詰め寄る。

「ホツホツホ、若いものは元気があつて良いことじゃ」

しわくぢやな顔を歪めて笑うオウカ。

「では、お許しくださいますか!？」

更に詰め寄るティザルに、オウカは笑みを湛えたまま首を振る。

「面白い意見ではある……故に半分だけじゃな」

ティザルと共にオウカに詰め寄っていた者達が、互いに顔を見合わせる。

「ヘリオンと言う男の弱みを探り出し、我らの為に働いてもらおうではないか」

「間者、ですか」

年配の男の呟きに、どよめきが貴族達に広がる。

「その方が、より強く屈辱を感じるじゃろつて」

朗らかに笑うオウカに気付かれないようティザルは齒噛みした。

「流石に、一筋縄ではいかないわね」

ティザルにふくらはぎを舐め上げられる感触にぞくり、と身を震わせながらウエンディは妖艶に微笑んだ。ティザルをけしかけ評議会の主導権を取ろうとしたのだが、オウカ翁はやはり厄介だった。

「まあ、いいわ。新しい人も来たしね」

隣の部屋から聞こえるのは、泣き喚く少女の声と獣のような男のうなり声。

「あの場所バトウとか言う男もすぐに堕ちる」

妖しく笑うウェンディが見下ろすのは、はしたなく涎を垂れ流しながら彼女の足を舐める奴隷の姿だった。

謀略の使徒 5

扉を叩く音にヘリオンは、書類から顔を上げた。

「失礼します」

上品な紅茶の香りとともに、扉を潜ったのは侍女の姿をしたシュセだった。

「そろそろ休憩になさってお茶などいかがでしょうか？」

部下のどよめきを他所に、一度書類に視線を落としてから。

「ありがたい。では頂くとしましょう……各人しばし休憩とする」

部下に指示を出すと、手元の書類にサインと捺印を押しペンを机に置いた。

肩を鳴らしながら出て行くヘリオンの部下達を見送ると、シュセはヘリオンに紅茶を淹れる。

「彼らはいかがでしょうか？」

カルがスカルディアの領内から選んだ推官候補者達。十代の後半の彼らを自身の部下としてヘリオンは実施指導を行いながら、スカルディア領内の統括を行っていた。

「少し頭の固い所はありますが、なかなか見込みがある者が揃っているようです……まあ、なにぶん若いために斑がありますが」

苦笑に近い笑みを漏らして、ヘリオンは紅茶を口に含む。

「ヘリオン殿がいらしてから、ずいぶん領内も落ち着いたと殿下もお喜びでした」

ヘリオンがカルの招きに応じてスカルディア家の内政を預かることになって既に十日。

「やるべきことをやっているだけです」

謙虚な言葉とは裏腹に、彼の手腕で確実にスカルディアの地盤は整い始めていた。

「あの、不躰な質問をしてよろしいでしょうか？」

「どござ」

困ったように眉を潜めて質問するシュセに、ヘリオンは軽く頷いた。

「殿下の施政と、ヘリオン殿の施政はどこが違ったのでしょうか？ わたくしには殿下も、真面目に取り組んでいたように思われたのですが……」

「ふむ……」

少し考え込んだヘリオンは、一枚の書類をシュセにかざして見せた。

「失礼ながら、殿下の施策には血肉が通っていないと思われます」

「血肉ですか……？」

「書物から得た知識と、実地ではやはり違うということです」

「そう、ですか……」

「恐らく、殿下には施政を受ける側と自身との差異に気づいていないでしょう」

「違い？」

「殿下は……この法案を見れば分かりますが、理想を追いかけすぎなのです。民と協力することができればそれは素晴らしい統治が叶いましょう。ですが人間は、皆矮小なものです。力のある者にはおもねり、力のないものには威張り散らす……誰だって損はしたくない」

紅茶の波紋を見ながら、ヘリオンは言葉を切る。

「結果不正は蔓延り、正直に生きる者は損ばかりする……と？」

言葉を切ったヘリオンの後を継いだシュセの言葉に、苦笑しながら頷く。

「そういうことです、民は縛り付けるものです。信じてはいけないヘリオンの言葉に、シュセはしばらく黙りヘリオンが紅茶を飲み干すのを待った。戻されるティーカップを受け取りながら彼女は戸惑いながらも口を開く。

「わたくしは……カル様の、いえ殿下の民を信じる心をとても尊い

と思います。貴方をお招きになったのも、スカルディアの領民、ひいてはこの国の民の為になされたことなのだと思います。殿下も自身の施策にどこかしらの、欠陥があるとは分かっていたのでしょうか」「その穴を埋めるために、私を招いたと?」「はい」

「施政に理想は要りません。あるのは唯支配するものとされる者。甘さをもって臨めば手痛いしっぺ返しを食らうことになる」

椅子に腰掛け見上げる姿勢のヘリオンの目を見返し、シユセは胸を張って続ける。

「わたくしは、理想を目指す殿下を誇りに思います」
にこりと、シユセは微笑む。

「わたくしは、そういう殿下だからこそ付いて行きたいのです。ヘリオン殿は違うのですか?」

「……給金を払ってくれる者には相応の忠誠を誓ってしまうのが、私の悪癖です。我がことながら困ったものですね」

苦笑して弱弱しく首を振るヘリオン。

「さて、そろそろ休憩も終わりとしましょう」

椅子から腰を上げて、部下を呼びに立ち上がる。その拍子に、便箋が手元から零れ落ちた。気づかず立ち去ろうとするヘリオンに、シユセは便箋を拾いながら声をかけた。

「落ちましたよ」

ふと、便箋に視線を落とせばレイング家の文字が目に入る。

「ありがとうございます」

受け取ったヘリオンは懐に便箋をしますと部下を呼びに部屋を立ち去った。

ロクサーヌの中央広場。北に向かえば閑静な貴族街、南に向かえば喧騒の平民街。その二つに挟まれた中央広場は平民と下級の貴族達の憩いの場となっていた。温暖なロクサーヌの四季を反映して、

常緑の木々が彩りを添える。石畳の整備された広場の中央には、飛沫を吹き上げる噴水が陽光を浴びて虹色に光り、子供のはしゃぐ声が夏に向かう陽気を盛り上げていた。

「くそ……やつてられるか！」

絵に描いたような不機嫌さで、噴水の縁を蹴り付ける少女がいた。派手な色の服を着崩し、伸びた髪は無造作に束ねてある。

「また今日も荒れてるのかよ」

その少女を取り巻くように、同じような派手な色の服を着ている少年少女が数人。時折跳ねる水飛沫を楽しみながら、たむろしていた。

「そう気にするなよ、アンネリー。親なんてのは、家を残すことにしか興味がねえのさ」

「後は大貴族のご機嫌取り！」

嘲笑に沸く少年少女とは裏腹に、最初に噴水の縁を蹴付けた少女

アンネリーは眉間にしわを寄せ、黙りこくったままだった。

「それより、今日はどうするよ。また平民区の方で遊ぶか？」

「裏道を馬でかつ飛ばすなんてどうだ？」

「いや、それよりも貴族区の方をからかいにいかねえか？ 前にラストウー又の屋敷に腐った卵投げた時なんか胸がスカツとしたしよ」
「もうちょっと、お金になるようなことしようよー」

わいわいと盛り上がる彼らは、下級貴族の子弟達だった。好奇心旺盛で考えが浅く品行が悪い。概して大人の設けた規範からは著しく遠い。いわゆる不良たちだった。

周りの雑談に入らず、むっつりと黙り込むアンネリー。その不穏な気配に気づいたのか、取り巻きの一人が声をかけた。

「そういえば、アンネリーの叔父さん牢から出たんだってな。親父が言ってたぜ」

アンネリーの不穏な空気を和らげようとした少年の言葉は、彼女の鋭い三白眼に睨み付けられた。

「その事で父さんと喧嘩したんだよ！」

言つなり、また噴水の縁を蹴り付ける。

「アンネリーの叔父さんつて少し前まですつごい出世してたじゃない？ アンネリー叔父さんにべつたりだったもんねえ」

「それで？ なんで親と喧嘩になるのさ」

「知らないよ！ 叔父さんにお祝いを届けようつて言ったら絶対ダメだつて言うから喧嘩になつたんだ」

「ああ、愛しのヘリオン叔父様！ どうしてあなたに会えないの！」
アンネリーの取り巻きの少女の一人が、噴水の縁に上ると泣き真似をしながら体をくねらせる。

途端に起こる笑い声。アンネリーは一層不機嫌そうに眉をひそめた。

「あーおもしれえ。それでそのアンネリーの思い人は今どこに仕えてんだよ」

下品な笑いを収めた少年がアンネリーに尋ねる。

「スカルディア家だつてさ」

面白くもなさそうに言ったアンネリーの一言に、先程までの彼らの笑い声が一斉に消える。

「スカルディアつて……そりゃやばいだろ」

「何が？」

平然と返すアンネリーに取り巻き達は顔を見合わせた。

「何がつて……あそこお家騒動の真つ最中じゃないか。知らないのか？」

「だから？」

「お前んちヘルシオ家の派閥だろ？ スカルディア家とヘルシオ家つて前の当主が死んでから犬猿の仲つて有名になつてるぜ」

「私も聞いたことある。スカルディアのカル様が婚約者のルク様を殺されたのを恨みに思つて、戦場で一突き！ やつちやたんでしょ？」

ぐさり、と槍を突き刺す動作をする真似をする少女。その演技に、周囲の少年からは、おお、と感嘆の声が漏れる。

「父親の野望の為に、引き裂かれた恋人同士！ その敵を討つためにじつと耐え忍んでたつて言うんだから泣かせるね。しかも！ 驚く無かれスカルディアの当主と言えばロクサー又一の絶世の美男子！ ま、そこらへんがアンタ達と違う所だね」

舞台上立つ役者のように、くるくると回り観客の少年達に軽く微笑む少女。野次を飛ばす少年達を横目にスツと、アンネリーのそばに降り立つ。

「ね、アンネリー！ おじさんのところ行こうよ！ 私がカル様をお慰めしたら、玉の輿も夢じゃないかも！ きゃー！」

想像力豊かな少女に、辟易しながらアンネリーは眉間に皺を寄せらる。

「それ全部噂でしょ？ 実際には敵将に討たれそうになった父親を助けなかつたつてだけじゃないの？」

少女とは対照的に、冷たい反応を返すアンネリー。

「もう噂なんてのは、面白ければ面白いほど良いのに！ それじゃ現実的過ぎるじゃない！」

「そうそう、大体スカルディア負けそうだつて皆言ってるぜ」

横合いから口を挟んだ少年にアンネリーは顔を向ける。

「ヘリオン叔父さんが負けるわけないだろ！」

ギロリと睨み付けるアンネリーに、少年はたじろぎながら言い訳をする。

「俺が言ったんじゃないよ。親父達さ、なんでも十貴族のラストウー又家と、ケミリオ家がヘルシオ家のウエンディ様に肩入れしてるつて話だしよお」

逃げるようなその口調に、鋭い舌打ちを返すとアンネリーは彼らに背を向けた。

「おい、アンネリーどうしたよ！？」

背後から聞こえる声に。

「帰る！」

苛立ちをぶつけて、アンネリーは貴族区に向かって歩き出した。

不愉快な気分は癒える所かいつそう膨らみ、目つきが凶悪になつていく。

アンネリーは父と母が嫌いだった。まじめだが、風采の上からぬ父。その父親に従うことが正しいことだと疑いもしない母。そんな中、叔父のヘリオンだけが異質な存在として見えていた。

父では一生掛かっても追いつけないほどの栄達を僅か数年で達成していた叔父。物静かな風貌に、アンネリーが尋ねた時だけは、優しく微笑む叔父の姿。

許されないことだとは思うが、ヘリオンは幼い頃のアンネリーの初恋の相手だった。いや、恋と呼ぶには未熟すぎる。憧れの対象と言った方が良いかも知れない。

スカルディア負けるって皆が言ってるぜ。

その叔父が仕える負けるわけ無い。

いつの間にか、家の前まで足が勝手に歩いてきてしまった。

「くそっ！」

そんな自分が情けなくて、アンネリーは再び家に背を向ける。

何もかもが気に入らない。イライラとした気分を抱えたまま、彼

女は広場を回りこむようにして、平民区の裏道を通り切っていた。

謀略の使徒 6

どん、とぶつかる肩。その相手を虫の居所の悪さと相まってアンネリーは思い切り睨み付けた。

「邪魔だ！」

「失礼」

肩の辺りまでの淡い緑の髪が揺れる。琥珀色の意志の強そうな瞳。少年のような格好に、腰には銀ごしらえの細剣を吊るしていた。だが、細かく見れば、僅かにある胸に膨らみに目がとまる。

歳は自分と同じか、少し下だろうか。

アンネリーは肩のぶつかった相手を値踏みして、ほくそ笑んだ。身なりの良さから見て上級貴族の子弟なのだろう。

良い憂さ晴らしの相手が見つかったと、凶悪な笑みが浮かべ。

「謝って済まされるなら衛士は、いらない！」

先手必勝とばかりに殴りかかる。

いつもなら、咄嗟に反応できない相手はこの一撃で怯む。後はこっちの思うがまま。

だが、殴りかかったアンネリーの拳を目の前の男装の少女は軽く受け止めた。

相手もやる気だったのかと、男装の少女を見ればその顔にはひたすら困惑の色が広がっている。

「こちらにも非はあったと思いますが、いきなり殴りかかるほどのことではないでしょう？」

物静かな、諫めるようなその口調がアンネリーの怒りに火をつける。

「黙って殴らせる！ 男女！」

びき、と一瞬だけ目の前の少女の眉間に皺が寄るのを見た刹那。

「ぐっ！？」

アンネリーの天地は覆り、背中を地面に思い切り叩きつけられて

いた。

「お仕置きが、必要でしょうか？」

自身に問いかけるようなとぼけた口調。だが、アンネリーはそんなものを聞いてる余裕は無い。投げられたと理解した瞬間、背中を強打した衝撃で息が出来ず、咳き込みむせ返る。

泥水がはね、派手なアンネリーの服はぐっしりとぬれた。

咳き込みながら、睨み付けるアンネリーに、ふむと頷いて男装の少女はすらりと細剣を引き抜く。

「踏み込みの速度は良かったですが、気は吐きだすものではなく内に溜めるもの」

頬に触れる銀拵えの細剣の冷たさが、アンネリーの背筋を凍らせる。だがそれでも彼女は、睨むことをやめはしない。

「度胸は買いますが、それだけでは蛮勇ですよ」

頬から離れる細剣が、かちりという音共に鞘に収まる。

「ねえ、あなたミザルさんの自宅をご存知？」

無言のアンネリーを確かめると、男装の少女は一つため息を吐く。アンネリーに背を向けて、更に裏路地を歩き出す少女。

その背中が見えなくなつてからアンネリーは路地を殴りつけ、悔しさに奥歯をかみ締めた。

泥だらけになつた服を引きずるようにして、アンネリーは平民街の裏路地から家への道を戻っていた。辺りはすでに夜の帳が落ち月明かりだけが夜道を照らす。

惨めな気持ちになつてくるのを抑えきれない。

まるで、上級の貴族と下級貴族の差を思い知らされたときのよう
に飲み干す事など出来ない悔しさが後から後から沸いて来る。

寄らないで頂ける？ 下級貴族の分際で。

つい、懐かしくて声をかけただけだった。

幼い頃仲の良かった友人。社交界で会った彼女から久しぶりに投

げかけられた言葉は、身分の差と言う重石をアンネリーの心に一方的に乗せただけだった。

あまりのことに言葉が出ないアンネリーに、侮蔑の視線と嘲笑を投げかけ、友達だと思っていたその上級貴族は去って行った。

そして父親は、その上級貴族にアンネリーが声をかけたと言うだけで叱責をもらい、ただ頭を下げるしかなかった。

悪い仲間と付き合うようになったのはそれからだった。喧嘩、賭博、大人の目を盗んだ悪戯。ことあるごとに親に反抗した。

自分はあるふうにはならない。上級貴族やしろになんか頭を下げたりしない。

水を吸った服と同じように重い心。

だが、負けてしまった。あの男装の少女に完膚なきまで。重い敗北感がアンネリーを打ちのめしていた。

「ちつ……何から何まで」

たどり着いた家には明かりがない。普段ならあるはずのそれまでが自分を馬鹿にしているようで、アンネリーは鋭く舌打ちした。

普段なら怒鳴り声を上げるところを、ぼそりと呟いただけにとどまる。

ぎい、という音とともに開く玄関の扉。

いつもなら出迎える使用人の姿が見えない。明かりのない家はまるで他人の家のように雰囲気が悪かった。

「おい！ 誰かいないのか！」

「ごそり、と闇の中で衣擦れの音がした。」

「誰か……」

家の中へ一歩踏み出そうとして、ふと疑問がよぎる。

なぜ、誰も居ない？ 父は？ 母は？ 使用人たちは？ 一家を挙げて家を空ける用事などレイング家にはないはずだ。

ふと、嫌な汗が背筋を伝い落ちる。

スカルディア家とヘルシオ家って犬猿の仲だろ？

十貴族のラストウーヌ家とケミリオ家がウエンディ様に肩入

れしてるらしいぜ。

脳裏を駆け抜ける悪友の言葉。

まさか、と思う。

踏み出しかけた足を前に進めようとして、侮蔑の言葉を投げ付けた上級貴族の顔がよぎった。

じりっ、と踏み出しかけた足を戻して扉から距離をとる。周囲を見渡せば、視界に入るのは月の明かりに照らされた小さな庭と、それすら届かぬ闇。だがその闇の中、誰かの息づく気配を感じて、アンネリーは総毛だった。

「くっ……」

じりじりと家から遠のくアンネリーに、闇の中からの気配がぐっと濃くなり。

「っ！」

息を飲む彼女の前に、全身黒ずくめの異様ないでたちの男が現れた。

「誰だ！」

気で飲まれたら負けるっ！ 震えそうになる声を叱咤して、アンネリーは怒鳴る。

男は口元に肉食獣の笑みを浮かべ。

瞬間、抜刀する男の剣がアンネリーを狙って抜き放たれる。

だが身構えていただけあって、アンネリーはそれを寸での所で避ける。

続けて繰り出される斬撃に彼女は相手が自分よりも格上なのだと思ひ知る。隙のない剣撃が容赦なくアンネリーを追い詰めていく。

そのうちのひとつが彼女の肩を掠めた。吹き出る血潮に、顔をゆがめる。

「おとなしくすれば、楽に死ねるぞ」

男の顔に浮かぶのは嗜虐の笑み。弱い者を齧る愉悦に歪んだ笑みがそこに張り付いていた。

肩を抑えながら、男と徐々に距離をとる。

「逃げられると、思うてか？」

その度に、詰められる間合い。

アンネリーが男に背を向けた瞬間、男の剣はアンネリーを串刺しにするだろう。下段に構えられた男の剣にはそれだけの圧がある。

目の前に晒された凶器は容赦なく、彼女の精神を削る。だんだんと呼吸が乱れ、集中力が途切れる。それに耐え切れなくなったのか、僅かにアンネリーは身を翻す動作を見せ。

その隙を男は容赦なく突いてきた。

繰り出される刺突。

殺しになれた男の剣は容赦なく彼女の胸を狙い飛翔する。

だがその剣撃の下を。

身を翻したかに見えたアンネリーが、地を這うかのように突進した。

「うあああ！」

「ぐぬ!?」

捨て身のアンネリーの突進に、驚愕を露にして吹き飛ばされる男。大の大人と言えども、居を突かれた攻撃に一瞬思考が止まる。

その隙を見逃さず、アンネリーは全てを振り払い男に背を向けて駆け出した。

「ちっ……追うぞ！」

アンネリー家の方に声を荒げて男はアンネリーを追う。家から出てきた男達の数3人。

彼女を仕留めるには十分な人数。

夜の帳が落ちたばかりの街を、黒衣を纏った死神達が走って行った。

夜の街をがむしゃらに走り抜ける。

でたために角を曲がり、泥を跳ね飛ばしながら全力で駆け抜ける。

激しくなる鼓動、苦しくなる息遣い。
だがそれでも追跡者を振り切れない。

「くそ、はっ……はっ……」

喘ぐ口から出るのは、熱い息と僅かな悪態のみ。

17年生きてきた中で最も差し迫った恐怖。

死を直視させられた衝撃が、彼女を限界を超えて走らせる。

「いたぞっ！ 向こうだ！」

追いつがる死の声に、徐々に精神を蝕まれる。

時間が経つたび、まだ振り切れないと、思考が徐々に黒く染まっ
ていく。

諦めと、生への渴望が拮抗する。

何度目かの角を曲がった瞬間、目の前に人影が移り、避けようとしてそのまま無様に人影とぶつかってしまふ。

「きゃっ！」

「うっ！？」

逃げなければ、その現実突き動かされて身を起こそうとしたアンネリーは足が痙攣して動かない事に気がつく。もう彼女の足は限界だった。

「くっ……ふっ……」

逃げなければ。

足が動かないならば、這ってでも。少しでも遠くへ。

「見つけたぞ！」

だが、地を這うアンネリーの背後から低い死神の声が届く。

追いつかれた。

絶望とともに振り返ったアンネリー。

その瞳に映るのは、四人の黒衣の死神と。

「何の騒ぎです」

昏間、出会った男装の少女の姿だった。

「邪魔だていたせば、命はない」

低い、だがむしる男装の少女の妨害を楽しむような声にアンネリー

「は我に返る。」

「逃げる！ 殺されるぞ」

一瞬だけ、アンネリーに向けられる少女の視線。

「私が逃げれば、貴方はどうなります？」

「貴様の知ったことではない」

答えたのは黒衣の死神達。

「では、逃げるわけにはいきません」

きっぱりと言い捨てる少女に、黒衣の男達からは下卑た笑いが返された。

アンネリーに背を向け、少女はすらりと、剣を抜く。銀細工も見事な細剣、麗しきその剣を一振り、風を切る。

「わたくしはシュセ・ノイスター、相手になりましょう」

凜として強く、その声は闇を振るわせた。

僅かに降り注ぐ月の光に照らされて、煌く刃の輝き。

降り立ったのは紛うことなき、騎士だった。

どこかでその名を聞いたことがあると、考えたアンネリーの思考を切り裂いたのは黒衣の男達の怒声だった。

三人が一緒に襲い掛かる。

「あ、」

危ないと、声を発する前にその剣戟の中にシュセは身を晒す。

迫りくる凶刃の隙間をすり抜け、細剣を振ること三度。みたび

襲い掛かった三人の男の間をすり抜ける。

声もなく三人の男達は崩れ落ち、残るはアンネリーを最初に襲った男。

「逃げれば命まで取るうとは思いません」

「ほざけ」

対峙は一瞬にして、決着は刹那。

剣に付いた血脂を払い、シュセはアンネリーに振り向いた。

「大丈夫ですか？」

柔らかい微笑みは月の女神を連想させた。

あまりの衝撃に、働かない頭。
アンネリーはだが、なんとか頷いた。

謀略の使徒6（後書き）

自身で推敲はしているのですが、誤字・脱字があればご指摘をお願いします。

謀略の使徒 7

新しいシャツに袖を通し、暖かな毛布を被る。湯気をたてる紅茶を一口飲めば、固まっていた心までが溶け出すようだった。

「少しは落ち着かれましたか？」

落ち着いた雰囲気に優しい言葉。

「あ、……ハイ」

溶け出しそうだった心が音を立てて硬さを取り戻したようだった。アンネリーは目の前に座る少女から掛けられたそれに、硬い返事しか返せない。

「そんなに緊張しなくても」

そう言われても、と思ってしまう。泥だらけの格好を見かねたシユセが用立ててくれた着替えもさることながら、アンネリーは初めて足を踏み入れる上級貴族の屋敷と言うものに萎縮していた。

柔らかな絨毯の敷き詰められた部屋や、飛び上がって手を伸ばしても届きそうに無い天井。扉の一枚に到るまで施された精巧なる装飾。そのどれもが、アンネリーが場違いな場所にいると言うことを無言のうちに責めているようだった。

「最初はあるに威勢が良かったのに」

くすり、と上品に笑われると返す言葉も無い。

「あ、えつと……あれは」

慌てる彼女を、くすくすと笑いながら見守るシユセ。

コンコン、と硬質なノックの音が響いたのはそんな時だった。

「少し待っていてくださいね」

シユセが立ち上がるのを見届けて、再びアンネリーは湯気を上げる紅茶に視線を落とした。

襲撃者の始末をつけた後、シユセは衛士を呼んで彼らの遺体を引き取らせた。そしてアンネリーを伴ってこの屋敷に帰還したのだ。

どこの大貴族だろう。アンネリーが知る限り、ノイスターという

家名は知らなかった。客分と言う扱いなのだろうか。シュセに助けられてからと言うもの、よく働かない頭で道順すら定かではないのだ。

アンネリーが考え込んでいる中、シュセの声がする。

「アンネリーさん」

先ほどアンネリーをからかっていたときよりは幾分沈んだ声。良くないことなのだと、アンネリーは顔を上げる。

「悪い知らせです。あなたのご実家の方を搜索させていたのですが……ご家族の方の行方が分かりません」

ぐつとかみ締める奥歯の間から、心に渦巻く感情があふれてしまいいそう、アンネリーは強く目を瞑った。

「詳しいことは、明るくなってからにしたいと思います……辛いでしようけど、少しだけ我慢してください」

真っ直ぐにアンネリーの瞳を見つめるシュセの琥珀の瞳が、彼女を気遣う色を灯している。気丈に振舞わなければならない、とアンネリーは自身に言い聞かせた。

それでも脳裏を駆けるのは最悪の結末。

血に塗れた父と、母の姿。もしかしたら永遠に会えないかもしれない最も身近な二人に、迷惑ばかりをかけた後悔の念。

すつと、頬に触れる暖かな手触りにアンネリーは顔を上げた。

目の前にいるのは、シュセ。全てを許す優しい声音に、アンネリーの強がりは崩れ去る。

「泣きたければ、泣いても良いのですよ」

アンネリーの頬を一筋の涙が伝った。

深夜、割り当てられた官舎に密かに届けられた便箋。その内容に、ヘリオンは眉間に深い皺を刻んだ。感情のままぐしゃり、と便箋を握りつぶし、感情を押し潰すかのように奥歯をかみ締めて再度内容を確認する。

「兄上……義姉上……」

呟かれる声は掠れていた。

部屋にあるのは、僅かばかりの私物。幼い頃に習っていた刀剣に、興味のままに集めた書物。ベッドに机。それだけしかない。燭台の蠟燭の火が、じじつ、と音を立てる。

年は離れていたが、仲の良い兄弟だった。勉学に才は無くとも温和な性格の兄は、出来るが故に周囲と衝突しがちな弟を良く庇った。弟もそんな兄を尊敬し、二人は仲の良い兄弟であったのだ。例えば、弟が牢に囚われようと、毎月必要なものを届けてくれる兄をヘリオンは心の底から信頼し、尊敬していた。

兄が捕らわれた。

便箋には、明日の夜に一人で中央広場に来いと指名してあった。

ちらり、と立てかけてある刀剣に視線を移し、手に取る。鞘から引き抜けば、その重みはずしりと手に掛かる。人の命を奪い去る重みだ。手入れの行き届いた刀剣は、錆などは見当たらず、振り下ろせば確実に敵の骨まで切り裂いてくれるだろう。

静かに瞑目すると、ヘリオンは刀剣を鞘に戻した。

「兄上」

激情を胸の奥に仕舞いこみ、ヘリオンは蠟燭の火を吹き消した。

「なにが、お気に召さないのでですかオウカ翁」

十貴族の会合。毎夜場所を変えて行われている会合で、ティザルはオウカに食って掛る。

「なにが、と言われてもものう……ティザルや。そなた自分のしていることが分かっておるのか？」

孫に言い聞かすような丁寧な口調。だがそれが逆にティザルの癪に障る。

「無法者どもを使いレイング家を襲撃。当主ならびにその妻を誘拐監禁しただけです」

それがなにか、と問いかけるティザルに、オウカは深くため息をついた。

「わしは確かにヘリオンの弱みを握れ、とは言うたが直接家族を人質にとれなどとは一言も言っておらぬぞ」

「同じことでしょう。ヘリオンめに、あの生意気なスカルディアの小僧を殺させれば万事上手くい」

その余りにも堂々とした態度に、幾人かが頷く。頷いた何人かはやはり若い貴族達だった。悟られないよう鋭くそれらを確認するとオウカは皺くちな顔に笑みを浮かべる。

「それも、ヘルシオの後妻に吹き込まれたのか？」

「なっ……なにを仰るっ!？」

顔を朱に染め、激情を露にするティザルにオウカは笑みを絶やさず問いかける。

「お前が足しげくヘルシオ家のウェンデイの元へ通っているなど、先刻お見通しじゃ。若さゆえの過ちと目を瞑ってきたが……ティザル」

ティザルの朱に染まった顔が蒼白に変わる。

「わしとしても、前途有望なお前をこんな所で失いたくは無い。以後、この件より離れよ」

事実を確認するような断定的な声に、ティザルは声を荒げた。

「オウカ翁!」

「フィクス、以後ヘルシオの妖婦はそなたに任せる」

ティザルの絶叫も虚しく、声を掛けられたのは年配の貴族。オウカの側に忠犬よろしく侍る男が慇懃に頭を下げた。

「さて、スカルディアに対する策だが……」

消沈して席に座り込むティザルを横目に、オウカは口を開く。

「攫ってしまったものは仕方あるまい。バトウ」

「はっ」

柔らかなオウカの声にもかかわらず、バトウは一瞬怒鳴りつけられたかのような錯覚を覚えた。彼とてヘルシオの家で快樂に耽つて

いた事には変わりないのだ。

「ヘリオンという男の口からはスカルディアの情報だけを得るように……良いかな、追い詰めてはならぬぞ。レイング家の者は無事なのだな？」

椅子に沈み込んだティザルは答えない。その様子を一瞥して、バトウが慌てて答える。

「はい、雇った者どもに金を握らせ郊外に監禁させております」

「よろしい……では、時期を見計らってその場所衛士の耳に入れよう」

「ヘリオンに情報を喋らせた後で、家族を帰してやれば口も軽くなる」

「では、雇った者達は……」

「喋られては面倒であろう？ 何かと、のう」

愉快そうに笑うオウカに若い貴族達は凍りついた。ただ一人、俯いて狂った熱情を耐えているティザルを除いては。

謀略の使徒 8

「そうか、ヘリオンの親族の家が何者かに……それで肝心のヘリオンは？」

カルに問いに、シュセは苦い顔をした。

「それが昨夜以来、連絡取れません。それと便箋にて、数日の暇願いとまいが届いておりました。ヘリオン殿の部下にも聞きましたが、やはりわからないようです……ただ自身が居ない間のことは事細かに指示があつたそうです。しばらくは支障ないでしょう」

「十貴族の仕業……にしては余りにも短絡的過ぎるような気もするが」

カルは秀麗な顔に、言い表せない不快感を募らせて吐き捨てた。

「ただ誰の仕業であつても放つてはおけまい。シュセ、そのアンネリーという娘共々頼む」

「御意」

一礼すると、彼女は私兵を指揮すべく去つていった。

「私に対する挑発、と言うわけでもないだろうが……」

一瞬考え込むカルは、虚空を見つめる。

硬質なノックの音に顔を上げれば、ヘリオンの部下が顔を覗かせていた。

「失礼します……殿下、妙なものが届きましたのでご報告に参上いたしました」

「妙とは？」

「はっ……これです」

差し出されたのは一通の便箋。一般に便箋とは丸めた書状を赤い紐で綴じ、蝋で止めた後に家門の印を入れる。もしくは差出人の分かるような、個人の押印でも良い。

そして差し出された便箋の印を見て、カルはその秀麗な眉をひそめた。

「この印は……確かレイング家の」

「御意……ヘリオン殿は昨夜から連絡が取れません。あの方は、無愛想ではありますが、その分徹底的に無駄を省いておられます。今になってこのような便箋が届くのはおかしいと……」

「ふむ……」

「考えすぎかもしれませんが、ヘリオン殿らしくないような気が致しましたので」

背筋を伸ばして答えるヘリオンの部下に、カルは僅かに笑みを見せた。

「なるほど、ヘリオンは良い上役らしいな」

「尊敬すべき推官だと思っています」

「ありがとうございます、何か分かり次第君達にも報せよう」

兵士さながらの敬礼をして下がるヘリオンの部下を見送ると、カルは便箋を開いた。

記された内容は、カルの眉間に皺を作る。

ウエンディとティザルの繋がり、そしてレイング家を襲ったのは彼らだと書いてある。十貴族内の対立、若いティザルを中心とした派閥が、オウカ翁を中心とした派閥に拮抗しつつあること。そしてオウカ翁を中心とした派閥はカルがスカルディア、ヘルシオ両家を相続するのに前向きであることなどが書いてあった。

「疑わしければ、今夜ラストウーヌの屋敷を訪ねよ。鴉の集いが見れるであろう……か」

密告。十貴族内部の勢力争いまで記したその手紙に、カルはしばし見入った。余りに詳しくすぎた内容は十貴族内部の者の手によるものだろう。現に、カルの得た情報からも十貴族内部に動きがあるのは察知していた。

だが、誰が？ 何の目的で政敵であるカルに密告をするのだろうか。

「全てが本当とは限らない……が」

全てが嘘とも思えなかった。

「あるいは、罠か？」

ラストウィーンの屋敷を訪ねた所を、狙われて……？

情報の精度、その程度が知りたかった。

「いずれにしても釘は刺しておくか……誰か！」

カルの声に答えて、扉を開ける侍従に、出かけると告げた。

夕暮れ迫るロクサーヌ。平民街と貴族街問わず夕食時の喧騒に包まれる時間帯。一台の馬車が、スカルディアの屋敷からヘルシオの屋敷へ向かっていた。

護衛は騎乗の騎士が二人だけ。平時においてすら少ないと言える数だった。

先代ヘルキオスが贅を凝らして作り上げたヘルシオの屋敷。その城門前に馬車は停車する。馬車の扉が開き、姿を現したのは黒い衣装を纏うカルだった。

弔意を示す黒衣を着たカルが歩みだす先には、ヘルシオ家の使用人達が主を迎えるかのように、深く頭を垂れて並んでいる。

一瞬だけ彼らに視線を向け、更に豪勢な屋敷を一瞥してからカルは歩を進める。

細部にわたるまで職人の技術の粋を凝らした扉を開ければ、そこに待っていたのはウエンディ。カルと同じく弔意を示す黒衣を纏っている。だが、彼女から感じるのは死者に対する敬意ではなく毒々しさすら感じる色香。

熟れた女の体から発する独特の色香、爛れたような気配に僅か、

カルは眉をひそめた。

「お久しぶりですね、カル様」

「お久しぶりです。ウエンディ様」

妖しい色香を漂わせるウエンディに対して、カルの声は真冬の風のように冷たい。

「立ち話もなんです……こちらへ」

先に立って案内するウエンディ。

「……昨日、我が家の者が何者かに襲撃を受けました」
ウエンディの後ろについて歩きながら、カルは彼女に言葉を浴びせる。

「ふふ……世間話にしては物騒な話題なこと」

妖艶に微笑むウエンディに対して、カルはいつそ冷笑と言える笑いを顔に浮かべる。

「ええ、世間話としてはそうですね。では、こんな話題はいかがでしょう。近々十貴族による会議が開かれ私がヘルシオ家相続の内定が下されてると言うものです」

「冗談がお上手ね」

豪華な部屋に通される。平民の年給を軽く吹き飛ばす程度の椅子に優雅に腰掛けると、すかさず侍女が紅茶を差し出した。完璧に近いその動作、タイミングが、ヘルシオ家の富裕さを物語る。

「それが、あながち冗談とも言えないのですよ。なんでも十貴族内部の対立が深刻化しているようですね」

冷笑を顔に張り付かせ、艶然と微笑むウエンディに笑わない視線を向ける。

「オウカ翁に、働きかけたら意外と簡単に……ね」

「怖いお話……それで？」

「ええ、そのついでに聞いたのですが……なんでもウエンディ様はケミリオ家のティザル様とご懇意とか？」

扇を広げて口元を隠す、目だけをカルに注ぎ、その言葉を受け止める。世界が明日終わると言われても艶然と微笑み返すようなポーカーフェイス。

「まあ、親しくとは言えないまでも友誼は結ばせていただいていますわ。主を失った当家を狙う悪い輩が、そこかしこに見え隠れしていますもの。やはり男性の方は必要よね」

互いに目で、表情で、虚々実々の嘘と真実を織り交ぜた会話。剣と盾を使わなくても、やはりそれは戦いと呼ぶに相応しいものだった。

た。

「お味方となる相手は選んだ方がよろしいですね。先に申し上げたオウカ翁と対立している者の中心は、ティザル様だと聞き及びました」

仕掛けたカルは攻めるが、ウエンディはその攻めを軽くいなす。だがウエンディの方も、カルを攻める口実があまりに少ない。

「男性は野心的でなくては……魅力に欠けるとは思いません？」

「己の分を弁えない野心は、身を滅ぼしますよ」

ぱちり、と扇を閉じてウエンディは紅茶を一口飲む。

「……世間話もこれぐらいにして、今日いらした本題に移りませんか？」

「そうですね、父の葬儀のことでした……期日は来月、主催は我がスカルディア家を取り仕切るうかと思っております。もちろんウエンディ様も、亡き父の妻と言う立場でご出席ください。その頃には私がヘルシオ家を継ぐことが正式に沙汰されていることでしょうか」
二人から吐かれる毒が、部屋に降り積もっているかのように空気が重い。

だがその中を、表情だけは愉しげにウエンディとカルは言葉を交える。

「……そうですわね。私もあなたの母として葬儀には列席させていただきます
ただこうかしら」

「……ええ、それでは」

立ち上がるカルを追うように、ウエンディも立ち上がった。

「御機嫌よう、ウエンディ様」

「お待ちになって……お見送りいたしますわ」

帰り際には、カルが訪れたときと同様、使用人達が深く頭を垂れながら整列していた。その合間を通過してカルとウエンディは玄関に到る。

「見送りもここで結構です。ご配慮ありがとうございました」

「いえ、構いませんよ。血は繋がっていないとはいえ親子なのです

から。ねえカル」

冷笑を返して去ろうとするカルに、ウエンディは更に言葉を重ねた。

「失礼します」

「ふふ……違うでしょうか？ カル、そういう時は、失礼します“お母様”でしょうか？」

立ち去りかけたカルは、階段を下りる足を止め、ウエンディに近づいていく。

体が触れ合うほどの間近になって、カルはウエンディの耳元で囁いた。

「黙れ、貴様を母と呼ぶことなど永劫ありえぬ」

憎悪と敵意と、殺意を込めたカルの別れの言葉。

「ふふ……また、ね。坊や」

だが、その言葉をウエンディは艶然と受け止めて毒蛇のような笑みを返す。

階段下りたカルが馬車に乗り込みスカルディアの屋敷へ戻るのを見届けると、ウエンディは使用人たちに下がってよい旨を伝えた。

自室に戻り、先ほどカルに出した紅茶を飲み干す。

「ふふ……あの覇気、憎悪。たまらないわ…… やっぱリテイザルの坊やとは比べ物にならない」

そして自身の前に跪くカルの姿を思い浮かべて、にんまりと笑う。ルージユを塗った唇を、長く艶めかしい舌が舐める。糸に絡む獲物を愉しむ蜘蛛のような笑みを浮かべ、ウエンディは紅茶を一口啜った。

「屈服したときの坊やの顔……さぞ見ものでしょうね」

誰憚ることなく、ヘルシオの妖婦の嘲笑が部屋に響いた。

深夜、宵の鳥が啼く頃には中央広場は既に無人となっていた。平民街と貴族街に挟まれたこの場所はともすれば浮浪者の溜まり場に

なりやすい。平民街に行き場の無い貧乏人達と、貴族街でよからぬ事をたくらむ不逞の輩。彼らが交じり合うその場所は、夜になれば衛士の重点的な見回りの要所であった。

故に、日ごとに変わるその巡回経路を知るものにとっては、密室などよりも更に安全な場所となる。

明かりなどは無い。遠く家々の窓から漏れ出す明かりが、僅かばかり夜の闇を緩和しているだけの薄闇の中、ヘリオンは噴水の縁に腰掛けていた。

「お前がヘリオン・レイングだな？」

掛けられた言葉は薄闇に紛れた男から発せられた。

「そうだが、お前は……人攫いの輩か」

静かに、だが奥底に激情を沈めた声でヘリオンは応じる。

「兄上と義姉上は無事なのだろうな？」

頭からローブをかぶったその男に、鋭い刃じみた視線を向けながら問いかける。

「もちろん……貴公が言うことさえ聞けば、無事に戻るであろう」

「それで、私に何をせよと？」

「問者」

無言で睨み付けるヘリオンに、ローブの男はきびすを返す。

「期日は追って伝える。何をするかも、だ。レイング家の印がついた便箋に書いて知らせる」

「今度来るときは、家族の無事を知らせるものを持って来い」

冷たく言い放つヘリオンに、ローブの男は振り返った。

「貴様……自分の立場が」

言いかけた言葉は、目の前の刃によって止められる。

いつの間にかヘリオンの手には、水が滴る刀剣が握られていた。

「命が惜しくば、な……それと貴様の主に知らせる。私に言うことを聞かせたいのなら、家族ではなく金を用意しろ、とな」

すっと、引かれる刃に張り詰めていた息を吐くローブの男。

見れば、ヘリオンは既に闇に紛れて消えていた。

謀略の使徒 9

暗い夜道を足早に戻り、与えられた官舎に戻る。

自身の部屋に戻ると扉に錠を掛けて、詰めていた息を深く吐き出した。

震える自身の手に、苦笑が漏れる。

「……やはり詐欺師には向かないな」

ヘリオンは、深く深呼吸して手に持った刀剣の露を布でふき取った。

噴水の中に隠しておいたために、鞘の中にまで水が入り込んでいく。丁寧に手入れをしなければ錆が出てきてしまうだろう。

ハツタリのためとはいえ、少々やりすぎだったか。鞘を払い、鏢をはずしながらヘリオンは刀剣の手入れを始めた。

「問者、か」

手入れを一通り終えればベットにそのまま横になる。裏に居るのは、十貴族辺りだろうか。恐らくそう遠くない時期に、家族の安否は分かるはずだ。少なくとも生きているのか、死んでいるのか……そしてその後は自身の立ち回り次第。

「必ず救い出す」

金を要求したのは、家族から関心を逸らすため。

金を要求しつつ家族の安全を確認できる物をだせ、と言う矛盾を覆うために、このようなハツタリで相手の気を飲む必要があった。

上手く動揺していたようだから、ヘリオンの印象を強欲な、官吏として伝えてくれるだろう。

金で買収できるとなれば、家族に用がない。

解放されるか、始末されるか……いや、させるわけにはいかない。

強く奥歯をかみ締めて、考え抜いた計略を確認していた。

天候は生憎の曇り空。低く垂れ込めた雲が、でっぷりと太った蛇の腹のように垂れ込め、空を覆っていた。振り出しそうな気配に眉をしかめつつ、アンネリーはシュセと共に、実家に戻ってきていた。万が一を考えてシュセの他にも、護衛の騎士が二人ほどついている。いずれも男で大人びているが、シュセの方が位が上なのだろう。黙ってシュセに付き従っていた。その様子はまるで、物語から出てきた騎士のようでアンネリーは憧憬に似た気持ちを抱いていた。

「どなたも、いらっしやいませんね」

我がことのように悲しげな表情をして、シュセはアンネリーの前に立つ。男装に、銀の細剣は相変わらレイピアずだが、アンネリーは自然とその方が彼女らしいと思うようになっていた。

シュセの言葉を受けて、黙ってアンネリーは誰も居ない実家を見上げた。

家族が居ない。それがどうして、17年も生まれ育ってきたこの場所を、全く未知の建物のように思わせてしまうのか。彼女には不思議だった。

父親の鈍臭い所が嫌いだったし、母親の従順さには軽蔑さえ覚えていた。使用人達の優雅とは程遠い仕草も癪に障った。

その筈だったのに……。

考えれば考えるほど、胸の奥から鈍痛のようなものが溢れて来る。もう、家族と使用人達で食卓を囲むことは無いのだろうか。

目頭の奥が熱くなるのを覚えて、アンネリーは奥歯をかみ締めた。「アンネリー、気を落とさないでください」

追い討ちを掛けるようなシュセの言葉にたまらなくなって、アンネリーは曇天を睨んだ。目頭の奥の熱を吐き出したくて荒い息を吐きだす。

せめて雨でも降ってくればごまかせるのに。その思いで睨み付ける暗灰色の雲はゆっくりと、這っているだけだった。

そっと引き寄せられる視界が、シュセの肩で塞がれる。石鹼と温

かなぐいのするシユセに抱きしめられると、アンネリーの涙腺は、彼女の意思を無視して崩壊した。

「シユセ、さま……」

「シユセでいいと、昨日も言いました」

短く返される答え、悲鳴を上げる心に親愛の情が沁みる。

「シユセ、あたしさあ……」

嗚咽をかみ締めるように、言葉を吐きだす。

「親に、逆らってばかりでさ……使用人にも、辛く当たってさあ……」

…

震える体と声を振り絞る。

「だから、嫌いなんだと……ずっと思ってたけど、なんで、涙が……」

…

シユセの抱擁の強さに、アンネリーはそれ以上言葉を吐けず、泣き崩れた。

「大丈夫、きつと家族には無事に会えます」

幼子をあやす様に背中を優しく叩きながら、アンネリーに語りかける。

「だから、今は信じて待っていてください。わたくしは必ずあなたの家族を見つめますから」

泣きむせぶアンネリーは、何とか頷いた。

昼間だと言うのに、薄くぐらい室内に詰めるのは4人の男。暗幕で窓と言う窓をふさいだ部屋の中でバトウ・ラストウーヌが侮蔑の入り混じった声を出す。肥えた体を大仰そうに椅子に押し込み、目の前のテーブルを、怒りに任せてたたきつけた。

「金だど!? あの男はそんな要求してきたのか」

忌々しいとばかりに舌打ちをして、吐き捨てる。

「へい」

こくりと、頷く男　先日ヘリオンと交渉に出向いた男に向かつて鋭い視線を飛ばすが、それ以上何も言うこともなく不機嫌に口をつぐむ。

「家族に関してはなんといていた？　気にかけるようなことを言っていただろう？」

「いえ、それが……」

雇われた無法者は、この傲慢な貴族にヘリオンに脅されたことを言うべきか迷った。脅されて腰を抜かしたなどといえば、この貴族のことだ。出す金を渋りだすかもしれない。

人を顎で使う人間には、二種類いる。それに相応しい實力を持つた者か、そうでない奴か。そして無法者の見る所、この貴族は後者だった。貴族と言うだけで、他人が言うことを聞くと思っっている人間。

そういう人間は得てして、金を渋りやすい。無法者が従うのは貴族だからではない。そいつが金を持っているからなのだ。

「何も言っていないんですけど」

無法者は自分の失態を隠すことに決めた。

バトウは金で雇った無法者達をぐるりと、見回す。無能者め、とその顔に書いてあるような侮蔑しきった視線。

家族を誘拐したのは効果が無かったと言うことだろうか。いや、きつとこの無法者どもの交渉の仕方が悪いのだ。牢の中で一度だけ見た限りのあのやせ細った男が、なぜ自分の頭をこれほど悩ませるのか。やはり、鞭で打ち殺しておくべきだったと顔を歪ませる。

不穏な息を吐き出しながら黙り込むバトウに、無法者は顔を見合わせる。先日、集まった無法者で腕の立つ4人が死んでいた。仕事に危険はつき物だが、今度の仕事はその気配が濃厚すぎる。

「旦那、悪いことはいわねえ。今回の仕事はさっさと片付けしまつた方がいい」

「貴様……雇われ者の分際で意見するか！」

不安を口にする無法者を一喝して、腕を組むバトウに、今度は目

の据わった無法者が声をかける。

「で、どうするんです？ 金を用意するのか、あの人質をどうするのか、さっさと決めてください」

ヘリオンを追い詰めぬようにせよ。オウカの指示を思い出し、苦い思いをかみ殺す。

「……金は用意させよう。家族はしばらく拘置だ」

当り散らすように、机を叩くとバトウは立ち上がる。唯一の救いは、ここにいる無法者達を始末できることぐらいだろう。こいつらのような無能な者に金を払う必要は無い。バトウは背を向けて部屋を出て行く。

その背が扉の向こうに消えてから、無法者達は顔を寄せ合った。

「おい、どうするよ」

「あの雇い主、あぶねえかもな」

目の据わった無法者が、声を出す。

「その、今回脅してる相手……名前はなんていった？」

「ヘリオンだ、ヘリオン・レイング」

考え込むように、顎に手を当てる。その男には右の腕がなかった。「いや、奴さんはそのヘリオンつてのに間者をやらせてるんだらう？ とすれば、もう一つ俺達を雇ってくれそんな場所があるじゃねえか」

「……スカルディア家」

裏切るか、互いに視線と視線で仲間の意思を確認しあう。

「だが、まだ何ももらってねえ。とりあえずは、そのヘリオンつて男と雇い主とは別に連絡を取る程度に留めておくにしたほうがいいな」

頷いて、彼らは席を立つ。白々とした太陽に背を向けて、闇を進む者達は思い思いに策を巡らしていた。

謀略の使徒 10

「無事で何よりだった……で、ここ数日どこに行っていた？」

カルの湖水色の視線で見つめる視線は、ヘリオンの帰還を喜ぶと同時に、疑念をたたえていた。

「私的な用事だ」

明晰な回答で、自身の疑念を払ってくれることを期待していたカ
ルは、僅か失望し再び質問を重ねる。

「どこで何をしていた？」

「答えられない」

「っ！」

「殿下！」

怒りを爆発させようとするカルの押し留めたのは、傍らに控える
シュセだった。

「ヘリオン殿、それよりもご実家のレイング家が何者かに襲撃を受
け、ご家族の安否が不明です」

注意深くヘリオンの反応を見守るカルとシュセに、ヘリオンは小
さく頷いた。

「そうか」

そう言ったきり黙りこむ彼を、シュセが問いただす。

「……それだけですか？」

「他に答えようもあるまい。大方犯人は、十貴族か、ヘルシオ家だ
ろう？　こちら側につくと決めた時点から覚悟はしていた」

そう言われてしまつてはカルは黙るしかない。牢屋から彼を引き
抜いたのは、ほかならぬカル自身。膝まで屈して、彼を迎えたから
には、彼の家族が行方知れずの責任の一旦はカルにあるといつても
過言ではない。

「姪御さんが、いらっしやっていますがお会いになりますか？」

納得いかずに、だが引き下がらざるを得ないカルの脇で、再び口

を開いたのはシュセ。

「……アンネリーが？ いや、今は会わないほうが良いだろう」
僅かに走った動揺を押さえ込むようにして、ヘリオンは言葉を切った。

「話が以上なら、私は仕事に戻らせてもらおう」

長い上衣を翻らせ、背を向けるヘリオンにカルもシュセも返す言葉が無かった。

「どう思う？ シュセ」

「わたくしには、なんとも……ですが口で言うほど家族のことを心配してないわけではないのだと、思います」

手元にある便箋を一瞥すると、カルは背もたれに体重を掛けた。

「ヘリオンが敵と内通している、か……普通なら信じぬ所だが」

便箋に書かれた内容を裏付けるように、スカルディアの領内各地で不満が燃り始めている。不正代官が摘発直前に姿をくらませたり、告発者が突然翻意したり、収められるべき税が狙ったように盗賊に襲われたりだ。

領内の乱れは、貴族としての力の有無に直接繋がる。納められるべき税が収められず、スカルディア家の支持者の足並みがそろわなければ、いかに巨大な貴族として身動きが取れない。

「便箋をよこしたのは、無法者だったな？」

「はっ……」

短く返事をするシュセ。

「会ってみよう」

「危険ではありませんか？」

「無論、護衛はつける。それと、衛士の中でスカルディア家に忠誠を誓う者を、選んでくれないか？ 出来れば尾行に向いた者が良い」

「御意」

「ヘリオンの意図はわからん……だが、打てる手は打っておかなくてはな」

苦い思いを飲み下し、カルはまぶたを閉じた。

衛士。

ロクサーヌの治安を維持する役割を担う彼らは、全ての貴族からの義捐金によって賄われている。

といっても、実際にその義捐金の大部分を占めているのは十貴族スカルディア、ヘルシオ、ジェルノ、ケミリオ、ラストウーヌら有力な貴族達だ。ツラド家滅亡と、スカルディア当主が未だ十貴族の承認を得ず、更にはヘルシオ家の当主が不在で7人となつている彼ら、街の支配者達のうちで、持ち回りで衛士の長を担当することになる。

貴族といつてもさまざまで、十貴族のような有力者達もいれば、平民と大差ない下級貴族達もいる。有力貴族ならまだしも、下級貴族では相続など期待できない。彼ら行き場の無い次男や三男の“就職先”としての役割もあつて、衛士には貴族出身者が多かった。

家々の関係が密接なのが貴族と平民の違いだが、自然、彼らは元の派閥同士で寄り集まり、衛士の中にも十貴族を中心とした派閥が作られている。

貴族達の派閥とは別に、平民出身者からなる派閥も存在しており、派閥同士で激しく対抗意識を燃やしていた。

特に、ヘルキオス亡き後の混乱の中、スカルディア派閥と、その他の貴族派閥は犬猿の仲といつても良い。衛士の長に、スカルディアの者が就かないのは、半ば公然の事実としてあり、スカルディア派閥の者は汚い仕事やきつい仕事ばかり回されていた。

割の良い仕事、派手でロクサーヌの民の耳目を集めるような仕事は十貴族派閥に集まる。

そんな折に持ち込まれた頼みごとに、衛士達は困つたような顔を見合わせた。彼らにしてみればいかにスカルディア派閥とはいえ、これ以上十貴族の者達に睨まれたくはなかった。

「そこをなんとか、お願いできないでしょうか？」

衛士の宿舎、宿直番で詰めることになっていてそこに、シュセは自ら出向いて頭を下げていた。

頭を下げるシュセに、貴族出身の衛士達は眉をひそめる。

「そんなこと言われても、なあ？」

顔を見合わせる衛士達。

「スカルディアの若様が衛士の長に就かれることがあるなら、俺達も動きやすいんだが……」

シュセがだめか、と諦めかけたそのとき。

「お前らがやらないなら、俺達が引き受けてもいいぜ」

とつさに振り返るシュセに、名乗りを上げたのは平民出身の衛士達だった。貴族は持ち回りでつくことになっている宿直番だが、平民は当然のように就かされる。

「さつきから見てれば、若い娘に頭下げさせて、てめえらほんとに衛士かね？」

肩を竦めてあろうことか、スカルディア派閥の衛士を煽りさえする。

「ぐっ……俺達だつてなあ！」

「なんだよ、やんのかい？ このシュセさんの頼みは断るのに、威張り散らすのだけは一人前とは」

嘯く声に、おびえる様子は無い。

「ちゃんちゃら可笑しいぜ！」

平民出身の衛士の一人が啖呵を切ると、彼の後ろでは平民出身の衛士達はやし立てる。

「てめえら、平民の分際で……」

一触即発の彼らの中。

「おやめください」

思わず背筋が伸びるような凜とした声で彼らを黙らせたのは、当のシュセ本人だった。

平民の衛士達に向き直り、頭を下げる。

「わたくしのために、申し出てくれたこと本当にありがとうございます。ごめい
ます……。ですがそれをもって彼らを責めないでやってください。貴
族には貴族のしがらみというものが御座います」

丁寧だが有無を言わせぬ口調に気圧され、平民の衛士はうなずく。
すかさずスカルディア派閥の衛士達に向き直ると、彼らにも丁寧
に礼を言う。

「今日は無理を言って申し訳ありませんでした。今後出来るだけ、
カル様に衛士のことを心がけるようお願い申し上げます……
……ですから今少し、耐え忍んでいてください」

「シュセ様……」

声も無いスカルディア派閥の衛士達に背を向け、シュセは平民の
出身の衛士達と共に宿直の番から外れていく。悔しげにその背中を
見送ったスカルディア派閥の衛士達。

「ほんとに、平民の奴らだけに任せちゃまっていいのかな？」

ぼつりと、呟く声に全員が耳目が集まる。

「じゃ、お前これ以上、奴らに睨まれてえのかよ？」

衛士の長はラストウー又家のバトウ。粗暴さと、頭の悪さでは十
貴族の中でも、群を抜いている。陰に陽に、執拗な嫌がらせを受け
るのは何も自身だけではないのだ。

貴族社会は繋がっている。

自身の身内までもが被害を受けると知っていて尚、今のスカルデ
イア家に協力できる者は稀だった。

彼らには、ただ俯くだけしかなかった。

「ご好意には感謝しています。ですが、なぜわたくしに力を貸して
いただけるのでしょうか？」

平民出身の衛士達に向かって、開口一番シュセは質問した。

「ああ、それは」

平民出身の衛士達は互いに顔を見せ合わせて、照れたように笑い

あつ。

「実は、この前の戦のときにスカルディアの若様の噂を聞いてね」

この前の戦で自分の家だけではなく、他家の私兵までも生還させたスカルディア家のカルの名前は、平民の中に一種希望の光と共に輝いていた。

「俺は戦から帰ってきた奴から直接聞いたんだが……」

別の一人が口を開き始めれば、集まった平民の兵士達は口々にカ
ルを讃える。

「……ありがとうございます」

あの時、他家の私兵になど構わずロクサー又に戻還し、十貴族の首を上げていればあるいは一気にカルを至高の座まで上らせることが出来たかもしれない。カルもそれは分かっていたし、シュセも十分に承知していた。だが、目の前で苦しむ私兵たちを捨てていくことが、カルとシュセにはどうしてもできなかったのだ。

その私兵たちがめぐりめぐって、カルを褒め称え、スカルディアの為に働いてくれる。

シュセは胸が熱くなるのを堪えることができなかった。

「よしてくれ、俺達は自分の正しいことをやるだけだ」

頭を掻いた衛士の一人が照れながら他の衛士に同意を求めると、彼らはみな一様に頷いた。

「いえ、だからこそ、お礼を言わせてください……ありがとうございます
います」

「困ったな」

そう言っただけで照れる衛士達に、嬉しさの余り泣き出しそんな視線を
向けて、シュセは頭を垂れた。

「で、俺達は何をすればいいんだ？」

「はい、実は」

その後、平民の衛士たちは、危険も顧みずシュセの頼みを受け入
れた。

謀略の使徒 11

シユセが平民出身の衛士達の力を借りていた宵の刻。

ヘルシオ家の屋敷に訪れた者があつた。人目を忍ぶように頭からすっぽりとローブをかぶり、顔はうかがい知れない。周囲をうかがつてから、裏口を二度ノックする。

「便箋を出した者だ」

中から覗く気配に対してぼりと、呟く。

「黒」

「戦斧」

訪問者は中からの声に、間髪居れずに言葉を返す。

「入れ」

招き入れたのは、この家の家宰。老年に達しているがその眼光は、猛禽類の鋭さを宿していた。訪問者を招きいれた後、周囲に人陰が無いのを確認すると素早く扉を閉める。

「ついて参られよ」

訪問者を先導し、二回の奥の部屋に通す。

「奥様、例のお方が……」

「入っておくれ」

重厚な扉を押し開き、ローブ姿の訪問者が部屋の中に入る。部屋にはゆつたりとした服でくつろぐウエンデイの姿。妖艶さを漂わすその姿に、だが訪問者は意に介した様子もなく頭を垂れる。

「お初にお目にかかります」

「まずは、お顔を見せるのが先ではありませんか？」

家宰の言葉に、ウエンデイはゆつたりと微笑む。その笑みを肯定ととって、訪問者はローブを上げた。体の線は細いにもかかわらず、刃色の瞳が強い光を放つ男。鉄壁の無表情と相まって、冷たい印象を周囲に抱かせるその容貌、紅茶色の髪が今はしっかりとまとめられていた。

「ヘリオン・レイングと申します」

深く頭を垂れるその姿を見て取って、ウエンディは視線だけで家宰に退出を命じる。一瞬物言いたげな表情を見せたが老人は、音も立てず立ち去り扉を閉めた。

「妾は、腹の探りあいなどというものは、とんと不得手ですの」
顔に浮かべるのは、妖艶さを絵に描いたような笑み。

「だから単刀直入にお聞きしたいのですけど……本日はどのような御用向きで？ スカルディア家で推官を勤めるほどの方が、一介の未亡人に何の御用でしょう？」

その言葉に謹直な姿勢を崩さず、ヘリオンは顔を上げる。

「ヘリオン家の旗の下への、帰参をお願いいたしたく……本日まかり越しました」

相変わらずのヘリオンは無表情を通す、そのヘリオンの言葉を表情を吟味しながらウエンディは目を細めた。

「まあ……」

そう言ったきり言葉を次がないヘルシオの妖婦。

「もちろん、相応の土産はご用意してございます」

そう言ったヘリオンの口元が僅かに歪んだ。

「カル・スカルディア自身……などいかがでしょう？」

「怖いことを……」

少ない言葉の中でウエンディはヘリオンの言葉の真偽を確かめようとしていた。猫のように細くなった目はその些細な表情をも見逃すまいと、彼を注視し、脳裏を駆け巡る利益と不利益を秤にかける。

「あるいは、この街の支配者の地位」

「大それたこと」

「いえいえ、決して貴女様には不足とは思いません」

ヘリオンの口の端は釣り上がり、その顔には冷たい微笑を浮かべている。今の彼を表現するなら才子という印象を抱かざるを得ないだろう。

「今街を取り仕切っていらっしやるのは、十人もの大貴族達ですの

よ？」

「ですが、スカルディア家ヘルシオ家は加えられずツラド家は滅びております……現在は7家のみでございます。そして貴女様の掌中には、ケミリオ家とラストウーヌ家のご当主がいらっしやる……」

「私にそのお二方と共に兵を挙げよ、と？　まるで話に聞く軍師のようなことを仰るのね」

嘲笑が笑みにこもる。

「いえ、動いていただくのはケミリオ家とラストウーヌ家のお二方のみ……狙うのはジェルノ家のオウカー人……そしてその後は貴女様が権力を握れば良い」

スカートの上で、足を組みかえるとウエンディは手に持った鈴を鳴らす。

「いかがいたしましたか、奥様？」

現れたのは、完全武装の家宰と私兵が3人。

「この方を拘束してください。十貴族の治める共和制への謀反の疑いがあります」

短い返事と共に、ヘリオンの体に縄が巻かれる。

なされるがままになっていたヘリオンは、立たされると、キツとウエンディを睨んだ。

「私が策、用いなかったこときつと後悔なさいますぞ」

その様子をじつと伺っていたウエンディが、ヘリオンを引き立てる家宰に向けて手を上げる。すると今までの拘束が嘘だったかのように、家宰はサツと手を引く。その手際のよさは、洗練された執事というよりは職業軍人を思わせた。

ヘリオンの拘束を解けば、音も立てずに扉を閉めて立ち去る。

その彼らに向かって鼻を鳴らし、軽く睨みつけてからヘリオンはウエンディに向き直った。

「私を……いえ、我がレイング家をヘルシオの旗の下に再び迎えてくださると、考えてよろしいのでしょうか？」

「ふふ……コウデイに物怖じしないのは流石、その若さで推官まで上り詰めた方ですね」

コウデイ　先ほどの家宰のことだろうか、とヘリオンは頭の隅で考える。

「よろしいでしょう、その“面白い話”に免じてレイング家をヘルシオの旗下に戻ることを許します」

膝を突き、深くヘリオンは頭を垂れた。

「ありがたき幸せ」

「それで、私の軍師様」

ウエンディの細めた視線は猫を思わせる。無邪気とすら見えるその表情の中に、限らない悪意を込めて妖婦は微笑んだ。

「私は今後どのように動いたらいいのかしら？」

艶然たるウエンディの微笑みに、口の端を吊り上げた才子は口を開いた。

「密かに、ケミリオ家を訪れるのがよろしいでしょう」

衛士達に約束を取り付けた日の夜。

ヘリオンとウエンディがヘルシオ家の屋敷で密談にふけていた頃、シュセはスカルディアの屋敷にある自分の部屋へと戻ってきていた。

「あ、おかえりなさい」

扉を開けた中から、掛かった声に僅か笑みが漏れる。

「なにか？」

アンネリーは首を傾げると、シュセの側に立つ。

「いえ、おかえりと、言ってくれる人が居るのは良いものですね」

微笑むシュセの笑顔に、どきまぎしてしまうアンネリー。そんな彼女に吉報だと、シュセは事情を語り始めた。

「今日、衛士の方々にお会いしてきました。協力してくれるそうです」

ほっとしたようなアンネリーに、シユセは柔らかい笑みを返す。

「ありがとうございます、シユセやカル様にはなんとお礼を言ったらいいか……」

「いえ、元はといえばわたくし達の力不足が原因です。なんとお詫びしても……いえ。全てはアンネリーのご家族が見つかった後にしましょう」

「あの、シユセ様」

外出用のマントを外しかけたシユセに、アンネリーが頭を下げていた。

「私に剣を教えていただけませんか!？」

腰から直角近くになるまで一気に頭を下げる。ぶん、と音がしてしまつようなその勢いに、シユセは目を丸くする。

「いきなり、どうしたのですか?」

「私は騎士になりたいっ! 思いつきで言ってるんじゃないです。家族が居なくなつて、一人になつて……ちゃんと考えたんです! お願いします!」

アンネリーの思いつめたような真剣な声に、シユセは彼女に向き直る。

「騎士は本来、殿方がなるべきものなのですよ?」

「分かっています!」

降つて来るシユセの声に、アンネリーは彼女を見上げた。

注がれる視線は、普段のシユセではなく、騎士として戦場を見てきた者の厳しい視線。いつもは温かな春の木漏れ日のような琥珀色の瞳が、今は凍てつく冬の風を纏つたようにアンネリーを見つめる。

「ダメです……と言つても、聞きそうにありませんね」

「じゃあ!」

シユセの凍てつくような視線は、いつの間にか温かなものに戻っていた。

「わたくしが教えられるのは、基礎だけです。それでよろしければ」

「はいっ！」

「それと」

「はい？」

「シユセ“様”は要りません。前にも言っただけです」

悪戯っぽい笑みを浮かべたシユセに、アンネリーは涙をぬぐいながら頷いた。

「ありがとう、シユセ！」

謀略の使徒 12

ゴード暦で言う所の327年、今から200年も前になる。

初代国王、ベル・シフォンの元に国家ロアヌキアは建国された。

首都はロクサーヌ、南は大海を望み、東は不毛の荒地を越えガドリアに達する。西は未開の大森林に接し、北は大河ルプレを挟んでポールに境を接していた。

ロクサーヌの歴史は更に100年をさかのぼる。当時、円熟期を迎えた自由都市郡。流通による技術の蓄積と、その恩恵による急激な人口増加。膨れ上がる人口を養うため、自由都市郡は周辺地域に殖民を実施していった。

自由都市郡の中心都市バルドギアの有力家門であったシフォン家が、流刑地であったロクサーヌ一帯に根を下ろしたことから、王都の歴史は始まる。

温暖な気候と、バルドギアで培った技術。その二つにより、ロアヌキアは急速な成長を見せる。その当時周囲に建国されていたスカルディア、ジェルノ、ツラドなどと言う小さな殖民都市を吸収しながら、ロクサーヌ一帯に確固たる地位を築いていった。

ゴード暦258年、当時、豊富な鋼鉄を産出していたガドリアとロアヌキアが対立。荒地を越えてロクサーヌはガドリアを落とし、ガドリアは以後ロアヌキアの版図の一部となる。

ゴード暦291年、ロアヌキアの台頭を快く思わないポールと大河ルプレを隔ててにらみ合うも、決着はつかず。

ゴード暦327年、シフォン家皇女の名をとり、王都をロクサーヌと名付ける。それにより、以前の名前は消失してしまう。正式に王国を名乗り、自由都市郡と袂を分かつ。

「酔狂なことだな」

分厚い歴史の本を読みながら、カルは一人呟いた。辺りは既に夜の帳が降りている。燭台の上の炎が揺らめくのに合わせて、影が揺れる。ヘリオンが推官の地位に就いてからというもの、カルの政務に対する時間は著しく減った。

その余暇をカルは教養の習得に当てている。貴族の当主ともなれば、自分の家の歴史に精通していることは当然として、礼儀作法、ダンスに至るまでありとあらゆる事を覚えねばならない。

十貴族との暗闘は依然続いているが、カルはその先まで見据えていた。十貴族との暗闘を勝ち抜いた先……領地を収め、国を治めるために欠かすべからざる知識。それを学び取るための勉学をカルは自分自身に課していた。

再び目を歴史書に落とし、行間の文字を追う。

ゴード暦367年 三代国王クレゼブルの治世。貴族の整理を始める。有力貴族十五家をして、元君会議げんくんかいぎを設置。この時、スカルデア、ヘルシオ、ジェルノら今の十貴族の原型が出来上がる。

ゴード暦395年 四代国王ユーヴァの治世、国力の増大を背景に自由都市郡ポーレへと触手を伸ばす。しかしポーレの名将シエーラ・パルミンドとバルドギアを中心とした自由都市郡の兵力に押され、敗退を余儀なくされる。

ゴード暦400年 グノンファンの戦い

ロアヌキアの総力を結集した戦いにおいて、ポーレ側に敗れる。以後幾度となくユーヴァはポーレを狙うが、その度にシエーラに苦杯を舐めさせられる。

ゴード暦421年 皇位継承戦争が起こる。病に倒れたユーヴァ

の末弟と長男の間で、王位をめくり内乱が起こる。このことが契機になり、戦乱を嫌った貴族達が西方大森林への移住を始める。

西方開拓時代の幕開け。

ゴード暦425年 ユーヴァの末弟死去により、五代国王グルガとなる。内乱による国力の減退、人口減少に伴う生産力の低下。王都ロクサーヌの力の低下を見たガドリア領主ユーグファンが独立を目的に叛乱を起こす。

同時期、西方開拓により力をつけた貴族達が、地位の安堵を国王グルガに求める。西方候主せいほうこうしゅと言う盟主の下に結束した西方貴族達は、受け入れられない場合は独立を示唆する。

国王グルガ病を得て、宰相ヴァージネル・ケミリオは西方候主ネレイド・ノイスターと対面。その権利を認める。と同時に、ガドリアの叛乱を鎮めるための助力を求める。

ゴード暦430年 辺境領主ユーグファン、戦死。その叛乱の終焉を見届けた翌年、国王グルガ病没。

ゴード暦452年 六代国王ヘルグ 外交による平和の実現。戦乱で荒れた王都の修復。一方で自由都市郡に貢納金を送るなど、内部からは批判の声が高まる。元君会議の整理縮小を行う。

ゴード暦492年 七代国王にして、シフォン家最後の王、兇王ヴェル王位へ。

自由都市郡への貢納金を廃止。それによるポーレを始めとする自由都市郡との対立へ拍車がかかる。

軍制の改革による平民の登用を実施するが貴族達の反発を招く。近衛軍しんゑぐんとして黒旗軍の採用。

ヘルグ時代の名残で自由都市郡と繋がりのある貴族達が反発の担い手となる。

大粛清。反発する貴族を悉く懲罰する一方、力のある平民を登用

していく。

ゴード暦494年 クレンサーレの戦い

影響力の低下に懸念を示したポーレら自由都市郡が戦を仕掛けるが、ヴェルが大勝を収める。その勢いを駆って、ヴェルは北方を遠征。ポーレ、ベルギア、ギーナなどを落とし、バルドギアまでをも手中に収める。

ゴード暦 500年 まつろわぬ民の女を妃に迎える。

ゴード暦 512年 バルドギアの叛乱討伐に向う際、貴族達の叛乱を起こされ自決。王の妃、二人の娘は消息不明。

ゴード暦 513年 ロアヌキアの占領していた自由都市郡全土において反乱が発生。ロアヌキアは再び大河ルプレまで勢力圏を後退させた。

ゴード暦 514年 ロアヌキア王政を廃止、共和制を採用。十貴族による合議制へ。

ぱたりと、カルは分厚い歴史書を閉じた。

「兇王ヴェルか……」

ぱつりと呟いた名前は、歴史書の最後に記された名前。シフォン家最後の王、彼の死後この国は十貴族による合議制をとることになった。

彼の罪は死んだこと。そして彼の最大の功績は、平民の登用にあるのだらう。故に彼は、いや彼の黒旗軍は強かった。

遠く自由都市郡までも遠征して、そのほとんどを成功させている。そしてその王を殺したのは、ヘルキオス、アトリウス、オウカらが中心となって成し遂げたことだと言われている。

「僅か13年前か」

長大なロアヌキアの歴史の中で僅かに13年。王政は廃され、貴族主導の政治へと移り変わった。

「あの男に出来たことが、私に出来ぬはずはない」

十貴族達との血を流さない闘争の果てに、王への道があるはずだった。

ケミリオ家の屋敷。

五代前の宰相、ヴァーヂネルの建てたその屋敷は豪勢だった。

やや時代遅れの感はあるが、一時代を代表した宰相の邸宅である。二階建ての広大な屋敷。古式に則った庭の作り、古い壁には茨が這い、それが建物全体の味を出していた。

時刻は中天に陽が上る頃。

その門前に、ヘルシオ家の馬車が一台停まった。先の当主ヘルキオスが使用していたその馬車を使えるのは、今は未亡人であるウエンデイだけである。

「これは……」

彼女の突然の来訪に出迎えたケミリオの家宰は、ローブに包まれた彼女の顔を見た途端言葉を失った。主であるティザルが口にくそ出さないものの、十貴族内の中心オウカ・ジェルノの怒りを買ったのはこの女のためなのだ。

そつという話は、貴族に仕える下々の者達の噂話でほぼ正確な情報が伝わってくる。それを知っているからこそ、ケミリオの家宰は表情を消し、対応した。

「何の御用でらっしゃいますか？ ヘルシオの奥方様」

歓迎していないと言うことを無言のうちに訴えるケミリオの家宰に、ウエンデイは敢えて微笑んだ。

「ティザル様を呼んでくださるかしら」

「ここに、でございましょうや？」

早く帰れ、と遠回りに訴える家宰にウエンデイは、微笑を深くして頷いた。

「貴方の裁量に任せましょう。表に止めたのは私しか使えぬ馬車。」

そして、顔を隠しているとはいえ、ローブ姿の女がケミリオ家の軒先に居るとなれば……世間の方はなんとお思いになるでしょうね？」

「くっ……」

ウエンディには家宰の悔し紛れの舌打ちが聞こえるようだった。

「こちらへ……」

不承不承ながらやつと奥へ通す気になった家宰は、他の使用人に指示を出して表に止めてある馬車を移動させる。いくら人通りが少ない昼間とて、人目につきすぎる。

「ありがとう」

嫌味なほどに丁寧な礼を返すと、彼女は家宰について、ケミリオ家の中へ足を踏み入れた。

謀略の使徒12（後書き）

ふと、見た文字数が結構な数字になってました。

結構書いてるなあと自分に呆れ、読んでいただいてる方には感謝の念に耐えません。

ありがとうございます。

感想とかいただけるともっと喜びます、がそこまでは欲張りすぎかなとも思ったり思わなかったり。

ではこれからもお付き合いよろしくお願いいたします。

謀略の使徒 13

オウカの叱責を招き、スカルディア家を追い詰める十貴族の会議からはずされたティザルは鬱々として酒浸りの日々を送っていた。窓を締め切り、薄暗い部屋には庶民の月収にも匹敵する酒瓶が、無造作に転がっている。

「くそっ！」

一族の長として、今までくじかれることのなかった自尊心。肥大する一方のそれを抑える術を彼は知らなかった。もし彼が、忍耐を重ね屈辱をばねとして、尚いっそうの努力をしたならばあるいは、オウカの跡を継ぎ権力を一手に集めることが出来たかもしれない。

なんといつでも彼はいまだに若い。

一門の当主。親類縁者、家臣を始め、己の領地に戻れば領民、そして大貴族に寄り添う中小の貴族達を合わせれば軽く数万の人の上に立っていることになる。それが大貴族、十貴族の一角を成す家門の当主である。

カルを除けば、五十台の多い十貴族中異例に若い30台。

オウカが未来を囑望しても不思議ではない。自らこそが次代の十貴族を率いるであろう将来を、半ば当然とティザルも受け止めていた。

内々にオウカ翁と呼ばれ、親しく声をかけてもらったこともある。だが、その寵愛がいと簡単に覆された。

このままでは、スカルディア家を取り潰した後の貰いが少なくなる。そればかりか、最悪何ももらえぬこともありうる。そうすれば誰の目にもケミリオ家の面目は丸つぶれとなる。靡いていた貴族どもは鞍替えし、他の保護者を求める。

今までは歯牙にもかけなかった者に気安く肩を叩かれ、気にするななどと慰めの言葉をもらうなどケミリオ家の当主として、断じて

許せなかった。

「くそっ！」

酒を味わう余裕もなく、一気に飲み干す。芳醇に甘いはずの味わいも、のどを刺激する適度な辛さも、今のティザルには味わう余裕すらない。ただ、今の自分を認めたくなくて酒に浸る。

「カル……、カル・スカルディアめ！」

憎んでも憎みきれない男の名が口から零れ落ちた。己の将来を、オウカ翁からの寵愛を、奪った男。いや、男ですらない。あのような子供につ！偉大なる宰相ヴァージネルが末、栄光あるケミリオ家の当主たるティザル・ケミリオが遅れをとっていいわけがない！荒々しくテーブルに酒瓶をたたきつけると、その拍子に他の酒瓶が転がり落ちる。

それすらも気に食わず、テーブルの上にあつた酒瓶を軒並み払いのけ、荒い息をつく。

「御館さま」

規則正しいノックの音と、家宰の声が聞こえたのはそのときだった。

ふらつく足取り、荒々しく吐き出される息の合間からティザルは返事をした。

「どうした!？」

「……お客様がいらっしゃってございます」

一瞬と惑ったように家宰は、言い淀み扉に向けて声を励ました。

「客？ はっ、誰だ!？」

謹慎中のティザルを尋ねる者など、いようはずがない。それほどまでに十貴族の長老であるオウカの権力は磐石といってもいい。少なくとも、貴族の中では。

「……ヘルシオ家のウエンディ様です」

苦虫を噛み潰すような家宰の声に、ティザルは一瞬動きを止めた。「なに？ なんと申した!？」

そんな馬鹿な、と思う。あの女はそんな殊勝な者ではない。溺れ

ていたからこそわかる。あの冷たさ、お互いに利用する価値があったからこそ、近づいたのだ。今のような窮地に陥っているティザルを助けるなど、ヘルシオ家のウエンディのすることではない。

断じて、ない。

「お帰りになつていただきますか？」

いくばくかの期待を込めた家宰の声に、ティザルは我に返る。

「いや、会おう！ 仕度する…… 客人の間にお通しせよ」

だが、もしかすると……その期待が否応なく膨らむ。見捨てられ、絶望しかけたティザルに手を差し伸べるウエンディ。ありえない。ありえない…… だが！

急く気持ちを押さえ、ティザルは着替えもそこに客人の間に向かう。

いくら思考が否定しようとも、それを期待する気持ちが抑えられない。

早足になり、乱暴に扉を開ければ客間にはいるはずのない、だが待ち望んでいたウエンディの姿があった。

「…… なの、御用でしょうか？」

気づけばティザルの息は上がっている。その呼吸を落ち着けようと、軽く深呼吸しつつ一歩部屋に踏み出した時、ウエンディが立ち上がりゆつくりとティザルに近づいてくる。

ローブに隠した表情はわからない。だが妖艶なはずの彼女の雰囲気は微塵も感じられず。

「会いたかった、ティザル」

その言葉とともに、首に回される彼女の腕。柔らかな胸の圧迫とともに、花の香がティザルの理性を惑わし乱す。いつもまとう妖艶な雰囲気ではない。むしろ清楚な、一途な乙女を思わせる潤んだ瞳。囁きかける言葉は、ティザル自身よりも切羽詰った思いを感じさせた。

「ウエンディ様、何を」

残る理性を総動員して彼女を引き離そうとする。

彼女の肩に手をかけ、少し力を込めさえすれば細い彼女などに引き剥がせるだろう。家宰達に命じて方々へ金を配り、挽回のための時待っている今。

ウエンデイとは距離をとり、オウカの寛容に期待するしかないこのときに。

「ヘルシオ家も、スカルディア家も、もうどうでもいい」

ティザルの手は彼女を押し返そうと力を込め。

「貴方が好きな、ティザル」

押し付けられた彼女の唇の柔らかさに、全ての抵抗は無に帰した。

「ああ、ウエンデイ！」

肩にかけた手は彼女を掻き擁き、荒々しく唇を奪う。その愛撫を自ら望むようにウエンデイはティザルの頭を掻き擁く。

「ティザルっ！」

口付けの合間から漏れる自身の名に、彼は理性を忘れる。彼女の纏うローブを引き裂き、その白い四肢を絨毯の上に押し倒した。

柔らかなベッドの上、身を沈みこませる最高級のベッドに横たわりながら、ティザルは深い満足のため息をついた。今までこれほど充実した瞬間があっただろうか。

今隣には、女が寝ている。自身が征服した、最高の女だ。

「ティザル」

「なんだ？」

甘い声に振り返れば、悲しげなウエンデイの顔がすぐそばにある。……ごめんなさい。もうこれで最後にしましょう。やっぱり私達は会わない方が良いわ」

「何を言う！ 家も体面も関係ないと、私に言ったのは嘘だったのか！？」

「でも……わかるでしょう？ 貴方には忠実な家宰や従えねばならない家臣がいる。栄光あるケミリ才家を私などのために捨ててはいけないわ」

「なんの、十貴族の地位など捨ててもいい！」

「ダメ！ 貴方は将来、十貴族の長になる人間よ」

強い彼女の戒めの言葉に、ティザルはウエンディを抱き寄せた。

「ジェルノ家のオウカなど足元にも及ばない。貴方こそが十貴族の長に相応しい……だから、これで終わりにしましょう」

弱弱しく首を振り、涙を流すウエンディを強く抱きしめ、ティザルは首を振った。

「お前に比べれば十貴族の長の地位など！」

だが、その腕の中からウエンディは抜け出した。

「明日、ジェルノ家のオウカ翁の所へ行くわ。前々から呼ばれていたのだけど、あのご老人の情欲に満ちた目を見ていると怖くて……でも、明日行くわ。そこで貴方の謹慎を解いてもらうよう、お願いするつもり……どんなことをしてもね」

ベッドの上から抜け出して、ティザルに背を向け下着をつけるウエンディ。

「それは、ならぬ！」

言うなり、ティザルはウエンディを抱きしめた。

「仕方ないのよ……ティザル、彼が生きている限り、私達が結ばれることはないわ」

「ならば……ならば、私はオウカを殺す！」

とつさに振り向いた、ウエンディにティザルは力強くうなづいた。「でも、でもティザル、それでは貴方が反逆者に……」

「オウカを殺し、私が十貴族の実権を握る。そうすれば反逆などと誰も言いだすまい！」

燃えるティザルの瞳に、ウエンディは瞳を潤ませて問いかけた。

「本当？ 本当にオウカを殺すのティザル？」

「ああ、私に任せておけ！」

強く抱きしめたウエンデイの口元が禍々しく弦月に歪んでいた事を、ティザルは知らなかった。

「ヘリオンが、ヘルシオ家に入り込んでいるのは間違いないのだな？」

問いかけるカルの口調は重く、青色の視線は凍てついたように厳しい。

「残念ながら……」

頭を下げるシュセの顔にも、苦渋の色がある。

「……裏切ったというのか、ヘリオンが！」

奥歯をかみ締め、その言葉を搾り出す。その声にシュセは頭をたれたままだった。

「もしかしたら、家族を人質にとられての仕方ないことなのかもしれません」

あるいは、と断りを入れたシュセの言葉にカルは拳を机に叩きつける。

「だが、だとしても……なんの断りもなくっ！」

机に叩き付けた拳の痛みが感じられないほど、カルの心は揺れていた。

「処分を下されますか？」

そんな主に苦虫を何十匹もかみ殺したようなシュセが、言葉をかける。

殺すのか、と。

「いや……」

俯いたまま、言葉の告げないカル。

「では……例の無法者はどのようにいたしましたしょう？」

躊躇ったようなシュセの声に、カルは顔を上げた。すでに彼ら無

法者との約束の日取りは明日に迫っている。椅子に深く腰掛け、激情を追い出すかのように息を吐く。

「無論、会う」

「ヘリオン殿を、信じなさるのですね？」

「ああ」

その返事に、ほっとした表情を見せるシュセ。

「では、これにて」

柔らかい声を残して、シュセはカルに一礼し、部屋を後にする。

シュセを見送って表情を消したカルは、深く頂垂れた。

「だが、だが……もし裏切っているのなら……私はお前を決して赦さぬぞ、ヘリオン！」

小さく吐き出された毒は、シュセの消えた冷たい部屋を震わせた。

謀略の使徒 14

闇に溶けるような漆黒のマントでその高貴な身を包み、カルは郊外にある廃墟にいた。目の前に立つ無法者達に視線を投げ、僅かに口の端を歪めて言葉を発する。

「つまり、貴様らの望みは私の庇護下に入ることなのだな？」

傲慢な貴族を絵に描いたような表情を作りながら、その裏では彼らの真意を探り出すべく必死に考えをまとめる。

「へい、あつしらもあのラストウーナのバトウなんかの下にいるよりは、スカルディア様の下にいたほうが安心だと……」

腰を低くした無法者達の様子を、一瞥すると僅かにカルは沈黙した。その隣にいつもいるはずのシュセの姿はない。護衛に是非自分を連れて行ってほしいと頼むシュセを、説得して彼は敢えて彼女を伴わなかった。

変わりに連れて来たのは、近衛の騎士の中でも口が堅いと評判の二人。

「良いだろう、貴様らの話を信じることにしよう」

顔を見合わせる無法者達に対して、嘲りを含んだような口調でカルは告げる。

「何を驚く、貴様らが望んだことだろう？」

「へ、へい……ありがとうござえやす」

褒美にあり付けなくなることを恐れた無法者達は、慌てた様子で感謝の言葉を口にする。

「クラフト」

護衛の騎士の名をカルが呼ばれる。その一言で用件を察した騎士は、皮袋に詰めた金貨を無法者達に手渡した。その重さに、無法者達の顔に喜悦が浮かぶ。

「こ、こりゃ、すげえー！」

どよめきの声が広がり、互いに顔を見合わせる。

「ほんの手付けだが、気に入ってもらえたのなら結構」

平民が五年は楽々と暮らしていける金額を、はした金と言いつけるカルに、無法者達の顔に驚愕が広がる。

「さて、その貴様らが浚った貴族だが、明後日には我らに手渡してもらいたい」

「へ、へい！ 早速帰って仲間と相談させてもらいます」

餌をくれる主人に尻尾を振る犬のように、頷くと無法者達は挨拶もせずカルに背を向ける。

「無礼者が……」

「やめておけ」

小さく呟いて腰に佩いた剣に手を伸ばすクラフトを、カルは抑える。

「それより衛士と協力して彼らの居場所を付き止めよ。ただし手出しはならぬ」

「良いな？ と念を押されてクラフトは神妙に頭を垂れた。

「行け！」

小さく、だが鋭く命じられた声に応えクラフトは駆け去って行った。

「できれば、今日のうちに片付けたいものだ……」

去って行った無法者達の背はすでに見えない。彼らの消え去った闇を、カルは睨んでいた。

煌々と炊かれる松明の明かりが、門を照らす。

そこはまるで戦いでも出かけるような物々しさだった。ラストウー又家の門構えは、古来より猛々しいほど無骨なものと決まっている。

十貴族となる前、ラストウーヌ家は武人の家柄だった。ジェルノヤケミリオ家がロアヌキア建国以前からあるのに対して、ラストウーヌ家は四代国王ユーヴァの時代に頭角を現した比較的若い家である。

貴族に成り上がった初代ビーズリイ・ラストウーヌ以来、武を誇るをことを至上としていた。だがその教えも代を重ねることに形骸化していき、バトウに残るのは猛々しいほどの無骨な門構えだけとなっている。

現当主バトウは奢侈を好み、その無骨さを嫌っていた。質実剛健を旨とするラストウーヌの家宰は使用人達に剣を教え、私兵兼使用人としてバトウに仕えている。

バトウは認めたがらないが、実質ラストウーヌの家を支えているのは、人望そして力関係からも家宰の方である。ラストウーヌ家、ひいてはバトウがロクサーヌで十貴族として重きを成しているのは、ひとえに彼の家臣達の優秀さによる。

「お屋形さま」

呼びかけた声は、年を重ねた風格と年輪を刻んだ重さを持っていた。

「なんだ？」

家宰の声に、つい声を苛立たせてしまうのは、バトウの未熟さゆえか。今年40の半ばを過ぎる主人に対して家宰は心の中で僅かにため息を付いた。

「先ほどのティザル・ケミリオ様からのお話、お断りください」

心中をおくびにも出さず、躡けられた完璧な動作で一礼する家宰を、バトウは忌々しげに睨み付けた。

「貴様の知ったことではない！」

憤るバトウを諫めるように、家宰は言葉を続ける。

「ティザル・ケミリオ様のことをオウカ様に報せるべきです。さすれば、ラストウーヌ家の安泰は間違いございますまい！」

オウカを討ち、ロクサーヌの覇権を二人で分かち合おうと言う誘

いにバトウの心は揺れていた。家宰の言うとおり、確かにティザルを売り、オウカにこのことを報せればラストウー又家は安泰となるう。

「黙れと言っている！ 友を売ったとあらばラストウー又の家名に傷が付くわ！」

口ではそういつつも、バトウの心中は違った。このままではラストウー又家は年々埋もれていくばかりなのではないか。終に一度もラストウー又家がロクサー又の覇権を握れぬまま終わるのではないかと、疑心暗鬼になっていたのだ。

シフォン家最後の王、ヴェルを追い落としたときバトウは未だ次期当主に過ぎなかった。先代の当主はヘルキオス、オウカ、アトリウスらの口車に乗りロクサー又に共和制を敷いた。

確かにそこまではいい。

だが、十貴族で仕切るはずのロクサー又を実際に動かしていたのは、ヘルキオスとアトリウス、そしてオウカだった。

ないがしろにされた！ ラストウー又家は、父上はだまされたのだ！

その思いが、心の片隅にいつも澱のようになってバトウを苛んでいた。兵権を握るアトリウス、莫大な財を築いたヘルキオス、そして表に出ず全てを裏から操るオウカ。三人が互いにけん制しつつも、協力していた頃はとても敵わないと半ばあきらめていた。

自暴自棄になり、他人に傲慢な態度をとって自らの力を確かめなければ、不安に押しつぶされてしまいそうだった。

だが、アトリウスは死に、ヘルキオスも逝った。

「このままでは、我がラストウー又家、いやこのバトウ………終わりませぬ！」

若い頃に抱いた野心の炎。忘れかけていたそれが、急に現実味を持ってバトウの前にさらけ出されたのだ。

「お屋形様！ いけません、家を危険に晒すべきでは！」

家宰の言葉を怒鳴り付けて黙らせる。

「黙れ！ 当主たる俺の決定だ！ 異を唱えることは許さぬ！」

悔しさに歯をかみ締めるようにして頭を垂れる家宰。その彼を見下ろして、バトウは命令を下す。

「一両日中だ。集められるだけの手勢を集めろ！ 俺はケミリオ家に向かう」

短い返事の後、家宰は退出した。

馬車に乗り込み、ケミリオ家に向かうバトウ。

彼を見送った後、家宰は使用人達を一同に集めて指示を下す。

「このたび、我らが主バトウ様が……ロクサー又をお取りになる」

静かな口調に、その場に集まった者達は誰もが息を呑む。

叛乱を起こす！

彼らの主はそう言っているのだ。

「逃げたいものは逃げてよい」

続いて発せられた家宰の言葉に、使用人達は顔を見合わせた。

「……家宰様は、どうなさるので？」

「私は、30年以上このラストウー又家にお仕えしてきた。今更主を見限るつもりはない」

瞑目して語る家宰の表情は、死を覚悟した武人のそれだった。その言葉に、再び使用人達は顔を見合わせる。

「ならば、我々も家宰様に従います」

使用人達を代表して老僕がおずおずと言い出す。

「そうか……バトウ様を、お留めできなかったこと、赦してほしい」
頭を下げる家宰に、慌てたように老僕が家宰の手をとる。

「よしてください。ラストウー又家は私たちの家も同然、守るのは当たり前です」

「すまぬ……」

薄っすらと武人の目じりに浮いた涙に、使用人達は家宰への忠誠を新たにした。

隣室にレイング家の者達を押し込めて、無法者達は密談にふけていた。

カルとの交渉の際に持ち帰った多量の金貨。

そのあまりの多さに、誰の顔にも浮かれた雰囲気が漂っていた。深夜にも関わらず、窓にはやはり暗幕を張り巡らせている。蠟燭の明かりを照り返す金貨をもてあそび、目の据わった男が片頬を吊り上げた。

「どうだい、スカルディア家は中々のもんだろう?」

「まったくだ! まさかこんなにだすとはな」

喜悦に歪む無法者達は、金貨の質感を楽しむと隣室に誰ともなく視線を向ける。

「で、どうする?」

触れたくないものに触れてしまった時のような不快感が、彼らの顔に浮かぶ。

沈黙を持って目の据わった男を見返す彼ら。

他の無法者達をぐるりと見回して、その場の中心となる目の据わった男は、再び片頬を吊り上げた。

「こんな美味しい鴨をみすみす逃しちまってるのか?」

「ごくり、と誰かがつばを飲み込む音がした。

「それじゃ約束を反故にするのか?」

「なあに、もう少し金を積んでもらうだけさ」

にたりと、粘りつくような笑みを浮かべた男は金貨に視線を落とす。

「あの小僧からはもっともっと搾り出せる。出せるもんは、もらって損はねえだろう? 俺たちあ貧乏人だ。金持ちから多少もらったって損はあるめえよ」

「そうだろ? と視線を回せば全てのものがにやにやと嫌らしい笑みを浮かべて頷いていた。

「そうと決まれば善は急げだ。早速あの小僧に使いを出して、金額

を上乘せしようじゃねえか！」

「おお！」

興奮のために、声を抑えることができない無法者達の声は鬨の声に似ていた。

「悪いが、それは受け入れられない」

無法者達の熱気に水を指したのは、扉を蹴破る音と、落ち着いた口調だった。外の闇が部屋に入ってきたかのような漆黒のマントに身を包み、カルが扉の向こうに立っていた。彼の後ろに続くのは、騎士が一人と平民出身の衛士達の姿。

「貴様らには、ここで死んでもらう」

温度を感じさせない青色の瞳、憐憫すら与えそつにない凍てついた視線で、カルは無法者達を睥睨した。

「て、てめえ……どうしてここが！？」

カルから感じる威圧を跳ね除けようと無法者が声を荒げる。

「狩りを知っているか？ 獵師は、最初わざと狙った獲物に餌を投げ与え、獲物が巢に戻ったところを取り押さえるそつだ。実にわかりやすかつた」

感情を表さないカルの声に、馬鹿にされたと感じた無法者が打ちかかる。

「クソガキがつ！」

振ってくる刃の欠けた剣を難なく避けると、腰に佩いた剣を一閃。カルは深々と無法者の首を刺し貫いた。

「く、くそつ！ 人質をつ！」

隣室へ向かおうとした無法者が扉に手をかけようとした瞬間、その扉が勢いよく開いた。

「観念せよ」

突きつけられたのはクラフトの剣。

無表情に無法者を見下ろすクラフトの背後には、衛士に囲まれたレーング家の者達の姿が見える。

前後より挟み撃ちにされた無法者達は武器を投げ捨て、手を上げ

た。

「わかった。降参する……だから命だけは！」

「我、命を脅し商いにする者ゆるさじ……やれ！」

カルの側に控えていた騎士、そしてクラフトが無抵抗の無法者に向かって剣を振るう。肉に食い込む鉄の牙が、獲物の臓腑を切り裂く。湯気を出しながら垂れ流される血と臓物に、衛士の中には目をそむける者もいた。

だがカルは眉一つ動かさず、彼らが死ぬ様を見届ける。

泣き叫ぶ無法者に、止めを刺すと二人の騎士はカルの前に跪く。

「よくやった。後はレーンク家の者達を私の屋敷に……丁重に、な」

「御意！」

振り返り、衛士に向かってカルは声をかけた。

「事後の処置は任せる。後でスカルディア家からも届け物をさせよう……ご苦労だった」

「はっ」

頷く衛士の側をすり抜け、カルは外へ出る。

外の冷気が、僅かに上気した彼の頬をなでる。

「お前なら、決してこのようにはしないのだから……」

脳裏に思い浮かべるのは、白亜の騎士。慈悲すらもその強さの中に内包する彼女の悲しげな顔が、カルの心を責め苛む。

「罪あるものは、罰せられなければならぬ」

言い訳に聞こえてしまいそうな、その言葉でカルは心に蓋をした。

謀は、荒れ狂う嵐の元ではなく、平穏なる日常の中で行おうべきである。

陰謀の限りを尽くし、ロクサーヌを守り、そして支配してきたオウカはそう考えていた。ゆえに、その突発的な謀反に反応することができなかった。

「オウカ様、賊がつ！」

部屋に飛び込んできた使用人は、オウカと護衛の異人を目にするなり声を荒げた。部屋の窓から見下ろせば、屋敷を取り囲んだ賊が屋敷に火をかけようとしている。

秘密裏に手を組んだティザルとバトウ。

彼らの叛意はオウカにしてみればあまりにも、速すぎた。話し合った次の日には既にロクサーヌにあるオウカの邸宅が襲撃を受けていたのだ。

即席で集めた兵士を上手くラストウーヌの家宰がまとめあげ、発作的な行動を上手く補ったのも忘れてはいけない。

だが、それを置いても、ティザルとバトウの行動は早かった。

オウカにしてみれば、手懐けられると思っていた子犬がいきなり牙を剥いたようなものだ。

ロクサーヌの表に、裏に、常に情報の網を張り巡らせていたオウカにしてみれば、その周到さに足を掬われた形になる。

正確な情報を迅速に。

ティザルとバトウの動きを探らせていた最中に、彼らは突如としてオウカの屋敷を襲ったのだ。

「おのれっ！」

普段なら笑みを絶やさぬその表情に、憤怒の怒りを滾らせてオウカは眼下に広がる光景を睨み付けた。皺くちな顔の中から、燃え

滾る怒りの炎が彼の容貌を一変させる。

「このわしに牙を剥いたこと、必ず後悔させてくれるっ！ 生きてままだ皮を剥ぎ、その憎たらしい目玉を食らうてくれようぞ！」

手にした杖を床に打ちつけ、オウカは使用人に告げる。

「逃げる！ 抜け道の用意は！？」

鬼の形相そのままに振り向いたオウカに、使用人はおびえて声も出せずただ頷いた。そのまま歩み去るオウカに、恐る恐る使用人は口を開く。

「や、屋敷を守る使用人どもはいかがいたしましたしょう？」

「捨て置く！」

振り返りもせず、歩みを進める主人に再び使用人が口を開こうとした瞬間、彼の首は護衛の異人によって床に落ちていた。吹き上がる噴水のごとき血潮。それを眺めて、オウカは護衛を睨む。

「アズ」

「必要なかったか？ 翁」

額から頬にかけて傷のある護衛が、無表情で告げる。北方特有の民族衣装に、恐ろしいほどの長身。だがその身は鞭のようにしなやかな筋肉に包まれていた。全員に彫りこまれた刺青が、彼が異人であるとの証だった。

「いや、それでいい」

にやりと、口の端をゆがめたオウカは死んだ使用人に一瞥をくねると歩みを進める。

「愚か者め、他人になど気を取られるから死ぬことになるのだ」

炎が回り始めた屋敷の床を、荒々しく踏みしめ、抜け道を目指してオウカは歩いていった。

「アンネリー！ 無事だったか！」

「アンネリー！」

両親に抱きすくめられ、アンネリーは一瞬の戸惑うと同時にその温もりですべてを忘れた。

「お父さん、お母さん！」

彼女の後ろに控えるカルも、シュセもスカルディアの使用人たちの目も、何もかもを忘れて両親の腕の中に飛び込んでいった。

「よかった……本当に」

抱擁を味わう三人の姿に、カルは目配せして使用人と共に立ち去る。立ち去り際にシュセの肩を軽くたたく。軽く頷く会うシュセとカル。

思いが通じたことに安心して、カルはその場を後にした。

残ったのはシュセ一人。

抱き合う彼らの邪魔にならぬよう、距離をとって彼らを見守る。

「夢ではないのだな！？ また家族で会うことができるとは！」

アンネリーの父の言葉に、深く母は頷き涙で目を一杯にしながらアンネリーの額といわず髪といわずキスを降らせる。

その家族の光景をシュセは暖かく見守っていた。

もう、シュセにも、そしてカルにも手の届かなくなった家族の肖像。幼い日に亡くしてしまったその温もりを、その傷を埋めるため、シュセとカルは走ってきたのだ。

そしてこの先も走り続けなければならない。

未だ至高の座は遠く、立ちほだかる敵は多い。

だがそれを踏み越えて、主であるカルを守る為の力は確かにここにあるのだ。

右手に宿った刻印。呪いか、それとも神の恩寵か。

僅かに疼いたその刻印に、シュセは右腕を無意識に撫でていた。

「ヘリオン……」

シュセのいる部屋から出たカルは、廊下でヘリオンとすれ違う。

近頃のすれ違い、ヘリオンの考えが読めないカルは、なんと言葉をかけてよいかわからなかった。

「兄上と義姉上を救い出してくれたようだな」

元々感情を表に出すような男ではない。だが、そのあまりに淡々とした言葉にカルは言葉を失った。

「嬉しくないのか？ 家族が戻ったのだろうか？」

「礼を言わねばならぬ、とは思う」

戸惑うカルを突き放すような言葉。銀色の刃に似た瞳は、カルを容赦なく打ちのめす。

「貴様っ！ それでも……」

自ら手を汚した昨日がよみがえる。溢れかえる血潮、肉を切り裂いた手の感触。そして無抵抗の弱者を踏みじったという不快感。

「王たろうとするものが、感情を出しすぎるな」

カルのあふれ出す感情をヘリオンはたった一言でせき止めた。

「……王だと？」

湖水色の瞳に宿るのは激しい思いのたけを宿した炎。だが思考の冷静な部分が、なぜ王なのだと考える。確かにカルはこの地に強大な国家を築きたいと語ったことがある。

だが、王になりたいといった覚えなどはない。

シユセに語ったことはあったが、ヘリオンには言ったことはない。

“王”と言われてロクサーヌの貴族が最初に思い出すのは、兇王ヴェル。

シフォン家最後の王にして、血塗られた道を歩む男の名前だ。

「野心が透けて見えるようでは、先が思いやられるな」

「だったらどうだというのだ。謀反でも起こすか！？ ヘルシオ家に取り入って……」

ほとんど肯定したに等しい言葉。そしてヘルシオへの内通を示唆されても、ヘリオンは口元に微笑を浮かべるだけだった。

「……王への道は血塗られた道だ。謀略に首まで浸かり、自分の心を殺し続け、他人をだまし続けて歩む道。孤高を友とし、権力とい

「魔物を飼い慣らし、それでもなお輝きを失うことが許されぬ道だ」
力を増したような銀色の瞳が、その資質を見極めるようにカルに注がれる。

「それでも敢えてその道に踏み入れるなら、覚悟を決めよ。カル・スカルディア……矮小な家臣一人御せぬようで、どうして王が務まるのだ」

睨むカルに微笑を残し、ヘリオンは立ち去った。

家族のいる部屋には向かわず、自身の執務室へと向かう。

その背中を蒼の炎がも耐え滾るような視線で、カルは睨む。

「お前の主になりたくば、力を示し続けよ……そう言いたいのかヘリオン！」

氷のような理性と、炎のような激情を内に秘めカルは自身の部屋に向かう。

アンネリーの家族を見て温かな心など、すでに吹き飛んでしまっていた。

街に広がる戦の炎。

ジェルノ家の邸宅は燃え落ち、その別邸までも標的としたティザルとバトウの手勢は勢いを駆って、オウカに忠実であったフィクス・ミザークの屋敷までも襲う。屋敷に押しかけたティザルとバトウはフィクスに十貴族の会議の開催を提案した。

もちろん、剣を突きつけてだが。

オウカに忠実だったフィクスだが、すでにオウカのジェルノ家が焼け落ちたことは知っていた。逆らえば命はない、との脅しにフィクスは頷くことしか出来ない。

フィクスの邸宅に居座ったティザルとバトウは、率いて来た私兵達を二手に分けた。一方はもちろん彼らの護衛のため、もう片方はジェルノ家の派閥で中級にある貴族達の屋敷を襲わせたのだ。

ロクサーヌを實質支配していたオウカの下には数多い貴族が彼の庇護を受けるために、派閥を形成していた。その貴族の邸宅を略奪のために襲ったのだ。

もちろん、忠実なるラストゥーヌの家宰は反対した。軍勢を分散する危険を説いた彼だったが、最早オウカを討ち取ったと判断したテイザルとバトウは彼の進言を聞き入れもしない。

「どうも、そなたは臆病に過ぎるな」

「いや、まったくお恥ずかしい限りで」

嘲りの笑みを浮かべるテイザルに、バトウが追従する。悔しさをかみ締める家宰の意見は当然却下された。それどころか、指揮をはずされ、代わりに指揮を執ったのはケミリオ家の雇い入れた傭兵であつた。

被害にあつた貴族の家では財宝は奪われ、女は略奪された。

用済みの家々は放火され、風向きと相まってその被害はロクサーヌの東側に広がっていく。

既に彼らは略奪を旨とした盗賊の群れと言つて差し支えなかつた。その略奪は、自分の家々に被害が降り注ぐことを恐れた十貴族達が集まるまで続くことになつた。

ロクサー又十貴族。ティザルとバトウが力付くで招聘した彼らは往時の半数にまで数を減らしていた。

スカルディア、ヘルシオ、ジェルノ、ツラド……ロアヌキア開闢以来の名門貴族の家々は、その地位を追われ今現在彼らを率いるのは、ケミリオ家とラストゥー又家。

「それで、この度の招聘は一体何用かね、ティザル殿」

発言したのは、老年に差し掛かった十貴族の一人。ティザルとバトウに挟まれて顔を青くしているフィクス・ミザークを一瞥すると、傲慢な態度で彼らに臨む。

「それに、この度の争い。理由をお聞かせ願いたいものだ」

事態の深刻さを微塵も理解していないその態度に、ティザルが冷たく笑った。

「そう、この度お呼びしたのは他でもない。実はジェルノ家に共和制に対する謀叛の動きがありました。故に、性急なれど衛士の長たるバトウ殿と私とで――」

「何を馬鹿な！ 反乱は貴様等ではないか！」

ティザルの言葉を遮って声を荒げたのは、先ほどの老人だった。

ジェルノ家のオウカ亡き後の会議の主導権を、奪い返そうと声を上げたのだ。

その声に反応したかのように突如として、扉が開かれ私兵達が乱入して来る。手に手に武器を持って、会議の出席者達に突き付けた。「衛士の長たる俺を信用せぬか」

肥えた体を揺すり、低い声で脅しをかけるバトウ。その瞳に宿るのは凶暴な本性を隠そうともしない、鈍い光。

「貴様っ！ 礼儀を弁えぬか！ わしは栄光ある――」

老人の言葉をティザルは最後まで言わせなかった。一度目配せす

ると、周囲の兵士達が老人の腕を掴み、強引に椅子から立たせる。

「な、なにを！」

「連れて行け」

バトウの声に、兵士達は喚き散らす老人を引きずり部屋から出て行く。

「やめろ！ 貴様等」

扉の閉まる音がしてから、しばらくして、老人の悲鳴が沈黙の支配する部屋に聞こえた。

「さて、会議の進行を妨害する輩は消えました」

口の端に嘲笑を浮かべたティザルが言葉を発すると、その場の空気は尚いっそう硬くなったようだった。

「話を戻しましょう。この度ジェルノ家オウカの国家反逆罪……一族の死をもってしか贖えない彼らの罪を、遅ればせながら議題にかけたいと思います。無論私は有罪の票を入れたいと思います」

口を閉じて下を向く、他の貴族達を見下ろすティザル。

「わ、私も賛成だ」

隣に居るバトウに小突かれながら口を開いたのは、フィクス・ミザーク。それを皮切りに、次々と他の貴族達の賛成を得て、ティザルとバトウは声もなく笑った。

「では、次の議題の提案をさせていただきます。次は」

そのようにして、十貴族の会議はバトウとティザルに牛耳られた背後で糸を引く、ウエンデイは得意満面のティザルからその様子を逐一聞くことが出来たのだった。

「なんだと!？」

その知らせを聞いて、目を剥いたのは今まで敢えて私兵を使わなかったカルだった。

「愚かなっ……この国を滅ぼすつもりか!？」

戦後間もないロクサー又に、みすみす他国からの干渉を受ける隙を作り出すテイザルとバトウの愚行。ロクサー又各地に張り巡らせた情報網にも関わらず、それを全く察知できなかった自身の不甲斐無さに彼は机をたたきつけた。

更に報告を聞けば、街中ではラストウー又とケミリオの私兵達が群盗の如き振る舞いをしているという。

一戦してこれを破るか、それともまだ……。

「カル様！」

戦装束に身を固めたシュセがカルの執務室に駆け込んできたのはそのときだった。

「私兵を使う許可をください。ロクサー又の至る所で火の手が挙がっています。このままでは、市民達にも被害が……」

「分かっているっ……少し時間をくれ！」

カルにもそれはわかっていて。手を拱いていては、ロクサー又事態が灰燼と化す恐れさえもある。だが戦えば更に大きな被害をもたらすことになるだろう。十貴族の全てを敵に回して勝てるほどに、スカルディア家の勢力は大きくない。

更に言えば、内政に干渉をしてくるであろう自由都市郡。東都ガドリア、西都ヴェルガンデイの根回しも必要だ。その中でも、自由都市郡のポーレは距離的にも近い上に先の戦で補給に回っていたため大きな被害を受けていない。

ロクサー又が混乱をしていると知れば、干渉に動くのは間違いないかった。

何もかもが足りない。

その現状に齒を噛み締めているカル。シュセは自身の中の焦燥とカルの葛藤に身をもがれる思いだった。

「あの……私でお役に立てることなら……」

自身のことには必死になっていた二人に声をかけたのは、アンネリーだった。開けっ放しになっていた扉から声が聞こえたのだろう。

「アンネリー申し出は嬉しいけれど……」

困ったように柳眉をひそめるシュセを、カルの声が遮った。

「いや、働いてもらおう」

「カル様！」

「今は一人でも多くの、信頼できる者が必要だ」

非難の籠ったシュセの声にも、カルは動じなかった。瞳に宿るのは決意を固めた者の硬質な光。

「シュセ、アンネリーと共にポーレに向ってくれ。現地でエルシドと合流、もしポーレが軍を動かすようなことがあれば、そのときは妨害を頼む」

「ですがっ！」

「シュセ、頼む……私にはこれしか思い浮かばない。エルシドと合流で着次第シュセはこちらに戻ってくれ。アンネリーには今後私とエルシドとの連絡を頼む」

湖水色の青い瞳に宿る動かし難い決意に、シュセは唇を噛み締めた。

「ロクサーヌ市内の群盗どもは、私が兵を率いて駆逐する……クラフトを呼べ！」

扉の外に控える侍従に声をかけて、近衛の騎士の一人を呼びつける。

「さあ、シュセ、アンネリーあまり時間は無い。時間が経てば群盗がこちらにも押し寄せてこよう。急ぎ支度をしてポーレへ向ってくれ」

彼女らを急かして退出させると、スカルディア家の騎士であるクラフトが入ってくるのとは同時だった。

「クラフト、私兵を集めよ。群盗を駆逐する」

スカルディア家の騎士とは、平時においては当主の身边を警護し、戦時にあつては私兵を指揮する中級指揮官の事を指していた。

「はっ」

短く返事をしたクラフトが、扉の向こうに消えると、更に侍従を呼ぶ。

「……ヘリオンはどうしている？」

この問いだけは、明晰とは程遠い迷いの中で彼は侍従に問いかける。

「本日は非番のため、出勤しておられません。必要ならば官舎まで人を走らせませんが……」

「いや、それならば構わぬ」

自身でも言い知れぬ不安と安堵。胸の中にわだかまる黒いもやのようなものを、息と同時に深く吐き出すと、カルは侍従に命じた。

「市内の動向に目を光らせよ。群盗どもと火の手の状況を逐一知らせろ！」

慌しく駆けて行く侍従を見送ると、カルは戦装束に着替えるべくその部屋を出た。

「随分と派手にやっているわね」

「そのようです、あまり褒められたことではないですが」

窓の外に見える火の手に、ウエンディは微笑み、ヘリオンは眉間に皺を寄せた。

「殿方はどうしてこう戦が好きなのかしら？」

「さて、私のように非力な者には分かりかねますが、あるいは好きな女性に認められたいからかもしれません」

「そう仕向けさせたのは、貴方でしょうに……」

艶然と微笑む視線の先、畏まったままの姿勢でヘリオンは無言のまま頭を垂れた。

「さて、献策を聞きましょう。あの坊やの出方はいかが？」

「カル・スカルディアは自身兵を率いて、ケミリオ・ラストウー又家の私兵を殲滅する様子……勇敢な判断と言わざるを得ません」

至極なんでもないことのように、言うヘリオンだったがその実彼が言っていることは内戦だった。

「ふふふっ……怖いわね。でもあの坊やの苦渋に満ちた顔、間近で見たらどんなにか愉しいでしょう」

「そこで、ウエンディ様にはティザル様に働きかけていただきとう存じます」

一呼吸おいてヘリオンは言葉を吐いた。

「恐らくカル・スカルディアは、負けるでしょう。よしんば勝つとしても、その勢力は大きく殺がれるはず……その時点でティザル様、バトウ様が手を下される前にお止めいただきたい」

「坊やは引くかしら？」

「引かせて見せましょう、その代わりと言っては何ですが、餌をご用意くださいますよう」

「何かしら？」

手品を楽しみにする子供のようない無邪気な微笑み。ウエンディの表情に浮かぶ、その笑顔を受け流し、ヘリオンは無表情を通した。

「十貴族の会議への参加資格。もちろん、ヘルシオ家の代表としてアクサス様にも、同様の権利をお渡し願うよう進言いたします」

「カル・スカルディアを囮に、ヘルシオ家の復権を図れと言っのね？」

「御意」

いつそう深く垂れるヘリオンの頭を上から見下ろしながら、ウエンディは蛇のような笑みを浮かべる。

「頼もしいわね“軍師殿”」

「お言葉にしみて、ありがたき幸せ」

窓の外に上がる火の手が、また一つ増えていた。

謀略の使徒 17

ラストウーヌ・ケミリオの私兵達は群盗ののような振る舞いを続けながら、ロクサーヌ市内を東から西へと移動しつつあった。

その先端が、大貴族であるスカルディア家の前に差し掛かる。

固く閉まった門扉。名のある芸術家に依頼して細工を施したその門には、スカルディアの紋章である“双つの蛇槍”が彫り込まれている。庭師が精魂の限りを尽くして整えた広い庭園。奥に佇むのは、この国創立以来の歴史を刻む邸宅だった。その屋敷の壮観に、今まで略奪を働いていた私兵達も僅かばかり戸惑う。

元々私兵とは、平民出身の者が多い。各々の貴族の領地、その領民の中で武に秀でた者をより集め組織される者達だった。彼らにとって大貴族などと言うのは雲の上の存在。

ましてや、スカルディアと言う名門中の名門貴族ともなれば、顔を見るのも憚られる存在だった。

だが、ケミリオ家の雇った傭兵隊長は違ったらしい。

私兵たちが戸惑うのを見た彼は、自身の部下を先頭に立たせてスカルディアの門扉に、攻め入らせた。音を立てて倒れる“双つの蛇槍”に、喚声上がる。

「何を恐れるっ！ スカルディアなど、父親殺しの盗人ではないかっ！」

傭兵隊長の声に、今まで戸惑いを見せていた私兵達も我先にとスカルディアの邸宅を目指す。戸惑いを捨てれば、彼らの目に映るのはスカルディア家にあるであろう財宝の山だった。

「取った者勝ちだぞ！ 手柄を逃すな！」

名門貴族に対する畏れを払拭させるため、傭兵隊長は私兵達の欲望を煽り立てる。

我先にとスカルディアの庭園に雪崩れ込む私兵達に、傭兵隊長は野卑な笑みを浮かべるのだった。

「これで、わしも貴族の仲間入りだ」

この仕事のティザルからの報酬。その先にあるはずの輝ける日々を思い、僅かにスカルディア家から目をそらした。

途端に、喚声が響き渡る。

戦場で使われるはずの角笛の音。続いて鳴らされる出陣の銅鑼に、傭兵隊長の笑みが凍りつく。

「あ、あれは!？」

部下の指差す方向を見ればスカルディアの邸宅の屋上に掲げられている、紋章旗“双つの蛇槍”。

先ほど打ち倒したはずのそれが風を受けて靡き、スカルディアの邸宅の方から悲鳴とも絶叫ともつかない叫び声に目を向ければ、豪華に設えられた玄関から、完全武装の騎士達が先を争って私兵たちに雪崩れ込んでいた。

欲に目を奪われて烏合の衆となった彼らに、精強をもって鳴るスカルディア私兵が決死の覚悟で突撃したのだ。先頭に立つのは、漆黒の鎧に身を固め、自身の槍を縦横無尽に振るうカル・スカルディア。白く透き通った肌に返り血を浴び、長い金色の髪を靡かせて尚、その姿は精悍さを失わない。

家臣を鼓舞するために、敢えてフルフェイスのヘルムを避け自身の顔を晒す彼に、騎士、そして私兵達が一丸となって付き従う。

少数とはいえ、纏まった彼らにラストウーヌ・ケミリオの私兵達は羊を刈るより容易く蹂躪されていく。

「くそつ、ここまで来て！ 持ち直せ！ 数はこちらの方が多いのだ！」

叫ぶ傭兵隊長の声にも、一度混乱を極めた私兵達を立て直すのは至難といえた。あまりにも性急に仕立てられた軍である。ケミリオ家、ラストウーヌ家、さらにはケミリオ家の雇った傭兵までも加えた軍は攻めているときは数の優位を保てても、守勢に回った途端その脆さを露呈してしまった。

その混乱の中を、指揮官である傭兵隊長目指して、カル率いるス

カルディア私兵が無人の野を行くが如き勢いで突き進む。

「進めっ！ 群盗共に、スカルディア家の門を踏みにじった報いを受けさせる！」

先頭を進むカルが槍を掲げて声を上げれば、従う私兵達は炎のようになつて敵を斬る。

「ひ、引け！」

破竹の勢いに、傭兵隊長は慄いた。瞬時に彼は悟らざるを得なかつた。

負ける、と。

それから彼の行動早かつた。戦う部下も、私兵達も置き去りにしての逃走である。傭兵は金で雇われて働く。金と命、どちらを取るかと言われれば答えを聞くまでも無かつた。

逃走を図る傭兵隊長を、敢えてカルは深追いしなかつた。敵の指揮官が逃げるのを見届けるや、カルは直ちに反転しラストウーヌ・ケミリオの私兵の殲滅に向う。

指揮官に見捨てられた彼ら、その最後の一兵までをもカルは駆逐した。

西日が差し込む室内において、その怒声は部屋に差し込む光さえも震わせた。

「なんだと！？ スカルディア家に向つた手勢が壊滅？」

声を荒げたのはバトウ。立ち上がると同時に、拳をテーブルに叩きつける。

一瞬視線を転じてティザルを見つめるが、すぐさま知らせに来た部下に檄を飛ばす。

「衛士を出動させる！ 全員だ。指揮は、家宰に取らせよ」

音を立てて座れば椅子が悲鳴にも似た、軋みを上げる。

「全く……役に立たん連中だ！」

腕を組んで憤慨するバトウは、不機嫌そのままに会議に参加して

いる十貴族を睨み付けた。

「ふむ……皆様、これは由々しき事態です。スカルディア家討伐のためにご協力いただけませんか？」

ティザルの提案の形を取った脅迫に、彼らは頷くしかなかった。

スカルディア家を討て！

その命を受けた衛士達の反応ははつきりと、二色に分離された。

元々十貴族派だった衛士達は自らの出番が回ってきたと勇み立ち、平民出身の衛士とスカルディア派だった衛士達ははつきりと拒絶に回った。

平民衛士達は、従軍の拒否を上司に突き付け官舎から脱走する者が後を絶たない。脱走と言っても、一人二人ではない。十人や二十人単位で抜け出ていくのだから、離反と言った方が良かったのかもしれない。

スカルディア派の衛士達はもう少し大人しかった。仮病を使いほとんど全員が官舎に引きこもってしまったのだ。

だがそれらを抜かしても、衛士の数はカルにとって脅威に変わりはない。残りの十貴族派の衛士達はその足で、十貴族派に合流したのだった。

群盗の如き振る舞いを続けたラストウーヌ・ケミリオの私兵達を、完膚なきまでに叩き潰した後、カルは軍を街の消火に向わせた。

向ったのは街の南東。平民区の方だ。

貴族の邸宅はまだ良い。整理された区画、広い道路に囲まれているため火事の延焼はおきにくいのだ。だが平民区は違った。雑多に立ち並ぶ家々は、いったん火がついてしまえば留まる所を知らずに炎の手が燃え広がってしまうだろう。

曲がりくねり、狭い道幅が迷路のように入り組んでる。スプツラアパート住宅が軒を連ね、木造の家々は炎に舐められてしまえば一溜りも無いだろう。

返り血を浴びたままの壮絶な格好で、カルとスカルディアの私兵達は市内の南東に向う。ラストウーヌ・ケミリオの私兵達が荒らした惨状に眉をひそめつつ、道のりを急いだ。

中央広場に差し掛かったとき、カルの軍勢の前に立ちふさがるものがあつた。衛士の官舎を脱走してきた平民出身の衛士達。そのうちの少なくない数がカルの群への協力を申し出たのだ。

代表の男がカルの前に通され、その旨を伝えるとカルは感謝はするといいながらも首を横に振った。

「この戦よりも、君達には大切なものがあるはずだ」
常には冷たい光を湛える事の多い湖水色の瞳。それに温かなものを宿らせてカルは衛士を諭した。彼らには、町の消火活動を依頼し、自らはラストウーヌ・ケミリオの軍勢と雌雄を決するため、進路を変更した。

カルとて、戦力がほしくないわけではない。ラストウーヌ・ケミリオの私兵の半分を破つたといえ彼の前には更に十貴族派の衛士を加えた連合軍が待ち受けている。その戦力差は絶望的なものと言ってもいい。

指揮を執るのは武名も高きラストウーヌの家宰。条件を数え上げれば数え上げるほど、彼の不利は確かになっていくようだった。

だが、それでもカルは平民出身の衛士達を軍勢に加えるつもりはなかった。軍事的な面から見れば、指揮系統の乱れがある。もともと戦を前提に訓練を受けたスカルディア私兵と、治安維持を目的とした衛士ではやはりできることが違ってくるのだ。

もう一つ理由を挙げるとするなら彼の貴族としての矜持の高さがあつた。

カル・スカルディアはロアヌキア発祥以前からの、名門中の名門に生を受けた。その彼が、民を守り導くべき貴族が民を戦に巻き込

むなど、貴族としての彼の矜持が許さなかった。

細き手に剣を握り、身を白刃の合い間に躍らせる白き騎士の姿。

もつとも身近にあつて彼を教え導いてきた、彼女。

今は離れ離れになつてゐるはずのその姿が、衛士を戦に加わらせることを彼に拒ませた。

「一戦してこれを破る。それしかあるまい」

一度は主人の勘気に触れ、その職を解かれたラストウー又の家宰は、連合軍の首脳を集めて自らの考えを述べていた。十貴族の各家の私兵を預かる騎士、家宰、十貴族派の衛士の代表、そしてケミリオ家が急増で抱え込んだ傭兵。

それらの顔を正面から睨むように、見渡すとラストウー又の家宰は策を示した。

「現在、斥候によればスカルディア私兵はロクサー又の東から北上中だということだ」

机の上にロクサー又の市街地の地図を広げると、短剣をスカルディア家の位置に突き立てる。

「故に我らは、ここ……東北の大通りクエスブ通りで彼らを迎え撃つ！」

もう一つの短剣が突きたてられたのは、町の北東ではもつとも大きな通りの中ほどだった。ロクサー又北東を走る主要な道路のうち、最も大きなクエスブ通り。その通りに面して、ケミリオ家の屋敷、次いでラストウー又家の屋敷がある。

「敵は勢いに乗っている。だが、この広い大通り……数に勝る我らに敗北はない」

ラストウー又の家宰の言葉に意気を上げる連合軍。どの顔にも、敗北などまったく考えていない。狩りを楽しむかのような余裕すら漂わせて彼らは解散した。

彼らを解散させた後、一人ラストウー又の家宰のみが眉間に皺を

刻み短剣の突き立った地図を凝視する。あるいはその視線は、地図ではなく未だ見ぬ若き敵を見据えていたのかもしれない。

「いかがなさいました？ 家宰さま」

声をかけたのはラストウー又家の若い使用人。手に持った紅茶を彼に差し出すため訪れたところだった。

「皆さんこの戦は楽勝だと仰っていましたよ。さすが家宰さまだとも」

無邪気に笑う少年に、微笑んで老人は苦く笑った。

「そう、簡単なものでもなかるう。敵……カル殿はこちらの弱みを正確にご存知でいらっしゃる」

目を見開いて驚いた後、考え込む少年に老人は教え諭す。

「敵は文字通り捨て身で挑んでくるだろう。その証拠にスカルディア家を空にしてきている……そのような相手をまともに相手にするのは危険極まりない」

「では、なぜ……？」

問いかけた少年は、何かに気づいてハツとした。スカルディア私兵が、このままクエスブ通りを北上すれば、ケミリオ家の屋敷と慣れ親しんだラストウー又家の屋敷がある。

「そういうことだ。お屋形さまは邸宅を捨てる決心がつかなんだ」

深い苦悩の色を刻んだ老人の顔が、悲痛に歪む。捨て身でぶつかってくるスカルディア私兵。精強の名をほしいままにする彼らの前に、正面から立ち塞がらねばならない。

いかに数が多かるうとも、一度火のついた勢いは容易に消しがたいものだ。先ほど連合軍の首脳には勝てるかと説明したが、ラストウー又の家宰自身、勝率は五分五分だと見ている。

「町を焼きながら、自身の邸宅を焼くのを躊躇うとはな」

主人の小ささを嘆く老人に、少年は不安を口にした。

「大丈夫なのですよね？ それでも家宰さまがいらっしゃれば、ラストウー又は負けませんよね？」

泣きそうな少年の頭に、節くれた、だが暖かな老人の手が置かれ

る。

「今まで私が負けたことがあったかね？　いかに相手が精強なるスカルディアであろうとも、我らラストウー又家は、初代様から脈々と受け継いできた武門の血がある。決して遅れはとるまいよ」

　温和な笑顔を顔に浮かべて、老人は少年をなだめる。

「さあ、もう行きなさい。少年が戦場に居ては危険だからな」

はい、と返事をして少年を下がらせるとラストウー又家宰は小さく呟いた。

「必ず勝ってみせる。我が命掛けることになるうとも」

老いて尚猛る獅子は、愛用の長剣を手にとってカルの前に立ち塞がった。

謀略の使徒18（前書き）

冒頭から多少グロイ表現があります。気になる人は、心の準備をしてからお願いします。ついでに、いつもより多少長めでございます。

振るつた槍の穂先が鎧の隙間を貫く。肉を貫く感触とともに、肉の隙間から溢れ出る赤い血。ワインにも似た赤黒い液体が、一瞬だけ勢いよく噴出し、そしてドロリと流れ出る。

「ぐうああ……」

意味を成さない音が、私兵の口から漏れる。喉を貫いた穂先をそのまま横に振りぬき、傭兵が振り上げた腕ごと切断した。

「……ああああ!!」

薄皮一枚を残して、私兵の首は転げ落ちた。一拍の余韻をもつて腕を失った傭兵は絶叫とともにうずくまる。その傭兵を蹴り飛ばし、石畳の上を転げ、泣き叫ぶその傭兵の顔を鉄靴で思い切り踏み抜いた。

ぐちゃりと、踏み潰される肉の音。

わずか痙攣した後、弛緩した肉の塊は動きを止めた。それを一瞥している間に、次の敵が眼前に迫っていた。

短い気合とともに、右に振りぬいた槍を手元に戻す。三叉に別れた穂先が、血糊を振るい落としながら手元に戻る。敵の振り下ろした剣を押し込み、一気に胴体に食い込む。

肉に食い込む鋭利な穂先。磨きぬかれた銀色の切っ先が、傷口を抉り、腸を食いちぎり血と共にそれを外気のなかに引きずり出した。崩れ落ちる前にさらに一撃。腸の残骸を振り落とすために、喉首を一閃。盛大に噴出した血潮、穂先の残骸は振るつた拍子に路端に打ち捨てられていた。

白磁の頬にかかる返り血を、不快げに拭ってカルは槍を落ちた首につきたてた。

右腕に宿る刻印から際限なく湧き出る力。ともすれば脳を焼き、

思考すらも許されなくなるような力の奔流を感じる。力は洪水のように全てを押し流す快樂の波だった。

火山から次々と湧き出る溶岩に似た熱い力。体の隅々まで行き渡る力に、カルは自身でも意識せずに薄く笑った。

「続けっ！ 賊を討ち滅ぼすぞ！」

高々と掲げられる槍の穂先に、先ほど討ち取った傭兵の首を掲げ、カル・スカルディアは敵陣を駆ける。

「三の陣、止められませんか！」

悲鳴にも似た伝令の声に、ラストウーヌの家宰は苦く眉間に皺を刻む。

「ここまで強いか、スカルディアは！」

天を仰いで短い嘆息をもらす。

ロクサーヌの北東の大動脈、クエスブ通り。支道を二つ伴ったその大通りで、スカルディア家を誘い込み、数の有利を持って殲滅する。

家宰の絵図通り、スカルディア家はその通りを猪のような勢いで猛進する。その前に罾を張り、立ちふさがったラストウーヌ家宰率いる十貴族軍。スカルディア家の100人程度の兵力に対して、実に5倍。五百近い数を集めてこれを迎え撃った。

道幅目いっぱい広がった四重の防御陣。余った人数は支道に配し、後方から襲い掛かるよう手はずを整えた。

防御に比重を置いた重厚なる陣形。だがその陣が既に三陣までも破られている。

理由はスカルディアの先陣の強力さだった。

当主カル・スカルディアその人を先頭に怒涛の勢いを持って進軍してくるスカルディア私兵達。固めに固めた防御の陣が、薄紙を裂くように切り裂かれていく。

疾風のごとき勢いに、支道に配した手勢を戦線に投入するも、後

るから追いつくはずの彼らですら、スカルディア私兵に追いつけないで居る。

眉間に刻まれた皺そのままに、ラストウーヌの家宰は一度後ろを振り返った。その先にあるのは、ラストウーヌ、そしてケミリオの邸宅だ。もしもの時のために、下がらせておいた非戦闘員達。彼らの姿を思い浮かべ、奥歯をかみ締める。

彼の命令ではないとしても、街を焼いたラストウーヌ・ケミリオ連合軍。スカルディア私兵はそれらの邸宅をどうするかなど、火を見るより明らかだった。

年端もいかぬ子供や戦えない女たち。

彼らを守ることこそ、武人の誉れと信じて家宰は剣を磨いてきたのだ。

「止めねばならぬ。なんととしても……」

搾り出すような家宰の言葉とともに、眼前の三陣が破れ、スカルディアの先陣が見えた。漆黒の鎧をまとい、手には三叉の大槍を振りかざす少年。ロクサー又随一の美貌と話題に上る顔かんはせには返り血を浴び、薄い笑みを浮かべている。

壮絶なまでに美しいその姿に、周囲は息を呑む。

血を浴びた堕天使を連想させるカルを、家宰は睨み付けた。

周囲に控えるのは、家宰自ら鍛えたラストウーヌの精鋭達。ラス

トウーヌ武門の血を受け継ぐ雄雄しき若人達わらわだ。

「臆するな！ 我らラストウーヌ！ 武門の血を受け継ぐものぞ！」
雄たけびに似た家宰の声に、周囲の若者達は、改めて家宰を見る。その眼には宿るのは、強き意思の光。その一つ一つを確認するように見渡すと、家宰は長剣をカルに向けて掲げた。

「いざ！」

周囲から沸き起こる鬨の声と共に、ラストウーヌ家の精鋭とスカルディア私兵がぶつかった。

背筋を凍らす剛直なる剣筋。一閃されるごとに、岩をも砕くような一撃がカルめがけて降り注ぐ。ラストウー又家宰の剣さばきは、百戦を経て到達したと思えるほどに練られていた。

振り下ろされる長剣に、体重の全てを乗せる重い一撃。鎧ごと相手を叩き潰す一撃がカルの鎧をかすめていく。

対するカルの槍捌きも尋常なものではない。

有り余る天稟。そして不断の努力の上に積み上げられてきた代物だ。

家宰の剣が剛とするなら、カルの槍は柔。柔らかな槍捌きは、津波のように押し寄せる家宰の一撃を軽やかに避け、時折反撃に移る。鎧をまもっていないかのような軽やかな足運びから、空気を切り裂いて三叉の大槍が繰り出される。

向かってくる三叉の槍を、下から救い上げるように弾くと、一歩踏み出してカルの頭上に振り下ろす。カルは弾かれると同時に後ろにステップを踏む。豪華な金髪を数本絡め取って間近を通り過ぎる長剣が石畳に達しようかとした瞬間、弧を描いて長剣がカルの喉元に喰らい付いてくる。

鎧の隙間、白磁のように白い喉首に長剣が食い込もうとした刹那、その長剣は弾かれ頭上にあつた三叉の大槍の石突きに弾かれた。

しかもただ弾くだけではない。石突きで弾いた勢いを利用して、家宰の長剣を絡め取るうと、わずかなひねりを加える。

あと少し長剣を引くタイミングが遅ければ、家宰は獲物を奪われていただろう。開いた距離に、再び穂先を下段にし、構えるカル。家宰も己の長剣を構えなおした。

槍と剣との戦いは結局のところ間合いの戦いだ。

懐に入り込まれば、剣が有利。懐に入らせなければ槍が有利。極めて単純な構図の中に、人の武術と技の全てが詰まっているといつても良い。

カルは間合いを遠く取り、刺し貫く構えをとる。対する家宰はそ

の槍を掻い潜り、カルの間合いの内、懐の中で剣を振りたい。いかにカル为天稟が凄まじいとはいえ、三叉の大槍で長剣の間合いで戦うとなれば負けるのは当然といえた。

何しろ相手はラストウーヌの武門を一手に背負う男だ。その気迫、剣筋、並みの使い手の比ではない。

そして二人が対峙するのは、その間合いの境界線。後一步進めば、カルは自身の懐に飛び込まれるのを覚悟せねばならない地点にまで追い詰められている。

際限なく湧き出す力、体から溢れ出るその力は依然変わらず彼を満たし続ける。だが、それを上回ってなお、目の前に居る敵の気迫と業は凄まじい。

「どいてもらおう!」

対峙した瞬間から激烈な打ち込みを続ける二人だが、決定的に有利な点が家宰にはある。

言葉と同時にカルが動く。

下段から体の中心を狙った刺突。限界に近い速度で繰り出される一撃は、だが家宰の剛剣に叩き落される。

「甘いつ!」

気合一閃。

踏み込む一步は、石畳を割るのかと言うほどに強く早い。カルの槍を叩き落した長剣が、最短の距離をとってカルのわき腹を狙う。

「くっ……!」

今まで執拗に狙われていた喉から一転、喉を狙うと見せかけた剣先は鎧の隙間に入り込む。右のわき腹を狙った一撃にカルは体を捻って回避に専念する。繰り出した槍を手元に戻し、長剣を避けるように体をそらし、なんとか剣の軌道から己の体を守る。

「もらった!」

だがその隙を、ラストウーヌの家宰が見逃すはずもない。

好機とばかりに、剣を手元に引き寄せカルの命を奪おうと一息に振りかぶり、振り下ろそうとする一瞬。

「うおおおおおー!!」

雄たけびと共に、唸りを上げて体を捻ったカルの三叉の大槍が逆袈裟から襲い掛かった。

カルは体を捻り、体勢を崩したように見せかけて相手に背を向け、勢いを殺さぬままに体を回転させたのだ。体と同時に大槍を振りぬく。

下段からの強襲に、咄嗟に家宰は前に踏み出した。長剣を盾に、自身体を浮かせて少しでも衝撃を緩和しようする。

丸太でもぶつかつたかのような衝撃と共に、家宰は石畳の上に放り出された。盾にした長剣は衝突した場所から砕け散り、脇腹には鋭い痛みが走っている。

咄嗟に視線を転ずれば、軽い出血がある。

「くっ……」

この程度で済んだなら僥倖というべきだろう。死を覚悟した一撃だった。折れた剣を杖に立ち上がるうとした家宰の目の前に、三叉の大槍が突きつけられた。

「勝負あつたな」

見上げる先には、肩で息をしている勝利者の姿。

「さて、どうかな」

不敵に微笑む家宰に、止めを刺そうと大槍を振りかぶる。

そのとき、スカルディア私兵の後方で喚声が沸き起こった。

一瞬、気がそれるカル。

「まさかっ……」

最も恐れていた事態。数の差を活かした包囲の危機に、カル自身ようやく思い至った。

「この勝負、我らが勝ちぞ！」

間近で聞こえた声に、カルは咄嗟に後方に体をそらし、首を捻る。だがその肩口、鎧と鎧の隙間を縫って折れた長剣が食い込んだ。

「うっ……」

短く苦悶の声をもらしたカルは、傷口を押さえ槍を片手で握りな

おす。既に周囲では、後方からの喚声に不安のよぎるスカルディア私兵。そして対称的に勢いを取り戻すラストゥー又私兵。

「おのれっ！」

憤怒の力をもって槍を構えれば、家宰も折れた剣をそのままに、構えを取る。家宰の後方からは勢いを取り戻したラストゥー又家の精鋭達が怒涛の勢いをもって、スカルディア私兵に襲い掛かって来ていた。

「殿下っ！」

その対峙を終わらせたのは、カルの後方から駆けてきたクラフトの姿だった。

「お引きを！ 後続が追いつかれました。このままでは包囲されます！」

普段冷静沈着を旨とするこの男には珍しく、顔を紅潮させ興奮のままに捲くし立てる。

「……退路は前にあるっ！ 続けクラフト！」

尚、眼前の敵との戦いを望むカルに、忠実なる騎士はその返り血に濡れた鎧を掴んだ。

「なりません！ 今は御命が何よりも大事！ ここはわれらが引き受けます！」

言うなり、続いてきた私兵に命じてカルを拘束する。

「何をするっ!?!」

私兵三人がかりでカルを押さえ込み、支道へ続くわき道に向けて走らせる。

「生き延びてください！ 貴方こそが我らが希望！ カル・スカルディアこそが、われらが主！ 平民と貴族の垣根を越える」
「続く言葉は押し寄せる敵の怒声にかき消された。」

「クラフト！」

叫び伸ばした手は虚空を掴む。

「殿下、お急ぎを！」

戦場に駆け戻らないように私兵に両脇を抱えられたカルは、碎け

るほどに奥歯をかみ締めた。

「私は負けぬぞ！」

引きずられるようにして、わき道を走るカルは蒼き天に向かって
吼えた。

手傷を負ったカルは、両軍がぶつかったクエスブ通りから南へ逃れた。ロクサーヌ市内にいくつか所有しているスカルディア家の別邸。そこを仮の陣として残った家臣と共に逃れた。

平民街と貴族街を分ける中央広場、それに程近い別邸には先のぶつかり合いの後生き残った私兵が僅かながらも集まってきていた。

カルが自身の身の危険を顧みずに、別邸の尖塔にスカルディアの紋章を掲げたからだ。遠くからでも見渡せるように巨大な旗に描かれた双つの蛇槍の旗は、黒煙たなびくロクサーヌの空に翻っていた。「それで、幾人生き残った？」

「……残念ながら、戦えるものは30程度かと」

肩の傷口に包帯を任せながら、傳かしくく騎士に問いただす。

クラフトは戻ってこなかった。

「そうか……」

既に陽は落ちようとしている。玄関にはかがり火が焚かれ、戦支度も物々しい。

「僭越ながら……殿下、いつそのことロクサーヌを一時離れてはいかがでしょうか？」

領地に帰れば、スカルディアの私兵は未だに健在だった。

それを踏まえての騎士の発言にカルは首を振った。

「確かに、上手くスカルディアの領地に戻り兵を連れて来ればあるいは、ロクサーヌを制圧できるかもしれん。だが、それでは再びこの街を焼くことになる」

苦いものを飲み下すようにカルは口元を引き結ぶ。

「はっ……」

納得がいかないのだろう。騎士は俯くと視線を落とした。

「では、」

「申し上げます！」

騎士が再び口を開こうとした時、その声をさえぎって私兵が慌てて部屋に飛び込んでくる。

「何事かっ!？」

騎士の誰何に、私兵は一瞬直立不動になり、そしてカルと騎士を見比べて慌てて口を開いた。

「ヘリオン様がいらっしやっております！」

「ヘリオンが？」

疑問を口にするカル。

「ヘリオン殿がいらっしやって何を慌てる！ スカルディアの推官ともあるう方を知らぬわけではあるまい！」

騎士の詰問交じりの声に、私兵は声を荒げた。

「ヘリオン殿が、和睦の軍使としていらっしやったのです！」

「なにっ!？」

怒鳴り声を上げる騎士と、僅かに眼を見開いたカル。

「それはどういうことだ!？ なぜあの方が！」

「わかりません！ わかりませんが本人がそう名乗られて！」

私兵と騎士の言い争いに、終止符を打ったのはカルの静かな一言だった。

「通せ」

ただ一言。その奥にある怒りを表に出さないように勤めて、静かにカルは声を発した。

言い争いをしてきた騎士と私兵はその一言に、ハツとする。

恐ろしく静かな声音に、どれほどの怒りを押し殺しているのか、僅かに身震いして彼らは揃って頭を垂れた。

豪華に設えられた椅子に座り、傷口には真新しい包帯を巻く。上半身は治療のために一糸もまとわぬ姿。鞭のように引き締まったそ

の体躯の上から、豪華な長外套を羽織っているだけの姿でカルはヘリオンと対峙した。

「何のようだ？」

静かな声音には恐ろしいほどの怒気が籠められている。睨み上げる視線は、敵を殺せるぐらいの敵意を込めたもの。気を抜けば右腕に刻まれた刻印に飲まれてしまいそうだった。

「来訪の理由は伝えたはずだが？」

口の端を吊り上げて笑うヘリオンに、思わず手元にある槍に手が伸びそうになる。

「無用だ。私は負けぬ！」

「今の貴様に、最早十貴族は倒せぬ」

美しく整ったカルの美貌が屈辱にゆがむ。冷酷なまでに事実を突きつけられ、それを飲み下さねばならない、自身の失敗を突きつけられるのは、これ以上ないほどの屈辱だった。

「子供ではないのだ。そのような我侭で私を失望させるな」

ぎり、とかみ締めた奥歯が鳴る。だがヘリオンはそれに頓着しないように、周囲を見渡すと刃色の瞳を細めてカルを見下ろした。

「クラフトが居ないな」

「くっ……」

クラフトの名前が出た途端、カルの怒りは羞恥のものに変わる。

黙り込むカルを、冷たい表情で見下ろしたヘリオンは再び口を開いた。

「自分だけが、この国を救える。貴様のその思い上がりが家臣を殺したのだ」

「違えようなない事実。いくら反論したところで、死者は戻ってこない。」

「……では、ではどうしろというのだ！ 目の前で苦しむ民を見て、貴様はそれを見捨てよというのか！」

「そうだ」

カルの叫びを、ヘリオンは一刀両断する。

「な、なんだと!？」

「未来により多くの幸せをもたらすため、犠牲とするものが必要になつてくる。それがこの騒乱で犠牲になる民であり、そしてこれから先死ぬだろう貴様の家臣達だ」

動揺するカルに、ヘリオンは詰め寄る。言葉という刃で、カルの心を切り刻むがごとくその言葉には容赦がない。

「貴様は国を作るといったな。だがそれは誰の血で作るものだ？」

己の血ではあるまい、貴様に従う家臣達の血、貴様を信じた民の血、そして……あの白き騎士の血だ」

シユセの名前が出た途端、カルは槍の穂先をヘリオンに突きつけていた。

「黙れ!」

だがヘリオンは平然と言葉を続ける。

「なぜ恐れる？ 貴様を選んだ道だ。貴様が軽々しく戦に訴えねば、クラフトは死ななかつた!」

それどころか、その言葉は槍を突きつけるカルを圧してすらいる。

「私は……間違つたのか？」

力なく降ろされる穂先に、カルは俯いた。

「それは貴様の今後の行動次第だ。付き従う家臣を生かすも殺すも、ましてや国を、民を救うのもな」

僅かに和らいだ口調に、カルは顔を上げた。

一方、ラストウー又家宰の元へ使者が遣わされたのは、彼が脇腹の治療をさせているときだった。完全に粉碎された脇腹は、歩くだけで悲鳴を上げる。脂汗を額に浮かべながら、彼は床机に座り軍勢をまとめることに苦心していた。

手痛い傷を負うことになつたが、あと一息。それでカル・スカルディアの息の根を止めることができるのだ。ラストウー又に仇為す

敵を殲滅できる。

「数はいか程だ？」

「300はいけます！」

士気も高い。緊張感の欠けていた前回と違い、それぞれの中級指揮官も皆、引き締まった顔をしていた。これならば、いくら精強をもって鳴るスカルディア私兵であろうと、恐れるに足りない。

痛む体を引きずり、床机から立ち上がる。

「うむ、進軍の用意をさせよ！ 我らが手でスカルディアを討ち取る――！」

「お待ちを！」

だが家宰の指示を遮ったのは、馬で駆けつけた使者だった。

「なんだ貴様は！？」

誰何の声に、丁寧に使者は腰を折る。

「私はこの度、軍使の役目を仰せつかったテクニア・ミザーク。父フィクスの名代として、更には十貴族を代表してここに来た」
胸を張り声を張り上げる青年は、ラストウーヌの家宰をまっすぐに見えすえた。

「……して、その軍使殿が何用か？」

更に何かいいたそうな、周囲の声を遮って家宰は口を開いた。

「この度の、皆々様方のご活躍真に結構！ 故に……」

一瞬、伝える青年の表情が曇る。

「故に、この度の戦は、なにとぞここで切り上げてご帰還召されよ」

「なんだと、貴様！」

「何を言うか若造めが！」

口の中に満ちる苦い物を、噛み砕くようにしてテクニアは無言を貫きラストウーヌの家宰を見つめる。周囲から沸き起こる罵声を、その一身に受けて彼はそこに立っていた。

「それで、スカルディア家はどうされるおつもりか……？」

いきり立つ一同を抑え、ラストウーヌの家宰が質問する。

「スカルディアは武装を解除された後、十貴族の一員として迎え入

れられる」

「貴様っ！」

ラストウーヌの若者が腰に佩いた剣に手を伸ばす。

「では、我らは何の為に戦ったのだ！ 死んでいったディークトやキザグス達に、何と言えればいいのだ！」

戦友の名を呼び、剣を引き抜こうとした若者を止めたのは、家宰だった。

「止めないでください！ 家宰様！」

涙に濡れる双眸で、若者は使者を睨む。

「ならぬ……」

止めた家宰も、夜の闇が満ち始めた天を仰いだ。

「フィクス殿は……いずこにいらっしやる？」

眼を瞑り、家宰は使者に尋ねる。

「父は……」

ぎりりと、口元を引き結び、それ以上彼は言葉を発せなくなってしまう。

「フィクス殿は、虜囚に落ちておる。それを為したのは我らではないか。それを思えば、使者殿を恨むなど、出来ようはずが無い」

戦慄く腕わななくから全身の力が抜けたように、若者は座り込む。地に頭を擦り付け、死んだ戦友の名を叫びながら、若者は号泣した。

「……十貴族様には、承知したとお伝えください」

丁寧な礼をする家宰。

「赦されよ」

一言、言葉を残すとテクニアは背を向けた。

背後で聞こえる慟哭に、耳をふさぎながら彼は唇を裂けるほどかみ締め、急ぎ十貴族の集うミザークの屋敷へ馬を飛ばした。

謀略の使徒18（後書き）

現在「賊都」を改修中。流れは変えませんが、誤字脱字を中心に、多少追加もあるかもしれません。

夜の空には青白い満月が浮かび、風に流された雲が丸い月に薄く膜をかけていた。

一応の決着を見たスカルディア家との闘争の後、ラストウーヌの家宰は独り夜風に当たっていた。

見上げる空に、受けた傷が痛む。

「ラストウーヌの命運も尽きたか……」

今一思いに、スカルディア家を潰してしまわなくて、どうしてこの街の支配がなし得ようか。確かに、今ラストウーヌとケミリオは実権を握っている。

だが、それとて明日は分からないのだ。

伝え聞く所に寄れば、スカルディアの若い当主は最後まで帰還する兵のために、自身の居場所がばれるのも構わず、紋章旗を掲げていたそうだ。

例え敗れたと言えども、そのような当主が今後脅威にならないわけがない。そして今度彼が立ち上がることがあれば、いかなる者が止められるのか。

未だ十代の少年が、今後勢いを得てどれほど強大になるのか、想像もできない。

「いや、もはや詮無いことか」

せめて、自身の後に続くラストウーヌの若人達の武運を祈らずには居られない。

「懐かしい戦の匂いに誘われて出てきてみれば、懐かしい顔に出会ったな？」

突然の声に、家宰はその声の主を振り返えり、そして驚愕に目を見開いた。

「よお、久しぶりだな」

軽く手を上げた相手は、着流し姿に腰には大刀。手には酒の入った瓢箪を持っている。大柄な体躯に、人好きのする笑顔。

だが家宰の記憶に蘇るのは、千の味方を率いて万の敵に挑む勇者の姿だった。黒塗りの鎧姿、黒き旗を掲げた王の軍勢。常にその先陣を切る古今無双の勇者。

「ベイシユ……」

喉から漏れた声は掠れていた。

見間違っはすも無い、かつてともに戦場を駆け抜け、同じ夢を見た戦友。

「生きて、いたのか」

「多少、老けちまったがな……ロメリアもヒュラドも生きてるぜ」
そう言ってガシガシと短い黒髪を掻く。

「“閃光”に“魔弾”懐かしい名前だな」

銀色の長い髪を靡かせて細剣を振るう閃光のロメリア。どんな敵でも射抜いて見せた魔弾のヒュラド。背を預け、戦った友の名に家宰の頬が綻ぶ。

兇王と呼ばれたかつての王に仕えた黒旗軍、その最精鋭で固められた近衛軍『王の剣』忘れたくとも忘れえぬ懐かしき若き時代だった。

技を競い合い、酒を飲み交わし、同じ人を主と仰いだ。

ラストウーヌの家宰となつてからは、無意識に封じ込めていた泣きたくなる様な郷愁の思いに、ふと家宰は月を仰ぎ見る。

風に雲を洗い流した月が煌々と、懐かしき日々を照らしているようだった。

「15年か……」

主と仰いだヴェルが、その遠征途上で死した後、黒旗軍は解体された。

「老いたのは私も変わらぬ……王を殺した謀反人の一族を、討ち損じてしまった。昔なら考えられない失態だな」

「ヘルキオスの息子か」

言いよつた無言沈黙に、家宰が話題を変える。

「それで、今までどうしていた？ お前ほどの腕ならここでなくとも、引き手あまただろ？」

「……待つてんのさ」

未だ燃え尽きぬ男が口にしたのは、過去ではなく今　そして未来だった。不敵に口の端を歪ませて、ベイシユは笑った。その笑みは、過去からの亡霊が笑ったような気がして、家宰は背筋に冷たいものが走る。

「何を？」

だが、問わないわけにはいかなかった。

道の途中でくじけてしまった自分とは違って、目の前の男にはまだ燃え尽きない炎を見たからだ。

「再び俺達の黒旗を掲げる日が訪れるのをな」

その言葉に、家宰の背を雷が走り抜ける。

「まさか、ヴェル様は生きているのか！？」

その問いに、ベイシユは首を振る。

「いや、だが俺達が主と仰ぐ御方はまだ残っている」

苦い者を嘔み潰すような表情で、ベイシユは家宰を見た。

「……姫様が？　だが彼女らは王妃様と共に行方知れずに……それどうやってそれを証明する？」

「証明？　必要ねえさ、お前もあの姿を一度でも見れば思い知る。

俺達の仰ぐ旗は、まだ変わらずにあるってことをな」

ベイシユが酒の入った瓢箪を捨て去り、家宰に手を差し出す。

「一緒に来い。黒旗を立てて俺達の夢見た国ロクサーヌを取り戻す！　もう一度、夢を見ようじゃねえか、『王の剣』勇士ラクシユ」

「もう、その名は私の名ではない！　私はラストウーヌの家宰だ！　遠くに離れてしまった過去を振り払うかのように、家宰は語気を強めた。

ベイシユの姿は家宰にとって亡霊でしかない。懐かしく胸を締め

付けるその思いと共に、葬り去られるべき過去だ。

「王は死に、『王の剣』は解体した。俺達は負けたんだ！」

家宰の仮面の奥から、僅かに覗く勇士の素顔。

「いいや、負けてねえ！俺達の黒旗軍は……俺はまだ生きているっ！」

鬼気迫るベイシユの表情に、家宰は力なく首を振った。

自嘲に口元を歪ませ、家宰は泣き出しそうな双眸でベイシユを見た。

「もう一度言っ。一緒に来い！“勇士”ラクシユ・ラストティア！」

「……許せ、“戦鬼”ベイシユ・ライラック。老いさらばえた今の私には守るべき者がある」

封印し過去に打ち捨てた栄光の名。僅かに胸の鼓動が早まるその名に、家宰は深く、深く項垂れた。

“ラストティア”の名も勇士の誉れも、過ぎ去ってしまった過去に過ぎない。

ベイシユが差し出した手を、家宰が握ることはついに無かった。

スカルディアと十貴族派の戦いに一応の決着を見てから、3日。

スカルディア私兵は事実上解散させられたと言っている。重傷者を除く私兵は、領地に帰され、僅かにカル自身の従える兵は二十人にも満たない。

そのような中、十名ほどの護衛の騎士と私兵を従えたカルは、臨時の行政府となっているミザーク邸へ向っていた。品よく仕立てられた馬車に揺られ、深く目を瞑っている。傍らに控えるヘリオンも同じような姿勢だったが、ヘリオンは忙しなく書類に目を通していいる。

「シユセ殿からの書状が来ていた」

最も信頼する騎士の名前に、カルは瞑っていた目を見開く。

「やはり、ポーレに動きがあるらしい」

「エルシドは止められそうか？」

ほんの少しその口調に滲む心配。

「やるだろう、あの男は」

それをヘリオンは一蹴した。

「よくも、そこまで他人を信頼できるものだ」

美しく整った口元を歪ませて笑うカル。

「それはお前があつた男を知らぬからだ」

ヘリオンは皮肉を受け流し、剃刀色の瞳で次の書類に目を通す。

「……いつまで拗ねている？ 女が拗ねるのは可愛げがあるが、男

が拗ねても無様なだけだぞ」

書類から目を放さずに、ヘリオンは問いかける。

「拗ねてなどいない。不愉快なだけだ」

怒りを滲ませる口調に、小さくヘリオンはため息をついた。

「だが、奴らに頭を下げねば……」

「分かっている。人が死ぬのだろうか？ 守るべき民を死なせるなど、

家名の名折れだ」

言つて尚、眉間に皺を刻むカル。

「分かっていると思うが」

ヘリオンが言いかけたとき、馬車が目的の場所にまで着いた。慌

しく御者が駆け寄り、扉を開ける。

「分かっている。こんな下らぬ舞踏会でも、出ねばならぬのだろうか

？」

煌びやかな衣装を翻し、カルは馬車を勢いよく飛び降りた。

謀略の使徒20

ミザーク邸。

フィクス・ミザークが当主を務めるミザーク一門は、十貴族の中ではあまり強い力を持つ家ではない。何かしら特別歴史に関与する人物が輩出したわけではなく、古き血筋を誇ると言う事以外は、特徴の無い家だった。

ただ、その立地条件が故に幾度も社交界の場にはなっていた。十貴族に相応しい舞踏会場ダンスホールを備えた贅沢な邸宅。床には色とりどりの石材を惜しみなく使い、壁に描かれるのは瑠璃をはじめとした宝玉を散りばめた壁画。天井の高さは、優に大人が五人立てに並んでも足りない。その天上から吊り下げられるのは、黄金の燭台を備えた硝子夜灯シャンデリア。

二階席には、貴賓客をもてなす為のテーブルが並び、舞踏会の会場に咲き誇るであろう花々を鑑賞するのに申し分はない。他の国の王侯貴族に引けを取ることは決してない豪華さを備えたミザーク邸。大貴族としては平凡な　と言っても他の貴族からすれば十分に豪華な作りをしているが、ミザーク邸はロクサー又北側のほぼ中央に位置する。東にラストウーヌ・ケミリオらの邸宅が並び立ち、西側にはスカルディア、ヘルシオらの邸宅がある。

地理的な意味合いからも、ここで和平の為の会議が開かれることは公平だった。

ただ、素直に和平の為の会議と言っても対面上はよろしくない。和平の為の会議と言うならば、どちらかが負けで、どちらかが勝ちなのか決着をつけねばならない。だが、そんなことをすれば負けとされた方は死に物狂いの抵抗に出るだろう。

一度敗者の地位に墮ちたならば、その一門の力は著しく落ちる。

頼るに値せぬと見限られて衰退した大貴族は決して少なくは無い。

今スカルディア家が一門を挙げて抵抗をすれば、国を割った争いになる。スカルディア家との和平に渋りを見せるバトウやティザルを説得したのはウエンディだった。現に隣国ポーレでは傭兵を雇い入れる動きが見られるということだった。

そこで舞踏会ということになる。

勝ち負けを誤魔化しつつ、どちらの陣営にも角が立たぬように手を差し伸べる。ただし、扱いの差はつけて。

国中の耳目を集める舞踏会で、鼻持ちならないスカルディア家の小僧に、恥をかかせてやれる。その提案に、ティザルとバトウは残酷な笑みを浮かべながら頷いた。

大貴族ともなれば、戦場は遠い場所となる。自ら槍を取り、戦場を駆け巡るカルの方が異端なのであって、他の十貴族ともなればその活動範囲はロクサーヌの中。それも貴族同士の社交界の中にまで限定されていくのが常だった。

戦場へ向うのは、武功を狙う中小の貴族。大貴族はその上に君臨してさえ居ればその地位は保たれる。故にその社交界の最たる場である、舞踏会での扱いの軽重は、そのまま大貴族の世界での序列となつて現れてくる。

そこでスカルディアのカルに与える屈辱を想像し、バトウとティザルはこの上もなく上機嫌になっていた。

大貴族が主催する舞踏会。

普段ならこぞつてロクサーヌ中の貴族が出席するその催しに、だが今回の出席者は限られた者だけになった。当然と言えば当然で、ジェルノ家の派閥の貴族は、先の騒乱の痛手から出席できず、スカルディア家の者達は市内各地で息を潜めていた。

もし仮に、スカルディアの若き当主が害されることになるならば、一斉に蜂起しようとする固唾を呑んで見守っている。

最後まで自らの手勢を見捨てなかったスカルディア家の若き当主。戦後カル自身が訝しむほどの早さでその噂は、人づてに伝わってい

った。スカルディアを慕う貴族達はもちろんのこと、次の寄るべき大樹を求めるジェルノ家よりの貴族達。そして南側の平民達までもが、カル・スカルディアと十貴族達の会議を固唾を呑んで見守っていた。

貴賓席に居並ぶのは、バトウ・ラストウーヌ、フィクス・ミザーク、そして息子のテクニア。

「ティザル殿はまだ、いらっしやらないのか」

ホスト主催者であるフィクスは、すでに万端整った会場を見下ろし視線をバトウに向ける。

「ティザルは、今頃ヘルシオ家の未亡人と密談だろう」

不快げに鼻を鳴らし、貴賓席から舞踏会場を見下ろす。不機嫌なバトウに、フィクスは機嫌を取ろうと話題を探し、思い当たって柔らかな笑みを浮かべながらバトウに笑いかけた。

「いや、しかしこの度の戦いではラストウーヌの家宰殿のお働きは、誠にお見事でしたなあ……どの家でもかの御仁のご采配の見事さを誉めそやすばかり。さぞ主であるバトウ殿も鼻が高いことでありましょう」

戦場の悪鬼となったカル・スカルディアを止めた勇猛果敢さ。十貴族の中では、ラストウーヌの武末だ健在を証明する出来事だった。当然、主であるバトウも鼻高々だろうと話題を振ったフィクスに、バトウ

の厳しい視線が突き刺さる。

「ふん、あのような不調法者、ほしければいつでも差し上げますが」
その硬い口調に、触れてはいけない話題だったかとフィクスが後悔し始める。だが、自分が振った話題でもあり、自ら黙り込むこともできない。

「いやいや、ご謙遜を。それとも、自信の現れですか？ どちらにしても素晴らしい、流石はラストウーヌ。武門を誇る家は違いますなあ」

「して、その家宰殿はいずこに？」

折角この話題を打ち切ったと思つたフィクスの思惑を横から、テクニアがそれをぶち壊す。その視線はどこか挑戦的で、瞳には怒りにも似た激しさがある。

「主たる俺が、同行を命じたにも拘らず怪我だのなんだの、下らぬことを抜かしたからその任を解いてやったわ！ ハッ！ 清々した」
傲然と言い放つバトウに、テクニアはわずかに口の端を歪めて晒つた。

「私でさえ、停戦を申し渡すときは口が腐る思いだったのです。実際に戦つた者達の気持ちを考えれば、仕方のないことでしょうな」

「なにい？ 貴様、ミザークの若造は礼儀を心得ぬと見えるな」

「テクニア！ 失礼であろう」

たしなめる父と怒りを露わにするバトウに、軽く一礼するとテクニアはその席から立ち上がる。

「お許してください。バトウ殿、息子はこの度の貴家の活躍に嫉妬しておるのです」

背を向けるテクニアに、バトウの嘲笑が聞こえた。

「そうであるうよ。ミザークなどは、我らが使いつぱしりをして居ればよいのだ！ それでこそ、生き残ることができた家であろう」

追従もできず、小さくなる父を横目にテクニアは歩き去る。

「功ある家臣を捨てるラストウーヌと、家臣を最後まで迎えるスカルディア……結果は自ずとわかるうものだ。バトウ……貴様の命も長くはないぞ」

誰にも聞こえないように呟いて、テクニアは貴賓席を降りる。

そろそろスカルディアの当主が来る時間だった。

誰か、それ相応の者が迎えねばなるまい。

家を守るため、若きミザーク家の息子は玄関へ向かった。

「ロクサー又は、これで俺のものだ」

耳元でささやく男の声に、ウエンディは艶然と微笑んだ。

そう、そして私のもの、と。

「この後の舞踏会で、正式にヘルシオ家を十貴族に戻そう……スカルディア家の扱いは十貴族の中でもっとも低き地位にまで落とす。あの小僧の屈辱にゆがむ顔が見れると思えば、中々楽しい趣向ではないか」

低い笑いを漏らすティザルの口を、ウエンディの唇が塞ぐ。

離れた口から、粘り気のある糸が線を引く、それを挑発的な笑みで確認すると、ウエンディはティザルの耳元で淫魔の如く囁いた。

「忘れないでね、ティザル」

「忘れるものか……屈辱にゆがむあの小僧を、兵も与えずポーレとの戦線に送ろう。そして次はヘルキオスの葬儀……それが済めば、結婚しようウエンディ」

「ふふ、ありがとう」

その細い肩をがっしりと抱きしめ、再びティザルはウエンディの唇を求める。それに応えず、ウエンディはティザルの胸元によりかかった。

硬質な扉をたたく音。

それに舌打ちして、ティザルは扉に声をかけた。

「カル・スカルディア様ご到着です」

「来たか」

瞳に宿るのは嗜虐の色。扉をにらむティザルの様子に、ウエンディは気付かれぬよう晒った。

ミザークの紋章は、“一つ目の鴉”
観音開きの扉の両板に、朱宝玉ルビーと蒼宝玉サファイアをそれぞれ、一つ目に埋め込んだ鴉が描かれていた。両脇に控えるのは招待客ゲストを完璧な礼節を持って向かえる侍従達。見るからに重厚なその扉が開かれる。

「ようこそ、おいでくださいました」

長い渡り廊下には深紅の絨毯が敷き詰められ、頭上からは硝子夜灯リアが吊り下げられている。昼かと思うほどに明るいその廊下の中央に、テクニア・ミザークは深々と腰を折りながらカルを出迎えた。

「栄光あるスカルディア家の当主を、我が家の夜会に迎えられたこと誠に光栄に思います」

テクニアの声には、阿諛追従とは取れないだけの真摯さがある。

返事を無視して進もうと考えていたカルは、少しでも考えを改めることにした。

「お招き預かり、光栄の極み」

短くも返事を返すカルに、テクニアはそこでようやく頭を上げる。

「お初にお目にかかります。私はテクニア・ミザークと申します。今宵の付き添い役は私が務めさせていただきます」

優雅に洗練されたテクニアの動作に、カルは頷くだけで答えた。

一般的に来客が男なら女が、逆に来客が女なら男が付き添い役を務めるものだ。もちろん、招待客に相応しい身分や品性を伴った者が選ばれる。夜会にほとんど出席しないカルには気にならないことだったが、テクニアにしてみればスカルディア派と表明しているようなもの。

自身で出迎えることは、招待客に対して最高の礼儀を示すことに他ならない。

「手間をかける」

必要最低限のことしか口にしないカルは、柔らかな絨毯を踏みしめテクニアの前にまで進む。豪華な黄金の髪、鞭のように引き締まった身体に舞踏会用に設えた衣装が映える。

ロクサー又随一の美貌と称えられるその中性的な顔立ちと相俟って、見るものの目を惹きつけずにはおかない妖しさすら漂っていた。あるいは戦場を潜り抜けてきた湖水色の瞳が　激しさを内包しつつも静かに波打つ大海のような、見る者を圧しているのかもしれない。

「……カル・スカルディア様」

再び頭を下げるテクニアが口にしたのは、主催者側としても、また付き添い役としても言ってはならない一言だった。

「このまま、お引き取り願えませんか？」

下げた頭の為に見えない表情。だがその苦渋に満ちた声音が、テクニアの心を物語っている。

テクニアは目の前の、まだ少年と言える若き名門の当主を見て一目で気がついてしまった。

ティザルあつよひなきやバトウとは違う。これこそが本物の貴族ではないかと。

テクニア・ミザークは戦場に出たことはない。ほかの十貴族の子弟達と同様に、社交界をその生きる場として選んできた青年である。顔に笑顔の仮面を張り付かせ、毒の言葉で相手を牽制する。ひとつの言葉が命取りとなり、ひとつの行動が己が一門の衰退を招く。あるいは命を懸けて戦う戦場よりもよほどの緊張感を伴うその社交界せんじゆにおいて、彼は身に着けざるを得なかった。

財を握るケミリオヤ武を誇るラストウー又達のように力のある家柄ではないミザーク家。それゆえに一目で相手の質とも言うべきものを見抜く力を磨かねばならなかったのだ。

勘に近いその眼力は、これまで外れたことがない。テクニアはそれにかんりの信を置いていた。

そしてその眼力が告げるのだ。

カル・スカルディア

目の前の男は、未だ若い誇り高い獅子であると。民の上に君臨し、戦場を駆け抜ける百獣の王。

そう、言い表すなら王の素質を持っている。

そのような若者を、みすみす屈辱と陰謀渦巻くこの舞踏会に案内せねばならない。無念に思うと同時に、社交界を生き抜く冷徹な“一つ目の鴉”が計算をするのだ。

果たして、その結果がミザーク一門に何をもたらすのか、と。

「一つ目の鴉のお眼鏡には、適わぬと言われるか」

皮肉の籠った言葉に、テクニアは思わず顔を上げる。

「いえ、決してそのような……ですが」

ですが、と言ってしまつてからテクニアは再び下を向いて唇をかむ。どう言つて納得してもらえばいいのかと。未だ若く誇り高い少年に、目の前の危機を告げても跳ね返されるだけだろう。

「この場で私に与えられるであろう屈辱のことなら、心配は無用にお願いする」

テクニアの見上げたカルの表情には、微塵も感情のゆれが現れていない。

「貴族たるもの、己が率いる一門の為なら毒でも笑つて飲ませていただくこつ」

気負いもてらいもなく、それを言い切るカルにテクニアは感動を乗り越して戦慄を覚えた。

「……わかりました。ご案内しましょう」

体に走る戦慄をよそに、テクニアの口元だけが痙攣したように笑つていた。

流れる楽曲は緩く漂う紫煙のごとく、舞踏会場を満たす。奏でるのは遠く北方、自由都市郡ギーレから招いた楽団の演奏だった。ゆつくりとたゆたう音曲にあわせて、一階の会場ではすでにケミリオ

やラストウーヌらに心を寄せる中小の貴族たちがパートナーを見て、
けてダンスを踊っていた。

「くだらぬ」

色鮮やかに咲き誇る花々に似た婦人達。それを引き立てる漆黒の
燕尾服を纏う紳士。不快気にそれらを見下ろしてバトウは、臍腑に
酒を送り込んだ。

「これは手厳しい」

柔和な笑顔でそれに答えるのはフィクス。息子のテクニアがバト
ウの機嫌を損ねてしまった後、必死の思いでその機嫌をとっていた。
ただし表情には出さずに。

「ですが、テイザル殿はいささか遅いようですね」

ミザークの夜会は大きく三つに分かれる。

婦人たちの踊る前曲^{デユマ}。既に社交界にはデビューしたが未婚の女性
が踊る中曲^{ヒューネ}。そして今年初めて社交界にデビューする少女たちの舞
う後曲^{デビュネ}。それぞれの曲の合間には食事などの時間もあり、夕方に始
まり真夜中に終わるこの宴を、ミザークの夜会と称していた。

既にデユマの中ほどまで進んだ音楽に、耳を止めながらフィクス
は周囲を見渡した。

「先ほど、使いは出したはずなのですが……」

この度の夜会は何も彼自身が望んだものではない。その政治的意
味合いからも、ケミリオ・ラストウーヌとスカルディアの為のもの
だ。

彼とてミザーク一門を率いる身、それなりの権謀術数には少な
らず関わってきた。何しろつい先ごろまで十貴族を統括していたの
は策略をもって国を支配していたオウカだ。だが、それと彼自身の
心情はまた別にあつた。

できれば何事もなく終わってほしい。

彼の心情を表すならその一言に尽きる。先の戦の激しさに、戦場
を経験したことのないフィクスはすっかり参ってしまった。槍
で突き殺され、臍腑を撒き散らし死んだ兵士の惨さ。そのあまりの

悲惨さにフィクスは目をそむけずには居られなかった。

それが遠き戦場のことなら、まだいい。問題はそれがロクサーヌのよく知る街角で、自身の庭とも言つべき大通りで、行われたことが問題なのだ。あまりに近くで行われた戦にフィクスは震え上がった。できれば早々と息子のテクニアに家督を譲り渡したいのだが、先ほどの態度を見る限り未だ彼に家督を譲る気にはなれなかった。

父親として当主としてフィクスの懊悩は深かった。

その懊悩が、ため息となって外に漏れる。

目ざとくそれを見つけたのは、先ほどから機嫌の悪いバトウだった。

「フィクス殿は、わしと酒を飲み交わすのが楽しくないと見える」

既にかかなりの量を飲み干したバトウの顔は赤い。その赤ら顔に据わった目でフィクスを睨み付けた。

「いえ、そのようなことは……」

内心ため息を吐きたいのを堪えつつ、フィクスは柔和に笑って見せた。

「遅くなりました」

ともすれば爆発しそうなバトウの行動をさえぎったのは、傍らにウエンディを伴ったティザルの姿だった。撫で付けられた髪に、しっかりと整えられた服装。芳香香るその姿からは、十貴族の気品がうかがえた。

「おお、ティザル殿！」

地獄に仏とばかり、ティザルを迎えるフィクス。面白くもないという風に、一人酒を飲み干すバトウ。彼らの間を割るようにして、ティザルは着席し、隣にウエンディを伴った。

フィクスの用意した二階席には、出席者の格に応じて主席から末席まで厳然たる序列で分けられていた。その主席の位置に座るティザル。

「ヘルシオ家の奥方様、ご健勝で何よりです」

如才なく挨拶をするフィクスに、ウエンディも微笑を返す。

「フィクス殿もこの度は、ご災難でございました」

妖艶に微笑むウエンディの言葉に、咄嗟にフィクスはティザルとバトウを盗み見た。だが、予想したバトウやティザルの怒りは起こらずそつぽを向くバトウ。ティザルにいたっては、笑みすら浮かべて眺めている。

言葉以上の意味はないのかと、密かに胸を撫で下ろしつつ、遅れてやってきたティザルとウエンディにギーレの演奏楽団のことなどを講釈する。

やがてデユマが終わり、会場で踊っていた婦人達が一列になって二階席のティザルに次々と挨拶をする。二階席からみおろすティザルは、ぶどう酒のグラスを片手に、その挨拶に答えていた。まるでそれは王が家臣を謁見するようだった。

挨拶をする貴族たちの背後では、既に会食のための準備が着々と進んでいる。すべて滞りなく進んでいることにフィクスが安堵のため息を漏らした。

「カル・スカルディア様おなりにございます！」

ほっと息を吐いたフィクスの心臓を驚掴みにする声が響いたのは、その直後だった。

ちょうどデユマが終わり、舞踏会場は会食の場へと変わっていた時だった。豪華な金髪をなびかせ、これでもかと贅を尽くした衣装を着、それにまったく見劣りすることのない少年が舞踏会場の扉から入ってきたのは。

一瞬の後に起きるとよめき。

中世的な顔立ちに、白磁の肌。これが戦場を駆ける男かと疑ってしまうような涼やかな目元。だが見るものが見れば、その豪華に設えた服の下に鞭のように強靱な体を見ることが出来る。湖水色の透き通った視線が色鮮やかに着飾った婦人達の上を通り過ぎるたび、

会場のあちこちから羨望のため息がもれていた。

「あれが、カル・スカルディアか」

ひそひそと交わされる囁きは、社交界嫌いのカルを初めて目にする者達の声。ティザルに挨拶をするために並んでいた貴族たちでさえ、そのカルの出で立ちに息を呑み彼に視線を吸い寄せられていた。その中でも一際、カルに魅せられたのは彼と同年代の少女達だった。今年初めて社交界にデビューする彼女らに、カルの容姿は刺激が強すぎたのかもしれない。何人かの少女はあまりのことに気を失ってしまいう有様だった。

舞踏会場全ての耳目を集めたカルは、ゆつくりと周囲を見渡し、やがて二階席のティザルとバトウ、そしてウエンディに視線をとめた。あるいはこの会場内でカルの雰囲気にも吞まれていない者があるとするれば、それはティザルの横に侍るウエンディだけだったのかもしれない。

カツリ。

と硬質な床を踏みしめる音と共に、カルが二階席に向かう。それだけでまるで海が割れる様に、人並みに道ができていく。

「ふふふ……」

どこか美しすぎて現実味のないその姿に、二階席の面々が我を取り戻したのはウエンディの小さな笑い声からだった。

「随分、おめかししたものね」

その言葉に我に返ると同時に、怒気を発するバトウとティザル。

一方で、それらを感じ取り慌てるフィクス。

階段を上り、一階の視線全てを集めながらカルは十貴族の前に立った。

謀略の使徒21（後書き）

遅くなって申し訳ありませんでした。

後4話ほどで謀略の使徒編を終わらせようと考えています。

謀略の使徒22

「ご機嫌麗しゆう、ティザル・ケミリオ殿」

美姫すら酔わす口元で、僅かにカルは微笑んだ。

ぴくりと、一瞬だけ眉を跳ね上げたティザルはだが余裕の笑みを
持って見返えず。

「……小僧」

だがティザルとは対照的に憎しみがあありと籠る声が、バトウの口から漏れる。酒によって理性の弱まった今のバトウでは、いつカルに飛び掛っていくとも限らない。

「おや、いらしたので？ バトウ殿」

挑発的な言葉と、湖水色に澄み渡る冷たい視線。それを投げつけられたバトウは、うなり声を上げた。

「よくおいでくださいました」

不穏な気配に口を挟んだのはフィクスだった。彼にしてみれば、虎口に飛び込む覚悟をもつての発言だ。彼自身、声が震えなかったのが不思議でならない。同時に深々と頭をたれると、席をひとつ用意する。

「さあ、立ち話しもなんです。どうぞお座りになってください。ちよつど今デユマが終わったところ……会食と休息の時間でございますれば」

そそくさと席を勧めるフィクスに、ティザルの鋭い声がかかる。

「いや、スカルディアの席次はそこではない」

フィクスがカルに薦めた席は、ティザル、バトウに次いで三番目の席。

「その席には、ヘルシオ家のウエンデイさまが座っていただく」

主席の高みからティザルの声が響く。

楽団の演奏すらも止んだその舞踏会場の中で、ティザルの声は響

いた。

「スカルディアは末席の地位に着かれない」

嘲笑をもつて告げるティザルに、驚愕したのはフィクスだった。席次はすなわち、十貴族内での序列の高低を表すものだ。ましてや、ミザークの夜会はケミリオ・ラストウー又とスカルディアの和睦のための場という意味合いがある。

元々席次では、スカルディアが上のところをさらに末席にまで下げると普通は激怒してしかるべきだ。しかも聴衆での面前となれば、スカルディアは恥をかかされた事になる。

「ふん、いい気味だ」

バトウの吐き捨てた台詞に、カルは静かに頭を下げた。

「従いましょう」

腹を抱えて笑うバトウとは対照的に、ティザルはカルのお金髪に、持っていたグラスを投げつけてやりたかった。

従順すぎるっ！

敢えて聴衆の面前で、逆らってくれた方が今後の主導権を取りやすい。何より自身の権力を見せ付けることができる。

「では、これにて」

引きつる笑みのティザルに背を向けたカルに、粘り着くような甘い声がかかった。

「お待ちになって」

ぞくりと背をなでる不快感。背を向けたまま、カルは踏み出しかけた足を止めた。

「何か？」

刺繍は複雑な文様を幾重にも刻み、フリルのひとつにいたるまで完璧なる調和の元に作られた漆黒のドレス姿。結われた髪を止めるのは、ダイヤモンド金剛石を散りばめた髪留め。首元に光るのは炎の意匠を凝らした首飾り。一分の隙もなく飾り立てたウエンディは口元を扇で覆い隠しながら、ウエンディはカルに近づいた。

硬質な宝玉を思わせるカルの視線がウエンディを見下ろす。だが

その視線をものともせず、ウエンデイは緩く気だるげに右腕を差し出した。

嫣然と微笑む目じりは、悪戯を思いついた童女のようにあどけなく、扇で隠された口元には蛇の如き狡猾な笑み。

挨拶をせよ、とウエンデイは無言の内に迫っていたのだ。

当然、序列を考えればいくら義理の親子とは言え、カルから挨拶をすることなどありえない。正当なるスカルディアとヘルシオの血を引く彼は十貴族中誰よりも高貴な血筋と言うべき立場だ。

「……これは、失礼を」

だが、彼は膝を折って差し出された右手に　その黒いレースの手袋越しに、口付けをした。一連の動作は優雅に舞う白鳥を思わせるほどに洗練されている。

「では、これにて」

言つなり嫣然と微笑むウエンデイに背を向けて、貴賓席の末席へと着席した。

「……ふふふ、まだまだ坊やね」

扇をパチリと閉じると、ティザルに寄り添うように彼の隣に戻っていく。

「義理とはいえ、息子のご無礼これで許してくださるかしら？」

その意図に、ティザルも気づかないわけがない。

「もちろんだとも、貴女の頼みとあらば」

にこやかに、微笑むと彼女の手をとる。

「音楽を」

固唾を呑んで見守っていた聴衆に向かって言われたティザルの言葉。我に返った演奏者達と同様が楽器をかなで始めると同時に、止まっていた時が動き出すようだった。左手にウエンデイの手を優雅にとつたまま、ティザルは中小貴族達の挨拶を受ける。

一安心したフィクスは、どつと疲れが押し寄せてくるのを感じた。「しばらく席をはずします。ごゆるりと……」

家宰に目配せすると席を立つ。

限界だった。これ以上あの環境で接待を続けていけばバトウの相手を務められそうにない。一時にしても休養が必要だ。そう判断したフィクスは自身の休憩部屋に戻っていった。

テーブルの上にある高級酒。自身は飲めるほうではないのだが、それを乱暴に開けると一気に飲み干した。ぐらりと、揺れる頭を何度か振り心を静める。

「父上、こちらでしたか」

扉の開く音と同時に聞こえた声に、フィクスは収まり始めた怒りをぶつける。

「貴様っ！ なんとということをしてくれたのだ！」

カル・スカルディアが入ってきたときの声。紛れもなく息子のテクニアのものだった。

「父上、聞いてください」

扉を慎重に閉めると早足で父の元に駆け寄る息子。

「何を聞くと言うのだ！ わざわざバトウを挑発し、あの小僧の登場に色を加えるなど、気でも狂ったか！？ テクニア何の故あつて我が家を貶めるや！」

感情のままに喚く父親の罵声を、甘受し息子は父の前に立つ。

「私はあのカル・スカルディアに未来を見ました」

「未来？ ふん、破滅の未来なら一人で見るが良かるう！ だがな、お前の双肩には古い先短いわしを始め、ミザーク一門とそれに寄り添う貴族達の運命がかかっているのだ！」

「私とて、軽々に動いているわけではございません。ですが、あの方には王の器がございます」

テクニアが王という言葉を口にした途端、フィクスは苦虫でも噛み潰したように顔をゆがめた。

「王！？ 王だと！ テクニア、軽々しくそのような言葉口にする出ない！ わが国は共和制だぞ！ 十貴族が和を持って治める。そ

れが共和制だ……王などと……」

まるで王という言葉に怯えるように、フィクスは身震いすると酒を一杯飲み干した。

「ですが、父上」

「言つな！ どれほどあの小僧が優れていようと、ラストウーヌとケミリオは強大だ。わがミザークは大樹に寄り添わねば生き残つてはいけぬ……忌々しいことだがな」

苦々しく吐き出すと、再びフィクスは酒を呷った。

「……わかりました」

故へエルキオスに、十貴族の長老オウカに、フィクスがどれほどの思いを耐えて従ってきたか、テクニアはまざまざと見ている。家門のため、頼ってくれる貴族のため、必死に生き残りをかけて戦ってきた父をテクニアは見ている。

「父上」

だが、だからこそ。

「引退なされませ」

ここで引くわけには行かなかった。

「な、テクニア……貴様っ！」

「父上の御心中お察し申し上げます。ミザークは必ず、私が守り栄えさせます」

「テクニア……貴様に我が家^{ミザーク}を動かすことなど」

「いえ、私どもも若様とご一緒の考えにてございます」

主の会話に入り込む無礼を甘受しながら、それでも敢えて口を挟んだのは扉を開けて入ってきた侍従達だった。

「な、貴様ら……」

代々ミザークの使用人達をまとめる侍従長、警護を担当する衛士長、そして先ほど夜会を任せた家宰までもが、居並んでいた。ミザークを動かす彼ら三人は、テクニアの後ろに並び一斉に頭を下げる。

「どうか、お館さま」

辛い時も、苦しいときも共に歩んできた家族達。

「……わかった。テクニア、好きにせよ」

きつく目をつぶり、フィクスはそう言った。

「ありがたき、しあわせ」

いつの間に息子はここまで、家の中をまとめていたのだろうか。

「わしも、老いたな」

ほろ苦くフィクスは笑った。暗いまぶたの裏に浮かぶのは、紋章

“一つ目の鴉” 生き抜くためにもっとも知恵を身につけた鴉が代を重ねる。

フィクスとテクニアが貴賓席に戻ったときには、既に前曲デユマの会食の時間は終わり、中曲ヒューネが始まるうとしていた。

未だ貴賓席に漂うのは、寒々しいほどの重い気配。

フィクスはバトウの酒を注ぐために彼らに寄り添い、テクニアはカルの元へ寄る。一見何の変化もないような構図だが、フィクスの心は軽かった。

「さあ、バトウ殿、もう一献」

差し出される酒盃を立て続けに空けるバトウに、飽かず酌をする。

一方カルに近づいたテクニアも、彼に酒を勧めるが、カルはあまり口にしなかった。

「ご心痛のみぎりには、これが一番だと思えますが」

カルの心の苦痛を幾分かでも和らげようと、言葉をかけるテクニア。

「そんなに気を使わなくてもいい……あまり飲めない方でね」

肘掛によりかかりながら、ヒューネを觀賞する。

テクニアとフィクスの甲斐甲斐しい世話があつてか、ヒューネが過ぎその後の休憩の時間になっても、カルと十貴族の間で問題は起こらなかった。

後はデピユネを残すのみ。

社交界にデビューする少女達は、この日のために何ヶ月も、あるいは何年も前から支度をするものが多い。古くは王家の、そして今現在は大貴族の目に留まれば、中小の貴族から一躍大貴族の夫人にまで上り詰めることも夢ではないからだ。それゆえに一家を挙げてこの日のために財を惜しまず支度をする。

大貴族との結びつきが強くなれば、それだけ自身の出世にも影響がでてくる。中小貴族のそんな思惑も絡んで、デピユネはミザークの夜会で最大の盛り上がりを見せることになる。

古くは王の側室を輩出し、新しくは当時最大の権門だったヘエルキオスに見初められたウエンディの例がある。そのデピユネの舞台は、社交界にデビューする彼女らに正しく憧れの舞台であった。

そしてその日の夜会には、ロクサー又随一の美貌と謳われるスカルディアのカルも来ているのだ。緊張するなと言っほうが無理である。

甘い音楽に合わせて、デピユネが始まる。

色とりどりの衣装に、未だ蕾を開花させる前の少女達が舞い踊る。相手を務めるのはいずれも容姿端麗な少年達。だがどこか、硬さが抜けきらない。

「ふふ……懐かしいわね」

扇を口元にウエンディは嘆息した。

若き日を思い出すかのように目を細め、感情をうかがわせないその妖艶な微笑はデピユネの舞台を眺めている。

「だが、少し硬いな」

流石に毎年見慣れたティザルには、その年の出来がわかる。目に止まるほどの少女や少年はいないようだし、硬さに顔が強張っているものばかりだ。

「そうね、少し退屈かもしれませんわ」

ティザルの隣の席から立ち上がると、彼の耳元でウエンディは囁いた。

「坊やで遊んできてもよろしいかしら？」

「何をするつもりだ？」

囁きあう二人の声は舞踏会場の音楽に紛れてしまふほどに小さな声。

「よろしいことティザル？　十貴族の主導者たる威厳を持って下を見てくださいませ」

「ウエンデイ」

呼び止める声に、嫣然と微笑む。

「社交界での戦いをご覧になって、私のティザル」

女王のように優雅な歩調でカルの元まで歩いて行くと、右手を差し出す。

「退屈でしょう……踊ってくださるかしら？　坊や」

挑戦的な笑みを見せるウエンデイに、カルの傍に控えていたテクニアが口を挟む。

「僭越ながら、お相手は私が……」

だがそのテクニアをカルは片手で制した。

「スカルディアでは、わたくしの相手は務まらない？」

「お望みとあらば」

挑発的なウエンデイに、敢えて答えるカル。

ミザークの夜会はまだ終わらない。

羽毛をつかむような柔らかな手つきで、ウエンデイの手を取るとそのままカルは階段を折り始めた。折りしも時刻は、デピユネの真つ最中である。舞踏会場を所狭しと踊る少女達の中に、静かに分け入って行った。

「あっ！」

最初に気が付いたのは踊る少女達の中の誰かだった。

悲鳴に近いその声に、自然と周囲の注目を集める。視線を向けた先にいるのは、カル・スカルディアとヘルシオ家の未亡人ウエンディ。自然と彼らの周りで踊る少女達は、踊りをやめて彼らに見入ってしまう。いつの間にか音楽も止んだ只中。

二人とも少女達にとつては憧れの人物に違いはない。

カルはその美貌によつて、ウエンディは彼女達の中から成り上がった言わば先達にあたる。

「あら、止まらなくても結構よ。これはただの余興ですから」

嫣然と週に微笑むウエンディ。その微笑に、少年少女問わず顔を赤らめる者が居たとしても仕方のないことかもしれない。

「確かに、余興以外の何者でもない」

酷く感情を抑えた声でカルもまた言った。

「気にするな、と言つても無理であろう。せめて互いに良き踊りを」周囲を見渡して声をかける。

少年達にとつては思わず頭を垂れたくなるような威厳に満ちた声、少女達には吸い込まれてしまいそうな声で。

「では」

ウエンディが視線を楽団に送れば、まるで意図を理解したかのようにならぬ楽曲が流れ始める。

「クラウディ 13番 憂う胡蝶」

最初はスローテンポとアップテンポが交互にやってくる難しい曲だ。

流れる楽曲を従えるように甘く舞うが如きその動き。彼女の周りで踊る少女らさえも、自身の彩として引き立てる彼女の仕草ひとつひとつが、楽曲と同一になったかのようだった。

だが彼女の相手として選んだカルもそれに引けを取るものではない。ウエンディが楽曲を従えるのなら、カルはその楽曲に自在に乗って見せた。華麗なステップは、決して踏み間違ふことのない精密な機械仕掛けのように、だがウエンディを支える手には確かな弾力を持って。

「なかなかやるものね、坊や」

流れる間奏に、二人は距離をとった。これからがこの曲の見せ場。アップテンポが際限なくきりあがっていくのだ。結い上げてあった藍色に近い黒髪から髪留めを外したウエンデイは、金剛石で作ったその髪留めを豊かな胸の谷間に挟み込む。

「準備はよろしくて？」

軽く首元を緩めたカルに問いかけた。彼女から差し出す手は、カルを誘うようにゆっくりと差し伸べられる。カルが恭しくその手を取るのと、急激に曲が激しくなるのは同時だった。

ウエンデイの腰まである黒髪がふわりと、風に流れる。引き寄せられる体に、崩れるかと思われた瞬間カルの力強い手が彼女を支える。

反転。くるりと、カルの手を軸にして回るウエンデイが、白い脚線美を惜しげもなく晒し、体を後ろに倒す。腰を支えるカルの腕に全ての体重を預けた彼女に、カルが内心舌打ちした。

腰を支える腕を一気に跳ね除ければ、左手一本だけで繋がったカルとウエンデイは遠心力に任せて円を描く。息つく暇もなく、延びきった腕を支点に切り替え、ウエンデイがカルの腕を巻き込むように胸の中へ入ってくる。

お互いに交わされる熱い吐息。

間近で交わされる視線。

愛を語るより熱く、殺しあうようも情熱的にウエンデイはカルに挑む。かつて一国の権力者を魅了したその踊りは、炎よりも熱く燃えて謀略よりも尚、油断がならない。やがて熱情の時間は終わり、ゆるりとした二度目の間奏がくる。

体を寄せ合うようにして踊りながら、ウエンデイはカルの整った顔を見上げた。上気した頬を紅に染めるウエンデイは全身から立ち上る色香を振りまきながら、カルを口説く。

「坊や、なかなか楽しめるわね」

「貴様に坊やなどと呼ばれる筋合いはない。前にも言ったはずだ。

貴様と母と呼ぶことなど永劫ないとな」

息一つ乱さずに言つてのけるカルの体に、自身の豊満な胸を押し付けつつなおも言葉をつむぐ。

「では、あなたは私を“女”として見ているのね？ うれしいわ」

甘さを伴つたウエンディの声に、眉間の皺を深くするカル。周囲には聞こえない程度の小声で反論する。

「貴様は敵だ。それ以外の何者でもない」

「面白みのない答えね。敵と談笑できる程度の余裕もないの？」

無表情を貫くカルに、ウエンディが微笑む。

「この世はね、面白おかしく暮らした者が勝ちなのよ。どんな逆境にあつても笑つていられる余裕をもてないから貴方は坊やなの」

近づくウエンディの妖しい口許。紅が誘うように笑みを形作る。

肩に置かれていたウエンディの手が徐々にカルの引き締まった腕をなぞる様に、下に降り。自身の腰に回されている手を、下に誘う。

「……だからヘルキオスに取り入ったのか」

務めて感情を抑えたカルの声に、ウエンディの手がカルの手に重なる。

「そうよ。そうして次はテイザル……権力者の間を泳ぎ回り、ほしいものを手に入れていく。それが私の生き方」

覗き込んだウエンディの瞳は、深遠よりも深い青。

「今ほしいのは、貴方よ……必ず手に入れて見せるわ」

「私の家門、の間違いだろうか？」

「ふふ……秘密、ということにしておきましょう」

重なつた手が離れ、カルの頬に触れる。

再び流れる激しい音の調べに、二人は身を任せた。

謀略の使徒23

二人の踊りが後曲デリュネの舞台を独占する。すべての耳目を集め、それを弄ぶように踊ってみせる二人にティザルは内心嫉妬していた。

ウエンディの熱を含んだ視線。艶かし過ぎるそのしぐさ。思わず肘掛を強く握り締める。だがここで飛び出して彼女を奪い去るわけには行かない。今の自分は十貴族第一人者の地位にある。軽々に動いてはこれからの政治にかかわってくるだろう。

ゆえに“クラウディの13番憂う胡蝶”が終わるのを今か今かと待ちわびていた。じりじりと内心を焼かれるような焦燥感。それに耐え無表情を顔に貼り付ける。

鋭くなる視線の先には、常に踊る二人の姿を追っていた。

しなやかに伸びるカルの手がウエンディを引き寄せ、その胸に抱く。舞踏とは分かっていても、心に爪をたてる不快感は消えてなくなる。まるで愛するものに身を任せるような迷いのなさでカルに体を預けるウエンディ。

ティザルの我慢が限界に達しようとした時、音楽の余韻を切るような激しさで曲が終わる。カルがウエンディを抱き寄せた姿勢のまま、短く静止した。

その姿勢のまま、ウエンディは何事かカルに囁くのをティザルは見逃しはしなかった。

湧き上がる歓声と拍手。カルはウエンディの手を取って礼をしていた。舞踏会場を包む熱気に圧されるように、ティザルは席から立ち上がる。

一刻も早く、彼女を取り戻したい。カル・スカルディアの手から

愛しいものを奪い返さねばならない。そうしなければ、なにもかもが自分の手から奪われてしまう。

焦燥、嫉妬、不安、交じり合う感情のうねりに胃がよじれる。

「流石はカステイーヤの舞姫」

眩かれたフィクスの賞賛も耳に入らず、ティザルは立ち上がる。

二階席の彼に向かって階下で挨拶をしようとするカルとウエンディを制して声をかけた。

「良い、この場へ」

表面上は落ち着いて見えるティザルだが、内心は嵐にも似た激情が吹き荒れていた。

一刻も早く、あの二人を引き離したい。彼女を自らの手に収めなければ、嫉妬に狂い死にしそうだった。

階段を上る優雅な仕草さえもが、ティザルを苛立たせる。やっとティザルの前に立った二人は深々と礼をする。

「見事だった」

胸の内から洪水のように溢れ出しそうな、感情を抑えてティザルが声をかける。

無言で首を垂れるカル、そしてウエンディ。

「ウエンディ」

呼び掛けられると同時に差し出されるティザルの手。僅かカルに目配せすると、ウエンディはその手を取った。

腰に回したティザルの手が、ウエンディの体を引き寄せ、カルに向けた視線は氷点下よりも尚冷たい。

「さて、カル・スカルディア」

ウエンディの体から立ち上る芳香を思うさま吸い込むと、ティザルは僅かに口元を歪めた。

「はっ」

カルは片膝をついたまま深く首を垂れたままだ。

「見事な踊りの褒美を取らそうと思うが、まさか断るまい？」

無言を肯定と受け取って、ティザルは口を開いた。

「我が国との国境に、隣国ポーレの軍勢が迫つておる。即刻おのが手勢を率いてこれを討て！」

内心を押し包み、無言を通すカルに向かって更にティザルは言葉を続ける。

「ロクサーヌを震撼せしめた武勇、今度は我らがために奮つてもらおう……良いな？」

念を押すティザルに、僅かカルは頷いた。

「はっ、お言葉のままに」

「もし、見事武勲をあげたならそなたの席次を引き上げよう」

ティザルの中ではカルをウエンディから遠く引き離したいという一念と、カルを飼い慣らせると言う自信に満ちていた。夜会を通してカルの従順な態度、ウエンディを取り戻したと言う自信がティザルをして、カルの実力を過小評価させるに至っていた。

「彼に軍勢を預けるのは危険ではなくて？」

ティザルの腕の中、彼の耳元でウエンディは囁くが、ティザルはそれに笑って頷いた。公式の場と言うこともあり色仕掛けは使えない。心の中で齒噛みしながらも、顔には嫣然たる笑みをたたえていた。

「承知しました」

感情を伺わせない、さめた声で返事をする、カルは立ち上がり自ら与えられた席につく。

「君と踊つた他の者達にも褒美を与えねばな」

ウエンディに笑いかけ、階下の貴族達へ言葉をかける。

「美しい花々に、感謝の恵みを。これよりは、無礼講とする」

わっと湧き上がる貴族達に、ティザルは片手にグラスを上げて答えた。

年若い娘を持つ父親は、彼女らを大貴族への挨拶に赴かせるのに余念が無い。無礼講となれば、普段は立ち入ることすら出来ない二階席に、堂々と立ち入れるからだ。運よく彼女らが大貴族の目に留まれば、栄華栄達は手にしたも同然だった。

このテイザルの処置に、もっと苦しめられたのはカルだった。周囲を若い少女らに囲まれてご満悦の他の貴族達に、心の中で罵詈雑言を投げつけ、鋭い視線を投げかける。

「スカルディアの御当主様」

「カル様！」

「一曲踊っていただけませんか？」

「あ、ああ……」

呼ばれるたびにカルの困惑と疲労は深まるばかりだ。戦場で恐れを知らぬカルではあったが、こと舞踏会には幼き頃より近寄りさえしなかった。理由は簡単で、一度だけ出た舞踏会で年上の婦人達に囲まれおもちやにされてしまったからだ。

婦人達にしてみれば、見目麗しい少年を鑑賞していたいという罪の無い欲求に従っただけなのだろう。だがカルにしてみれば全く面白くない。幼いながらもスカルディア家の次期当主だった彼は、矜持を大いに傷つけられ、それ以来舞踏会には極力参加しなかった。

だが、この舞踏会での人気が彼に集中するのはもはや自明の理だった。

十貴族中、首座にいるテイザルの側には常にウエンデイがいるし、それと並ぶ実力者のバトウは既に酔いつぶれて正体が無い。残るミザークや、他の諸家についても、当主は皆老人の域に差し掛かっている。

しわがれようとする男達の中にあつて、ただ一輪。活力に満ち、未だ決まった婚約者の無いスカルディアのカル。もはや彼女らにとつてカルは垂涎の的である。

しかも、ロクサー又随一の美貌と言われるほどの美男子とくれば、カルの惨状は目に余りあると言つていい。

カルとて、彼女らに罪がないことは分かっている。自分を苦しめる為にここにいるわけではなく、親の期待を背に、家々の命運を背負ってカル自身に挨拶をしているのは、当然分かっている。

だが、それと自身の不快な気分とは全くの別物。それが分かっているからと言つて、気分が晴れるなどと言つことは無い。精々引きつった笑みを振り撒くのが関の山だった。

そのカルに、助け舟が入る。

「カル様、あちらにお食事の用意が出来ております。見目麗しい少女達との会話も愉しかろうとは思いますが、ミザークよりの心からのもてなし、是非お受け取りください」

十貴族の家には生まれたが、表面上当主の重きから解き放たれているテクニアが、少女達に囲まれているカルを助け出す。

「それでは、お受けしよう」

少女達の非難めいた視線と、敵意を一身に受けながらも爽やかに笑つて流すテクニアに、カルは一万の軍勢よりも頼もしさを覚えたのだった。

「ティザル、私少し部屋で休ませていただきますわ」

傍らの男に囁きかけて、ウエンディは席を立った。

「ウエンディ……」

引きとめようとする彼に、悪戯っぽく笑つと耳元で囁く。

「あまり貴方を独占しすぎて、若い少女達の嫉妬を買いたくございませぬの」

「私は別に」

いいかけるティザルを遮つて、再びヘルシオの妖婦は囁いた。

「もちろん、貴方の誠意を知っているからこそ、信じているからこそ出来ることですわ。ふふ、私の可愛いティザル。十貴族の主席ともなれば、下々の貴族の機微を推し量つてあげねば……では、失礼

します」

一人の女に固執しているなどと、下の者に思わせてはならない。そう思われてしまつては、小さき男だと評価を受けかねないからだ。そのために敢えて自分を離して男の大きさを見せなさい……ウエンデイの言葉の意味に納得すると、ティザルはウエンデイを手放した。ティザルの周囲に若い少女達が集まるのを背中であいて、ウエンデイは退出する。

向う先は、自身に割り当てられた休憩室。扉の横に控えるヘルシオの家宰が、視線だけで来客の旨を伝えるのに頷いて、ウエンデイは扉を開けた。

「舞踏会は楽しめましたか？ ウエンデイ様」

臣下の礼を取りながら、顔には無表情を貼り付けたヘリオンがそこにいた。

「ええ、従順でとても可愛らしかったわ」

家宰が扉を閉めるのを背であいてから、ウエンデイは嫣然と微笑んだ。快楽に溺れるように、とろんとした表情に誘うような甘い視線。並みの男ならず彼女の前に陥落するであろうそれを見返し、なおヘリオンは平然と首を垂れる。

「それは重畳」

「何か望むものはあつて？ 私自身でも、構わなくてよ」

濡れるような艶のある声。むせるほどの色香に、ヘリオンはただ首を振つた。

「滅相もない。私ごとき下賤の者、ウエンデイ様を望むなど恐れ多い」

「ふふ、口は達者ね。ちつとも、そう思っていない癖に……まあ良いわ」

瞳にちらりとよぎるのは、吹雪すら生温いと感じる冷えた視線。「望む物を言いなさい、レーング家の安寧ぐらいなら、かなえてあげましょう」

傲然とうそぶくウエンデイに、初めてヘリオンは顔を上げる。

「では一つお願いが」

「言ってみなさい」

「私をティザル様にご紹介して頂きたい」

ヘリオンの言葉に、ウエンディの目がスツと細まる。

「どういうつもり？ 主を馬のように乗り換えたいなどと、よもや考えてはいらっしゃらないでしょうか？」

嫣然と微笑むウエンディはそのままだが、その視線は凍てついていた。

「しからは、申し上げますが……あの方は、カル・スカルディアを相手にするには些か役者不足かと愚考いたします。先程も、感情に任せて彼に兵を率いさせると宣言するなど、折角首輪をつけた虎を野に放つのと変わらぬ」

「下級貴族が、大貴族の政治を批判するなどと、許されると思っていますか？」

「……忌憚のない意見が、ご所望かと思いましたが？」

自身の言葉に動揺しないヘリオンに、ウエンディは面白くなさそうに鼻を鳴らす。

「面白くないわね」

「続きを話しても？」

黙って頷くウエンディを確認すると、ヘリオンはさらに言葉を続けた。

「つまり、彼の影から全てを操りたい……そう仰りたいのね。随分な褒章なこと」

常と変わらぬ甘い笑みを浮かべるウエンディ。対するヘリオンも、微動だにしない無表情で彼女の答えを待った。

「……いいでしょう。私の信望厚い貴族とでも紹介することにします。ですが、その先はあなた次第よ？」

「無論、いわれるまでもありません」

「自信家ね。でも嫌いではないわ、近々ティザルに会う機会を……」
遠くから少女の絹を裂くような悲鳴が聞こえてきたのは、そのと

きだった。

気だるげに、悲鳴の聞こえてきた扉の向こうを見やると、ウエンデイは外に控える家宰に声をかける。

「どうなっているの？」

「はっ……それが、二階席でなにやら揉め事のようです。なんでもバトウ様とカル様の」

「へえ、面白そうね」

一瞬ウエンデイの瞳に、無邪気な猫のような悪戯な光が灯ったのを家宰は見逃さなかった。

「ご案内を？」

「結構よ。迷うほどの屋敷ではないわ」

歩き出すウエンデイの背中に、深く頭をたれた。

ウエンデイが二階の貴賓席に戻った時、その場は以前として混乱していた。

赤ら顔に、肥えた体を揺らしカルに向かって怒鳴り散らすバトウ。背に少女を庇いながら、バトウを睨み付けるカル。立ち上がったはいいが何もできない貴族たち、そして不愉快な表情で二人を見るティザル。

「なるほど」

小さく呟いて、事件のおおよその見当をつける。そしてウエンデイ自身が、もつとも力を発揮できる場所……ティザルの傍に向かって歩き出した。

「私の可愛いティザル」

彼女はティザルの耳元でささやいて、そつと隣の席に腰を下ろす。「ウエンデイか」

不愉快そうに眉を顰めながら、ティザルは一瞬だけ視線を向けた。だがすぐに対峙する二人の方に、視線を向けなおす。

「どうなさったの？ 先ほどまでの穏やかな空気が嘘のよう……怖いわ」

自身を抱きしめるウエンデイに、ティザルは頷く。

「全くだ。君が作ってくれた穏やかな時間を、バトウめとカルの小僧がぶち壊してくれた」

「何があつたの？」

お互いにしか聞こえないほど近く、で交わされる二人の会話。

「発端は今、小僧が庇っている少女をバトウが手籠めにしようとしたことだ。抵抗したあの少女も愚かだが、そこに割って入ったカルはもつと愚かだ」

視線を向ければカルの頬には、殴られた後がある。少女を庇った時に、もらったのだろう。切れた口の端からは、赤い血がわずかに滲む。

「ふふ……怖い人ねティザル」

「うん？」

おそらく何も考えていないティザルに、ヘルシオの妖婦が悪魔の如き囁きをする。

「出来れば、バトウを排除したいのでしょうか？ ロクサーヌーの実力者になった今、同等の力を持つ貴族なんて邪魔でしかないものね」

「……ああ」

一瞬驚いたような表情を見せたが、ティザルもウエンデイの言っていることはよくわかる。何度も繰り返されてきた権力闘争だ。負けたものは地位を追われ、勝った者は栄華を手に入れる。

「出来ればバトウには、取り返しのつかない失点を犯してほしいものだ」

だが、これ以上はなかなか難しい。後は剣でもとつて決闘でも演じてくれれば、確実にバトウのラストウーヌ家は貴族達の信頼を失うのだが。

「ふふ……任せてもらえるかしら？ ティザル」

「もちろんだ」

微笑んだウエンデイが立ち上がり、ミザークの次期当主に歩み寄る。満足の笑みを返し再びティザルは対峙する二人に視線を戻した。

「貴様つ、小僧！ 俺を……愚弄するか！」

あまりの怒りに言葉を忘れたかのようなバトウ。その彼を見返し、カルは心中でため息をついた。

カルとて、この場が半ば大貴族達が妾や妻を選ぶ場となっているのを知らないわけではない。少女達の親も、それを公認の上でここに彼女らを送り出しているのだ。

一旦、テクニアのもてなしを受けたカルが、気が進まないながらも貴賓席に戻ってきたときに、事件はおきた。

眠りから覚めたバトウが不機嫌そうに周囲を見渡し、手近にいた少女の手を無理やりつかんだのだ。唾然とする少女に一言来いとだけ、無表情で言うと言貴賓席を去ろうとするバトウ。

あまりのことに、少女の喉から悲鳴が迸った。

それがカルの理性を沸騰させてしまった。脳裏に浮かんだのは、今はなき婚約者の姿。

自身でも気がつかない内に、少女を握るバトウの手を払い、少女を背に庇っていた。気がついたのは、怒りでわれを忘れたバトウが拳を振り上げたのと、テクニアの悲鳴に似た声が同時に聞こえたときだ。

おかげで一撃もらってしまった。

全く問題ないとはいえ、バトウ如きに触れさせるなど武人としてのカルは自責の念にさいなまれる。

「君、行きなさい」

庇った少女に、瞬きにも満たない一瞥をくれるとカルはバトウの前に立つ。バトウの視線を真っ直ぐに見据えて一歩前に出る。

あまりに堂々としたその態度に、一歩ひるむバトウ。殴ってしまった後で、思い出したのだ。目の前に立つ少年は、つい先ごろまで戦場を縦横無尽に駆け回っていた凶暴な獣なのだ。その冷たい湖水色の瞳が、すぐにでも自身の喉首を掻き切るうとしているかのよ

うで、バトウは背に汗をかいていた。

しかしここまで来て引き下がれない。既に周囲の耳目の全てを集めて居るこの状況で、逃げるなどもつてのほか。

臆病者と誇られるのは目に見えていた。

「おやめください！」

バトウの危機を救ったのはミザークの衛士達の声だった。

「放せ！ あの小僧、許せぬ！」

自身の言葉が虚勢と知りつつも、だが演じねばならないバトウ。体を抑える衛士を確かめながら、カルに向って手を伸ばす。

「カル様、こちらに」

一方のカルは、一瞬だけ衛士の持つ武器に視線を向けるとすぐにバトウに背を向ける。

「逃げるか、小僧！」

バトウの罵声を背中では聞きながら、側に駆け寄ってきたテクニアの案内に任せる。カルとしては、こんな茶番は早く終わらせてしまいたかった。

目の前で醜く騒ぐバトウよりも、心の中にいるルクの幻影に暗澹たる気分だった。

「本日はまことに、申し訳ありませんでした」

既に夜は深い。月と星が照らす夜空を一度見上げて、カルは声の主に向き直った。

「君のせいではない」

昼間からすればやはり芯と冷えた夜の空気。ミザークの豪華な玄関を出たカルに、深く頭を垂れたテクニアは陳謝した。

「それより、バトウに絡まれていた少女……彼女とその家を守ってやってくれ」

「出来る限りのことをさせていただきます」

「では、世話になった」

玄関の前に付けられたスカルディアの馬車。中には、既にヘリオンが控えていた。カルの馬車が見えなくなるまでテクニアは頭を下げたままだった。

「侍従長を、先の騒ぎになった家を調べよ」

馬車が見えなくなり、あたりに静寂が戻る。テクニアは、傍らに控える侍従長に命を下し、厳しい顔つきのまま貴賓席に向った。

「ラストウーヌの当主と争いを起こしたそうだな」

「……ああ」

窓の外をのぞき、心ここに在らずという風のカルにヘリオンは眉をひそめた。

「なんだ、そんなに殴られたのが効いたか？」

「いや、二つほど思い出したことがあった」

視線は以前窓の外、流れる夜景を眺めてカルは独白する。

「一つは守りきれなかった人のこと」

敢えてヘリオンは沈黙を守る。

「もう一つはカステイヤーの舞姫のことだ」

「ヘルシオ家のウエンディ様か」

虚ろな視線の先、今ではなく過去を追いかけるカルの瞳。

「ウエンディ・カステイヤー」

湖水色のその瞳が、実像を結ぶ。

「なぜ、今まで忘れていたのだろうか。私はあの人の踊りが好きだった」

絶望に頭を抱え込んでしまいたくなるカルを他所に、未だ傷の癒えないロクサーヌの夜を、馬車は疾駆していた。

謀略の使徒23（後書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

そろそろ、> 謀略の使徒<も終わりが見えてきました。

誤字脱字などあれば、> 指摘お願いします。

謀略の使徒24

ミザークの夜会から20日が経っていた。

ロクサーヌから馬で南へ向うこと1日。一面に広がる麦の畑は、未だ青々とした穂を風になびかせていた。

スカルディア家の所領。かつて、スカルディア家はロアヌキア成立以前はこの都市の完璧なる支配者であった。シフォンの旗の下に集つてより500年余年、安堵された領土は僅かに減少したが、ほとんどもを原型のままとどめている。

民の信望は未だスカルディアの旗の下にあり、その軍は精強の名をほしいままにしていた。

所領の中心都市スカルディーナに、カルは漆黒の鎧を身に着けて帰つて来ていた。王侯かと見まごうばかりの豪勢な屋敷。いや、屋敷と言うには語弊があるかもしれない。常に戦を考えて作られたそこは城だった。

矢を受けても問題にしない石作りの壁に、敵を遠くから発見できるように高く作られた尖塔。兵を収容できるだけの広大な中庭に、武器庫、貯蔵庫。およそ戦に必要なモノ全てがそろつたその場所が、スカルディアの本拠地だった。

カルが帰還するのに従つて、スカルディアの領地には前もつて布告がなされていた。

ポーレの軍勢を打ち破る戦がある、志願するものは貴賤を問わない、と。

その布告を受けて中庭に集まつた領民、傭兵達の視線を一身に集めながら、カルは故郷の心地よい風を感じていた。穏やかに吹く風は誰に対しても優しく包み込むようだった。豪奢に輝く金色の髪を靡かせ、漆黒のよろいをまとうカル。その姿はこの世のものではないほどに美しく、その場にいるものは一様に息を呑む。

「よく集まってくれた」

凜として響く声が、全員の耳を打つ。

「代々この地を治めるスカルディア家の当主として、またロクサーヌを統べる者の一人としてここに集ってくれた勇氣あるものに礼を言っ」

黒の籠手に覆われたカルの手が、蒼穹に向けられる。そこにある何かを掴むように、伸ばされた刻印の宿る右手。

「共に！」

蒼穹を揺るがす歓声に、スカルディーナが震えた。

「エルシドどこだ！？」

扉をぶち破る派手な音共に、建物全体を揺るがす怒声が響く。朝焼けにけぶるポーレの街中。夜目覚めて朝眠りにつくその酒場街に、少女の姿があった。背に負うは傭兵が好んで使う幅広の剣。重厚さよりも軽さを重視して作られたよろいをまとう姿は、見たものに活潑な印象を与える。

「う、おおう……」

丸テーブルの上に突っ伏し、地の底から湧き出すような低い声でエルシドは返事とも呼べない返事をする。周りに散らばる酒瓶と、力らなく上げられた右手、ついでに言えばその体から滲み出る強烈な酒のにおいで彼が何をしていたのかなど、一目瞭然だった。

そして彼の周りには同じように、酒に酔い潰された男達が十数人……。

「シユセさまから頼まれてなきゃ、絶対見に見捨ててるのに……」
ぼやいてカウンターから勝手に水を運んでエルシドに近づく。

「おう……すまね」

手を出したエルシドの頭上から、少女の持った水が降り注ぐ。

「おきたか？」

極めて事務的に口にする少女に、頭を振ってエルシドは体を起こした。

「一応貴族の子女がよお、そういう下品なことするのはどーかと思うぜ、アンネリー？」

二日酔いに頭が痛むのか、苦悶の声をあげながら体を起こすエルシド。

「育ちが悪くてね」

ふん、と鼻を鳴らすアンネリーにエルシドは苦笑した。

彼女が来てからすでに20日ほど、予想以上に傭兵達の間には彼女はなじんでいた。

「それで、何の用事だ？」

欠伸をしながら聞くエルシドを冷たい目で見下ろしながら、アンネリーは口を開いた。

「出陣だつてよ。色ボケジジイがロクサーヌを攻めるために出るんだとさ！」

エルシドが傭兵として雇われているのは、ポーレの実力者ローフーという男だった。兄である病床のポーレ領主ロイドに代わりポーレの実権を握ってより二年。その羽振りはすさまじいものだった。

傭兵を主力に数をそろえること4000。その兵力を持ってロクサーヌを伺う。いくつかある傭兵達の集団の中の重要な地位にまで、エルシドは上っていた。

「まったく、強欲が過ぎると怪我するつてのに」

のろのろと体を起こし、水でぬれた髪を撫で付ける。

「さつさと働け！ 私はシュセ様からお前の監視も言い付けられるんだからな」

「自分から監視だなんていう奴がいるもんかねえ……それじゃ役目も果たせねえだろう？」

無精ひげをなでつつ、ぼやくエルシド。

「黙ってたらなんか気分悪いだろー！」

その気性を、快く思いながらエルシドは苦笑した。

「何がおかしいんだ！」

「いやいや、仕事だ仕事」

「じゃ、私は先に行ってるからな！ 遅刻するなよ」

「へいへい」

一呼吸置くと、店の中でいびきをかいている傭兵達に声を張り上げた。

「やい、てめえら起きねえか！ 仕事だ！」

空気が震える錯覚を起こすほどの音量に全員が飛び起き、起きてから何事かと周囲を見回す。

「行くぞ！」

品などあるうはずもないその仕草、だが獰猛な獣を思わせるエルシドの笑みに、傭兵達は互いに顔を見合わせる。それぞれに何かを確認しあうように頷くと、エルシドの後を追って走り出した。

「お目にかかるのは、二度目になります」

慇懃に頭を下げる男を見下ろし、ティザルは冷たく笑った。

「地下牢の男か」

視線を傍らに控えるウエンディに向けると、首を振る。

「君が紹介したい男がいるからと、時間を割いてみれば……このよ
うな男とは、少々戯れが過ぎるのではないかね？」

美しく装いをしてティザルの近くに侍るウエンディ。

「最近の貴方ときたら、政務ばかりで私にかまってくださらないの
だもの。余程政務が楽しいのでしょうか？ 少しぐらいの嫌がらせは
許してほしいものだわ」

ウエンディの言葉に苦笑して、ティザルは首を振る。

「女性とは怖いものだな、今後は気をつけるとしよう」

「ふふ、そうしてくださると私の気分も晴れますわ」

にこりと笑ってティザルに返事をするウエンディが、僅かにヘリオンへ視線を向ける。

「お話は済みましたかな？」

途端に不機嫌な表情を見せるティザル。それを意に介せずヘリオンは再び口を開いた。

「犬ですら躰をすれば礼儀を覚えるというのにな」

「礼ですと？ 貴方と貴方の大事な方の危急を救いに来た者に、礼を失するですか」

ヘリオンが冷笑する。先ほど見せたティザルの笑みが北風なら、ヘリオンは吹雪とするほどに違う。それほどまでに冷たく凍て付いた笑みでヘリオンはティザルを見る。鬼気迫るほどの気迫、ヘリオンの笑顔の裏から感じられる気迫に、ティザルは気圧される。自分の前に這い蹲るだけだと思っていた男の気迫に、一瞬虚を突かれたティザル。

「ならば結構。勝手に滅びればよろしいでしょう」

「待て！」

きびすを返そうとするヘリオンを、ティザルはつい反射的に呼び止めていた。

「話を聞く度量があまりで？ 十貴族首座、ティザル・ケミリオ殿」

「諸人の言とて、聞くは為政者の責務。かまわぬ。話せ」

振り返ると、ヘリオンは再び片膝をつく。

「では、ティザル殿は身近な危険について、考えたことがおありかな？」

「なに？」

ウエンディに向けて訝しげな視線を向けるティザルと、常と変わらない微笑のポーカーフフェイスを保つウエンディ。

「落とし穴は、ついそこまで迫っています」

「前置きはいい！ 結論を言え」

もったいぶったヘリオンの言葉に、ティザルは静かに怒声を放つ。「ならば、盟友バトウ・ラストゥー又殿に謀反の動きあり、と申せ

ばお分かりいただけますか？」

語られる言葉は毒。

「……世迷言を」

僅かに空いた、その間にヘリオンの毒が染み入る。

「果たして世迷言で済めばよろしいですが、バトウ殿は最近私兵を大量に解雇なさり、次いで新しく雇い入れているではありませんかな？」

「……それは前の家宰を解雇したためだと、連絡を受けている」

「ティザル殿。あまりにも貴方は善良でいらっしやるようだ。では、このように考えたことはございませんか？ 勃興新しきラストウー又家、僅か100年の間に家を興し十貴族に上り詰め、次いでこの度の功績で次席の地位まで得られた」

ティザルの眉が歪むのと、ヘリオンの口元が歪むのは同時だった。

「残る席は、後ひとつ。今貴方が座っておられる席のみだと」

「そこまでいうからには証拠でもあるのだろうか、ラストウー又がケミリオに反旗を翻すに値する確かな証拠が！」

「こちらをご覧ください」

差し出されたのは一通の書状。

「なんだこれは、解雇された家宰の忠誠を誓う書状ではないか」

「然り」

ラストウー又家宰の書状。差し出されて意味がわからず、眉根の皺を深くするティザル。

「聡明なティザル殿なら、お分かりかと思いますが……なにゆえこの者はバトウ殿に忠誠を誓い続けるのでしょうか？ ご存知のとおり、先の内戦に際してあれだけの武勲を挙げたにもかかわらず、小さな非を咎められ家を追われたこの男が、なにゆえ」

「つまり……」

「この男は、バトウに言い含められているではありませんか？」

一旦解雇はするが、再び雇い入れると。そしてその時は、ラストウー又が口クサー又を握るときだと」

ふむ、とティザルは考え込む振りをする。ある種の期待を持って、再びヘリオンが口を開くのを待つ。

「そなたは真に忠誠心溢れる者の話を聞いたことはないのか？ 隣国ポーレなら生涯夫を娶らず国に忠誠を誓い続けたシェーラ・パルミンド。我がロアヌキアなら」

「宰相ヴァージネル」

ヘリオンの言葉に満足そうに頷くティザル。ヴァージネルこそ、ケミリオ家の礎を作った誇るべき祖先だ。

「仰るとおり心の忠誠心を持った者がいることは確かです。ですが、真の忠誠心とは高貴な魂を持った者にしか宿らぬものでしょう？

お考えください、どここの馬の骨ともわからぬラストゥーヌの家宰が、貴方の誇るべき先祖と同列なのかどうかを」

「それは、確かに……お前名はなんと申したかな？」

「ヘリオンとおよび下さい」

鷹揚に頷くティザルに、深く頭をたれるヘリオン。

「お前の言うことはもつともだ。確かにラストゥーヌ家宰が我が栄光の先祖と肩を並べることなどありえぬ。だが、それだけではラストゥーヌ家謀反とは言いがたい……そうであるう？」

後一押し、有力な決め手となるものが必要だった。

「では、ひとつ私に妙案がございます」

「不本意ながら、私は今スカルディア家の推官をしております。それによって得た情報ではございますが、近々平民の衛士達が大規模なストライキを起こすとか」

「ほう」

「故に、ティザル様に置かれましては、そのストライキをバトゥ殿にお命じになり、速やかに収めていただきたく存じます」

「バトゥに？ だが奴は……」

「左様、そのような作業はあの方のもつとも苦手とするところ。故にです、衛士達が暴発するのは必然と言えましょう？」

「なるほど」

ティザルにも、ヘリオンがなにを言いたいのか読めてきた。つまり、目に見えて罪がないのなら、作ってしまったえば良いと言っているのだ。

ラストウーヌ家のバトウを、ロクサーヌの民を圧迫するものとして陥れよ、と。

「面白い……お前の忠言確かに聞き届けた」

「しからは、私はこれにて」

退出するヘリオンに、視線を向けたままのティザル。その耳元に唇を近づけて、ウエンディは囁いた。

「あまりあの男を信用するものではなくてよ？」

「もちろんだ。鼻持ちならない才子だが、使える限りは使ってこそ十貴族首座だろう？」

「ふふ、さすがは私のティザル」

「小僧は今頃、大河ルプレか」

ウエンディの表情を盗み見るティザルだが、ウエンディには漣ひとつたつていない。

「スカルディアを消耗させ、ラストウーヌの名を地に落とす。まずはケミリオ家の安定は固まっていけばかりだな」

哄笑の声をあげるティザルに、ウエンディはそつと心の中で晒した。

ロアヌキアと自由都市郡を隔てる大河ルプレ。古来よりこの河を越えて遠征をさせた例は少ない。あまりにも広い川幅、加えて周囲一体を潤すほどの水量。

対岸に見えるのは、ひしめく敵の軍勢。

ポーレの領主代行、ローファーに率いられた軍勢は河の西側に陣を張っていた。

普段は河を渡る為の小船が行き来する船着場は、小船の姿すら見

当たらずいつもよりも僅かに水量の少ないルプレが横たわるだけだった。

東岸に見えるのは、風にたなびく紋章旗。交差する二つの蛇槍。概ね2000程か」

肥えた腹を馬上でゆすりながら対岸を見渡すローフー。傍らには四騎の影がある。傭兵隊長エルシド、その副官アンネリー。そしてローフーの番犬よろしく待る未だ若い騎士と初老の騎士。

「いや、もうちと少ないな」

答えたのは、斧槍を肩に担いだエルシド。

「勝てそうではないか。では今すぐ進軍しようぞ」

脂ぎった顔が極上の料理を前にしたように弛む。

「この水量でか？ 対岸に着く前に半分はやられちまうぜ」

「差し出がましいぞ、たかが傭兵隊長の分際で！」

エルシドとローフーの会話に口を挟んだのは、まだ若い騎士の男だ。

「大体半数がやられたとて、こちらは4000もいるのだ。2000居れば奴らなど蹴散らせる。傭兵達も版図回復の栄光を担えるのだ。喜んで死んでくれるだろう」

「栄光ね。別にそれでもいいが、大将の守りはどうする？ 単騎で構わないんなら」

涼しい顔で切り返すエルシドに、若者は青筋を浮かべて怒鳴り返す。

「ローフー様は貴様のような臆病者とは違う！ 栄光あるポーレの領主代行ぞ。当然ご一緒に攻めに加わられるわ！」

水を向けられたローフーは僅かに、頬の肉を引きつらせたが、困ったようにエルシドを一瞥するにとどめた。

「大将はそう思っていないようだがな」

「なにい！？」

「ま、好きにすりゃ良いさ。俺は俺の任された仕事をする。アンタはアンタで頑張ればいい。そうだろ？ 若きパルミンド家の坊や」

「貴様が、軽々と口にしていい名ではない！」

ローフーの視線が、惜しげもなくさらされたアンネリーの太ももの上を這いずり回っているのを横目で確かめると、エルシドは獰猛な笑みを浮かべて馬首を返す。

「アンネリー！ 戻るぞ」

「あいよ」

ローフーの視線を徹頭徹尾無視しきってアンネリーもエルシドに続く。

二人は割り当てられた天幕の近くに來ると、ひらりと馬を下りる。

「くそ、あのエロボケジジイがっ！」

地面を蹴り飛ばし、それでも収まらないのか背に負った剣までも抜き放って怒り狂うアンネリー。

「おお、可哀想な母なる大地！ お前に何の罪があるうか」

「うるさい！」

茶々を入れるエルシドを親の敵でも見るようにして睨み、そこにローフーの顔でもあるかのように、突き抉り蹴り飛ばしながらアンネリーは怒鳴り返す。

「いつか思い知らせてやる！」

最後に土くれを蹴り飛ばして鬱憤を収めたアンネリーは、剣を鞘に収める。

「んで、さっきのあれはなんだったんだ？」

鋭い視線を向けるアンネリーに、惚けた調子でエルシドは肩をすくめた。

「ありや作戦会議さ。そのものだっただろっ？」

アンネリーの眉間が深い谷間を作る。

「さっきのあれが、か？ 口喧嘩してただけじゃないのか？」

「ああ、さっきのあれがさ。元々統一した指揮権もないようなもんだしな。一応ローフーを大将に仰いでいるが、あの爺さんが主導権を發揮するとも思えないし、パルミンズのひよっ子は、真性の馬鹿だしな」

ふん、と鼻を鳴らしてアンネリーは腕を組む。

「自分で誘導しておいてよく言う。指揮権をあいまいにしたのも、パルミンズの馬鹿を引きずりだしたのもお前なんだろ？」

「戦争に善人は邪魔なだけだからな、わかるか？」

「お前が悪人だって野は良くわかる」

「で、その悪人の下にいる副官殿、ちよいと下の奴らを集めてくれ。作戦会議つてのを開こう」

「りょーかい」

不貞腐れたように再び馬に飛び乗ると、アンネリーはすぐに駆け去る。

それより二刻後、約4時間血気に逸ったポーレ主力の一部が大河ルプレをわたり始めた。

謀略の使徒24（後書き）

更新が大変遅くなり申し訳ありません。

引越し作業に追われ、新しい環境になじむのに時間がかかっております。

更新頻度が加速度的に落ちていますが、ご容赦ください。

謀略の使徒 25

火蓋を切ったのはポーレの若き将が率いる部隊だった。

「目の敵を打ち破り、歴史に名を残せ！ 全軍渡河！」

血気に逸るその部隊を横目で眺めながら、エルシドは醒めた視線で戦場を見渡していた。

「こりゃ、全滅もあるかな」

傭兵特有の軽装に、片手には斧槍を軽々と扱う。

「ローフーから伝令だぞ、私たちも進めって」

苦虫を噛み潰したような苦い表情で告げるアンネリー。その言葉にエルシドは、眉をひそめた。

「死んで来いつてか？ お前行きたい？」

「誰が、素人の私にだってわかる。河を渡った先に待ってるのは」

「一方的な虐殺だろうよ」

「でも命令だろうが！」

「あん？ ああ、じゃその伝令手を連れて来い」

エルシドの意図が読めないままに、彼の前に伝令手を連れてくるアンネリー。

「よし、てめえら休憩だ！ 今のうちに飯でも食っとけ！」

部下に向かって声を張り上げると、

「っ！……これは、どういうことか、エルシド殿！」

武器を下ろし、完全に停止しているエルシドの軍を見た伝令は、怒りで顔を赤くする。

「どういって、見た通りに休憩中さ」

「伝令は伝えたはず！ ローフー殿よりの命令です。全軍でルプレを渡りロアヌキア軍を殲滅せよと！」

「ああ、その命令だが……傭兵隊長エルシドが席をはずしてて実行できずだ」

「なにをふざけている！ お前は目の前につ！」

「本人が居ないといっているんだ。これ以上確かなこともあるまい？」

「な、なにを！ これは明らかな反抗罪だぞ！」

「分かつちやもらえんか……」

ため息をつきつつ、伝令の傍によると。

片手に持った斧槍を一閃する。長大な斧槍の重さを感じさせない軽やかな動きで、その石突が伝令の後頭部に叩き込まれる。

「おい！」

「あー、勤勉な伝令手は不幸な事故により命令伝達不可能になった……ま、そういうことだ」

何か言いたげなアンネリーにひらひらと手を振って、エルシドは背を向ける。

「介抱してやれ。ただし、この戦が終わるまで逃がすなよ」

「やつぱりお前悪人だな！」

「そんなに褒めるなよ」

近くの傭兵を呼んで伝令兵を運ぶアンネリー。一方エルシドは、渡河を実行しようとするポーレの軍団を見据えていた。

「さて、カル・スカルディア……ちつとは戦が上手くなったかい？」
獰猛な笑みは、猛々しく燃える彼の内面を映すようだった。

ポーレのエルシドを除く3000の兵力は、船を繋げて橋として渡河を開始した。本来ならば全員を船に乗せたいところだったが、それだけの船を確保することが難しかった為に船同士を繋げるという行為にでたのだ。

敵から飛んでくる矢を大盾で防ぎながら、一人が船のすぐ傍に杭を打ち込む。その杭でもって船を固定し、そして更にその前に船がでて同じ作業を繰り返す。固定した橋に人が渡れるだけの板を渡し

て即席の橋とするこの時代では一般的なものだった。作業に文字通り命がけの作業となる。

東側から丸見えの作業に、当然妨害は入って然るべき。

だが、ロア又キア側から入って当然のその妨害が一切なかった。予想された障害もなく順調に進みすぎる作業。だがそれに注意を払うべきポーレの指揮官は、そこまで考えなかった。

「これこそ神の恩寵！ この機を逃すな、一気に橋を完成させよ！」
西岸から東岸に向けて無数の橋が造営されていく。

亀のように固まり、音もないロクサーヌの軍勢。それどころか、川岸から遠くに離れる始末。移動するロクサーヌの兵士の数を見れば、大盾の影に見える人影の少なさに、渡河中の兵士たちが活気付く。

「今しかない！ 急げ」

そこかしこで聞こえる声に、一心不乱に渡河作業を進めるポーレの兵士たち。

ロクサーヌの軍勢は少数であり、ポーレの軍勢に恐れをなして逃げ腰なのだ。楽観論に過ぎるその考えに大多数の兵士が靡き、先を争って渡河を進める。

そんな中、東岸ロクサーヌの軍勢から豪華な鎧を纏った一騎が軍勢を割って飛び出してくる。旗持ちが二騎その後を追って、走り出す。紋章旗に描かれたのは、交差する蛇槍。スカルディア、敵の総大将を象徴する紋章に軽いどよめきが、ポーレの軍勢の中から起きた。

敢えて顔をさらし、豪華な金髪を靡かせた少年が渡河作業中の兵士に向かって大音声を張り上げる。

「降伏せよ、さすれば命までは取らぬ！」

勝利は目の前、そう考えていたポーレの兵士にとって、それは冗談かあるいは基地外の妄言でしかない。途端に、大爆笑が起きる。

「お前が、ひいひい泣いて俺の下にうづくまってくれたらな！」

「よおし、待つてるよ可愛子ちゃん」

下品な罵りの言葉を受け、少年は立ち尽くしているように見えた。

「ははは、この期に及んで降伏勧告とはな」

川の西岸、東岸近くに立つカルの言葉にエルシドもまた笑っていた。

「何が可笑しいのかわかんねーけど、私達はこのままで良いのか？隣で少しも笑わないアンネリーが、冷たい言葉で質問する。

「何もする必要は無さそうだけ。まあ敢えて言うなら逃げ支度だな」「ポーレから、か？」

幾分声を低めて、問いかける彼女にエルシドは厭らしく笑う。

「いやいや、この戦場からさ」

「……カル様、危なくないのか？」

対岸に立つカルに視線を向けるアンネリーは、年相応の少女のようだった。

「平気だろ」

「なんで！？ 大分兵の数も少ないらしいし……」

「ちよつとそこ、見てみな」

指さしたのは、川縁。くつきりと水の跡が残る程に大河ポルレの水位は下がっていた。

「これがどうかしたのか？」

「この時期ポルレ上流のヒルダナ連峰は、雪解けの時期を迎えてな水位は上がりこそすれ、下がるなんてまずねえのさ」

眉をひそめるアンネリーに、エルシドは見るからに悪人のような笑みを浮かべた。

「けど、」

「下がるはずのない水位が下がるってことはだ、つまり、誰かが上流でせき止めているってことだろ？」

「誰かって……まさか！」

アンネリーはエルシドに向けていた視線を対岸に立つカルに向ける。西岸から東岸に向かう橋は数を増していた。今やほとんどのポーレの軍勢が、カル目掛けて川の中にいた。気の早いものは矢を構え、カル目掛けて射ている。

静かに佇むカルが、すつと手を挙げると、ロクサーヌの軍勢の中から狼煙が上がる。

大河ポルレを揺るがす地鳴りが、全てを飲み干す瀑布を伴って押し寄せたのは、それから間もなくのことだった。

阿鼻叫喚。

押し寄せる津波のごとき濁流にポーレの軍勢は崩れた。階級も出自も関係ない。力の弱いものを押しのけ、仲のよかった友を川へ突き落とし、一歩でも早く西岸へ上がるうとありの群のように殺到する。

後ろから迫る濁流は、勢いを留めることなく上流にいた部隊を飲み込み、貪欲に次の部隊をさらっていく。あまりにも早い死神の波は、呆然と佇む者、必死に逃げるもの、一か八か川に飛び込む者、すべてを飲み込み下流へ流れていった。

後に残るは、無残に濁流に食い散らされた船の残骸と屍の群れだった。生きている者が稀なその場に無慈悲な声が響く。

「構え！」

見れば表情一つ変えず、水の地獄を見守っていたカルが、右手を挙げている。いつの間にかその背後には、ロクサーヌの軍勢が控え、半死半生で生き残った水中のポーレの軍勢に弓を構えていた。

「た、助け」

「放て！」

助けを求める声を掻き消す号令に、一斉に矢が放たれる。屍にもまだ息があるものにも平等に、降り注ぐ死の雨。

もはや動くものがなくなったのを確認して、カルは己が軍勢に氣勢をあげさせた。

「さあて、撤退だな」

カルの指揮ぶりを目にしたエルシドは、満足そうにきびすを返す。

「エルシド殿！」

その彼に伝令が飛び込む。

「何をしておられるか！ いやそれよりも、なぜ動かないのか！」

「いやいや、これはだな」

のらりくらりと、伝令の叱責をかわすエルシド。カルの余りにも苛烈な戦ぶりに、アンネリーは茫然としていたが、時折寄せられるエルシドからの視線に、舌打ちした。悪人の司令官に、悪人の副官だな、と心の中で吐き捨てて馬を引き寄せる。

馬に乗ると、部下に撤退の命令を伝えに走る。

「撤退だ！ 荷物をまとめろ！」

部下から湧く歓喜の声に、背を押されアンネリーは未だ問答を続けるエルシドの下へ向かった。

「わかったわかった、ローフ殿には俺から言っておくから」

「いや、しかし……」

強引に話をまとめるエルシドと、なお渋る伝令。そのやりとりの中に、アンネリーが割り込んだ。

「撤退準備終わったよ」

酷く恨みのこもった伝令の視線を受け流し、アンネリーはエルシドに報告を続ける。

「ロクサーヌも帰り支度してるみたいだよ。今回の戦は終いだね」
アンネリーからの報告を満足そうに聞き終わると、伝令に向き直る。

「と云うことですから、ローフ殿の所には後で俺が行きますよ」
「くっ」

撤退を始めるポーレ唯一の戦力を、指をくわえて見ていなければならぬ屈辱。それを噛み下し伝令は身を翻した。

「さて、撤退だ」

アンネリーに笑いかけてから、エルシドは対岸を見やる。引き揚げていくロクサーヌの軍勢に、満足そうに視線を送りながら、戦場に背を向けた。

「何だと!？」

豪華な机に拳を叩き付け、額に青筋を浮かべたバトウはその報告に、わめき散らした。

平民出身の衛士達のストライキ。ロクサーヌの中央広場で行われるそれに、衛士の大多数が参加し衛士の長の解任を求めて、氣勢をあげているのだ。

「おのれ、無知蒙昧な愚民共めが！」

ケミリオ家からの使者は、ティザルから“迅速な処置を求めるとの伝言を数度にわたり矢継ぎ早に伝える。

「俺の実力のほどを疑っているのか！」

バトウの苛立ちは、最高潮に達しようとしていた。先日家宰を解雇し、押さえるものの居なくなったバトウは、配下の衛士全員に召集をかけた。

既にカルはポルレで大勝を収め、ロクサーヌへ向い帰還の徒についている。それが伝われば、また平民たちが勢いづく。

バトウにとって伝統ある貴族が上に立ってこそそのロクサーヌ。それが秩序であり、それを乱すものはすべからず秩序を乱す者でしかなかった。

「愚民どもめ！」

バトウは貴族出身の衛士全員を率い、中央広場へ向う。

平民のストライキ一つ鎮められないと思っているティザルの鼻をあかすいい機会だと、バトウは考えていも居た。最近ティザルとい

えば、十貴族首座の地位をやたらと強調し、鼻持ちなら無いこと甚だしかった。

誰のおかげでその地位に就いているのか。忘れたと言わせるつもりは無い。今回の平民のストライキを一拳に鎮め、バトウの手腕を見せ付ければティザルもバトウを、ラストウー又家を重く用いざるを得ないだろう。

「見ておれよ！」

猛々しく吼えると、部下を一喝して速度を上げる。

広場に集まる野次馬を？き分け、平民達を包囲する。

「貴様ら、このようなことをしてただで済むと思うか！？」

従えた衛士は完全武装、対して広場に集まっているのは武器もろくにもたない者達。

だが、その歴戦としてある力の差に平民達はおびえることすらしない。少なくともバトウの眼にはそう映った。泣いて許しを請えば良いものを、バトウに反論すらしてみせる。

「お前こそ、衛士の長の地位を利用してどこまで汚職を重ねるのだ！」

「我ら正義と徒であるはずの衛士の長に、貴様は相応しくない！」

「今すぐ職を辞せ！ そんなことだから家宰にも愛想を尽かされるのだ！」

飛び交う罵声。

「なき、貴様らああ！」

その罵声を聞き流せるほどにバトウは余裕など無い。平民など、脅せばすぐに膝を屈するだけの存在のはずだった。暴力でもって締め上げてしまえば泣いて命乞いをする。

それがバトウの見てきた平民である。

では、目の前の奴らは何なのか？ 武器も持たず、圧倒的に弱いはずの奴らが命令に従わない。それどころか抵抗すらしている。

こんなはずではない。

バトウの脳裏を占めるのは、その言葉だけになっていた。

そうか、脅しがたりないのか。

「ラストウー又家を侮辱するか！」

手にした鞭を振り上げ、手近に居た平民を打ち据える。

「やめる、貴様！」

「抑える！」

騒ぐ平民を衛士に抑えさせ、平民を徹底的に打ち据えた。

だが、打ち据えたはずの平民が見返す瞳は。

「バトウ……」

怒りさえ含んだその声に、その瞳に先日のカルが重なる。

「くっ……おのれ、貴様らっ！ ここまでできてはまだ従わぬか！」

「もう俺達はお前なんかには従わない！」

「うわあああ！」

再びバトウが鞭を振り上げたとき、衛士の隙間を縫って、一人の平民がバトウに体当たりをする。

尻餅を付いて鞭を取り落とすバトウ。一方平民は仲間を助け起すと、仲間の下に向おうとする。

「許さぬ。許さぬぞ！ 一人残らずひとつとらえよ！ 抵抗するなら殺しても構わぬ！ 叛徒を捕らえるのだ！」

響き渡る怒声に、平民達ももう黙っては居なかった。仲間を助ける為に衛士達に立ち向かう。

その場は一瞬にして大混乱に陥った。

「仲間を救え！」

元々、包囲されている平民出身の衛士達の方が数は少ない。だが、野次馬を含めれば平民の数は衛士の数を軽く圧倒する。

いかに完全武装の衛士といえども、その数には手を焼いた。

暴徒と化した平民相手に、死傷者を出しながらバトウを連れてその場から撤退するのが精一杯。

ともすれば命の危険すら覚えつつ、バトウは衛士の宿舎まで撤退せざるを得なかった。

遠く平民区から立ち上る黒煙に、にんまりと笑みを浮かべる。

「バトウは予想通りにしくじったか」

ティザルが声をかけたのは傍らに居るウエンディ。

「ええ、これでラストウーヌの名は失墜ですね」

「バトウから援軍を求める書状が来たが、さてどうしたものか」

書状を握りつぶしながら、冷たく笑うティザル。

「助けてあげても良いのではなくて？ あのような男でも使い道はあるでしょう？」

「ふむ」

もしラストウーヌの武門を支えていたあの家宰が、未だバトウと繋がっているのなら助けておいて損はない。バトウ個人は引退させ、その縁者に家門を継がせれば良い。財を握るケミリオ家において武門を担う人材が不足していた。

バトウと二人でオウカに反旗を翻したときですら、自身の家からは人を出さず傭兵を雇ったに過ぎないのは、何も計算してのことではない。そうせざるを得なかった家の事情と言うものが大きい。

「バトウ個人はどうでもいいが、あの家の武力は馬鹿にはできぬ」
カルとの戦いを経て、ティザルは今まで侮っていた武門の力を再認識していた。ロクサーヌを統べ、ロアヌキアを治めていくなら必ずそれは必要になってくる力だ。

熟練した戦人が簡単に手に入るとはティザルも考えていなかった。傭兵は信用ならないし、一から将を育てる余裕などありはしない。目下最大の敵は、大河ルプレで大勝を収め、帰還の途についているあの男だ。

故に、暇の掛からぬ方法で補強をせねばならない。ケミリオ家がロクサーヌの主になる為に。

その結論が、他家の人材を貰い受ければよい。というものだった。

「ラストウー又家から離散した私兵の居所が必要だな」

「ヘリオンならば知っていそうですね」

「なかなか便利な男ではないか、流石に君が推薦するだけのことはある」

邪悪な笑いかみ殺し、テイザルはウエンデイを見る。

「でもお気を付けになって、信用なさってはダメよ」

「当然だ。スカルディア家を亡き者とした後には、かの男も始末する」

「ふふ、怖いこと」

「さて、暴徒を止めてやらねばな」

外に控える侍従を呼びつけ、十貴族の召集を図る。

大河ポルレからの帰還の途上、カルがその報告を受けたのはロクサー又まで後2日といった距離だった。

「ロクサー又中央広場で行われていた集会にバトウ率いる衛士が乱入！ 死傷者多数を出しながら平民達は暴徒化しております！」

愕然とその報告を受け止めたカルは、右手で顔を覆い歯を砕けるほど噛み締めた。

「愚か者が！」

地獄の獄炎すら生温いと感じるほど濃密な怒りの炎が、口から漏れ出る。

「奴らは何も見えていないし、考えてもいない！」

「殿下！」

「何事だ！？」

入ってきた伝令に燃えたぎる怒りのまま答えてしまい、瞬時に後悔する。

「いや、すまぬ。気が高ぶっていたようだ」

怯えたように立ち竦んだ伝令は、気を取り直して頭を垂れる。

「お喜び下さい。シユセ様無事ご帰還にございます」

「……っ、そうか。通してくれ。他の者は下がってよい」

今すぐに自分から会いに行きたい思いをこらえて、カルは努めて無表情を通した。

しばらくして現れたシユセは、天幕に入るなり直ぐに頭を下げる。

「申し訳ありません。カル様の戦に間に合いませんでした」

間に合わないのが当然の速度。だが、それを罪であるかのように白亜の騎士は懺悔する。

「シユセ」

かけられた言葉に騎士が顔をあげることはない。その気高き騎士に、カルは椅子から立ち上がると歩み寄る。

「よく戻ってくれた」

暖かな抱擁と、降ってきた言葉にシユセは唇を噛み締めた。

「……はっ！」

僅かに震える主の言葉、それに応える騎士の返事もまた震えていた。

いつまでも、彼女を抱き締めていたいと言う欲求を、神経を剥がす覚悟を持ってなんとか抑え込むと、カルは彼女に言葉をかける。

「今日の夜にはここを発ってロクサー又へ全力で引き返さねばならなくなつた。今のうちに休め」

「御意」

シユセが退出すると同時に、カルの思考はロクサー又へ向いていた。

「バトウ、テイザル……」

倒さねばならない。彼らを始めたこの体制を、この国のために。戦火に燃えるロクサー又を脛の裏に見ながら、カルは拳を握りしめた。

「……それで、あなたは私にケミリオ家の当主に仕えよ、と申されますのか」

古びてはいるが、よく手入れの行き届いた邸宅。客間にはティザルの使いとしてヘリオンが、元ラストウーヌの家宰と対面していた。「私自身としては、ティザル殿の意志を伝えたのみ。応えるか否かはあなた自身の問題でしょう?」

静かに笑って、ヘリオンは椅子の背もたれに寄りかかった。ただその視線だけは、相手を押し量るかのよう鋭いまま。

「しばらく、考える時間を頂きたいものですな。この老骨には、いささか荷が重いことにて」

ヘリオンの視線を温和な表情で遮りながら、重々しく答える。

「あまり時間はありませんが……そうですね、本日の日没までですよ」

「それは、また」

「只今、バトウ殿の、いえラストウーヌ家の処遇を決める会議がケミリオ家で開かれています」

「それまでに答えを出せ、と?」

「そうせねば、手遅れとなりましょう」

二人の間に降りる沈黙は、あるいは剣士同士の鏖迫り合いに似ていた。

「私は」

「ラクシュ様! 行ってはだめです」

「そうだよ! やっと自由になれたのに」

「行っちゃヤダ!」

二人だけの部屋に飛び込んできたのは、年端もいかない子供達。

「ベルナンド、クセリユク、ナシリア……向こうへ行っていないさい」

優しくも、断固として言い切るラストウーヌの元家宰。子供達はそれぞれに俯き拳をふるわせ、またはヘリオンを睨み付け、あるいは

は泣きながら立ち去らねばならなかった。

「今の子供達は？」

「お恥ずかしい限りです。家宰などしていながら、子供の躰すらま
まならない」

苦笑に首を振り、気恥ずかしそうな表情で彼らが閉めた扉を見る。

「私の子供らです。血はつながっていませんがね」

「なるほど」

頷いてヘリオンは、少し考え込む。次いで鋭利な剃刀を思わせる
鈍色の瞳が、ラクシュを再び捉える。

「時に、あなたは今の政治をどうお思いか」

「これは、一介の武辺者には難しい問いですな」

はぐらかす為のラクシュの返答に、ヘリオンは沈黙でもって答え
た。深く澄んだ瞳に、相手を押し量る色は最早ない。真摯に答えを
求める研究者のように、ただラクシュを見つめる。

その視線に、深くため息をつく。ラクシュは少しだけ身を乗り出
した。

「私は、敗北したのです。敗者は語る舌を持ちません」

「敗者といえども守らねばならぬものがあるのでは？」

チラリと、先ほど子供らが出て行った扉を見る。

「そうです。ですから」

「私は、こう思うのです」

元家宰の言葉を切ってヘリオンが語る。

「もし、今のまま十貴族主導の政治が続くならこの国は早晚滅び自
由都市群に踏み荒らされるのではないかと」

「それでは、あなたは」

「私はロアヌキアは王政で行くべきだと考えています」

「再び王を……」

震えるラクシュの声、彼の視線は、今は亡き王を見ていた。

「そしてその王は、ケミリオヤラストウーヌ、そしてヘルシオなど
ではない！」

「あの少年を王に？」

「かつて、北方を征したヴェルは若干十五にして王位を受け継ぎました。早いということはない」

冷徹な表情の下に、これほどの情熱を隠していたのかとラクシユはヘリオンを驚きの視線で見ている。

そしてヴェルの名前。かつて、共に語り合った戦友達にヘリオンが重なる。夢を見ていた、自身。そして戦友たち。

「一度だけ、あなたの力を借りたい。そして後は見守って頂きたい。カル・スカルディアが国を制し、この国に安寧をもたらすことを」

願いが危機届けられないならば、ラクシユを殺しかねない鬼気迫るヘリオン。

考えるのは、守らねばならないものこと。

「あなたは、卑怯だな。最初から断る道を絶って本当のことを話す。もし、ラクシユが断れば子供たちはどうなるか、なりふり構わな。今のヘリオンなら人質にすることを厭いはしないだろう。今もしヘリオンを殺してしまったとて、やはり子供らは守れない。彼の後ろには、スカルディア、ケミリオ家がついているのだ。

「一度だけです」

温和な家宰から武人の顔になったラクシユが頷く。

「ありがとうございます」

深々とヘリオンは頭を下げた。

ケミリオ家の屋敷。高い尖塔に、十貴族の家々が集まっていた。

カルの代理としてヘリオンが出席し、ミザーク家の代表として出席するはずだったテクニアは、遅刻していた。

首座にケミリオ家。次席の位置にヘルシオ家の家宰、それに続いてほかの十貴族の家々が並ぶ。そして本来ならカルの居る末席には、ラストゥーヌの当主であるバトゥウが、苦虫を噛み潰したような慄然

とした表情で座っていた。

「今日は、ウエンデイ様は来られないので？」

「遅れて来られるそうだ、そう言えばミザークの若当主も……」

ひそひそと話しあう声に、ティザルは一つ咳ばらいをした。

それだけで今までのざわめきが嘘の様に収まり、その場に静寂が訪れる。

「本日の議題のひとつ目は、暴徒と化した平民の処遇についてだ。

これは先ほど皆様のお力添えもあり無事鎮圧することができた。が、しかしこの原因を作ったバトウ殿には責任を取って頂かねばならぬと思う」

ティザルの提案に、賛成の声が続く。

「極刑が相応しいと思うが、いかがか？」

ざわりと、周囲がざわめく。このままではバトウが処刑されるなか、ヘリオンが席を立てて発言する。

「その件で、元ラストウー又家宰ラクシュ・ラスティア殿より助命嘆願の願いがありました。先の戦では多大なるお働き、前回は恩賞を与える前に解雇なされてしまいました」

チラリと、バトウを見て言葉を続ける。

「この願いを聞き届け、恩賞とするのは如何でしょう？」

「確かに」

弁舌爽やかなヘリオンの言葉に、賛成の声も大きい。それを見とつて、ティザルが判断をくださいました。

「本来ならば極刑をもって当たる処、先の戦で功のあった家宰の願いもあり引退という形にするがよろしいか？」

提案の形を取った命令に、賛成の声は続く。今はこの場にバトウを庇う者は居らず、ティザルに逆らう者もまたいなかった。

その決定にバトウは俯き唇を噛みしめるしかない。

「次は、先日ポルレで大勝を収めたカル殿のことだ。祖国を守った彼に何かしら報いねばならないと思うが、何が良かるうか？」

次の議題に十貴族の当主らは皆難しい顔になる。通例で言えば、

彼らの中の席次をあげることになるのだが、だれしも自分の地位を下げたくはない。

「それに関しては、席次を一つ上げていただければ望外のこと」
発言したのはヘリオンだった。スカルディア家の代表がそう言うならと、納得した十貴族達。内心ではティザルとバトウ以外の全員がほっとしていた。

「その代わりと言ってはなんですが、舞踏会を開いて頂きたい」
ヘリオンの提案に今度は全員が驚いた。喜ぶか訝しむかの差はあるにしても。

「……良かろう」

慎重に答えるティザルの視線は、ヘリオンの考えを推し量るように冷たく鋭い。

「我が主も喜ぶことでしょう」

慇懃に頭を下げるヘリオンの顔に漂うのは、氷のような冷徹さだった。

謀略の使徒25（後書き）

25話で終わらせるといいながら、終わらなかった……。
申し訳ありません。あと1話で終わらせま。

謀略の使徒 26

十貴族の会議が終わり、ティザルの目の前にはヘリオンだけが傳っていた。

「バトウを虚仮にするとところから始まり、中々の役者ぶりだった」

カルの席次をひとつだけ引き上げることも、バトウを引退させることも事前の取り決めでなされていたことだった。もちろん他の十貴族は知らないことではあるが。

「お褒めに預かり光栄の至り」

「だが、ひとつ気に食わぬ。なぜ舞踏会など開かねばならぬのだ？」

「それには私に考えがございまして……場所はラストウーヌの屋敷で行います」

「ほう……嫌がらせというわけか」

冷酷に笑うティザルに、だがヘリオンは無表情を崩さぬまま言葉を続ける。

「いいえ。そこでカル・スカルディアに我が秘中の毒を盛ります」

「……やるか、あの小僧を」

ティザルの背筋をぶるりと、冷たいものが走り抜けるが、それを自身の興奮だと納得させ、ヘリオンに続きをうながす。

「はい。もし万が一仕損じても、全てはラストウーヌ家の手落ち……」

「家宰がいくら庇い立てしても、もはやどうにもなりませんまい」

「確かに、恨みを持った相手を放置するなど危険極まりないからな。バトウには、文字通り最期の仕事をしてもらおうか」

「御意」

「だが、毒はこちらで用意させよう。そなたが秘中の毒、信じぬわけではないが、我が家にも毒がないわけではない。あの憎らしい小僧を殺すのは我が手で行いたいからな」

「……ですが」

「言い訳は許さぬ。まさか、そなたの毒でなければならぬ理由もあ

るまい。……舞踏会の手配。任せるぞ」

「……御意」

頭を垂れるヘリオンをティザルは冷たく見下ろしていた。

大河ポルレからロクサーヌに至る平原を、土煙を上げて疾駆する騎馬の一団がある。

掲げるのは“交差する蛇槍”スカルディアの紋章旗。

「見えたぞ、ロクサーヌだ！」

先頭を行く物見の兵が後続に声をかける。戦装束も物々しく、最低限の食料と武器を携えた集団はロクサーヌを見て、その速度を尚一層速めた。

「あと一息だ！ 遅れるな！」

疲れた馬に鞭をいれ最後の距離を踏破する。不眠不休で駆け抜けてきた彼らは、土ぼこりにまみれ瞳は疲れで充血する。だがその瞳に奥にあるのは、燃え滾るような戦意に他ならない。

ロクサーヌで平民たちの暴動を聞いたカルが、騎馬のみの部隊をシュセに率いさせ先行させた。夜に出発した騎馬部隊は普通なら二日かかる距離を、半日に縮めてみせた。

シュセに率いられた騎馬部隊は、城門を潜り朝の霧に包まれた街中を疾駆する。

「これはっ……」

思わずシュセは息を呑んだ。町の惨状に、速度を緩め険しい表情でスカルディアの屋敷まで馬を進めていった。焼け焦げた家屋、路傍で眠る平民、あちらこちらに見られるその光景にシュセは強く唇をかんだ。

スカルディアの屋敷は尚健在だった。屋敷に着いたシュセは、そこを拠点として、四方に情報収集のための使いを走らせた。と、同時にスカルディアの屋敷を守っていた使用人達から町の現状と、どのような経緯でこのような蛮行がまかり通ったのかを聞き出した。

「ラストウーヌのバトウ殿が」

呟いて、一瞬考え込む。衛士の長たる人物が、なんとということをしてくれたのだ。衛士は平民の味方であらねばならない。法と正義の守り手が、平民を害するなど気が狂ったとしか思えなかった。

「シュセ殿」

これからの対応を考えていたシュセに、落ち着いた声がかかる。

「ヘリオン殿！ ご無事でいらつしやいましたか！」

ゆっくりと頷く彼に、シュセは眉をひそめた。何か、酷く疲れているようなヘリオンの様子に、彼の体調を心配したのだ。

「お疲れではありませんか？ お顔の色が優れませんが……」

「いや、何。あなた方に比べれば疲れてなどいませんよ。これを差し出された書類は被害状況の報告書だった。

「これはっ……」

寝る間も惜しんで作れたであろうそれは、ヘリオンと彼の下で働く推官見習い達の能力の高さを伺わせるに十分なものだった。

パラパラと読み進めるうちに、その被害の甚大さが伝わってくる。

「平民の衛士は、かなり被害を受けていますね……」

ヘリオンの家族を救い出すため、シュセに協力してくれた親切な衛士。彼らの顔が浮かんで消えていく。

「ええ、もともと彼らとバトウ殿とのぶつかりあいが発端でしたから」

無念そうに瞳を伏せるヘリオンに、シュセもまた唇をかみしめる。「スカルディア家に対する被害は、それほどでもないようですね。

後は……平民区は復興にかなりの規模で予算が必要になりそう」

家を焼け出された者、親を失った孤児、仕事を失った者。その数のあまりの多さに、シュセはこの数日でロクサーヌが受けた痛手を

思った。先ほど見た炉端の浮浪者達は、全体のごく一部でしかないのだ。

「カル様が、帰ってきてから全ては決済がされるでしょうけど、できることは今のうちにやっておきましょう。一人でも多くの民を救わねば」

「殿下は今どのあたりに？」

「今兵をロクサーヌに向けている途中です。もう一日あればこちらに到着なされると思います」

「実は、この度の戦勝を祝った舞踏会が開催されることになりました」

「こんな状況ですか!？」

ヘリオンの言葉にシュセが思わず耳を疑う。

「ええ。ですがこんな状況だからこそ、殿下には出席してもらわねばならない」

ヘリオンの真剣な眼差しに、シュセは息を呑む。

「……他の貴族たちにも、平民たちに援助の手を差し伸べさせようか?」

「その通り。難しいとは思いますが、やっていたただかなくてはならない」

頷くヘリオンに、シュセは考え込む。

「……わかりました。では、わたくしは平民達への炊き出しの指揮を執ります。ヘリオン殿も」

「私は補給に回りましょう。スカルディア家に連なる者で、動けそうな者に連絡をつけ、支援に向かわせます」

「ありがとうございます。そうして頂けるとありがたい……殿下への連絡は?」

「私がしておきます。シュセ殿は全力で平民達をお救いなさい」
では、と短い挨拶をして駆け去るシュセ。

その背中を眩しいものでも見るように、ヘリオンは見つめていた。

「本当に、これで良かったのだろうか？」

鋭い湖水色の視線がヘリオンを睨む。

「人にはその人に見合った責務と仕事を。街の方はシュセ殿が滞りなく復興作業を行っている。今お前がすべきなのは、その資金と人手を稼ぐことだ。いずれスカルディア家だけでは限界を迎える」

「しかし……」

馬車の中、舞踏会の会場たるラストウー又の屋敷へ向かっている間カルは不機嫌だった。戦場から戻ってすぐにその兵力を待ちの復興にあて、自身は着飾って嫌いな舞踏会へ。これがご機嫌でいられようはずもない。

馬車の窓から外を眺めれば、戦災の傷跡が生々しく残るロクサー又の街中が見えた。

「壊すのは一瞬でも、築き上げるのは膨大な時間がかかる。なぜ、壊した後のことに思いをはせないのか……」

悔しげに呟くカル。

「人はそこまで上手に感情を抑えられぬさ。特に、甘やかされて育つた者はな」

「私は甘やかされた覚えなぞ、ついぞない」

ヘリオンの答えに、カルが反発する。

「そうかもな……だが、どのような境遇で育とうと貴族の当主となつたからには、自身の家の為に毒すら笑って仰がねばならぬ。わかるか？ これは比喻ではないぞ」

いつにないヘリオンの真剣な口調に、窓の外に向けていた視線を戻す。

「どういうことだ？」

「お前は王となる。その為の試練だ……カル・スカルディア。よく考えよ」

いぶかしむ様に眉をひそめるカルを横目に、ヘリオンは書類に視線を戻す。

ラストウーヌ家の屋敷に着くまで、二人の間には静寂が降り立っていた。

無骨な作りのラストウーヌの邸宅。

ミザークの洗練された屋敷に比べれば、やはり見劣りはやむをえない。初代の精神を忘れぬようわざとそういつくりになっているのだ。

「カル・スカルディア様ご到着」

「広くはない舞踏会場^{ダンスホール}。無骨なつくりのラストウーヌの屋敷において、その建物だけが華美な装飾を施されていた。輝く夜灯、銀の女神が縁取る硝子窓、床に敷き詰められたのは木目もあざやかなヒルダナ杉。取り繕うように作られた舞踏会場は、武人から貴族に早足で駆け抜けたこの家の歴史を象徴するかのように、屋敷自体の調和を乱す特異な場所だった。

「おお、ポルレの英雄のご帰還だ」

「ふん……偶々運が良かっただけよ」

「そうだ。あのような相手小僧でなくとも勝てる」

賛辞と妬みの細波が広がる中、カルはその舞踏会場に足を踏み入れた。着飾った紳士淑女がいつせいに彼を振り向くが、カルはそれを意に介さず十貴族の席へ向かう。二階席はなく、一階建ての広大な舞踏会場。広大なホールの最奥一段高くなった場所にその席があった。

「お久しぶりにございます。無事のご帰還テクニア心よりお喜び申し上げます」

最初に声をかけてきたのは、ミザーク家のテクニア。先日の舞踏会でカルの知己を得た一人だった。

「本当に、ご帰還おめでとう。カル」

ついで声をかけたのは鮮やかな朱色のドレスを身にまとったウエ
ンディだった。手には漆黒の羽扇。口元を隠し、微笑を隠す彼女は
妖艶な笑みのまま挨拶を終える。

「いえ……」

「……本日は、当家においでくださり真にありがとうございました幸せ……」

肥えた巨躯を折り曲げ、ぼそりと屈辱をかみ殺した声で挨拶をし
たのはバトウだった。

「お招きいただき歓迎の至り」

何の感情もこもらない形式的な挨拶で、彼に挨拶を返すと。

「この度の活躍、誠に見事だった」

尊大な態度で首座に座り酒盃を掲げるティザルに向き直る。

「皆様のおかげをもちまして、戦勝を納めることができました」

軽く首をたれ、挨拶を終えた。

「今日は君のために、舞踏会を催した。ぜひ楽しんでいってくれた
まえ」

「はい」

自分の席に着くカルに、ティザルの粘りつくような視線が向けら
れていた。

「諸君！ 楽しい舞踏会を始める前に今宵の主演を紹介しよう！」

ティザルの声に、その場にいる全員がティザルを注視する。

「先ごろルプレで大勝を収めた我らが勇将、カル・スカルディアだ。
彼から一言、挨拶を述べてこの舞踏会の開催の辞となそう」

割れんばかりの拍手が起こり、そしてカルは立ち上がる。

「私が戦に勝てたのは、このロクサーヌを愛するがゆえ。勇将など
と恐れ多いことです。ですが、一言許されるなら……私はロクサー
ヌに戻り驚きました。立ち上る黒煙、あふれ出す貧民。本当にここ
がロクサーヌかと目を疑ったほどです」

静かに語りだすカルに、会場は軽くどよめいた。燃え立つような
一言を期待した彼らの予想を裏切る形で、カルは言葉を続ける。

「原因を聞けば、貴族と平民との行き違いからこのようなことが起こったとのこと。悲しむべきことだと思えます。われらを支える手足を切り取って、どうしてわが国が立っていられましょう。どうか皆様彼らに慈悲を」

静かに終わったカルの言葉。あまりにも紳士に紡がれた言葉に、会場の全員は声もなかった。

「我らが英雄はずいぶん慈悲深いようだ。彼の願いをかなえるためにも、我らの親睦を図ろうではないか！ 乾杯！」

場を仕切りなおしたティザルの声に、会場すべてが唱和する。

乾杯っ！ と。

滞りなく舞踏会は進む。

前曲、中曲を終わり、後曲が終わる。

ティザルの無礼講の声がかかった後も、カルはティザルの視線を感じていた。

「カル様、一緒に踊っていただけ？」

幾度も誘われるその声をさえぎり、カルは中庭に出ようとしていた。

「あつ」

そのカルの袖を強引に捕らえた手がある。見れば小柄な少女が震える手で彼の袖を握っていた。紅茶色の髪を三つ編みにした少女。反射的に振り返ったカルの厳しい視線を受けて、彼女は怯んでしまっ

「その……」

今にも泣き出してしまいそうな彼女に、見覚えがあるように思えてカルは立ち止まった。うつむき黙ってしまった少女と、何もいわないカルに周囲の視線が集まりだす。ざわざわと聞こえるのは少女に対する非難がほとんどだった。

「なんて無礼な」

「なに、あの子……下級貴族の子よね？」

特にひどいのは同年代の少女達からの非難だ。

「う、ごめんな、さい……」

とうとうカルの袖をつかんでいた手を離し、泣き出してしまふ少女。

「……ああ、あの時の」

まじまじと少女を見ていたカルが、思い出したのはバトウに絡まれている少女だった。

「はい」

コクコクと頷くと、また泣き出してしまふ少女にカルは困り果てた。

「こちらへ」

顔を覆う彼女の手をとって、カルは中庭へ向かう。色とりどり豪華に飾り立てられた舞踏会場から、夜の静寂の中へと放り出された。まわりつく鮮やかな光も、屋敷を彩る紳士淑女の歓声も、一步外にでてしまえば届きはしなかった。

「それで、何の用だ？」

聞きようによっては脅しにも聞こえるカルの口調に、だが今度は少女は怯まなかった。というよりも、カルに見とれていてそれどころではなかった。豪華な衣装に身を包み、屋敷から漏れる明かりに照らされて、夜の闇にカルはよく映えた。

「……綺麗」

「なに？」

ほんやりと呟かれる言葉に、カルは思わず聞き返す。

「あ、ご、ごめんなさい。私は、シャルナです。シャルナ・シテイ
ーア」

涼しげに輝く湖水色の視線、恥の肌に、夜風に舞う豪華な金色の髪。バトウから助けられてから夢にまで見たカル・スカルディアが自分の目の前にいる。少女に緊張するなという方が、無理だった。

「そ、それで……私が言いたいのは、カル様がお綺麗でその
シャルナと名乗った少女の要領を得ない返事にカルは、ため息をついた。

「ご、ごめんなさいっ!」

それをどうとったのかシャルナはバネ仕掛けの人形のように頭を下げる。

「何を謝る?」

「は、話しかけたりして……ご、ごめんなさい!」

「用事があつたのдарう?」

「いえ、いえ……」

謝っているうちにシャルナの瞳からは大粒の涙がこぼれて落ちる。

「ただ、お礼が、言いたくって……」

「お礼?」

「あの時は、ありがとう、ございました」

精一杯の勇気を振り絞ってそれだけ言うと、彼女は感極まって泣き出してしまふ。

「……無事でよかった」

暗闇の中を見つめながら、カルは言った。

「家のことでも、テクニア様が……ありがとうございます」

「……叱られはしなかったか?」

涙を流しながらもすっかりと頷く少女に、少しだけ安堵してカルは微笑む。

「ならばいい」

彫刻のように精巧な美しさから、もれた人間らしい微笑み。

「カル様も、普通に笑うんですね」

涙をぬぐいながら微笑むシャルナにカルは苦笑をもらった。

「貴族の当主には、相応しくないがな」

何者にも揺るがぬ鉄面皮そこが、社交界をわたる貴族の武器となる。感情のゆれを表に出しては、いつ何時足元をすくわれかねない。

「でもその、もったいないと思います!」

それをシャルナはもったいないと言う。

「変わっているのだな」

「よく言われます」

二人の間を夜風が通り抜ける。優しく微笑むカルに、シャルナはゆでだこのように赤くなり。

「あの、何か飲み物でもいかがでしょう!？」

「ああ……そうだな」

「私持つてきますねっ!」

意気込んで駆け出す彼女を、不思議なものでも見つめるようにカルは見つめていた。

シャルナの心臓は今もはちきれそうだった。あのカル・スカルデアとお話してる。それだけではない。これから一緒に飲み物を飲んで、またお話しするのだ。遠くから眺めるだけの憧れの対象。自分には不釣り合いだと分かつてはいる。

でも、どうしても、もう少しだけあの人にそばにいたかった。精巧な彫刻のような顔から、ふと漏れる人間らしい微笑がシャルナの瞼に焼きついていていた。

「えっと、お飲み物は……」

着飾った紳士淑女の間を忙しく行き来するラストウー又侍従達が見える。そのうちの一人を掴まえて飲み物をもらおうとしたシャルナは、横から突き飛ばされる。

「あら、失礼」

軽い悲鳴を上げるシャルナに、同年代の少女は余裕の笑みを返す。何事もなかったかのように、シャルナが取ろうとしていたグラスを取る。シャルナよりも、格上の貴族の令嬢だった。その様子を見ている他の貴族の子女は、いい気味だとばかりにひそやかな嘲笑を彼女に向けている。

「カル様を独り占めなんて、偉くなつたのねあなたの家は」

少女の挑発に、シャルナは乗らなかつた。ぐっと唇をかみ締める。と他の侍従を探す。だがその度に邪魔が入る。露骨に突き飛ばす者

まで表れる始末。

「貧乏貴族が、カル様に取りいろうだなんて百年早いわ」

「ほんと、浅ましいいつたらないわね」

口々に突き飛ばされた彼女をののしり、見下す貴族の令嬢達。だがシャルナは黙って次の侍従を探す。出る杭は打たれる。分かっていたことだった。ただ少し、カルとの楽しいひと時に忘れていたのだ。

「大丈夫かい？」

何度目かに突き飛ばされた時、一人の紳士が彼女に声をかける。

手には二組のグラス。

「これをもつていきなさい」

「え？」

見上げるシャルナの視線の先には、見たことのない紳士。優しげな笑みを浮かべた彼が、シャルナを立ち上げらせグラスを渡す。

「あの、でも……」

「あまりあの方を待たせるものではない」

優しく微笑んでいるはずの初老の男から、シャルナはグラスを受け取る。何かが気になったが、彼女にはカルを待たせているという焦りのほうが強かった。

「あ、ありがとうございます！」

あわててお礼を言うと、カルの待つ中庭に向かって駆け出す。

「ああ……気にしなくていいんだよ」

シャルナにグラスを渡した男は笑わない視線で微笑んだ。

「カル様！」

遅いなと思いつつシャルナを待っていたカルは、その声の主に視線を向けた。

「っ！」

出て行くときは綺麗だったシャルナのドレスが所々破け、見るも

無残な有様。彼女の腕にははつきりとあざまで作っている。

「何が、あった？」

奥歯をかみ締め、怒りをかみ殺したカルに、シャルナは笑って首を振った。

「いえ、私だったらドジで転んでしまったのです」

差し出されるグラスを受け取るカルは、なぜ彼女が笑っていられるのかわからなかった。

「どこの誰だかは知らぬが、卑劣なことだ！」

「お優しいんですね……カル様」

微笑むシャルナに、カルはルクの面影を重ねる。

カル、約束してくれる？

胸の奥の傷口から、流れ出すのはどろりとした何かだった。

「私はそんなに、頼りないか？」

シャルナの腕を引き寄せるカル。

「い、いえ……そんなことはっ！」

あわてて首を振るシャルナ。カルとのあまりの近さに、彼女は頭の中が真っ白だった。カルの空虚な瞳が追いかけたのはシャルナではなくルク。

「あ、あの、お飲み物……冷たいうちに」

「ん、ああ」

自身が何をしていたのか、シャルナの声にわれに返るとカルは、思いもよらない距離の近さに一步距離を置いてグラスを飲む。

「あの、今日はありがとうございました。一生の思い出にさせていただきます」

本来なら口を利くのはばられるようなカルとシャルナの地位の壁。それを思っただけでシャルナは、双眸からあふれ出しそうな涙を必死に堪えた。

「気が向けばいつでも、会いに来たらいい。スカルディアの敷居はそこまで高いもの、でも、なかるっ……」

「いえ、そういうわけには……カル様……？」

「くっ……これは」

苦しみだすカルに、シャルナはとっさに反応できなかった。

「カルさまっ!?!」

ラストウーヌの夜の闇に、カル・スカルディアは倒れた。

「誰か、誰か助けて!」

少女の悲鳴に、舞踏会場は騒然となる。柔らかな音楽を引き裂く悲鳴に、全員の視線が集まる。そこにはボロボロになったドレスをまとったシャルナの姿。

「カル様がつ!」

その言葉にいち早く反応を示したのはテクニア。少女に駆け寄り、その肩を揺らす。

「カル様がどうしたのだ!? いずこにおわす!?!」

思いのほか強い力でつかまれ、シャルナは思わず引きつる。

「中庭のっ、カル様が……」

泣き崩れるシャルナをその場において、テクニアは中庭へ向かう。ざわりと騒ぐ場内で、ティザルは爆発しそうな笑みをかみ殺していた。

「バトウ殿、何か起こったようだ。主催者として、迅速な処置を頼む」

「はっ……ティザル殿」

もはや二人の間には曆とした壁がある。

「家宰、見てまいれ。侍従長、医者を……楽士隊は演奏を」

「医者は! 医者はいないかつ!?!」

指示を下すバトウの声をさえぎったのは、息も絶え絶えに絶叫するテクニアの声。

「何が起こった? 酔いつぶれて池にでも落ちたか?」

鼻で笑うバトウを睨みつけ、テクニアが叫ぶ。

「医者はどこだ!?!」

「今よびに行かせておる。急くな若造め」

バトウはこの舞踏会の後引退が決まっている。気楽といえば気楽

な立場だった。比べてテクニアは顔を蒼白にし、息も荒い。

「つく、とにかく医者だ！」

侍従長などを叱りつけ、自身はカルのそばにいるため中庭へ向かう。

「お前も一緒に来てもらおう」

泣き崩れるシャルナを強引に立たせて、引きずっていくテクニアの姿に、会場の者は全員困惑した顔を見合わせた。

「それで、カルは確かに死んだのだな」

ラストウーヌの屋敷の尖塔。十貴族を集めた会議が開かれ、その場には医師とヘリオンも同席していた。

「はっ……息をしておりますでした」

「遺体はいずこに？」

「西の館に移しております。テクニア様とウエンディ様が見守っております」

急遽舞踏会は中止となり、十貴族主導の下参加者全員を監視下に置いていた。バトウはその監視のため席をはずしている。

「して、死因は……」

「毒でございましょうな」

そうか、と呟いたきりティザルは沈黙する。

「では私はこれで……」

その席をはずす医師。

「さて、十貴族の一角たるスカルディアの当主が毒殺されたとは、嘆かわしいことだ」

「ですが、あの小僧いなくなつて良かったのでは？」

「その通り……何かと鼻持ちならない小僧でしたからな」

「ククク、諸君。せめて死者の為に一晩ぐらいは慎みたまえ」
かみ殺した笑いに。

「おお、そうでしたな今は亡きカル・スカルディアの冥福を祈ってはっはっは！」

嘲笑の中の祈り。

「ヘリオン。酒を持って、カルの冥福を祈って乾杯をしようではないか」

「御意」

部屋から消えていくヘリオンの背に聞かせるように、十貴族の話は際限がない。

「スカルディア家の裏切り者もつともよく働いてくれたな」

「いや、まったく……ティザル様のご人徳にはかないませんなあ」

「お酒をお持ちいたしました」

背徳の酒宴は、その熱を上げていく。

謀略の使徒26（後書き）

終わらなかった……。
自分の非才を嘆きつつ、次こそ、終わる……。いや終わらせませます。

ティザル達が尖塔で祝杯を挙げている同時刻、ラストウーヌの屋敷に向かう少数の者達がいた。頭からすっぽりと闇色の長外套をかぶり、長身の男と小柄な男を先頭に立てて、地下の通路を進む。

「バトウ、ティザル……」

低く呟かれた声は、全てを呪い殺す亡者の響きがある。

「翁」

「焦るな。もうすぐじゃ……やつらの生皮を剥いで、目玉を抉り出すのは」

自身を鎮めるような声に、大男が無感動にこたえる。

「俺は強い奴が殺せればいい」

「なあに、招かれた客は200人。護衛を含めれば500人はいるだろう。その中には一人ぐらい貴様を満足させうる相手がいるだろうて」

低く笑う声は煉獄に住むという鬼の声。

「だといいがな」

復讐に燃える悪鬼は、静かに獲物を狙う。

「殿下が、お隠れになった!? 馬鹿な!」

その知らせを受けたシユセの衝撃は、普段の彼女を知るものでさえ想像できないほど大きく激しかった。へなり、と足腰の力が入らぬように、その場に座り込む。

「……いえ、わたくしは信じません」

気丈に立ち上がると、その場にいる者に指揮を任せ単身馬を駆る。
「信じるものですか！」

スカルディアの屋敷に戻り、自身の部屋に一直線に向かう。

「誰か」

侍女を呼びつけると、戦装束に着替える。白亜の鎧に、腰に身につけるのは銀細工も見事な細剣。レイピア

「カル様が、死ぬわけがないっ！」

戦装束を身に着けたシユセは、単身ラストウーヌの屋敷に向かった。

そしてその後をスカルディアの私兵たちが追っていった。

「……本当に死んでしまったなんてね」

冷たいカルの骸を見下ろしてウエンディはため息をついた。

ラストウーヌ家の離れ。無骨なつくりではあるが、決して粗略な感じは受けないその場所に、カルは安置されていた。

「ヘルシオ家あなたのご当主様におかれては、カル様を憎く思っておいでではなかったのですか？」

カルの屍のそばに侍従のように居座って動かないテクニアが、彼女を見咎めた。社交界を餌場に飛び回る一つ目鴉ミザークではなく、ただ慕っていた者の死を嘆く彼に、ウエンディは苦笑を漏らす。

「お若いこと」

カルが死した後、ミザークの立場は非常に微妙なところにいる。ヘルシオ家のウエンディなどにはもつと慎重な言葉を交わすべきなのだ。

「大切な者を失って嘆かぬものはいない。また、そうなりたくもありませんよ」

「とても、一つ目鴉ミザークの当主のお言葉とは思えませんわね」

ぎりり、と奥歯をかみ締め握った拳を震わせながらテクニアは言葉を搾り出す。

「私は後悔しているのです。もっと慎重になるべきだった……十分予想できた事態だったのにつ！」

それに対してウエンディは何もいふべき言葉を持たなかった。彼女とて油断していた、といえばそれまでだ。まさかティザルがここまで果敢な処置を講ずるなど予想してないなつた。

いや、その下にいるヘリオンの差配だろうか。正直あの男もウエンディは見誤っていたというしかない。味方を装って彼女に取り入るカルからの間者だと考えていたのだ。

「私の人を見る眼も、堕ちたかしらね……」

最後にカルに一瞥をくれるウエンディ。

「え？」

「何か？」

カルの白磁の肌に若干赤みが戻っているような気がして、目を瞬くが、苦笑して思い直す。

「いえ、なんでもないわ」

そんなはずはない。まだ愉しい夢を見たりないのかと、自分の幼さを晒す。

「さようなら、坊や」

離れから出たウエンディは目を見開いた。微笑を常にたたえる彼女が表情に出した驚きはそれだけ。

彼女が目にしたのは、暗夜を染める紅蓮の炎だった。

「なんだ、なんだこれは!？」

ラストウーヌの尖塔、十貴族の全てとヘリオンのいるその場所が紅蓮の炎に包まれていた。床から這い上がる黒煙と、肌を焼く紅蓮の炎。下の階からの出火は明らかだった。窓の外を見れば、地上は遙か下にある。

煙に追われるように、ティザルを始めとする十貴族達は下の階を目指した。少しでも地上に近づければその分生存の可能性は増える。

「おお、ヘリオンではないか！　これはいったいどういうことだ！？」

黒煙に追われたティザルが声をかけたのは、常と変わらず無表情でたたずむヘリオンの姿。彼の後ろには下の階へ通じる扉がある。

「放火、ですな」

「何をのんきな！　さつさとどかぬか！」

黒煙に咳き込みながら、強引にヘリオンをどかせようとしたティザルの取り巻きが、ヘリオンに手をかけた瞬間。ヘリオンは、体ごとその貴族に体当たりした。

「ぎゃああー！！」

泣き喚くティザルの取り巻きを見ればその腹部からは、短刀が突き立っている。

「貴様……ヘリオン！」

「ここをお通しするわけには、参りませんな……ティザル殿。せつかくご用意してあげた舞台ですのに」

口元には冷笑を浮かべ、瞳は凍てついたままヘリオンは懐からさらに短刀を取り出した。

「お前達と一緒に揃う機会を待っていました。お前達を皆殺しにできるこの機会を」

その瞳の冷たさに、熱さも忘れてティザル達は慄いた。

「殺すだど！？」

「全ての扉は塗り固め、もはや出口はございません。精々苦しんで逝かれませ」

冷たい毒が、肌を焼く熱さの中に満ちていく。

「うそを申すな。それでも貴様自身も焼け死ぬではないか！」

「狂っている！」

恐慌に陥る取り巻きの中にあつて、ティザルは多少は冷静だった。「なぜ今更になって、私を害そうとする！？　あの小僧は死んだはずだ。何のために！？」

ヘリオンはその言葉を晒った。畏に落ちた者を高所から見下ろす

歪んだ笑みで。

「……私にも小さな野望というものがございます。まあその為と申し上げておきましょう」

騒ぐ取り巻きにかまわず、ティザルは眉をひそめた。

「野望だと？ 領地か、それとも地位か！？ どちらにしても、私の元でなら思いのままであろう！」

「いえ、あなたの元では決して手に入らぬもの……」

口の端を吊り上げて苦笑するヘリオンに、ティザルの自尊心は傷つけられる。

「もはや問答も無用だ！ 所詮奴は一人だ。みなでかかれば押しつけられぬことはないっ！ いけ！」

取り巻きたちをけしかけ、自身はその隙に来た道を引き返す。

「くっ……なんてことだ。本当に開かないではないか！」

「どうするのだ、このままでは我らは！」

ヘリオンを殴りつけ、扉からどかした十貴族達はその扉を前にして絶望に駆られていた。と、その中の一人がヘリオンの胸倉を掴んで、怒鳴りつける。

「出口は、出口はどこなのだ！ 貴様本当に死ぬつもりなのか！？」

あるのだろうか？ どこかに出口が！？」

「あるはずがないでしょう」

真実を告げる忌まわしい宣告に、その貴族の心は耐え切れなかった。

「ううう……いやだ、わしはまだ死にたくない！」

叫び声をあげつつ逃げ去ったその一人を見て、他の者の恐怖心にも火がついた。鎮めるべきティザルは既に居らず、恐怖に駆られるままバラバラの方向に走り出す。

「いやだ。死にたくない、死にたくない！」

咳き込み、鼻水を垂れ流し、滂沱の涙を流しながら逃げ惑う。普段の権勢など、その炎の地獄では何の意味も持たなかった。

「さて、後は……」

殴り倒され、立ち上がることもできないヘリオンは静かに目を閉じた。

「死んでたまるかつ！ この私が、十貴族の長たるこの私がっ！」

テイザルが駆け込んだのは、ラストウーヌ家の尖塔にある一室。

「確か、ここに！」

以前オウカに教えられた隠し扉。

「あつた！」

積み上げられた荷物をかなぐり捨てるように乱暴に捨てる。ぎい、となる扉に、テイザルは改心の笑みを浮かべた。この扉は閉ざされていない。この扉があれば、炎に巻かれることも泣く地上へ降り立つことができるだろう。

「やっと、やっと手に入れたのだ！」

オウカも、カルもいなくなった。やっとテイザルの出番が回ってきたのだ。祖先のなしたように、秩序ある平和を築き、歴史に名を刻む。その願いがやっと叶う時になって、死ぬわけにはいかなかった。

暗い石作りの頑丈な通路だけあって、煙も炎も入り込んで来ない。長い長い下りの階段を降りることさえ苦にならない。

「ここまで、くれば……」

息を切らしながら、階段を降りていく。暗い長い通路の先、星明りにテイザルの心は躍る。

「……どうだ、私は、生き延びた！ 生き延びたぞ！」

星の明かりに辺りを見れば、そこはラストウーヌの家から近い下水道付近。月の光が水面に映え、水面を覗き込んだテイザルは、すす汚れた自身に苦笑した。

「泥と汗に塗れるなど野蛮人のすること。だが、このざまではあの小僧を笑えぬな」

ひとしきり晒ってから、立ち上がりその場を離れようとする彼の

背後から。

「久しいのう、ティザルや」

地獄に堕ちたはずの悪鬼の声が聞こえた。

「な、ぜ……」

振り返ったことを後悔しても既に遅い。目の前にいるのは、死んだはずのオウカとその護衛の男。

「なあに、飼いだに手を噛まれると言うのは何度経験しても不愉快なものでのう」

黒い長外套のフードを取ったオウカの顔には、火傷の痕。

「ティザル、この世の春は謳歌できたかの？」

「私は、私はっ！」

「死よりも苦しい拷問を与えてやるう。たっぷりと、味わうがよい」
護衛の男がオウカの前に出る。背を向けて逃げようとしたティザルの足に一閃、つまらなそうに湾刀を叩き込む。

「ひっ!?!」

闇の中、あるべきはずのものが無い。足のくるぶしから先、靴が靴の中にあるはずの、足がない。

「ない。」

「ひいいやあああ！」

「ヒツヒツヒ！ 良い声で鳴いておくれ、かわいいティザルや。それでこそこの火傷の傷も癒えようというもの」

オウカの哄笑は、護衛の男がティザルの首を切り落とすまで続いた。

ラストウーヌの元家宰ラクシユは住み慣れたはずの屋敷の有様に、動揺を隠しきれなかった。

「一体、何だというのだ!?!」

見渡せば紅蓮の炎がとぐるを巻き、懐かしき我が家をその舌先で

舐めていく。しかも、その炎に照らされて逃げ惑う群集。それを追う悪鬼と見紛うばかりの盗賊たち。

「おのれ……！」

逃げる獲物を追うことに夢中になっている盗賊を袈裟懸けに切り払う。

「我が家を、ラストウー又を汚す不埒者どもめ！」

捨てられたはずの家。もはや関わるまいと決めたはずの家だったが、この無残な姿を見れば胸の中に残っていた激情に火が灯る。許せ、ヘリオン殿！ 私はラストウー又を捨てられぬ！」

たとえ自身が捨てられようと、ラクシユはラストウー又を見限ることが出来なかった。ヘリオンから頼まれていた役目も忘れ、一人賊徒に立ち向かう。

「ひひやはは！」

血を浴びて正気をなくしたような盗賊。正面から向かってくるそれを、天高く振り上げた長剣で一刀両断に切り落とす。

悲鳴を聞きつけて集まるほかの賊徒を、次々に切り伏せる様子はまるで無人の野を行くようだった。

「はあ、はあっ……」

幾十人敵を葬りその場所に來たのか、全身は血にまみれ手傷も数え切れず、だがいまだ衰えぬ氣勢を持ってラクシユはその場所にたどり着いた。

その建物にはいまだ火の手があがっていない。ラストウー又の屋敷でもっとも守り易い通称“剣舞場”。初代が直々に建造を命じたと言われる修練のための建物だった。

シン、と静まり返ったその建物の中にラクシユは人の気配を感じていた。

石造りの外観と木造の内観。先代のラストウー又家当主に拾われてから、一心に修練した場所。そしてラストウー又の家族たちを鍛えた場所だった。

「お屋形さま、いらっしやるか!？」

息を整え、扉を開けて問う。ここにバトウがいる。半ば確信をもつてラクシユはその扉を開いた。

「おお、家宰！ 今まで何をしておったのだ？」

暗闇の中に出迎えた主の姿にほっと息をつく。

「これはいかなることでございます！？ なぜ盗賊どもがこの屋敷に！」

「わからん。不甲斐ないことだが、まったく俺のあずかり知らぬところだ」

肩を落とすバトウに、ラクシユは再び問いかける。

「何の、私に任せていただけなら今すぐにも蹴散らしてごらんに入れましよう」

「さすが、ラクシユ・ラスティア！ 父上が見込んだだけのことはある。ラストウーヌを頼むぞ！」

その言葉にラクシユは耳を疑った。

「お屋形さま、今なんと！？」

「許してくれ。俺は今になってようやくお前の心に気がついた。俺のためとは言わぬ。だがラストウーヌに対するお前の忠義、今一度発揮してくれぬか」

その言葉にラクシユは、積年の苦勞が一気に報われた思いに咽ぶ^{むせ}。

「何よりの、お言葉にございます」

涙で曇る視線を主に見せぬようラクシユは膝をつき、礼をする。

「ではまず、現状を説明せねばなるまい。ラクシユ、こちらへ参れ」

「いえ、主に前を歩かせたとあつては……」

「律儀なことだな」

軽い笑い声が、わき腹を貫く衝撃とともにラクシユの鼓膜を震わせた。

「くっ……」

膝をつき、崩れ落ちるラクシユにバトウは冷たい視線を向ける。

先ほどかけた言葉が何かの間違いだっただかのような、憎悪以外には何も映らない瞳。

「お屋形さま、何を……」

「なにを、だと!? 貴様、余計なことをしてくれおつて!」
嘲笑にゆがむバトウの顔。

「賊徒どもが何ゆえに侵入したと聞いたな? 冥途の土産に教えてやるつ。やつ等はな、この俺が手引きしたのよ」

口から漏れる血が、ラクシユの命数がないのを伝える。それを見取って、得意絶頂のバトウの口は軽い。

「な、ぜに……」

「なぜ、なぜだと!? 奴らこの俺をつ! ラストウー又の栄光を担うこの、俺を侮辱しよつた! 末席だと!? ティザルが頂点で、俺が末席だぞ! 許せぬ! 許せるものか! 生意気な小僧も、才をひけらかすだけのティザルも! ヘルシオの毒婦も! みな死ぬばいいのだ! そうすれば、そうすれば俺がロクサー又を手に入れる。この街は俺の、俺のものだ! くははははは!」

壊れている、嘲笑をあげるバトウを、歪む視界に納めながらラクシユは口惜しさに歯噛みした。自尊心が、彼を襲う現実に耐えられなかったのか。その笑い声は狂人に似ていた。

「首尾は良いようじゃな」

暗い屋敷の中が一斉に明かりに照らされる。

「おお、オウカ様!」

主に擦り寄る犬が、褒められるのを期待するような顔でバトウはオウカに近づいていく。

「ジェルノ家の……死んだはずでは……」

息も絶え絶えのラクシユを、バトウは見下ろし鼻で笑う。

「オウカ様が、死ぬわけがなかるつ。ティザルの反乱を討つ絶好の機会を待っておられたのだ!」

「そうじゃな」

「さあ、オウカさまこのバトウめに、なんなりとご用命をお言い付けくださいませ!」

額から右頬にかけて出来た火傷の痕が、にんまりと、口元にあわ

せて歪む。

「アズ、始末を」

後ろに控える巨漢の護衛に一言命じれば。

「え？」

バトウの片腕は間の抜けたバトウの声とともに吹き飛んでいた。

「ぐぎやあああ腕が、腕があああああ！」

痛みに叫び、転げまわるバトウを、好々爺の表情そのもののオウカが笑う。

「裏切ったのは貴様も同じ。まさか許されるなどと思っているとは

……滑稽の極みじゃのう」

カカ、と笑いながら怯えるバトウを足蹴にし、護衛の一人から受け取った剣でなぶる様に突き刺す。

「翁」

その一言で、スツと身を引けば、オウカとバトウの間には立っているのがやつとのラクシュが立ちはだかっていた。

「ほう、邪魔をしようてか」

「バトウ様、お逃げを！」

剣を支えに、彼らの前に立ちはだかるラクシュ。

「うわああああ！」

一方のバトウはその姿を視界に入れることなく逃げ去った。

「屑の始末は外の雑魚どもに任せるとして」

カカ、と笑いながらオウカはラクシュを見る。

「王の剣の生き残りが相手じゃ、不満はあるまい？ アズ」

「手負いの、老人の間違いだろう」

ぎらり、という音が聞こえてきそうな重圧感を伴ってアズが鞘から引き抜いたのは、両刃の大剣。

「すぐに終わる」

振り上げた大剣は、空気を切り裂く雷鳴となってラクシュに落ちる。

振り下ろされたのが雷鳴なら、迎え撃ったのは勇氣。その一撃を

見たなら、いかなる猛者でも逃げ出すか硬直するしかない。しかしその一撃を、血を流しすぎた体で、満足に動かぬ腕で操る長剣でラクシユは弾いて見せた。

「ぬっ！」

「いかせぬっ！」

死に掛けた老人の気迫とは思えない鬼気迫るラクシユ。一瞬とはいえ、アズはそれに吞まれ、防戦を余儀なくされる。

修練に修練を重ねた剛の剣。天才的な閃きや、もって生まれた才能とは無縁の、剛直な剣がアズに迫る。死を覚悟したラクシユの剣はすさまじいものだった。生きることを考えないということは、捨て身になれる。生と死の交わる白刃の交差の中、僅かに混じるはずの戸惑いを消し去ったその剣は、速く重い。

「ぬうおおっ！」

口から溢れる吐血を噛み下し、動かぬ体を文字通り命を削って動かす。

「いいぞ、そうではなくてはっ！」

すべてにおいて無表情だったアズの顔に、喜悦が浮かぶ。地獄を覗き見るような、恐ろしげな笑顔。

「名乗れ！ 俺は戦士アズ！」

いったん距離をとり、北の地方独特の礼をするアズに対し、僅かにラクシユは笑った。

「ラクシユ・ラストティア」

唸りを上げる両刃の大剣。弾き飛ばす勇士の長剣。

だが勝負はじめから見えている。一振りすることに、ラクシユの足元には赤い水溜りが広がっていく。

だが、それでもラクシユは引かない。その場にとどまったまま、アズと打ち合う。

響く剣戟の音。

「勇士かっ！」

遠い昔に、戦士達の村の長老から聞いた名前にアズは震える。

アズの振りかぶり、打ち下ろす一撃にラクシュの膝が折れる。その機を見逃さず、反撃に転じるアズ。風を巻き起こす強力な一撃が雨のように隙なく降り注ぎ、徐々にラクシュを追い詰めていく。

「とどめ！」

ラクシュの首を刎ねようと、ほんのわずか振りかぶったアズに、ラクシュは迷わず突進する。

「くっ！」

それはどちらの苦悶の声だったか。ラクシュの肩に牙を立てる両刃の大剣、そして突進した勢いのまま繰り出されたラクシュの長剣はアズの首筋を掠めていた。

ぐしゃりと、ラクシュの体が崩れ落ちる。

僅かに弾んだ呼吸。

「言い残すことはあるか？」

「やめる、やめてくれええ！」

武人の礼を尽くそうとするアズの耳に、耳障りな声が聞こえる。死闘を演じた二人が視線を向ければ、そこにはオウカの前に引きずられていくバトウの姿。

「あの、方の命を、救って、くれ」

か細い声。すべてを出し切ったラクシュの声はかすれ、聞き取りづらかった。

「正気か、あれを救って何が残る？」

それ以上何も言わないラクシュに、アズは他の護衛に声をかける
「やめる」

無表情に告げるアズに、護衛はオウカとアズを交互に見て、バトウを手放した。

「これでいいのか？」

「感謝、する……」

「さらばだ。真の忠臣“ラスティア勇士”よ！」

振りかぶった両刃の大剣がラスティアの首をはねる。

兇王の時代から続いたラクシュ・ラスティアの戦いはここに幕を

閉じた。

「さて」

視線を転じれば、肥満した体で震えるバトウの姿。

「た、助けてくれるのだろうか!? そう約束しておったな!?」

「助けてやろう、全ての恐怖からな」

一閃。

バトウの首が落ちた。

深淵のような意識の底から、徐々に薄明かりの中へ自身が昇っていく。

「カル様っ!?!」

耳に届いたのは、悲痛な叫び声に似ていた。

「私は……?」

自分自身の喉から出たとは思えない乾いた声。続いて乾ききった喉に、カルは眉をひそめた。体は鉛のように重く、物を考えてくれるはずの脳髓はしびれたままだ。

「私がお分かりになりますか?」

慎重に、だがどこかおびえを含んだ声で、テクニアはカルに問いかける。

「テクニアか?」

なんとか自分に呼びかけている人物を特定するが、頭が割れそうに痛かった。

「奇跡だっ!」

思わず天を仰ぐテクニアを、頭痛をこらえながら横目で見る。

「私は、どうしたのだ?」

確か舞踏会にて少女と、そこまで考えいたったところで一気に脳裡の霧は晴れる。

「テクニア、あの後舞踏会はどうなった!?」

急に鋭さを増したカルの声に、テクニアは一瞬硬直するがすぐに、現状を知らせる。

「はっ、現在屋敷は賊徒の侵入により混乱しております。ですが、ご安心を。こちらには未だ誰も気づいておらぬ様子。幸いここは、出口に近い。今のうちに屋敷を脱出し、いったん屋敷へお戻りになられてください」

「賊徒、だと!?!」

未だ覚醒のままならない体を強引に起こし、窓の外を見れば、夜の空を染める紅蓮の色。

「館の警備は!?!」

「バトウ殿が執っておられるはずですが……」

「わかった」

俯き力の入らない体を見下ろすカル。

「テクニア、お前はスカルディアの屋敷に向かいシュセと合流せよ」

「カル様は!?!」

「この状況で見て見ぬ振りなどできない」

目蓋の裏を焼くのは、最愛の者達を失ったあの夜の炎。

「無茶ですつ!」

留めようとするテクニアは、カルの前に立ちふさがる。ここでもしカルを生かせてしまえば、せつかく助かったはずの命を無駄に捨てさせてしまうことになる。だがカルはふらつく足で、テクニアの肩をつかむと、驚くほどの強さで彼をどかす。

「私には、夢がある。みなが平和に、命永らえることができる国を、この手にするのだ。こんなところで死ぬようではこのたび幾度もあるであろう試練を、乗り越えられるはずがない!」

何者にも侵クラフトされることのない強大な国を。

母に誓い、家臣クラフトに託され、そして最愛のルクと共に見るはずだった強大な国を作る。

「私がこんなところで死ぬわけはない! テクニア、槍を持って!」
ぎりりっとかみ締める奥歯が音を立てる。踏みしめるたびにぐら

つく足を叱咤して、カルは離れを出て行こうと足を踏み出した時、派手な音共に扉が開かれる。

「シュセ!?!」

「カル様!?!」

驚きの声は二つ同時に。

すぐ後に大きく目を見開いたシュセは、膝をつき騎士の礼をとる。

「……殿下! ご命令をつ!」

涙を見せぬよう下を向き、震えそうになる声を叱咤してシュセは声を励ました。

本当ならすぐにもカルを抱きしめたい。生きていたことを喜び、涙を流したい。だが、それをしてしまえば騎士としてのケジメがつかない。精強なるスカルディアの騎士ならば、主の無事を喜ぶ前に己の役目を果たさねばならない。

自分の心を切り捨てて、シュセは騎士に徹した。

「問いたいことは多々あるが、時間がない。この群盗を駆逐する。できるな!?!」

「ご命令とあらば、この命に代えましてもっ!」

優雅ささえ漂わせ、立ち上がりカルに背を向けるシュセ。

「シュセ殿と申されましたか!?! おやめください、群盗の数は多い! とてもあなた一人ではっ!」

テクニアの声に、シュセは肩越しに振り返った。

「一人ではありません。それに……!」

シュセとカルに続き離れをでたテクニアは、外に控えるスカルディア私兵に息を呑んだ。中には怪我をしている者もいたが、どの兵士の瞳も熱くたぎっている。

「わが国に、我がスカルディアの武に勝るものは無い!」

シュセの言葉に、兵士達の奮い立つ気炎が見えるようだった。

老いさらばえた肌の火傷の跡を、夜風がなでる。

「風が変わったのう」

のたうっていた混沌が、一陣の風によって切り払われていく。

「アズよ、引き上げ時じゃ」

ティザルとバトウの首を持った護衛にオウカが声をかけた。

アズと呼ばれた長身の護衛は、ラクシュの屍を一瞥すると黙つてうなづく。

「残った奴らは捨て置き、目くらましぐらいにはなるじやろうて」
カカと笑いながら、復讐の悪鬼は闇に消えた。

黒煙を払う一陣の風。

シュセとカルが率いるスカルディアの私兵はまさにそれだった。

「殿下！ ティザル、バトウ殿いずれも所在は不明にございます」

「よい、彼らなど捨て置き。それより戦えぬ者の保護を最優先にせよ」

「シティーア家の方々を無事保護いたしました。ご息女のシャルナ様もご無事です」

「わかった」

群盗をなぎ払う合間に消火と搜索を一手に行う。

「殿下！ 群盗はあらかた制圧した模様です。残党は逃走しています」

「追え、奴等を街に解き放つな！」

次々とあがる報告に、適時適切な命令を下していくカルの元に、その報告が入った。

「殿下、ヘリオン殿の行方がわかりません……最後に見た者の話によれば尖塔にいたと……」

「尖塔！？」

闇夜を照らす蠟燭のごとく燃え立つ尖塔が視界に入った。

「まさか、だが……」

いるはずがない。あの男がそんな無様な真似をするはずが無い。そう思いながら、カルの足は自然そこにひきつけられていた。

「ごう、と燃え立つ尖塔。その火の勢いは周囲の空気を吸ってそり立つ強大な火柱そのものだった。わずかに火の黒煙の合間から、窓と尖塔の石壁が見えては消えた。」

「ヘリオンっ！」

玄関だったところはすでに炎の壁の向こう。

「ヘリオン、いるのか!？」

「殿下、おやめください火の勢いが強すぎます」

シユセの制止の声が聞こえないようにカルは炎の壁を睨む。

壁に阻まれたその向こうはすでに灼熱の地獄だろっ。

もしこの先にヘリオンがいるのなら、とカルが一步を踏み出しかけた時、その声は尖塔の高みから聞こえた。

「とまれ！」

見上げる先には黒煙にけぶる尖塔の窓。落ちてはまず助かるまいと思われるその高さの窓から、ヘリオンの姿が見えた。

「ヘリオン殿!？」

「ヘリオンっ……何をしてるっ!？」

「何をとは、手厳しい」

シユセの悲鳴とカルの声にヘリオンは苦笑を返す。

「カル……いや、殿下。このヘリオンお暇をさせていただきます
ざいます」

「ふざけるな！」

「私にも望むものがあります」

「何を悠長にっ！」

別れを告げる言葉に、カルは炎の中に飛び込もうとする。

「カル様おやめください」

「シユセ！」

後ろからカルを抱きかかえる彼女に、ヘリオンは温かな視線を注ぐ。

「カル・スカルディア……数多の眷族を従える貴族の当主たるものは毒さえ笑って飲まねばならぬ。そしてその貴族たちを束ねる王ならば、股肱の臣を死地に送って尚平然としていなければならぬ」

「ヘリオン殿っ！」

崩れ行く尖塔に、黒煙が濃くなる。もはやヘリオンの姿は輪郭を確かめるのが精一杯となつている。

「王となれ、カル・スカルディア。強き偉大な王となれ」

ヘリオンの声はどこか晴れ晴れとしていた。

「私と主従になると申したであろう！ 私の夢に付いて来るのだから！？ ヘリオン！」

血を吐くようなカルの叫びに、ヘリオンは背を向ける。

「さらばだ、カル・スカルディア！ 飛翔への舞台は整った！ 勇躍せよ。これからはお前の時代だ！」

炎の瓦礫と化した尖塔が崩れ落ち、その姿を覆い隠す。

「ヘリオンっ！！」

観音開きの扉の両板に、ルビー朱宝^{ルビー}玉とサファイア蒼宝^{サファイア}玉をそれぞれ、一つ目に埋め込んだ鴉が描かれていた。重厚な扉は高価な樫の木材で作られた代物。

「ウエンディ様、お待ちになられております」

長い渡り廊下には深紅の絨毯が敷き詰められ、頭上からは硝子夜灯リアが吊り下げられている。昼かと思うほどに明るいその廊下の中央に、テクニア・ミザークは深々と腰を折りながらカルを出迎えた。

ラストウーヌの屋敷が焼け落ちてから二日。

カルはミザークの舞踏場の前に立っていた。

供を連れず一人、二階席に向かい、席に着く。

見下ろす舞踏場ダンスホールには舞い手が一人。

ルージユに染めたくびるに、結い上げた髪には金剛石の髪留め、

纏う舞台衣装は血よりも赤い深紅の趣。体の線にあわせて作られたドレス。豊満な胸を惜しげもなく強調し、刻むステップは激しくも艶やか。

そのほかには誰もいない。

たった一人のために整えられた舞台。

“憂う胡蝶”

放浪の楽士クラウディが書いた最高傑作。楽士の奏でるそれにあわせ、彼女は踊る。彼女はまさしく舞姫だった。一握の余韻を残して、曲が終わる。

僅かにあがった吐息。うつすらを汗を浮かべた彼女はとてつもなく艶やかだった。

数々の踊りで世の貴族すべてを魅了する舞姫。

「見事な舞踊だった」

二階席から声をかけるカル。

「ありがとう、ぼうや」

くすりと笑う彼女はこの世のすべてを魅了するほど妖艶だった。

まだカルが幼く何の憎悪も知らなかった時、屋敷に招かれた彼女の踊りを見て、今は亡きヘルキオスに言ったことがあった

あの人の踊りはすごい、と。

そして、彼女にはヘルキオスの手がついた。当時彼女には好いた貴族がいたらしい。その貴族とは無理やり分かれさせられ、以後彼女はヘルキオスの妾として生きていくことになった。ヘルキオスが死ぬまでずっと。

「お礼は言わないわよ」

ダンスホールの扉の置くから進み出る侍従が一人。手に持つのは豪華なお盆の上に載せたグラス。それに満ちているのは彼女と同じ深紅の液体。

「必要ない」

くすりと妖艶に笑うと彼女はその液体を飲み干した。

「じゃあね、ぼうや」

それだけいうと、ウエンディは喉を押さえ血を吐いて倒れた。

「ああ……さらばだ、カスティーヤの舞姫」

ウエンディの自裁を見届けるとカルは席を立つ。

背に負うは謀略の陰。

前に迎えるのは陽の光。

ゴード暦でいうところの528年。

大陸東の共和制国家ロアヌキアで起こった動乱は、ウエンディ・ヘルシオの自害によって幕を閉じた。

その動乱は共和制の支柱であった十貴族のほとんどを死に追いやり、残った有力貴族により一つの決断が下された。

王政回歸。

同時に、カルはヘルシオ家をも継ぐことが決定される。

カル・スカルディア・ヘルシオラ。

正式にその名を名乗ることになった彼は、王に推されロクサーヌの民衆と貴族の圧倒的な支持を受け王位に就く。

ゴード暦528年春巡月。

「あまり、こういうのは慣れないな」

「民が待っています」

「わかっている。私の民だ」

「はい……カル様」

漆黒の王衣に身を包む少年王、そばに控えるのは純白の鎧を着た
うら若き騎士。

「おめでとつございます」

「これからだな……」

「はい」

「シユセ私は必ず、私の夢を叶えるぞ」

「……はい」

二人が屋敷のテラスに姿を現すと、民衆からは歓呼の音がロクサー
ー又中にこだました。

ロア又キア万歳、王に栄光を！

その声はロクサーー又を飛び越え、次第に国中を駆け巡る。

大陸に激動をもたらす王が、最初に歴史に爪痕を刻んだ瞬間だっ
た。

謀略の使徒27（後書き）

やっと完結しました。日々の雑多に追われ執筆速度が遅くなったこと、申し訳ありません。見てくれている人にはありがとございます。

次回はまた時間をいただくことになりましたが、サギリとジンの話になると思います。しばらくお待ちください。

獣道1（前書き）

新しい章に入ります。

ロクサーヌでカルが即位したことを知ったサギリの決断は……。

獣道 1

ゴード暦528年。

東域最大の都市ガドリアをその支配下に置いたサギリは、本格的に荒地地の制圧に乗り出した。王都ロクサーヌから境界の山脈を挟み、広がる荒地地はいくつかの交易路を残しほとんどは未開の地となっている。荒地に住まう食人鬼^{デインド}が、その最大の障壁となっているからだ。

良質な鉄を産出するガドリアは、常に自由都市郡との戦に備えなければならぬロクサーヌにとって、喉から手が出るほどほしい領域だった。一方のガドリアにしても、その人口を養うための食糧問題を常に抱えていた。如何に良質な鉄を産出しようとも、食えねば人は死ぬ。不毛の荒地と荒地狂う海に挟まれたガドリアに、その人口を養うだけの食は確保できなかった。もっぱら食を輸入に頼るガドリアは、クルドバーツの商人連合、『赤き道』にその命脈を預けていると言ってもいい。

降りしきる雨が視界を閉ざす。何万何千という窓辺にたたきつけて弾ける雨の音が、短い雨季の到来を告げていた。

「無茶です！」

晴天なら、境界の山脈まで見通せるガドリアの山城の尖塔の一室。今や領主代行となったルカンドの怒声が響いた。

「無茶でもなんでも、やるんだよ」

気だるげにルカンドの怒りを受け流すのは、行儀悪くソファアの上であぐらを組むサギリ。

「今のガドリアの国力で荒地に遠征軍を出すなんて、自殺行為にしかありません！」

ちらりと、難しい顔で頷いているクルドバーツを確認しながらサギリに向き直る。実質ガドリアの財政を担当するのはこの二人といつていい。

「ガドリアを制圧してからまだ半年も経ってません。今やっと民心も落ち着いて、国の基礎を整えつつあるところなんです！ それをいきなり……」

「今回はあたしも反対だよ、双頭の」

壁に寄りかかり、煙管から紫煙をくゆらせていた妖艶な美女が口を開く。

「艶花のジルも、雨季で目が腐っちまってンのかい？」

「ハン、こっちはやつと戦力の補充が終わったばかりだってんだ。

今動かれちゃ、投資が無駄になった上に負債ばかりが膨れ上がっちゃうよ！」

睨みあげるサギリの視線に全くひるまず、ジルは言い切る。

「チツ、どいつもこいつも……シロキアあんたのところもかい？」

「うちは姐さんが行ってくんなら、どこまでも行きますがね」

白い着流し姿の博徒の棟梁は、笑いかみ殺し、蛇がカエルを睨むようなサギリの視線を受け流す。

「行くが、なんなんだい？」

「ま、人数は期待しないでくださいえ」

「ケツ、そんなことだろうと思ったよ。まともに動けるのは双頭の蛇^シらだけじゃねえか」

思わず天を仰ぐサギリに、シロキアはかみ殺した笑いを向けた。

「だいたい、なぜ今なんです？ 別に半年が、一年先でもかまわねえでしょう？」

シロキアの質問に、全員が頷く。

「いや、遅すぎるくらいさ。おい、クルドバーツ」

天を仰いでいたサギリが邪悪な笑みで全員を見渡す。

「はい？」

呼ばれた小太りの商人連合の長は、きよろきよろと全員顔を

渡しながら席を立つ。

「今日の朝一番で届けられたロクサーヌの情報、言ってみな」

「え、あ、はい。ロクサーヌで動乱の果てにカル・スカルディア・ヘルシオラという16歳の少年が、貴族と平民の推挙で王に立ったと……それがなにか？」

深いため息をついて、サギリは整った眉の間にしわを刻む。

「なにか、じゃないだろ。今までロクサーヌを仕切ってた十貴族どもをことごとく押しつけて、そんな子供が王位に就くなんてまともじゃない。後手に回る前に、ロクサーヌまでの道を繋げておきたいのさ」

「交易路なら今でも……」

「ばっか！ そんなチマチマしたもんで一体何人が通れるんだい？ アタシが言ってるのは、戦ができる程度の人数を送れる道の整備さ。そのためにはどうやってもデイドもが邪魔なんだよ」

クルドバーツの返事を一蹴すると、サギリは視線をルカンドに向ける。どこか悪戯を楽しむような不穏なものを含みながら、真っ直ぐに領主代行に注がれる。

「ルカ、ガドリアの安定程度で気を抜くなよ。アンタより一つだけ年上のガキが王都をまとめちゃったんだ。ばやばやしていると、そいつに全部飲み込まれちゃうよ」

「僕は、別にっ！」

言葉に詰まるルカンドから視線をはずし、視線をクルドバーツに向ける。

「とにかく、金は出してもらっぜクルドバーツ」

「また、ですか」

「ガドリアで供給された鉄を優先的にまわして、食料の買い付けをしてんだ。半年でずいぶん溜め込んだらう？」

「命がけで荒地を渡るので、相応の見返りだと思っていますが」

「その負担を軽減してやろうって話してるんじゃないか。お前の

好きな先行投資さ」

口の端を吊り上げて笑うサギリ。もとの顔立ちが端正なだけに、その邪悪さが余計に際立つ。長く流れるような黒髪を邪魔そうにかき上げて、ほかの三人にも睨みを利かす。

「シロキア、てめえは参加できる人数だけを正確に上げてルカに教えてやんな。ルカも、降伏した兵どもでやる気のあるやつがいれば数えあげる。ジルは」

「艶花はあんたの下で参加するなんて一言も言っていないよ」

サギリの言葉を遮るジルに、めんどくさそうにサギリは視線を向け、不敵な笑みを浮かべる。

「ならてめえが率いればいい。まさか、艶花のジルが自ら率いて無様な戦いはしねえだろう？」

「ふん、まあいいさ……雪華の訓練ぐらいにはなる。ただし嫌気が差したら抜けさせてもらうよ」

「かまわねえよ……さあ、そういうことだ。ルカ、モルトの名代しつかり頼むよ」

それぞれに部屋を退出していく中、ルカンドだけが残った。

「……サギリさん」

「なんだい？ 今更荷が重いなんてふざけたこと抜かすようなら、そつ首跳ね飛ばすよ」

「違います……ただ、ロクサー又とわざわざ戦う必要はないはずです！ なんなら交易の量を増やしたっていい。なぜわざわざ戦いを望むようなことをつ！」

強く握られた拳が、ルカンドの意志の強さを物語る。

「そいつは相手の出方次第だねえ。おとなしくアタシの下につくようならわざわざ戦なんてする必要はないしねえ」

低く笑うサギリは雨の降りしきる窓の外に視線を転じる。

「覚えておきな、ルカ。アタシはほしいものは全て手に入れる。財宝も領土も、この国も！ 邪魔するやつは誰であろうと斬って進む。それがアタシの、双頭の蛇の道だ」

気だるげな雰囲気から、一変したサギリの威圧は戦場に居るときに勝るとも劣らない。

「サギリさん！」

気だるげにソファアに腰掛けていたサギリが音もなく立ち上がり、ツカツカとルカンドの前まで来る。

口元には邪悪な笑みを浮かべ、黒曜石のような漆黒の瞳は見るものを竦ませる。だがその瞳をルカンドはひるむことなく見返した。

「戦が嫌なら、アタシを出し抜いてみな。アタシに遠慮してるようじゃまだまだ無理だろうけどね」

ぼん、とルカンドの肩を叩きサギリはその部屋を出る。

「くっ……」

後に残ったルカンドは、自身の無力さをかみ締めながら杖をとった。

「終わったのか？」

杖について部屋を出てきたルカンドに声をかけたのは、今日も黒い帽子を深くかぶったサイシャだった。

「うん」

簡単に返事をするルカンドに、サイシャはそれ以上何も言わない。尖塔の廊下をルカンドの歩む速度に自然とサイシャは合わせてゆつくり歩く。先ほどまで振っていた雨はすでに上がりつつある。雲の間から光が差し込み、風に流されてゆつくりと形を変えていく。

「階段」

「大丈夫」

時間をかけてゆつくりと、二人が尖塔を降り切った時には、雨は完全に上がっていた。雨上がりののどろいどろい風が風に運ばれて二人の鼻をつく。ガドリアもこの季節だけは、多少なりとも緑に恵まれる。短い恵みを精一杯享受しようと、一斉に花々が芽吹くためだ。

「いい風だね」

「ああ」

青い空を見上げるルカンドに、サイシャが頷く。強い風が心地よさをともなうて二人を包む。

「僕はね、ガドリアが好きだよ」

「うん」

「みんながいるここが好きなんだ」

「うん」

「だからね、僕は誰を敵にしても、ここを守ってみせる……もう目の前で人が死んでいくのはたくさんだ」

「サー姐と何かあったのか？」

サイシャの琥珀の瞳に映るのは、ルカンドを気遣う色。それに苦笑して首を振る。

「ううん、ただね叱咤激励されちゃったよ。ロクサー又は覚えてる？」

「緑がいつばいだっただな」

「うん。あそこで僕と一つ違いの人が王様になったらしい。ガドリアなんかで満足するなあってさ」

「ルカは、よくやってる」

聞き取れないぐらいの小さな声で、褒められる。

「……ありがとう」

帽子で顔を隠しながらうつむくサイシャに、ルカは視線を前に戻す。

ロクサーが新たな王を戴いてガドリアを併呑する。その可能性の 높さに、ルカンドはサギリの予想が外れはしないだろうと考えていた。

「具合はどうだい、爺さん」

「はん、てめえに心配された日にや治るもんも治らんぜ」

領主の城の一室にルカと分かれたサギリの姿があった。

「その分じゃ当分死にそうにねえな」

「こちらら、体が資本の盗賊だったんだ。そう簡単にくたばっちゃ炎の運び手の名折れだぜ」

ベットに横になったまま威勢の良いモルトに、サギリは肩をすくめる。

「まあいいさ。今日はしばらくの別れを言いに来たんだ」

「いよいよか」

「ああ、荒れ地を統べる。本当の意味でな」

不敵に微笑むサギリに、モルトは痩せさらばえた自身の手を見つめた。

「そうか。デイドとの決着はわしも望むところだったんだが……」

「ジジイがでしゃばるんじゃないよ。奴らはアタシの獲物だ」

「いや、それもあるが……そればかりじゃねえ。お前には本当の意味でガドリアを救ってもらうことになっちまった。こんなこと言っちゃシロキアみてえだが、ついこの間ガドリアに来たお前に、ここまでしてもらって、わしはなんと礼を言っただけなのか」

頭を下げるシロキアに、サギリは肩をすくめる。

「アタシは自分のほしいものを手に入れるだけだ。その過程でたまたま利害が一致しただけだろうよ」

「いや、今度の荒れ地の討伐だつてそうだ。領主と四役の協調が出来上がっちゃった今、ガドリア貯蔵の食料は確実に減っちゃまっている。他の四役のうち気づく奴はすでに気づいちゃまっているはずだ。このままじゃまた荒れ地に子供を追いやらなきゃいけないことになる」

一度咳き込んだモルトだったが話をやめようとはしなかった。まるで何かに急ぎ立てられるように、サギリに対して言葉をかける。

「だが、デイドともさえ居なきゃロクサーヌから食料が流れ込む。少なくとも、子供を捨てるような時代にはならねえはずだ」

「デイードの討伐じゃ人が死ぬ、それもでもアタシがガドリアの恩人だつてのかい？」

「ああ、間違いねえ」

「ハン、勝手にありがたがってるよ。じゃあアタシは行くぜ」

「おう」

互いに、再び会おうとは言わなかった。

「それにな、蛇娘。てめえはガキの居ねえ俺にルカンドって言う宝をくれた。こいつばかりは感謝してもしきれねえ」

サギリの去った部屋でモルトは雨の晴れた空を、窓ごしにみた。

「ちきしょう……眩しいな」

窓からながれこむ風も、今日はいつにもましてやさしかった。

朝焼けに燃える黎明の空に、炎と鉄槌の紋章旗が揚がる。

総勢700名。

ガドリアの治安を維持する最低限の人数を除けばほとんど戦える兵の全員を連れて、サギリ率いる荒れ地征伐軍はガドリアを出発した。

「野郎共！」

先頭に立つのは、双頭の蛇を率いる女盗賊。

「命がけで働け！ 命晒して働いた奴にはそれ相応の報償が待ってるぞ！」

実質的なガドリアの支配者の言葉に、率いられるものたちの士気は上がる。

「化け物を根こそぎ殺す！ きれいごととは言わねえ！ ぶち殺して首を刈れ！ 腸を引きずり出して、四肢をばらせ！ 奴らに喰われた仲間を思い出せ！」

飛沫一つなく静まり返る賊徒達に、待ちかねた言葉がかかる。

「出発！」

朝焼けの空を揺るがす喚声とともに、魔女率いる賊徒が出陣した。

獣道 2

空は朝の力を取り戻し、ガドリアの領主城に翻る炎と鍛冶の旗は風になびく。

「良かったのかい？ こっちに残って……」

聞く声は心配そうに隣にいる小柄な少女に向けられていた。

「サー姐が、こっちでいいってさ」

少しさびしげに、サイシャは返事をする。

「……うん、そうか。ありがとう」

少年の感謝の言葉に、黒い帽子のひさを下げることで答えると、サイシャは声を多少硬くしてルカンドに質問する。

「ケイフウとルクもついて行ったな……良かったのか？」

「僕には僕の、やることがあるよ」

苦笑して自身の足元を見下ろす。

「この足じゃ馬にでも乗らないとね」

「……悪かった」

「サイシャは優しいね」

につこりと人好きのする笑みを返す少年を目にすると、サイシャは視線をそらして悪態をついた。

「私は、お前のそういうところが嫌いだ」

「参ったな」

苦笑するルカンドに、サイシャはそっぽを向いたまま声をかける。

「いくぞ。やることあるんだろ」

義足を一步踏み出して、ルカンドはサイシャに声をかけた。

「心強いよ。ありがとう」

ガドリアを夜明けの風が吹き抜ける。

サギリ率いるデイド討伐軍は、その狩りの範囲を着実に広げデイド達を狩って行った。荒地の南部から討伐は、三日で100匹近いデイドを駆逐するまでになっていた。

常に先頭を切るのはジンを始めとした身の軽い双頭の蛇のメンバーであり、彼らが巨躯のデイドの体勢を崩しそれを続く手勢で片付ける。という形が出来上がっていた。

一日に数回の遭遇、多いときには20匹以上の大群に遭遇しながらそれでもこれまで死者がほとんど出ていないのはサギリの手足である彼らの活躍によるところが大きい。

昼夜を問わず駆け、他と相容れない彼らはまさに魔女にのみ付き従う狼の群れに近かった。

「サギリ」

呼んだ声が常より低いのは疲労のためか。デイドの討伐が始まってから、常に最前線に立ち続けるジンをサギリを呼び止めた。

「あん？」

呼び止められたサギリは馬上、曇天の空と荒涼の荒地を睨みながらそれに応じる。

「ついて来れないやつが出始めてる。休んだ方がいいんじゃないか？」

場所はすでに荒地地の中部。南の交易路から徐々に北に攻め込んできたガドリア軍は、すでに食人鬼の領域の深くまで入り込んでいた。

ほとんど道すらないような荒地地の中、ここで脱落することは死を意味する。

「別にかまわねえさ……これは試験なんだ」

「試験？」

疑問の表情を浮かべるジン。

「アタシはね、アタシだけの軍勢がほしいんだ」

「……俺たちがいる。それだけじゃ不満か？」

ジンの答えにサギリは思わず噴出し、睨んでいた地平から視線を転ずる。

「数が少なすぎるだろ？　せめて千……アタシの手足になって動くやつらがいる」

「千……そんなにか？」

「おいおい、王都にいる王様は万の大軍を率いるんだよ。せめてそのくらい居なくっちゃねえ……んでそれを率いるのはアンタさ」

「俺は、ただの盗賊でいい」

「アンタが一人で万の大軍を止められるってんならそれでもいいけどね、ジン。ほしいものを手に入れられる。だからアタシ達は盗賊をやってるんだ。東方の一領主なんてモンで満足してもらっちゃ困るんだよ、ルカもお前も、ね」

「国を、盗むのか」

以前モルトを除く三役に向かって吐いた大言を思い出してジンは、サギリに問いかける。

「盗む？　ハン、奪い返すのさ」

不敵に笑うサギリは、再び地平線に目を戻す。

「……アンタはアタシの為に生きる。そうだな？」

黒く長い髪が揺れる背中越しに問う声は、どこか迷いながら。

「ああ、そうだ」

しかしそれに答える声は、一片の迷いすらなかった。

「ジン、見えるかい？」

指差す方向の地平線。わずかに靄がかかったようになっていた。

「何か、いるな」

「それもかなりの数だ」

地平線の彼方を少しづつだが、移動するその靄を親の敵でも見るようにサギリは睨む。

「あれを狩るぞ」

「……わかった」

そういつて身を翻す彼の背にサギリのくすりとした笑いが投げか

けられる。

「いい子だ」

一瞬優しげな眼差しになったサギリは、次の瞬間、荒地の魔女として恐れられる邪悪な笑顔を顔に浮かべると地平を睨む。

「さあ、そろそろ絞ってやるか」

時刻は黄昏の迫る中、荒地討伐軍は獲物に向かうため疾駆しだした。

地平線に見えた靄の正体は、近づくにつれて嫌でもわかってきた。それを追い始めてからデイドとの遭遇率が跳ね上がったのだ。ほとんどは正面から向かってくるものばかりだが、突然軍勢の横腹を突いてくるような者まで出現しだす。

夜の闇に松明を持った700の軍勢が疾駆する。それめがけてまるで炎に吸い寄せられる夜光虫のように、無数と湧いて来るデイド達。そのあまりの多さに先頭を駆ける双頭の蛇だけでは手が足りなくなってくる。

だがそれでもサギリは追撃をやめようとはしなかった。

夜の闇の中、デイドの雄たけびと人間の悲鳴が重なる。右の側背から聞こえたと同時に、前に立ちふさがるデイド達の姿がある。鬼火のような赤い瞳をちらちらと光らせ、手には無骨な鈍器を振り回す。狂猛な雄たけびは怒りのためか。

「シロキア！」

咄嗟にサギリは博徒の長を呼ぶ。

「右の横、5匹程度だ。防げ」

「へい」

必要最低限の言葉で命令すると、先頭の双頭の蛇を見る。靄を守るように立ちふさがるおよそ50のデイドに迫る。

自身短剣を抜き放ちつつ、ジンの姿を探す。

「ジン、蛇だ！」

それだけで双頭の蛇の彼らにはサギリの意図がわかる。途端にジンとサギリの後続くようにデイドと向かい合っていた彼らが、二つの列になってジンとサギリに付き従う。文字通り、蛇の二つの頭となって、50はいるデイドの群れに斜めから切り込んでいった。

先頭を走るサギリとジンの突破力。一糸乱れぬジン揮下の双頭の蛇達が持つ衝撃力。何よりもその驚異的な速度。それを最大限生かした戦い方だった。

デイドが鈍器を振り上げ先頭のジンに狙いを定める。だがその鈍器が下りる前に、ジンはデイドに一撃を加えその横をすり抜ける。怒りとともにジンの方を振り向いたデイドの背に次々と後続の者が一撃を加え、ジンの後に続いていく。

彼らのおつた後、デイドは無数の牙に噛み千切られたぼろ雑巾のようになっていた。サギリの率いる蛇の頭でも同様のことが繰り返されていた。

だが何分デイドの数が多い。

双頭の蛇の切り込みを受けながら、彼ら以外の獲物に目をつけて向かうデイドもいる。そのデイドが向かう先では悲鳴と雄たけびが夜の闇に響き渡る。

デイドを殲滅し終える頃には、深夜になっていた。

「くそっ！」

血塗れた短剣についた脂を払い落として、サギリは悪態をついた。双頭の蛇が戦う場所以外での被害が大きすぎて、これ以上獲物を追撃できそうにない。

「後ろじゃ10人死にやした。怪我人はざっと30ほど。前の方じゃ死人が5人、怪我人40ほど

……おつと姐さん睨むのはやめてくだせえ」

シロキアの報告に、眉間にしわを寄せるサギリ。だんだんと険悪になるその視線に、シロキアは釘を刺しておく。

「結構これでも抑えた方なんですがね……お前からもなんか言っ
てやれよ」

話を振られたジンは、シロキアを一瞥する。

「俺たち双頭の蛇は負傷5。全員戦える」

「かなわねえぜ。まったくよお」

嘆息するシロキア。

「……わかった。とりあえず今日はここで休む。手下どもに知らせ
ろ」

「へい」

下がるシロキアと、遠くを睨むジン。

「追わないのか？」

「この戦はね、アタシら双頭の蛇だけがやるんじゃないのさ。さっきも
言っただろ？ アタシについて来る人数をもっと増やさなきゃいけな
い。使えそうな奴のえり分けも兼ねてるから、そう簡単じゃないの
さ」

「その割りに、イラついてるな」

「アタシだって万能じゃないさ」

口元に浮かんだ笑みをかみ殺し、サギリはジンと同じ方向を見る。
「さあ、アンタも寝な。疲れてんだろ？」

何かいいたそうにしていたジンだったが、ゆっくり頷くとサギリ
に背を向ける。

その夜の襲撃は、都合3回あったがその度にサギリが先頭に立ち
返り討ちにしていった。

「ケイフウ、痛み止めと包帯お願い！」

襲撃の後の血臭の中、血と汗にまみれながらルクは怪我人の治療
に当たっていた。白い肌に玉の汗を浮かべ、寝る間も惜しんで献身
的に治療を続ける。その彼女の姿にいつしか、聖女と言うあだ名が

ついていた。

ガドリアの動乱の折、レギーの元で医術の初歩を学んで依頼彼女はレギーの元で修行を重ねてきた。今では一人でも患者の治療を任せられるようになり、口の悪い一部の人間の間ではレギーを追い抜く日も近いともっぱらの評判だった。

「これでいいのかな？」

大剣を背にしたケイフウが、痛み止めの薬草と真新しい包帯を差し出す。

「うん、ありがとう」

にこりと微笑むと、すぐに真剣な顔になつて患者に向き直る。

当初レギーが参加するはずだったこの戦に、彼女が急遽参加しているのはひとつにモルトの体調悪化があげられる。ルクでは傷の治療はできても、病気の治癒はできない。だからルクはレギーをガドリアに残し、志願してこの戦に参加していた。

傷口を縫合して、薬草を塗りこみ包帯を巻く。

「よしっ！ 縫合はしておきましたので無理に動かさないでください」

患者に声をかける彼女。

「ルク、少し休んだ方がいいよ」

治療を終えたルクに、ケイフウが心配そうに声をかける。

「私は大丈夫。ケイフウが守ってくれるもんね」

ケイフウはサギリに頼み込んで、ルクを始めとした医者達の護衛に当たっていた。

「それにケイフウがいると、なぜかみんな素直に言うことを聞いてくれちゃって、助かってるんだよ」

「うん！」

小柄だったケイフウもこの半年で身長が伸びつつある。既にサイシャは追い越し、続いてルクと同じぐらいにはなっていた。

「何か必要なら言ってね」

ひとえに柄の悪いガドリアの賊徒達が聖女とまで言われるルクに、

ちよつかいをかけないのはケイフウの存在が大きい。先の動乱では、常に最前線で戦い続けるケイフウの姿を目撃した者が多い。傷つきながらも決して怯まないその姿と剣力は、畏怖と共に刻み込まれている。

そのケイフウが傍らにいる彼女に近寄ろうなどと言う無謀な者は、いるはずもなかった。

「……ねえ、ケイフウ。モルトさんは……」

「ん？」

あわてて手を振るルク。

「ああ、うん。なんでもない」

言いかけた言葉を飲み込み、次の患者の元に向かう。その傍らには、常に彼女を気遣うケイフウの姿があった。

松明を周囲に掲げ、ほぼ三日ぶりのまともな休息を取っていた。

「全くひでえ有り様じゃねえか。よくほかの奴らは着いていくつもりになるね」

「おうとも、俺あ手柄立てれば報奨金を弾むって話だから参加したんだぜ。それがどうだい、デイドどもを薙ぎ倒していくのは、あの魔女の手下どもで、俺達がすることと言えば夜の見張りぐらいのもんだ」

「それだけならまだしも、奴ら今日は討ちもらしてたらしいじゃねえか」

「つまり俺達が見張りにつかなきやならないのも、奴らのせいか。たまんねえぜ」

周囲に漂うのは、境界の山脈から吹き付ける風がそんな愚痴までも流していく。

結局のところ彼らは不安で仕方が無いのだ。

既にガドリアで生活しているものには、未踏領域に達している。

道を知っているのは、双頭の蛇のもの達だけなのだろう。いずれも、少年のような彼らに従わなければいけないのは、ガドリアで肩で風を切って歩いてきた彼らの矜持を痛く傷つけた。

帰り道などわかるはずも無い。徐々に怪我人が増していく中、次は自分が死ぬのではないか、という恐怖の中で不満が無いというほうがどうかしている。

だが、だからといって荒れ地の魔女に逆らうなど論外だった。

なんとといっても、ガドリアの動乱を勝ち抜いてその座に君臨しているのは、厳然たる事実。三役を従えたその姿は、恐怖が人の形を取った者としか思われない。

彼らにとつてサギリは、まさに魔女だった。

「俺達が前線に出れば、双頭の蛇なんざお払い箱なのによお」

「まっただ」

「へえ、そいつは聞き捨てならないね」

夜の闇に向かって吐いた戯言に、若い女の返事が返ってくる。

「……え？」

どこかで聞き覚えのある声に、背後を振り返れば、そこには彼らが心底恐れる“荒れ地の魔女”がたっていた。

「アタシの双頭の蛇より、働けるって？」

「いや、それは、その……」

「それじゃ働いてもらおうかねえ」

「いや、ですから」

にやりと笑う荒れ地の魔女の笑顔に、氷塊を背筋に突っ込まれたような感覚を味わいながら見張りの二人はその場に直立する。

「逃げるなよ。まあ逃げたところで、デイドどもの餌になるだけだけだなあ」

冷や汗が全身から吹き出る二人を置き去りに、サギリは上機嫌で鼻歌を歌いながら歩き去る。

「ど、どどうするよ!？」

その小さな背中が見えなくなってから、二人の見張り止めていた

息を一気に吐き出す。

「ど、どうするって……ジルさんに相談するしか」

どちらともなくうなずくと、二人は走ってジルの下へ向かった。

「こんの、ばかたれ！」

報告を受けたジルの怒声が、夜の闇に響く。

しおれる二人をこれ以上せめても無駄と判断したのか、深くため息をつく、椅子に倒れ掛かるように座る。

「……まったく」

肘掛によりかかり軽く頭を抱える。

「とりあえず、見張りには他のやつをやらせるから、あんた達は休みな」

疲れたように息を吐き出すと二人を追い出す。

これまで雪華は直接サギリの指揮下には入っていない。ジルが直接指揮してこの討伐に参加していた。シロキアや城兵などと違い、ジルは直接サギリの手下というわけではないのだ。今現在は“よき協力者”という地位にあるし、今後もその姿勢を崩さないつもりだ。ゆえに、今回の討伐でも前面に立つのはサギリ指揮下のガドリア軍になり、“よき協力者”たる雪華はその補助を請け負うということ、サギリと話をつけていた。

だが、今回のことで状況が変わる。一兵士の言葉とはいえ、雪華の者からの言葉だ。よりもよってそれをサギリに聞かれた。

前線に立っているジンや双頭の蛇と違い、雪華にディードと戦うノウハウはない。相当の被害を覚悟して前線に立つか、それとも今の地位を捨てる覚悟でサギリの指揮下に入るのか。雪華の長たるジルには、その決断を下さねばならなかった。

「ままならないね、なんとも」

一度サギリの配下となってしまうえば、そこから抜け出すのは至難だろう。不要と考えられればすぐにも切り捨てられる。だが今こ

ここで前線に立てば、せつかく補充をした雪華の戦力を、また削られることになってしまう。

今すぐ戦うことはないにしても、所詮サギリ率いる双頭の蛇とは、敵同士でしかないのだ。今回の遠征に参加したのでさえ、利益と打算に基づいてのことだ。

サギリの荒れ地の制覇に興味があるわけでも、交易路の拡大が必要というわけでもない。

ぎりり、と爪を噛むとジルは立ち上がりサギリの元へ向かった。

「おや、ジル何か用事でも？」

とぼけたような返事に、形よく整えられた眉がピクリと動く。にやりと笑う荒れ地の魔女に、ジルは明日は雪華が前に出ると伝える。「へえ、たいした自信だね。ちなみにアタシは先を急ぐから、着いて来れない奴は置き去りにして進むことにするよ」

「雪華はそんなにひよろくはないさ」

「ふん、楽しみだね」

伝えることだけ伝えると、ジルはきびすを返す。

「さて、うちのところも陣容を変えなくちゃね」

意地悪く笑うサギリの視線に映るのは、城兵たちの眠る地区だった。

翌日、荒れ地の戦場は一変していた。

昨日までの犠牲の少なさとは打って変わり、怒声と悲鳴が交互に聞こえる修羅場と化していた。原因は二つある。

ひとつは雪華が前線に出たこと。

そしてそれに加えて、双頭の蛇が前線から退いたことだ。変わった前に出てきたのは元城主の軍勢だった兵士達。その後ろには双頭の蛇を配置している。

未だデイドに対して確たる戦法を確立していない雪華と、装備

は統一されているが、個々人の戦いになれない城兵達。

まともに連携も取れない中、苦戦は当然だった。デイドの圧力に、前線は崩れ立つ一歩手前。

先日よりは大幅に少ない10のデイドを相手にしてさえ、その被害は昨日の2倍近くになる。

「姐さん……ちよつといいですかい？」

見るに見かねたシロキアが戦場を見守る彼女に声をかける。

「なんか用事かい？」

デイドの大振りな斧で体をまっ二つに割られる城兵、幾本もの槍で体中を滅多刺しにされるデイド、片腕をもぎ取られてのた打ち回る雪華の兵。それらから目を離さず、サギリはシロキアに答える。

「手下がカシラのすることに意見するなんざ、見当違いなのは重々承知してますが、それでも敢えて言わせてもらいます」

シロキアの眉間に刻まれた皺は深く硬い。

「なんで狼どもを下げたんです？ 城兵だけじゃデイドになんてかなわねえのは、百も承知でしょう？」

「お前、双頭の蛇の力だけでこの先勝ち続けられると思うのかい？ たった数十人の力だけで、ガドリアを長年悩ませてきた食人鬼^{デイト}が本当に駆逐できると？」

「そりゃ、そうかもしれませんが」

言葉に詰まるシロキアに、サギリはなおも言葉を続ける。

「ジンには、逃げる奴は殺せと命じてある」

「そりゃ……」

無茶など、言葉にしようとしたシロキアとサギリの視線の先。

戦場の特有の極限の緊張感に耐え切れなくなったのか、城兵の一人が双頭の蛇の方へ駆けてくる。

「助けてくれ！ もういやだ！」

仲間の返り血に顔面を染め、片腕は自身の血で朱に染まる。泣き叫ぶ城兵が無理やり、双頭の蛇の列へ入り込もうとした瞬間。

銀の軌道を描く双剣が、悲鳴を発するその喉に突き立ち、食い破った。

「逃げるな！」

琥珀色の髪を荒地の風になびかせて、ジンは断固として叫ぶ。

ジンの温度が感じられない赤い視線は、今まさに戦っている城兵達に向けられていた。死んだ仲間を横目で追っていた城兵達は、一瞬の恐怖に凍りつく。

「戦え！」

双剣からふるい落とされた血糊が、死者の顔にかかる。

仲間を殺された衝撃よりも、眉ひとつ動かさず仲間を斬り捨てるその男に恐怖を掻き立てられる。

「う、うおおおおお！」

背中から感じる恐怖を打ち払うように、城兵の一人が咆哮する。

連鎖反応のように咆哮があがる。

「やるしかねえのさ」

サグリの笑いを含んだ声に、シロキアは視線を戦場から戻す。

「逃げ場なんてものを残しておいたんじゃ、為りきれないだろう？」

地獄の底で笑う女神のように、薄らと笑う。

「アタシ達は、人じゃねえ。獣なんだからよお」

ぶるりと、戦士として百戦錬磨のシロキアの背を寒気が走る。

荒地地で生き抜くというのは、人を捨てねばならないほど過酷なものだという現実を、見せ付けられた。話には聞いてはいたが、それを見せ付けられて、シロキアは動揺しないではいらなかった。

「さて、こっちはなんとかかなりそうだが……ジルの方はひどそうだねえ」

笑みを含んだ視線の先、次々とデイド達を血祭りに上げていく城兵達。長槍を手に、巨軀を誇るデイドに向かう城兵達。振るわれる鈍器に片腕を潰されながら、それでも怯まずに、狂ったように槍を突き立てる城兵達が、あれほど苦戦していたデイドを圧倒する。

だがもう一方の前線としている雪華では、ところどころディードに食い破られていた。

「仕方ねえな……シロキア。ジルを助けに行ってやれ」

「へい」

自身の手下の元へ戻ると、初めて口元をゆがめて笑う。

「尻をたたかれた気分だぜ」

何物も映さないような深淵の黒を思わせる、サギリの瞳。

自分には持ち得ないであろう圧倒的な狂気。だがそれゆえに、付いて行くこうと思うのだ。

「野郎ども、気張れ！ 生き残るためにな！」

白木の刀を手にすると、手下を引き連れてシロキアは雪華の救援に向かった。

獣道 3

隣の城兵達の上げる氣勢を横目で確認しながら、ジルは舌打ちした。

「無様だったら、ありやしない」

自身前線で投擲剣を振るうも、筋肉それ自体が防具なみに厚いデイド相手では、相性が悪すぎた。それこそサイシャのように、即効性の毒でも塗らねば太刀打ちできるはずもない。

かろうじて目などを狙って援護はできるものの、自身の力だけで事態を好転させるまでにはいたっていなかった。

ジル自身が苦戦する中、雪華が攻勢なわけがない。暴れるデイドをなんとか、凌いでいるというのが現状だった。

たった10匹程度のデイド。それすらもまともに防ぎ得ない。遠巻きに囲んで弓で射殺す方法をとってはいるが、時間がかかってしかたない。かといって、双頭の蛇のやり方を真似をしようとすれば、最初に突っ込んだものはまず死ぬだろう。

だが好き好んで、そんなものに志願するだろうか。

「一匹抜けた！」

その悲鳴が、ジルの思考を中断する。間近で見れば山を思わせる巨躯がジルのすぐそばまで迫ってきていた。

「くっ」

振り抜かれる鈍器と同じ方向に、死に物狂いで飛ぶ。ジルのわき腹を掠めただけのそれは、ジルの肺から空気を奪い去り、特大の苦痛をもたらした。

地面にのた打ち回る彼女をなお執拗に、そのデイドは狙う。

重量感あふれる鈍器を、振りかぶるデイドの姿を、ぼんやりを眺める。

「死ぬのか……」

呆然と呟いた口の端から、血があふれる。

咳き込む彼女の瞳が振り下ろされる鈍器を見つめるのと。

「うおおお！」

雄たけびとともに、デイドを吹き飛ばしたシロキアの姿が視界に入るのは同時だった。痛むわき腹を抱えるようにして立ち上がる。一対一でデイドと向かい合ったシロキアは、ジルに背を見せる格好になる。いつもの白い着流し姿。たくましい背中が、ジルには一回り大きく見えた。

「まったく、仕方のねえ餓鬼だ。ガドリアの時は、少しは成長したと思っただが、まだまだ小娘だな」

背中越しに笑うシロキアを呆然と見つめる。

「なんで……」

口の端をぬぐいながら、硬い視線を向ける。

「うちのカシラがな、お前を助けてやれってよ」

構えた刀を肩に担ぐと、悠然と吼え猛るデイドと対峙する。

「サギリが……」

見渡せば、シロキアの手下たちが先を争ってデイドへ向かっていく。雪華の中にも、それに釣られて立ち向かうものが出てきている。

「くっ、あたしはっ……」

こと、戦に関してはジルはサギリに及ばない。それをさまざまと見せ付けられた形になった。だが、それがどうした、と自身を叱咤する。それでも、ジルは立たねばならない。彼女を頼りにする者が、彼女を信頼して道を譲ってくれた者が、確かに存在するのだ。

「あたしは、艶花だ！」

歯を食いしばり立ち上がるその姿に、シロキアは苦笑をした。長年ガドリアを巡って争ってきた艶花のハンナの後継者が、こんなところで倒れてしまつては面白くない。

「応よ、その意気だ」

叫び声とともに、突進してくるデイドの一撃を。

「ハアア！」

気合一閃、跳ね返す。

返す刀の一撃でその手首を跳ね飛ばし、踏み込んでさらに一撃。首をえぐる袈裟懸けの一太刀。

いかに屈強なデイドといえども、この攻撃には耐え切れなかった。崩れ落ちるデイドを、狂犬そのものの表情で見下ろして、シロキアは吼える。

「野郎ども！ やっちまえ！！」

高笑いとともに、戦場に向かうシロキア。

暴れるデイドは既に狩る側から、狩られる側になっていた。

「止血の薬草が足りないっ！」

「痛み止めをもっと！」

城兵達と雪華がデイドを倒し終えた後、そこは更なる戦場になっていた。

「ルク、もう痛み止めもないよ！」

ケイフウの悲鳴に、一瞬だけルクは顔をゆがめる。

だが、即座にその瞳に決意を浮かべると、腹を切られた患者に向き直る。

「痛み止めなしで、やります……お願い。耐えてっ！」

四肢を屈強な男に押さえつけさせ、口には布を詰め込んで、傷口の縫合に専念する。痛みと反射で暴れる男の腹部を縫う作業は、極限の集中力と根気を要した。

男の四肢が痙攣し、あふれ出る血が止まらない。

「止血の薬をつ！」

叫ぶルクに、蒼白になって患者を押さえつけている男が首を振る。次いでケイフウを見るが、悲しそくに視線をそらされる。

「くっ……」

唇をかみ締めながら、だが彼女の目元に光るものはない。目元を曇らせては患者を見れない。自分の無力を嘆きたくなる心を追いや

り、ただ手元にのみ集中する。

止まらない出血に、男の痙攣が弱弱しくなり。

「お願いっ……」

ルクは震えそうになる手元を、気力でねじ伏せる。間近に迫る敗戦の気配に、それをなんとか避けようと精一杯もがく。

だが彼女の願いもむなしく、男は息を引き取った。

「ルクさん、こっちも頼む！」

だが、彼女にその死を悲しんでいる暇は与えられない。次々と運び込まれる患者が彼女を待っている。悲しみも、疲れも、全てを心の奥底に押し込め、彼女は絶望の戦場を戦う。

デイドの襲撃をなんとか退けたガドリア軍。

その中に、サギリを訪ねたジルの姿があった。シロキアに付き添われたその姿は痛々しいとしか言いようがない。

「随分な格好じゃないか。艶花ともあろう者が、いい笑いモンだねえ」

元の華美な服は土に汚れ、あちらこちら擦り切れてぼろ布同然になっっていた。

「……助けには、感謝する」

息をするのも辛そうに、ジルは淡々と口を開く。夜の闇でもそれとわかる蒼白な表情に、浮かべる色は真剣そのもの。サギリの軽口に付き合う余裕もない。

「はあ………んで、用件をいいな」

深く息を吐き出し、次いで口元に浮かべるのは悪魔の微笑。

「雪華を、一時預ける」

「ふう〜ん、かまわないんだね？ アタシの下に入るってこと、後からなして言うても聞かないよ」

「ここで全滅するより、マシだ」

直後、口元に手を当て吐血するジル。崩れ落ちそうになるジルは、シロキアの腕に自身の腕を絡みつかせ、なんとか倒れるのを防ぐ。

「随分仲良しなんだね？ シロキア」

肩を竦める博徒の長。行儀悪く、敷物の上にあぐらをかいていたサギリが立ち上がり、ジルの間近に迫る。

「あたしは艶華だ。手下どもを守る義務がある！」

口元に浮かべるのは血化粧。蒼白な顔に鬼気迫るものを浮かべ、ジルはサギリを見据える。

「ハン、いいだろう。アタシの手足として使ってやるよ」

流れる風に、サギリの長く黒い髪がなびく。

あごで合図してジルをルクの元に運ばせる。

「見上げた心意気じゃないか」

愉しげに小さく笑ってサギリは、明け切らぬ空を見る。全てを呑み込む漆黒の瞳が、瞬く無数の星を捉えていく。

「全て呑みこんでやるっ！」

敵愾心も、憎悪も、嫉妬も……あの星の光さえも。

「全て、全て呑みこんで、アタシは奪うのだ。」

かつて奪われた全てを、この手に奪い返す。

恐怖を従え、敵と味方の血で道を作り、復讐の幕を開ける。

「さあ、まずは化け物どもだ」

滴るような憎悪の声に、夜の闇が震えた。

翌日からのガドリア軍のデイドへの攻撃は、尚一層情け容赦がなくなった。

その軍を従えるサギリの憎悪の深さそのままに、デイド達を刈り取り駆逐していく。

再び先頭に立つ、ジン率いる双頭の蛇。

チーズをナイフで切り取るように、デイドの群れを切り取り、切り取られたデイドの小さな群れをシロキア率いるガドリア主力が圧殺する。槍兵を主力として、穂先を揃えた槍列が身動きの取れないデイドを串刺しにしていく。

全身に返り血を浴び、デイドが完全に動かなくなるまで何度も突き刺す、若い兵士。

傷口に包帯を巻き、痛みと憎悪に狂気の如く戦う兵士。

仲間の敵をとるため、必死に理性を保つ槍兵。

多くの死に麻痺した、暗い瞳でデイドを突き殺す博徒の手下。

「いい眺めじゃないか」

その全てを眺めて、サギリはにんまりと笑った。

迷い無く殺し、生きるために戦う。

荒れ地に生きるなら、その色に染まってくれなくては困る。

「アタシが率いるんだ。せめて、これぐらいはね」

悪鬼羅刹の如く、人を殺せる集団で無ければ使い物にならない。

戦ったたびにその狂気の嵩を上げていく、ガドリア軍。

その仕上がり、サギリは満足そうに微笑んだ。

「サギリ」

前線からいつ戻ったのか、彼女の背後にジンの姿がある。小さなかすり傷はあるものの、大きな怪我はない。

「なんだい？」

「やつらの本隊が見えた」

「そうみたいだね」

見据える地平に、広がるデイドの群れ。駆逐しつつあるデイドの向こう側に、更なる大群が控えていた。

「ジン、アタシが先頭に立つ。蛇で突っ込むよ」

「応」

「なるべく、生き残ってほしいモンだけどね」

低く笑うサギリ。

何度も駆け抜けた殺戮の戦場へ、魔女と狼が舞い降りる。

「試験は、いいのか？」

並んで尋ねるジンに、サギリは主の命令を待つ獣たちを見渡す。

「野暮なこと聞くんじゃないよ」

「そうか」

微かにジンが口元をほころばせ、前を見据える。凜猛な目つき、爪を研ぐ獣にも似た佇まいで、双頭の蛇が集結していた。

「いくぞ」

「征くよ」

それぞれ声をかけ、手下を率い歩き出す。

「ジン」

振り向いたジンに向かって、サギリは背中越しに声をかけた。

「死ぬなよ」

無言でジンは頷き、双剣を抜き放つ。つば鳴りの甲高い音が、サギリに対する返事となった。最前線で戦う槍兵達の外側から回り込むべく、ジンとサギリは疾走する。

最初は歩むほどの速度で、そして徐々に疾風の速さで、獲物に食らいつく。

俊敏な動きは駆け抜ける風のように捉えどころがなく、振り下ろされる凶器の間を縫ってサギリは疾駆する。岩にも似た無骨な斧の下をかくぐり、デイドのひざを蹴って、飛燕のように頭上に舞い、左右の短剣が獲物の首筋に二条の線を描く。

彼女の後に続く狼の群れが、デイドを食い散らすのに任せサギリは次なる獲物を狙う。横薙ぎに振るわれた丸太の下を、滑り込むようにして避ける。疾駆する勢いはそのままに、デイドの足の下を潜り抜けると同時に、両足のアキレス腱へそれぞれ一撃を食らわせる。

突きだされた拳、巨躯のデイドのそれは岩を飛ばしてくるような迫力があつた。サギリに向かって放たれた右のそれは、地面を抉

る。地面に突き立つディードの腕の上をサギリは曲芸か何かのように、走り抜ける。左手がサギリを捉えようと伸ばされると同時、サギリは腕を蹴ってディードの後方へ飛翔する直後切り裂かれるディードの両目。

悲鳴を上げるディードの叫び声を背中で聞き、サギリは口元を弦月に歪ませた。

視線を前に転じれば、群れの終わりが見えている。百匹はいたであらうディードの群れを、ただまっすぐにサギリは突破してきたのだ。

着地と同時に迫る無骨な斧。正面に立ちふさがるようにディードが振るうそれを、空に身を躍らせ、避ける。着地したのはディードの武器の上、ふわりと音がするような華麗な動きで降り立つ。顔に浮かべるのは美しくも禍々しい死神の笑み。左右同時に振るわれた短剣が、ディードの肘を切り裂き、次いで膝に突き立つ。体制の崩れるディードを横に蹴り飛ばし、再び疾駆する。

「まっすぐだ！ 進め！」

立ちふさがる者を次々と葬り去り、遂にサギリの蛇はディードの群れを突破した。

双頭の蛇が楔となって、群れの統制を崩し、崩れたところを主力で圧殺する。そのセオリーが出来上がりつつあった。ディード達はその巨体ゆえに、得物を振るうためには互いに間隔を取らねばならない。しかし双頭の蛇の突入によって、その間がつぶされていくのだ。満足に武器を振るえないディード達は、ガドリアの主力の餌食となっていく。

後ろを振り返りそれを確認すると、サギリはジンが駆け抜けてくるはずの方向を見る。

「ちっ」

遅すぎる。いつもならサギリよりも早い位のジンの部隊がディードの群れを抜けてこない。

舌打ちすると、後ろを駆ける狼達に再び号令をかけた。

「もう一度だ！ 遅れるな！」
デイドの群れの後方から、猛烈な勢いでサギリ達は切り込んでいった。

「殺して、やる」

地獄のそこから響くようなその声は、荒い息遣いの間から絞り出されていた。

蘇る記憶の枷に、ジンは乱れに乱れていた。

いつもは氷のように冷たいはずのジンが、目を血走らせ、散り散りに乱れた呼吸。前方を文字通りに鬼の形相となつて凝視している。映るのは白髪姿の老人と、それを守るように配置されたデイド達。最大の持ち味である機動力を捨て、ジンの後ろでは双頭の蛇達がデイドを相手に必死の防戦を繰り広げていた。

ジンの率いる頭の片方は当初サギリの方に負けるとも劣らない速度で、デイドの群れに切れ目を入れていつていた。だが、白髪の老人の姿をジンが見止めた瞬間、その動きは急激に止まることになる。

彼の後ろで疑問の視線を向ける狼たちの視線も気に留められないほど、ジンはその老人に釘付けになっていた。

その老人の視線が、ジンと合うのと同時。

獣の咆哮にも似た絶叫を上げると、デイドの群れの一番の密集地に向けて走り始めたのだ。ジンやサギリがデイドの群れに切れ目を入れつつ進めるには、一つは卓抜した技能だが、もう一つにデイドの群れがムラがあるからに他ならない。

かつて対立したガドリア城兵のように整然と並べられた軍列に対しては、この戦法は使えない。あくまで不規則に並んだデイドの群れであるからこそ、その群れの中の薄い部分を真直ぐに、切り裂いていけるのだ。

ゆえに、密集地帯に向かっていつてはいかにジンといえどもそこ

を突破するのは不可能だった。彼に従う狼達もそれは、わかっていた。だが、彼らにとってジンは絶対の存在だった。彼の行く前に道は出来、彼らの役目はそれを広げること。

芯までそれを叩き込まれている彼らは、何もいわずジんに付き従う。

二本同時に襲い来る戦斧の下を掻い潜り、振り下ろされる槍の隙間を駆け抜ける。骨をも押しつぶすであろう長剣をすり抜け、ディードの振り上げた拳の上を跳び、ひたすらに白髪の老人を目指す。ジンの脳裏には、付き従う部下も、この戦の行く末も、サギリのことさえもかき消されていた。

目指す首に向かって、ただ足は地面を駆ける。その体自体を風として、烈風の勢いをもって体一つ通れるか通れないかの隙間を抜ける。

「うおおおおオオ！」

焔のごとき叫びと振り上げられた双剣。

振り下ろしたジンの刃が捕らえたのは、老人を守るように配置された一際大きなディード達の剣だった。まるで知性があるように、防具に身を固め、剣と槍を持って主を守る。

その数4匹。

双剣を受け止めたのはその中でも、首領格の長剣を持つ一匹。かみ合わせた刃に火花が散る。地面に食い込むジンの足をあざ笑う様に、長剣のディードが剣を振り切る。冗談か何かのように、ジンの体が宙を舞う。受身も取れず吹き飛ばされたジンに向かって、殺到するディード。斧を槍を手に手にしたディードの一撃を紙一重で避け続け、再び立ち上がる。

向かうは再び老人の首。

「ガアアア嗚呼！」

血のように赤く光るジンの瞳が捉えるのは、ただ老人だけだった。だが、守るディードの壁が破れない。巨躯の体、恐ろしいほど巨大な武器とそこから繰り出される一撃は、容易にジンを吹き飛ばし

て老人の下へ寄せ付けない。しかも性質の悪いことに、老人を守るその4匹は決してジンを追おうとはしなかった。

もっぱらジンを襲うのは、取り囲む他のデイド達。そしてジンに付き従った部下達は、デイドの攻撃から自身のみを守るが精一杯で、とてもジンの援護になど回れない。

「嗚呼アアアア！」

既に左腕は折れ、肋骨も壊れている。普通の人間なら、疲労と怪我で意識もおぼつかないはずの重症に達しない。だがジンはそれでも、地を駆ける。

どうにもならないことを、どうにかしようとして抗う子供のように、その姿は無残なものだった。口から漏れるのは、血と絶叫。全身怪我をしていない場所を探すほうが、難しい。

7度目の突撃も防がれ、二本の足で立っているのもやっとのジンは、双剣を杖にひざを突く。だが、憎悪にキラつく視線だけは、片時も老人から離さない。

「殺してやる！」

口から溢れるのは、呪いの言葉。

再び立ち上がるジンに、後ろから絶叫があがる。

「ジンさん、下がってください！」

防御にも限界を迎えた狼の悲鳴だった。

しかし、今のジンにはそれすら届かない。

「あいつを殺す！」

その言葉が後ろの狼達には、そこで死ねと聞こえた。

「その前にジンさんが！」

「黙れ！」

そして再びの突撃。予定調和のように、ジンの特攻はたやすく防がれる。

「ジンさんっ………！」

「退きたければ、お前達だけで退け！」

部下の制止を振り切って再び、対峙する。我慢の限界を迎えたの

か古参の狼の一人が、ジンに背を向ける。

「……退くぞ！」

ジンを顧みり見て、逃げる者。なおもジンの背を守ろうと残るもの。既に事切れているもの。ジン率いる双頭の蛇が、バラバラになつていく。バラバラになることで、さらに被害が増す。だがそれでも、ジンは老人に向かうのをやめようとはしなかった。

「ルウアア！！」

その声は、神に助けを求める哀れな人のように、あるいは狂った獣の断末魔のように、響き渡った。

千切れそうな腕で、削り取られたような肋骨で、なおもジンは立ち向かう。噛み締めた奥歯の間に苦痛の声を封じ込め、崩れ落ちそうな膝を支えるのはただ憎悪のみだった。

その状態で再び特攻を仕掛ける。

無残に切り裂かれた足で再び地面を蹴る。双剣を振り上げ、真直ぐ老人へ向かう。

「又ウオオオオアアア！」

振り絞った声に、双剣が振り下ろされる。

同時に構えたデイドの長剣がジンめがけて振り下ろされた。

獣道3（後書き）

8月になれば、夏休みがつ!!!
更新速度UPするかもしれません。

獣道 4

サギリが再びデイドの群れに突入して、すぐデイドの群れの間を駆け抜ける狼の一人を見つける。全身傷だらけで、息も絶え絶えのそれを見つけたとき、サギリの脳裏ではジンの死がよぎる。

「ちっ……」

舌打ちすると、軌道を修正して狼の一人を保護する。

「ジンさんをつ……」

走り続けたその狼の最初の一言がそれだった。

「生きてるのか、あの馬鹿は!？」

何がどうなったのかは知らない。

「どっちだ!？」

息も絶え絶えの狼が指差すほうに、サギリは双頭の蛇の進路を向けた。

「それで、お前は どうしたい？」

「僕はロクサー又と和平を結ぶべきだと思います」

腕を組んで考え込むモルトに、ルカンドは言葉を尽くす。

「今の状況はあまりにも危険です。一つの勝利を呼び水にして、それを前提に全てを組み立てている」

「だが、生きるって事はそういうことだ。危険ない道なんてのは存在しない。お前も、もちろんあの蛇娘だって荒れ地じゃそうやって生きてきただろう?」

「分かっています。だから最もその危険の無い道を選ぶべきだと、

僕は考えているんです」

「蛇娘の気性を考えるとなあ……」

髭面に微苦笑を浮かべたモルトは、ルカンドに向き直る。

「で、使者をどうする？ 荒れ地の遠征軍にも補給を届けるんだろ
う？ 今のガドリアには人材の余裕は無いぞ」

剃刀色の瞳に、覚悟の色を浮かべてルカンドは頷く。

「補給にはサイシャに行つてもらいます。ロクサーヌの使者には、
雪華から、人を貸してもらいます」

「中々思い切つたことをするが、サイシャは納得するかな？ お前
の側にいたがるんじゃないのか？」

「納得させます」

「ふむ、そうか……ならばやってみる」

剛毅な笑みを浮かべ、モルトは頷く。

「ロクサーヌとの和平、確かにそれが成り立つならガドリアにも希
望の光つてやつが差し込むかも知れねえ」

「はい！」

「だがよ、ルカンド」

一瞬覗くは領主よりも、年を重ねた者の経験がかもし出す独特の
雰囲気。

「簡単に人を救えるなんて思っちゃいけねえぜ。特にお前の周りの
奴等は業が深いからな」

「僕も含めて、ですね」

寂しそくに笑うルカンド。その赤銅色の髪をぐちゃぐちゃとモル
トがかき回す。

「年寄りの悪い癖だ。何でもかんでも忠告したくなる、まだ結果は
でちやいねえのにな」

「必ず、成功させます」

力強く頷くルカンドを見て、モルトは開きかけた口を閉じた。
変わりに同じく力強く頷くことで答える。

「やってみる。責任はわしがとつてやる」

踵を返すルカンドの背中を、まぶしそくにモルトは見送った。

一直線に走るジンの軌道上、振りかぶったデイドの長剣が振ってくる。避けようとして、がくりと膝に力が入らない。反射的に足を踏み出し、倒れるのを防いだはいいが飛べそうには無かった。迫る長剣を受け止めようと、双剣を交差させる。

「くっ……」

明確に迫る死のカタチ。

力を受け流す余裕もなく吹き飛ばされる。双剣は明後日の方向に飛んでいき、ジンは後方まで地面を転がる。

だが、それでも擦り切れて血まみれの拳を地面に叩きつける。怒りのままに、ふらつく足を動かす。

引き結ばれた口元からは血が溢れ、武器はなくなった。眼前にひしめく食人鬼の群れ。

噛み締めた奥歯が、ぎりりと鳴った。身の内を焦がす憎悪の炎、肌の下を這い回る怒りと言う名の生き物がジンの全身を支配する。脳を焼き、腹の中をぐらぐらと揺さぶり続ける灼熱の塊。

「るっう、雄雄おお、おおおお!!」

それは既に人の声ではない。

ジン自身でさえ、何の為に咆哮しているのかわからない。ただ、叫んでしまわなければ何かに押し潰されてしまいそうだった。あるいは身のうちからの破裂か。

「……んで、アンタはまだ無駄に突っ込むのかい？」

全身を朱に染めたサギリ、は呆れたように嘆息する。肩で息をしながら、それでも口元には不敵な笑みを絶やさない。

「やっと追いついたと思ったら、このざまだ」

彼女の後ろに続くのは、デイドの群れを突き崩して来た狼の群れ。

「はん、アタシはお前に期待しすぎたか？」

後ろからかけられる声に、だがジンは反応しない。獣のようになり、赤くなつた瞳を向けるのは、背を向けようとしているデ---

ドの群れの中にいる老人。

老人がサギリを認めると同時に背を翻した。

それを、ジンが見逃すはずが無い。炎の塊となったような勢いで突進していく。

「バカが!!」

瞬時にその間に割り込むサギリは、左手に力を集めジンに向って振りぬいた。

眼に見えぬ何か、壁のように分厚い何かにジンは体の自由を奪われ、吹き飛ばされる。

「引き上げだ! 畜生め!」

狼達にジンの体を抱え上げさせ、サギリはディードの群れから離れていく。ジンが執拗に狙ったあの老人も、既に逃げ去った後だった。ディードの群れを突破しつつ、距離をとる。

「くそっ!」

悪態をついて、ディードの群れを睨むサギリ。

気づけば彼らは、あの老人に続くようにガドリリア軍に背を向けていた。

「なんてえざまだよ」

後ろを振り返れば満身創痍の手下達。

自身を見下ろしても、所々に傷跡がある。

「しばらくは動けねえか」

舌打ちすると、ガドリリアの本隊に足を向ける。

「てめえらも、休みな」

手下に向って告げ、もう一度ディードの群れを睨むと、今度こそ振り返らずにガドリリアの本隊へ向けて歩き出した。

ぐちゃり、ぐちゃり。

「はあ、はっ、はあ……」

ぐちゃり、ぐちゃり、ぐちゃり。

「うっ、はあ、はっ」

ぐちゃぐちゃ、がりっがりっ。

脛の裏をを焼くのは、守るはずの、妹の身体。

真っ赤に染まったその腸を、貪る少年の姿。

「お兄ちゃん」

「大丈夫だ。ユリイ」

握り返す手のぬくもりだけが、少年の守るべきすべてだった。

難民に紛れて、父親の元から逃げ出して五日。食べ物は既になく、幼い兄妹は飢えていた。

理性など、とうに枯れ果て、道德などは、荒地の地平線の彼方にしかない。

「ちよつと待っててな」

「うん」

優しく髪をなで、兄は盗賊に身を落とす。人を殺し、食い物を奪う為。

幸にも、兄は強かった。

首尾よく仕事を片付け、妹の元に戻る。

妹に汚らわしい仕事を見せたくは無い。

浅ましく、どうしようもなく愚かな考えだった

獲物をとるために、わずかに妹と離れた隙に、運命の斧が振り下ろされた。

少年が眼にしたのは、笑って食人鬼デイドをけしかける老人と、食人鬼デイドに喰われようとする妹の姿。

どうやったのかは覚えていない。だがデイドを殺し、瀕死の妹に近寄る。

「お、兄ちゃん……」

狂気が思考を蝕み、マトモでいることなどできない。

「良かった」

妹の柔らかな笑顔に、臓腑を抉られる痛みを覚えた。

「ユリイ！」

「いき、てね。私を、食べて……い、きてね？ おに」

それが、彼が守ろうとした者の最期の言葉。

獣の咆哮と共に、少年は絶望を受け入れた。

「……つく！」

飛び起きたジンの背に流れるのは、冷たすぎる汗。滝のように流れるソレと、全身に巻かれた包帯。脳裏を離れない悪夢の残滓が、夢と現実の境を曖昧にする。

虚ろな視線を漂わせるジン。

周りには同じようにして包帯を巻かれた怪我人が多く居た。

「ジンにい！」

何かを取り落とすような音と、ケイフウの声にジンはやっと夢から覚める。

「ケイフウ」

どこか力のない声に、近寄ってきたケイフウも抱きつくのを我慢して踏みとどまる。

「今ルクを、呼んでくるからね！」

間もなくしてルクが元は白かったであろう白衣を着て、ジンの側に来る。

いくつかの問診をして、ジンの身体を触ると、ジンとケイフウを安心させるように頷く。

「もう大丈夫だと思います。後は安静にしてください」

ぺこりと、頭を下げると次の患者の下へ向う。ルクの後姿とジン

を見比べていたケイフウは、名残惜しそうにしながら立ち上がった。
「ジンにい、休んでてね！」

荷物を持つと脱兎のごとく走り、ルクに追いついた。その二人を
何気なく見守っていたジンに、声がかかる。

「べた惚れだねえ」

静かに笑うサギリの声が、ジンの背後から聞こえる。表面上は静
かだが、奥底には底知れない怒りを秘めた彼女の声。

「眼が覚めたって聞いてね……歩けるかい？」

「ああ、問題ない」

立ち上がりサギリを振り返る。ジンを気遣う言葉をかけつつも、
漆黒の瞳の奥は、笑っていない。

「ちいと、そこまでね」

サギリの後に続いて歩くジンは、一足歩むだけで、ぐらりと身体
が揺れ、冷や汗が吹き出る。だがサギリは気づいているにもかかわ
らず、それを気遣う様子は無い。怪我人達の收容されている場所か
ら、しばらく歩いた崖の上、地平線の近くまで見渡せる場所まで歩
いて、サギリは歩みを止めた。

全身に汗をかいたジンが、追いついたのはしばらくしてだった。

サギリはジンを振り返るうともせず地平線の彼方を睨む。

ジンが息を整えるのを背中であいて、サギリは口を開いた。

「お前が目覚めるまでに、三日。その怪我じゃ動けるまでに十日は
掛かるだろうな」

静かな声音には何の感情もうかがわせない。現状の確認だけをす
るサギリに、ジンは沈黙を持って答えた。

「ジン、アレはお前のなんだ？」

具体的に誰を指すのかなど、言われるまでも無い。白髪の老人の
姿に、その視線に、ぎりつと奥歯を噛み締める。俯き何も答えない
ジンに、サギリは地平線から視線を転ずる。

長い黒髪を風になびかせて、ジンに向き直る。

「言え」

拒否を許さない断固とした言葉。

「俺は……」

ジンの声が震える。泣き出しそうな、声で過去の傷を自身で開く。悲鳴を上げる心を、自身の言葉で抉っていく。

「あいつに、妹を殺されて……そして、俺は」

お兄ちゃん。

「俺は、妹を……くっ」

がくりと膝を突き、崩れ落ちるジン。

彼は両手で顔を覆ってしまふ。

零れ落ちる涙を、荒れ地の風がさらった。

「復讐か」

ジンの瞳を真っ直ぐ見つめるサギリ。漆黒の瞳が、かつてないほど真剣にジンを射抜く。

「お前も」

強い風が吹きぬける。

「ジン、今からお前は蛇の頭を降ろす。どうせその怪我じゃしばらく動けねえだろうしな」

「サギリ……俺は」

顔を上げるジンに、サギリは言い渡す。

「頭はケイフウに任せる。お前はしばらく怪我人の世話にでも回れ」
「サギリ！」

「ジン、別にアタシは復讐に走ったことを責めてるんじゃない。アタシが責められなきゃいけないのは、自分個人の復讐に手下を巻き込んだことだ」

俯くジンに背を向けて、サギリは言葉を重ねる。

「結果お前の手下は、半壊だ。生き残った奴らも酷い怪我ばかり。この戦じゃもう使えない。熱くなって周りが見えなくなるような奴は、足手まといだ」

「くっ……」

言い返すことの出来ないジンを、そのままにサギリは崖を降りる。

「個人の復讐に他人を巻き込むな、か。ちつ……どの面下げて言っ
てんだかな。アタシは」

ジンの気配が消えると、自嘲に口の端を歪めて、サギリは小さく
呟いた。

「よお」

黒い帽子を目深にかぶった少女から発せられた、軽い挨拶。ガド
リアからの補給の品物を届けに来た彼女は、今のルクには黒衣をま
とった天使のように思えた。

「サイシャさん！」

足りない薬草や包帯。絶対的にたりないのは、医術の心得のある
ものだ。毒はともすれば薬にもなる。その専門家と言ってもいいサ
イシャは、ルクが喉から手が出るほどほしい人材だった。

「お、おい！」

早速彼女の手を取ると、患者の下へと強引に引っ張っていく。

「時間が無いんです！ 急いで！」

「な……」

コイツ、こんな強引な奴だったか。という、そんなサイシャの思
考を全く無視して、ルクは患者の下へサイシャを引きずっていく。

「手が足りないんです！ 薬も！ 包帯も！ お願いします！ 手
を貸してください」

眼に涙すら浮かべて、懇願するルク。

「……分かった」

ルクのその姿に、ため息を吐きながらサイシャは頷いた。

「現状は？」

「危険な状態の患者が10人、今は大丈夫ですけど、このままだと
危険な状態になる人が、ほとんどです」

「手術は出来るんだな？」

「はい……」

自信無さそうに俯くルクを、サイシャは訝しげに見る。

「ルカは今、戦ってるぞ」

「え？」

「だから、私は戦う。アイツに、全部任せて守ってもらおうような、そんな情けない女にはなりたくない」

お前はどうかんだ？ と視線だけで問いかけられる。

「それは、私もです！」

頷くサイシャが足を進める。

絶望しか待っていないかもしれない戦場。だが、ルクは毅然と顔を上げてソレに立ち向かう。隣に立つ友達がいる。遠くで、戦う少年が居る。

その友達に羞じるような、醜態は見せられない。

「私が、やらなきゃ」

自身に言い聞かせると、サイシャと共に怪我人の為の粗末なテントの中へ入って行った。。

「アタシは止まる気はないよ」

シロキアを始めとするガドリア軍の首脳を集めて、サギリは宣言していた。このまま一気にデイドの本拠地まで追撃する、というサギリの考えにそれぞれ年長者達の顔は渋い。

「姐さんの考えはわかりましたが、実際どうするんです？ ジンの野郎だつてやられちまったんでしょ？」

言いにくいことをサギリに言うのは、最近シロキアの役目になりつつある。シロキアの言葉に城兵と雪華の代表もそれぞれ頷く。

「情けないねえ。ジン一人抜けた程度でおたつきやがって」

言葉に詰まるシロキア達をねめつけて、サギリは口の端を歪める。
「先陣はケイフウに切らせる。ありがたいことに、ガドリアから補給も届いたしね」

ケイフウの名前に、シロキア以外の眉が晴れる。

「大剣のケイフウか」

囁かれる名前に、重かった空気が和らぐ。

「坊やにや、経験がたりないんじゃないですかい？」

「未だ眉をひそめたままのシロキア。」

「経験つてのは黙ってりやついてくるのかい？ 違っだろう。それ

ともアンタが先陣を切るかい？ 経験豊富なシロキアがさ」

「生憎と、年寄りには荷が重い作業でしてね、一番掛けは」

軽く受け流すと、頭を下げる。

「カシラがそういうなら、従っただけでさあ」

不敵に笑うシロキア、サギリは自信に満ち溢れた顔で全員を見渡す。

「この十日が勝負だ。ソレ以内にデイドもを駆逐する。いいね、お前達！」

サギリの気迫に撃たれたように、彼らは頭を垂れた。

獣道 5

追撃が始まって二日。いまだデイド達の本隊には追いついていなかった。それどころか、デイドの襲撃すらまばらな状況だ。津波の前の異様な静けさを彷彿とさせる、不気味な静寂に、サギリは内心舌打ちしていた。

「案外、ジンの判断が正しかったか……？」

あの時群れの中心であった老人を討ち取っていれば、ここまで苦労することは無かった。誰にも聞かれないよう小さく口に出して、自嘲する。

過ぎたことは仕方ない。と考えて後悔を切り払う。傷ついた狼達と、ガドリア軍を休ませることが出来ると考えれば、悪くは無い。しかし、なぜ襲撃が無いのか。怯えて出てこないのか、もしくはおびき寄せようとしているからなのか。おびき寄せて、罠に……とそこまで考えて馬の背で揺られるサギリは眉根を潜めた。

「ジッ……ケイフウ！」

とつさにジンの名前を呼ぼうとした自分自身に腹が立つ。

「偵察だ」

睨むようにケイフウに視線を向ける。

「ん」と

ひよこつと顔を出したケイフウが、周囲を見渡して曖昧に頷く。

「やってみる！」

「やってみるじゃ困るんだけどねえ」

ケイフウに毒気を抜かれ、困ったように苦笑するサギリ。

「まあやってみなよ」

うん、と元気よく返事を返すと脱兎のごとく駆け出していく。

「てめら、速度ゆるめな！」

サギリの号令に、ガドリア軍はゆるりと前へ進む。

追撃から4日経った。

相変わらずガドリア軍の追撃にもかかわらず、ディードの尻尾を捕まえることが出来ない。代わりに襲撃も無い為に、比較的安全な4日間だったと言ってよかった。

日のある明るいうちになるべく進み、夜は適当な場所を見つけて夜営の天幕を張る。故に怪我人の治療は、至急の場合を除き夜に行われる。

自然、医術に心の得るルクなどは夜通し起きていることもしばしばあった。昼夜逆転の生活に、眠い眼を擦りながら、ルクは患者一人ひとりの間をめぐっていく。

上空は強い風が吹いているのだろう、急ぎ足で流れる雲の合間から、星と月が短い感覚で顔を出す。

「寝不足か？」

彼女の傍らには心強い友人が、いつもと変わらない様子でいる。

ここ最近ルクと同じ生活サイクルを経験していると言うのに、全く変化が無いのは普段の生活の違いなのだろうか。気にしている余裕も無かったが、髪はボサボサになってしまったし、なんだか肌もざらざらする。横目でサイシャを確認して、普段と変わらないサイシャに少しルクは妬いた。

「うん、サイシャは？」

「いつも通りだな」

いつ寝てるんだろう、という疑問を押し込め、ルクは次の天幕を目指す。

最近はずっと平穏な日が続いている為か、油断なら無い患者は多いものの、皆何とか快方に向かっている。そのことが僅かなりともルクの心を軽くする。出来ればこれ以上、怪我人を出さないでほしい。心の中で小さく祈って、天幕に入った。

「はい、腕の骨はくっついてきてますので包帯を取り替えて、安静

にしておけば大丈夫です……お願いしますね」

次々と患者を診て回るルクに、手伝いと称して程度の軽い怪我人達がついてくる。まじめに手伝うものもいるのだが、“聖女”と噂される彼女を近くで見ようとという、野次馬根性をだしているものが大半だった。

その度にサイシャが睨みを効かせて、半ば強制的に野次馬どもを怪我人の看護に当たらせる。以前はケイフウの無言の威圧で、近寄らなかった者達も、サイシャではケイフウほどの威圧感を感じないらしい。あるいは少女二人と言う組み合わせに興味をそそられるのかもしれない。火に群がる虫のように次々集まってくるそれらをいなすのは、もっぱらサイシャの役目になっていた。

「なんか手伝ってくれる人がいっぱいいたね」

天幕を出て、感嘆と共に述べるルク。的外れな彼女の感想にサイシャはため息を漏らした。

「男はバカばかりだ」

うんざりと感想を述べるサイシャを疑問の眼差しで眺めるルク。

「いつそのこと私の毒で、しばらく起きないように……」

不穏なことを口走るサイシャを、ルクは苦笑と共に見つめ、次の天幕へ足を向けた。

ぎりつ、と奥歯をかんで星空を睨む。

全身に包帯を巻いたジンは、身体をなでる風に身を任せていた。座った岩肌から伝わる冷たさが、傷でほてった身体に心地よい。

ジンは迷っていた。

サギリのために生きる。そう誓ったのは、嘘ではない。曲がりなりに、荒み切っていたジんに救いの手を差し伸べてくれたのはサギリだった。妹を失い、世界全てを敵としていたあの時に、生きる理由をくれたのは“荒れ地の魔女”だった。

戦うことしか出来ないジンに、戦う相手と命を掛ける理由を与えてくれたサギリ。

そこには一片の嘘も無い。

だが、だがしかし……あの老人を見た瞬間、身体も思考も全てが沸騰した。

涙を流すユリイの顔、血塗れて微笑むユリイの顔、ユリイの甘えるように呼ぶ声、苦しげに助けを求めると。

あふれ出る憎悪は果てが無い。

ジンの思考も、誓いもすべて押し流す激情の奔流。

もしまた、あの老人を目の前にしたらまた全てを投げ出してしまおう。そして命を落とす。それではサギリのために生きる、という誓いに背くことになる。

だからこそ、サギリはジンを前線から遠ざけたのだ。お互いが了解の上、だが、ジンにはそんな自分が許せない。

グルグルと回る思考に、ジンは深く息を吐く。

「ジンにいい！ 何してるのさ!？」

悲鳴に近い声を出して駆け寄ってくるサイシャの声で、ジンはまぶたを開く。

「風に当たっていた」

「っ！ 怪我人なんだよ!? 安静にしてなきゃダメじゃない!」

子供をしっかりとつける母親のように腰に手を当てて、ジンを見上げるサイシャ。以前に比べればだいぶ明るくなった。遅れて駆けつけたルクが息を切らして、呼吸を整えているのを苦笑と共にジンが見守る。あるいはサイシャが明るくなったのは、この貴族の少女のせいなのかもしれないと。

ガドリアの新しい力は着実に育っている。

剣ではケイフウが、政ではルカンドが、そして医術と言う点ではルクやサイシャが。

「聞いているの？ ジンにいい!」

「ああ」

気のない返事に、片腕を強引に引つ張られる。

「とにかく天幕に戻ってもらおうよ！」

遠慮の無いサイシャに、苦笑を深くして頷いた。

ガドリア、ひいては双頭の蛇においてジンでなければならぬことは、なくなってきたているのだ。少なくともジンは、そう感じていた。

追撃から8日目。ついにガドリア軍はデイドの群れの尻尾に喰らいつく。ガドリアの街から行程は20日ほど。あとにも先にも、荒地地をここまで踏破した軍はない。

偵察に出たケイフウがその報告を持ってくると、サギリはケイフウを伴ってデイドの住処をのぞきに向かった。

「やっと追い詰めたねえ」

荒地地の北の果て。

山岳地帯に入ろうと言う丘陵地帯に、デイドの住処があった。

「はん、いっちょ前に化け物が人間の真似事か」

丘の麓、周囲には堀と柵を巡らせ皆らしき様相を呈している。うるつくデイドの数は、今まで襲ってきた比ではない。優に300以上はいるだろう。丁度彼らから死角になる丘の上から、皆の全景を眺めるとサギリはうっすらと口元に笑みを浮かべた。

巨躯のデイドが群れる様子は圧倒的な迫力を持って、彼らの眼に映った。

「多いねえ、サーねえ」

のんびりとした口調に、緊張感の感じられない物言い。慣れたとはいえ、サギリも時々ケイフウの真剣さを疑ってみたくなる。

「まともにやりあっちゃ、厳しいだろうけどね」

見るものは見たとばかりに、皆に背を向け、ケイフウを促す。

「丘の麓なんか、砦を築いたのが間違いの元さ」

残酷な笑みを口元に張り付け、サギリとケイフウはガドリアの本

陣へ戻っていった。

「ジンにい……」

呟かれた言葉とともに、握られた拳が小刻みに震える。

「寝てろって言ったのに、また抜け出したな……」

視線は猛禽類のように鋭く、彼女の背中にはめらめらと燃える炎が幻視されるようだった。

「……ま、まあ動けることを喜ばないと……」

恐る恐る声をかけるルクに、がるる、と獣のうなり声を上げてサイシャが振り向く。

「今度は縛り付けてでも、安静にさせてやる」

ルクは乾いた笑いでもって彼女の闘志を眺めた。

「あ、こんなところに！」

天幕の入り口から聞こえた声にサイシャとルクが振り返る。

「サイシャさん、サギリさんが呼んでますよ」

双頭の蛇の少年の言葉に、サイシャは軽く舌打ちする。

「分かった」

答えた声は、“毒蛇”と呼ばれる盗賊のもの。ルクとともに、治療に当たる少女の面影はすっかり鳴りを潜めていた。瞳に映るのは、暗く深い憎悪の炎。

「じゃ、行って来る」

「気をつけてね」

そんな彼女の様子を悲しく思いながら、ルクは見送ることしか出来ない。

軽く手を振るサイシャの姿に、ルクは無事を祈らずにはいられなかった。

「ルカの奴には、感謝しないとねえ」

炎に包まれ燃え上がるデイドの砦、丘の上からソレを見下ろしてサギリはにんまりと嗤った。

補給で得られた油と、家畜を使つての火攻め。馬の背に油と薪をつみ、火をつけて一斉に放つたのだ。興奮した馬は自身の背についた火を振り払う為に、全速力で砦に向つて駆ける。死に物狂いとなつた馬は狂乱のままに柵に、砦自体にぶつかり背の火を撒き散らしていった。

いかな屈強なデイドと言えども、やはり生き物であるからには火は怖いらしい。身体に纏わりつく炎を振りほどこうと混乱のきわみに在った。

「さあ、切り込むよ」

そこへサギリ率いるガドリア軍が、突き進む。双頭の蛇を尖兵として、博徒、雪華、城兵。それぞれの得物を振りかざし、一気に柵を突破し砦の中へ進入を果たす。

オオン！

デイドの砦の前、しっかりとした木で組まれた砦から出てきたデイドが吼える。手には長剣を構え、まるで戦士のような姿の化け物の咆哮。

まるで吸い寄せられるように、今まで混乱していたデイド達の視線が一斉にそちらを向く。

オオオン！

二声。

今まで見事なまでに混乱してたデイド達が、はつきりとした意思の元に行動を起こす。砦の中に進入したサギリ達を取り囲むように、遠巻きに包囲をします。

「おいおい」

苦笑を顔に貼り付けサギリは、口の端を歪ませる。

「生意気なことしてくれるじゃないか」

畏の存在を毛ほども疑っていないかったガドリア軍。

「姐さん、こいつはっ……………」

歴戦のシロキアでさえ、顔を引きつらせてる。眼に見える同様が広がるのを、肌で感じたサギリは声を張り上げる。

「おたつくんじやないよ！」

ケイフウとサイシャを呼び寄せると、指示を出して走らせる。

「あいつを仕留める！」

引き抜いた短剣で指すのは、群れの統率者たる戦士の格好をしたデイド。

「ちっ……………人手がたりねえな！」

ジンが居ればな、という弱気な感情を心の中で笑殺する。愚痴にも似た感想をこぼして、サギリは狼を率い食人鬼の群れへ駆け出した。

迫る凶刃。それを紙一重で避け、容易に岩を砕くであろう鎚の一撃をかいくぐる。と、同時に左右の短剣を振るいデイドの腕の腱を切り裂く。次々と繰り出される一撃必殺のデイドの攻撃をかわしながら、サギリは徐々に隊長格のデイドまでの距離を詰めていった。

強大なデイドの群れに開いた針の先ほどの穴。それを双頭の蛇の全力を持って拡げていく。怪我をするのは覚悟の上で、デイドの群れに身を躍らせる。進むほどに厚く密集していくデイドの壁。既にデイド自体が武器を振るう隙間も無い。だがサギリの勢いを止める為、文字通り肉の壁となつてその前に立ちはだかる。

徐々に進む速度が落ち始めるサギリ。止まってしまう後らから、包囲されデイドの圧力に皆殺しにされるのは眼に見えている。

「くっ……………」

荒れ地の魔女と謳われるサギリの技量うでをもってしても、緊密に固まったデイドの群れを突破するのは至難の業だった。

「ケイフウ！ サイシャ！」

叫ぶ大剣と毒蛇の名前に、僅か緊密に集まったデイドの群れが

揺れる。サギリが二人に与えた指示は、少人数を率いて敵の側方に回り込むことだった。サギリの勢いが止まった地点目掛けて、サギリの叫び声と同時に、二人が左右から切り込みをかけた。

振り降ろされるケイフウの大剣が、デイドの頭を叩き割り、サイシャの投げる投擲剣がデイドを即効性の毒で瞬く間に殺している。

再び勢いづくサギリ率いるガドリア軍。一度は止まったかに見えるサギリの勢いが、再度加熱する。二人の切り込みに出来た動揺を縫って、サギリは再び猛烈な勢いでデイドの群れを切り裂き始める。

オオン！

再び叫ぶデイドの隊長格。今まで包囲に回っていたデイドまでが移動を始める。サギリ率いるガドリア軍の突撃を止める為、なりふり構わずデイドの群れを動かす。一重二重……四重となるデイドの壁に、常に最前線を担っていたサギリにも疲れが見え始める。

「化け物め、知恵なんざ付けやがって！」

悪態と共に弱気を吐き出し、血脂のこびり付いた短剣を振るい、新たな敵目掛けて跳躍する。

前に、ひたすら前に。

下がることの許されない蛇の頭は、想像を絶する重圧の中での戦いとなる。肉体的身体的な疲労は、後ろについてくる者の比ではない。下がれば即ち死が待っている。勢いが止まれば包囲されるのは眼に見えているし、後ろに続いてくる者と接触してたちまち混乱に陥るだろう。

だから蛇の頭は決して下がれない。それはつまり、前方にしか選択肢が無いと言うことでもある。戦いの中で、選択肢を狭めるのは生き残る機会の激減に繋がる。

その重圧が、サギリの心身を蝕み始める。

激闘に次ぐ激闘。一重の包囲を食い破り、二重の包囲を突破し、

三重の包圍網に掛かった時、その疲れがサギリの足元を攪う。

デイドの流した血の海に足を滑らせたのだ。

「ちっ……」

もれる舌打ちは、最悪の予想が出来たからだった。目の前に迫るデイドの棍棒。

圧倒的な圧力を伴ったそれは、サギリの小柄な身体をやすやすと吹き飛ばし、双頭の蛇の全滅を導くであろうと思われた。脳裏を駆け巡る最悪の結末に、サギリは歯を噛み締める。

死に物狂いで身体を縮め、横薙ぎに振るわれた棍棒の下を潜り抜ける。と、同時に無防備なデイドの腕に向けて短剣を振るう。人体の急所に向けて振るわれた短剣は、過たず主の意思を代弁する。赤い鮮血にぬれた短剣を握り直し、次なる獲物に向かい疾駆する。だがその勢いは誰が見ても分かるほどに衰えていた。

サギリの命令で、左右からデイドに切り込みを掛けたケイフウとサイシャも苦戦を強いられていた。元々率いて来た数が少ない。その中で特攻を掛けるとしたら、最初の勢いで全てを決めてしまわねばならない。さもなくば、数の力に押さえ込まれジリ貧に追い込まれるからだ。

その初手の勢いが徐々に弱くなっている。理由は明白で、予想以上に固いデイドの守りとその圧力だ。30匹程度のデイドの群れならいざしらず、300を越えるであろうデイドに立ち向かうなど彼らの中でも初めての経験だった。

後一押し。

勢いがほしかった。今はまだ先ほど勢いを取り戻したサギリ率いる本隊の力で、ケイフウとサイシャへの圧力はそれほどでもない。サギリ率いる本隊が止まったときこそ、ケイフウとサイシャの全滅するときだった。徐々に落ちてくるサギリの勢いに、二人は死へのカウントダウンを見せ付けられているような気がした。

後一押し。

それはサギリの脳裏にも浮かんでは消える余計な考えだった。今

現在デイドとガドリア軍の力は拮抗している。ソレを崩す為にも
う一押しほしい。

舌打ちしてその考えを脳裏からたたき出す。今居ない何かに頼る
うだなんて、虫が良すぎる。現状というものは自分の力で変えなけ
ればならないのだ。

後方を振り返れば、シロキアを始めとするガドリアの本軍は誰も
彼も必死にサギリの後に続いている。傷を負っていない者が皆無と
言う状況の中、サギリは腹をくくる。

密集したデイドの群れの中に自身を踊りこませる。怪我を負う
のは覚悟の上、最悪死すらも覚悟してデイドの振るう暴風雨に似
た間合いの中に正面から突っ込んだ。

振り下ろされる長剣の下を掻い潜り、一気に喉元を突く。瞬時に
引き抜く短剣を逆手に持ち替えて、首筋をさらに一閃。吹き出る血
潮を浴びながら、次の獲物に食らいつく。

手足の腱などを狙い、相手を戦闘不能に追い込む戦い方から一変
して、サギリは殺しに出た。人体の急所を確実に貫き。そして突進
の速度は緩めない。

針の先ほどの相手の隙に乗じて、懐まで入り込み一気に勝負を決
める。極限の集中力と蛮勇に近い勇気がなければ行えない戦い方だ
った。デイドの突き出した長剣が、彼女の長い黒髪を幾本かを奪
い去る。だがそれでもサギリは前が出る。好機とばかりに、そのま
まデイドの指を刎ね飛ばし、一步踏み込むと同時に、もう片方の短
剣で首筋を絶ち斬る。

すぐに横に身体をずらせば、彼女が先ほどまで居た位置に丸太ほ
どもある棍棒が振り下ろされていた。

「こ
」
体勢を低く、横薙ぎの長剣をかわしながら。

「のっ！」

棍棒を振るったデイドに短剣を突き立てる。前と横同時に遅い
来るデイドの拳を、身体を半分ずらしながら前に出ることかわ

す。

後ろに眼がついているのかのような、サギリの卓越した技術もデ
イードの圧倒的な数の前に、徐々に勢いをなくしていく。彼女自身
も、これは賭けだと分かっていた。自身の技量が続くうちにこの包
囲を突破できるか、さもなければ死か。

分の悪い賭け。

そんなことが脳裏を掠めては瞬時に消えていく。雑念を振り払い
目の前の、デイドとその周囲の動きを徹底して読む。

だがサギリも、自身の短剣の切れ味が鈍っていることにまでは気
が回らなかつた。血脂で濁った刃の切れ味は僅かずつだが確実に落
ち、首筋を断ち切られてもほんのわずかだが、生きる余裕を与えて
しまっていた。

その結果倒れたデイドの腕が、サギリの跳躍しようとした足を
捕まえた。喉を切り裂かれ、あとほんの数瞬で息を引き取るはずの
デイド。握った手に力はなく、間もなく命尽きるであろうはずの
化け物が、サギリの動きを止める。

「なっ」

驚きの声はサギリの喉にこびり付いて消えた。

眼前に迫るデイド。瞬時に足を掴んだデイドに止めをさすが、
目の前のデイドの対処には遅すぎる。突き出された拳が、サギリ
の身体を捉え。

「後ろに跳べ！」

聞きなれた声に、身体が反応する。後退するサギリと入れ替わり、
前になる一つの影。腰から抜き放つ二振りの刃が、光芒となって拳
を突き出したデイドを瞬殺する。

「てめえ！　なんで来た！？」

デイドを葬ると同時、サギリの叫びに背を向け一気にジンは群
れの深くに侵入する。抜き放たれた双剣は血をすすする牙に等しく、
次々とデイドをそのあぎとに掛ける。肘から断ち切られた腕が宙
を舞い、首を刎ねる。

「ジン！！」

叫ぶサギリの声も、一度開いてしまった絶対的な差が邪魔をしてジンには届かない。届いたとしてもジンは止まらなかつただろう。その背中から感じられるのは死すらも覚悟した悲壮な決意。

「ジン！」

魔女の声にも振り返らず、ただひたすらに道を切り開く為、爪牙を振るう狼の姿。

最期の一押し。

誰もが望んでいたそれが、サギリの最も望まない者の手で押し開けられる。

息を吹き返したガドリア本隊の攻撃に、ケイフウ、サイシャの別働隊も勢いも取り戻す。

「ジンにいい！？」

血しぶきを上げて群れを食い破るジンの姿に、サイシャは嬉しさとは不安が同時に頭をもたげる。全身に負った傷は、十日やそこらで治るものではなかった。

手負いの獣。と言う言葉が脳裏をかすめ消えていく。

命まで燃やし尽くしそうな激しさに、サイシャの危機感は募る。

「邪魔を、するな！」

手持ちの毒薬で最も強力なものを惜しみなく使い、デイドを駆逐する。

待ち望んでいた最後のー押し。

オオオン！

隊長格のデイドがいくら吼えても、もうどうにもならない。勢いのついたガドリア本隊は最後の力を振り絞りデイドの群れを切り裂いていく。

そしてついに、包囲を突破してガドリア本隊がデイドを分断するの成功した。

獣道 6

「ジン！！」

叫ぶサギリの声は、喚声と悲鳴にかき消される。

「くそっ！」

苛立ちをそのままに、サギリは吐き捨てた。

このままジンを追えない事は、誰よりもサギリが知っていた。文字通り血の道を作って切り開いたデイド殲滅の機会。見逃せばこちらが全滅する。

反転包囲。

ガドリアの本隊が中央を突破し、別働隊として動いていたサイシヤ、ケイフウと合流する。

今まで拮抗していた力の天秤が、一気に傾く。

左右から切り込んでいたサイシヤ、ケイフウがサギリと合流し、蛇の進路を一気に右に傾ける。蛇が獲物を締め上げるように。デイド個々の力がいかに凄まじかろうと、集団での戦いとなれば一人一人は非力であるはずの、ガドリア軍に軍配があがった。

急速に締め上げる蛇の胴体を率いるのはシロキア。獰猛が獲物に喰らい付くような激しさをもってデイドを血祭りにあげていく。

あるいはデイドすら凌ぐほどの暴力。一塊になって切り込むシロキア配下の博徒達。加えて城兵の長槍が遠距離からデイドを串刺しにしていく。

蛇の尾には、ジルの手を離れた雪華のゴロツキ達。あるいはこの尾がもつとも狂気に奔っているといえるかもしれない。当主であるジルを怪我で欠き、そのジルは荒地の魔女の手の中。彼らがジルに会うことをサギリは許さなかった。

もつとも荒地の魔女を恐れるがゆえに、彼らは目の前の敵に死に物狂いで喰らい付く。断ち切った左側のデイドを抑えつつ、右のデイドの包囲を緩めない。

「ちっ……」

戦況は圧倒的に優位に立った。両脇に、“毒蛇”と“大剣”を従え、食人鬼の群れを駆逐しつつあるサギリは、だが不機嫌そうに舌打ちする。

気になっているのは、先ほどその手をすり抜けていった“狼”のこと。

確かに、戦況は優位に傾いた。だが、油断をすればまた押し返されるかもしれない。それほどまでに薄いその優位性。その不安が、サギリを戦場にとどめていた。

本当なら今すぐに。

「サー姐」

毒を塗られた短剣で、デイドを射抜きながらサイシャが声をかける。

「なんだい！？ このクソ忙しいときに！」

振りかぶられるデイドの斧をすり抜け、喉首を掻き切るサギリ。

「いきなよ」
その言葉の意図するところを察してサギリは、眉間にしわを寄せ

る。
「知った風な口を」

立ちふさがるデイドに対応しようとして。

「行ったほうがいいと思うっ」

頭上から振り降りた身の丈はある大剣が、デイドの頭を叩き割る。気の抜けた言葉とは裏腹に、その斬撃は重く鋭い。

「ガキども！」

目の前のデイドの眼球をえぐり、同時に首筋に刃を突き立てる。瞬きの合間だけ視線を伏せて。

「任せるっ！」

言つと同時に、ジンの後を追うサギリ。包囲の列から弾ける様に飛び出し、蛇の頭とは逆方向に駆ける。

「うん」

変わらぬ毒蛇の仮面の隙間。わずかに口元に笑みを漂わせサイシヤは頷く。

「にひ」

いつもと変わらず、ふにやりとケイフウが笑う。

「ケイフウ……いける？」

じやらりと、黒服の下から覗かせるのは、幾十にも及ぶ投擲劍の群れ。

「うん！ ケイフウ、絶好調！」

ぶるん、と風を断ち切る大劍の音。

「サー姐の邪魔はさせない」

静かに、だが美しく毒蛇が笑った。

指呼の間に握るのは、無数の投擲劍。一本一本に猛毒を塗りこめた呪詛の塊が、横殴りの雨となってデイドの群れに突き刺さる。

「苦しんで、死ね！」

撒き散らされる呪いの群れが、喰人鬼を侵蝕する。血を吐き、喉を掻き毟り、崩れ行く人喰鬼の群れ。

その群れを大劍を背に負った小柄なケイフウが、鋭い斬撃とともになぎ払う。四肢を断ち斬り、頭をつぶし、得物ごと押しつぶす暴風にも似たケイフウの剣技。振りぬくたびに血飛沫が舞い、デイドの腕が、足が、頭が、刎ね飛んで行く。

微笑すら浮かべて彼らを刈り取るケイフウとサイシャ。彼らに率いられ、蛇はデイドを絞め殺さんとしていた。

刃の群れを越えて、体はすでに傷がない場所のほうが稀だった。降りかかる悪意の群れに、押しつぶされそうな圧力に。だが、まだ燃えている。

腹の奥底で、溶岩のようにゆっくりと蠢く憎悪の塊。

荒く吐いた息すら燃えているような錯覚を覚えて、ジンは眼前の

敵を見据えた。

赤く光る瞳は、吐き気がするほどの憎悪の証。奥歯を噛み砕かればかりに食いしばり、足は地面を蹴り付ける。

「るおおおおお！」

「オオオ！」

「オオオオオ！」

剣を合わせる様は、噛み合う獣を連想させた。ディードの隊長格に率いられた四匹の群れ。その向こうにいる白髪の老人に向けてジンは疾走を繰り返す。双剣が地を這い、跳ね上がると同時、叩きつけられる長剣をはじき返す。受け止めた衝撃に、ジンの傷から血が噴出す。

「く、おおおおお！」

傷の痛みと全身から抜けていく力の感覚に、ジンは必死で抗った。老人まであと十歩。

数秒とかわからないはずの、その距離が絶対の防壁となつてジンの前に立ちふさがる。横なぎに振るわれる槍。射程の長いそれを避けようとして、果たせずジンは槍に殴りつけられ後方へ吹き飛んだ。肺から零れ落ちていく空気と力。

「ユリイ……」

つぶやく声に、応えるものはもういない。

吐き出される血と言霊に、応えてくれるものはいなかったのだ。

怒りとその陰に隠れた悲しみに気が付いたとき、ジンの体には力が入らなくなっていた。

だがそれでも震える足と手で立ち上がるうとして、痙攣する四肢を動かす。その姿は地面を這いずる赤子のようにか弱く、羽をもがれた鳥のように無様だった。

動かないジンに止めを刺そうと、ディードの足音が迫ってくる。手足は無様に痙攣し、体を起こす力もない。

若いのに、良い腕じゃないか。

ふと、怒りと悲しみに染め上げられていたジンの脳裏に、わずか

なりと理性が戻る。

昔、同じようなことがあったと。

「最近の餓鬼は、だらしがないねえ」

月を背にし、刻まれる陰影。風にゆれる黒き髪は不吉の象徴のよう
に靡き。

ジンは、声の主を振り返る。

風が雲を洗い流し、薄ら蒼い月光に照らされる彼女は、美しかった。

整った鼻筋に、小ぶりな唇。何よりも印象的なのは、周囲を覆う
夜の闇よりも、更に濃い漆黒の瞳。

あの夜と同じように。

「サギリっ……」

息を呑むジンを、愉しげに眺め、サギリは口元をゆがめる。

違いがあるとすれば、お互いに少し背が伸びて、どちらも傷だら
けなことだけだろう。

「なんでっ……」

サギリは来ない、いや来れないと思っていたジンは敢えてこの夕
イミングを狙って、仇を討ちに行った。

「もう立てないか？ お前を支える復讐の炎は、こんなところで死
ぬのを許してくれるのか？」

倒れたジンの横、足元に這いつくばって立てずにいるジんに、サ
ギリは言葉をかける。

「俺、は」

「なら、思い出せ。お前は何者で、アタシの何なのか」
握り締められた双剣を地面につきたて、体を支える。

立たなくてはならない、と理性が本能が告げていた。

「目蓋の裏にいる亡霊がお前を支えられないのなら、アタシの声に
応える」

サギリは腕を組み、迫りくるデイドに対して構えすら見せない。
「お前の名前は何だ。応えろ！」

食いしばった歯の合間から。

「俺は、ジンだ！」

咆哮がほとばしる。足に負った傷口から吹き出す血も、省みずジンは双剣を構える。水平に構えた腕からも、滴り落ちる赤黒い血のしずく。

「よし」

この世の全てに牙を剥くような不敵な笑みを浮かべて、サギリは笑った。

「お前は、アレを狙え。ほかには何も考えるな。一直線だ」

足元はすでにおぼつかない。揺れる視界に、まどろむ思考。だがその隙間にに侵蝕する主の^{サギリ}声。

「雑魚はアタシが片してやるよ」

肩をすくめて晒うサギリが、短剣を構える。

「行け、アタシの狼！」

その声に背を押されるようにジンの足は地面を蹴りつける。眼前に迫るデイドの脅威。振りかぶられる武器、狂猛な獣の咆哮全てを無視し、ただひたすらに前傾姿勢のまま駆け抜ける。

「アタシのモノに、触るんじゃねえよ」

振り下ろされる武器とジンの合間に、サギリが舞い込み、三方から迫る斧、槍、拳を瞬きの間にいなす。残るは長剣を持った隊長格のデイド。

ひらりと、舞い降りるようにデイドの間を縫い、最後の障壁に向かうジンとサギリ。駆けるジンの横をサギリが追い抜く。

もはやジンの足は、それほどまでに衰えていた。ほとんど目も見えていない。

僅かに残る視界の隅に、残る怨敵の姿を捉え、ジンはひたすらに足を動かした。

ジンの道を開くため、サギリは長剣を持つデイドと渡り合う。

だが剣を合わせた瞬間、サギリはその敵の難易さを把握することになる。

剣の捌きはケイフウにやや劣る程度か。その敵がサギリの前に立ちふさがる。追いついたとはいえ、ジンが追いつくのはすぐ。ほんのわずかの間に、この敵を倒すのはおそらくサギリの技量をして無理だった。

ジンが追いつくまで後8歩。

我武者羅に突っ込んでくるジンを、隊長格のデイドが見逃すはずはない。サギリとの戦いの最中にあると、確実に殺されてしまおうだろう。

ジンが追いつくまで後6歩。

横薙ぎの一撃がサギリを襲う。それを受け流して懐に入り込み。

「くっ」

戻ってくる圧倒的な剣に引くことを余儀なくされた。

後4歩。

「邪魔」

ジンの前、盾になろうといいのかサギリはジンの前に短剣を、交差させて隊長格に突っ込んだ。

再び襲い掛かる横薙ぎの一撃。それを交差した短剣で滑らせ懐を狙う。

だが、今度はデイドの方が上手だった。サギリのその攻撃を読んでいたのか、間髪いれずに手元に剣を引き戻し更なる一撃を加える。

後2歩。

避けきれないその一撃。デイドの力を持つてすればサギリの小柄な体など、吹き飛ばすのに容易い。予想される一撃に、サギリは歯を食いしばって長剣に、短剣をあわせた。

吹き飛ばさず。黒い髪が流れ、小柄な体が宙を舞う。

「なんだよ」

だが。

にやり、と吹き飛ばされたサギリの口元がゆがむ。

振り切ったデイドの一撃の下。可能な限り前傾を保ったジンが、

サギリの陰に隠れていたジンが隊長格のデイドの振るった剣の下を通り抜けていた。

「オオオオオオオ！」

怒りに似た咆哮をあげるデイド。ジンを追おうとしたその矢先、太もみに刺さる違和感に視線を向ける。突き立った投擲剣の鈍い光に、“荒地の魔女”の声が重なる。

「つれないじゃないか？ アンタの相手はアタシだよ。化け物」

口元に貼り付いたのは弦月に歪む凶悪な笑み。一瞬だけ後ろから迫る三匹のデイドにも視線を向け、それでも同じように晒す。

「かかっておいで、ぶち殺してやる」

デイドが言葉を理解したかどうかはわからない。

だが、敵としてサギリを認識したのは確かだ。

獣の咆哮を上げて、4匹のデイドはサギリを取り囲んだ。

荒れ狂う嵐のような心に、サギリの声だけがはつきりと響く。

あれほど腹の底から湧き上がってきた憎悪が、今はそのなりを潜めていた。憎悪ではない。悲しみだけでもない。いろいろな感情がぐちゃぐちゃに交じり合い、混沌と爆発しそうな感情だけが、張り裂けそうだった。

「は、ハア、は」

息をするのも苦痛にしかからならない。ぼやける視界。

何のために走っているのか、流した血の多さに考えることすら体が放棄する。

だが、それでも足は前に出ることをやめはしない。

サギリがいけと、言ったのだ。

ならジンは走らねばならない。理由などない。

それが生きる理由であるかのように、ジンはひたすら走る。

手にした双剣は何のために、張り裂けそうな心臓を動かすのは何のために、血を流すことをやめない傷は何のために。
「う、う」

その答えが、ぼやける視界の果てに見えていた。

「うるうああああああアア！！」

腹の底から湧き上がるその声は。

走ることをやめないその足は。

相手を貫くためだけに、上げられたその腕は。

「アアアアア、アアア！！」

今まさに、この時のために。

肉に食い込む刃の感触に、何も考えず双剣を穿ち、抉り、引き裂く。

四肢を噛み、首筋に牙を突き立てる双剣の軌道が、そのまま飛び散る血潮となる。

驚いたような老人の眼球を、瞬きをするまもなく切り裂き、悲鳴を上げるために開かれた口を双剣が貫いた。振りぬいた刃から、滴る血のしずく。

「は、ハア、は、ハア」

気が付けば、一言も発せず怨敵はジンの眼下で軀と化していた。

「ユリイ……」

血の海に沈む軀を見下ろして、ジンは二歩三歩、意識せず後退する。

「俺を」

見上げる頭上には、青くさめざめとした月が輝く。

力が抜けたジンはそのまま、背中から倒れ落ちそうになり。

「おもてえ！」

何かに当たってしりもちをついた。

「サギリ、か」

がらん、と音を立てて双剣が地面に落ちる。自身の重さに耐え切れず、ジンは背中から倒れこんだ。

「っおい！」

だが、予想された地面の硬さはなく、首筋の後ろに感じるのは、柔らかな感触。

目を見開けば、サギリの黒い瞳が目の前にあった。

サギリのおぐらをかいた太ももの上に、ジンの頭が乗っている。

その状況を把握するまでに、しばしの時間がかかった。

「ち、敵討ちなんか思い入れすぎなんだよ」

やがてジンを覗き込んでいたサギリがそつぽを向くと、吐き捨てる。

「そう、かな」

「ああ。そうなんだよ」

頬杖をついて、そつぽを向くサギリ。

「デイドは……」

「てめえが心配するようなことなんぞ、何もねえさ。本体はサイシヤとケイフウが上手くやってな。アタシの獲物まで取る始末だ」

不機嫌そうに鼻を鳴らしながら、どこか嬉しげなサギリ。その表情にジンの口元もわずかに緩む。

「そうか……強くなったんだな」

「ああ」

息をするのも辛そうに、だがジンは苦しい呼吸の中から言葉を続ける。

「ユリイは、赦してくれるかな？」

「……さあな」

許しを求める声に、優しい言葉をかけることをサギリはしなかった。

「答えはもうちつと生きて、てめえで見つけな。こんな所で死んだら、それこそ赦しちゃくれないだろうし、アタシも許さねえよ」

「……見つかるのかな？」

疑問に対して、答えを求める無垢な子供のような問いに。

「アタシもまだ、見つけてないよ」

「そうか、じゃあ一緒に探せるな」
どこか安心したような声でジンはつぶやき、目を閉じた。
「何が、一緒に探そうかだよ……恥ずかしいことを平気で言いやがって、アンタはアタシの大事な手ごまだろうが！」
ジンの寝息を確認すると、サギリは悪態をついた。その頬がほんのりと赤くなっていたのは、見間違いだったかもしれない。

そんな二人の様子を遠巻きに、ケイフウとサイシャが見守る。
今にも飛び出していきそうなケイフウを、サイシャが無理矢理押さえつけていた。

「ジンにい、いいな〜いいな〜」

「うるさい！ 見つかるだろ！」

災厄と破壊を撒き散らす“毒蛇”と“大剣”とは一変して、年頃の少女のように、片や好奇心に目を輝かせ、片や未だ母親に甘え足りない子供のように拗ねる。

「むぎゅ〜ってするのかな？ サー姐も！」

「しないよ、するわけないだろ！」

「えええ〜」

「いや、しないとは言い切れないけど……」

自信なさ気に考え込み、だがやっぱり気になると見えて再び岩陰から二人の様子を伺う。

「ケイフウも、ケイフウもむぎゅ〜って！」

「馬鹿！ お前が出て行ったら台無しだろうが！」

岩陰で先ほどにも勝る暗闘が繰り返される中、背後から空気の読めないシロキアの大声が聞こえた。

「ちっ、やっぱり男ってのは……」

舌打ちするサイシャと、ルクが呼んでると言う言葉に脱兎のごとく駆け出すケイフウ。

「なんだ、お嬢ちゃん。こんなところで」

「馬鹿、死ね、屑」

考え付く限りの罵倒を静かに吐き捨てると、二人の邪魔をしないようにシロキアを引っ張ってガドリアの本隊の方へ向かう。

「面倒ごとは全部お前の仕事だ。なんとかしろ」

無理難題を、博徒の頭に押し付けようと、サイシャは睨む。

「ジンにいてもサー姐も、今忙しい」

「へえ」

にやりと、笑うシロキアを、背筋の凍るような視線でサイシャが射抜く。

「今、考えたことを、今すぐ忘れる。出なければ強制的にお前の記憶は消える」

構えた短剣に、毒々しい液体をたらすサイシャ。首筋に当てられたソレに、百戦錬磨のシロキアの背筋が凍る。

「わかったわかった。姐さんは忙しいんだろ。カシラの大事な時間を作るのも、手下の役目だもんなあ」

「シ〜ロ〜キ〜ア〜」

言葉が続くにつれて、段々とシロキアの顔が緩む。逆にいつそう鬼のような表情になるサイシャ。

「いや、初心だねえ」

それに対して投げられたのは、毒の塗られた短剣。

「うお、つと！」

寸でのところでそれをかわし、一目散に逃げ出すシロキア。

「消す！」

その後を追ってサイシャが走り出していった。

ゴード暦528年、雨季。

荒地の魔女に率いられた東都ガドリアの軍勢は、荒地を跋扈する食人鬼の駆逐に成功する。

それによって、ガドリアとロクサーヌの間を隔てるものは、境界の山脈と呼ばれる大山脈だけとなった。

獣道6（後書き）

遅くなって大変申し訳ありません。すでに休みは終わり、通常通りの更新速度となっております。

私の忙しさはあのぐらいしか救ってくれそうにありません。

声を大にして。

Help me ANDERSSOON!!!!!!

獣道7（前書き）

長い間お待たせして申し訳ありません。
やっと滞っていた更新ができそうです。

獣道 7

サギリ達のデイド討伐が決着を迎えていた頃、東都ガドリアでは一つの悲報が飛び交っていた。

炎の運び手の当主にして、今はガドリアの領主モルトの死である。荒れ地の盗賊から、鍛冶屋へ。そして領主へと成り上がった激動の人生の終末は、ハンナに看取られての穏やかな死だった。

臨終の際にまで、献身的に看病を続けるハンナを気遣い、ルカンド達若人の行く末を心配していた。あるいはロクサー又に生まれたならば、盗賊などという因果な商売に手を出すこともなく、平々凡々とした人生を送っていたかもしれない。

それほどまでに、盗賊の中では穏健派の代表格であった。

ガドリアの施政をルカンドに任せる旨、遺言して逝った。

モルトの亡くなった日から、山城の尖塔には黒の弔旗が掲げられた。通常領主の死となれば、その領地全域をあげての葬儀となる。だが遺言により葬儀は、親しい者だけの質素なものになり、城の裏、荒海に見える共同墓地にその遺体は葬られた。

ひっそりとした葬儀の後、ルカンドは一人モルトの墓の前に立っていた。夜の闇は海の姿を覆い隠し、波の音だけが、まるで時代の流れのように押し寄せてくる。

「モルトさん……」

思えば父代わりだったモルト。優しく大らかにルカンドを包み込んでくれるその存在が、今までどれほどルカンドを助けてくれただろう。だが、もはや彼はいない。

「今まで、ありがとございました」

打ち付ける波の音にもすればかき消されるような、静かな声。だがその思いは、いくら激しい波の音にも負けないほどに深く。

サイシャをサギリの元へ送り出してから、彼は一つの計画を進めていた。

ロクサーヌとガドリアの友好関係の樹立。もちろん、普通であれば力づくで領主の地位を奪った“双頭の蛇”が相手にされることなどない。だが今なら……共和制から王政へと移り変わった直後の、今なら可能性はあるとルカンドは考えていた。

燻ぶる共和制回帰への火種。未だ蠢動をやめない自由都市郡ポーレの動向。そして、ルカンドの元へ届けられた最新の情報によれば、西都が王都に反旗を翻そうとしているらしい。北方、西方に敵を抱える今の状況でさらに東部までを敵に回す愚は起こさない。

少なくとも、ルカンドならそうはしない。たとえ一時の和平でもガドリアを味方につけて、西と北の敵に全力を注ぐ。

おそらくサギリなら、この隙に乗じて王都へ攻め上る道を選ぶのだろう。そのための地ならしが、今回のデイードの討伐だ。“荒地の魔女”の挑発的につりあがる口元と、全てを呑み込む漆黒の瞳の色が、ルカンドの脳裏を駆け巡る。それを頭を振って追い出すと、ルカンドはモルトの墓に花を供えて背を向ける。

「僕は、誰よりも強くなつて見せます」

義足となつた足が力強く地面を踏みしめる。

「お帰りですか？」

いつからそこに控えていたのか。少女が一人墓地から立ち去るルカンドを追う。

「ナルニア？ なぜここが」

雪華でジルの側に仕えていた少女だった。

花の咲くような笑みを見せて、ナルニアは答える。

「殿方の心がわからなくて、娼妓が務まるわけないでしょう？」

「参ったな」

苦笑するルカンドに、ナルニアは首を振る。

「殿方の弱さも含めて、その方の魅力だと思えますよ」

「そう言ってもらえると、少しは救われる」

大人びた物言いの少女に苦笑してルカンドは頭をかいた。

「お疲れになつたら、どうぞ艶花に来てくださいね。たっぷりサービスさせて頂きます」

「仕事熱心だね」

「ええ、女将さんが遊び回っていると、下がしつかりしなきゃならなくなるんです」

くすりと、笑いルカンドに並んで歩く。

「君たちには……辛いことを頼まなきゃいけない」

「王都を揺さぶるのですね」

王都ロクサー又と和平を結ぶため、前々からルカンドが考えていた策は事前にナルニア達に伝えてある。

「今の僕には、こんな策しか思いつかない……」

「ルカンド」

熱心に杖をつきながら歩くルカンドの肩を、ナルニアが掴む。そのままナルニアの豊富な胸に、ルカンドは抱き寄せられた。

「私達の生き方に、あなたが心を痛める必要はないのです」

母のような優しさで、ルカンドを抱きしめるナルニア。

「卑怯者の僕を、許してくれ」

「必ず生きて帰ります」

優しく告げると、ルカンドを抱きしめていた腕を解く。涙を目にためるルカンドの側から、ナルニアは小鹿のように軽やかな足取りで駆け去る。

一度振り向いて、くすりと笑う。

「それに、あんまりルカンドと仲良くしているとサイシャが嫉妬するからね！」

ニツ、と乾らりと笑うと今度こそ駆け去る。

「無事で帰ってくれ」

祈るようにその背中に向けて、ルカンドは呟いた。

翌日、ナルニア達女ばかりの一行は赤き道の行商隊に混じってガドリアを出発した。

サギリ達、デイドの討伐軍がガドリアに戻ったのは、ナルニア達が出発してから十日も経った頃だった。デイドを追う必要もなく、怪我人を引き連れてのゆつくりとした帰還だった。

北にある未踏の荒れ地をでるまでは、双頭の蛇が先頭を切って歩いてきたが南の比較的安全な地域に出たからは城兵達が先頭を切るようになっていた。その城兵の先頭が、荒涼たる大地の向こうにそびえるガドリアの山城を見つけて歓声をあげる。

彼らにしてみれば文字通り地獄からの生還だった。

“荒れ地の魔女”に率いられて、長年ガドリアを脅かしてきた化物を討ち平らげた。仲間に聞かせるには刺激に強すぎる話題だろうか。約束された恩賞と、暖かい寝床。家族が待っているものは家族の顔を思い浮かべ、恋人のことを思い出すものもいただろう。

先頭の城兵が上げた歓声が、雪華に、博徒達に伝播していくのをサギリは苦笑して見ていた。隊列も何もあつたものではない。先頭の城兵が駆け出すと、釣られるように雪華、博徒達も走り出す。

「良いんですかい？」

やれやれと、眉をひそめながらシロキアがサギリに尋ねるが、サギリは肩をすくめただけだった。

「多少は大目に見るさ。アンタも行ってやんな」

口の端を釣り上げて笑うサギリに。

「ま、姐さんがそういうなら」

シロキアは、はしゃぐ手下達を引き止めるのを断念する。

「せっかくの凱旋だったのに格好がつかねえなあ」

ぼやくと手下を追って走り出す。

「サイシャ、アンタも先に行きな」

「え、でも」

サギリの横で、思い思いに走り出すガドリア軍をイライラしながら

ら睨んでいたサイシャに、サギリは声をかける。

「ルカの奴に、宴会の準備をしとけて伝えておくれ」

「うん！」

そういうことなら、と走っていくサイシャの後姿にサギリは、苦笑した。

「どうも、甘くなっちゃったかね」

長い黒髪をくしゃりとなで、ルクとケイフウに視線を向ける。

「アンタらも、ご苦労だったね」

「ケイフウがんばった！」

「いえ、お力になれなくて……」

ほがらかに笑うケイフウと、救えなかった命のことを思うルク。対照的な二人にサギリは笑いかける。

「ケイフウ、しばらくお嬢ちゃんの手伝いをしてやんな」

「うん！」

「お嬢ちゃん、人手がほしかったらケイフウに言いつけな。なるべくそっちにまわしてあげるよ」

「ありがとうございます……でも」

「あん？」

怪訝な顔をするサギリに。

「私には、ルクという名前があります！」

ルクは決然と言いつつ切った。ガドリアでもっとも恐ろしい“荒れ地の魔女”にここまでではつきりとモノをいうのは、あるいは彼女だけかもしれない。その度胸に、周囲にいた者は瞠目する。

「クツクツク、そいつは悪かった」

上機嫌なサギリに、ほっと胸をなでおろす周りを知ってか知らずか、ルクは一礼するとサギリに背を向けて怪我人の馬車に向かう。

「嫌われちゃったかねえ」

なおも笑うサギリと、ルクを交互に見比べていたケイフウは。

「行つといで」

というサギリの一言で鎖を解かれた隼のような勢いでルクの後を

追っていった。

先ほど見たときには、豆粒ほどにしか見えなかったガドリアが、すでに全容を見渡せるまでになっていた。

「あん？」

山城に翻る黒の巾旗。

「死んだのか……クソジジイ」

先ほどまでの笑顔は、すっかり鳴りを潜め一瞬だけ悔しそうな表情を覗かせる。だが、それも束の間口の端を釣り上げると不敵に笑う。

「ルカ……さあ、アタシを出し抜いてみな」

小さく呟いて手に入れた故郷ガドリアの街を見る。

「さもなきや……王都と戦だよ」

狂気に彩られた魔女の言葉は、凱旋の歓声にかき消された。

外は三日三晩続く大宴会の真つ最中だった。食人鬼デイトの討伐の成功は、すなわちガドリアの約束された繁栄に違いない。シロキアの屋敷では、庭先にまでかがり火を焚き、博徒、ゴロツキ連中、果ては流れ者から、城兵まで招いての大宴会を催している。

赤き道の商人達は、店の前に無料の酒樽を置き、路上に長机を並ばせ、その上には所狭しと豪快なガドリアの料理が並ぶ。路上が宴会の会場となったような有様に、ガドリアは沸騰していた。

城でも祝宴会が開かれている。

年老いた城兵の長老格が主体となり、小さな舞踏会場ダンスホールをぶち抜き、所狭しと料理を並べ酒を並べる。いつもなら城になど来れないはずの、博徒やゴロツキまでもが城兵達と一緒に酒を酌み交わし、くだを巻く。

女達は男達の無事の帰還を喜び、帰らなかつた者達への哀悼を捧げる為、大いに騒ぎ送るのがサギリのやり方だった。

だがその浮かれた空気の中でも、シンと静まり返っている一角がある。艶花が仕切る色町一帯は火の消えたような静けさだった。常なら率先して遊女達を送り出し、ここぞとばかりに商売に精を出すはずのジルが、傷の為に動けないこと。先代ハンナは、モルトの喪に静かに服したいということで、店には顔を見せず、ジルの手足と成って店を仕切っていたナルニアが不在にしているためだ。

中心として動いている三人が抜けた艶花は、個々の店ごとに稼ぎを競ってはいるが、やはりそこには勢いが感じられない。

外の喧騒がうそのように、ジルのいる部屋は静かだった。

その部屋に来訪者がある。

木製の扉をノックすれば、入室を許可する声に来訪者　ルカンドは扉を開けた。

「みつともない格好で失礼するよ」

包帯の上から寝間着を羽織っただけのジルが、ベットの上で上半身を起こしながら言った。

「楽にしてください」

怪我を負った直後に比べれば幾分顔色は良い。だがルカンドには、当時を知らないだけにその痛々しい姿に、眉をひそめた。

「すいません……こんなときに」

「なあに、別に構わないさ。ルクとサイシャにきつく念を押されててね、暇だったんだ」

煙草が吸えないのが、少し堪えるけどね。と、茶目っ気に笑うと、ジルはルカンドから視線を外す。外した視線の先には、窓の外に煌々と欠けた月が輝いていた。

「ナルニアさんは……」

「無理に言わなくても、構わないよ」

ルカンドはジルの言葉に唇を噛み締め、強く拳を握り締める。ともしれば、その優しさに逃げてしまいたいそうになる自分がルカンドには、許せなかった。

「西都へ向かっていただきました」

「そうかい」

罵りの言葉もなく、疑問も投げつけられない。ただ返ってくるのは、受け入れる言葉だけだった。

「僕は、ナルニアさんに」

「ねえ、ルカンド」

それでも言わなければならぬ、と絞り出す思いで、口を開いたルカンドの言葉をジルが遮る。

「あの子は笑ってただろ？」

「っ！」

まるで見てきたように微笑むジルに、ルカンドは息をのむ。

「どうして」

「気に病む必要なんてないよ。あの子はお前に賭けたんだ」

「賭ですか？」

「そう、お前のしよつとしてることがより良い未来をガドリアにもたらしてくれる。そう信じてね」

返す言葉を持たず立ち尽くすルカンドに、ジルは微笑んだ。

「行きなよ、ルカンド。ここはあんたの来る場所じゃない。あんたにはすることがあって、いるべき場所がある。そうだろう？」

「はい」

力強くうなづくと、ルカンドは失礼しましたと言って部屋を出て行く。

「……より良いガドリアの未来ね。はは、モルトの小父さんの小言がうつつちまったかね」

苦笑してはまだ痛む傷に、そつと触れる。

「許してくださいよ。小父さん、あたしは艶花なんだ。利用できるもんは、なんでも利用させてもらいます。ルカンドも、ナルニアも、ね」

昔まだジルが幼かったころ、モルトに頭をなでられた遠い記憶が蘇る。モルトとハンナが仲たがいをする前は、父親のように慕った時もあった。

触れた傷の更に奥から響く痛みに、ジルは苦笑した。

「……なりきれないもんだね。悪人ってやつにはさ」

月光差し込む部屋の中。

「なんで死んじまつてんのさ。小父さん……」

暗い闇夜で一人ジルは、涙を流した。

「何の話をしていたんだ？」

ジルの部屋を辞したルカンドにかかる声は、暗闇の中から聞こえた。

「サイシャかい？」

黒一色の服は闇に解けて輪郭をぼやけさせる。

「サー姐が話があるってさ」

不機嫌そうに、鼻を鳴らすとルカンドの隣まで歩いてくる。

「うん。僕もだ」

ルカンドの灰色の瞳に不吉な色を感じ取ったサイシャは、わずかな躊躇いの後、思い切って口を開いた。

「ルカ。あのさ」

「うん」

コツコツとルカンドの突く杖の音が、静寂を保つ周囲に響く。

「サー姐をあんまり困らせるなよ」

こんな子供っぽい言葉でしか、自分の心を語れないことをサイシャは恥ずかしく思っていた。ルカンドのほうに視線を向けずに、返事を待つ。

「大丈夫だと思う」

ちらりと見たルカンドの顔は、人を安心させるあの笑みを浮かべていた。

「お前はいつもそうだ」

人を安心させるような笑顔を見せて、一番危険なことをしようと

する。

「気をつけるよ」

「ありがとう、サイシャ」

街に輝く宴の明かりに向かつて、いまだ小さな二人は肩を並べて歩いていた。

ガドリアの夜は冷える。

月夜とはいえ、吹き付ける風は凍えるほどの冷たさを持って肌を刺す。今はただ暗闇がその視界を閉ざし、昼間なら見えるはずの境界の山脈は闇の中に沈んでいた。ガドリアの山城の尖塔。そのテラスに腰掛け、街の主は眼下の篝火を見下ろしていた。

口元に浮かぶのは微笑。いくらか嘲笑の成分を含んだそれは、彼女の強気と相まってその漆黒の瞳を輝かせる。時折聞こえる歓声に、舌を潤す酒精に、サギリは上機嫌だった。

「こつという酒なら、悪くはないか」

惜しむらくは、酒を酌み交わすはずだった友を亡くしたこと。罵詈雑言を遠慮なく言える相手がいないというのは、寂しいものだった。だがそれを臆面にも出さず、流れる雲に煙る月に視線を向けた。

「アタシなりの、弔意だぜクソジジイ」

モルトが夢見た子供を捨てなくて良いガドリア。街が富めば、飢える者は確実に減る。食人鬼デイドの討伐成功を、本来ならもつとも喜ぶべき当人がいない。

「しまらねえ話だがな」

舌打ちして、また手に持った酒を舌で転がすように飲む。

「恩は返したぜ。これから先は、アタシの好きにやらせてもらう」
荒地からガドリアへ双頭の蛇が進出する際、炎の運び手にはかたりの骨を折らせた。わずか1年前のことだが、今となってははるかに昔のことに思える。

「てめえの、息子も返してもらおうしなルカンド」

月に向かって口の端を歪める。

コンコンと、ドアをたたく音がする。

「入りな」

故人と語り合う時間は去った。

今は、ガドリアの未来を決める話し合いの刻。

「失礼します」

灰色の目に強い力を灯した義足のルカンド。寄り添うように、サイシャもいる。

「悪いね、祭りの晩に」

「いえ、僕もお話したいことがありましたので」

「座りな」

失礼します、と断ってルカンドは椅子に腰掛ける。

「サイシャも聞いていくかい？ なに、ただのつまらない話だけがね」

一瞬、ルカンドとサギリを見比べるとサイシャは首を振る。

「私は外で待つてる」

「そうかい。まあ、そんなに長くはかからないだろうさ」

上機嫌で笑うサギリに、幾分かサイシャは安心して部屋を出て行く。

「それでお話というのは？」

「大したことじゃないさ。アタシのはね。まあお前の用件から聞こうか」

「王都との和平を」

「なるほどなるほど」

笑う声は既に、残酷で邪悪な魔女のもの。

「アタシの用件でえのはね、ジルを殺すってことさ」

「……理由は何でしょう？」

無視のできない話題に、驚きのさざなみをわずかの間にしまいこみ、理由を聞く。

「強いて言うなら、群のアタマはアタシ一人で充分なんだ。邪魔な

やつは消す」

「……指揮をする人間が自身一人で問題ない？」

「違うね。アタシに従わない指揮者が邪魔なんだ」

楽しそうに笑いながら、手元のグラスを弄ぶ。赤い液体がグラスの中で渦を巻くようにゆれていた。

「雪華の勢力を全てほしい、ということでしょうか」

「ああ。アタマはいらないんだけどね」

首を切る動作に、笑わない漆黒の瞳がルカンドの方を向く。口元を彩るのは、邪悪にゆがむ笑み。ルカンドの背筋を凍らせ、捕らえて離さない呪縛の瞳。

「今のままでも、充分従順に雪華は従います」

「ああ、ジルが動けない間はね」

だんだんとルカンドの心に焦りが浮かび上がる。サギリはやるといえば、本当にやる。

「この度の雪華の働きは、不足だったと……」

「いやいや、アタシはむしろ見直したぐらいさ。だからほしくなったんだ。お前にも見せてやりたかったねえ。化け物どもと戦う奴らの姿……」

「だからといって！」

思わず立ち上がるルカンドに、サギリは氷のようにつめたい言葉を浴びせる。

「ルカ。掟を忘れたんじゃないだろうね？ 双頭の蛇は、どこまで行っても変わったりはしないよ。ほしいものは奪え、だ」

力で、知略で、金で。全てを駆使してほしいものを奪い取る。一切の妥協なく、一切の温情もかけない。

力なくば、死ぬ。

地獄のような荒地で培われた双頭の蛇の掟。自身の原点を、改めて振り返させられ、ルカンドは言葉に詰まる。彼とて盗賊の端くれだ。商隊を襲い荷を奪ったことなど、数えてもきりが無い。

今更どの口でガドリアの和平など説くのか。

暗にサギリはそう指摘していた。

「僕に何をしろと？」

苦々しいものを噛みながらルカンドは口を開く。

「ジルの首、取ってきな」

「っ！……できません」

すとん、とサギリは腰掛けていたテラスから降り立つ。

「できないじゃ、ないんだけどねえ」

テーブルの上にコトリとグラスを置いて、ルカンドの正面に立つ。既に身長は、サギリを追い越しルカンドの方が頭ひとつ高い。俯くルカンドの顔を、小首をかしげながらサギリは見上げる。

「少しお前を甘やかしすぎたねえ？ ルカ。お前のカシラはアタシだ。忘れたわけじゃないだろう？」

ゾツとするほど冷たいサギリの手が、ルカンドの頬をなでて無理やりサギリの瞳を見させられる。灰色の瞳を射竦める漆黒の宝玉に似た魔女の瞳。

「お前は頭がいい。だから、ジルから雪華を取り上げる方法ぐらゐすぐに思いつくんじゃないのかい？」

「……買いかぶりです」

「嘘はいけないよ。それがどんなに汚く、酷い手段だろうとお前はしっかり考えている」

雪華とジルの分離の策。ジルを殺せと言われた時から、ジルを殺さずに済む方法を考えていた。その中のもっとも穏便な形として、ジルの命と引き換えに兵を差し出させる。ジルは命を永らえ、雪華はサギリの手元に収まる。その策を考えてはいた。

それを見通されたようで、サギリの瞳から視線をそらす。

「ジルの命と交換なら……」

「駄目に決まってるじゃないか。ジルは殺す。雪華はアタシのものにする。そういう策を言いな」

「そんな……」

「ルカ。よくお聞き」

嫣然と表現していいほど、サギリの顔には一種独特の色香があった。花にたとえるなら狂気の熱に浮かされたような、徒花ではあったが。

「つまらねえ平和なんざ、クソ食らえだ！」

一瞬にして、頬を撫でるサギリの手に力が籠り、あふれ出す覇気がルカンドを打ちのめす。手下を震え上がらせる盗賊のカシラの声に、ルカンドは腹の底がぐらぐらと揺れる思いだった。

「ロクサーヌにのさばるクソどもを一人残らず殺し尽くし、奴らの全てを奪いつくすんだ！ その為にはさあ、足りないんだよ全っ然足りないんだ。今のままじゃあねえ」

ごくりと、息を呑むルカンド。

「もっともっともっと、力があるんだ。誰よりも何よりも強く強く！ 奴らを皆殺しに出来るだけの、力があるんだよ！」

サギリの漆黒の瞳の奥。わずかに覗く深淵から、溢れ出す狂気の熱。長年一緒にいるはずのルカンドでさえ感じたことのないサギリの中に潜む狂気の一閃。

「……選べ。ルカンド」

狂気の熱はなりを潜め、次にサギリの形の良い唇から漏れ出したのは、静かに鳴らされる彼岸の鐘の音。

「ジルの命か、それともガドリア平和か」

二つに一つ、文字通り喉元に突きつけられた選択肢は、剣の鋭さを持っていた。

獣道 8

サギリの狂気の熱に照らされ、ルカンドはしばしサギリの瞳を見つめていた。

「僕は……」

机についていた手を握り締める。

思い返すのは、自身の目の前で殺された名も知らぬ少女の面影。

呪縛のように脳裏を絡めとるその面影が、サギリの威圧を腹の底から跳ね除ける。

「何を犠牲にしても、ガドリアの平和を諦めるつもりはありません。しっかりとサギリを見つめ返す灰色の瞳が告げるのは、決意の言葉。

「へえ……ならジルの首、とつてくるんだね？」

片眉を上げるサギリの問いかけに、ルカンドは俯いた。

「どうなんだい、はつきりしな」

「それも……お断りします」

スツと、手が伸びるのはルカンドがいつも使っている杖。

「しよりの無い子だ……そんな我俣が通ると思って」

「通らせていただきます」

「アタシのいうことが聞けないのかい？」

「動かないでください……サギリさん。動けば命を落とします」

ルカンドの両手に握られる杖に、サギリの視線が動く。

「……その杖、仕込み杖か」

コクリと頷くルカンドに、サギリは上機嫌に笑った。間合いは至近。命を握られているに等しいその状況で、なおも荒地の魔女は心底笑っていた。

「何が、おかしいんですか？」

一方のルカンドはいたって真剣だった。いつでも抜き打てるように細心の注意でサギリの動向を観察する。一瞬の隙さえ見逃さない

とばかりに、睨みつけるようにサギリから視線をはずさない。

「アハハハ、クッククク……まあ、いいさ。それでアタシを殺してどうするンだい？ 首をロクサーヌにでも届けてみるか？」

笑いを収めたサギリが、ルカンドに問い返す。

「そんなことはしません。ただ、僕の邪魔をしないでください。そうしてくれば何をしてもらって……くっ」

「ああ、そういえばお前の質問に答えて無かったね」

急に片膝をつき、崩れ落ちるルカンドをサギリは見下ろした。口元に浮かぶのは弦月にゆがむ魔女の笑み。

「何がおかしいかって？ 誰が味方がもわからないでアタシの命を取ろうとてるお前の姿が、おかしかったに決まってるじゃないか……ねえ？ サイシャ」

その声にルカンドが後ろを振り向けば、見慣れた少女の姿。その瞳は虚ろに揺れ、唇をかみ締めながら……だが確かに手には、毒の塗つてある針を手にしていた。

「サイ、シャ……なん、で？」

「……ごめん」

俯く少女に、サギリの声が重なる。

「誰が誰に従うか、敵と味方の区別もつかないようじゃ、まだまだだねルカ」

低い笑いととも落ちてくる声に、ルカンドは視線を上げる。あのサギリの高笑いは、サイシャの進入を気づかせない為のものだったのかと、今更ながら気がつく。

「ま、いいさ。これで力関係ははっきりしたろう」

椅子に座りなおすと、足を組んでルカンドを見下ろす。

「なぜそんなに争いを拒むんだい？ お前だって憎かったろう？」

おまえ自身を物のように扱う奴隷商人や、お前を売り飛ばした親達がさあ」

吐く言葉は毒となってルカンドの心を蝕む。

「……もちろん憎かった。だけど、今はそれよりも、もっと大切な

モノがある」

「へえ、そりやなんだい？ アタシの気分が変わるようならお前の話を聞いてやってもいいよ」

痺れる手先に、抗いながらルカンドはサギリに視線を向ける。

「家族だ」

「っ！」

ぴくりと、片眉を上げただけのサギリと、ルカンドの後ろで息を呑むサイシャ。

「サイシャや、ケイフウや、ジンさん、ナルニアにジルさんや、シロキアさん、クルドバーツさん……そしてサギリさん、このガドリア全てが僕の家族で故郷だ」

まっすぐに向けられる視線は、ルカンドに宿る情熱の全てを語るかのように熱の籠った物だった。

「……残念だよ、ルカ。アタシはもう少しマシな答えを期待していたんだがねえ」

対して向けられるのは、殺気すら籠った鋭い視線。サギリの手には腰から音も無く引き抜かれた短剣が握られている。外から差し込む月光の光に、鈍く光る刀身。

「サギリさん、お願いです。ロクサーヌと今争っても、勝ち目はありません」

「今しかないだろう？ 北は自由都市が押さえ、西にはもうすぐお前の手はずで、火の手が上がる。それに乗じて一気に王都を落とすのさ」

「……なんで、それを!？」

「クルドバーツを信用しすぎちゃいけないよ。ルカ、情報だって商売の種だろう?」

奥歯をかみ締めるルカンドと、薄い笑みを浮かべるサギリ。

「お願いしますっ!」

頭を地面に打ちつけ、ルカンドは叫んだ。

「サギリさん、ロクサーヌとは戦っても勝てません。相手はディー

ドのような獣じゃない！ 訓練された兵士です」

打ち付けた石の床に、ルカンドの割れた額から血が流れ出す。だがそれでも、ルカンドは言葉をとめない。

「ガドリアの兵力は1000を超えることはありません。ですが、ロクサー又は、常時3000を数える兵力が駐屯しています。西都で反乱がおきたとして、その差が縮まりこそすれ、逆転することなど無い。そんな無謀な賭けに、踏み切る必要は無い！」

「無謀な賭けね……それじゃお前はどうかやってあの街を奪うんだい？」

否定するなら代案を出せとの言葉に、ルカンドは必死に答える。

「一時の和平を利用して、あの街の内情を利用します」

「ふん」

その情報は知らなかったと、サギリは軽く内心でクルドバーツを罵る。そんなサギリの様子にも気づかず、ルカンドは言葉を続ける。
「今ロクサー又は、王位についたカル・スカルディア・ヘルシオラと十貴族の生き残りであるオウカ・ジエルのが覇を競っています。そこに付け込みます」

オウカ、の名前を聞いた瞬間サギリの表情に一瞬鬼気が浮かぶ。だがそれをすくじしまい、平静を装ってルカンドの話に耳を傾けた。
「彼らのうちどちらか、あるいは両方に食い込み内部からロクサー又を崩します」

「ぜえぜえと喘ぐルカンド。」

「……崩す策はしつかりとあるんだろっね」

静かに問う声は、

「必ず！ ロクサー又は獲れます！ ですから、今戦を起こすのはやめてください！」

「わかった。下がりなルカ……サイシャもだ」

「ジルさんの命を、保障してくださいっ！」

「ちっ……うるせえ！ 黙って下がれ！」

「いえ、下がれません。お願いします。お願いしますサギリさん！」

土下座するルカンドの隣に、軽い音がする。

「私からも、お願い、します。サー姐」

ルカンドと一緒にになって土下座したのは、今にも泣きそうなサイシャだった。

「サイシャっ！」

驚いたのはルカンドだった。普段彼女の気の強さを知っているだけに、こんな屈辱的なことをするとはとても思えなかったのだ。

「サー姐の手はわずらわせないから、だから……」

「ああ、もう！ わかったわかったよ！ さっさと消えな」

くしゃりと、長い黒髪を掻くとパイッとテラスの方に歩いていく。月光に輝く短剣はいつのまにか、しまわれていた。

「じゃ、じゃあー！」

喜びのあふれる声で、問いかけるルカンドに、サギリは背を見せたまま手を振った。

「戦はやめだ。ジルもしばらくそっとしておいてやる」

ケツと吐き捨てながら、グラスを手にとってテラスに腰掛けた。

境界の山脈から吹き付ける風が、彼女の長い髪を揺らす。

「ありがとうございます！」

「ただし、期限付きだ。半年でロクサーヌに確固たる足場を作りな」

「はいっ！」

弾む返事に、サギリは苦笑した。

「用事が済んだらさっさと失せな」

その声に見送られて、サイシャとルカンドは部屋をでる。

「……どうにも、参ったね。クソジジイ、アンタに貸すんじゃないか
つたよ」

悔しさとうれしさが同居した不思議な気分だった。

見上げる月は、やはり煌々と輝き。

「家族、か……アタシがねえ」

だが、舌に転がる酒の味は上々、こんな気分も悪くはなかった。
月から視線を移せば、闇に沈む境界の山脈。

「まあ、いいさ。オウカ・ジェルノの首、この手で取れるなら口クサーヌを奪うのが1年2年遅れてもたいしたことじゃない」

滴るような憎悪が、サギリの顔に笑みの形をとらせる。

「最後の一人だ」

この上なく上機嫌でサギリは笑った。

「その、ごめん」

ルカンドの手当てをしながら、サイシャはルカンドに謝罪していた。サイシャに与えられた部屋は薬草とそれに関する書物でいっぱいだった。唯一散らかっていないベットの上に、ルカンドを座らせ、治療に当たる。

「え？」

ルカンドの緩くウェーブのかかった赤銅色の髪を掻き分け、額に薬を塗りこんでいく。

「その、後ろから毒針で刺したこと……」

薬を丁寧に塗りこんだ後は、包帯を巻きつける作業だった。しばらく離れていたからだろうか、サイシャの女性らしくなった体に、ルカンドはどきりとして目の前の胸から視線をそらした。黒服の上からでもわかるそのふくらみを視界に入れないように、注意しながら。

「ああ、うん。気にしなくていいよ」

治療を終えた包帯を触りながら、人を安心させる笑みを浮かべる。「そんなわけにいくか！」

一方のサイシャは、目に涙すら浮かべている。普段の無表情かつ強気の彼女からは想像すらできないほどに、表情豊かだった。

不謹慎にもその彼女が可愛いなどと考えてしまい、あわててその考えを思考の墨に追いやる。

「でも、なんで……」

「サー姐から、事前に言われてたんだ……ごめん」

「そう、か……まだまだ勝てないね」

くすりと、笑ってルカンドは窓から覗く月を眺めた。

「土下座して、刃が振ってこなかった時には勝ったと思ったんだけど……良いところ引き分けかな？」

「え？」

「何が何でも僕がロクサー又と争わない理由の話に持ち込んでしまえば、サギリさんは聞く側に回らざるを得ない。あの人は頭のいい人だからね。だから、話さえ聞いてもらえれば、勝つ自信はあったんだけど……」

サイシャのことは予想外だったね。と笑うルカンド。

「私 は て つ き り、本気でサー姐の命を狙ってるのかと」

「あはは、僕の腕じゃ刺し違えるのだって無理だよ。今だってほら
見せるルカンドの手は震えていた。

「ね？ 今思い返しただけでも、怖くて」

肩をすくめて笑うルカンドに、サイシャは少し安心した。

「最初にジルさんの話を出された時に、気づくべきだったんだろうけど。あれはサギリさん流の、僕に与える試験なんだと思うよ」
「何で試験なんか……」

薬の箱を手早く片付けながら、サイシャはルカンドの隣に座る。

「この足じゃ、もう僕は戦えない。だから、ほかに生きるすべを見
つけろってことなんだと思う。思いつきり好意的に解釈してだけ
ね」

「合格、だったんだよな？」

ずいっと心配そうに顔を寄せるサイシャ。翡翠色の彼女の瞳が、
ルカンドを覗き込む。彼女に内心の動揺を伝えないように、細心の
注意を払ってルカンドは笑った。

「だと思っ。ギリギリ及第点ってところかな……僕自身としても反
省しなきゃいけないこともあるし」

「反省？」

「これ！」

そういつて額を見せるルカンドに、二人で笑いあう。

「じゃ私は片付けて来るから」

ベットから立ち上がるサイシャ。その彼女が途中で止まる。

「どうかした？ 忘れ物？」

「ああ、いや、その……」

歯切れの悪いサイシャに、ルカンドは首をかしげる。薬箱をもつ
たまま、ルカンドと床を交互に視線が行き来する。

「ありがとう……家族だつて、嬉しかった」

「……うん」

ルカンドの返事も聞かず、脱兎のごとく駆け去る彼女を見送って、
今一度月を見上げるルカンド。

「これでロクサーヌとの戦は回避された。後は火をつけるだけだ……」

燃え上がる大火が、西都を焼く。

自分の故郷を守るために、他人の故郷を焼く。罪の深さを自覚し
て、尚、仕方ないことなのだ。と割り切るためルカンドはベットに寝
転がった。

所詮、神ならぬ人の身では全てを救うことなどできはしないのだ
から。

獣道8（後書き）

> 獣道<編終了です。

次回はカルとシュセのお話になります。主にシュセがメインになり
そうな……。

西都征伐（未定）をお楽しみください。

西域の主1（前書き）

新しい章に入ります。カルとシュセがメインになります。ガドリリア側からは、ナルニア達が、活躍するかと思えます。

西域の主1

西都ベルガデイ。

ゴード暦でいうところの421年、病に倒れた時の国王ユーヴァの末弟と、長男の間で行われた皇位継承戦争の際に、戦乱を嫌った貴族達が西方大森林への移住を始めたことにより、この都市の歴史は始まる。

以来100年近く、西方貴族達は西方候主せいほうこうしゅの元に連携を図りながら、発展を続けてきた。

現在では、ロアヌキアを代表する4つの都市の一つとして数えられるほどに、その地位は重要なものがあつた。王都ロクサーヌ、東都ガドリア、南都ジェノヴァ、そして西都ベルガデイ。王都を中心に東西と南に位置するこれからの都市は、ロアヌキアを支える屋台骨だつた。

政治と経済の中心ロクサーヌ。鉄と武器のガドリア。国内最大の穀倉地帯を有するジェノヴァ。そして林業と畜産、軍事的価値でいえば、騎馬の産地であるベルガデイ。この4つが中心となり、ロアヌキアという一つの国の形を作っている。

磐石であらねばならないその4都市に、亀裂が入り始めたのは数年も前のことだつた。力のある貴族が4つの都市の後ろ盾となり、その都市の意見を王都に吸い上げ政治に反映させていく。それが共和制時代のメリットであり、持ちつ持たれつの関係が出来上がっていた、はずであつた。

その齒車が狂いだしたのは、スカルディアの女当主であるカルの母が賊の為に命を落としてからだつた。先立つて亡くなつた西方候主ネアス・ノイスターの死因の究明をしようとしているところに、その騒ぎが起こつた。

なし崩し的に、西方候主の地位はネアスの弟であるクレインの手

に渡り、今現在は息子達との共同統治の手に帰っていた。その地位に就くに際して、ヘルキオスに多大な賄賂を贈ったというのは、もはや隠しようのない事実といってよかった。

王都からの西方候主を認めるといふ辞令を手にしたクレインは、まずネアスに忠実だった者達の追放を始める。

自身におもねる者達を要職に就けると徐々に、その力をほかの貴族にまで回していった。彼が今もおその地位を保っていていられるのは、その臆病さによる。決して無理はしない。自身の勝ちが確実になるまでは決して表には出てこないのだ。

彼よりも力のある有力な貴族なども多数いたのだが、彼らはいつの間にかその周囲を固められ、身動きができなくなっていた。白蟻がゆっくりと、だが確実に家屋を侵食するように音もなくその力をいき渡せることになった。

西都を中心とした西域を支配するのに、西方候主の地位を奪つてから4年の長きをかけ、その基盤を確立していった。だが、その地位が確固たるものになると、その統治は悲惨を極めた。

若く美しい少女達を見つけ、自身の妻にすることなど日常茶飯事。その少女の花を摘み、飽きたら物のように捨てる。税は彼の気分しだいで重くも軽くもあり、収められた税収の3分の1は彼の懐に入っていた。

上がそれでは、下が乱れるのは当然といえた。

賊徒は跋扈し村を襲つても、西都の兵が守ってくれるはずもない。彼らを守るのは、クレイン達西方候主の一族と、それに従う貴族たちだけなのだから。

よりひどいのは、西都兵が村や町に居座ることだった。盗賊と変わらない彼らの所業は、当の盗賊達までもが目を潜めるものだった。食料の徴発は当然として、彼らの夜の暇を潰すために何人もの女たちが涙を飲んだ。

中には夫を持つ者も関係なく差し出されたのだから、その酷さが伺われる。

だがそれでも、クレインの政権はまだ安定をしていた。
隣組グリーネと呼ばれる相互監視機構、密告の推奨により反乱の芽を事前に摘み取ることに成功していたからだ。密告者には、密告したものの財産の一部が与えられる。そうなるのは濫発は、必至といえた。重苦しい暗雲が、西域全体を覆っているような空気の中、その主であるクレインは王都を注視していた。

西方候主クレインの屋敷。

長い机に一点のしみのないテーブルクロス。その上に並べられたのは、贅を凝らした料理の数々であった。庶民の年収に匹敵する高価なワイン。家が一軒建つほどの料理を前にして、三人の人間が議論を交わしていた。

「ヘルキオス殿亡き後、オウカ殿も所在不明と聞く。はてさて……」

禿げ上がった頭をぴしゃりと叩いて、クレインは困ったように笑う。今年で50を数えるクレイン・ノイシュタットは痩せた長身の男だった。顔に浮かべるのは、それが地顔であるかのように常に阿諛追従の笑みを含む笑顔。

「ネアス亡き後、西方候主の地位を引継ぎはしたが、まさかこんなに乱れてしまうとは」

彼としては楯衣飽食を貪ればそれでよかったのだが、王都の混乱は既に聞き及んでいた。

「困った困った」

少しも困っていないさそうな笑顔で、手にした芳醇な葡萄酒を飲み干す。

「父上は甘い！ なにをそんなに暢気に構えているのか！ 今すぐ王都に攻め込んで、その地位を奪えばよかるう！」

血気盛んに吠え立てるのは、クレインの長子トウメル。筋肉隆々とした大男は、外見そのままの性格をしていた。短く借り上げた髪

に、粗暴な口調。

「有力な諸侯は皆、動乱で倒れ、いまや国の実権を握っているのが俺より15も年下のガキだと!? 笑わせやがるじゃないか! 今こそ、ノイシユタツト家がその力を見せるとき! 王都を占領し、国に号令をかけましょう」

威勢は良いトウメルをクレインはたしなめる。

「では、どうやって王都の戦力を削るのだ? 策はあるのだろうか、トウメル」

「策など、俺の重装歩兵隊を前面に押し出して進軍すればそれでよかるう!」

トウメル歩兵軍。

その重厚な装備と、トウメル自身の猪突な性格もあって西域でもっとも強いと謳われる部隊だった。その数およそ1000を数える。数そして質ともに、他の軍団とは一線を画す。

「兄上は、強いですからなあ」

へらへらと笑ったのは、優男。細い目と皮肉げにつりあがった口元、金色の髪は貴族的な雰囲気をかもし出していた。身長はあまり高くなく、トウメルと比べれば、それは歴然として見えた。

「ガシユベル、愚弄するか!」

「いえいえ事実を言ったまです。確かに兄上の歩兵軍は精強でしょう。西域で適う者などおりますまい」

「わかつておるではないか!」

「ですが、王都につくまでの補給などどうするおつもりで?」

「現地徴発でよかるう!」

細い目の奥、猫がネズミをいたぶる様な残虐さを潜ませて、ガシユベルは笑った。

「今の西都に1000もの兵を賄える町などございますまい? 兄上の歩兵軍が散々荒らしまわったのですからな」

「ぐっ……あれは盗賊退治のためであって、戦略上致し方なかったのだ」

言い争いになればトウメルに勝ち目はない。脳みそまで筋肉でできているような単純な男なのだ。

「100程度の盗賊相手に、歩兵軍の大半を繰り出し、討ち取れたから良かったようなものの……その途上の村々は枯渴して餓死者まで出そうな勢いらしいですが」

うるさいっ！ と怒鳴って沈黙するトウメルを横目に、ガシユベルはクレインに向き直る。

「父上、ここはしばらく様子を見たほうがよろしゅうございませう」

「小ざかしい！ 貴様の魂胆は見え透いておるわ！」

盛大に鼻を鳴らすトウメルに、ガシユベルは微動だにしない微笑を向ける。

「魂胆とは？」

「フン、王都の動向を注視するとなれば、何かあった時ものを言うのは速度ではないか！ 貴様の騎馬隊の出番というわけだ！」

「ほう」

ガシユベルは心の中だけで感心した。本当にこの兄は、戦のことになると頭が回る。悪知恵といったほうがいいのか。自分に対する悪意にだけは敏感にできているらしい。ただし、それ以外には頭が回らないようだ。

「それは思い至りませんでしたな」

「フン！」

「ですが、先ほども申し上げたとおり、周辺の村に兄上の兵を配せる余裕はありません」

「確かに村にはない。だが、お前の管理する村では余裕があるう」

「兄上……」

この男はどこまで厚かましいのか、内心で毒づきガシユベルはため息をついた。

「糧秣を輸送するだけでも、かなりの労力を必要とします。それを兄上の兵士たちが事故なく行えますか？ 私の領内を荒らされるの

は御免こうむります」

「まあまあ、良いではないか」

兄弟二人の言い争いに歯止めをかけたのは、変わらぬ微笑のクレイン。

「何も急ぐ必要はない。我らが西都ヘルガデンに乱れはない。王都が徐々に崩れるのを待っても、また一興ではないか」

「父上は、野心がなさ過ぎる！」

「いい加減にしなされ兄上。言葉が過ぎますぞ」

「ふん！」

大股にその食堂を出て行くトウメルを、ガシユベルとクレインは見守った。

「ほっほっほ、どうにもトウメルは我慢が足らぬようじゃな」

禿げ上がった頭をぴしゃりと叩いてクレインは笑う。

「しかし兄上の言うことにも一理あります。熟した果実は切り取らねば、腐って落ちてしまいます。もしくは鳥獣どもの餌食となるか……」

「鳥獣どもの餌とするには、ちと惜しいな」

「ではなぜ？」

「ガシユベル……おそらくわしが亡き後、西都を継ぐのはお前になるうが、ひとつ覚えておかねばならぬぞ。臆病とは決して非難されるべきものではない。こんな乱世では特に、な」

高笑いを残して、クレインもまた食堂を去る。

「……機を逸することがなければ良いが」

一人呟いて、最後に残ったガシユベルも食堂を去った。後に残るのは、手をつけられない食事や飲みかけのワインだった。

誰もいなくなった食堂の片付けに、召使達が入ってくる。ガリガリにやせた少年少女。残飯を震える手でトレイに戻し、調理場へ戻っていく。彼らの背後にはお目付け役として、すぐ彼らを足蹴にする料理長らの姿もあった。

「あっ！」

足元がふらついて、転んだ少年が料理をこぼしてしまふ。

「てめえ！」

怒鳴りつけると同時に、蹴りが少年の背を襲う。

「ふざけやがって！ この、この！」

めちやくちやに蹴りまくり、少年の顔が腫れるのも構わず暴力を振るう。料理長の気分が収まったころにやっと少年は解放された。

陽光に照らされた緑は、みずみずしく輝き肌をなでる風は、温かい羽毛のように感じられる。麗らかな午後の日差しの中、不釣合いに荒々しく足を踏み鳴らしトウメルは自身の邸宅に戻っていた。木造で作られた広大な邸宅。戦を考えられた高い堀と、頑丈な門扉。護衛の兵士達は、彼自身が選んだ精鋭ぞろいだった。

「まったく、父上は何をお考えか！」

トウメルは不満をぶちまけるようにして荒々しく扉を開ける。召使に普段身につけている武器を投げ捨てるように渡すと、身軽な格好となってベットの上に身を投げ出した。

サイドテーブルに置かれたぶどう酒に手を伸ばし、まだ日も高いうちから水のような勢いでのどに流し込む。

トウメル・ノイシュタットはこの歳20台の半ばに達しようとしていた。正妻と何人かの側室を抱え、表面的には何不自由のない生活を送っているように見えた。

しかし彼の心の中は嵐のように荒れ狂っていた。弟であるガシユベルは領地の経営に成功を上げつつあり、父の覚えもめでたい。比べてトウメルはどうか。確かに武はある。馬の産地である西域において、歩兵で名を上げるほどに彼の武は高い。だが長兄という立場と武の力だけで、西方候主の地位を受け継げるかと、聞かれれば彼といえど否と答えるだろう。

領地の経営、そして王都との折衝がどうしても必要になってくる。その点、弟のガシユベルはその才能に秀でていた。あくまで兄と比

べての話だが、一応彼の領地では盗賊の出現も抑えられ、住民が餓死するようなこともない。

それに比べてトウメルの領地はといえば、村々に備蓄の食糧はなく、領民はその日を生きているのがやっとという有様だった。逃亡する民が後を立たず、経営を立て直すにもその能力も人材もなかった。「くそっ……」

せめて戦でもあれば彼の活躍の場も増えるのであるが、ここしばらく戦どころか反乱すらも起こりはしない。彼の不満はたまる一方だった。

「酒だっ！ もっともってこい！」

濁った瞳で召使をにらみつけ、走らせる。

「大若さま」

「なんだあ！」

酒を持って持ってきた召使に、怒鳴りつける。

「街に旅の者が来ているそうでございます。何でも舞踊もたしなむとか、一度呼び寄せてはいかがでございますよう？」

主の気分を押し量って、申し出る召使。

「フン、芸人どもか」

太い顎をさすって眉間にしわを寄せる。

「ならば家臣どもの家族も呼んでやれ」

「かしこまりました」

ぐいっつと酒瓶をそのまま口に当てると一気に飲み干す。

民に全く人気はない男だったが、部下には優しい男だった。娯楽の少ない西域で自身だけでなく兵士達の家族も招くのがその最たる例だ。兵士の結婚式には必ず贈り物をしたし、兵士の子供が生まれれば頼まれて名づけ親になったりもした。

そのため彼の歩兵は、トウメルの為に命がけで働き、彼もそれに良く応えた。

ゆえにトウメルの歩兵軍は強かった。

「少し、寝るぞ」

高いびきをかく主人にもかかわらず、トウメルの屋敷は鉄壁の守り呈していた。

トウメルの屋敷と並び西都でもっとも大きな屋敷のうちの一つに、ガシユベルの屋敷がある。トウメルの屋敷が武人の要塞なら、ガシユベルのは貴族らしい貴族の屋敷だった。

広々とした庭園に、季節ごとの花が咲き乱れ周囲を囲むのは簡易な鉄格子のみ。木材ではなく、敢えてレンガ造りでこしらえた邸宅は、王都の貴族庭園を意識してのことだ。

二頭立ての馬車を引かせるのは、馬の産地である西域でも稀有な巨大な馬。その馬が地面を踏みしだき、堂々たる門の前に到着すると、既にそこには、家宰以下召使いたちが待ち構えていた。

「おかえりなさいませ。ご主人様」
綺麗に揃ったその声に、軽く頷いてガシユベルは馬車から降り立つ。

「変わりないか？」
問う声は極々優しくだったがにも関わらず、家宰以下の召使い達は一樣に身を強ばらせた。

「お家の方は何も問題ございません」
「そうか」

細い眼の奥から注がれる視線に耐えかねて、家宰は深く頭を垂れたままで答えた。
「ほう……」

邸宅へ向けて歩き出したガシユベルの目が捉えたのは、未だ少女の域をでない召使いの一人。ショートに髪を切り揃え、髪に結んだリボンが愛らしい。

「新しく入った者か？」
声をかけられた少女は、頭を垂れたまま震える声で返事をした。

「は、はい。先日からご奉公に上がらせていただいています。カチユーシヤと申します」

「いくつだ？」

「先日13歳になりました」

「そうか、仕事は家宰に聞くといい」

ガシユベルの猫なで声に、バネ人形のように少女は返事を返す。

「はいっ！」

舌なめずりしそうなほど、口元を歪ませるとガシユベルは声もなく笑い、邸宅へ入る。

「愉しみが一つ増えたな」

小さく呟いた彼の声に気づいた家宰は、小さく震えた。

はやしたてる笛と太鼓の音に、一人の美女が炎を手玉に取り、空中に投げたかと思えば、その吐息で吹き消してみせる。美女は観客からの歓声に、完璧な笑顔で答えてみせた。その横では、小柄な少女が小剣を手に持ち、巨大な玉の上に乗っている。顔を向ける先には、壁を背にした目隠しをされた妖艶な女の姿。

少女の今にも玉から落ちそうな、ふらふらとした動作に観客の中には悲鳴をあげるものもいる。ふわりと、玉の上で少女が宙返りをしたかと思えば、その手にあつた小剣を目標に向かつて投げつけていた。思わず目をつぶる観客の女達や子供たち、一瞬の静寂のあとに、軽快な音と共に壁に突き立つ小剣の数は、三本を数えた。

最後に飾るのは、物悲しく心に響く音色。三本線サーシンという弦楽器の奏でるメロディに合わせて、少女が歌う。赤銅色の髪、花の咲くような笑顔で一礼すると、自然とざわついていた観衆が静かになる。

歌われるのは、恋の歌。

結ばれない恋の歌だった。

歌い終わった彼女に万雷の拍手が起こる。

わつと湧き上がる観衆に、旅の芸人の一座の主であるナルニアは満面の笑みで答えた。

「見事だった」

最初は酔いの回っていたトウメルだったが、旅芸人達の芸にその酔いも最後にはすっかり醒めてしまっていた。

片膝をついて、控えるナルニア達女ばかりの旅芸人達はトウメルの屋敷で芸の数々を見せていた。その技もさることながら、彼女ら一人一人の美しさが観衆の注目を引いた。

「ありがたき幸せ」

可憐な口を開いたのは、赤銅色の長い髪を腰のあたりでまとめたナルニアだった。一緒にいる他の者達が成熟して大華を咲かせる華花とすれば、ナルニアは未だに小さく蕾をつけたばかりといったところだ。しかしそれを補って余りある、可憐な笑顔。思わずこちらが微笑んでしまうような、可憐な笑顔が彼女にはあった。

「出来れば、紹介してはくれまいか？」

西域一帯では傲慢で鳴るトウメルだが、こと一芸に秀でた者に対しては驚くほどに真摯な態度となる。彼の兵士に蹂躪された村々の者が見れば、目を疑う光景だっただろう。

「はい。先程炎の芸を見せましたのが、エレガ」

「お見知りおきを」

茶色い髪を短くまとめた女が礼をする。見事なプロポジションと、強気を示すようなつり目。南方の血が混じっているのだろう。はちみつ色の肌に、薄く微笑む。

「玉乗りの芸を見せたのが、カーナ」

「初めまして、ごりようしゅさま！」

舌足らずなあいさつをしたのは、柔らかく思わず抱きしめてしまいたくなるような少女。健康的に焼けた肌と、無邪気に笑う彼女からは色気よりも、保護欲をかきたてられる。

「私たちの一座の、裏子ホルナーレクシュレア」

サーシンを奏で、カーナの小剣の的になった妖艶な美女が立ち上

がる。牡丹の花のように艶やかに、大輪の花を咲かせるクシュレアは、肌の露出した服を着飾っている。

「よしなに……」

弱々しいその口調からも、艶やかさは微塵も失わせない。

「そして私が、座長を務めます。ナルニアです」

「なんと、そなたがこの者達の長だと申すのか？」

「父と母より、今の地位を引き継ぎました。各別不思議なこともありません」

「それで、ご両親は？」

「先ごろなくなりました……理由は、聞いて下さいますな」

「悪かった……そうだ、お詫びも兼ねて、今晚晚餐にご招待しよう。田舎とはいえ、西域第一の都市、それなりのものを用意できると約束しよう」

「喜んで、ご領主様」

優雅に一礼するナルニア一行に、観衆から盛大な拍手が起こった。

輝きを放つのは赤地の旗に、白き盾とそれを囲む鶯の王冠。西の主を誇ったノイスター家の紋章は既に絶えたに等しい。晴れ渡る蒼天に翻るその紋章旗は、幼い日のシュセの記憶に焼け付いていた。

「シュセ？」

呼ばれた声に、幼い日の記憶から呼び戻される。

「失礼しました」

「どうかしたのか？」

問いかける湖水色の瞳には、心から彼女を案じる気配がある。

「いえ、つい懐かしくなりました」

くすりと笑う彼女に安堵の溜息を彼女の主はもらした。

「そうか」

思案するように、そらされる湖水色の視線を惜しいと僅かに感じつつ、シュセは口を開いた。

「西都は、緑水のベルガディと呼ばれることもあります。宝玉の口クサーヌ、鉄火のガドリア、南陽のジエノヴァと並ぶロアヌキアの支柱と言つて良いかと思ひます」

思案顔で頷くカルに、シュセは続ける。時刻は既に、夕刻を過ぎ一日の政務が終わつたあと、カル自身の勉学の時間だつた。

「王都からは、馬を乗り継いで5日。行軍の速度で言えば10日程になります。ジエノヴァは馬でも10日かかりますし、ガドリアに至つては山脈と荒地を迂回せねばなりませんので、30日は必要かと思積もつています。それに比すれば、近しい都市といえますね」
休むということを知らないカルに、シュセが紅茶を運んでいったことからシュセの講義となつた。

「特産と呼べるものは、果樹と馬ですね。もともと広大な森林を切り開いて作られた都市ですので、木材も挙げる事ができるかもしれませんが、広々とした放牧場で馬を飼いながら、生活するのが一般的です」

机に向かい書物を開いているカルと、傍らでそれを見守るシュセの姿は、彼らにあるしがらみさえなければ、あるいは姉弟きょうだいのようにみえたかもしれない。

「気候は、こちらと変わりないのか？」

「はい。大河ルプレからの恵みを享受している分、こちらよりも、霧が発生しやすい程度でしょうか」

「ありがとうございます、今日はここまでにするよ」

ふわりと、微笑むカルにシュセは優しく微笑んで黙礼する。最近のカルはよく笑うようになった。その安寧が何時までも続けばいいと、シュセは心の底から思つていた。

「はい、ではわたくしも下がらせていただきます」

部屋からシュセが出て行くと、カルは窓を開放つた。

ロクサーヌの第一の実力者となつてより、30日。カルは思いも

かけず平穩の中にいた。十貴族を中心とした共和制の崩壊は、ロクサーヌに深刻な傷跡を残していた。騒乱により街の方々に火が放たれ、街のあちらこちらに、家を失った浮浪者が姿をみせている。

それにもまして深刻なのは、これまでロクサーヌを中心にとまっていた、ロアヌキアを支える三都市の離反がそれだ。消極的、積極的の別はあるにしても、ロクサーヌと距離をおこうとしているのは、見て取れる。離反の影響は、人と物の流れとなつて現れる。

「ジエノヴァは関税をかけ、ベルガディは門扉を閉ざし、ガドリアに至つては領主の座が奪われた、か」

弱き者は、食い物にされる。先の騒乱でスカルディア家は確かにその精強さを、ロクサーヌに見せつけることになった。しかし武門のラストウーヌは、断絶に近く、経済を牛耳っていたケミリオ家は凋落の一途をたどっている。そしてロアヌキア中に名を知られたジエルノ家オウカに至つては行方不明。

ジェルノ家が後盾をしていたガドリアの主の座がすぐ変わったのは、あるいはその余波ではないかとカルは考えていた。経済に強いケミリオ家は、ジエノヴァと関係が強く、今回の関税はカルに対する牽制だった。

「前途は多難だな」

夜の風に豪華な金色の髪が揺れる。

ロクサーヌの兵力は落ち込み、表面的には大きな人材を次々と失った。

「だが、ここからだ」

握り締める拳に力が入る。

王として、この街に君臨してから日は浅い。だがカルは、その施政に手応えを感じ始めていた。

西域の主2

カルの施した貧民救済のための案は実にシンプルなものだった。金がないなら、つぎ込めばよい。

家がないなら、作ればよい。

乱暴な方法と取れなくもないが、カルにはヘリオンの命と引き換えに併合したラストウーヌ・ケミリオ・ヘルシオの財産と、主の意思を政策として実現する優秀な集団が存在した。

『飛翔の舞台は整った』

彼の残したその言葉は、決して大げさではない。

ヘリオンの残した推官達に加えてケミリオ・ヘルシオ家の推官を無傷で取り込んだカルの元には、一国を運営していくだけの推官が集っていたと言っても過言ではない。

特に経済を牛耳っていた、ケミリオ家の推官達を取り込めたのは大きい。

シュセやポーレにいるエルシドらを武官とするなら、今回取り込めたのは主に文官たちだ。成長著しいスカルディア生え抜きの文官達と、今回取り込んだ十貴族の推官達。スカルディア家の家臣団は急速な膨張を見せていた。

そんな彼らが、カルのロクサーヌ復興の意志を受けて提案したのが、戸籍の整理と一時の貸付だった。その同時並行作業……おそらく一家でやるうとすれば推官が過労死するであろうその作業を、カルの名の下に、スカルディア家の推官。更には、ミザーク、ジェルノに残った十貴族らにも号令をかけて一気に実施した。

その提案にミザーク家は逆らうはずもない。ジェルノ家に関しては、オウカの代理としてその孫を立てる形で賛成の意を表明した。

浮浪者には、貴族の敷地内に設置した仮宿舎を提供し仕事を斡旋する。主な仕事は、公共施設や家屋らの建築。家を失った人々に、家を建てさせる。その対価として、ほとんど金利をゼロの状態です

カルディア家から給与が支払われる。

返済は100年単位としたのだから、ほとんどスカルディアの財力で補ったといえなくもない。

同時に、今までは貴族のものでしかなかった戸籍の制度を平民まで広げていく。ある一定の資産を持つもの達……カルの場合家は持つ者を、戸籍に登録していく。税の適切な徴税と、兵力確保の一環としてだったが、激減した衛士の穴を埋めるという意味もあった。十貴族出身の衛士は、ほとんど先の騒乱で死ぬか、不法を咎められ処罰されるかしている。生き残っているのは以前の約半数だった。彼らの量的損失を、文官達は情報で補おうとした。事件が起こったなら、すぐに駆けつけられるようにしたのだ。どこの誰が事件に巻き込まれたとわかれば、その捜査もやりやすい。今までは、そこに誰が住んでいるのかさえわからない状態から、捜査をしなければならなかった衛士にしてみれば、それは大いなる前進であった。

同時に治安維持を目的とした彼らの範囲は、ロクサーヌ北側の貴族区から平民区まで含まれることになり、大規模な募集も行われることになった。

ヘルシオ、ケミリオ、ラストウーヌを併合したカルだからこそここまでの出資に耐えられた。他の何人もここまでの大規模な、ロクサーヌの復興は望み得なかっただろう。

いや復興というよりも、ロクサーヌはカルの下で生まれ変わろうとしていたのだ。

ロクサーヌの街の中、スカルディアの保有する領地の一片に、孤児達の宿舎がある。ぐるりと、高い煉瓦に囲まれたその敷地は、まるで雛を抱く親鳥のようにみえた。敷地の中の庭園では、大樹が降り注ぐ日差しを遮り、涼風は鎚の音が復興の歌を歌う街中を通り過る。

鬼ごっこだろうか、庭園の中を走りまわる子供らは楽しげだった。淡い緑の髪。短く整えられたその髪が、街を渡る風にふわりと揺れる。鎧姿ではなく、庶民が着るような動きやすさを重視した男物の服装。腰に差すのは銀細工も見事な細剣^{レイピア}。確かな足取りにはこの街を、カルを支えるのだという強い意志がこもっているようだ。

とりたてて美しいということもないが、意志の強そうな琥珀の瞳に、清楚で凜とした雰囲気は彼女の魅力を際立たせていた。

「あ、シュセ様だ！」

庭園で遊んでいた子供の一人が、彼女に気づいて歓声をあげる。

その声が伝染するように、庭園で遊んでいた子供らが次々と歓声を上げる。

「シュセさま」

呼びかけられる声に、形の良い唇を緩ませて彼女は笑いかけた。

「みなさんお元気でした？」

柔らかい彼女の口調に、孤児らが一斉に彼女の足元に縋りつく。

「元気だったよー！」

「クレゼブがイジメるのー！」

「遊んでただけだろ！」

子供たちの喧々囂々とした言い合いに、目を細めると嬉しそうに彼女は微笑んだ。

「仲良くしてくださいね。これからのロクサー又は、きっと皆さんの力が必要になってきます。みんなで、仲良く、ね？」

頭をなでられると、喧嘩をしていた男の子達は顔を赤らめ、黙って頷く。

「ガジイ照れてやんのー！」

「うるせー！」

またも始まる言い合い。

ここは、シュセがカルに特別に乞うて設立した孤児院だった。親を失い、働くにはまだ早過ぎる子供達を集めて設立した孤児院。名前を、ヘルシーラ孤児院と言う。元ヘルシオ家の所有していた別邸

を改築したものだ。」

「シュセ様、いらつしやっていたのですか！ 一声かけていただければ、お出迎えいたしましたものを！」

子供たちの歓声に、奥から出てきたのは元ラストウー又の使用人達だった。館の全焼から生き残った彼らに職を与え、孤児院の管理を大胆にも任せしたのは、シュセの考えだった。

人は食のみに生きるにあらず。

その手に仕事がないければ、生かされているだけになってしまう。その共同体への参加しているという意識こそが、誇りを産み、社会の中で生きるといふことになるのだ。

「いえ、私など……」

謙遜するシュセに、元ラストウー又の住人達は頭を垂れる。

「いえ、とんでもございません。我らはかつての主であるバトウの所業により、ロクサー又中から恨みを買っています。その私たちを救ってくださったシュセ様には、感謝をしてもしきれません」

子供たちは既に、遠くでまた遊びに興じている。

ロクサー又を焼いたバトウへの恨みは、本人が死んだ事も含めて、ラストウー又家全体にのしかかっていた。放っておけば、平民に殺されかねない彼らを保護したのが、シュセであった。武人、使用人含めてシュセの元に預かりを申し出たのだ。

武官を望む者には、近々創設されたシュセを筆頭とする近衛軍に組み込まれ、望まぬ者にはロクサー又の復興の、辛く忍耐強くしなければならぬ作業を命じた。

「何度感謝しても、したりないぐらいです」

涙さえ浮かべて感謝する使用人達に、シュセは頭をふる。

「わたくしは自分が正しいと、思ったことをしただけです。もし、わたくしに感謝をしてくださるなら……」

ふいに、視線を子供たちに向ける。

「あの子達の、親になってあげてください」

「……必ず、お約束いたします」

力強く頷く彼らに、シユセは満足そうに頷いた。

「陛下」

呼びかける声は最近、頭角を現し始めた文官のもの。

書類に埋もれるようにして決済を下していたカルは、書類の山から顔を上げた。

「フィフィか、何用だ？」

フィフィ・オルグ。ケミリオ家に仕えていた、その文官は珍しい女の推官だった。どっしりとした横幅に、ずんぐりとした体型は平民区にいる肝の据わった母親そのものだ。事実、三人の子供を持つ母親ではあるのだが。

いや、それがねえ……などと言いながら井戸端で会議をしていても全く違和感のない容姿に、藍色の瞳には慈愛の色がある。茶色の髪は後ろで一つにまとめ、化粧の気がなく専業主婦に見紛う格好をしているが、その経済に関する知識は、カルも舌を巻くものであった。

「本日の戸籍の進み具合と、今月かかった仮宿の出費の合計です。

細目は、二枚目に」

やることに無駄がなく、まるで料理を作るように、てきぱきと仕事を片付ける様子は厨房に立つ母親を思わせる。

「順調、だな」

「それはまあ、あれだけ人と金をつけてもらったのならねえ」

世間話をするような、呑気な口調。主を敬わないということ、ケミリオ家では冷遇されていたらしいが、スカルディア家に来て彼女は存分に羽を伸ばしているようだった。

「スカルディアの住み心地はどうだ？」

「かわいい坊やがたくさんいるから、私としては全く至れり尽くせりだわ」

豪快に笑う彼女に、カルも微苦笑を漏らす。

「それよりも、早くジェノヴァとの関税をとつぱらってもらいたいもんだねえ。さすがにいつまでも、あの額じゃ財政が厳しいよ」

まるで主婦が物価の上昇を嘆くような声で、愚痴をいう。

「善処しよう」

「ほんとに、頼んだよ陛下」

気安い声に、カルは薄く笑って答えた。

トウメルの屋敷で開かれた歓迎の宴が終わり、ナルニア達は与えられたひとつの部屋に集まっていた。

「悪くないもてなだったね」

エレガがベットの上で足を組み替えながら、宴の料理の品評をする。

「んー。噂ではひどい領主だつて話だったんですが」

ナルニアも意外なトウメルのもてなしに、首を傾げる。

「どちらにしても、やることは変わらないさ」

クシュレアの濡れた視線は、窓の外の夜を見据える。

「きつと、クシュレアお姉さまの色気に親切になったのですよー」
舌足らずな喋り方そのままに、愛らしく首を傾げるカーナにクシュレアがくすりと笑った。

「そうだといいけど。まあ、そんな柄じゃアなかったわね。どちらかと言えばナルニアに、好意をもってるみたいに思えたけど？」

ふふふ、と笑う口元からはいつそ毒々しいほどの笑が伺える。

「そうでした？ あまり手応えは感じませんでしたけど」
首をかしがるナルニアを、面白そうに見やってエレガが口を開いた。

「ふくん、最有力はナルニアか。じゃ私は弟の方を狙ってみるかな？」

エレガのつり上がった目の奥には、からかいの色。

「噂じゃ、弟のガシユベルってのは、相当の色情魔だって言っらし

「いじゃないか」

「私も面白い話を聞いたな、ガシユベルは幼い少女しか愛せない…
…変態だって」

クシユレアの笑みが、カーナに向く。

「へ、変態なのですか!？」

ナルニアの後ろに隠れようとするカーナをエレガが捕まえる。

「何されちゃうんだろうねえ……あんなことやこんなこと……」

カーナの体を捕まえたエレガの指先が、ツツつとカーナの肌を這い回る。

「あうあうー」

じゃれ合う二人を微笑ましく見ながら、ナルニアは結論をまとめる。

「もう少し、情報が必要みたいです。幸い領主の信用は得たみたいですし、しばらくベルガディで、活動をしましょう」

三人の頷くのを確かめると、ナルニアも力強く頷いた。

「戸籍のほうは、軌道に乗りつつあるようだな」

「はい、陛下」

続々と届けられる戸籍の名簿に、カルは目を通していった。

「貸付の件はどうだ？」

「まずまず、と言ったところでしょうか」

カルの質問に答えるのは、未だ若い推官の一人。フィフィがケミリオの推官の代表格とするなら、彼はスカルディア生え抜きの推官の代表だった。名をベルモンドという。ひよろりとした長身に、人のよさそうな、だがどこか気弱げな顔が乗っていた。

「まずまず？」

カルの凍て付くような湖水色の視線に、ベルモンドはよく耐えた。背中を流れる大量の冷や汗を無視しながら言葉を続ける。

「貸付をそのままに、逃亡を図ろうとする者が散見されます。対処をしようにも、絶対的に衛士の数が足りません」

「なにゆえ、そのようなことを……ほかの者の手前もある。許すわけにはいかぬな」

口内に広がる苦味にも似た感情。

「戦は、人のあらゆる物を奪います。命、財宝、真面目に生きる意志さえも、時に奪い去るものではないでしょうか。どうか彼らを責めないでください」

悲しげに告げるベルモンドはまぶたを伏せる。

「たとえ、戦乱がすべてを奪い去ろうとも、そこから這い上がって見せるのが、人の意志というものだろうか？ 間違いを犯したものを許しては、法の意味がない」

どちらが間違いというわけではない。だが、主の意志は絶対である。ベルモンドは、黙って頭をたれた。

この人は強い人だ。ベルモンドの胸中に広がるのは、絶望にも似た感情だった。

強き者は、得てして弱い者を理解しようとしなない。ヘリオンに見出されるまで、大貴族の間を泳ぎまわる小魚のような貴族の家に生まれたベルモンドには、カルがかつての大貴族と同じに見えた。

不幸のそこから這い上がる。それがどのような辛きことなのか、若く、そしてロクサーヌ中が羨むあの大貴族の少年は本当に理解をしているのだろうか。

その考えが胸の奥につかえた小骨のように、ベルモンドの脳裏の片隅にこびり付いて離れない。カルの前を辞去し、自分の仕事場に戻ってから彼の懊悩は続いた。

そのためだろうか。

「あつ」

だからだろうか、小柄なその影にぶつかったのは完全に彼の不注意だった。

「も、もうしわけありません！ 考え事をしていましたものですから！」

彼は元来気弱である。それが元で、ヘリオンに見出されるまで推官の下で働く、一人の書生に過ぎなかったのだが。バネ仕掛けの人のように、その場で深く謝罪をする。

「いえ、平気ですから」

思いのほか、下げた頭の上から降ってくる声は軽やか。まるで女性のような、声にふとベルモンドはわずか視線をあげた。

「シユ、シユセさま！」

見上げた先には、男物の軽易な服装に、唯一腰には銀細工も見事な細剣をつるす、王の幼少から傍近くに仕える白亜の騎士。女だてらに戦場を駆け回る戦乙女^{ヴァルキュリア}。スカルディアの権勢を武の力で支える女の騎士に、ベルモンドは萎縮した。

「あなたは……確か」

首をかしげてまじまじとベルモンドの顔を眺めるシユセ。その視線ひとつに、ベルモンドは戦々恐々としていた。今すぐにでもこの首が、彼女の腰に吊るされている細剣で飛ばされてしまうのではないか。そんな突拍子もない考えを、大真面目に考えてしまうほどに嫌な汗が背中を伝う。

カルの前で、大量の冷や汗をかいた後だからだろうか、なんだか目の前までぐらぐらしてた。

「ベルモンドさん……きゃ！」

シユセが彼の名前を言ったとほぼ同時、彼の目の前は真っ白に染め上げられ、すぐに暗転した。

まぶたの裏から差し込む、西日の赤。鼻につくのは、気持ちを安らかにしてくれる紅茶の香り。

「ん……」

背中に感じるのは、柔らかなベットの感触。そこまで思考が回転したと同時に、ベルモンドは文字通り跳ね起きた。

「ここはっ!」

「そんな急に起きては、体に毒ですよ。倒れたのですから」

やわらかく微笑むシュセが、紅茶を飲んでいた。椅子に腰掛け、優雅に紅茶を楽しむ様子は、戦乙女などよりも、深窓にたたずむ令嬢を思わせる。

「どうかしました?」

ぼんやりと、シュセを眺めていたベルモンドはその声で我に返る。

「……あの、私はどうして?」

聞くのも恐ろしい。だが聞かなくても尚、恐ろしい。ごくりと、ひとつ唾を飲み込んで、ベルモンドはあるかなしかの勇気を振り絞った。

「大変でしたよ。わたくしの目の前でいきなり、倒れられてしまうのですから。そんなにわたくしが恐ろしかったのですか?」

「い、いえ滅相もない!」

大仰に首を振り、ついでに手振りまでつけるベルモンドに、シュセは噴出した。

「冗談です。本気にしないでください」

「は、はあ……」

曖昧に頷くベルモンドに、シュセは立ち上がって自ら紅茶を煎れる。

「どうぞ」

柔らかい笑顔で微笑まれ、差し出される紅茶を自然に受け取ってから、彼はそれがいかに大それたことなのかを思い出した。

だが、立ち上る紅茶の香りは、魔性の香りのようにベルモンドを誘う。一口、口をつけてみた琥珀色の液体は、ほのかに甘く。彼の緊張の糸を、あっさりと断ち切った。

「仄かなるリメ、西域の紅茶ですね」

呟いたに等しいその声に、シュセが驚いたように反応した。

「お詳しいんですね」

「いえ、唯一の趣味でして……同僚からはよく馬鹿にされますが」

頭をかくベルモンドに、シュセが花の咲いたような笑顔を向ける。
「嬉しい。こちらでは紅茶の味がわかる人がいなくて、困っていましたから」

「は、はい」

年相応の少女の笑みに、ベルモンドは心の臓を掴まれた錯覚に陥った。

「それで」

騎士達だけでなく、推官の中でさえ彼女に崇拜に近い感情を向ける者が多数いるというのに、納得してしまった。

「何かお悩みだったのでしょうか？」

「はい、実は」

気づけばベルモンドは、カルとの意見の相違から、自身の生い立ち、感想まで洗いざらい話してしまっていた。

「そう、ですか」

西日を眺めるシュセの表情は、穏やかに瞳には悲しみの色があった。

「シュセさまはいかが、思えますか？」

興奮のままに問いかけてから、ベルモンドは自身の愚を悟った。

彼女は幼少から、王を見守ってきた言わばカルを育てたのは彼女自身。その彼女に向かって、今の彼を否定するようなことを口にしてしまった。

「カル様が、そんなことを……」

眩く様な言葉に、ベルモンドは身を縮める。

「わたくしは、あの方が強いとは決して思いません」

「そう、でしょうか？」

てつきり怒声が落ちてくるものばかり、覚悟していたベルモンドは、恐る恐る問い返す。

「ただ、強くあらねばならない。だから強くあろうと、しているのだと思います。きっと……」

深い悲しみをたたえたシュセの瞳に、ベルモンドは胸を締め付け

られるようだった。

西域の主3

星もない暗闇で、ごそりと動くものがある。長くこの地の住人達を監視し、今尚監視し続ける者だ。ロクサー又はもとより、国中に耳と目を持つジェルノ家のオウカは彼しか知らない別邸のひとつに身を潜めていた。

「東では、盗賊が成り上がったか」

面白くもなさそうに、呟くと次の知らせに目を走らせる。

「南は手はず通り、……北を今動かすは危険か」

一人呟く声にこたえるものはいない。だが、その瞳は、復讐に燃える悪鬼以上の、情念を宿していた。

「さて、問題は西……クレインの小僧。王都に楯突くならそれも良し。服従を選ぶのも、また利用できる。が、しかし静観だけは頂けぬな」

闇の底を這い回る得体の知れない生き物が、どろりとした笑みを浮かべるかのように、オウカは笑った。見るものの、背筋を寒くさせるような得体の知れない恐怖を煽る笑みだった。

「そして、小僧……」

憎憎しげに口にしたのは、王都で権勢を振るう少年。

「王を、名乗るか」

今はもはや、王都で本物の王に仕えたものなど数えるほどしかないであろう。そして、その座を追い落とした者は、もはやこの老人一人きり。

「小ざかしいわ」

民と貴族の人気を取り、その座に君臨してはいるが、未だその基盤は脆弱。いくらでも付け込む隙はある。半生をかけて追い落とし、たかつての主、兇王ヴェル。それに比べれば何ほどのことがあるう。「今は権勢を振るうが良い。すぐにその寝首搔いてくれようぞ」

暗い情熱に突き動かされ、オウカは晒う。

「翁」

ノックもなしに、入ってくる異国の男。勇士ラクシユを殺した男
アズ。

「何事だ」

不快感を露にしながら、問いかける雇い主に、アズは書簡を投げ
てよこす。

「ご苦労」

それを眺めたオウカの瞳が見開かれる。

「東の賊徒め……打つ手が早いではないか」
ぎり、つとかみ締める。

東都の賊、王都に侵入。目的は、王との接近。

簡潔に書かれたその内容に、オウカは目をむかざるを得ない。今
王都のカルは、身動きが取れない状態である。すべての方面に敵が
存在し、兵を用いるか、さもなければ各方面に顔の効く人材を使わね
ばならない。たとえば、オウカ・ジェルノのような。

だがこれで、東の包囲は崩れた。鉄火のガドリアがカルの権勢に
従うなら、豊富な鉄がロクサーヌに流れ込む。それだけではない。

良質な鉄は、兵士達の武器となり、すなわち王の力となる。

「賊の始末をするか、否」

口にした可能性の効率の悪さを考えて、削除する。

「このわしの、頭を下げしてみるか」

低く晒うオウカの口元は、憎悪が笑みの形を取らせているだけで
あった。

「じゃが、それには手土産が必要か」

オウカの視線が向いたのは、西都の情勢を知らせる便箋。

「クレインの小僧、いつかの礼をもらいうけようか」

兄を殺してその地位を奪ったクレイン。そしてその時、後ろ盾と
なったオウカ。かつて政敵を始末するため手を取り合った二人だが、
そこに友情などは存在しない。

あるのはただ、利害の一致というきわめて打算的なもの。

「しかし、東か……」

元東都の領主ヘルベル・ジェルグ。そのジェルグ家は長年オウカが後ろ盾となっていた家だった。それゆえにオウカの目や耳を近くに忍ばせるにも都合が良かったのだが……。

オウカの耳目達もヘルベルの破滅とともに姿をくらましてしまったようだった。ジェルノ家の財政に打撃を与えるほどではないにしろ、東の陥落はオウカには気に食わなかった。東からの鉄は、オウカの懐を潤していたからだ。潤沢な財を使い、国中に監視の目を行き渡らせてきたオウカにとって、東で成り上がった盗賊は目障りな存在ではあった。

オウカ自身が姿を見せないことによって、日ごとにジェルノ家に流れ込む財にも陰りが見え始めている。

「やはり、表にでねばならぬか」

粘りつくような笑みを浮かべて、オウカは低く笑った。

草原を流れる風は、波立つ草を揺らしながら東から西へと吹き抜けていく。空にのんびりと浮かぶ雲は、急ぎ足に駆け去っていく。

大ヘルプレの恵みを受けた小川は、陽光に煌く水しぶきをはねさせていた。初夏のベルガデイは瑞々しい新緑の季節を迎えていた。花咲く春、木々が色づく秋、木枯らしのなく冬。それぞれに見所があるが、西域で最も美しい季節は、夏の新緑の季節だった。

ベルガデイの所々には、夏の厳しい日差しを避ける新緑の葉が茂り、大小の噴水が目を楽ませる。そんな中を、ナルニアとエレガは歩いていく。手荷物のは、買い物用の袋。中身は芸に必要な道具や、旅に必要な携帯食料などだった。

「やっぱり値段が高いですね」

ため息混じりに袋の中身を確かめるナルニアに、エレガは豪快に笑った。

「仕方ないさ。どこもかしこも景気が悪いんだ」

肩をすくめて気にしない様子の仲間を、じと目で睨んでナルニアは小さく文句を言った。

「エレガさんの食料が一番幅を利かせてるんですけどね」

「細かいこと気にするなよ。座長！」

座長を強調し、程よく引き締まった見事なプロポーションを見せ付けるように胸を張る。

「食べ物がなくちゃいざって時に力がでないだろう？ 美容と健康のために食事は大事だよ」

短くまとめた赤茶色の髪に、蜂蜜色の肌は健康そのもの。これ以上どこをどう健康になるのかと、ナルニアはため息をつく。

「まあ、そういうことにしておきますか」

「そういうことにしておきなさい」

からりと、笑う様子は彼女の竹を割ったようなさっぱりとした性格そのままだった。

「それにしても……」

眉をひそめるナルニアに、笑顔をかき消してエレガが同意する。

「まあ、ね。辛気臭いったらありやしない」

ナルニア達が歩いているのは、ベルガデイの大通り。人と物の行きかう大動脈だ。西域の中心都市ということもあり、活気があるのは当然だったが、少しわき道にそれよう物なら、そこは地べたに座り込み、虚ろな瞳で空を見上げる者達の巣窟だった。子供、大人、乞食のような真似をする者はまだマシな方で、地面に敷いた筵の上で微動だにしないものまでいる。

ガドリアだってこれほどじゃなかった。その思いをナルニアは心の中で呟いた。

もてる者と持たざるものの乖離。人口が多い分、ベルガデイの方がその差が顕著に現れるのだろうか。そんなことを考えて歩いていると、エレガがドンと彼女の肩を叩く。

「好きな男のことでも考えてたのかい？ ポーっとしちやって」

「そ、そんなんじゃないですよ！」

「ふう〜ん……どうだか」

いいながら、ナルニアの視線を追ってため息をつく。

「わかっていると思うけどね、余計な事は考えないことだよ。仕事は仕事、それ以外は些事だ」

姉代わりのエレガの言葉に、ナルニアは頷いた。

「わかっています。けれど……」

ナルニアの瞳に移ったのは、裏路地から顔を覗かせた幼い二人の子供。あるいは兄弟かもしれない。汚れ果てて、男か女かもわからないようなその二人に、潤んだ瞳を向ける。

「ナルニア」

警句をこめたエレガの言葉。釣りあがった目は、遙か西に住むという狩猟民族の獰猛な血を伺わせた。

「ちよつとだけ、ねエレガさん！」

手を合わせて頼むナルニアに、目を怒らしていたエレガがため息をつく。

「……クシュレアには内緒だよ。あいつが怒ると面倒なんだから」

「ありがとう！」

ぎゅつと抱きついてくるナルニアに、照れながらも、その背を後押しする。

ナルニアは買い物物の袋の中から、干し肉を二つ取り出すとそれを持って、子供の方に走っていく。

「まったく……」

甘いんだから、と口元を緩める。

「ま、だから私達はあんたが好きなんだけどさ」

ナルニアに聞こえないように小さく呟いて、エレガは荷物を抱えなおした。

軽快に駆け寄るナルニアに、二人の子供は逃げようとし、小さい子供がつかまらずに転んでしまう。その子を庇うように、前に出たもう一人の子供。その様子にナルニアは目を細めた。勝手に兄妹なのだと判断し、その姿に好感を覚える。

「あ、怪しい者じゃないよ」

放って置けなかったとはいえ、何も考えないでここまで走ってきてしまった自分にナルニアは、いまさらになって焦った。二人のうち、年長の子供の瞳に宿るのは敵意。泣き出しそうな小さい方を庇いながら、必死でナルニアを睨みつける。

「参ったなあ……うづくん」

話も聞いてもらえそうにない様子に、ナルニアは唸り、名案を思いついたとばかりに、手を叩く。

「はいはい、ここにいるのは稀代の魔法使いナルニア！ これより不思議な魔法をお見せしましょう！」

大見得を切って差し出されたのはナルニアの右手。

「うづくん！」

いかにも大げさに力を込めるとブルブルと震えだすその右手。あまりにも大げさなその様子に、二人の子供の視線が自然と集まる。

「えい！」

開いたその手から、飛び出すのは一輪の花。

「すごい！ すごいよおにいちゃん！」

驚いて固まる兄と違って、今まで泣き出しそうだった小さい方はナルニアの取り出した綺麗な花に、夢中になっていた。ナルニアに駆け寄りそうになる小さな方を、兄の方が制止する。

「お、おまえなんだ!？」

「ん〜？ せつかくの口上聞いてなかったの？ 魔法使いのナルニアだってば」

やさしく微笑むナルニアに、年長の兄は尚厳しい視線を向ける。

「うそだ！ 魔法使いなんているもんか！」

頑なに拒む兄と、魔法使いと名乗るナルニアを、小さい方は心配そうに見比べていた。

「ん〜それじゃ、こんなのはいかがかな？」

両手を兄の前にかざすと、そのまま両手を重ねる。

「うづくん……うん、うん！」

またもや大げさに唸るナルニア。小さい子は既にその動作に夢中になっている、目を輝かせて見入る。兄の方も怪訝な視線を向けてナルニアを見守る。

「どうだ！」

重ねた手を開くころには、その手の中には、先ほどエレガから失敬した干し肉があった。

「どうぞ」

差し出される干し肉と、目の前のナルニアを見比べる二人。につきりと笑ったままのナルニアに、小さい方が手を伸ばそうとして、兄の制止の声に動きを止める。

「セリア！」

びくりと止まる動き、だが視線は干し肉と兄との間を行き来する。困ったようにため息をついて、ナルニアは一口干し肉をかじってみせる。

「おいひいよ？」

口の中で干し肉を噛みながら、二人に差し出す。

なおも受け取らない二人に、ナルニアはため息をつく。

「魔法使いナルニアは、もういかなきゃいけません。今日のところはこれでさようなら！」

パンと、猫だましの要領で兄の前で手を叩く。兄の方が眼を瞑ると同時に、脱兎のごとく駆け出した。

「あ、う、うそつきめ！」

兄の罵声を背中で受け止め、裏路地から軽快に走り去る。

「く、くそ！ 馬鹿にしゃがって！」

憤る兄に、セリアと呼ばれた子供が小さく声をかける。

「お兄ちゃん……コレ」

「え、なんで」

「魔法使いさんが、渡してくれたよ」

セリアの手の中には、二人分の干し肉があった。

「食べていいかな……？」

「ちくしょう……なんなんだ」

胸の苦しみを覚え、兄の方は地べたに座り込んだ。

「ねえ、お兄ちゃん」

頷く兄を確認するとセリアは一心に干し肉を頬張った。

「おや、随分遅いお帰りだったね」

腕を組み壁に背を預けるその姿さえ、匂い立つ様な妖艶さをかもしだしている。

「なんだい、クシュレア。出迎えとは気が利いてるじゃないの」

軽く肩を叩くエレガに、薄い笑みを返してクシュレアはナルニアに向き直る。

「ナルニア、領主がお呼びだよ。貴女だけ」

ぞくりとその背に雷が走ったように感じ、ナルニアは一度自身の腕を抱きしめた。

「わかってるね？」

クシュレアの肩に置かれた手が、自身を押しつぶす重みを持つように錯覚する。だが、ナルニアは目を一度閉じて、胸に溜まった思いを吐き出す。

「……大丈夫です」

にこりと、頷いてなんでもないという風に自身を納得させる。

「着替え、手伝っていただけです？」

クシュレアに向かって微笑むと、一人部屋に向かって歩き出した。普段着ている服より、上等な物を身にまとい、それとなく露出の多いものを選んでクシュレアはナルニアを着飾る。素のままの彼女の美しさを損なわない程度の薄化粧もほどこし、最後の仕上げには魅惑の香。男を誘惑することを狙った女の戦装束けしよは、クシュレアの最も得意とするところだった。

「それじゃ行ってきますね」

いつもと変わらぬ笑顔で、クシユレアとエレガに礼を言うと一人領主トウメルの元に向かう。

隣から聞こえた舌打ちの声に、クシユレアは気だるげに振り返る。

「何か不満かい？ エレガ」

「……別に、不満なんてないさ。ただ、気に入らないだけ」

「何が？」

「いくら頭が切れるって言ってもまだ十六歳オトナにもならない子供を、何が悲しくて男の欲望の餌食に差し出さなきゃいけないのさ。それを命じるルカンドも、ルカンドだ。ナルニアの気持ちだって知らないわけじゃないんだろうに！」

「……今更、だね」

「わかってるよ」

それが役回り、頭も力もない私達は肢体カラダを使うしかないことぐらい。心の中で毒ついてエレガは個室に戻る。

「街の様子を探るんだろう？」

「やってらんないよ。後は適当にやっておいてちょうだいな！」

買ってきた酒の瓶を開けるエレガに、クシユレアはため息をついた。

「やれやれ、甘いんだから」

氷のように冷たく笑い、優雅に髪を掻きあげると、彼女はカーナを呼びに部屋に戻った。

「カーナ、エレガが不貞腐れちゃったから、お仕事行こうか」

慈母のように優しく微笑むと、カーナの手をとって歩き出す。

憎しみや、苛立ちをすぐ表に出すエレガを少し羨ましく思いながらクシユレアはカーナの手を引く。

「ケジメは取ってもらわなきゃ、ねえ」

間近にいたカーナで聞き取れない程小さな決意。

仲間を傷つける者は、何人たりとも許しては置かない。その責めは、自信の身をもって味わいつくしてもらわねばならない。

深く、深く、憎悪を胸の奥底に沈めながら、クシユレアは嫣然と

微笑んだ。

西都ベルガデイの中でも、特に目を引くトウメルの屋敷。武張った作りの屋敷は、徹頭徹尾戦を考えて作られていた。虚飾を剥ぎ取り、庭に植えるのは、華麗さはなくとも飢えを凌げる果物のなる木々。延焼を防ぐため、木製の壁の表面には漆を塗り、敵を早くから発見できるようにと組まれた櫓は、西都一の高さを誇る。

万が一的に攻め込まれたときのために、館の中は迷路のような構造になっており、案内なしでは大人ですら迷ってしまうことも多々ある。特に、トウメル自身の住む本館については、その趣が強い。ナルニア達の泊まっている来客用の建物は、屋敷の東側。別館として作ってあった。

そこから歩いて、本館まで行き、ナルニアはトウメルへの面談を請う。

「やあやあ、お話は聞いておりますよ。さあさあこちらへ」
人の良さそうな老人に案内され、本館の奥へと進んでいく。ぎしぎしと鳴る床を越え、トウメルの寝室へと案内される。

「こちらです」
音もなく下がる老人を気にする余裕もなく、ナルニアはトウメルの部屋の重厚な扉を見上げる。

「……ナルニアです。お呼びにより、参上しました」
勇を振り絞って声を上げた。

「おう、入れ入れ！」
太い声とともに、扉が開かれる。

「よく来てくれた」
抱きつかんばかりに、歓迎するトウメルに、僅かにナルニアは気後れする。

「失礼します」

部屋に入ると同時、彼女の後ろで扉が閉められる。その音に、覚悟を決める。

「まずはこれを、見てくれい」

そう言っ指し示されたのは、一振りの短刀。

「はあ……」

ナルニアは疑問符を心の中に浮かべ、受け取る。トウメルの厳めしい視線を受けつつ、宝玉で装飾された鞘を払う。顕れたのは、重厚な光を放つ見事な刀身。薄く引き延ばされた玉鋼を、何度も気が遠くなるほどに打ちのばし、折り重ねて造られた芸術品。

「綺麗、ですね」

ナルニアの感嘆の吐息と共に咳かれる声に、トウメルは大きく頷いた。

「うむ！」

組んでいた腕を解き、ナルニアの華奢な肩を掴む。

「そなたに進呈しよう」

尋常でないその握力に、ナルニアは眉を潜める。

「あ、ありがとうございます」

ナルニアの表情が冴えない事に、首を傾げるとトウメルは厳めしい顔を、尚一層厳めしくした。

「不満ならばそう言え！」

「そうではなくて、その」

「なんだ？」

「痛い、です」

一瞬だけ疑問の表情を浮かべ、次いで慌ててその手を離す。

「おお、すまぬ。つい嬉しくてな」

肩を押し潰されそうな、圧力から解放され一息つくるとナルニアはトウメルの表情を窺う。そこには純粹に、自身の好意が受け入れられた喜びが見えた。

「こんな高価そうな物頂いてもよろしいのですか？」

「この前の技の対価としては、妥当かと思うが」

大真面目でそういうトウメルに、ナルニアの方が困惑する。

「いえ、滅相もない。泊まるところをご提供頂いたのみならず、こんなものまでもらっては……」

「うむ……ではこうしよう。もう一度あの歌を聞かせてもらいたい。その代金として受け取ってはもらえないだろうか？」

「歌ですか？」

重々しく頷くトウメルに、ナルニアは困惑しながらも頷いた。

西域の主4

「やれやれ、大変なことになった」

ロクサーヌにいくつかある武具を扱う店の奥でクルドブーツは頭を抱えていた。数日前にガドリアからロクサーヌに戻っていた彼の元に、つい先ほど知らせが届いたのだ。

“王に繋ぎをつける”

荒地の魔女からの無理難題。毎度のことながら、唐突に突拍子もないことを言う。

「とはいえ、やらねばこの首が危ない」

太った首をなでつつ、王城に出入りしている商人を調べ上げることからはじめた。将を射んとせば、まず馬を射よ。その言葉どおり、まずは騎士……それも表立った活躍をしていないのが良い。このような時商人達の横の繋がりは強い。

「テイゼン、テイゼンはいるか？」

部屋の外に呼ばれる声に、ロクサーヌの店を任せている番頭が顔を出す。

「なんでしよう、大旦那」

「今度、王城に武器を入れたいと思うんだが……」
「なるほどなるほど」

年老いた番頭は、クルドブーツが最後まで喋る前に、その話をさえぎった。

「わかりました。城に出入りしている商人ですね？」

「そういうことだ」

「お任せを」

腰の曲がった老番頭が部屋から退出するのを見計らって、クルドブーツはため息をつく。

「やれやれ、痩せてしまいそうだ」

一言愚痴ると、ため息をつき、仕事もに戻っていった。

ロクサーヌの北区、十字に走る大通りを北に行つたところに、かつての王城跡がある。お椀をひっくりかえしたような小高い丘の上に、今は石垣がわずかに残る城の跡がある。かつては王の庭として、丘からその下の広場に至るまで、絢爛たる王城が築かれていた場所だった。

丘の上は広く、かつての王城の巨大さを伺わせる。庭園だった場所は荒れ果て、雑草が生い茂り、桜の大樹が街を見下ろすように残っているきり。大樹が見下ろす丘の下は、王の民が王の声を聞くための、広場だった。かつてはロクサーヌ中の人が集つたその場所で、今再び人が集っていた。

共和制時代になつてからは、立ち入りすら禁じられた王城跡。その場所を開放したカルは、広く人を集めやすいその場所で、静かに椅子に腰掛けて眼前の光景を見据えていた。

冷やかな湖水色の瞳が映し出すのは、処刑の景色。

法務官トウールの判決文は、聴衆に向けてこれから処刑される者の犯した罪状を述べていた。頂垂れる囚人もいれば、泣き喚く囚人もいる。目を背けたくなるその光景から、カルは一時も目を話さなかった。カルに向かつて命乞いをする者、呪いの言葉を浴びせる者、全てを見下ろし悠然と玉座に座る。

囚人達に向かつて振り下ろされる処刑台の斧。

「これにより、処刑は終わった。ロクサーヌを蝕む、悪は駆逐されたのだ！」

法務官トウールの言葉に、集まつた市民からは歓声上がる。その歓声を背に、カルは自身の住処であるスカルディアの屋敷へと足を向けた。

「……お疲れではありませんか？ 陛下」

「二人の時は、カルで良い」

馬車に乗り込むカルに同乗したのは、近々近衛の長を任せられることになったシュセ。豪奢な黄金色の髪を鬱陶しそうに、掻き揚げでカルは一つため息をついた。

「金を盗んだ程度で、処刑……やりすぎだと思っか？」

今日処刑されたのは、王からの貸付金を持ち逃げした罪で、捕らえられた者だった。本来ならば鞭打ちの刑で済ます所を、死刑としたのは、見せしめの意味を持たせるためだった。

荒んだロクサーヌに、再び潤いをもたらす為、それを蝕むものは厳罰を持って処す。その決意の表れとして、カルは罪人の処刑に踏み切った。

「民もきつと納得してくれましょう」

法で民を治める国ならば、そのようなことはできない。あくまで人が治める国だからこそ、それができるのだ。法の整備を進めながら、あるいはその真逆のことをする。一つ一つが手探りで、国とその土台を作っていくかねばならないカルにとって、どれもが神経をすり減らすような作業に他ならない。

シュセの言葉に、そうか、とだけ頷いてカルは流れる街の風景に目を転じる。

「……私はどこまで己が手を汚せば良いのかな？」

「カル様……」

「冗談だ、気にするな」

美姫すら酔わす口元に、自嘲の笑みを浮かべてカルは目を閉じた。そんな様子のカルに、シュセは唇をかみ締める。

「止まってなどいられない。私も、お前も。そうだろう？」

「御意」

スカルディアの屋敷へ向かう馬車は復興著しい街中を、静かに通り過ぎていった。

ロクサーヌという都市は、周囲を白い外壁に囲まれた円形の都市だ。東西南北を貫く大通りを中心として計画された人工都市。この都市の歴史がすなわち王国ロクスキアの歴史そのものといっても過言ではないほど、常に国の中枢として位置されてきた。

東西を走る大通りを境として、北が貴族達の住まう北区、南は平民と貧民達が住まう南区がある。北に向かうにつれてやや、高くなる地形をそのまま利用して計画された街だった。街のもっとも標高の高い場所には今は廃墟となった王城の後が存在し、街の北区で最も広い敷地を有している。

一方南に目を向ければ、東西を走る大通りから南へ下るに連れて、その貧富の差が顕著になる。最も貴族に近い位置に、家々を構えるのは商人達である。人通りの多い大通り沿いに、こぞって店を立て、自宅を立てる。次に来るのが職人や、一定の収入を持った平民達だ。スフツラ集合住宅にすみ暮らす一人者や、家族を養う者、少し豊かになれば自分だけの邸宅を持つ者もいる。

そして最後に、貧民層と呼ばれる最も壁沿いに住む者たちの住居が来る。崩れかけた家屋に住み暮らし、乞食の真似事をする者、どうやって生活しているかわからない者など不特定多数の者がこの地域に住んでいた。ゆえに、ロクサーヌの人口を調べる上で、彼らの存在が大きく影響を及ぼす。

「平民区までの戸籍登録作業は終わったようだな」
「ファイの差し出した書類に、目を通しながらカルは執務を続ける。」

「戸籍の登録を条件に、貸付をさせたのがよかったようだね」

「続いて貧民区とされる地域についても、実施せよ」

「正気かい？」

「何か問題でも？」

肩をすくめ、ため息をつくファイはカルの湖水色の瞳を見返す。

「大有りだよ。またロクサー又で血を流すつもりかい？ 何の試算もなくあんなところの調査に出かけた日には命がいくつあっても足りはしない。陛下はご存じないかもしれないけどね、あそこはロクサー又でもかなり危険な地域なんだ」

共和政時代において、ロクサー又外壁の城門は常に開かれていたといっても過言ではない。誰に対しても、犯罪者や異教徒においてすら、その貴賤を問わず開かれていた。

「開かれていたって言えば聞こえはいいが、実際衛士が仕事をサボってたんだろうけどさ」

ファイフィの辛らつな評価にも、一理ある。

「失礼します」

扉をたたく音とともに、カルの執務室に入室してきたのは、白亜の鎧姿に身を固めたシュセの姿。その物々しい気配に、ファイフィが息を呑む。

「陛下。私兵300いつでも出れます」

一度頷くと、カルはファイフィに視線を向ける。

「これよりシュセ率いる私兵300を調査に向かう人員の護衛につける。平行して迷路が如き貧民区の調査を進めるものとする。異存はあるか？」

「……大した度胸だ。ないよ」

背に冷や汗を流しながらファイフィは頷いた。カルはロクサー又の全ての闇に光を当てるつもりだ。そう直感し、ファイフィは小さく身震いした。

「これは戦だ。ファイフィ」

鋭く冷たいカルの視線、強大な敵に挑む時のように一片の迷いもないそれが、ファイフィを射抜く。

「ロクサー又に、光を」

「御意のままに」

年若くても、この者は王なのだ。ファイフィは自然に頭を下げていた。

「クソが！」

罵倒とともに振り下ろされる剣の一撃を、細剣で受け流し敵の首を刎ねる。吹き出る血飛沫が、白亜の鎧に赤い斑点を刻んでいく。

「王命により」

振るわれる剣は、疾風の如き速さで。

「あなた達を捕縛します。逆らえば容赦はいたしません」
発する声は凜として気高い。

「ふざけんじゃねえ！」

街に救う賊徒を、スカルディア私兵を率いたシュセは駆逐していた。裏路地の狭い道を、私兵300を持ってシュセは一区画ごとに掃討して行った。暗く日の差し込まない、じめじめとした路地裏。

何層にも無計画に増改築が進められ、迷路のごとくなった小道。倒壊した建物に、そこを根城とする盗賊、賊徒の類。

「おとなしく縛につけ！」

衛士の声に、盗賊達が動揺するのがわかる。

「に、にげろ！」

一人が逃げ出すと、後は雪崩を打つように敗走していく盗賊たち。その背を配下の私兵に追わせ、シュセは推官達に視線を移す。

「これで、概ね十三区は安定すると思います」

シュセと推官達はロクサーヌの貧民区を管理するため、その区域を1〜20の区域に分けた。数字が挙がっていくにつれて、ロクサーヌの中でも無法地帯に近く手のつけられない盗賊が巢食う場所となっている。その半分を過ぎた頃、シュセは推官に都市の再編計画を練ってもらうため、いまだ生ぬるい血の流れる貧民区の一角に文官である彼らを招いた。

「陛下の望みは、新たな秩序をロクサーヌにもたらすこと。そのためには、あなた方の力がぜひとも必要なのです」

血塗れた剣を払い、真摯に推官に頭を下げるシュセ。あるものは、

その誠実さに、またある者はその血の生々しさに、頷いた。

「これより、さらにわたくしは前進いたします。衛士の方が護衛をしていただきますので、是非丹念な調査を」

きびすを返すシユセを、文官たちは声もだせずに見送った。

「クラウゼ、ユイルイ。各々2個班を連れて左右の道を探れ！」

「ハッ！」

軍の組織は、1組^{ユセ}5人を最小単位として、5組^{ユセ}で班。さらに、通常12班^{ユセ}で隊といった。定員は300名をもつてあてる。基本どおり組まれた隊には、各班ごとに班長、組ごとに組長がいる。

一隊を率いるということは、300人の将となることを示していた。隊を5つ束ねたものが中隊^{ミ・ユセ}、隊を10束ねたものが大隊^{ラ・ユセ}となる。

この軍制はかつての王ユークヴァの時代からの伝統であった。副将格のクラウゼとユイルイに左右に分かれた道を進ませ、シユセ自身はもつとも困難が予想される本道を行く。ここまで被害らしい被害も出てはいないが、この先も同じだという保証はない。

慎重にシユセはロクサーヌの内患を取り除いていった。

「おっしゃ！ 俺たちの女神様にいいとこ見せるチャンスだ！ 気張れよ！」

「品がないぞクラウゼ、焦れば賊といえども足元をすくわれるぞ！」
シユセの指示に従い、クラウゼとユイルイが歩みを進めていく。

クラウゼ・ジュネはこの年28を迎える若者。元々傭兵で、カルのスカルディーナでの募集に応じ頭角を現してきた若手の人材だった。ユイルイ・ロウヘイアは25歳ながらもスカルディアに心を寄せる中小貴族。武芸に長けた貴重な貴族の一人だった。

2個班50名をそれぞれ率いて、示された区画の隅々まで風潰しに賊を狩りだしていくさまは、忠実な獵犬そのものだった。狭い道から数の圧でもって、賊を本道にいぶり出す。その後は本道に控えるシユセの餌食となるという具合に、賊狩りは順調に進んでいた。

掃討戦を始めて僅かの間^{区画}に20に分けた区画の19までを制圧したのは、一つにシユセの戦術眼の正しさと、奇襲的な速度にあった。

カルとシュセが、ロクサーヌの貧民区の“大掃除”をいつ計画したのか誰にも打ち明けないまま、この作戦を行ったのには一つには情報の漏洩を防ぐ目的があった。

大々的にするとなれば、当然周囲から情報は自然と漏れていく。それを防ぐために、当初は市内の巡邏という名目で、私兵300を連れ出したのだ。

そして遂に、目的の最後の区画。20区画目に到達する。

「これはっ……」

そう言ったきり言葉を飲み込むクラウゼ。ユイルイも二の句を継げずに、黙ってその光景を見守っている。

「ここは、どのような場所なのですか？」

途中捕虜にした賊に尋問しながら、シュセ率いる300の私兵隊は貧民区を進んでいく。

「なんだ、アンタここがどんな場所が知らないで来たのか」

ひひ、と下品に笑いながら捕虜はシュセを睨む。

「ここいらじゃ、楽園って呼ばれてるぜ」

「楽園……」

シュセ達の眼に映るその光景は、ロクサーヌ最大の無法地帯と呼ばれるはずの、その場所は平和に過ぎた。ここに来る間必ずといって良いほどに出会ってきた無法者の姿はない。じめじめとした裏路地の、無計画に増築された家々はこの一区画だけ切り取られたかのように存在しない。

裏町の名前からは想像すらできないほど、採光を取り込んだ建築物の配置。眼前に広がるのは、市の光景。^{バザール}あふれる人が、品物を並べた市場を散策していく。

「取り仕切ってるのは、裏町の有力者どもだ。俺みたいな小物と違つてなあ」

その言葉に、クラウゼやユイルイは言葉を詰まらせ、鋭い視線で捕虜の賊を睨む。

「その有力者には会えますか？」

「な、……おいおい冗談だろう？」

シュセの言葉に、賊の背に冷や汗が流れる。先ほどまでシュセ達をからかっていた嘲笑は鳴りをひそめる。

「冗談ではありません」

「おいおい……」

左右に控えるクラウゼ、ユイルイを省みるも、彼らもシュセの意向に逆らう様子はない。

「……この通りを左に行った所に宿屋がある。運が良ければ会えるだろうぜ」

シュセが本気だと知ると、諦めて口にする。

「あなた達はここで待ちなさい」

件の宿の前に立つと、シュセはそう言い一人扉をくぐった。ぎい、と鳴る立て付けの悪い扉を開ける。

一階は酒場。二階は宿。高級な宿でないことは、木造の作りを見てもわかる。所々に隠せないほどの疵や、染みがついている。板張りの床は、踏めば悲鳴のような軋んだ声をあげる。いくつかテーブルと、それを囲む椅子。直前まで、宿泊客が昼食でも食べていたのだろう。テーブルの上にはまだ、片付けていない陶器の食器が並んでいた。

「あら、いらつしやい」

腰まである銀色の髪を束ねた女性が、エプロン姿でにこやかに笑みを返す。翡翠色の瞳が、まっすぐにシュセを見返す。

気後れしそうになるのを耐えて、シュセは彼女に声をかけた。

「シュセと申します。このお店に来れば、この辺りを取り仕切っている人がいると聞いたのですが……」

「久々のまともなお客さんかと思ったのに……」

「ご期待に沿えず、申し訳ありません」

ため息をつく、両手を腰に当てる。

「ロメリアよ」

そう名乗った女性は、それで、と聞き返す。

「……貴女がこのあたりを取り仕切られている？」

驚きながら、問いかけるシュセにロメリアは頷く。

「正確にはうちの人、なんだけどね。大した違いはないでしょう」

一瞬戸惑ったように、ロメリアを見返すと一度まぶたを伏せる。

「ここは、どうしてこのように整っているのでしょうか？」

「それは……あなたのお仕事に必要な質問なのかしら？」

穏やかな笑みに、シュセは言葉に詰まる。彼女の役目はロクサーヌでカルに従わない賊の討伐。それはロクサーヌの全てをカル的手中に収めることだ。戸籍の登録による民の掌握を手始めとして、衛士の増員はカルに逆らう者を早期に燻りだす事にもつながるだろう。カルからの資金の貸付を餌とするなら、それは人々に気づかれぬうちに振るわれる鞭に違いない。

彼女らのように、勝手気儘に市など開くのはカルの許すところではない。商いをするなら、その場所代を税としてカルの元へ納めるべきなのだ。

法を整備する法務官と、彼らの整備する法の外側にいる王という存在。大きすぎるその存在に、反発するものが出てくるのは当然といえた。

「わたくしは、いたずらに争いを好みません。あなた方が従っていただけるのなら、こちらは無益な殺生はいたしません」

「貴女は新しい秩序を」

くすりと笑いロメリアはカウンターの奥から細剣を引き出す。

「私たちは自由を謳う」

黒塗りの鞄に、鍔元には羽飾りの意匠が施されたそれは、使い込まれた年季を感じさせた。

「貴女がどんなに優しくても、力づくで来るのでしょうか？」

「わたくしはっ……」

反論しようとするシュセに、羽の細剣を突きつけてロメリアは首をふる。

「剣を抜きなさい……貴女が正しいと思うなら。もし貴女が間違っ

ているならば、この剣があなたを裁くでしょう」

歴戦の戦士の貫禄を持って、銀色の髪のリメリアが告げる。

「くっ……」

その威圧に、シュセの手から銀の細工も見事な細剣が抜き放たれる。

「いぞ」

優しく微笑むようなリメリアの声が、二人の決裂を告げていた。

西域の主5（前書き）

累計PV80,000HIT突破ありがとうございます。

執筆に時間がかかることがあると思いますが、完結までお付き合いくださいませ。

西域の主5

“閃光”

かつて、兇王ヴェルの率いた黒旗軍^{こっきぐん}。その中の最精鋭を集めたのが、千人よりなる“王の剣”だった。ほとんど伝説の域にまで語られる彼らの中に、一騎当千と呼ばれるに相応しい者は幾人もいたが、その中で異彩を放つのは、女だてらに異名をとった一人の武人だった。

速きこと瞬く光の如く、振るう細剣は敵を貫く。その意味を込めてついた渾名が閃光。閃光のロメリア。兇王ヴェルが戦地に倒れた当時二十歳を超えたばかりの彼女が、どのような思いでこの10年来を過ごしてきたかはわからない。だがその剣筋は、伝説を裏切るものではなかった。

ゆるりと、剣先を下げた構えから突き出される突きは、三段を数える。腹部、胸部、咽喉を同時に狙う精度と速度を兼ね備えたその一撃のみで、シュセは目の前にいるのが、自分の技量では遠く及ばない存在なのだと解ってしまった。

白亜の鎧が無ければ、今の一撃で即死していたであろう。正中線に沿って寸分の狂いも無く突き出されたその三段突きを、奇跡的に避ける。ロメリアの剣が掠った鎧は無残に貫かれ、血が滲む。防御というよりも逃げにまわした剣で、二撃目と三撃目を避けていなければ、彼女の命も無かったことだろう。

「……貴方は何者です!？」

膝を突くシュセは、腰まである銀の髪を優雅に揺らしたロメリアに激しい口調で問いかけた。

「言ったでしょう、私はロメリアよ」

ただの、ね。と小さく呟いた声はシュセの耳には入らなかった。見下ろすロメリアの翡翠の瞳は、宝玉のように硬く冷たい。

「貴女の技量では私に敵わない。大人しく、逃げ帰ったらいかが?」

見上げるシュセの首筋に細剣を突きつけて、ロメリアは言う。

「……お断りします。役目を果たせずして、何のための騎士か！」

「長生きできない考え方ね」

「カル様の為なら、わたくしは命など要りません！」

手にした細剣で、ロメリアの剣を力任せに払う。ふらつく足で立ち上がると、肩で息をしながら再びロメリアの前に立つ。

「では、貴女が引き上げざるを得ないようにしましょうか？」

「ぱちん、と指を鳴らすと店の奥から屈強な男達がのそりと現れる。

「表にいる私兵を殺しなさい。惨たらしく、ね」

「良いんですかい？ 兄貴に相談しないで」

「にやりと、男達は笑ってロメリアの指示に従う。

「構うものですか、死体は全部野良犬の餌よ」

「やめなさい！」

男達に向かってシュセが前に出ようとするとするのを、ロメリアが許さない。突き出される細剣を、いなして巻き込み、跳ね上げる。出れば確実に命を失う、その直感がシュセを後ろに下からせる。

「今すぐに追えば、貴女の部下の命は助かるわ。私は貴女を追わないし、悪い提案ではないと思うのだけれど」

「貴方は、何が望みなのです！？」

後方を伺いながら、尚も眼前のロメリアへの警戒を緩めない。

「望み、か。信じてもらえるかわからないけれど、平穏よ。愛する人と、共に年老いて死んでいく。ただそれだけ」

「それだけの腕を持ちながら……」

信じられないように、ロメリアを凝視するシュセにかつての英雄は微笑んだ。

「貴女もきつといつかそうなると思うわ……私はただ、今の平穏を誰にも邪魔されたくないだけ。例えそれが戦乙女と呼ばれる騎士でも、優しい少女でも、成り上がりの貴族の坊やにもね」

ひゅん、と風を切りロメリアの細剣がシュセに向けられる。

「さあ、選びなさい。部下のために退くか、矜持のために部下を殺

すか！」

問う声は刃のように鋭く、隙は一部もないように思われた。その言葉を前にシュセは迷った。ロメリアの言葉通り、確かにここで退けば兵士たちの命は助かる。カルからの命を我武者羅に果たそうとしているのは、自身の矜持のためなのだろうか、と。

否、と言い切れるほど彼女は自身をだませていない。王に対して、忠誠を誓う以上の感情を、シュセは確かに持つていたのだから。それが、幼い頃から一緒だったカルを想うゆえなのか、一人の男として彼を見ているのか、それはまだわからない。

だが、それでも。

「わたくしは退くわけにはいきません」

「貴女の矜持のために、兵士の命を危険にさらすのね？」

「陛下より戴いた勅命、それを果たそうとするわたくしが、忠誠心だけであると、わたくしには自信がない。それが、わたくしの矜持のためであるかも、わからない。ですが……彼らだけの命を、危険には晒しません」

一度開いた間合いの中へ、シュセは自ら足を踏み出した。隔絶した技量の差、ロメリアの細剣の間合いの内側へ、死地にシュセは勇を振るって一步を踏み出した。

「それが貴女の答え？」

若いわね、と笑ってロメリアは細剣を構えなおす。立ち昇るは、必殺の気。

「手加減はしないわ」

「望むところ」

張り詰めていく空気が、硬質な硝子のように悲鳴を上げる。

「おいおい、俺の店の中でこいつは、一体何の騒ぎだ？」

二人の気をそらしたのは、宿の入り口に立つ巨躯の男だった。

「ベイシユ!？」

間合いをきつたロメリアと、警戒を怠らないシュセにベイシユは苦笑して頭を掻いた。

「ゴロツキどもが、店の前で言い争いをしてやがったから何事かと思ったら、何遊んでやがるんだか」

「いや、でもあの!」

ロメリアがしどろもどろに言い訳しようとするのを、ベイシユは手で制した。

「まあ何はともあれ、お前もそちらのお嬢さんも物騒なものはいないな」

どっかりと、店の椅子に腰掛ける。ただそこにいるだけで圧倒的な存在感を放つベイシユの存在に、シユセは細剣を握った手に汗をにじませていた。

不承不承剣を収めるロメリアに、シユセも剣を引いた。

「さて、お嬢ちゃん。ものは相談なんだがこのまま剣を引いちゃくれないか。こちらにも行き過ぎがあったことは認めるが、問答無用で剣を抜くころはあるまいよ。ましてやそつちは今までここいら一帯の治安を放置していわけだからな」

痛いところを突いて来る。シユセは唇をかみ締めてベイシユの口上を聞いていた。確かに、ロクサーヌの無法地帯を放置していたのは、施政者たる貴族の責任。例え、カルにその実権がなかったと言えども、貴族と生れ落ちたならば、それは自然とついて回る責であった。

「では、陛下の定めた法に従い、しかるべき税を納めていただけるのですね?」

「ああ、別にかまわないさ」

その言葉に目をむいたのはロメリアだった。だが、言葉にはせずベイシユを睨むに留める。

「……それでしたらわたくしに不服はございません。では、今後この地区は衛士の指示に従っていただきます」

「ちゃんとした奴をよこしてくれよな」

「もちろんです。王とわたくしの名に誓って」

ベイシユとロメリアに背を向けるシユセ。出迎えるのは、クラウ

ぜ、ユイルイらの彼女の部下達だった。

「ご無事ですか!？」

色めきたつクラウゼの声に、軽く頷く。鎧に入ったひび割れ、滲む血の赤。無言の内に、クラウゼ、ユイルイらの視線が刃のように鋭くなる。

「斬り込む! 止めるなよ、ユイルイ!」

「無論だ!」

剣を抜き放つ二人に、控える私兵達も殺気立つ。

「止めなさい!」

制止の声は、その殺気を霧散させてしまうほどに、強く張りがあった。

「ですがっ!」

食い下がるクラウゼを一睨みで黙らせると、シュセは一言だけ言い放った。

「話は付きました。それ以上の成果は無用!」

ユイルイは宿を睨みながら、不承不承剣をしまう。

シュセの言葉に、私兵達からどよめきにも似た声があがる。クラ

ウゼは悔しさに齒をかみ締める。

「帰ります」

王城に向かって進むように指示をすると、シュセ自身は最後尾を進む。

「いかなされました?」

一度だけ振り返り、宿を見たシュセに、ユイルイが声をかけた。

「……いえ、なんでもありません」

細剣の柄を握り締めた手が、悔しさで震えているのをシュセは部下に気づかれぬよう、きびすを返した。

「なんで、止めたの?」

「なあに、大したことじゃない。あと5年もすれば、良い腕になりそうだと思うたら、ついな。それにあそこまで一途だと、殺すのも惜しくなっちまうだろう?」

「うそつき……」

シユセと私兵たちの引き上げた宿の奥、かつて“英雄”と呼ばれた者達がひっそりと語り合っていた。

初夏といえど、ベルガデイの夜はまだ冷える。夏の日差しが消えた分、大河ルプレの冷気が染み入ってくるためだ。梢を揺らす風の音を聞きながら、ナルニアはなんとなく仲間の元へ向かうのが躊躇われた。気分の向くままに、屋敷の中庭を当てもなく歩いていった。

翳る月を供に歩く彼女は、戸惑っていた。

理由は残忍な領主であるはずの、トウメルの対応だった。てつきり一人呼び出されたときは、一時の気まぐれに抱かれるのだと思っただ。事実それを待っていた。それをてこに取り入り、西都に火の手を揚げる。

だが、トウメルの要求してきたのは彼女の歌声のみ。ナルニアが歌っている間中、トウメルはただ無心にその歌声に聞き入るのみだったのだ。

そののみか、再び機会があれば歌を求められたのだ。

「ルカンド……」

背負いきれないものを救おうとする、優しく笑う少年に向けて、救いを求めるように呟いた声は、夜の風に攫われて消えた。

「ちっ……遅いな」

エレガはぶどう酒の瓶を呷りながら、夜の風が吹く窓辺に腰掛けていた。ガドリアを出てから、30日ほど経っただろうか。もともとジルの娼館にいる時から、ナルニアのことを、妹のように可愛がっていたエレガは、不機嫌の絶頂にいた。

もともと今回の旅に、エレガ自身は反対していたのだ。奴隷の身

から拾われて、娼婦になることなどガドリリアではよくあること。むしろ幸運とさえ呼べた。黙って男に抱かれていれば、旨い物は食えるし、安心して眠ることもできる。

ガドリリアの夜を仕切っていた艶花は、娼婦の扱いに細心の注意を払ってくれた。まるでどこぞの貴婦人かと思うほどに、客の下に出向くときはしつかりと、雪華の護衛をつけてくれたし、お抱えの医者も多数擁していた。

ほかの娼館と比べれば、格段の違いと言って良い。客に媚を売り、愛想を振りまき、身を任せれば万事こともなし。

「バカな私たちには、お似合い……」

憤りとともに、酒を喉に流し込む。だが、ナルニアは賢すぎたのだろう。娼館にいたときから、彼女の才覚はエレガヤ他の娼婦とは肌色が違っただけで、エレガを含めた娼婦が金を稼ぐことに血道をあげている中、彼女は店のことを考えて行動する。誰もやりたがらない呼び込みを積極的に引き受け、店に多くの客を呼び込んだ。

それでいて、自身では稼ぎもほとんどないから、いつまでもジルの侍女みたいなことをしていたのだ。

誰でも自身の身が可愛い。なのにあの子は、自分よりも他人を優先してしまう。回りが幸せなら、自分も笑っていられるのだと、そう言っただけで笑っていたのだ。

「ちっ……」

そんなナルニアが、エレガには眩し過ぎた。あまりにも純粋なその心が、暗い自身の心を浮かび上がらせてしまうように、憎くさえあった。ナルニアが周囲の反対を押し切って来たこの旅で、彼女が失敗し、心身ともに傷ついてさえしまえば、他人よりも自分を優先する“当たり前人間”に……自身のいる場所まで墮ちてくるのではないかと。

心暗い期待を寄せていたのに、なぜこんなにも不機嫌になるのか。舌打ちをしてまた酒を流し込む。

わかっている。きっとそんなことでは、彼女は自身の側まで墮ち

て来たりはしない。領主の所へ向かう儂く笑う彼女を見ていたら気づいてしまったのだ。

ああ、あの子はきつと私達がいつの間にか捨ててしまった大事なものを、まだ捨てていないのだと。

だから、だからこそ、悔しさに唇をかみ締める。

酒を流し込まねばやっていられない。

とめられない自分自身に、その力がない自分自身に。

「……つく！」

気づけば、酒はすでに空だった。

「酒、酒つと……」

酩酊する思考で、揺れる視界で次の酒を捜し求める。空虚な快樂でも、身を苛む屈辱に押しつぶされそうなこの夜を、一人で過ごすのに比べれば、幾分かはマシだった。

ふらつく足を前にだし、酒を探しに荷物を漁る。テーブルの上に荷物を持ち上げ、うるんな瞳で物色していると。

「つと……」

ふとしたひょうしに、まとめてあった荷物が崩れて落ちる。

「……つたく！」

床に転げ落ちた荷物の中に、酒の瓶を見つけて手を伸ばし、視界の先に誰かの靴のつま先を見つけて、視線を上げていく。

「あんまり飲みすぎると、体に毒ですよ」

やさしく微笑むナルニアに、エレガは、今までの暗い感情が全て押し流された。

「ナルニア！」

抱きつくエレガに、困惑するナルニア。大切なものを手放さないように、がむしゃらにすがりつく。

「エレガさん？」

エレガの目元に光るものを見つけて、ナルニアは困惑する。

「大丈夫だったかい？」

「うん……でも」

困惑したナルニアに、エレガはナルニアの髪を撫でる。

「でも？」

「領主を誘惑するのは、失敗しちゃったみたい……その、ゴメン」
しゅん、と頂垂れる彼女をエレガはやさしく包み込む。

「良いんだよ。あんたさえ無事なら」

「エレガさん？」

「良いんだ。やっぱり私は、あんたが好きらしいからね」

「……えっと、うん、その、ありがとう」

薄っすらと頬を染めるナルニアを、心底可愛いと思いつつ、エレガは彼女を抱きしめていた。

初夏の日差しをさえぎる梢は、新緑の若葉に覆われている。ベルガディでは比較的よく見かける日差しよけの街路樹。いつもと違うのは、その街路樹に人だかりができていたことだった。中央の市場のすぐ近く、人通りの多い場所にその人だかりがあった。

人だかりの中心にあるのは、看板。走り書きの文字で、領主トウメルの無能と、ガシユベルの性癖を揶揄する内容の文章が書きなぐってあった。

その内容に眉をひそめる者、口には出さないが同意をする者と様々だったが、みな一様にざわざわと騒ぐだけで、真っ向から否定しようという者はいなかった。それはうわさの域を出ないその殴り書きに、ベルガディの民が知る領主の一側面を確実に捉えていたからだ。

「衛士が来るまで、もう少し見物してようか」

人だかりから離れてた位置から、クシユレアは人々の反応をうかがう。

「上々なのです」

カーナはにっこり微笑んで、人だかりを眺めていた。

「どんな反応をするかと思ってたけど、やっぱり領主の悪行つてのはみんなの関心を呼ぶもんだねえ。特に弟のほうの醜聞つてのは、恰好のネタだ」

落書きを注視はしても、反論する者がいないところを見ると、本当に好かれてないと見える。

「貴様ら何をしているか！」

騒ぎを聞きつけた衛士達が駆け付け、人だかりを追い立てるようにして解散させた。蜘蛛の子を散らすように逃げていく民衆。民衆を追い散らすと、遠巻きに見ている彼らに向かって睨みを効かせる。「良いか！ ベルガデイの平穩があるのは御領主様のおかげ！ その恩を仇で返そうとする輩は、皆こうなるのだ！」

叫ぶや看板を叩き割り、油をかけて燃やす。赤々と燃える炎に、黒々とした煙を吐き出す看板を背に、隊長らしき衛士は民衆をねめつけた。

「おい、その浮浪者！ 貴様が犯人だろう！」

衛士が目留めたのは、まだ幼い少年の浮浪者だ。獲物を追い詰める猫のような残虐さで、衛士は笑った。

「大人しくつかまればよし、さもなければここにいる全員を共謀の罪でひつとらえる事になるぞ」

彼の背後で衛士達が武器を構える。皆一様に、剣を鞘から抜き去る様子に、民衆は思わず指名された少年を見た。背後に妹を庇った少年は、舌打ちしながら周囲の大人達の背筋を凍らせるような視線と、背後の守るべき温もりを感じていた。

「お兄ちゃん……」

妹がボロボロの兄の服の裾をつかむ。

「セリア。俺があいつらの注意を引く。その間にお前だけでも、貧民窟に逃げ込め。頼る人はわかつているな？」

小声で囁くと、妹を押しやり衛士の前に出る。妹の呼ぶ声に、身を引き裂かれる思いを押し殺し、衛士の巨体を睨む。

「子供にしてはなかなか殊勝ではないか。身も知らぬ他人の為に、

わざわざ殺されに来るとは」

「俺は、お前らのような卑怯者じゃない！」

その小さな身体全てを使って叫ぶ少年に、衛士はひやついた笑みを浮かべた。

「おめでたいガキだ。正直や誇りで飯が食えるか？」

衛士達が少年を取り囲む。手には剣の代わりに棍棒を持っていた。それを思い切り少年にたたきつける。鈍い音とともに少年が倒れこみ、それを見て衛士達はまた笑った。

「おいおい殺しちまうなよ。領主様への侮辱罪で生きたまま、引き出さねばならないからな」

へらへらと笑う衛士達は少年を縛り上げると、意気揚々と引き上げていく。

「これは、随分面白いものが見れたねえ」

散っていく群衆の影から、クシュレアがカーナに声をかける。

「こんな意気地なしの人達で、本当に大丈夫なのでしょうか？」

幾分か落ち込んだカーナの声に、クシュレアは嫣然と微笑みを返す。

「自分に火の粉がかからない限りは、人間ってのはいくらでも卑劣になれるのさ」

低く笑って、視線を路地に向ければ、泣き崩れている少女の姿。

「まあ、情報を引き出すには良いかもねえ。カーナ」

「はいです！」

カーナはトタトタと少女　セリアに駆け寄って声をかけた。

「ジル姉さんの見立て通り、まだまだナルニアじゃ主役は張れないだろうからねえ」

カーナにさえも聞こえない声で、クシュレアは晒った。

西域の主6（前書き）

長いことお待たせして申し訳ありません。仕事の方でお隣の国へ行っていたら、例の騒ぎです。今週やっと内地へ戻ってきました。では、お楽しみください。

西域の主6

クシュレアとカーナに付き添われて連れてこられたセリアに、ナルニアは驚きに目を見開いた。

「ま、魔法使いさん！」

だがそれは、つれてこられたセリアも同じ。泣きはらした眼を見開き、ナルニアに抱きついた。

「魔法使い？」

少女の声に、全員の視線がナルニアに集中する。その疑惑の視線に、ナルニアは照れ笑いを返した。

「あ、いやいや、それでどうして……」

抱きついてきたセリアを撫でながら、ナルニアはクシュレアとカーナを交互に見る。

「お、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが……」

泣きじゃくるセリアを守るように、ナルニアは小さな少女を抱きしめた。

「実はその子のお兄さまが衛士に、捕まってしまったのです」

カーナの言葉に、ナルニアは悔しさに唇をかみ締める。

「お兄ちゃん、何もしてないよ！　ずっと、ずっと一緒だったもん」

泣きながら無実を訴える少女を、ナルニアは安心させるように微笑んで宥めた。

「大丈夫。お姉ちゃんは魔法使いなんだから、きっとお兄ちゃんを助けてあげる」

「ほんとう？」

人を疑うことを知らないセリアの視線に、ナルニアは頷いた。

泣き疲れて眠るセリアをベットに寝かせると、ナルニア達は再び集まった。

「それで、あの子に言ったことは本当にやるつもりなのかい？」

エレガの問いかけに、ナルニアは力強く頷いた。

「お人好しだねえ」

「可哀相だとは思いますが、私達がそこまでする必要なんてないのです」

クシュレアとカーナの反対の声に、ナルニアは首を振る。

「今回のことは、仕事とは別。私の完全な我侷です。ですから、皆さんにご迷惑かけません」

「具体的に、どうするのさ？」

氷のように冷たい視線でクシュレアはナルニアを見つめる。物の値段を押し量るような、冷徹なその瞳は、ナルニアを萎縮させるに十分だった。

「セリアのお兄ちゃん、セイグリッド君は衛士の小屋に監禁されていると思われます。ですので、夜陰にまぎれてそこを襲って……」

「それでドジ踏んで、私ら全員檻の中かい？ 勘弁してほしいねえ」
クシュレアの言葉に、ナルニアは唇をかみ締めた。

「それに、仕事のことを忘れてるんじゃないだろうね？ 今晚も進展はなかったそうじゃないか。こんなこっちゃあ、いつまで経ってもガドリアになんか、帰れやしない」

二の句を告げないナルニアをエレガが庇うように反論する。

「何いってんだい。あの子から貧民窟にあるゴロツキどもに繋がりをもちたがってるくせに」

「そりゃ、まあそうなるだろうさ」

なんの利益にもならない少女を助けるほど彼女達には余裕がない。助けるからには、相応の打算があり、計算がある。彼女達の立場からすれば当然のこと。ナルニアにもそれは分かっている。だが、それを言い訳にして助けられる人を見捨てたくなかったのだ。

「クシュレアさん、カーナごめんなさい。やっぱり私は、あの子を見捨てることが出来ない」

一度揺らいだ紫の瞳に決意の火が灯る。

「そうかい。それじゃあ、仕方ないね」

「え？」

あつさり引き下がるクシュレアにナルニアは疑問の視線を向ける。

「座長はお前さ。ナルニア、座長がやるというなら、裏子として協力するのが筋だろう?」

声音も表情も満面の笑みで、ただし眼だけは笑わずにクシュレアは答える。

「ありがとうございます!」

思わず出た大声に、その場にいたナルニア以外の全員が目を見張り、その後、誰もが瞬時に仮面を付けた。クシュレアは満面の笑みを、カーナは無邪気な笑みを、エレガは無表情を。

「気にしないで、いいよ」

「でも、それでも! ありがとうございます」

心からの感謝に、再びナルニアは深く頭を下げた。

「魔法使いさあん?」

目をこすりながら、起き出してきたセリアに全員の視線が注がれる。

「ほら、お姫様のお呼びだよ」

クスリ、と笑ってナルニアを促すクシュレア。その勧めに従い、ナルニアはセリアの手を引いて寝室に向かった。

「あんたも行つてやりな」

エレガに促されカーナは一度クシュレアを振り返る。彼女が頷くのを確認すると、トテトテとナルニア達を追っていった。

「なに考えているんだい?」

無表情から一転して、ナイフを思わせる鋭い瞳でクシュレアを睨むエレガ。

「ナルニアに言った通り、あのセリアって小娘のお兄ちゃんを助けることさ」

「それだけじゃないだろう?」

窓辺に腰掛けていたエレガが、クシュレアの座る後ろに動く。

「さあて、どうだかね」

要領を得ないクシユレアの答えに、エレガはその背を睨み付ける。背中から放たれる殺気に近い気迫。それを感じながらも、クシユレアは軽く手に持った葡萄酒のグラスを傾けて見せた。その姿は、優雅にかつ妖艶に。最高級の娼婦に相応しい貫禄と、自信を持って彼女は微笑む。

「ねえ、エレガ……あんだあの子をどう思っているんだい？」

仕草とは裏腹に、その声はため息混じりに沈んだものだった。

「どうって……力になってやりたいとは思ってるけど」

戸惑い気味に答えたエレガに、クシユレアは自嘲気味に口元をゆがめる。

「私はね、正直あの子が恐ろしい」

「クシユレア……」

眉根を寄せるエレガをよそに、クシユレアはグラスを呷る。

「あの子を見ると、何者も信じないで生きていたはずの、私の人生を否定されているようで、ね。何よりも、私自身が、あの子を信じそうになってしまう。私は……」

空になったグラスに再びなみなみと葡萄酒を注ぎ、クシユレアはまた一気に呷った。

「信じたって良いじゃないか。ナルニアは悪い子じゃない」

「だめなんだよ。それじゃ、だめなんだ！」

普段の彼女なら決して見せないであろう、取り乱した怒りの声。

一番付き合いの長い、エレガの前だからこそ見えるその姿に、エレガは心を痛めた。

「……裏子が舞台女優に惚れて舞台上に飛び出ちゃ、芝居は失敗さ。そうだろう？」

「クシユレア」

「悪かったね。少し取り乱した」

「もう、酒は止めときな」

「ああ、そうするよ……ああ、そうだった。ナルニアをどうするか、だったね？ さっきも言った通り子供を助けるための策を与えてや

るさ。ただし……」

「ただし？」

「ついでに、舞台を進めさせてもらつ。あの馬鹿兄弟の仲を裂いてやるうじゃないか」

わずかに主に染まつた頬に冷たい微笑を浮かべて、舞台を仕切る裏子のクシュレアは笑つた。

翌日、ナルニアは一人でトウメルに面会を求め、彼の前に傳いていた。

「今日は、頼みごととか？」

物憂げなトウメルの声に、ナルニアは顔を上げずに返事をする。

「はい。今日は、閣下のお力におすがりしたく……参りました」

苦渋の声を絞り出すナルニアに、トウメルの表情は曇る。

「顔を、上げてくれ。俺で力になれるなら、なんなりと言つてくれ」

クシュレアの書いた台本どおり、トウメルの言葉を引き出すこと

に成功したナルニアは、次の言葉をし舌に乗せる。

「実は、先日街の方で、一つの騒動がありました」

語る内容はわかりやすく、同情を引く物語。だが、あえて衛士を悪者にはしない。衛士を完全に悪者にしてしまえば、それは領主側に非があることを強調するようなものだ。慎重なクシュレアがトウメルの鈍さに賭ける気にならなかつたのは、当然といえた。

あくまで衛士の些細な間違いという結論を話し終えると、ナルニアは再び顔を伏せた。

「そうか……」

そういつたきり、黙り込むトウメル。

ナルニアの背には冷や汗が伝う。永遠のようにも思われたトウメルの沈黙が、不意に破られる。

「わかった。任せろ」

力強く頷くと、すぐさまナルニアを残して、立ち上がる。

数刻後、ナルニアは傷だらけになったセイグリッドを引き受けることに成功した。

涙さえ浮かべて感謝の言葉を並べるナルニアを見送ると、トウメルはため息をついた。

「俺は、あの娘に……」

トウメルとて、女を知らぬわけではない。妻もいるし、側室として一人を囲ってもある。ただ、彼の中で女という生き物は、子供を生む機能を持った弱弱い存在としか認識されていなかった。

だが、ナルニアに彼は妻や側室にはない輝きを感じて戸惑っていた。

首を振り、言葉の続きをかき消してトウメルはまた、ため息をつく。

「いい年をした大人が……」

人に恋焦がれる、という感情を初めて味わうトウメルは、その感情にあえて気づかぬ振りをした。

まぶたを閉じればよみがえる、あの歌。報われることのない悲恋を歌った恋の歌が、聞こえるようだった。

「兄上が、罪人を釈放したと？」

時刻はすでに深夜である。広い部屋に敷き詰められた毛の長い絨毯は、どんなに踏んでも足音を立てられそうにない。彫刻を施された重厚な本棚には、各国から集めた書籍が収まる。天蓋付のベッドは、上品な絹の肌触りと羽毛の柔らかさがあった。締め切られた力

―テンの素材でさえ考えられる限りの贅をこらしたもの。

貴種の血を証明するかのような金色の髪に、細い目の奥から酷薄な光を湛える淡い緑の視線。皮肉気につりあがった口元は嘲笑の笑みを隠しもしなかった。玉座と見まがうほどに立派な椅子に座り傍らには少女を侍らせる。貴族の子弟が着飾るような豪華な服に身を包んだ少女は、主のためにグラスを奉げもっていた。

ただひとつ、違和感があるとすれば、その少女の首から伸びた無骨な鎖。虚ろな瞳で主のためのグラスを奉げ持つ彼女の首に戒めの楔が打ち込まれていた。

「はっ」

忠犬のように、かしまって返事したのはセイグリッドを逮捕した衛士の隊長だった。

「くつくつく……良い。よく知らせてくれた」

手振りだけで、下がれと命じると衛士の隊長は一層頭を深く下げて退出する。

「兄上が、ここまで愚かだとは……」

これを材料に、父の前で兄を糾弾すれば自身の次期西方候主の地位は約束されたも同然だった。衛士はガシユベルとトウメルのどちらの管轄でもない。父であるクレインの管轄なのだ。

思い上がった挙句に、父の領域に越権行為に及ぶなど、気が違つたとは思えない。

“無様だな。女になどうつつを抜かしているからこうなる。臆病者め！”

トウメルの部下からの笑い声がその後から追ってくる。屈辱とともに胸に刻まれたトウメルの捨て台詞。かつて、盗賊の討伐に失敗し、後退したガシユベルに投げかけられた言葉だ。

「許せぬ……くつくつく」

「あっ」

神経質に震える手で、少女の鎖を引つ張ると、少女が小さな悲鳴を上げる。立っていられなくなった少女はグラスを取り落とし、ガ

シユベルの服に蒸留酒がかかってしまう。

「おお、まったく今日はなんと言う日だ」

舌なめずりするように、視線を足元で崩れ落ちた少女に向ける。

「ゆ、ゆるして……」

「まだそのようなことを、言っているのか。兄上にもいずれ、私の恐ろしさを味わってもらわねばならぬ。屈辱の中でのた打ち回り、敗北の味を知らしめてやらねばな」

崩れ落ちた少女を鎖で無理やり引っ張り上げると、ガシユベルは愉しそうに笑う。

「だが、今日はお前にたつぶりと、味わわせてやろう。二度と粗相をしでかさぬように、な」

狂ったように晒うガシユベルの声と、少女の魂を引き裂くような悲鳴が重なった。

「さて、坊やから聞き出した場所はここで間違いないはずだけどね。ちらりと、視線を隣のエレガに投げて準備の確認をする。動きやすい服装に、手にはめたグローブの調子確かめて、エレガは頷いた。

クシユレアは傷だらけで帰ってきたセイグリッドに取引を持ちかけたのだ。

「盗賊どもの根城、知っているんだらう？ 教えてくれれば、坊やと妹の安全は保障してあげるよ。ただし嘘をついたり、協力を拒んだら……賢い坊やなら言わなくても、ねえ？」

耳元で囁く悪魔の声に、目を見開きながらセイグリッドはクシユレアの底冷えのする青い瞳を見つめ返した。子供にさえ感じられるほどの媚に満ちた艶やかな笑み、だがその中で青い瞳だけが凍ったように笑わないのだ。

そうして聞き出した場所が目の前にある。中央市場からそう遠くない場所。うら寂れた酒場の周りには、たむろしている浮浪者や明らかにカタギではない者達がうろついている。

「ナルニアには、言わなくていいのか？」

鉄で補強されたグローブの握りを確かめ、エレガはナイフをもてあそぶクシュレアに問いかける。

「必要ないと思ったから、あんたも何も言わずに付いて来たんだろっ？」

「荒事は私の領分だ。あの子は、こういうのは似合わないし。友達が心配だからな」

ふふん、と鼻で笑ってクシュレアは微笑んだ。

「ともだち、ね」

「なんだ？」

「いや、旅つてのはしてみるもんだね」

ふん、と鼻を鳴らしてエレガは視線を転じる。南方の狩猟民族の血を引く彼女のつり目が、獲物を前にした肉食獣のような鋭さを湛える。

「それじゃ、乗り込むかね」

酒場の腐りかけた扉を開けようとした二人の前に、数人の男が立ちふさがる。どの男も汚れた服に、濁った瞳を、吐き溜まりに咲いた花のような二人に向ける。

「姉ちゃんたち、こんなところに来ちゃいけねえなあ。アブねえぜ……俺たちが送ってやるから、こっちへ来いよ」

黄ばんだ歯をむき出しにして、酒臭さの残る吐息で二人に詰め寄る男たちに、クシュレアは冷笑を投げかけた。

「あたしらが抱きたきゃ、金を持っておいで」

その言葉が終わるかどうかの瞬間、エレガの拳が容赦なく振りぬかれる。骨の折れる鈍い音ともに、目の前の男を一撃で沈める。続いて唾然としている仲間の男のあごに向かって、切り上げる剣のよくな鋭さで蹴りを放つ。あごを砕かれた男は酒場の中まで吹き飛び、

エレガは振り上げた長い足をそのまま、呆けているもう一人の頭上に見舞った。

泡を吹いて倒れる男を尻目に、短く息を吐き出す。

「弱い」

道端の石ころを見下ろす無感動な視線を投げかけると、クシユレアを振り返る。見れば、優雅に歩くクシユレアの足元には、ナイフを突き立てられて呻く男の姿があった。

「ガドリアでの出入りに比べると、どうにも味気ないねえ」

頬に浮かべるのは嗜虐の笑み。

ものの数瞬でゴロツキをたたき伏せた二人は、酒場の中に入る。

「ごめんなさいよ」

薄暗いホールに、たむろする輩の目つきは明らかに外で打ちのめした連中とは違っていた。

「おいおい、姉ちゃん達」

長身のエレガの頭ひとつ上を行く肥えた大男が道をふさぐ。だがその言葉を、言い終える前に、エレガはその顔へ裏拳を叩き込むんで沈めると、腕を組んで仁王立ちになる。

「カシラに伝えな。面貸せつてな」

鋭い視線とはき捨てる挑発的な台詞に、騒然となる店内。

剣に手を伸ばそうとするゴロツキの手元に、クシユレアのナイフが突き立つ。

「早く出てこないよ、人死が出ちまうよ。今日の私はご機嫌だからねえ」

ホールから二階に伸びる階段の先、二階席で女を片手にしている男に視線を合わせるとクシユレアは媚を含んだ笑みを振りまく。手にしたナイフが露出の多いクシユレアの肌を舐め、胸から首筋、最後にたどり着いた口元で紅を塗った口元から接吻を受けた。

周囲の男たちが息を呑む声が聞こえる。それほどまでに妖艶な彼女のしぐさ、そして一瞬の間をおいて、投擲されるクシユレアのナイフ。二階席の男の頬をかすめ、壁に突き立つナイフの軌道を一階

のホールにいた全員が見送った。

片手で抱いていた女を放すと、男は立ち上がる。

「困ったお嬢さん方だ」

皮の胸当てをつけた傭兵風の男が、剣を手にして立ち上がる。

長いくすんだ金色の髪を後ろでひとつにまとめ、整った鼻筋、美男子と呼ぶにはとうが立っているが、やさぐれた退廃的な雰囲気はクシュレアと似通うところがある。どこか気品の漂う物腰で、ゆつくりと階段を下りてくる。

「あんたがカシラかい？」

問いかけというよりは、確認の意味を込めてクシュレアは降りてきた男を視線で追う。

「ブライズだ」

かすかに笑みさえ湛えて二人と対峙するブライズ。脱力しているかのように見えるブライズの手には、使い込まれた剣がある。瞬時に抜き放てるように、かといって緊張しすぎることはなく、自然体で立つ彼をエレガは鋭い視線で睨み、クシュレアは妖しいほどの笑みを湛えながら迎えた。

「初めまして、と言った方がいいのかね？ 私はクシュレア、こっちはエレガ」

「麗しい名前だ、が随分乱暴な入店だったな」

「ほめ言葉と受け取っておきますよ。旦那、私ら商人。初見で舐められたら、仕事がやりにくい」

ナイフを仕舞い、胸元が男の視線に入るように計算しつくされた礼をする。

「それで、商人というからには買ってほしい品物があるんだろう？」

「ええ、もちろん。飛び切りの商品ですがね……けど、人目があるところではちよつと」

媚を含んだクシュレアの視線に、ブライズは笑って答える。

「なるほど、なるほど……まあ二階へあがってくれ」

維持の悪い笑みを見せてブライズは階段を再び上がる。その後

続く二人を確かめると、階下で見守る部下に鋭い一喝とともに、見張りを命じた。

西域の主7

宵も深けた時刻になって、クシユレアとエレガは宿と定めたトウメルの別邸に戻ってきた。疲れ切った様子のエレガと、普段にもまして艶やかなクシユレアの二人に、カーナは不満をぶちまけた。

「お姉さま!? どうして、カーナを連れて行ってくれないのですう? 子供のお守りなんてまっぴらです」

二人からみればカーナとて充分幼いのだが、本人はそのことを言うに怒るのだ。容姿と口調から少女とみられがちだが、カーナは既に成人を終えている。北方の山々に住まう小柄な少数民族の血が彼女の身体には流れているのだ。

「別にぬけものにしようってわけじゃないさ」

エレガの言葉を受けて、クシユレアを睨むカーナ。頬を膨らませて怒る様子は、子供が拗ねているようにしか見えないが、本人は至って真面目であった。

「ちゃんと出番はあるよ」

膨らんだ頬をエレガに弄ばれ、音を立てて空気を吐き出す。

「本当に、本当ですか?」

苦笑して頷くクシユレアに彼女はにこやかな笑みを返した。

むつつりと、トウメルは黙り込んで馬車から降りた。時刻はすでに夕暮れ。赤い斜光がトウメルの顔に深い影を落とす。眉間に刻まれた皺は深く、固い。激しい怒りと屈辱に、瞳はぎらつき、今でも手にした長剣で何か手頃なものを叩き斬りたいとすら考えていた。理由は、先程まで聞かされていたガシユベルの弾劾である。

「一時の気まぐれで罪人を釈放するなど、しかも力づくでするなど法の守護者たる領主の資格はない!」

要約すればそういうことだった。今回は父も弟の味方をし、叱責を受ける有様だ。父のあの笑顔の中で恐ろしく冷たい瞳が、失望を浮かべて自身を見ていたことに、トウムルは気がついていて、実の子をみるような温かい視線ではない。まるで商人がものの価値を見定めるような、無感動で冷徹な瞳。

思い出しただけで、ぎりりと歯ぎしりしてしまう。怒りにまかせて暴れ出しそうな感情を、喉元で自制して口をへの字に引き結ぶ。

当然その様子は家人達にも分かってしまう。機嫌が悪い主に、まるで腫れ物を触るかのごとく接する。その態度がまたトウムルの機嫌を尚一層悪くした。

「酒だ！」

自身の部屋に戻り、乱暴に命じると、運ばれてきた蒸留酒を瓶ごととおろす。背もたれに体重を預け、机の上で足を組むと、空になった瓶を投げ捨て、次の強い酒をあおった。酩酊にでも逃げ込まねば、やりきれなかった。

何故だ、と朦朧とする意識の中で何度もトウムルは繰り返した。次第に意識朦朧として、暗い闇が彼の思考を塗りつぶしていった。

トウムルとガシユベルは母が違った。トウムルの母は商人の娘だったのに対し、弟ガシユベルの母は西方でそれなりの地位にある貴族の娘であった。

最初父であるクレインが娶ったのは、トウムルの母であった。実家の資産目当てに、トウムルの母を娶ったクレインは、その財産を使い切ると、あっさり彼女を離縁した。

献身的にクレインに尽くした彼の母は、苦しい生活の中でトウムルを育てる途中、無理が祟って病没する。

「良い？ トウムル、お父様の力になれる立派な騎士になるのですよ」

それが彼女の遺言であり、なぜ彼女がそこまで父に尽くしたのか、トウムルには分からなかった。だが、わからぬなりにトウムルは努力した。だが金はない。当面自分の面倒を自分で見なければならな

いと考えていたトウメルに、転機が訪れたのは母が死んですぐのことだった。

「西方候主ネアス様のお呼びである」

救いの手を差し伸べたのは、父ではなく叔父であった。物心ついてから初めて父をみた感想は、疑問だった。幼い頃より母のもとで育てられたトウメルには、目の前のクレインを目にしても実感が沸かなかつたのだ。

まるで他人のような父に母を失った悲しみを埋められるわけもない。だが、クレインに引き取られて一つだけ良いことがあった。

本だ。経済から算術、英雄の生涯まで様々な本がそこにはあった。中でもトウメルを熱狂させたのはメルギド・ラストウーヌの伝記である。一騎士から武功を積み重ね、ついには大貴族の地位に手を届かせた王都の英雄。共感を覚えたのは、家族に恵まれない環境だった。時には涙ぐみながら必死で伝記を読破し、幼いトウメルは心に決めたのだ。

強い騎士になろう、と。

トウメルは耳に流れる心地良い歌に、うつすらと瞼を開けた。

「お目覚めになりましたか？」

頭蓋骨の中で暴れる痛みを、眉間にしわを寄せて耐えると声の主はすぐそこにいた。

「ナルニア殿か」

酒の飲み過ぎで粘つく口内だったが、ナルニアの名前を乗せた時だけ、涼やかなものがよぎる。

「ずっと歌っていてくれたのか？」

窓から差し込む光は既に黒鳥の羽に覆い隠されたように暗い。燭台に灯った蝋燭がナルニアの顔を照らした。やや俯いて頬を染めるナルニアが、頷く。

「他に取り柄もないですから」

「そなたの歌は、千金に値すると思うが」

トウメルは半ば本気で言ったが、ナルニアは首を横に振るだけだ

った。

「それにしても、なぜここへ？」

「改めてお詫びに。私の願いを聞いてくださったばかりに辛いお立場なのだと……家宰さまに、お聞きしました」

余計なことを、と内心トウメルは舌打ちした。

「……トウメル様、私達はそろそろ立ち去ろうかと思えます。これ以上ご迷惑をおかけしてしまわぬように」

「何!？」

目をむいたのはトウメルだった。二日酔いの痛みも忘れ立ち上がると、背を向けるナルニアを呆然と眺めやる。

「行く当てがあるのか？」

「いいえ、でも」

黙り込んでしまうナルニアの背のなんと頼り無いことか。トウメルの豪腕で抱き締めれば、折れてしまいそうにトウメルには思えた。「ならば、ここに居れば良い。父の非難など恐れるに足りぬ」

決然と言い切るトウメルに、ナルニアは頭を振る。

「それでは、私の気が済まないのです。お世話になった上に、その恩を仇で返してしまった。そして、私達がいるかぎり、トウメル様のお立場は弱いままだと」

振り返ったナルニアの瞳には、涙があった。ダメだ、と思った。

トウメルがナルニアを抱きしめてしまおうと、一歩前にでようとして。

「だから」

その一歩はナルニアの言葉に阻まれた。

「お別れです」

涙を浮かべ、口元には必死に笑おうとするナルニアに、トウメルの足は凍り付いたように前に進まない。

「……そうか」

胸が張り裂けるばかりの気持ちを押し殺し、なんとか紡ぎ出した言葉は、彼の力を根こそぎ奪い取った。力無く、椅子に座り込むと、

肩を落として目をつむる。

「ありがとうございます。失礼します」

そう言って立ち去る彼女を止める力さえ、彼には残っていないかった。

「ほんとに出て行くの？」

不満というよりは、確認のための質問。問われたナルニアは少し戸惑ったように頷いた。

「座長が言うなら仕方ないけど」

なぜ？ というエレガの途切れた言葉の続きを、ナルニアは沈黙をもって遮った。

荷造りを1日かけておこない、クシユレアとカーナには買い出しを頼んである。仲間の不満がナルニアには重かった。

ルカンドから頼まれた仕事　ベルガデイの内情を探ることは、難しくなるかもしれない。探るのであれば、ベルガデイだけでなく他の小さな村々までも巡るべきだと、自分自身に言い訳し、黙々と荷物をまとめる。

「ナルニアお姉ちゃん……」

呼ばれた声に手を止めて振り返ると、不安な面差しでのセリアと視線がぶつかる。とっさに視線をそらして、ナルニアは謝罪の言葉を口にした。

「ごめん、ね。力になってあげたかったんだけど……」

一緒に旅をしようと誘うのは簡単だが、この幼い少女がついて来れないのは火を見るより明らかだった。未だ歩くこともままならない兄の世話をしなければならぬ。

ナルニアが彼女達にしてあげられることといえば、僅かばかりのお金をその手に握らせることだけだった。

卑怯だ。

ナルニアは自身の行いに吐き気すら催す。一度助けると言っておきながら、その手を途中で離す。それは、相手の希望を打ち砕くために、最初から助けられないよりもたちが悪いのではないだろうか。

どんな罵声を浴びせられても、文句は言えない。ナルニアはそう考えて、目を閉じた。セリアの怒りをぶつけやすいように屈んで、彼女の視線の高さに合わせる。

しかし、予想に反してセリアからは何も言っていない。代わりに小さくあたたかな温もりが、ナルニアを包み込んだ。

「お姉ちゃん……」

ぐすり、と涙をすすりセリアはナルニアの首筋にその小さな手を回した。これまで大人といえど奪う側の人間ばかりだった。そんな中で現れた守ってくれる大人に、セリアは言葉にならない感情を全身を使って表していた。

「行かないで……」

すすり泣きの合間から聞こえたか細い声に、ナルニアは完膚無きまでに叩きのめされた。

「ごめん、ごめんね……」

謝るのは卑怯だと自分自身を罵りながら、ナルニアは涙を流しセリアを抱き締めた。

「ナルニアの気紛れにも困ったものです！」「
ぶう、と頬を膨らませてカーナは憤った。

「あ、あっちの方が安いです！」

しかし品物を選ぶ目は、全くの別物。ナルニアに対する憤りとは関係なく、買い物を楽しむ。そんな様子の連れを、苦笑に近い笑みで見守りつつ、クシユレアは考えをまとめる。

クシュレアがルカンドから頼まれた仕事　ベルガデイのロクサー又への謀叛を煽ること。それはナルニアに頼んだ仕事と微妙に食い違う。もちろんそれは、ナルニアには知らせていないし、知らせるつもりもない。

どちらが本命なのか、もさしたる問題ではない。ただ実行できるかどうか、がクシュレアにとっての問題だった。

ナルニアとトゥメルを接近させるのには、成功したが、事態が思わぬ方向へ動いてしまった。ナルニアが感情のままに、トゥメルから離れようとしているのだ。トゥメルを利用して、ロクサー又への叛乱の火を煽ろうと考えていたクシュレアにとって、ナルニアの行動は誤算だった。

「どうしたものか」

連れ合いのカーナにも聞こえないほど低く、呟いてクシュレアは考え込む。視線は常に自然と市場の風景を眺めながら、しかし脳内ではこれからの行動を組み立てるのに余念がない。

どうすれば、あの兄弟を憎み合わせることが出来る？

互いに軽蔑しあってはいる。しかし、それが武力での衝突となり、ロクサー又への謀叛となるには、まだ嵩が足りない。

あまり時間を取られては、あの魔女が動き出してしまう可能性すらある。

ルカンドが語った荒地の魔女の構想。ソレを聞いたとき、修羅場はぐくつてきているはずのクシュレアでさえ、背筋に氷塊を突っ込まれたように身震いした。

ふと、視線に入ったのは衛士の姿。

足を止めたクシュレアに気づいたカーナが駆け寄ってくる。

「ふむ……」

考え込むクシュレアをカーナが不思議そうに見あげていた。

「カーナ？」

「はい」

眼を細めて、口元には僅かな笑み。

「出番だ。ただしよく考えてから、頼むよ。踊る相手は性根が腐ってるからね」

くるりとその場で回ってからカーナは嬉しそうに答えた。

「出番がないより、マシというものです」

返事を聞いたクシユレアは、一瞬悲しそうな目になったが、すぐ後には脚本を手がける裏子の顔で不敵に笑っていた。

アクション
「事故を、演出に変えてこそ一流ってね」

ベルガディでクシユレア達が暗躍している頃、王都で活動をしてきたクルドバーツも一つの区切りを迎えようとしていた。

スカルディア家に仕える騎士の一人に、情報を流させスカルディア家の内情から、誰に頼めば効率良く王と目通りが適うのか、まで調べ上げることに成功していた。

その結果をもって、東都ガドリアまで早馬を飛ばす。

「ルカンド殿とサギリ殿に、届けておくれ」

クルドバーツ自ら使者にそう告げて、早馬を飛ばしたのだ。

「これで、まずは一仕事片付いたな」

やれやれと首筋をなでて、ロクサーヌの初夏の空を見上げた。

ガドリアと比べればなんと、優しい風が吹くのか。

だが、もう間もなくあの厳しい風を背に受けた双頭の蛇が、この王都を踏みにじる為に歩き出すだろう。

華やかなりし、王都ロクサーヌ。

その街が血に染まるのを想像して、クルドバーツは店の奥へ引っ込んだ。

「邪魔をする」

その日の午後、クルドバーツの経営する武器の店に一組の客があった。かけた声は低く、落ち着いたもの。顔に残る傷痕から、兵士か、あるいは後ろ暗い商売をしている者なのだろうとあたりをつけ

る。

この店を任されているテイゼルが、そう感じたのはその男達のみだ。

非情の瞳とでもいうのか、人を殺したものの特有の冷たい視線をしていたのがテイゼルの気を引いた。十貴族同士の内乱から立ち直りつつあるロクサーヌで、こんな目をした者は珍しい。あるいは、旅の者なのかとも思ったが、旅装に汚れない。

これから旅立つのだと考えれば、やはり珍しい客とするしかない。た。

その客が買い求めたのは、反りの浅い肉厚の剣。

人を斬りやすい剣だ。

視線を合わせたテイゼルが、ぞくりと背筋が冷たくなる。二人の男達は武器を物色すると無造作に選び出し、会計を済ませる。そのとき僅かに合った視線が、思わず冷やりとするほどに冷たい。まるで、これからテイゼル自身が殺されるんじゃないかと、考えてしまっうほどに。

だが実際そんなことはなく、客の二人一組の男達は、会計を済ませてさっさと店を出て行った。

その二人が目指す先は、西都ベルガデイ。

オウカの抱える暗殺団からの刺客だった。

西域の主7（後書き）

いつも、ご覧くださっている方には感謝感謝です。

今年もう一度更新できるかどうか、といったところですが、よろしくお願いします。

西域の主 8

クシュレアとカーナが買い物から戻ってきたのを見計らって、ナルニアは幌馬車の中に荷物を積み込み始める。娯楽に飽きていた領主館の兵士の家族達も加わり、その作業はすぐに終わってしまった。彼らはナルニア達との別れを惜しみながら、次はいつくるのかとじきりに尋ねた。

「風の向くまま、といったところですね」

ナルニアの苦笑に年頃の娘達は落胆し、ではせめて別れの宴会を開こうと提案したのだ。

「減るもんじゃなし、いいじゃないか」

妖艶な笑みで賛成したのはクシュレア。少年達から彼女と別れを惜しむ声は、恋人と別れるときのように悲痛なものがある。

「……わかりました」

しづしづながら、答えるナルニアにクシュレアは満足そうに頷いた。

宴はその日の夜、行われた。トゥメルを上座に座らせ彼の主催と云う名目で、兵士の家族らが歌い騒ぎ別れを惜しむ為に飲み明かすのだ。

エレガの周囲には、少女らが集まり熱い視線と涙で彼女を取り囲む。一種男性的な魅力のあるエレガは少女達の憧れ、あるいはそれ以上の対象となっていた。一方のクシュレアはといえば、若い健全な若者達に囲まれて酒の相手をしている。来年から兵士としてトゥメルに仕える者や、非番の兵士など彼らの熱意を上手に受け流しつつ、酒盃を重ねていった。

カーナに至っては兵士の妻やその親達に、食べきれないほどの料理を勧められていた。小さく愛らしい彼女はその性格も相まって、彼らに絶大な人気があったのだ。

「太ってしまいますう」

困ったような声をあげて、だが食べ物をはくばくと食べる様子はまるで小動物を見ているようで、比較的年配の者たちの格好の話題となっていた。

そして、ナルニアは一人トウメルの隣に侍っていた。

兵士達の家族も、主催者であり主人であるトウメルの側に一人もいないのは、不味かろうと敢えて彼女に近寄る者はいない。

「どうぞ」

「ああ」

酒盃になみなみと注がれる酒を、トウメルは一息に飲み干す。普段なら、酔いも回ろうと言う酒量ではあったが、彼の心は醒めたままだった。

「……どうしても明日出発するか」

未練がましいことだ、と内心自嘲しながらトウメルは問いかける。

「決めたことですから」

俯くナルニアに、トウメルはそうか、とだけ答えた。

「……もし、俺が西方候主の地位にあれば、戻ってきてくれるだろうか？」

もちろん、何年か後の話だが、と条件をつけるトウメルに、ナルニアは考え込んだ。

「その時はお祝いを述べにどこからでも」

微妙にトウメルの期待する答えを与えず、ナルニアは再び酒盃を注ぐ。

再び一気にその酒を飲み干すと、トウメルは庭から見える月を眺めた。

「俺は、お前を娶りたい」

聞いた瞬間ナルニアの心臓が止まるかと思った。もしくは聞き違いないのではないかと。

「私はどこの誰が親とも知れぬ旅の者です」

「迷惑か？」

言い訳をしようとしたナルニアに、トウメルの言葉は息を突かせ

ぬ打突のように鋭く早い。

「いいえ、でも……」

「心に決めた者がいるのか？」

その問いに、ナルニアは答えることが出来なかった。その沈黙を肯定ととって、トゥメルは静かに頷いた。

「そうか」

口にした言葉のなんと苦いことか。胸を焼く炎と冷えた心がせめぎあう。この少女を守りたい、己の者にしてしまいたい。だがそれは自身の役割ではない。ソレを彼女が望んではないのだから。

「色恋に狂う者を馬鹿にしていたが、中々どうして……」

自嘲に乗せて再び酒盃を空にする。

「トゥメル様……私は」

「何も言わなくてよい」

口を開きかけたナルニアを、片手で制してトゥメルは彼女の言葉を遮った。

「歌ってくれまいか。そろそろこの宴も、おひらきにしよう」

有無も言わせぬトゥメルに、ナルニアは頷くしかなかった。

歌われるのは、四季の歌。

美しい春、厳しい夏、恵みの秋、別れの冬。それぞれの季節に見立てた愛の歌。

歌い終われば、トゥメルは宴の閉幕を告げていた。

旅立ちの日。

ナルニア達一行は、トゥメルの屋敷の多くの兵士とその家族に見送られて館を後にした。

未だ動かさないセイグリッドとセリアの二人を、よくよく頼み込んでそのまま残してもらうことにして、ナルニアは後ろ髪を惹かれる思いで旅立った。

「さてと、どこに向うかね」

ここから更に西には、ガシュベルの領地。さらには、未だ原形をとどめる西方大森林がある。一角獣や極彩鳥、物語の中でしか聞いたことがないような獅子や怖ろしい鷓鴣めえなど、人の住む領域の外へと繋がると言われている。

東へ戻れば、ガドリアとロクサーヌ。

「西へいきましよう」

ナルニアの言葉に、全員が頷く。西域の最奥、あるいはベルガデイと並ぶ要衝といえるかもしれない。トウムルよりも領地の経営が上手いと評されるガシュベルの領地を一度見てみるのもいいかもしれない。

ナルニアはそう考え、西へと進路を取る。

ベルガデイの東、入ってくるものを睨むかのように設置されたトウムルの館から、大通りを通って西へ向う。城壁に囲まれたベルガデイの市場もこれで見納め、そう思えば、ナルニア達にも名残惜しい気もしてくる。

西へ向う城門をくぐるとうした時、砂埃を上げて疾駆してくる騎馬の集団が見える。わき道にそれようとしたナルニア達を取り囲むと、槍を突きつけつつ、停止を呼びかける。

「止まれ！」

怒声に似たその声に、ナルニアの背に緊張が走る。眉をひそめるエレガと、不安そうにクシュレアを見守るカーナ。クシュレアは無表情に、彼らの動きを観察していた。

「私達は旅の一座です」

取り囲む数は、今や二十を越える。その数に抵抗を諦めたナルニアは、高い声で抗弁する。震えを隠した声で、槍を突きつける兵士を睨むが、兵士は鼻で笑うのみ。

「その件で、詮議をさせてもらう！ 衛士の詰め所まで来てもらうか！」

「そんな！」

「抵抗すれば、容赦はしないぞ」

下卑た笑みに、ナルニアの胸の中で警鐘が鳴る。

一か八か突破するのに賭けようかと、手綱に視線を落としたとき、幌馬車の中からクシユレアの声が聞こえた。

「分かりましたよ。抵抗はしません」

「クシユレアさん!？」

悲鳴に近い声をあげてクシユレアを見るナルニアに、クシユレアは視線を合わせようとはしなかった。

「……分かればいいのだ」

それ、と合図をして幌馬車の後ろにナルニア達4人は詰め込まれる。幾重にも騎馬で囲み、兵士達はナルニア達を衛士の詰め所に連行した。

「捕らえたか」

「ご指示通り、旅の一座女ばかりの4人連れに間違いございません」
細い目を糸のようにして、ガシユベルは笑った。

「ロクサーヌからの密偵か……しかもそれが兄上の屋敷に逗留していたとは」

昨日衛士の一人に密告があった。旅の4人連れ的一座は、ロクサーヌからの密偵であり、西都を探る為にトウメルの館に逗留していると。

「度し難いな」

手にした騎乗用の鞭を一閃すると、ガシユベルは立ち上がる。確証などなくともよいのだ。ただ密告があった。そのみで、西都において捕縛されても、文句は言えない。

「旅の一座は美しい女が揃っているそうで御座います、どうかガシユベル様自ら尋問をなさってくださいませ」

衛士の隊長の言葉に、ゆっくりと口の端を持ち上げると、にやりとガシユベルは笑った。

捕まったナルニア達一行が、ガシユベルの前に引き立てられたのは捕まったすぐ後のことだった。松明の明かりだけが室内を照らす地下の牢獄。

「ほっ」

淡い緑の瞳に、嗜虐の光を浮かべて獲物を丹念に観察する。

「私達は、旅の一座で何もやましいことなど」

ナルニアの言葉は頬を打つ音にかき消された。ナルニアの口元から流れる血に、ガシユベル満足そうに頷いた。

「貴様らは自分の立場が分かっていないようだ」

ナルニアの頬を打った手を、清潔な布でぬぐってからガシユベルは冷たく告げる。

「貴様らに自由に発言する権利などない。私が良いと言つまで、喋らないでもらおうか」

ナルニア、クシユレア、エレガ、カーナと順番に彼女らを眺め、衛士の隊長に顎で指図する。

「罪状を教えてやれ」

短く返事をして、衛士の隊長は彼女らの罪を数え始めた。

「王都ロクサー又よりの密偵行為、領主クレイン様への不敬罪、西都の風俗を乱す公序良俗違反……」

その他さまざまな罪を数えあげると、結論を言い渡す。

「つまり、死刑ですな」

一歩下がりに、ガシユベルの後ろに身を引く。その様子を満足そうに眺めると、ガシユベルは再び彼女らと向き合った。

「というわけだ。諸君には悪いが、ここで黒鳥どもの餌となつてくれ」

睨み付けるエレガとナルニアの視線をあざ笑うかのように、ガシユベルは告げる。

「だが、その前に君達には吐いて貰わなければならぬことがある。自ら罪を認めて、自身の罪業を深く悔いてもらわねばならぬ」

ネズミをいたぶる猫のような視線で、ガシユベルは彼女らを見下ろした。

「認めるかね、自身の罪を」

「誰がつ！」

毅然とガシユベルを睨み付けるのは、ナルニア。

「それでは仕方がない。あるいは紳士の嗜みに外れるかもしれないが、拷問を受けてもらおう。なあにすぐに罪を認めなくなる」

低く笑うガシユベルは、衛士の長に命じて彼女らを別々に連行させる。

「一番下の小娘だけは、私がじきじきに尋問しよう。他の豚どもは貴様らの好きにしてよい」

畏まって頷く衛士の隊長の言葉に、満足そうに頷いてガシユベルは自室に引き取った。

「この美しい肌、手触り……罪人の身には不相応なものだ」

「はわわ！」

ガシユベルの指がカーナの肌をなでる。広い寝台の上、鎖に繋がれたカーナはその上で、ガシユベルから逃げ回っていた。

「へ、変態です！」

「変態だと！？ 美しいものを美しいとって何が変態か！」

カーナの言葉に一々反応し、自説を述べねば気がすまないらしい。「良いか、女と言うものは少女の頃が最も美しいのだ。成人を終えたばかり、あるいはその手前……はちきれんばかりの肌のつや、穢れを知らぬその瞳、未だ成長過程にあるその四肢……お前のこの肌のように」

「何を言うのですか！ 女はお姉さま達のようにほんきゅほんが良いに決まっているではないですか！？」

「くだらぬ！ 胸と尻がでかいだけの女など牛にも劣る！」

喧々囂々の言い合いの中、ハツと気づいたようにカーナはガシユベルにたずねてみる。

「そ、それでお姉さま達はどうなったのですか!？」

「知らぬ! あのようなメス豚ども衛士の良い相手であろう。さあ、いい加減観念しろ!」

引き寄せられる鎖に、必死に抵抗するが大人の男の力の前にはやはり無力であった。

「いやですつたら嫌です!」

ガシユベルの舌がカーナの首筋から、腕を舐め上げる。

「ひゃ!」

その冷ややかさに、思わず声をあげてしまう。

その声をいやらしい笑みを顔に浮かべて確認すると、ガシユベルは更に彼女を舐め回す。腕から、腹へ腹から足の指先へ、そして徐々に上へ上がっていくガシユベルの舌に、カーナは奇声をあげる。

「何をしますか! 変態い!」

ガシユベルは今までに何度も少女を蹴ってきたが、今までの見目麗しい少女は、ただ震えているだけの者がほとんどだった。たまに抵抗する者もいたが、裸に剥いて鎖に繋がれば、その抵抗はほとんどないに等しくなる。

だが、この少女はどうだろう。今までの少女との違いと言えば、全く抵抗をやめないとところにある。そしてその抵抗は、言葉によるものと、ガシユベルに自由を奪われそうになった時、するりと抜けていく程度のものでしかない。

腕力では明らかに、ガシユベルに分がある。

ガシユベルは女と言うものに対して、支配者として君臨したかった。

そのような願望を持つもには、時として全く抵抗されずになすがまま支配を受け入れるより、軽い抵抗をしてくれた方が、自分の優位を確認できる。

先日雇ったカチューシャと言う少女は、六日もたたぬうちに、魂

のない人形同然になってしまった。あれではいくら美しくても面白くない。

「時間はたっぷりある……」

呟いてガシユベルは、カーナをひっくり返しうつ伏せにする。

「何するですか!？」

「知れたこと」

首筋から、背中に沿ってガシユベルの舌がカーナの肌を這い回り、手はその可憐な腰から下を指先で撫で回す。

「ばかばかばか、へんたいへんたいへんたい!」

カーナの暴言に、嗜虐の笑みを噛み締めながら、ガシユベルは愛撫を続けた。

その知らせを、トゥメルが受け取ったのはナルニア達がガシユベルに捕まってから既に1日が過ぎていた。

「な、に……!？」

かすれた声になったのを、トゥメル自身は気がつかなかった。

「ガシユベルめが、ナルニア達を攫ったと、そういうのか!」

事実を確認するにつれて、怒りが込みあげる。握った肘掛を握りつぶしてしまいそうなほど、きつく握ると、トゥメルは部下に確認をする。

ただしくは、密告されての拘束だが、今の彼にはどちらでも良かった。

「……許せぬっ!」

ぎり、と奥歯を噛み締める音が、近くのものにまで聞こえた。目は血走り、身体はわなわなと震える。

「兵を集めよ、ナルニアを救う!」

立ち上がると腰に差した長剣で、自身の座っていた椅子をまっ二

つに斬つて捨てる。

「おのれえ、ガシユベル……」

自身の名誉や身体をいかに傷つけられたとて、これほどの怒りはない。男にとつて最も苦痛なのは、自身の大切な人を傷つけられたときだ。

荒い息を吐き出すと、大またに歩いて自身の部屋に戻る。

「鎧だ。急げ」

追いついてきた家宰に、命じて召使達を集めると、鎧を着込む。

着終える頃には、トゥメルの屋敷には既に彼の配下の歩兵達が集まってきた。

集まった兵士に向つてトゥメルは、檄を飛ばす。

「戦友達よ！ 俺は今日と言う今日は我慢の限界だ！ 盗賊の討伐も出来ず、武の何たるかも知らぬ！ そのような弟が我が物顔で、俺達のベルガディを取り仕切つてやがる」

鞘ごと剣を腰から抜いて、地面に突きつける。

「ベルガディを本来あるべき姿に戻そう！ 奴ら女の腐つたような衛士どもに、誰がこの町の主人なのか思い知らせるときが来た！」

トゥメルの怒りが乗り移つたかのように兵士達は猛り、喚声をあげる。

「お前達の家族に聞いてみるがいい。お前達の家族の心を慰めてくれた旅の一座を覚えてるか！ よりにもよつてガシユベルらは可憐なその娘らを攫い、辱めている！ 許しておけるか！？」

許せぬ！ 声は幾重にも重なり地を揺るがす。

「旅の一座を、救い出せ！」

応える声と共に、長槍で宙を突き刺す兵士達。

トゥメルを先頭にして、西域で最強を謳われるトゥメル歩兵団が出撃した。

王都ロクサーヌ。

晩春から初夏にかけて日々暑くなって行く日々、木々は花から葉に衣替えをし、人々は新緑の葉に目を細める。道を往来する人に降り注ぐ容赦のない日差しは、石造りの道の両端に植えられた木々のこずえによつて遮られ、人々にひと時の憩いをもたらしていた。

貴族と平民の推挙により、玉座についたカル。新たな国の創設と言う途方もない事業に、彼は忙殺されていたが、その身边を守る近衛の長となったシュセもまた多忙であった。

何しろ人がいない。

むろん、侍従や召使など、カルが王として召抱えている者に不足はないのだが、カルが信頼し、忠誠を誓う人材がカルには不足していた。

文官では、転向組みのファイファイや気弱なベルモンドあるいは旧十貴族の生き残りである一つ目鴉家のテクニア。ここにヘリオンが居れば過不足なく国を運営できたろうに、彼は既に故人となつてしまつた。

逆に武官を問われれば、まず近衛の長としてシュセ。そしてしばらく姿を見せないエルシド。だが果たしてこの男を信用してよいのだろうか、とシュセは疑問に思う。彼の元をやつたアンネリーからは、逐次連絡を受けているが、それでも不安だつた。

僅かに二人、その状況にシュセは危機感を覚える。

シュセはカルが王となる以前は軍勢を率いる事も、なんら危機感をいただかなかつたが、カルが王となつて以降彼自身で軍を率いることに疑問を感じていた。

確かに兵士達の士気はあがる。しかし、カルが負傷でもしようものなら、この国の機関は全て止まるといっても過言ではないのだ。その危険を冒してまで、彼が前線にとどまる理由はないのではないか。

「入ります」

夏の日差しを遮って、窓からは涼風が吹き込む。

近衛の長となつたシュセには、カルの執務室に程近い場所に部屋を与えられていた。

「どうぞ」

開かれた扉から入ってきたのは、近衛の中で彼女の次席を与えられているクラウゼとユイルイだった。

傭兵上がりのクラウゼと、若手貴族のユイルイ。普段なら全く接点がないような二人だが、意外とこの二人は仲が良い。

「ユイルイ・ロウヘイア並びにクラウゼ・ジユネお呼びにより参上いたしました！」

型通りの敬礼をしてユイルイが踵を打ち鳴らした。

「よくいらしてくれました」

ぼんと、手を打ち鳴らして笑顔を見せるシュセに、クラウゼがたずねる。

「なんでも、火急の用件とか、戦ですか？」

手柄を立てるには戦場が一番、と普段豪語するクラウゼの目に期待する光がある。

「似たようなものですね」

口の端を歪めて僅かに笑みを見せるクラウゼと、眉をひそめるユイルイ。

「似たような、とは戦ではないのですか？」

ええ、違います。と断つてから一枚の書面を差し出す。

「拝見します」

「なんて書いてあるんだ？」

字が読めないクラウゼは、ユイルイに説明を求める。

「……クラウゼ、良かったな。お前はしばらく子供らに混じって私学へ行くらしいぞ」

「はあっ!？」

素っ頓狂な声を挙げるクラウゼに、ユイルイも眉をひそめる。

「女神様そりやないですよ!？ 俺は勉強なんてしたことねえもん!」

10歳も年下の上官に対して、酷いとばかりに抗弁する男の図はいささか滑稽であったが、当人にすれば大真面目であった。

「誰が女神ですか!」

「クラウゼは良いとして、なぜ私は地図の作成など……これは文官の仕事ではないですか!？」

「黙りなさい!」

一喝して、二人を黙らせると、教師のような口ぶりで二人に諭す。「良いですか? まず、クラウゼ殿貴方部下に命令書を読んでもらっているらしいですね?」

「ええ、まあ」

「それで部下を率いるつもりですか? 示しがつきません。文字の読み書きは最低限できるようになりなさい。さもなければ降格です!」

「ひでえ」

捻りも何も無い率直な感想が、クラウゼの口から漏れる。それを聞かなかつたことにして、シュセは憤然としているユイルイに向き直る。

「ユイルイ殿、王都近郊のハラムスの丘はご存知?」

「いえ……」

「では、大河ポルレにおいて船の付ける浅瀬の場所は何箇所あるかご存知?」

「いえ……」

「では、王都から各都市に伸びる道の幅はどれくらいで、何人が通行可能?」

「わかりません……」

「ちなみに、クラウゼ殿はご存知?」

「ハラムス丘は、あれだろ……歩いて半日ぐらいの頂上がだっぴるい丘で、ポルレの浅瀬は四箇所。道幅は三人が並んで歩けるが、兵糧とか積んだ車が一緒なら一列だなあ」

常識だろう、と言う視線を投げかけるクラウゼ。苦虫を噛み潰したようなユイルイに、シュセは改めて宣言した。

「行きなさい！」

「……はい」

うな垂れるユイルイに、不満たらたらクラウゼ。二人を前に、シユセは言い放つ。

「良いですか、貴方達にはわたくしのみならず、陛下におかれましても期待しているのです。剣の腕だけでなく、その指揮手腕を磨きゆくゆくは、軍の中枢を担ってもらわねばなりません。兵の手本となるべき将が、字も読めなく地理も知らないでは、この国の行き先は暗雲立ち込めるものになるでしょう」

ですから、と言い置いてシユセは二人の生徒に指導する。

「ユイルイ殿、クラウゼ殿頑張ってくださいね！」

にっこりと微笑まれると、不承不承ながら頷かざるをえなかった。シユセの部屋から退出すると、二人はため息を尽きつつ廊下を歩く。

「まったく、お姫様の気まぐれにも困ったもんだなあ……」

「確かに、だがシユセ様の言葉にも一理ある」

二人で顔を見合わせると、同時に言葉にした。

「馬鹿は将にはなれない」「世間知らずは将にはなれねえ」

互いに眉を少しだけ跳ね上げて、自身のやるべきことを確認すると、下された命令に従うことを決めたのだった。

西域の主8（後書き）

年末休み素晴らしいですね。

読者の皆様には感謝しきりです。

この小説の総合評価が100ポイントを越えました。
ありがとうございます。

感想などもいただけると嬉しいです。

西域の主9

怒れるトウメルに率いられた彼の軍団は、獣の群れに近い。町中に情報網を張り巡らせていた衛士達も、万全の備えをして迎え撃つがトウメルが先頭となり突撃するたびに、押しまくられ死傷者を出して敗退を重ねていた。

西域において当たる者なし、と評されるトウメル歩兵軍の本領だった。トウメルの館に集まった兵士は全軍の半数以下。それでさえ西都ベルガデイ全体を守る衛士を歯牙にもかけない。

「このまま拘留所に向かう！」

衛士の槍を跳ね退け、堂々たる声で宣言する。

勇躍する兵士たちに、トウメルは満足げに頷いた。

慌てたのは衛士の隊長だった。ほうほうの体で逃げ帰った部下の報告に、一刻の猶予もないのだと知る。

「あのケダモノめ！」

かつてはそのケダモノに仕えていたことなど、彼の頭にはない。

「こうなってはもはや仕方ない。ガシユベル様に応援を頼みに行く！」

身一つで馬を駆りガシユベルの屋敷へ向かう隊長。部下に対して何の指示もしない彼のために、部下たちは三々五々自身の判断で行動を決めねばならなかった。その場にいた多くの衛士が、トウメルの怒りの矛先が今にも自分に向かってくるのではないかと恐れ戦き、トウメル歩兵軍の勢いを阻むものは何も無いように思われた。

そしてその報せは、ガシユベルよりも早く彼らの父である西方候主クレインの耳へと入ることとなる。ただし、伝えたのは衛士であるがために、その報告は誇張と曲解を含んだものになった。

長兄トウメル、西方候主への野心をむき出しにし謀叛！

その一報は、支配者であるクレイン、ガシユベルはもとより、市民の間にも瞬く間に広がった。逃げ出す衛士達があまりの恐怖に、

叫びまわったからだ。

西都の中央市場は狂騒状態となり、逃げ惑う人にもみくちやにされ、必要以上の犠牲が生まれた。

「トウメルが……？」

まさかと思いつつも、クレインはすぐに西都を捨てる決心をする。自身が兄を謀殺したときも、まさかと兄は思ったに違いないのだ。誤報ならば、すぐに西都へ戻れる。何はともあれ、命があつてのことだ。

一方のガシユベルは、最も早くその報告に接することができる立場にしながら、カーナとの情事に溺れ報告に来た隊長に面会すら許さなかつた。

普段からガシユベルを恐れること、雷を恐れるがごとの彼の屋敷の使用人達が、ガシユベルの怒りを恐れるあまり、衛士の隊長を予約がないことを理由に面会を許さなかつたのだ。

そしてその遅れがガシユベルを窮地に追い込む。

衛士の宿舎を襲撃したトウメルは、ナルニア達の姿がないことに怒り狂い軍の矛先をガシユベルの屋敷に向けたのだ。貴族としての趣向を凝らしたガシユベルの館では、トウメル率いる軍勢を迎え撃つなど到底不可能だつた。

その段になつてやつとガシユベルは兄トウメルが兵を興したことを知るようになる。使用人たちを腕力でもってねじ伏せ、衛士の隊長がガシユベルの閨の扉をこじ開けたのだ。

最初こそ怒り狂っていたガシユベルだが、衛士の隊長の話を聞くにつけ顔色は赤から青くなつていった。

「狂つたか！ あの男は！？」

怒りも露に、衛士の隊長を怒鳴りつけたガシユベルは、貴族の見栄も何もかも打ち捨て馬に飛び乗った。

西都のトウメルの歩兵から逃げ切りさえすれば、彼らを叩き潰す機会はいくらでもある。なにせ彼らは補給すらままならないのだ。ガシユベルの領地に逃げ込めば、どうとでもなる。侍従の手から手

綱をひつくと、開門を叫び門から飛び出す。

このままではトウメルに八つ裂きにされかねない衛士の隊長以下、少数の者がそれに続く。馬を持っていないものはその場に見捨てての逃亡。

だがそれは西都の城門をでる前に終止符をうたれることになる。

「いたぞ。ガシユベルだ！」

城門を先に固めたトウメルの歩兵の声に、ガシユベルは青ざめた。

「何たることだ！」

悲鳴をあげ、後ろを振り返る。

「奴らをなんとかしろ！」

わずかな伴である衛士の隊長らに命じる。

「私が生き残らねば、貴様等も死ぬのだ！ 命を惜しむな！」

トウメルの歩兵らは10人にも満たない。騎馬である衛士は僅かに12人。覚悟を決めた彼らと、門を守るトウメル歩兵達の間で、激烈な戦闘が行われた。強いはもちろんトウメルの歩兵達だ。戦を前提として訓練した兵士と、取締りを目的とした衛士では動きからして違う。

だが、衛士達には馬があつた。馬上から振るわれる武器は足りない実力を補つて余りある。

戦力的にはほぼ互角の戦いが繰り広げられた。トウメルの歩兵が馬上の衛士を槍で叩き落とせば、一方では衛士の振るう長剣がトウメル歩兵の頭を割る。

一進一退の攻防はガシユベル達を追ってきたトウメル歩兵の喚声で一気に均衡を失う。挟撃されるといふ恐怖に、後がないことも忘れ衛士達は背を向けて逃げ出した。

「な、何をしている！？ 戦え！」

馬上で声を張り上げるが一度恐怖に火がついた衛士達には届かない。

「くっ……覚えておれよ」

無駄だとわかれば、ガシユベルの行動は素早かつた。門に向かつ

て馬を走らせるべく、鞭を振り上げる。幸い散り散りになった衛士の背中を襲うのに夢中で、歩兵達はガシユベルの動きに注意を払っていない。その空隙をガシユベルは縫うように、馬を走らせた。

門までは後少し、目の前を遮る兵士はもはやない。自身の勝ちを確信して振り向いたガシユベルは、驚愕とともに目を見開いた。

「ガシユベエエル！」

地を揺るがせ、天をも震わせる怒声はトウムル本人のものだ。

「兄上……」

トウムルが手に持つのは、投擲用の短槍。渾身の力で空へ向けて投げられた槍は、放物線を描きながら、ガシユベル目掛けてまるで吸い込まれるように落ちてくる。

「馬鹿な!？」

吐き捨てると同時、ガシユベルは必死に馬を御す。だがその度に、争う兵士の壁に阻まれ馬の方向を変えられない。

馬という生き物は本来臆病な生き物だ。それを戦に使うなら、それ相応の訓練を施さねばならない。だが、貴族趣味のガシユベルは戦の匂いのする馬を嫌った。

馬は優雅なものであると信じていた彼は、体格が立派で毛並みの美しい馬。つまりは外見の美しさだけを追い求めた。

結果、彼の愛馬は障害物に当たることも飛び越えることも出来ず、隙間を走り抜けるだけしかできなかった。

トウムルの投げ槍は、ガシユベルの馬の頭上を越え、今まさに門を出ようとした目の前に突き立った。

突然眼前に柱のごとき投げ槍が生えた馬はたまったものではない。いなく馬にガシユベルは愛馬を静めるだけの技量を持たなかった。たちまち振り落とされ、地面の上を転げ回る。そこをトウムルの歩兵達が寄つてたかつて押さえつけた。既にあらかたの衛士は捕らえられるか、撃ち殺されている。逃亡に成功したものは、ほんの僅かしかいなかった。

トウムルの前に引き立てられたガシユベルは、幾重にも縄をかけ

られまるで罪人のような有様だった。その様子を冷然と見下ろすトウメルに、ガシユベルは口元を歪めた。

「いい気分だろう、兄上だが覚えておれよ。父上はきつとお前を許しはしない」

嘲るガシユベルに、トウメルは黙って首を振った。

「あの男はお前の復讐など考えるものか。それより、ナルニアはどうした？」

「ナルニア？ ああ……あの旅の芸人どもか」

「そうだ。貴様が故無き嫌疑よって捕らえた者たちだ」

心底不思議そうな顔をして、問い返すガシユベル。彼としてはなぜ、彼女らのことを兄が聞くのかが理解できない。

「ふん、知らぬ。そんなもの達より自分の心配をしたらどうだ？」

「俺のことなどどうでもいいのだ！」

目を見開くガシユベルの視線が、怒りにゆがむトウメルの顔を捉える。

「あ、兄上……く、まさか……クッククク、惚れたのか？ どの馬の骨ともわからぬ、あのような下賤の娘に！」

湧き上がる嘲笑に苦労しながら、ガシユベルは問い返した。

「貴様に何の関係があるう」

怒りの視線はそのままに、トウメルは吐き捨てる。

「クッククク、アハハハハ！ これが笑わずにいられるか！ 西方候主の長兄にして、トウメル歩兵軍の指揮官ともあるう人が、旅の芸人に心を奪われるか！」

涙さえ浮かべて笑い転げるガシユベルを、トウメルは無理矢理引き立て、その頬を殴りつけた。

「貴様は、俺の質問にだけ答えればいい。ナルニアはどこだ！？」

丸太のような腕で殴りつけられ赤くはれ上がった頬に、嘲笑を浮かべ、ガシユベルは口を開いた。切れた口内なら血が滴り落ちるが、そんなことは問題ではなかった。

「クッククク。そんなことなら、あの女も自身で尋問をすればよか

った」

「無事なのか！？ 答えるガシユベル！」

「さあ、知らぬ」

「知らぬはあるまい！ 貴様の命令により捕らえたのだろう！？」

「フッフッフ、本当に知らないな。衛士に好きにしろと命じたからな」

ガシユベルの言葉に、トウメルが凍りつく。

「フハハハ、奴らは品性というものがないからな。想像してみるがいい……穢れを知らぬ娘が野卑な男どもに陵辱されるさまをつ！」

おかしくてたまらないと、笑うガシユベルを震える手で突き飛ばすと、トウメルは低く重い声で言った。

「……よく、わかった。殺せ」

「なに！？ 殺すだと、待て！ 兄上！」

制止の声を無視して、トウメルは歩み去る。

ガシユベルの断末魔が、その背を追うように聞こえてきた。

横殴りの雨の中を、一騎の使者が西から東へ走りぬける。雷鳴がその姿に陰影を刻み、雨よけのフードはほとんど意味を成していない。石畳とは言わないまでも平坦に舗装された街道を走る使者の顔色は、被ったフードの隙間からでも見える緊張した面持ち。雨に叩かれる視界の中に、街の威容を見出すと使者は馬に最期の鞭を入れた。

スカルディアの屋敷の執務室で政務を行うカルの元へ、その知らせがもたらされたのは正午を回る頃であった。

「確かに、本人か？」

知らせを運んできた気弱なベルモンドの顔には、弱りきったとい

う表情が明らかに見て取れる。隣でため息をつきつつ、話を補強するのはフィフィだった。下町の主婦といわれればそのまま通ってしまいそうな風貌に、こちらも困りきった表情で頷いた。

「間違いないね。私は一度お顔を拝見したことがあるんだ。オウカ・ジェルノ本人だったよ。しっかり足もついていたか確認もしたしねえ」

何を今更迷い出たのか、三人とも共通の思いでため息をつく。

「ならば、会わねばなるまい」

「慎重にねえ」

「謁見の用件につきましては、至急の用事ということでしたので伺っておりません。身体の検査も実施しましたが、怪しいものはこれといって発見できませんでした」

緊張のためか早口になるベルモンドに、カルは頷いた。

「待たせてあるのだな？」

頷く二人に、カルは立ち上がる。

「シユセ殿は先に近衛を率いて謁見の間に」

ベルモンドの言葉に軽く頷いて、カルは謁見の間に向かった。過去からの黒い影のように忍び寄る、オウカ・ジェルノに不吉なものを感じながら、それでもその足は迷うことはなかった。

「陛下の御なりにございます」

謁見の間に響く侍従の声とともに、控えていた騎士達が一齐に剣を石の地面に突き立て敬意を示す。両手を柄頭の上においた、その威風堂々とした姿は謁見者を威圧するに充分だった。

オウカ・ジェルノはその痩せた体を小さく平伏させて、カルがその部屋に入るのを待っていた。近衛の騎士達の緊張が伝わるように、その部屋にはガラス張りのような緊張感が漂っていた。

「聞こう」

玉座に座るカルの声が降って来る。飾り気の無いその声に、オウカは内心笑った。露骨ではないにしろ、相手に感情を悟らせるようでは、まだまだ未熟、と。

「陛下におかれましては、ご機嫌麗しゅう。先の動乱のおり、負傷をいたしました。長らくロクサーヌを離れていました。不在の間の不手際につきましては何卒ご容赦を賜りますよう」

「いっそのまま永遠に戻ってこなくて良かった。というのは、おそらく新王朝全員の見解だったはずだ。無言のうちに発せられる近衛からの殺気のような気迫に、オウカは平伏したまま笑う。

「それで、至急の報せとは？」

「これ以上下らぬ世間話などする暇は無いとばかりに、カルは本題に入る。

「このたび、西よりひとつの知らせがありました」

西　の言葉に、カルの隣で待るシュセにわずかばかり、緊張感が漂う。

「西都謀叛」

常なら揺るぎもしないカルの冷たい顔が、僅かに曇り、シュセは思わず平伏するオウカを凝視した。

「首謀者はクレイン・ノイシュタット並びに、長兄トウメル……シュセ・ノイスター殿の、叔父上でございますな」

苦渋をかみ締めるシュセと、驚きに僅かに目を見開くカル。オウカは平伏したままで、内心せせら笑っていた。シュセの血筋。その言葉に、謁見の間にはわずかなざわめきがおきる。近衛は礼儀正しく口など聞いたりはいしない。

威厳を保つために不動の姿勢を保っている。だが彼らにも耳はあり、目はあるのだ。僅かに視線を見目麗しい少年王とその忠実なる女の騎士に、向ける。その少しばかりの動きが、謁見の間のざわめきとなった。

「西都が、謀叛か……なるほどご苦労」

近衛の騎士達の耳目を集めているのを意識しながら、カルは口を開いた。このままオウカを返したなら、近衛の口を通じてあらぬ噂が広まるかもしれない。

シュセが西都に通じている。

そんな根も葉もない噂で、シユセがその能力に見合ったものを奪われるなどカルは想像したくも無かった。だが現に、過去には噂程度で、職を解かれた者もあつたのだ。

そしてシユセの性格を考えれば、その想像は現実味を帯びることさえありうる。

「討たねばな、シユセ？」

何気なくカルが言ったその一言に、近衛は今度こそすべての耳目を奪われた。

「御意。できますならば、我が眷属の不始末は我が手にて雪ぎたくございます」

一礼するシユセに、カルは満足げに頷いた。

「オウカ老、敵の数はいかほどだ？」

視線は一斉にオウカに戻る。

「おそらく4000程になるかと」

「おそらくとはどういうことだ？」

冷たく鋭いカルの声がオウカを打ち据える。肘掛によりかかり、悠然と足を組みながらオウカを見下ろす瞳は、湖水の色を湛えて射殺さんばかりにオウカを睨む。

「主力は長兄トウメルの歩兵1000で間違いはございません。そして雑兵を採ると考えられますので、およそと申し上げたのでございます」

僅かに顔を上げたオウカのしわくぢな顔には、張り付いたような笑顔がある。

「民を戦に駆り出すのか」

「西域は臣民一体の地でございます。民と領主が一丸となって開拓に勤しんだため、今日の繁栄があるのでしよう。ならば民が戦に赴くとして何の不思議がございましょうや？」

決してカルに瞳をあわせず、オウカは西都の情報を述べる。

「ご苦勞」

「陛下のお役に立てたのなら、わが身の誉れ」

傲然と立ち上がると、謁見の間を後にするカル。一瞬だけ、オウカを睨み付けたシュセが黙ってその後続く。

カルとシュセが退出したのを確認して、咎められることの無いように慎重に、だが必要以上に畏まらずオウカは退出していった。

「戦か」

「内乱だな」

主役の消えた謁見の間では、近衛の一人の呟きにみな押し黙ってその部屋を出た。

自室に引き取ったカルはひとつ息を吐き出した。

「さすがに、一筋縄ではいかないな。あの老人は」

一人呟いて眼前にいない古狸を睨む。

「陛下！」

遅れて走りよったシュセに、カルは振り向いて咎めるような視線を送った。

「二人のときは、名前でいいと言ったろう」

「失礼しました。しかし」

「わかっている。西都の件だろう？ すまなかったな。いきなり無理なことを言い出してしまって……だが良く合わせてくれた」

人前では滅多に見せない笑みをシュセに向けて、カルは微笑む。

「あれは本心です。カル様の国に仇成す者をわたくしの眷属から出してしまったことは、万死に値すると思っています」

「思えば、私はシュセのことを何も知らないな……」

カルはシュセの生い立ちを知らなかった。オウカの話が本当ならシュセは、西方候主に連なる者となるはずだった。

今は遠い昔のように感じてしまうが、彼と彼女の最初の出会いはシュセが奴隷の鎖につながっていたとき。シュセはカルの母にこそ話をしたが、カルには西方の出身だとして報せていなかった。

「甘えなのだろうな」

自嘲気味に口の端を歪めるカルに、シュセは首を振る。

「いえ、お話しなかったのはわたくしの落ち度です。まさかこのよ

うな形でご迷惑をおかけしてしまうことになるうとは……」

「では、聞かせてくれるか？」

頷いた彼女の琥珀の瞳に映るのは決意の光だった。

西域の主9（後書き）

長い間お待たせして申し訳ありません。
やっと更新です。

西域の主10

シュセの語る話を聞き終えたカルは、静かにだが断固とした声でシュセに問いかける。

「2000の兵しか出せない。やってくれるか？」

「我が命に代えましても」

膝を突き最敬礼をするシュセは、腰にかけた銀の細剣を握る手に僅かに力を込めた。

一人になつたカルはこれからの対処について考えていた。2000の数は、敵の総数を考えれば決して多くはない。だが、ロアヌキアにはそれ以上の兵を派遣する余裕は無かった。

対岸のポーレは不審な蠢動をやめず、東都ガドリアに至つては、領主が殺され新たな領主が誕生したという。表情にこそ出さないが、新たな領主は、カルが心底憎む賊徒らしい。

南都ジェノヴァはジェルノ家と関係が深い。カルの足を引っ張ることすらあれ、助けるつもりなどないだろう。シュセの話聞きながらカルは今出せる兵力を計算していたのだ。

幸いなのは敵が連携してロクサーヌに牙を剥かないことだった。連携の取れない敵ならば僅かな兵力しか手元になくとも、恐れるに値しない。

2000を送り出しても、カルの手元には1000を超える兵力が残っているのだから。ポーレ、ジェノヴァ、ガドリアいずれに対しても対処可能のはずだ。あるいは、カルへ刃が届くと思わせた方が、反乱の芽を摘むのに良いかもしれない。

オウカが政治の表舞台に返り咲いたことにより、敵味方の区別が以前にも増して難しくなっていた。表立って反抗するのはまだいい。表面的にはカルに従順に、影では寝首を掻こうとしている輩が、横行するのが問題だった。

オウカを釣る餌としての自分の価値を、カルは確かめ、またそれ

その勢力への対処も優先順位をも併せて短い時間で考えていた。「やはり、オウカ・ジェルノか」

獅子身中の虫。取り除くべき敵は、すぐ身近にいる。

ならば、オウカを釣る餌としての自分を前面に出す必要がある。同時に、動揺しているはずのスカルディア派の貴族らをつなぎ止めねばならない。

策が必要だった。

クルドバーツの経営する店は、近頃ロクサーヌの中に本店のほか支店までも出していた。

武器と防具を扱う店の中では量こそ、大手の店に劣るものの、質の面では大手の店にも負けないと自他共に認めるところだった。

でっぴりと張り出したお腹を揺すりながら、上機嫌で店の経営状況を確かめる。サギリからの恐喝紛いの提案により、出て行った金がやっと取り戻せそうだった。

「まずまず」

満足しながら帳簿を閉じると、大旦那と呼ばれるのは同時だった。

「あの、東都からお客様です」

「どんな方だね？」

「二人組のお客様です」

若い手代に一瞬だけ、不審な視線を向けるが、すぐにニコニコとして奥に通すように指示を出す。

「ルカンド殿か、サギリ殿からの使者かな？」

それでもクルドバーツの上機嫌は変わらなかった。

地下二階には様々な武器防具が並び、地上の店の二階は応接間に

なっていた。豪華とは言えないが、品の良い調度品の設えられた応接間の扉を開けた瞬間、クルドバーツは悲鳴をあげた。

「よお、クルドバーツ」

商人にとって金は武器である。武人にとっての剣が槍がそうであるように、商人に取ってはなくてはならないものなのだ。

「サ、サギリ殿!？」

サギリの横でむすっとした表情で立っているのは、魔女の狼と囁かれるジンの姿。商人にとって奪う者と武器の通じない相手の天敵である2人のいきなりの出現に、クルドバーツは先程までの上機嫌も忘れ、心から信じてもない神に祈った。

目をつむり、夢であれば覚めてくれと念じて手を合わせても、やはり不敵に笑うサギリの姿は、クルドバーツの前にあった。

「祈って助けてくれるような暇な神様はいねえよ」

「あ、いや、その……」

しどろもどろに答えるクルドバーツを横目に、サギリは窓から外の風景を眺めた。

「随分、繁盛してるじゃないか？」

「ええ、まあ」

思わず視線を外すクルドバーツに、サギリは口元を弦月に歪ませた。

「最近のロクサーヌの様子はどうだい？」

椅子に腰掛けると、行儀悪く背もたれに寄りかかり、問い掛ける。

「西都で、謀叛だそうですね。それから、オウカ老が姿を現したと……」

ああ少し前になります、裏町の賊が一掃されたらしいですよ」

一瞬サギリの瞳に、厳しい光が走るがクルドバーツは動転した気持ちは落ち着けようと、それどころではなかった。

「……なるほどね。ルカの策が図に当たってきたわけか」

底光りする圧力さえ感じる視線は、クルドバーツの口を自然に閉じさせた。

「出張ってきた甲斐があったねえ。ジン？」

サギリの威圧感の前に、すっかり気配を隠していたジンにサギリは視線を投げた。クルドバーツには今までジンがそこにいたことすら、ほとんど意識の外にあった。

「王様ってやつを殺すのか？」

ジンの静かだが、よく通る声にクルドバーツは一瞬凍り付いた。気負いも脅えもなく夕食のメニューを決めるような気軽さで、一つの国の頂点に立つ人間を殺すと言い切る目の前の男に、まるでそこにいるのが自分と同じ人間ではないような恐怖を感じた。

「ふん、さあてね。まあ焦ることもないだろう？ ルカにやった期限はまだだし、たまには過程を楽しんだらどうだい？」

呆れたような視線を向けるジンに、サギリは妖しく微笑んだ。

「で、だ」

一転してクルドバーツに視線を向けると、悪戯好きな少女のような笑みを見せて告げる。

「しばらく世話になるから、ねぐらの手配頼むぜ」

目眩がクルドバーツを襲った。

ガシユベルを討ち取ったトウメルは、クレインが西都から姿を消したことを知る。弁明のために訪れたクレインの館で、怯える召使いから聞き出したことによれば、西方に逃れたそうだ。

「ガシユベルの領地か」

低くうなづいて、その意図を考えなければならなかった。恐らくは逃げ出した衛士か、侍従などからトウメルが兵を挙げたことのみを聞いて逃げ出したのだらう。

臆病にも似た猜疑心が疼き、血のつながった息子と言えども、信じることはできなかつたに違いない。

「ガシユベルの領地へ兵を向ける」

トウムルは誤解されたまま争うのが嫌だった。ガシユベルの仇と罵られ、正面切つて戦うならまだいい。だが、野心を剥き出しに、西方侯主の地位を狙つたなどと言われるのは心外だった。

ナルニアの事は気掛かりだったが、ガシユベルを討ち果たして後、トウムルにはやるべきことが多すぎた。

ガシユベルを殺した興奮から醒めれば、愛する部下たちの縋るような視線が、胸に突き刺さった。

愛するナルニアをこのまま追い掛けて、自身に付き従ってくれた部下たちが処罰を受けては、やりきれなかった。

トウムルは迷つたが、迷いを断ち切るように、クレインの屋敷の扉を叩き壊した。

信頼できる部下に、ナルニア達の搜索を任せると、ベルガデイの西に広がるガシユベルの領土へ兵を向けた。

トウムル来たる！

雷鳴にも似たその報せは瞬く間にガシユベルの領内に広がった。前後してガシユベルの死とクレイン逃亡の報も、駆け巡る。ガシユベルの領内は蜂の巣をつついたような騒ぎだった。

唯一の戦力であるガシユベル麾下の騎馬隊は、降伏と徹底抗戦の議論で真っ二つに分かれ、領内の政治を預かる代官たちは、家族を連れて逃げるのに躍起になっていた。

誰もが、亡きガシユベルとトウムルの不仲を聞き知っていたし、争いを止められるはずのクレインは既に逃亡したと思われていたからだ。

ある村落は村人全員で山中に身を隠し、またある村落ではガシユベルの圧制からの解放者として歓迎した。

だがその中トウムルの心中は沈んだままだった。彼の心中を反映してか、歩兵軍は粛々と進み、時折ある小さな抵抗を潰し、一月掛からない内に大森林からベルガデイへの西方の地域を占領してしまふ。

「そうか」

最後の組織的抵抗を鎮め、ガシユベルの館を占領したトゥメルの感想は一言だけだった。結局彼がこの西方地域を制覇する間にもナルニアの無事を報せる部下からの連絡はなかったのだ。

ガシユベルの領地で代官をしていたものを、無理矢理自身の前に引き出すとトゥメルは冷たく命じた。

「貴様らの主は死んだ。選べ、俺のために働くか、それとも家族もろとも死か」

一喝されて逆らえるような気骨のある者はその場にはいなかった。ひれ伏す彼らの姿確認すると、トゥメルはベルガデイへ引き上げた。

カルの命を受けたシュセは、2000の兵の編成に当たっていた。だから、なんで俺らを連れて行ってくれねえんですか!？」

カルの執務室の隣室、近衛の長としての執務室に、半ば自棄になった怒鳴り声が響いた。

「何度も言っているではありませんか。陛下の御身を守るべき近衛が軽々しく動いては、国の威信に関わります」

クラウゼの怒声に答えるシュセは、いたって平静だった。

「それじゃせめて、俺だけでも!」

「私も同感です。一平卒としてでもかまいません! ぜひ!」

クラウゼのように怒鳴りはしないが、一步も引かないという気構えを見せてシュセを見つめるのはクラウゼの“相棒”の地位が確立されつつあるユイルイ。

ため息をつきつつ、シュセは二人を眺めた。

「良いですか? わたくしがいない間近衛をまとめるあなた方がいなくなれば、一体どうなります? 一体誰が近衛をまとめるのです?」

もう少し考えて発言をなさいと、シュセは手元の書類に羽ペンを走らせる。

「シュセ様の實力は知っていますが、一人で2000人も兵を指揮するのは無理です。優秀とは言いがたいかもしれませんが、せめて気心の知れた部下を率いるべきです！」

「そうだそうだ！」

「あら、それなら大丈夫ですよ」

ユイルイの反論に、シュセは何でもない事のように答えた。

「スカルディアの私兵の中から、幾人が融通していただきました。熟練の兵たちで、わたくしも気心の知れた彼らを率いていけるのです。ご心配には及びません」

ぐつと、言葉に詰まるユイルイと、クラウゼ。

「お話が以上なら、お仕事に戻りなさい。時間は無限ではありませんせんよ」

「……失礼しました」

不承不承頭を下げるユイルイに、クラウゼも慚然としたまま従った。

ひとつため息をついて、二人が去った扉を見やる。彼女とて、あの二人を連れて行けたらどれほど心強いだろう。だが、もし彼らを連れて行ってしまえばカルの王位を狙う者が蜂起したとき、カルの身が脅かされるのではないか、と彼女は考えたのだ。

実力も忠誠も充分な彼らのような人材は、今のカルの王朝には貴重な人材であった。動かせる兵の大半を割いて与えてくれたカルのためにも、シュセは期待に応えねばならなかった。

スカルディア私兵は確かに精強をもつて四隣に鳴り響いていたが、それは兵の強さであつて、彼らを指揮する人材の豊富さを表すものではない。いかに強兵を誇ろうとも、それを集団として活用できねば十全の力を発揮する前に敵に負けてしまうだろう。

かといって、軍の指揮者が早々簡単に見つかるわけもない。兵を納得させるだけの實力を持ち、兵を率いることができる人物が、早々転がっているわけではない。かつその人物が信用できねば、用いることは難しい。

「少し、根を詰めすぎでしょうか」

息を吐き出すと、こめかみを揉み解し執務室を後にする。向かった先は自身の部屋。そこで男物の服に着替えると、孤児院へ向かうためスカルディアの館でた。

クルドブーツにねぐらを用意させ、高級ではないものの品の良い調度品の数々を眺め、サギリはご満悦だった。

「しばらくゆつくりするかねえ」

うーん、と背を伸ばしふかふかのベットに倒れこむ。

その横で不機嫌そうにしていたジンは、固い床に座っていた。

「暇だ」

「だったら、外で遊んどいで」

自分の上半身ほどもある羽毛の枕を抱き寄せると、眠りにつくサギリに、舌打ちしてジンはねぐらを出た。

「何だつてんだ」

殺すまでの過程を楽しめ、と言われてもジンには何かなんだかわからない。殺しは殺し、食事を取るのとなんらかわらない。味がどうの、見た目がどうのなどというのは、余計なことだった。食事は腹が満たされればそれでいい。ジンにとっては殺しも同じ、必要だから殺す。それ以上でも、それ以下でもない。

腰にさげた双剣に、触れてその感触を確かめる。気持ちがあつと冷えていくのを感じると、ジンはロクサーヌの街をぶらぶらと、歩き始めた。

しばらく下町を歩けば、ロクサーヌの中央広場に出る。噴水が夏の日差しに、水しぶきをあげて虹をかける。しばらくジンはその噴水を眺めて、一人考え込む。

「そつえば」

確か前にもここに来たことがあった、と。

何年か前に、あの貴族の娘　今は医者 of 真似事をしているルクという少女をさらった時だ。そこまで思い当たってジンは、かつて馬車を飛ばした道を逆に辿って行く。何かを期待したジンは、だが何事もなくルクの屋敷　今は廃墟となったツラド家の屋敷にたどり着いてしまった。

「何もないか」

ジンの記憶の中で燃え盛るこの場所は、殺戮と闘争の修羅場だった。燃え盛る炎は館を覆いつくし、死兵となった兵士たちが殺しあう。背筋がゾツとするような、記憶が浮かび上がり、また消えていく。それらに蓋をして廃墟を眺めて背を向けた。

そういえば、と再び考え込むともう一箇所あった。足を廃墟から、裏路地へ向ける。

「確か……」

貴族の街の広い裏路地を辿っていく。同じような角を何度か曲がり、気がつけば知らない場所に出ていた。

「ん？」

どこで間違っただろうか。記憶との微妙な差異に、周囲を見渡すが目印になりそうなものはない。段々とジンの心に焦りが出てくる。腹の虫も鳴いて来た。日は中天からわずかに西に傾き、初夏の陽気は容赦なくジンの焦りを加速させる。

「くそっ！」

腰に吊るした双剣に手を当ててみるが、相手がいないのではどうしようもない。ジンの心を静めてくれる役には立たなかった。とりあえず前に進みさえすればなんとかなるだろう。という何の根拠もない考えで足を前に進めるが、事態は一向に進展しない。

段々と日差しは西に傾き、ジンの焦りを煽る。ふと、ジンの耳に泣き声が聞こえてきた。歩きたびにその泣き声ははつきりと聞こえ、過去の古傷をかきむしる。

そうして見つけたのは一人の少女だった。

「おい、どうした？」

ガラじゃないと思いつつも、ジンは泣いてる少女に声をかけた。

「足、痛い……」

火のついたように泣く少女に、ジンは苦虫を噛み潰したような表情になる。見れば確かに10歳ぐらいの少女のか細い足首は、腫れ上がり痛々しく見えた。スカートから伸びた膝には、擦り傷と滲んだ血も見て取れる。

いつしか、そんな少女の様子を覗き込むように観察していたジンは、自身に舌打ちすると、少女の頭をなでながら、言葉をかけた。

「お前……名前は？」

「ミオン……」

少女の目の高さに視線を合わせ、ジンは問いかける。

「家はどこだ？」

「あっち……」

指差す方向は、ジンが来たのとはまったく別の方向。

「くそっ」

自身を罵倒しつつ、少女に背を向ける。

「乗れ、送って行ってやる」

きよとんとしたミオンを、促すように手で招くと、戸惑いながら背に乗ったミオンを背負い、立ち上がる。

「それじゃ、行くか」

かつてあったはずの背中のみくもり。忘れえぬそれを、再び背にしながらジンは歩き始めた。

「これは、シュセさま！」

時刻はすでに、西日の指す時間。あれこれと出かける直前で仕事が舞い込み、シュセが孤児院に着くころにはすでに夕方となっていた。

「なにやら慌しいようですが……？」

出迎えた元ラストウーヌの使用人達に開口一番シュセは問いかけ

た。

「はっ、実は……」

孤児院で預かっている子供の一人が未だ戻らないことを聞いたシユセは、柳眉を寄せた。時刻はそろそろ夜の帳が下りてくるころだ。いくら暖かくなってきたとはいえ、未だ一人で夜を越すには厳しい。

「わたくしも探しに行きましょう」

「いえ、シユセさまをそのようなことにっ！」

「探索の人では多いほうが良いでしょう？ さあ、お願いします」

シユセの決意に負けたラストウーヌの使用人達は、彼女に探索を頼んだ。

「ミオン、どこです!？」

手に松明の火を持って、二人一組で戻らない少女の行方を捜す。

「まさか裏路地の方へ行つたのでは？」

シユセと組になった使用人の不吉な一言に、暗い路地裏からぬつと影が這出た。

「おい、聞くがヘルシーラ孤児院つてのは近いのか？」

無然とした表情のまま問いかける年若い青年に、使用人は驚き青年を凝視する。驚いたのは何も唐突に青年が出てきたからではない。その服についた返り血と、青年の瞳が人でも殺したあとのようにぎらついていたからだ。

「孤児院はすぐ近くですが、何の御用です？」

変わって応えるシユセに苛立ちを抑えかねた青年は、背に負った眠ったままの少女を見せる。

「ミオン！」

使用人の大声に、青年 ジンが眉をひそめ、少女は目をこすりながら目を覚ます。

「あ、ガストンのおじさんだ」

慌ててミオンのそばに駆け寄る使用人のガストン。

「シユセさまもいる！」

シユセの姿を認めた突端笑顔になるミオンに、またも苦虫を噛み潰したようになるジン。

「足を怪我してる」

最低限のことを口にして、ミオンを背から降ろすと、肩を鳴らしてため息をついた。

「ありがとうございます。なんとお礼を言つてよいか」

涙を流さんばかりに御礼を口にするガストンに、ジンは気恥ずかしくなつて顔を背ける。

「ああ」

「お兄ちゃん凄いいんだよー。悪い人みんなやつつけちゃつたの！」

怪我也忘れてコロコロと笑うミオンに、ジンは眉をひそめた。

「悪い人、とは？」

「なんでもない」

ジンは少女と出会つてすぐ、待ち望んだ獲物が現れたのだ。手に凶器を、瞳に悪意を宿らせた自分と同じにおいのある悪人たち。背に少女を背負つたジンは、自分の運の悪さのため息をつき、天を仰いだ。

だが、獲物は弱すぎジンは強すぎた。ミオンを背負つたまま、獲物を蹴散らしジンは彼女の指し示す通りに裏路地を辿つてきたのだ。

普段なら止めを刺すはずの獲物でさえ、痛めつけただけで素通りしてきたのはやはり、背負つた少女のためだった。

「なにはともあれ、ミオンを無事届けていただいてありがとうございます。何もお礼らしきものはできませんが、どうぞ孤児院の方へいらしてください」

「いや、俺は……」

「お兄ちゃん！ ね、いこうよー！」

断ろうとするジンの腕を、ミオンがつかむ。怪我した足を引きずりながら、ジンの手をつかむ様子にジンの方が慌てた。

「わかつた。その代わり孤児院についたら、しっかり怪我の治療をするんだ」

「はあ〜い」

気の抜けた返事に、ジンは眉根をひそめた。すっかりジンに懐いたミオンの様子に、ガストンとシュセは苦笑した。

西域の主10（後書き）

作者のやる気につながりますので、良ければ感想など残していた
だけると嬉しいです。ただしやる気と更新頻度とは比例しないのが
辛い現実なので、ご理解をしてください。

孤児院に招かれたジンは、下にも置かれぬ扱いだつた。子供たちからは、ミオンを助け出した英雄としてその目に映り、ガストンをはじめとする孤児院の職員たちからは、それこそ賓客をもてなすようにジンを迎えた。

一人シユセはその騒ぎの中、ミオンの言った“悪い人”の捕縛を衛士に依頼するため孤児院を一次的に離れていた。

ジンはミオンの傷の手当てが済むと、足早に孤児院を去ろうとする。すでに夜道は暗い。暗夜を友とするジンでさえ、月さえ出ていない道に一瞬眉をひそめた。

「もう、お帰りですか？」

孤児院をでようとしたジンに問いかけたのは、ガストンと呼ばれたラストウーヌの元侍従。

「もう用はない」

一瞥をくれて帰ろうとするジンに、ガストンは困つたような笑顔を貼り付けて、声をかけた。

「ミオンが泣いてしまつてしょうね」

「知らん」

引きとめようとするガストンの声は、闇の中に消えるジンに追いつがる。だがジンはそれを振り切るようにして、闇の中に消えた。

勢い良く孤児院を出てきたジンだったが、地理がわからない。その上暗いとあつて、幾許かもしないうちに途方にくれることになる。「くそっ」

毒づいて、意識して歩調を緩めて周囲を確認しながら進む。

何の屈託もなく、お兄ちゃんと呼ばれたミオンの声が耳にこびり付いている。過去からの呼び声はふと気を抜くと、闇の中にはずもない妹の姿を探してしまつ。

振り切つたはずの過去からの手が、ジンの体を絡めとっていくよ

うだった。

気がつく、前に人の声と松明の明かりが見えた。目を細めてそれを確認すると、ジンは外套のしたにある双剣の握りを確かめた。

巡察の衛士か、さもなければ盗賊か。

ふっと、ジンの口の端がっぴりあがる。後者であってほしい。そうすれば、何も考えず剣を振れる。過去からの声を断ち切るための剣を。

段々と松明の明かりが近づくとつれて、ジンは予想が両方外れたのだと知る。相手もこちらに気がついたのだろう。松明の明かりをこちらに向けて、近寄ってくる。

「おや、貴方は」

掛けられた声に、ジンは落胆しつつ張り詰めていた気持ちを緩めた。

「ジンだ」

「わたくしは、シュセと申します」

シュセの琥珀色の瞳が、好意を移して柔らかくジンに降り注ぐ。

「ちょうど、貴方のところへ行くところとしていたところなのです」

疑問の視線とするには鋭すぎるジンのそれを、シュセは緩やかに受け止める。

「ミオンと貴方を襲った賊を捕らえましたのでご報告に、と」

「いらん世話だ。ミオンだけに言えばいい」

素気無く断るジンに、だがシュセの態度は変わらなかった。

「そうはいきません。貴方はミオンの恩人なのですから」

言い返そうとしてうまい言葉が見つからないジンは、頷くだけにとどめた。

「それで、ジンさんはこんな時間にどうして一人で？」

「帰る」

「では、お送りしましょう」

「いらん」

隣に立つシュセの背は、ジンよりも頭ひとつ低い。腰に下げた銀

細工の細剣の他は、どこにでもいる平民の少年のような格好をしている。

「ミオンを助けていただいたのに、何のお礼もできないとあっては、わたくしの気がすみませんから」

にっこりと微笑むシュセの笑顔からジンは顔を背けた。

その笑顔を見てたジンは即座に後悔した。自分の中に抑えがたい欲望が突き上がってくるのが分かったからだ。幼い日にサギリに向けたがむしやらかな敵意とは別の、シュセと名乗った目の前の女を滅茶苦茶にしてみたいと言う欲望。

ひどく肉欲的なその欲望を、ジンは憎んだ。美しくない、と思うのだ。今までは憎むにしろ、悲しむにしろ、自分の心から生まれ出でた感情に彼自身は胸を張れた。

心の底から湧き上がる噴水の水のように、一気に噴き上がり激しく心を染めていく。純然たるそれらは美しいと思うが、今日の前のシュセに抱いたものは、ひどく汚れていた気がする。

自分の今の状況も忘れて、心底彼女が目の前から消えてくれれば良いのに、と思った。

「勝手にしろ」

引きそうにないシュセに、ジンは背を向けた。

どうしても彼女がついてくるようなら、殺そうと思った。双剣の柄を握り締めて感触を確かめれば、幾多の血を吸った愛刀が血を啜りたいと囁いている様だった。

物理的な声さえ、聞こえるようにジンには感じられた。先程胸をかすめた肉欲など、冷たく研ぎ澄まされていく殺意の前には、風前の灯火のようだった。

そう言えば、しばらく人を斬って居なかった、とジンは暗闇に向けて口の端を歪めた。

シュセから見たジンは、どこか野性的な印象を与える。今まで生きてきた人生の大半を、曲がりなりにも貴族の中で生きてきた彼女にとって、ジンは初めて会う類たぐいの人種だった。他人とのかかわりを極力避けようとするかと思えば、年少の子供には随分と甘い。何かの事情があるのだろうか、きつと悪い人ではないのだろうかと半ば強引に結論を引き出す。きつと不器用な人なのだ。

言葉にこそ出さないがミオンを気遣う様子は、なぜか隠そうとする彼を裏切って、非常によくわかってしまった。一目見ただけでその様子に、シュセは人知れず頬が緩む。

だから彼が、一人でこんなところをうろろしているのを放っておくこともできなかった。周囲を確認しながら歩く様子は、迷子のように思われた。シュセよりも身長が高く、おそらく年齢も上なのだろう。そんな彼が、どこか頼りなげな様子でシュセの前を歩く様子はどこか可愛さすら覚える。

「いつまで着いてくるんだ？」

とがった口調にすら、微笑む余裕がある。

「貴方のご自宅まで、お送りいたしますよ」

軽い舌打ちに、からかい過ぎたかと少しだけ彼女は後悔する。

二人は貴族街を抜けて、平民街へ入っていた。ロクサーヌの中央から南に広がる平民街。貴族街とは違い、計画されて作られたわけではないそこは、雑多な建物が立ち並び夜ともなれば迷路のごとき顔を見せる。

「……どうかしましたか？」

立ち止まるジンに、シュセが問いかける。

「もう、いいかと思ってな」

黒いローブの下から、鐸鳴りの音ともに引き抜かれる双振りの剣。僅かに湾曲したその剣を諸手で構えたジンは、シュセと向き合った。まるで引き込まれるようなジンの圧力に、シュセは一歩足を引いてしまう。どのような相手とあたったときでさえ遅れをとることがなかったというのに、それほどまでにジンの態度の急変にシュセは

戸惑った。

「ジンさん……!?!」

心臓が跳ね上がり、一度気後れした代償はすぐに目の前に来ていた。

無造作ともいえる動作で、ジンがシュセに歩み寄って来たのだ。

シュセの胸に警鐘が鳴り響く、危険だと心が悲鳴を上げるのに、連動すべき身体が動いてくれない。

無造作にジンの刃が振るわれる。だらりと構えたその姿勢から、斜めに斬り上がる刃。

「つく」

悲鳴を飲み込んだシュセは、体勢を崩すのと細剣が反動で抜かれるのは同時だった。体勢を崩したままでは受けきれるものではない。ジンの一撃によるめいて腰から転んでしまふ。

殺されるっ！ その感情が何もかもを支配する。

当然くるべき追い討ちを覚悟して、ジンに視線を向ければ、彼はシュセなど既に眼中にはなかった。恐る恐るジンの視線を追えば、そこには影の様に黒づくめの、3人の男たち。

「何か用か？」

至極平静な声に、殺気がこもっている。シュセの横を通り抜け、彼ら三人の前に立ちふさがるとジンは彼らを睨み据えた。

「小僧、退け」

低い、まるで地面の底から響いてくるような声が三者の誰かから発せられた。黒づくめの隙間から和僅かに覗く瞳が、心臓に杭を打ち込まれるような圧。

全身にそれを浴びて、口元にうかぶのは狂気の弦月。

「ジンさん、その人たちは……!」

シュセの言葉が発するより早く襲撃者達が動いた。肩を狙った一撃が両方から迫ってくる。迫る凶刃を左右の刃で受け止めると、残る一人が、真正面から突きかかる。

ほとんど瞬時の連携にシュセは呆然と見守るだけだった。ジンの身体が前に出る。襲撃者達にも、シュセにも自殺行為としか見えないうその動き。だが襲撃者が力を緩めることはなかった。当然ジンの両手にかかっていた剣の圧はそのまま、彼の方に押し掛かるうとする。

刃と凶刃に火花が走る。ジンの左右の刃が、左右からの凶刃の下を滑り、一瞬の火花が散った。

襲撃者の両手で持つ剣を、僅かに一瞬だけジンの刃が跳ね除ける。前に出た勢いを利用して、一秒にも満たないほんの一瞬。その隙間に、ジンを狙った正面からの一撃に、彼の右手がぶち当たる。

またしても火花。そして次の瞬間には血の花が咲いた。

残ったジンの左の刃が、正面の襲撃者の喉首を掻き切ったのだ。だが血はそれだけではない。ジンの左右から迫っていた刃は、勢いこそ弱めたものの、ジンの肩に振り下ろされていた。

その光景を見た全員が動きを止める。

相手の傷を、自身の損害を、そして勝負の行方を確かめようとした静寂。

一呼吸にも満たない静寂のあとに、最初に動いたのはジンだった。左右に交差していた刃を、左右に振り戻す。まるで蛇のように喉首に喰らいつく刃の光は、一瞬の光芒だった。

「……馬鹿な」

襲撃者の一言のあと、彼らは自身の血溜まりの中に倒れ臥した。魔性の業という言葉がシュセの脳裏に浮かんで消えた。それほどに、無駄なく美しい。あるいは、自身の死すら呆然と眺めてしまうような、剣術。

長く息を吐き出して刃についた血を一閃、振り落とす。黒いローブの中に、双剣を仕舞うとジンは自身の作り出した屍を、少しの間

見入った。

「っ……ジンさん！」

呆けていた自分に気がつくと同時に、シュセはジンに駆け寄る。鬱陶しい視線で、彼女に一瞥をくれると彼は一言もなく立ち去ろうとする。

「お待ちください！」

声には凜とした芯が戻っている。先ほどまで彼の目の前で、驚いて腰を抜かしていたのとは同一人物とは思われないほどだった。

「貴方、貴方は死ぬのが怖くないのですか!？」

僅かに震える声でシュセは問いかける。先ほどの攻防の恐ろしさが、今になってシュセの背を冷気のように撫でる。

今は屍となった襲撃者の三人。その連携の見事さは、相当に鍛錬を積んだものだった。振るわれる剣は嵐のように敵を切り刻むもの……それを、その中をわざとジンは斬られにいったのだ。

ジンが諸手に構えた双剣。それを見たとき襲撃者は思ったはずだ。左右から二人が全力を持って襲い掛かり、その両手を塞げば苦もなく彼は死ぬことになるはずだと。

誤算だったのは、ジンが斬られるのを覚悟の上で左右二人の剣を受け止めたこと。そして、僅かに持ち上がった剣の合間にその両腕を振るえる技量を有していたことだった。

一度受け止められ、勢いを失った剣がジンの肩を斬りつけ、ジンに止めを刺すべき最後の一人が死んだ時点で彼らは自身の敗北を悟らざるを得なかった。

ジンの刃は、僅かな隙間にも震える余地があるのに対して、ジンに斬りつけてしまっている彼らの剣は再度振り上げねば使いようがない。

最初から計算していたのか、それとも偶然の産物なのか。シュセには判断がつかなかったが、それゆえに背を撫でる氷塊の冷たさとまることはなかった。そして、最初にジンが刃を抜いたときの殺気。あれは間違いなくシュセに向けられてのものだったはずだ。

「運が良かったな」

自身の勝利の結果に対してか、あるいはシュセ自身のことか。それだけ言くと、ジンは彼女に背を向けて歩き出す。

未だに震えの取れない自分の手を見下ろし、シュセは細く息を吐き出した。

「待ちなさい。怪我をしてるでしょう?」

立ち去ろうとする彼に追いつがると、ジンは怪訝そうに振り向いた。

「近くに知り合いの医師がいます。案内しますので、おいでなさい
有無を言わせぬシュセの口調。

「お前」

「文句でも脅しても、後で聞きましょう。それより貴方の傷を治すことが先決のはずです」

言いかけたジンは口をつぐんだ。見つめる琥珀のシュセの瞳が、ジンを気後れさせるほど真っ直ぐと彼を貫いていたからだ。

言いかけた言葉を飲み込んで、ジンはシュセの後に続いていった。

這い寄るおぞましい触感に、ナルニアは身震いした。夜の闇よりなお暗い視界。

「いやっ」

悲鳴は喉に張り付いて、凍えてしまう。

「いやっ!」

執拗に追いかけてくるその触感は、ナルニアの全身を這い回り、彼女の抵抗をいとも容易く排除しながら押し掛かる。

「んぐっ!」

叫ぼうとした口にさえ入ってくる闇のそのもの。じっとりとした闇が、彼女の身体を押しつぶそうとしたとき、あらん限りの力を込めて彼女は叫んでいた。

「っ……！」

せわしなく視線を動かしてあたりを確認する。

家具と、テーブルと。

それだけを確認して、ナルニアは止めていた息を吐き出す。

荒い息の合間から、ゆっくりと身体を起こす。節々が痛む。べつとりと汗で張り付いた肌着の感触が気持ち悪かった。震える手を見れば、紫色になった痣と擦り傷。

その手で自分の身体を抱きしめる。

無力感。圧倒的なそれが心を超えて身体までも押しつぶしていきそうになる。

「ナルニア……！？」

扉を開けて届いた声に、ナルニアは目をいっぱいに見開いた。

扉を開けて入ってきたエレガに向けて、怯えを含んだ紫の視線を向けた。

「気がついたんだね？」

腫れ物に触るかのように、声をかける。

「いや……嫌……私……」

それ以上ナルニアが言葉にする前に、エレガがその震える華奢な体を抱きとめた。

「良いんだよ。何も言わなくても」

柔らかなその抱擁に、ナルニアは嗚咽を堪えることができなかつた。

「あんたは立派だった。うん……大丈夫」

まるで本当の妹にするように、優しく髪をなでるエレガの腕の中で、ナルニアの理性を繋ぎ止めていた最後の細い線が切れた。言葉を忘れたかのように泣きじゃくるナルニアを、ただエレガは抱きしめていた。

泣き疲れたナルニアが眠りについたのを見計らって、エレガは彼女のそばを離れる。

彼女のつり目には鋭利なナイフのような尖った気配。その視線は

部屋の外で壁に背を預ける“友達”へと向けられていた。

「気がついたようで、良かったねえ」

温情の一片すらも感じさせない青の瞳が、寝室で横たわるナルニアに注がれる。クシュレアのその視線から彼女をかばうように、エレガは扉を閉める。

「……あの子の取り乱しようをみて、何も思わないのか!」

低く、しなやかな猛獣の咆哮を思わせる声で、エレガはクシュレアに言い放った。

「……体が無事なようで良かったよ。明日にでも、ベルガデイの支配者を気取るあの馬鹿トウメルの所へ送ろうかね」

「クシュレア!」

露出の高いクシュレアの服の胸元を掴むエレガ。

「放してもらおうか……エレガ。ガドリアと雪華のことを思えば、間違ってるのがどっちかなんて自明のことじゃないか」

「だからって!」

感情を凍らせたようなクシュレアの青の瞳が、エレガを睨む。

「ずいぶんと予定が狂っちゃいるが、そろそろ幕を下ろそうじゃないのさ。ナルニアが馬鹿に一言、ロクサーヌを攻めると言えば、全てが上手くいく。そうだろう?」

「あの状態のナルニアを、まだ使おうって言うのか!??」

「結構なことじゃないか。ぼろぼろになったナルニアを見て、あの馬鹿トウメルが、自責の念に駆られてくれれば儲けものさ」

「あんだ、それでもっ!」

「エレガ……私たちは遊びでやってるんじゃないんだ。生き延びるためなら、どんな汚いことだってするし、どぶの水だって飲むよ。そうやって生きてきたんじゃないのかい?」

「だからって、ナルニアは仲間じゃないか! それを」

「だから、私たちの為に役に立ってもらおうのさ。仲間の役に立つ……ほら、おかしくないだろう?」

口元に浮かべるのは、毒花の笑み。

弱弱しく視線を下げるのは、クシユレアの言っていることが嫌と
いうほど理解できたためだった。

「話がそれだけなら、私は行くよ。ブライズ達に村々を襲わせなき
やいけないからね」

胸元を掴んでいたエレガの手を払って、クシユレアは歩き出す。

その後姿を見送って、エレガは声もなくただ握り締めた拳を振る
わせた。

西域の主11（後書き）

この話は書くのに、時間がかかってしまいました。
ために、更新が遅れて申し訳ありません。

ジンは憮然として目の前の光景を眺めていた。時折向けられるサギリの視線は、剣に斬る以外の価値を見つけたように、興味深そうだった。サギリの対面に座るのは、柔らかな梢の葉を思わせる緑色の髪と、琥珀色の宝玉のように強固な意志を感じさせる瞳を持つ女の騎士。

彼女は結局ジンの住処までついてきて、あるうことかサギリに話を持ちかけたのだ。

「シュセって言ったかい？」

口元には弦月に歪む嘲笑の色。整った顔立ちを、不敵に歪ませてサギリは目の前で行儀よく座る女を見た。

「要件は分かっただけど、即答はできないねえ」

シュセの背と、サギリの顔を見比べてジンは目を見開いた。常に即決即断のサギリが回答を引き延ばすというなら、それは考える余地があるということだ。

目の前のシュセが持つてきた提案。ジンを西都ベルガデイへの遠征軍に加える、という提案を！

「っ……！」

ちよつとまで、と声を掛けようとしたジンを漆黒の刃を思わせるサギリの視線が刺した。無言の内に反論を封じ込めると、シュセに突き放すように言う。

「とりあえず、今日の所は帰りなよ」

「分かりました。また後日お伺いします」

椅子から立ち上がり、振り向くと彼女はジんに目配せした。意味ありげな視線に、ジンはわけもわからずたじろぐ。

「では」

口元に微笑すら浮かべて、シュセは歩み去る。

「ふふん、ジン。アンター一晩で騎士様と知り合うなんて、どんな魔

法を使つたんだい？」

面白がつて問い掛けるサギリに、ジンの表情は苦い。

「付きまとわれたこつちの身にもなれ」

吐き捨て眉を寄せたジンは、眉間に深い皺を刻む。

「王都に出てきて早々騎士様を引つ掛けたんだ。もう一回出歩いて、今度は王様を引つ掛けておいでよ」

冗談とも本気ともつかないサギリの言葉に、ジンは彼女に無言の抗議をする。

「そついえば、まだ聞いてなかつたな」

「あん？」

口元に貼り付けた笑みを崩さず、サギリはジンのほうを見た。

「なんでロクサーヌに来たんだ？」

問いかける声には嘘を赦さぬ響きがある。

「知つてどうなるつてもンでもないだろ」

「……国奪り、見せてくれるんだろう？」

真摯なジンの視線に、サギリは口元をゆがめた。

「……しょうがないやつだね」

一呼吸、ジンから視線をはずしたサギリは頬杖をつきながら、口を開いた。

「今ロクサーヌじゃ王様とオウカ・ジェルノつて貴族が覇権を争つてるのさ。まずは、そこに付け込む」

「二人が戦つてるところに割り込むのか」

「まさか、ここは王都だよ。アタシらの賊都ガドリアじゃない。戦いはもつと陰湿で腰が引けたもんになるだろうさ」

首をひねるジンに、サギリは笑いながら答えを教える。

「腹に敵意を隠しながら、笑顔で権限を奪い合う……んで最終的により多くの権力を得た方が勝つ」

「権力つてのは……そんなに良いもんか？」

ジンの疑問にサギリは、彼ら二人の考え事吐き捨てた。

「くだらねえ物だよ。まったくな！ だから、二人が争つてる間に、

「アタシらがぶん獲るのさ」

権力という目に見えない虚構に、ジンは眉をひそめた。そんなものよりも、眼前に迫る刃の方が、何倍もわかりやすいと思うのだ。

「……やっぱりわからねえな」

低い笑い声とともに、サギリが呟いたジンの肩をたたく。

「気にするなよ。あんな物はわからなきゃ、わからない方がいいかもしれないねえしな」

ベッドに横になりながら、サギリは先を口にする。

「今回は王様の味方さ」

「だから、と言い置いて。」

「行つてきな。西都」

あの騎士様を助けてやれ、との言葉にジンは眉間の皺が深くなる。

「あいつは、苦手だ」

「クツクツク……良いじゃないか。とりあえず、アタシは旅の商人。」

「アンタはその弟兼、護衛さ」

「弟かよ」

「ふふん。恋人にしてほしきやもつと腕を磨くんだね」

冗談とも本気とも取れない言葉で、ジンの不満を退けると、サギリは荒地の魔女の名に相応しく邪悪に笑った。

「どうせなら、吹っ掛けてやるか」

「ナルニア!? 無事だったのか!」

西都ベルガディ全域を占領したトウメル。彼の館に、クシュレアに伴われてナルニアはやってきた。あわただしく駆け寄るトウメルに、だが、ナルニアはクシュレアの袖を掴むだけだった。

「ナルニア……?」

その様子に気づいたトウメルは、不審の目を彼女に向ける。走り

よった勢いは徐々になくなり、やがて彼女の側に来たとき、それ以上トウムルはナルニアに近寄れなくなってしまうた。

あの花の咲いたような笑顔など、もうどこにもない。痛々しい傷痕が体中に残り、視線は怯えを含んでトウムルを見る。

「……なにが」

そう言ったとき、ナルニアのあまりの変貌振りにトウムルは固まった。

「どこから話していいものか」

トウムルの視線から逃れるように、クシュレアの後ろに身を隠すナルニア。彼女に代わってトウムルの疑問の答えたのは、クシュレアだった。

トウムルの視界から、ナルニアを庇うように口を開く。

「お前はナルニアの一座で……」

「裏子のクシュレアでございます。閣下」

丁寧な礼をするクシュレアに、トウムルの視線は釘付けになった。

「最初からで、いい。すべてを話せ！」

「ですが、ここでは……」

困惑したようなクシュレアの視線に、トウムルは周囲を見渡す。

そこで初めて、自分が館の外にまで走り出ってしまったことに気がついた。

「わかった。一室を用意しよう……ナルニアも」

トウムルと視線があつた瞬間ナルニアは体をクシュレアの後ろに隠してしまう。

奥歯を、砕けるほどにかみ締め、トウムルは彼女たちに背を向けた。召使の中から女を特に命じて、彼女たちの案内役につけ、自身は館に入る。

質実剛健を旨とするトウムルの屋敷。クシュレア達の通された部屋は、決して豪華ではないものの貧相と呼ぶには立派なものだった。長いすに彼女らと向かいあうように座ると、トウムルはクシュレアの話す言葉にただ黙って耐えた。ナルニアの身に起こったことと、

その傷の深さを思えば、クシュレアの言葉は氷の鞭に似ていた。その鞭が自身の心に深く傷をえぐっていくのを、トウムルはただ耐えた。

目の前のナルニアのおびえた姿を見れば、耐えねばならないと感じたからだ。

「……よくわかった」

鉛のように重くなった心。頭を抱えてしまいたい衝動を必死で堪え、トウムルはやっとそれだけ吐き出した。眉間の皺は、苦惱というひびを彼の眉間に掘り込み、麻痺してしまったかのように虚ろな心は目の前の二人をまるで空虚な虚像のように見せていた。

「……ごめんなさい」

ぼそりと呟いたナルニアの声に、トウムルとクシュレアは驚いて彼女を注視する。

思わず一歩踏み出してしまおうトウムル。

「トウムルさま、が……お優しい方だと、わかっては、いるのです。でも、でも……」

がたがたと震えだすナルニアの肩を強くクシュレアは抱く。これ以上何もいう必要はない。彼女の今日の舞台はここまでなのだ。

「私は、怖いんです……」

明確な拒絶。愛するものの怯えた視線は、トウムルを打ち据えた。二人を部屋に下がらせた後、トウムルは一人慟哭の声をあげる。

獣ののた打ち回る苦悶の声に似たそれは、駆けつけた侍従達をたじろがせた。

「オオオオオオオ、オオオアアアア！」

手近にあるものを、素手で殴り飛ばし、拳の皮が破れ血が吹き出るのもかまわずに、トウムルは荒れ狂った。

「俺は、俺はあああああ！」

狂気じみたその双眸からは、涙があふれ出し、抱えた頭からは爪を立てたせいで血が流れ出る。

「大若さまを、抑えろ！」

侍従の長がもがき苦しむようなトウメルを抑えようと、兵士達に命じる。だがトウメルはその制止を振り切って、尚も拳を振るうのをやめはしなかった。四人がかりでようやく彼を抑えつけると、寢室に無理やり運び、睡眠効果のある薬を調合して彼にかがせた。

「おいたわしい……」

老いた侍従の呟きが、彼の暴れまわり、無残な姿となった部屋に響く。失ってはいけないもの、おのれの守るべきものを守れなかった男のそれは悲鳴だった。

シュセ率いる王都ロクサーヌからの軍勢は、王の直参であるスカルディア私兵と王都ロクサーヌの防衛を担う兵士との混成軍となった。2,000の兵士しかだせないと、言ったカルだったが、その2000は精鋭を選び抜いた。

内乱を戦い抜いた私兵と、王都の兵士の双方から若く実戦経験も豊富な人材をシュセに任せただ。

「行ってまいります」

白亜の鎧に身を包み、腰には戦で使う大剣を佩いたシュセは玉座にいるカルに頭をたれる。

「何も言うことはない。征け」

湖水色の瞳の奥で輝くのは炎にも似た激情。言いたいことがないなど、上辺だけのことだった。シュセを心配する色、征伐の成功を期待する色、それら膨大な感情が交じり合っつてひとつの大きな炎のようになってしまうた感情を、だがカルは表情にさざなみすら立てず押し殺した。

「御意。誓ってロクサーヌの光を翳らせるようなことはいたしません」

カルの治世を守る、その峻烈な意思を琥珀の宝石のような瞳に宿

らせて、シュセは頷いた。シュセの淡い緑色の髪が揺れる。一気に立ち上がると、颯爽とすらしてシュセはカルに背を向けた。

スカルディアの屋敷の外には、今回の遠征に付き従うロクサーヌの兵士とスカルディアの私兵が彼女の出発をいまや遅しとまっていた。

兵士の一人から愛馬の手綱を受け取ると、ひらりと乗馬して彼らの先頭に立つ。一度よく晴れた青空をみあげて、まぶたを閉じ決意も新たにまっすぐ前を向く。

「征きましよう」

穏やかに、シュセは征伐の開始を宣言した。

二階の窓からは花が投げられ、街の通路は鈴なりの人ばかりだった。シュセ率いる征伐の軍を一目見ようとロクサーヌ中から人々が集まってきたのだ。

好奇と無事を祈る歓声の中、シュセの軍勢は肅々と城門を抜けて行った。

「あまりご機嫌はよろしくないみたいですね」

「……別に」

「拗ねないでください、ジンさん」

微苦笑を含ませて向けられた声の先は、シュセの愛馬の轡を取る兵士の姿。深めに被った革の兜、軽さを重視した革の鎧に、手には槍を持っている。

「これから二十日ほどで西域に到着します。そこで戦い、そして勝つまでよろしくお願いしますね」

鼻を鳴らしただけでジンは答えを返さない。そんな様子を気にも留めず、シュセは微笑んだ。

「行ってしまわれましたが、本当によろしかったのですか？」

「良いさ。何か問題でもあんのかい？」

逆に問い返されて、クルドブーツは返答に困った。自身の経営する武器の店の二階席からサギリは、彼女の傍を常に離れない狼が、白亜の騎士に連れられて西域に向かうのを見届けていた。

なぜ、と言われても彼としても困る。ただ、なんとなく魔女の傍に狼がいないのは、何か寂しい気がしたのだ。そしてそんな風に考える自分に、ふと首を傾げてしまう。果たして自分は、そんなにもこの二人のことを知っていただろうか、と。

あの魔女の後姿が、寂しそうに見えたなどと、きつと自分の見聞の違いに違いないと頭を振る。

「いえ、それで……ルカンドさんからはなんと？」

ガドリアから手紙が届いたのは、つい先ほど。その中身を確かめてもらうべく、クルドブーツはサギリの居室に足を運んだのだ。

「……ふん。あいつめ、アタシに芝居をさせようってんだね？」

鬼気迫る笑みに、クルドブーツは先ほどの考えなど吹き飛ばされてしまった。

投げ渡される便箋にクルドブーツは慌てて視線を走らせる。

「……少し、細工が過ぎはしませんか？」

一読して、息を呑む。そうしてクルドブーツは勇気を振り絞って言葉を放った。

「そうかい？ なかなかアタシは気に入ったけどねえ……それに一度やってみたかったんだ。正義の味方ってやつをさ」

双頭の蛇を率いる魔女の笑みを含んだ視線に、クルドブーツは必死で耐えた。ここで唯々諾々としたがってしまつて失敗すれば口クサーヌでの足場を完全に失うことになる。今まで築いてきた物がすべて、崩れ去るのだ。その危機感が彼をいつにもまして勇敢にした。「ルカンドなら、蛇どもを送って来るはずだ。それまでに、王様にはちいと痛い目にあつてもらふ必要があるねえ」

「王がそれを潜り抜けたら？」

恐る恐る聞いたクルドブーツに、サギリは邪悪としか見えない笑みを浮かべたまま答える。

「そのときは、蛇の何人かで襲わせれば良いだろう?」

愕然とするクルドバーツに、サギリは視線を窓の外に投げた。

「まあ、そうならないように期待しようか、ねえ?」

開け放たれた窓から吹き込む風が、サギリの長い黒髪をさらった。

暗いまなざしは、外の喧騒とは無縁のもの。

外の熱狂が高まれば高まるほど、老人の皺くちな顔の奥から注がれる眼差しは、冷やかになっていた。

「機会といえば、機会ではある」

敵の前では常に笑みを絶やさぬその顔は、今はすっかりと表情が抜け落ちてしまったようになっていた。ぽっかりと空いた深淵のような、暗い視線が、花舞う進軍の先頭を捉えていた。

「王の側近にして、唯一の将。かの者が敗れたとあらば、さて……あの小僧めはどうでるか？」

感情が抜け落ちたかのような無表情の、口元だけがゆがむ。

あるいはそれは、笑みだったのかもしれない。

手に持った呼び鈴を鳴らせば、立て付けの悪い扉は軋みを上げて開いた。

「お呼びで？ 翁」

現れたのは、平坦な顔に瞳だけが爛々と輝いている初老の男。

「西だ」

「で、誰を？」

「あの淫売……イシキアの娘の首」

それだけで、通じるものがあつたのだろう。初老の男は笑みとともに頭をたれる。

「御意のままに」

そのまま姿を消す初老の男から、オウカは視線をはずし、いまだ喧騒覚めやらぬ外を眺めた。

敷き詰められた毛の深い赤い絨毯。一段高くなったところに、玉座がある。この国唯一の王が座る場所。彼を守るように、近衛の騎士が鉄の鎧をまとい、一部の隙もなく、玉座の前にくひま跪く者をにらんでいた。

跪いているのは、一人の老人。

その老人を挟むように、居並ぶ群臣。中にはあからさまに敵意を見せる者もいる。

「陛下、提案をさせていただきますとございます！」

あらかた議題の話し合いが終わった後、進み出た老人の姿。

硬い玉座に腰を下ろし、カルは目の前に平伏する老人を見下ろした。

縮こまり、小心を強調するかのようなその姿。弱者という立場を利用し、カルが害意を加えられないように仕向けているその姿に、カルは苦い思いを噛みしめる。

「陛下におかれましては……昨今の巷における犯罪の数々をご存知でいらつしゃいますか？」

「増えているそうだな」

平伏したままの姿から、発せられる声にカルは答える。

「シュセ殿が担っていらつしゃった治安に、最近かげりが見えます」
シュセが西域へ出発して十日が経っていた。彼女が率いた2000の兵士による穴は、カルが考える以上に大きなものだった。彼女の副官をしていたクラウゼとユイルイの二人に、治安の維持に当たらせているが、はかばかしい成果はあがっていない。

まるで誰かが裏で糸を引いているような急激な治安の悪化。

それをオウカは指摘しに来ていたのだ。

「理由は、お分かりでしょうか？」

言わずもがなの確認をするオウカに、カルの内心は渋い。だがそれを表面には出さずに、カルはオウカに問いを投げた。

「何が言いたい？ はばかりなく言えば良かるう」

「今のお二方では、シュセ殿の代役として不足、ではなかるうかとざわり、と群臣の中から、ざわめきが伝わってくる。

名指しされたクラウゼは今にもオウカに飛び掛ろうとし、それをユイルイが抑える。しかし、そのユイルイにしても、燃え立つような憎悪の瞳をオウカに向けていた。

「確かに、シュセ様の代わりに、我らが役不足なのは、重々承知の上。だが、しかし！ それはほかの何者にも変えられぬものでありましよう」

怒りに燃えながら、しかし十貴族への相応の礼儀をもって返す。若くしなやかな反発に、オウカは内心ほくそ笑み、だが表情だけは憮然として、顔を上げた。

「自身の未熟をあげつらい、可能ごとを不可能と言い切るなど、臣たるものの姿ではないと、存知あげますが」

視線をユイルイから、クラウゼへと移す。

その嘲弄の視線。

「貴様っ！」

ユイルイの静止を振り切り、一步を踏み出そうとしたとき、玉座からの声がかかる。

「クラウゼ」

その声は静かに、だがその部屋全体に染み渡るように広がった。

「は、はっ！」

燃え滾る怒りに、冷水を浴びせかけられたクラウゼは、その場に膝をつく。

「そこまでだ」

裁定の声に、クラウゼは引き下がるしかない。

「オウカ老。そこまで言い切るなら、我がロクサーヌの治安。回復していただけるのでしょうか？」

「僭越ながら、この不肖の身の全力をもって」

群臣の中に下がるオウカを、見送ってカルは席を立った。

齒軋りするクラウゼと、それをなだめる役に回るユイルイ。彼らを一瞥すると、内心で謝りながら、執務室へ向かう。

オウカがその地位に課された責任を果たせばよい。

だが、もしその地位にふさわしい責任を果たし得ないのであれば……。

「過ぎた野心は、身を滅ぼす。それがわからぬオウカではあるまい」
だとしたら、勝算があるのだろう。その責任を果たせるだけの、自信が。

その手腕を見極めてみよう、カルは思い定めた。

「毒も時として、薬になる……」

取り込めるものは、貪欲に何でも飲み込もう、それこそが王の器というものだ。

内から囁く声に、カルは晒った。

オウカの衛士の長就任とクラウゼ、ユイルイとの確執。それは以前にクルドバーツが金を握らせた騎士経由で、逐次サギリの耳に入ってきていた。

「ずいぶん楽しそうなことになってんだねえ」

「楽しいだなんて！ 私は店がいつ襲われるか心配で……」

腹の肉を揺らしながら嘆くクルドバーツ。だがサギリはそれに構わず、窓の外　暮れていく夕陽を眺めて口元を歪ませた。

「ユイルイってのとクラウゼってのはそんなに無能なのかい？」

「はあ……お二人とも、百人程度の統率なら問題なくこなせる方々ですし……丸つきり無能というわけではないでしょうけれど」

「だとしたら」

悪戯を思いついた少女のように、くすりとサギリは微笑んだ。

「火をつけてるやつがいるンだろうさ」

「……オウカ・ジェルノですか？」

この状況で誰が利益を最も受けているか、商人の敏感な鼻が嗅ぎ取る。

「どうせなら、アタシらもそれに便乗してやろうじゃないか」

「こちらでは、まっとうな商人なのですが……」

呟いたクルドバーツの意見をサギリは一蹴する。

「まっとうな商人ってやつは、目の前の利益をみすみす逃すもんかい？」

「いえ。そういうわけではないですが……」

「足のつかないゴロツキと、隠れ家を一軒用意しな。今日の夜から仕事だよ」

嬉々として告げるサギリに、ため息交じりに彼は頷いた。

深い夜がロクサーヌを覆っていた。

草木さえも眠りにつく時刻、ロクサーヌの平民区にある廃屋。

集められた数は20に満たないが、悪人だと顔に書いてあるようなものたちばかり。シユセによる、無法地帯の取締りを逃れ、ロクサーヌに未だ巢食っている害虫に違いない。

それぞれが寡黙にして、立ち上る気配は触れば切れる刃のよう。「待たせたねえ」

暗闇の中からかけられた声の主は、闇に溶けるような長い黒髪の女。

「……てめえが、呼びかけた野郎か」

短剣を弄んでいた一人が、立ち上がる。血濡れのターデイといえは、ロクサーヌの裏社会では有名な部類に入る。強盗や殺人を生業とする、賊の一人だった。

聞くからに敵意に満ちた声と、短剣に負けないほど尖った雰囲気。

「ああ、これからアンタらのご主人様になるモンだよ」

嘲笑に満ちた言葉に、その場にいた全員が殺気立つ。

「ふざけるよ」

小さく呟かれた言葉とともに、緩やかな動きから、突如として男が短剣を振るう。サギリの目の前、ほんの指一本分だけ先を掠めた短剣の軌道。

サギリ以外の全員を代表して示された反抗の意思。

「次にふざけた事抜かしたら、その首搔っ捌くぞ!」

低く、ドスの聞いたターディの声は聞くものの背筋を震わせる。

「そりゃ、こつちの台詞だね」

まったく動じず、尚且つ蔑みすら漂わせるサギリの視線が男に理性を忘れさせた。

ぎり、と怒りのままに奥歯をかみ締めると、ほぼ同時、男の右手に握られた短剣が、サギリの白い喉に向かって振るわれる。

寸分の狂いなくサギリの喉を裂き、血の花を咲かせる筈だった、その短剣は天地が逆転した視界の中で空を切る。

肺から吐き出される空気と、共に後ろ手にねじ上げられる腕。

悲鳴すらも絞りだせないまま、頭の後ろから、恐ろしく楽しげな声が聞こえた。

「よく聞きな、ゴミ虫ども。アタシの言うことが聞けねえなら、今すぐここで……」

極められた腕が悲鳴を上げる。無理やり搾り出された声は、悲鳴ですらない空気の振動。息すらできず、赤黒く変色するターディの顔。

「全員殺す」

放たれた言葉に、その場を支配する威圧に、誰一人動けない。

「わかつたかい？」

猫をなでるような優しげな声に、地面に擦り付けられた顔を何とか動かし、ターディは頷いた。

と、同時に開放される腕。

激しく空気をむさぼるターデイは屈辱と恐怖に、戦慄いた。

「言うことさえ聞いておけば相応の甘い汁が吸わせてやるよ」

「ど、どうということだ……!?」

やっとそれだけを搾り出すとターデイはまた咽る。

「今夜、ハツシバルの屋敷に押し入る」

ハツシバル家は、オウカ派の貴族の一人だった。南都ジェノヴァとの交易により成り上がった富豪の家。

集まった荒くれ者たちが互いに視線を交わす。

「びびってんのかい？」

「へっ……無駄死にはごめんだぜ」

そう言つて背を向け走り出そうとした男の一人に、容赦なく投擲剣が飛ぶ。

上がる悲鳴。

「くそ、……いてえ！」

足を突き刺されのた打ち回る男の元にサギリが悠然と歩く。彼女が近寄るにつれ、荒くれ者達が後ろへ下がる。

「お前らはなあ……もう後戻りなンざ、できねえンだよ！」

放たれた言葉は、圧倒的な覇気を伴つて男たちを震わせた。

倒れた男の傷口に突き立った投擲剣を、踏みしだく。

男の絶叫を彩りに、サギリは晒った。

「アタシに逆らつて、今この場で死ぬか！ 従つて富を得るか!？」
誰もが息を呑む。

「や、やるぞ。俺は！」

最初に声をあげたのは、ターデイ。

屈辱と泥に塗れた口で、偽りの忠誠を口にする。

賛同の声に、深く頷きサギリは未だ悲鳴を上げる足元の男を見下ろした。

「その足じゃあ痛くて、歩けねえなあ」

しゃがみこむと、男の耳元でささやいた。

「た、助けてく」

男の声は、サギリの一閃によって断ち切られる。

情けの一片すらない、その女にターデイは憎悪を募らせる。

「で、どうやって忍び込むんだ？」

唇についた泥と嘘を払うように、指でぬぐいターデイはサギリにぎらついた瞳をむけた。

「あん？ 正面から堂々とさ」

自信に満ち溢れた笑みに、殺意すら忘れてターデイは一瞬見惚れた。

その夜、ハツシバル家は炎と賊徒の狂宴の舞台となった。

館に居た者で生き残ったものは皆無だった。

西域全域を支配下に治めたトウメルの元にその知らせが届いたのは、シュセがロクサーヌを出発してから二日後のこと。

西域と呼ばれるロクサーヌの西の地域は、西都ベルガディを中心に幾十の町と幾百の村からなる。その最初の村に差し掛かったころだった。

「ロクサーヌから、王都から軍が差し向けられた……だと!？」

トウメルを囲む軍の幹部たちは、その知らせに愕然とする。西域を支配したとは言っても、その支配は酷く脆い。圧倒的な武力で押さえつけているに過ぎないのだ。

クレインのような老獪さも、ガシユベルのような狡知もないトウメルは、当然のことながら政治には向いていなかった。

「数は!？」

罪のない伝令に放たれた怒号に、伝令は背を伸ばす。

「その数、およそ2000!」

その場に居る全員に、衝撃が走る。十貴族同士の争いにより、王都の兵力は減少しているはずだった。その中で2000もの兵を繰り出してくるということは、ロクサーヌで王を名乗る少年は本気な

のだと思ひ知る。

「将は!?!」

ごくりと、伝令のつばを飲み込む音が、静寂に響き渡った。

「シュセ……シュセ・ノイスターと……先代のネアス・ノイスター家の娘を名乗っております!」

ざわりと、全員が息を呑み。

「馬鹿な!」

怒号が一人の幹部から噴出すのと、彼らが互いの視線を交差させるのは同時だった。

「シュセだと……ネアス叔父上の子が、生きていたと言つのか?」

「ありえませぬ! ロクサー又側の謀略でございましょう!」

ぼんやりと呟くトウメルに、幹部の一人が真つ向から否定する。

「そう。そうだな……あの娘が死んだのは、もう10年近くも前になる。まさか、な」

もはや遠くに過ぎ去ってしまった幼い日。

無邪気に微笑む幼い従妹の姿が、閉じた目蓋の裏に映って消えた。

「ロクサー又の欺瞞、許すまじ!」

湧き上がる幹部達の声に、トウメルはただ悲しく口元をゆがませた。

いつもなら、ここでトウメルが率先して怒りを頭にし、先頭切つて戦うのだが、彼は動かない。

「トウメル様!」

呼びかけられて初めて、気乗りしないように頷く。

その様子に、幹部達に盛り上がった気炎も、徐々にしぼんでいく。

「トウメル様が気乗りしないのであれば……ここは、一旦敵を西域の深くまで敵を引き込み、それから撃破するというのは、いかがでしょう?」

彼の心情を慮おもてはかつて、発言する一人の幹部。

「……そう、だな」

やはり頷くだけの彼に、周囲に居る彼らは一様に不安な視線を交

し合った。

会議も終わり、トウムルはナルニアに与えた部屋に向かった。

トウムルの屋敷の中喧騒とは無縁の、離れにナルニアに与えられた部屋があった。

その部屋の前、トウムルは部屋の中に向かって声をかけてもいいものか、迷う。まるで幼子が母親に拒絶されるのを恐れるかのような、その様子は戦場で彼を知っているものならば、目を疑うに違いない。

「……ナルニア」

か細く呟いて、扉をノックしようと手を上げ、彫像のように固まる。

幾ばくかの逡巡のあと、力なくその手を下ろして肩を落とし、トウムルは部屋の前から立ち去った。

部屋の中で、息を詰めていたナルニアは、彼の気配が扉の前から立ち去ったことでそっと、深い息を吐き出した。

トウムルの足音が聞こえてきたと同時に、身を硬くするナルニアに、クシュレアは彼女を安心させるように微笑む。

その髪をなで、まるで幼子にするようにその背をさする。

「大丈夫、何も心配することはないさ。ナルニア」

目に涙すら浮かべて頷く彼女に、クシュレアの背筋をぞくりと快感がなぞる。

軽い二つの足音が部屋の外から聞こえてくる。

「クシュレア」

「お姉さま！」

エレガとカーナの呼びかけに、クシュレアはナルニアに注いでいた艶のある視線を上げた。

「時間だよ。ブライズ達のところに行くんだらう？」

見れば二人は旅装を調えている。

「そんな時間か、それじゃナルニア。あたしらは少し出てくるよ」

「あ、はい……」

頼りなさを通り越して、いつそ不憫にすら思えてくるナルニアの様子に、エレガは複雑な視線を向ける。

「すぐに戻るさ」

エレガの言葉に、素直に頷く。

「お世話は、カチューシャがしてくれるはずですよ」

かつてガシユベルの屋敷で、召使いとしてガシユベルに虐待を受けていた彼女は、ガシユベルの屋敷がトウメルに攻め落とされると同時に、彼に保護されていた。

それはカーナも同様で、それ以来カチューシャはトウメルの屋敷で働いていた。

「うん」

「それじゃ、行って来るよ」

クシユレアがそう言っただけで扉を閉めると、ナルニアは部屋で一人になった。

「ナルニアを、一人にしちまってるのいいの？」

「トウメルのやつは、何もできはしないさ。あの腰抜けじゃあね」
鼻で笑うクシユレアに、エレガは渋い顔をする。

「それに、ブライズ達が最近動きが怪しいからね……カーナ、わかってるだろうね？」

「はいです！」

「頼むよ。エレガ」

「ああ、それは良いけど」

歯切れの悪いエレガに、笑みを返し、クシユレアは悠然と歩き出した。

トウメル自身の消極さもあって、シュセ率いるロクサー軍は快進撃を続ける。

ほとんど抵抗らしい抵抗もなく、西域中部の重要な拠点であるテ

インラーという町にいたる。ティンラーの重要さは王都からの距離があげられる。馬を飛ばせば一日でロクサーヌに着ける限界の距離が、このティンラーという町にあたる。

さらに、緑水のベルガデイと呼ばれる西域の、本格的な支配地域がティンラーの西に広がっている。豊かな水量を糧として、生い茂る深緑の木々。西方の森林を切り開いてできた、開拓地域ならではの細い道と複雑な地形。

ここを占領したシュセは、周辺の状態を探らせるために斥候を放ち、自らは天幕の中でその知らせを待っていた。

ほどなくして、斥候が持ち帰った情報により、前方の状況が明らかになる。

騎馬の単騎で半日の距離に、村がある。

そこにいたる道筋は細く、周囲は鬱蒼とした森林に囲まれている等々、いよいよ西域に来たのだという実感が、シュセと彼女を取り巻く将官達を包んだ。

「出発は明日。日の出と共に、出発します」

短くそれだけを告げると、彼女は部下達を下がらせる。

「帰って来た」

目蓋を閉じた彼女は、銀の細剣を一度手探る。

何をするために、と問いかける声は自身の内から。

「カル様。父上……」

思い浮かび、消えていく過去の記憶。

夜が明け、空が白み始める。

ロクサーヌの方角から、陽が昇る。

「出発！」

颯爽と騎馬に乗り、琥珀色の瞳は遙かベルガデイをのぞむ。

淡い緑の髪が、風に揺れた。

引き抜いた銀の細剣。陽光の光を受けて煌めいたそれは、取り戻すべき故郷に向けられる。

「叛逆の徒に、王の裁きを！」

凜としたシユセの声に、彼女に従う2000名の兵士は奮い立つた。

「西都ヘルガディの解放を！」

先頭を進む白亜の騎士の姿は一枚の絵のようで。

「西都の解放を！！」

槍を掲げて叫ぶ兵士達の喚声は、明け始めた空に響いた。

西域の主13（後書き）

地震の影響で次の更新は未定に。

ロクサーヌの円状に広がる街の中央。裕福な商人たちが、店を構える地域。普段なら衛士が頻繁に巡察する場所だが、今はその頻度も少ない。

西都遠征以来、スカルディアの私兵や、ロクサーヌの兵士らが警備していた場所も彼らの警備場所として盛り込まれてしまったのだ。スカルディアの私兵とロクサーヌの兵士とは所屬がことなる。スカルディアの私兵とは文字通り、スカルディア家が抱える兵士たちのことで、カルの意味のまま、自由に動かせる兵士だと考えて間違いない。

ロクサーヌの兵士とはロクサーヌの都市が抱える兵士のことを指す。かつては王制下で、ロアヌキア国軍を担っていた兵士たち。だが十貴族たちが政治の実権を握ると、その巨大な武力を嫌い私兵として少数ずつ抱え込み、形骸化していたのをカルが復活させたものだ。

スカルディアの私兵も含め、ゆくゆくはロクサーヌ兵に統一させる予定だったが、その途上に西都の謀叛という事態になってしまった。

今は二つの組織を両立させて対応するしかなかった。

平時には衛士とともに街の巡察から、犯罪の取締りなどにも協力していた彼らの出陣は、警察能力の低下　　ありていに言えば、人手不足を露呈していた。

カルもそれには思うところがあるのだが、金も人もない状況では手打ちようがなかった。

故に、オウカという老獪な貴族であり政治家を使おうと決意した

のだ。治安が回復するならそれでよし。

しないのなら、オウカにはその責任を取ってもらえば良い。

そのオウカが実行した施策とは、罰則の強化と衛士の他に警邏隊けいらたいの組織だった。ジェルノ家の財力で雇い入れた警邏隊の面々は、ジェルノ家に思いを寄せる中小の貴族の私兵を集めたものと、オウカの地盤である南都ジェノヴァからの傭兵が中心であった。

カルの前からみれば、それらはジェルノ家の私兵が名前を変えただけだった。

しかも、カルの前で承認の元で大つぴらに行われたことであり、非難のしようもなく、クラウゼやユイルイらはほぞをかんだ。

その数およそ五百。カルの前で兵力には届かないが、充分対抗できる数だった。

そしてその警邏隊の面々はジェルノ家やその傘下の貴族や商人たちの家を中心に巡察を繰り返しているばかりで、平民区やその他の商人の家は、まるで巡察すらしなかった。

当然、その他の地域は衛士たちの担当になり、彼らの仕事は全く減らない。

だが現実に治安は回復しつつあった。犯罪の件数は減少し、強盗や殺人の件数の割合は著しく減った。

カルは首を傾げ、クラウゼやユイルイは悔しがったが、それと同じくオウカも首を傾げていた。

治安が回復したことに、ではない。

むしろその逆で、ロクサーヌの内外に耳目を張り巡らせているオウカの目を盗んで、昨日の夜も数は少ないが、賊が出たと言っただ。手口は残虐にして、容赦というものが感じられない。

最も問題なのは、それが自身の派閥を襲っていることだった。

「あの小僧」

憎々しげに呟いたオウカ。

「まさか……」

賊を唆そそしているのではないか。カルに兵力が無いのは疑いようが

ない。

シュセ率いる西都討伐軍に、手持ちの戦力のほとんどを使い果たし、政敵であるオウカに治安をゆだねるほどに。

だとすれば、手持ちでない他の勢力を使って敵の勢力を削ごうとしているのではないか。

敵とは、無論オウカ自身のことである。

何故彼がその結論に至ったのかと言えば、オウカ自身が使った手段だったからだ。

ジェルノ家の勢力下にある傭兵やゴロツキに治安を悪化させ、オウカが地位を得ると同時に止めさせる。

それをカルにやり返されたのかと、オウカが考えても無理はなかった。

ふむ、とだが彼は考え込む。だがあの小僧にそれが可能だろうか。湖蓝色の凍るような視線と、母親似の怜悯な、整いすぎている表情を思い浮かべる。

あの少年に、悪を　少なくとも自身が悪と断じる者を受け入れて使いこなす器量があるだろうか。

少年の少し潔癖症じみた政治への姿勢を思い出せば、それはないように思われた。

例えば、裏町の整理だ。わざわざ側近のシュセを投入してまで、あの区画を“掃除”したのだ。よく言えば、完璧を求める少年らしさ。悪く言えば、戦力の無駄な使い方でしかない。

オウカに言わせれば、あんなものは計画的に焼き払えばいいという結論だった。調整された炎ほど便利なものはない。老朽化した建物だ、さぞよく燃えるだろう。人も巻き込まれるだろうが、いつも手間が省いてちょうど良い。

その他のカルの施策から、大まかながらオウカはカルの性格と限界を予想していた。

「いや、違うか……」

だからこそ、オウカの陣営を狙ったような襲撃事件には相応しく

ないように思えた。

では、何者が、となるとオウカ自身も迷わざるを得ない。恨みなど、文字通りはいて捨てるほど買っているのだ。

あるいは、全く関係ない便乗した賊なのだろうか。だとすれば、治安を担う衛士の長と言う立場のオウカ自身、それらを取り締まらねばならない。

加減を間違えた火など、災厄でしかないのだから。

相手がカルならばその不正を暴き出し、その他ならば背後に誰がいるのを探り出したい所だ。

しかし、状況がそれを許さない。

新たに就任した衛士の長。それに期待する声は多くはないが、確かに存在する。その声を集め、束ねてカルの座に奪わねばならないのだ。

なら、やはり早期の解決が必要。

「火種は根本からだな」

深淵を思わせるオウカの視線が、手元の鈴を掴む。

澄んだ音に、続いて現れたのはまだ若い男。部屋の隙間から、感情の感じられないガラス玉のような瞳を向ける。

「御用で？」

「クウトウザーラ。暗殺団を率いて、わが家門に仇なす賊を殺せ」

「やり方は？」

低く聞くものを不安にさせずにはおかないオウカの声に、若者はかすれた声で返す。

「任せる」

頷いた若者は、音もなく消えた。

「カル・スカルディア・ヘルシオラ」

その名を持つ少年を、あの白磁の陶器を思わせる首筋をねじ切るのを夢見てオウカは、目蓋を一瞬だけ閉じた。

“血濡れ”のターデイことターデイは、ある日突然現れ、自分の主になつた黒髪の女の後を追つていた。

時刻は既に深い夜。昼間の住人たちは眠りにつき、夜の住人の時間だった。今日は、四度目の仕事だった。

仕事を重ねることに、彼は認識を改めた。

最初はどす黒い憎悪しか抱かなかつたのが、二回目三回目となると、次第にこの黒髪の女に認められたいとさえ思うようになっていた。

盗賊が群を作る場合、強さは前提条件だった。腕っ節はもちろん、頭の良さも要求される。それらを含めて“強さ”なのだが、黒髪を揺らしながら目の前を進む彼女は、その点、満点をつけても良かった。

身分も出自も、盗賊の中では意味を持たない。必要とされるのは、能力だけだ。

身分や出自が意味を持つのは、平和にボケた奴らの中だけだ。ターデイは考えていた。

だからサギリが女だから、カシラに相応しくないとはいっていない。

気前の良いカシラだと言うのも、盗賊の中では稀有なものだ。

ターデイが群れを好まないで“血濡れ”などと言う二つ名などをもらっているのも、前に所属していたカシラが強欲な奴で取り分を誤魔化していたからだ。

カシラだから当然だと、開き直つたそのカシラをターデイは全員の前で切り刻んだ。群れを率いるつもりなど無かつたから、盗賊団はそのまま消えてしまった。

それ以後、彼は一匹で生きてきたのだが、金も無くなつてきた所で、一つ大きな仕事をしたと思ったのだ。そこでサギリと名乗る女に出会つた。

不思議な女だった。仕事をすればするほど麻薬を決めているよう

に、離れられなくなる。

塗れた黒鳥の羽のように艶やかな黒髪、切れ長の目の奥から覗く深淵を思わせる漆黒の瞳。整った鼻梁から、黙っていけば貴族のお姫様と言われても通じる気品ある顔立ち。

だが、貴族の人形のような“お上品な”顔立ちは、不敵に歪む口元によってその印象を一変させる。なまじ顔立ちが整っているだけに、牙をむく獣を連想させるつり上がった口許。

抜群の剣捌き、身のこなし、自分たちよりも大きな獲物を狙うというその心意気、そのすべてがターデイを惹きつけて止まなかった。普段なら、尻尾を巻いて逃げ去るしかない、貴族や弱い奴らから搾取するしかない大商人。

そいつらの雇い入れた護衛、私兵を蹴散らして貧乏人から吸った甘い汁で、肥え太った奴らをぶち殺すのは気分が良かった。

一種そのサギリという女は、ターデイ達“法の外”を生きる者たちの理想を具現化していると言ってもよかった。

不撓不屈。

何者にも屈せず、己の力だけを頼りにこの世を渡る。

そんな女の姿に、短い間ながらもターデイは魅了されていた。

最初の仕事は貴族だった。ハツシバル家。南方貿易で富を成した政商。南方から、食糧や珍しい動物を仕入れ、こちらからは人を奴隷を送り出していた。借金の肩代わりに娘や息子を売るなど、貧乏人には当たり前のことだった。

ターデイもそんな貧困な家に生まれ、多くの姉弟が友人がある日消えていった。優しい姉も、仲のよかった友人も、喧嘩ばかりした悪友も。

そして、二度と戻ってこなかった。

サギリにうまく乗せられた形ではあったが、正面からハツシバルの門を破り、私兵を殺して、貴族を目の前にした時ターデイの身を支配したのは、情け無いことに恐怖だった。

初めて短剣で人を傷付けた遠い昔のように、膝は震え呼吸は不規

則で、とても“血濡れ”などと凶悪な二つ名を持っている賊とは思えないほどだった。

肩を寄せ合い、女子供まで盾にして助かるうとするハッシバル家の当主シウテ。豚のように肥満した彼が後ずさる姿を凝視しながら、ターデイは鞭を振るわれる子供のように、怯えていた。

「怖いのかい？」

「うるせえ！」

ターデイ自身、その声が震えているのがわかる。

「逃げ出したって良いんだよ。全部忘れて、逃げ出したって」

恐ろしく女の声は優しい。

「忘れて、だと……」

湧き上がるのは腹の底を揺さぶる衝動。

言葉に出来ない腹の底で黒く固まってしまった何かが、奴らを

泣いて命乞いをする奴らを見た時に、背を叩く鞭になってターデイを後押しした。

ターデイはシウテに短剣を突き刺した。その場にいたシウテの家族にも突き刺した。

忘却の海に沈めたはずの、過去の悔しさが、寂しさが、悲しみが、怒りが涙の形を取ってターデイから流れ出ていた。

全員を殺し終えた後、ターデイは獣のように泣いた。狂おしく、血の海になった床を叩きながら、呪詛の言葉でこの世を罵った。

「こいつらは、人の面を被っただけの豚どもさ」

ああ、そうだと彼は女の言葉に頷いた。

「世の中は、魑魅魍魎と獣同士がしのぎを削ってんだよ。豚に生きる資格なんざねえのさ」

そういつて笑う女を涙で塗れた瞳でターデイは見上げた。

以来、仕事を重ねるたび少しずつターデイは女に惹かれた。

そして今夜もターデイは、その背を追っていた。小柄な背丈に、腰まで伸びた夜を切り取ったような黒髪。細く白い手足は、凶暴とすら言える性格とは無縁に見える。

むしろ深窓の貴族の娘のようにすら見えた。

「ここだ」

その背が立ち止まり、指し示すのは南方貿易で潤う穀物商。

「楽勝だろ？」

女の挑発に、口の端を歪めて頷いた。

「おい、鍵師」

鉄製の扉に、賊徒の一人が張り付き鍵穴に針金を伸ばす。僅かに数秒、鍵穴をいじり、カチャリと鍵を外す。

「行け！」

静だが、威圧感のあるカシラの言葉に賊徒は商家に雪崩れ込んだ。

商家の中から聞こえる悲鳴が聞こえなくなったのを確認して、クウトウザーラは手を振った。

それを合図として、背後に控える十人は商家の中に侵入して行った。

「これで、小火は消える」

「そいつはどうかなあ」

背後から聞こえる声に、反射的に曲刀を振り抜く。

手応えのない背後を振り向くと、同時。視界の下に沈み込む黒髪と、月明かりに反射した刃が見えた。

とつさに腕を引く、だが僅かに遅く、腕に熱が走り曲刀を取り落とす。

背後に体勢を逃がすと、追撃に備えて逆の手に短剣を握り締めた。だがクウトウザーラの予想に反して、あれだけの攻撃で向き合った女は追撃を止めた。

当然追撃に対する備えはあったが、防ぎ切れず深手を覚悟していたクウトウザーラは、斬られた腕を庇いながら、女を見た。

弄もてあそんでいた短剣が宙を舞い、女の手収まる。

「まだやるかい？」

圧倒的優位に、女は余裕を見せて笑った。

無言の内に短剣を構えるクウトウザーラ。女は苦笑と共に両手に短剣を構えた。

月が照らす闇の中、張り詰めた空気が二人の間を埋め尽くす。質量を持ったような空気が重くのし掛かる中、女が前にでる。わずかに一步。だがそのぶんだけクウトウザーラは下がる。

更に一步女が前にでる。再び下がるクウトウザーラ。それが二人の力関係の差を示していた。

「逃げないのかい？」

闇すら飲み込む女の漆黒の瞳が、クウトウザーラを見つめる。

背筋を流れる冷たい汗と、胸を支配する焦燥感に彼の心は悲鳴をあげた。

更に一步、女が前に出る。

「くっ……」

クウトウザーラは背を向けて走る。後退する際、笛を鳴らす。商家の中から吐き出された手下に退却を告げた。

「クソッ！ 奴らどこ行きやがった！？」

息巻いて商家を飛び出してきたターディは、二つ名の通り頭から血を浴びたようだった。

「どうかしたのかい？」

力を抜いたカシラの声に、血走った視線を向ける。

「カシラ！ 敵だ！」

「ああ、追い払っておいたよ」

ターディに続いて商家からは賊徒達が、出て来るがその表所ははつきりと二つに分けられた。

怒りと恐怖。

「……奴ら、何なんだ？ 俺たちを狙ってやがったみたいだが」

「どこかの暗殺団だろ」

平然と答える女に、ざわめきが賊徒を支配する。

「どういうことだ？ 何か知ってるのか？」
腕を組んで平然と告げる女の言葉に、ざわめきが不信の声をもちます。

「まあ、とりあえず」

女が双振りの短剣を腰から抜く。

「カシラ？」

ターデイの声にも疑問と不安が混じる。

「警邏隊の犬どもだ」

不敵に笑う女に、賊徒達は互いの顔を見合わせ、武器についた血糊を払い落とす。

「警邏隊だ！ 大人しくしろ！」

「突き破るよ！」

警邏隊の誰何すいかの声と女の命令が重なった。

警邏隊に向けて駆け出す女に、賊徒達は目の色を変える。

取締りを目的にするとはいえ、ジェルノ家が中心となって作った警邏隊の話は、嗜好きな者の口伝てに、賊徒達にも伝わっていた。

オウカ・ジェルノが王に対抗するために創った私兵にも等しい警邏隊。

潤沢な金とコネにモノを言わせた彼らの評判は高い。

彼らの持つ油夜灯ランタンの明かりが夜の闇を駆逐するように、商家の路地を照らす。

夜を住処とする彼らにとって、その明かりは断崖絶壁を見下ろした心境に等しい。

思わず立ち竦む賊徒達の群を抜けて、女が警邏隊に斬り込んだ。

途端、血飛沫が警邏隊の中であがる。一旦は彼らにおそれをなした賊徒達だが、それをみて持ち前の強気を取り戻す。

「カシラに続け！」

ターデイの声に、賊徒達が得物を振りかざし、警邏隊に殺到した。

「これ以上、我慢することなどできぬ！」

ベルガデイのトゥメルの屋敷に集まった幹部の一人が、会議の席上で不満をぶちまけた。

「王都からの軍勢は、既にこの西域の半ばにまで達しているのだぞ！」

幹部の中でも古参の彼の言葉に、出席者たちは下を向く。彼らとてこのまま指をくわえて見ているのは不本意なのだ。しかし、頼みとするトゥメルの様子は、依然として消沈したまま。

「しかし、な……」

そう言った視線の先には空席のトゥメルの座。

「もうよい！ わしは勝手にやらせてもらおう」

「グンメル殿！」

呼びかけられる声を振り切って、幹部の一人は席を蹴った。

室内を覆う暗くて重い空気の中で、頭をあげられるものはいなかった。

「敵が、籠城？」

天幕で受けた報告に、シュセは柳眉をひそめた。

「間違いありません。数はおよそ300。ここより半日の距離にある村落に立てこもっています」 たった300、シュセの率いる軍勢に比べれば、人数比7対1にしかならない。

「ご苦労様でした」

部下を下がらせると、視線を手元の地図に落とす。

籠城している村の名前は、ケイウッド。

村の周囲には僅かな畑と、その外側に果樹園が広がる。村に至る道は一つだけしかない。

西域にはありふれた地形。別段要害の地というわけではない。

「罨、を仕掛けるにしては妙な……」

果樹園は兵を隠せるほどに密ではない。矢を射るにしても、距離がありすぎる。火をかけるには季節が悪いし、何より枯れ木を集めている気配もない。

「何を、考えているのですか……?」

地図上の敵に向かい、シユセは問いかけた。

「攻めないのか?」

いきなり背後から声をかけられ、シユセは突然目隠しされた時のように驚愕した。彼女は内心の動揺を押し殺して、ゆっくり振り向く。

「女性の後ろから、いきなり声をかけないでください」

動揺を押し殺した表情は、よくいつて無表情。それをどうとったのか、ジンは意地悪く、口の端を歪めた。

「考えておく。それより攻めないのか?」

シユセの手元の地図に視線を落とし、今一度彼女に問いかける。

「……考え中です」

その近すぎる距離に、シユセは視線を地図に戻す。

「あなたは、攻めたそうですね」

「負けそうにないからな」

「罨に嵌ってしまえば、人数差は当てになりませんよ?」

「どんな?」

「それは……わかりませんが」

柳眉をひそめるシユセに、ジンは不敵に笑う。

「罨があれば、食い破ればいい」

確かに、罨を破れるならば問題は何も無い。だが、もし……。尚も地図を凝視するシユセの頭に軽い衝撃がある。いや、衝撃と

いつものすら軽すぎる。

「もしかして、気遣って頂けているので？」

自身の頭に乗せられたジンの手。その手に問いかけるシュセ。

「怯えた、獲物の顔をしてる」

頬を膨らませたシュセがジンを睨む。

「……そんなに、酷い顔ですか？」

肩を竦めると、手をどかして背を向ける。

「なんだか、物凄く馬鹿にされた気がします。この借りは、忘れませんよ？」

細く息を吐き出すと、シュセはジンに見えないように小さく笑った。

天幕の幌を上げて外にでる。降り注ぐ陽光に一瞬目を細めると、駆け寄る部下に決然と言い放った。

「ケイウッドを攻め落とし、西域征伐の狼煙とします」

準備は、と聞いた彼女に部下は胸を張って応える。

「すぐにでも」

こくりと頷いて、未だ見えぬ敵将を睨んだ。

魂を絞り出すような喊声をあげて、長槍兵がぶつかり合う。その隙間を縫うように長剣兵が剣を振るい、弓兵は後方から敵陣に向けて矢の雨を降らせた。

村へと続く街道の出口。それを巡って広くもない畑を舞台にグンメル率いるトゥメル歩兵軍と、シュセ率いるロクサーヌ軍との戦いは幕を開けた。

5人をひとまとまりに、^{コセ}伍を組む。伍が5つ集まって班。^{コセ}通常12班を1隊とする定員300名よりも、僅かに多い。

対するロクサー又軍は長槍兵だけで2隊、長剣兵も3隊、弓兵が1隊、残る200名が騎馬隊としてシュセの直接の指揮を受ける。数だけを見れば圧倒的だが、それを生かし切るだけの地積がシュセには与えられなかった。

数で劣るトウムル歩兵軍が逆に押し出してきたのだ。ロクサー又軍が細い街道を抜ける手前を狙ってほぼ全軍を挙げて攻め寄せてくる。

長槍兵を前面に押し出して、左右に2個長剣班。ロクサー又軍が街道から出て来た所を、左右の長剣班で囲い込み、半包围を敷く。

少数である身軽さを活かし、ロクサー又軍の先陣である長槍兵が陣容を整える隙を与えない。

整然と揃った槍の列。盾に姿を隠した兵士たちは、針鼠のような陣列を構える。一列目は地面と水平に二列目は、わずかに槍が上を向く。三列目は更に上。

前面に対する絶対の防壁。左右の防御を捨てたそれが、ゆっくりと前進してくる。左右に展開するのは、長剣兵。長槍兵の弱点を埋めるため、ロクサー又軍を包围する。

未だ整列が終わらないロクサー又軍に向かって、一気に襲いかかった。

未だ整わない隊列の隙間を、槍の穂先が容赦なく突き崩す。

悲鳴と怒声を引きずりながら、崩れだした隊列は整列を終えていた他の隊列までも巻き込んでしまう。

敵の穂先に追われた兵士が味方の隊列に逃げ込み隊列を乱してしまふのだ。

そこを狙ったかのように、トウムル歩兵軍の長槍兵が押し進む。更に崩れた隊列を狙って、左右に配置された長剣兵が襲いかかった。

前衛混乱。

その報告に、シュセは僅かに頷いただけだった。

その表情にはさざ波すらたっていない。数倍の兵力差にも関わらず、圧されている。予想外の出来事に慌てて報告に来た伝令は、彼

女の表情を見て気持ちも落ち着かせた。

「長剣兵を前に出します」

冷静な彼女の言葉に、伝令は自身の醜態を恥じた。

「左右の林を突破しなさい。長槍隊にはわたくしが向かいます！」

その言葉に、伝令兵は背筋を伸ばす。

将たるシユセが直接出向く。確かに兵士たちの士気はあがるだろう。あるいは数に勝るロクサーヌ軍ならば、それが勝利の決め手となるかもしれない。

だがそれは、将である彼女の命をさらす事には違いない。

つまり、シユセはそれほど危機感を持っているということだ。

敬礼を返すと伝令は、すぐさま彼女の指令を伝えるため、駆け出しました。

敵の長槍兵に追われた兵士たちが、味方の隊列に入り込み混乱が増す中で、シユセは自身の直接指揮下にはない長槍隊と長剣隊を混乱する前衛から引き離すべく、後退を命じる。

と同時に、シユセ直属の騎馬隊を前に出した。

走っていない馬など、ただの目立つ的でしかない。だが、その先頭に立つシユセには、それこそが狙いだった。

騎馬隊を二つに分けて、左右から襲い来る敵の長剣兵の前に騎馬隊を乗り込ませる。

当然殺到する敵の攻撃に狙われ騎馬隊は傷付くか、倒れるかしてしまふ。だが、攻撃が彼ら騎馬隊に集中する間に、混乱する長槍隊をシユセは立て直してしまった。

「グリユーエン！ ハーネイル！ ソセイグ！ 班を掌握なさい！」

彼女が名前を呼んだのは、初陣の頃から私兵としてスカルディア家に仕えた旧知の名前。

「グリユーエン班良し！」

「ハーネイル班掌握！」

「ソセイグ班良いぞ！」

返答に小さく頷く。

「一列横隊！」

馬上から剣を抜いてシュセが命じれば、先ほどの混乱が嘘のように、整然と長槍の列を整える。

「カラツク！ ヒューイ！ 残りのっ！」

指示を出しかけたシュセに、敵の長剣兵が襲い来る。その剣を弾き、頭上に大剣を振り下ろす。

革の兜ごと押しつぶした大剣を頭上に掲げる。

「敵は少ない、恐れず前を見よ！」

「カラツク班良し！」

「ヒューイ班、掌握良いぞ！」

自身の後ろからあがる声に、シュセは大剣を正面に向ける。

「前進！」

その声に、混乱から立ち直ったカラツク、ヒューイの班が槍の列を整えて前にでる。

最前線で敵の槍兵を押し止めていた各班と合流すし、崩れていた“針鼠”が復活した。復活してしまえば数は元々有利なのだ。

「押せ押せ！」

「シュセ様に敵を近付けるな！」

班長たちの檄に槍兵たちの士気は否が応でもあがる。

正面が安定したことを確かめたシュセは、馬首を返す。

盾の役目をした騎馬隊を撤収しなければならぬ。

騎馬隊に後退を命じたのと、林を抜けた長剣隊が敵とぶつかるのは同時だった。

「騎馬隊を救え！」

磨き抜かれた長剣を抜き放つロクサーヌの長剣隊。

騎馬隊を追ってきた敵の長剣兵を認めた途端、吠えるような喊声と共に、長剣隊は敵に襲いかかった。

ロクサーヌ軍を包囲しようとした左右の長剣兵が押し返され、まだ拮抗を保っていた槍兵が逆包囲される。

短いが激烈な長剣兵同士の衝突の後、数に勝るロクサーヌ軍がト

ウムル歩兵軍を押し込む。

先程と同じ光景が、数と相手を代えて行われた。

「長槍兵どもに斬りかかれ！」

「敵が横から来るぞ！」

ロクサーヌの長剣隊が雄叫びを上げれば、反対にトウムル歩兵軍からは悲鳴があがる。

崩れ出すトウムル軍は両側からの圧力に、崩壊する。

「引け！ 退却！」

「逃がすな、追え！」

逃げる少数を、勝利の勢いを駆るロクサーヌ軍が追う。

それは既に戦ではなく、勝利の余韻を駆った殺戮だった。

遅れたものから長剣を突き立てられ、その牙を逃れたとしても、迫り来る鉄靴に踏みだかれる。

既にトウムル軍は兵も将もない。等しく遅れた者から死んでいく。

自軍の熱狂的な殺戮と、敵の悲鳴にシユセは自身の目を疑った。

一度少数の敵に追い詰められたが故の、恐怖。それがロクサーヌ軍をして、執拗なまでの追撃となって現れた。

「シユセ様大勝利ですな！」

騎兵の1人が茫然としていた彼女に声をかける。

「……こんな、わたくしが求めたのはっ！」

違う、と青ざめた彼女は小さく呟き、手にした大剣を振り上げる。

「全軍に停止を命じます」

「はっ？ いや、しかし……」

戸惑う騎兵を睨み、怒鳴りつける。

「止めなさい！」

「は、はっ！」

騎馬の伝令を走らせ、先頭を走る長剣隊を止まらせる。

「敵味方を問わず生きている者に、治療を！」

「敵にも、ですか？」

確認する兵士を、憤怒の視線で睨み付け再び繰り返す。

「そうです！」

返事をして駆け去る兵士を横目に、1人の騎兵が苦言を呈する。

「追撃を止めたのみならず、敵まで助けては、兵士の士気に関わりましよう」

苦虫を噛み潰したかのような、騎兵の顔。仲間を殺した他人を助ける。シュセの命令は、そういつているに等しい。

「敵、などではありません」

頭を振るシュセは悲しみに顔を歪めていた。

ケイウツドの戦いにおいて勝利を得たロクサーヌ軍。損害は多くなく、そのままケイウツドを占領する。

当初予想されたトゥメル軍の抵抗はなく、主将たるグンメルは負傷して動けない所を捕縛された。

シュセの指示通り、敵味方ともに行われた治療はトゥメル軍の抵抗の意志を奪うのに充分であった。

「なぜ我らに治療など……」

「感謝するんだな。シュセ様の命令だ」

このようなやりとりが、生き残った敵味方の兵士同士で行われた。彼女の意図とは無関係に、治療を受けた敵は抗戦の意志を失い、それを見た彼女の部下もシュセに対する認識を改める。

「流石はシュセ様、慧眼とはこの事ですな！」

兵士の1人に声をかけられ、彼女は苦笑った。

慈悲深き戦乙女。

勝者と敗者の両方に知れ渡るその評価。自身の内面とはあまりに違う評価に、シュセは頭を抱えた。

占領した村の村長の家を借り上げ、シュセはそこを本営とする。

「降伏したもものたちはどうしていますか？」

「負傷者をのぞき、一カ所に集めています。これから尋問を適時始

めていこうと思いますが」

士官の1人の言葉に、軽く頷く。

「四周を警戒するように」

テールの上に広げた地図上に、周囲の情報を書き込んでいく。

「それから、偵察班を」

士官に指示すると、別の部下を呼ぶ。

「ハーネイルさん」

長槍隊の班長たちの1人を呼ぶ。実直を絵に描いたような男が、厳つい顔をのぞかせる。三十代の半ば、シュセにしてみれば、父親にも近い年齢の彼に、住民の様子を聞く。

「悪くはありませんが、みな不安を抱いているでしょうな」

「村人に対する暴行の厳禁を、それと窃盗に関しても同様です。破るものには、陛下の名前を持って厳罰を加えます」

「承知しました」

厳しいシュセの言葉に、同意を示すように彼は頷いた。

「付け加えるなら、布告として開示したほうが良いでしょうな」

「分かりました。立て札にして、村の広場に立ててください」

「御意」

幾分柔らかくなった彼女の顔に、いささかも表情を緩めることなく頷いた。

「……後ろから近付くのはやめてくださいと、お願いしませんでしたか？」

自身の背後に佇む気配に、シュセは振り返らずに問い掛けた。

「ふん」

気配を嗅ぎ取られたのが悔しいのか、いささか不機嫌そうにジンは鼻を鳴らす。

「しばらくこの場所に居座るのか？」

「二、三日になるでしょうね」

「そうか」

それだけ確かめると、ジンは音もなく彼女の部屋から消えた。

彼女の部屋から出ると、ジンは着ていた兵士の鎧を脱ぎ捨てる。

軽量の革鎧とは言え、普段の動きが制限されることを彼は憚った。

「……来るか」

黄昏の風に混じる、不穏な気配。自身と同じ、どぶを這いずり回る獣の気配。

その気配に、口の端をゆがめた。

西域の主14（後書き）

仕事一段落シタ更新スル。

月の明かりは木々に遮られ、その下には届かない。暗闇の中に沈み、息を潜める影が2つ。

声を出すことなく2つの影は村を伺う。今朝2つの軍勢がその占有を争った村だ。

「
」
交わす視線で、意志の疎通がはかられる。

狙うのは、主将が首。シュセ・ノイスターという名前の少女の首だ。

爛々と輝く瞳で、村を睨む初老の男。黒づくめの服に、平坦な顔の口元には不敵な笑み。

「
」
動きは獣のように早く、月がかげるのに合わせて林から這い出る。

「
」
四つ足の獣のように地面を這い進む。獣除けの柵も、足場の悪い畑も彼らの速度を阻むものではなかった。

「
」
その彼ら2人が急停止して目の前に立つ男を睨む。月がかげる中、鬼火のような赤い瞳が地面を這う彼らを捉えていた。不敵に歪む口許が、その男の自信を伺わせる。

言葉はない。だが、その男が構える双剣が、言葉よりも雄弁に戦意を伝えていた。

「
」
双方から放たれる殺気に、空気の質さえ変わる。夜の闇が、質量さえ伴って彼らを押しつぶそうとする。

「
」
僅かに視線を交わし、目の前に立つ男に襲いかかった。

低い姿勢から足下を狙って、四つ足のまま跳ぶ。もう一人は男の

首筋を狙って走る。

手の甲に装備した鉤爪が、畑の土を巻き上げながら振るわれる。足首にねらいを定めた一撃に、男が舌打ちと同時に双剣の左をぶつけてきた。

首筋を狙った右からの攻撃に双剣の右を合わせる。左右からの攻撃に、難無く合わせてくる目の前の敵。一瞬で始末してしまうつもりだったが、これは予想以上の難敵だった。

悪くすれば、援軍を呼ばれ折角の機会がふいになっってしまう。

小さいとは言え戦の後、疲れた兵士たちが寝静まるこの時は、これ以上ない程の機会であった。

「
」
僅かな迷い。

交わされた視線に、襲撃者の一人は目の前の敵に襲いかかった。

限りなく地面に近い位置から、研ぎ澄まされた鉤爪が足をねらう。後ろに飛び退く敵に、鉤爪を再び振るう。下から上へ。左右連続して繰り返される流れるような攻撃に男の行動を封じ込め、もう一人は目的を果たすため走る。

舌打ちと共に、男が双剣を振るう。

鉤爪を防ぐため両手の双剣を振るう。闇夜に、火花が散る。そのたびに陰影が彼らの横顔を照らす。一瞬だけ闇に咲く火の花。

その数が、10を数えた所で両者が距離をとる。

「惜しいな………実に」

四つん這いの男から声もれる。耳を騒がす雑音のような声。

それに耳を傾けることなく、離れた距離を詰めていく。

「その若さにして、その技量」

声音に余裕すら漂わせる。だがそれに構わず、赤い瞳の男は突っ込んだ。

下に構えた左が、体ごと突っ込んでくると同時に振るわれる。

正面から、獲物を狙う肉食獣のような動き。下から上に空間すら切り裂くような速さで、鈍色の刀身が走り抜ける。

それを紙一重でかわし、鉤爪の男が両腕を翼のように広げ、飛び退く。着地とほぼ同時に地を蹴り、双剣を振るう間合いを殺す。

驚きに目を見開く双剣の男に膝を叩き込む。膝には補強防具を仕込んでいる。それ越しにでもわかる骨を折った感触。

肋骨を折った手応えに、口元が歪む。

衝撃に九の字に曲がる双剣の男の背中に、肘で畳み掛ける。殺傷力なら鉤爪が上だが、相手を崩すなら連打がものを言う。

肘から顔面に掌打、弾ける男に止めの鉤爪を叩き付けようとして

赤い瞳が値踏みするように、向けられているのに一瞬気を取られた。

暗殺者としての勘が危険を告げる。踏み込んでいた足のつま先に全体中をかけて、後ろに引き戻す。

瞬間、双剣の男を切り裂こうとしていた腕の肘から先が消えた。

力なく後ろに倒れそうになっていたはずの男の腕が交差している。肘から先を失って飛び退くのと、双剣の男が赤い唾を吐き捨てながら、態勢を立て直すのは同時だった。

「ふざけた真似を……」

苦々しく呟く声に、双剣の男は声もなく笑った。

ふわりと、蠟燭の火が揺れた気配にシユセは振り向いた。

目に映るのは揺らぐ天幕の裾野のみ。

びりり、と首筋の後ろに痺れを感じた瞬間、彼女の手からはほとんど反射的に細剣が真上に向かって抜き放たれていた。

天幕の天井、つかまるところさえないその空間に向かって振りぬ

かれた銀の細剣。切り裂くはずの天幕の布を裂くはずだけだった剣先に、ありえない衝撃が走る。

鋼と鋼のぶつかりあう衝撃、驚愕とともに、見開いたシュセの瞳に移ったのは天井からぶら下がる黒い影。反射的に身を引くのと、その黒い影が落下してくるのはほとんど同時だった。

「くっ……」

かみ締めた奥歯と同時に吐き出された息もつかの間、影の発する異様な殺気に、態勢を立て直す暇もなく細剣で突きを繰り出した。

上下二段。

瞬きの間に繰り出された二連撃。並みの者なら反応すらできないシュセの二段突きに、襲撃者は余裕すらもって鉄甲で払って見せた。払った鉄甲から延びる鉤爪が、蝋燭の明かりを受けて黒く光る。

近づいては不利！

そう判断したシュセは、距離をとろうと細剣を横薙ぎに払いつつ、後ろに下がる。だが襲撃者は元より逃がすつもりなどない。横薙ぎに振るわれた彼女の剣の下を、掻い潜るようにして彼女の間合いの内側へと入り込もうとする。

横薙ぎに振るわれた細剣が、勢いを殺さぬまま彼女の手元に引き寄せられ、再び突きの態勢となる。

“突き”とは本来死太刀と呼ばれる物だ。

その技を放つてしまえば、隙を生じるのが当然の大技。であるから、当然放つからには一撃で決めなければならぬ。だが、シュセはその死太刀の隙を感じさせない連続した動きの中に、組み込んだ。彼女の非凡さは、目を見張るものがある。

だが、この時点においては襲撃者の実力が上回った。

再び突きを繰り出すシュセの剣先が、襲撃者の肩を掠める。

その一撃に、内心シュセは臍はそをかんだ。掠めると同時に、間合いの内側に侵入しようとし、それを防ごうと、シュセは再び突きを繰り出そうと細剣を手元に戻す。

だがその途中、引き付ける途中の細剣を弾き飛ばされ、彼女自身

も振るわれる鉤爪に二の腕を浅く切り裂かれる。尚もその距離から脱しようとするシュセに、襲撃者の足払い。

倒れこむシュセののど元に、鉤爪が突きつけられた。

睨み付ける彼女に、黒衣の衣装から顔だけ覗かせた襲撃者は見下ろす。

落ちてきたのは、聞いてるシュセが不愉快になる嘲笑だった。

「クツクツク……」

しわがれた声に、平坦な顔の初老の男。脂ぎって爛々と輝く瞳だけが、ひどく汚らわしかった。

「なるほど、見れば見るほどあのイシキアにそっくりじゃわ」

イシキア　その名にシュセは突きつけられた鉤爪も忘れて目を見開いた。

「なぜ、貴様が母上の名を……」

驚愕に歪むシュセの顔を、舌なめずりするように眺める襲撃者。

「クツカツカ、しらいでか。あのイシキアという女はなあ、必要などなくとも誰にでも体を開く……そう淫売と呼ぶのも足りないほどの女であったぞ」

「うそだっ！」

喉に鉤爪が食い込むのも忘れ、シュセが吠える。だが、襲撃者は彼女の怒りすらも嘲りの対象とするように頭をつかむと、地面にたたきつける。

「嘘なものか、当時の有力な貴族であるオウカ・ジェルノを始め、ヘルキオス・ヘルシオ。果てはわしののような暗殺者や、おう……」

そうそうネアスの実の弟たるクレインにも存分に抱かれておったぞ」

「ふ、ふぎけるな！」

大の男の力で押さえつけられたシュセは、あまりの誹謗に反撃すら頭になくただ、語られる事実を否定する。

「クツカツカ、貴様がどう思おうと勝手だがな。お前はあの母の何を知っているというのだ？ いや、母などという者ではないか。あれは徹頭徹尾ただの牝だった」

滴る言葉が彼女の心を侵食していく。怒りと衝撃にわなわたと震える体に、さらに襲撃者が追い討ちをかける。

「貴様もその血を引いているのだろっ？ 男ならば誰でもよく銜え込み、クツカツカ。あの王都にいる小僧には、もう抱いてもらったのか？」

「貴様っ！」

怒りに任せて腕を振りあげるが、大の男の力にかなうはずもない。「クツカツカ、しかし貴様は本当にネアスの娘なのか？ よく思い出してみる、貴様の母親は誰といつあっていたんだ？」

「わ、わたくしは！」

「クツカツカ……まあ、良い。貴様の狼狽ぶりもなかなか楽しめた。それにそんな心配もなくなって良くなるっ。今すぐにな！」

振り上げられた鉤爪。

同時に天幕を切り裂く音がして、襲撃者はわずかに視線をむける。「逃げるなよ。せつかくのお楽しみが台無しじゃねえか」

口許に浮かぶのは、不吉の象徴である弦月のように歪む笑み。赤い瞳は闘志をみなぎらせて、襲撃者を捉え顔の半分は額からの出血で真っ赤に染まる。

その傷と血の量さえも、全く問題にせず、不敵に笑う。

「疾っ！」

瞬時にシュセを襲っていた男に向かって奔る。

手にしたのは、双剣。幾多の命を奪ってきた鋼鉄の刀身が、再び血を啜らせると叫ぶ声さえ聞こえる。

「くっ、手負いの小僧が！」

シュセに突き付けていた鉤爪さえも防ぐことに、使いその場から飛びのく。

熟練の暗殺者をして、驚愕させるほどにジンの技量はあがっていた。

相手が下がるのを認めたとたんジンは休む間を与えず、追いつがる。左右双剣が竜巻のように、鉤爪を巻き込み、一度巻き込まれ

ば体勢を崩さざるを得ない。それほどまでに、鋭く強い一撃一撃。連続して叩き込まれるその攻撃に、襲撃者は焦りを覚える。

交わし続けることは比較的容易だった。

双剣の軌道自体は見切れないわけではない。時間をかければ、隙を作り出し初手の勢いそのまま流れるこの攻防を有利に導くこともできるだろう。

だが、しかし襲撃者はその性質上時間をかけるわけにはいかない。ここは敵地の真ん中、ロクサー又軍の只中にいるのだ。

今は放心しているシュセが一声外に声をかければ、彼は幾多の敵に押し包まれ無残に鬨り殺される。ありありと思い浮かべるその結末が、襲撃者の心にほんのわずかに影を落とす。

その影が、ジンの双剣を見切れているにも関わらず反撃に移れない理由だった。

目の前のジンを倒し、シュセの首を取り、さらにはこの地を脱出せねばならないのだ。ゆえに、無傷。それで目の前のジンを倒さねばならない。

振るわれる双剣は唸りを上げる風を思わせ、剣筋の鋭さは何十年も剣を頼りに生きてきたように迷いのない。

双剣の切っ先が触れるたび、その天幕は無残に切り裂かれ、最初は余裕を持って見送っていた襲撃者の黒衣を切り裂くまでに接近する。

「おのれ……」

低く舌打ちして襲撃者は背を向ける。

置き土産とばかりに、飛礫が投げられる。

激しく体を撃つ飛礫に、ジンの追撃が緩まる。その隙を見逃さず、襲撃者は天幕の外へ走り出た。

「ここまできてっ！」

舌打ち混じりに吐き捨て後を追おうとするジンに、シュセの叫びが聞こえる。

「ジンさん！ 待ってください」

その声のあまりの悲痛さに、ジンが足を止め振り返る。

鍵爪がわずかに肌に食い込んだのだろう。首筋から血を流し、震える体を抱きしめるシュセの姿。その姿にジンは驚いた。

彼女が傷つくのに驚いたのではない。ジンが僅かに目を見開いて驚いたのは彼女の顔。いつも強い意志が芯を通したような、凜とした表情などは微塵もない。

以前ジンが戯れに殺そうと試みたときでさえ、こんな顔をしてはいなかった。

琥珀色の瞳はジンを捉えているはずなのに、虚ろに空を彷徨い、口元には笑みを浮かべようとして失敗したとしか思えない笑みが浮かんでいる。

怯えや恐怖などではない。それはジンにも理解できた。

「おい」

あまりのことに、思わずジンの方から声をかける。一度や二度命の危機を感じたからとて、こんな表情を見せるような女ではなかったはずだ。

「はい……」

小さく聞こえた声。

眉根をひそめ、一瞬だけ襲撃者の去っていった方を振り返ると、双剣をしまう。

もはや追いつけないだろう。

ジンが気になっているのはシュセの方だ。あの襲撃者に何かされたのだろうか。

歩み寄るジンに、シュセの体の震えは大きくなり、笑顔といえない笑顔を俯かせる。

「おい」

「はい……」

目の前に来ても彼女はジンの顔すら見ようとしなない。

「どうかしたか？」

その言葉に、シュセはびくりと体を震わせた。自身を抱く腕に力

を込めて、決壊しそうな感情を必死に抑える。

「いえ、呼び止めてすいません。なんでもありません」

ぼそぼそと咳き背を向けようとすると、シュセに、獲物を逃がした不愉快さも相まってジンは苛立った。

「ふざけてるのか!」

苛立ちのままにシュセの肩を掴んで振り向かせる。

「あつ」

それはあまりにもか弱い悲鳴。騎士として普段振舞う彼女からは想像もできない声音だった。

「おまえ、なに……泣いてんだ?」

振り向いたシュセの琥珀色の瞳から溢れる涙に、ジンの方が驚いて固まってしまう。怒りのままに掴んだ肩から手があっけなく外れる。

「泣いている?」

自身そのことにすら気づいていなかったのか、シュセは自分の手で目元をぬぐうと、彼女にはまったく似つかわしくない嘲笑に似た笑い声をたてた。

狂気すら漂わせるシュセに、ジンの方が戸惑う。

「さっきのアレに何かされたのか?」

「ふふふ……いえ、なんでもないので。可笑しくて、仕方がないだけ」

心と同じような引きつったような笑みで、涙を流しながら笑う彼女の顔が、なぜか城から助け出されたときのルカンドと重なり、いつも無理やり強気に振舞うサイシャと重なり、悲しいときほど笑っているケイフウと重なった。

「ちっ……馬鹿が」

罵ったのは、自身がシュセかそれとも両方が。ジンの腕が頭ひとつ低いシュセの頭を抱き寄せる。

「え? なにを?」

「泣きたきゃ泣け、我慢すると見てるこっちが痛々しい」

見上げるシュセにぶつきら棒に言つと、ジンは視線をそらす。
「なんで、わたくし、が……あなたの胸で、泣かなければ……」
じんわりと広がるその腕の中の暖かさに。

嗚咽の中から、それだけ搾り出すと、シュセはジンの胸にすがつた。

「……耳を、塞いでいて下さい。あと、ごめん、なさい」

言われたとおりジンは耳を塞ぎ、目を閉じた。

彼女が何に対して謝ったのか、わからないまま彼女の気が済むまで動かなかった。

とんとん、とノックの音がする。

誰だろうと思う。足音からして、トウメルではないように思われた。窓の外に向けていた視線を、扉のほうに戻し、入室の許可を与える。

「失礼します」

その声とともに入ってきたのは、いまだ少女と呼べる年齢の侍女だった。

「カチューシャと申します。これからナルニアさまの身の回りのお世話をさせていただきます」

ぴよんと頭を下げる様子はとても愛らしく、丁寧な言葉遣いからは育ちのよさが伺えた。

「よろしく、お願いします」

そう言っただきりナルニアは窓の外を眺める。そんな様子のナルニアに、頓着せずカチューシャは部屋の掃除を元気よく始めるのだった。

「あのっ!」

あらかた掃除を終えて、少女が元気よくナルニアに話しかける。

「……はい？」

「お掃除終わりました！」

気がつけばナルニアにあてがわれた部屋は随分きれいになっている。

「ありがとうございました」

ぼんやりと、また窓の外を眺めるナルニアにカチューシャは根気よく話しかけた。

「ナルニア様は、トウムル様のことお嫌いなのですか？」

ナルニアは窓から視線をそらすことなく、悲しそうに呟いた。

「わからない、です。そんなの」

その返事をどうとったのか、カチューシャはナルニアに一步步近づく。

「不躰だとは、思いますし。こんなことを言うもの失礼だとは思いますが、トウムル様のことお嫌いでなければ、せめてお手紙を書いてくださいませんか？」

「お手紙ですか？」

窓に向けていた視線を始めてカチューシャに向ける。

改めてみれば、カチューシャの拳動はかなり不信なものだった。

「あの、その侍女の先輩の方々が話してるのを、お聞きして、そのナルニア様は心に傷を負っているって……その」

胸の前で手を合わせ、頬を染めてだが必死で思いを伝えようとナルニアに言葉をかけてくる。

「お、男の人がだめだって言うのも聞きました。お気持ちはわかります。でも、でも」

「あなたに、私の何がわかるの？」

ナルニアの口から漏れた言葉は彼女が意図したものよりは随分と冷たく、胸の底で揺らぐ心は声と反比例するようにぐらぐらと揺れていた。

「わかります！」

目じりにためた涙をぬぐいもせず、ナルニアを見つめるカチューシャ。

「あなたに何がっ！」

心の奥底から突き上げる感情が、制御できなくてナルニアは思わず怒鳴ってしまふ。立ち上がり、カチューシャを追い払おうとした矢先。

「わかるんです……」

泣き出したカチューシャが胸元を緩めて肌を露出させる。

その姿にナルニアは絶句した。

体中に未だ癒えぬ痣の後、中には明らかに拷問の後とかし思えない火傷の跡もある。

「つい先ごろまで、私はガシユベル、さまのお屋敷に奉公をしていました。そこで、その……」

戸惑ったように少女の声は小さくなる。当然だろう自分のされていたことを、思い出したくなどあるはずがない。

「ガシユベル様に、飼われていました」

泣きはらした目元からは相変わらず涙がこぼれている。だがこの瞳の強さはなんだろう。

「犬や猫みたいに、気に入らなければ折檻され、気まぐれに罵られる。そんな生活をしていました」

その絶望を、ナルニアは知っている。

逃れられない苦痛も、無力も、悲鳴を上げるからだをそれを嘲笑う男たちと。

気づけば彼女は両腕で体を抱きしめていた。凍えるように背筋に恐怖がよみがえる。腰が抜けたように椅子に倒れこみ、もうカチューシャの方を見ている余裕などない。

「でも、でも私は助けてもらえたんです」

驚くほど近くから聞こえた声と、ナルニアをそつと抱きしめるぬくもり。

「私なんて助けても、トウメル様には何も良いことなんてないのに。

だから、だからナルニア様もきつと立ち直れるはずです」

「簡単に言わないで」

震える声には既に嗚咽が混じっている。

「ごめんなさい。簡単に言ってますね。でも、ナルニア様には立ち直っていただきます」

「どうして、そんなに……」

「私トウメル様が好きなんです」

ぎゅ、とナルニアを抱きしめる小さなカチューシャの腕に力が入る。

「でも、トウメル様が好きなのはナルニア様です」

「でも、でも、私は」

子供が駄々をこねるようにナルニアは泣きじゃくる。その様子を愛おしそうに見つめてカチューシャは幼子をあやすようにナルニアの背をなで、続いて頭をなでた。

「私は我侭なんです。みんなに、幸せになってもらいたい。だから、ちよつとずつで良いんです。前に進みましょう？」

「わがまま、ね」

につこりと頷くカチューシャに、泣きはらしていたナルニアは少し笑った。

その日から、カチューシャはトウメルの部屋とナルニアの部屋を何度も行き来することになる。交わされる文章は徐々に二人の間に絶たれたと思われていた絆を作り始めていた。

それをカチューシャは嬉しそうに、見守った。

折り重なる死体が広場に死臭を振りまく。

村中から集められたその屍は広場に集積され、火をかけられるの

を待つばかり。すでにそれは、人などではなくモノでしかない。

藁葺きの屋根の小さな家々、いまやそれを占拠しているのはトゥメル軍でもなければロクサーヌ軍でもない。

女の屍を四体重ね、それを椅子代わりにした男は苛立たしく周囲に怒鳴り声をあげた。

「まだ捕まらないのかっ!？」

それはブライズと呼ばれた男の声。浴びた返り血が彼の顔に凄惨な様相を刻む。

鉄製の鎧に、両手で振るわねばならない大剣を大地に突き刺し堂々と構えているのは一軍の将といっても通じる。

彼率いる盗賊団は、先日からロクサーヌが進行しつつある西域の戦場地域を荒らしまわっていた。すでに食いつぶした村は3つめになる。

未だガツチリとトゥメル歩兵軍が支配をしている西部よりもより仕事がい易かろうと、クシュレアに献策されたのが図にあたって、随分と手軽に村を襲うことができていた。

村人の口さえ封じてしまえば、もしロクサーヌ軍と出会ってしまったとしてもなんとでも言い訳できる。トゥメル歩兵軍はこの戦に消極的だし、西都まで引き込んで戦うつもりだというのをクシュレア経由で聞いてから、ブライズ率いる盗賊団はまさに無人の野を行くが如く、東部を荒らしまわっていた。

「あの、女あ」

奥歯をかみ締めるブライズの様子に周囲を固める者らが恐怖する。「てめえらもいって、探してきやがれ!　なんとしても俺の前まで引きずってきやがれ!」

あわてて返事をする部下たちに苛立ちを隠せない。

彼が今必死になって行方を捜しているのは、クシュレアとその仲間2人だ。

村を潰し血の臭いに酔っていた部下達も、やっと落ち着きを取り戻した時に彼女らは現れた。旅装に身を包んだが、その魅力は失

われることなく血に酔って、散々村の女どもを犯した男達ですら思わず舌なめずりするほどだった。

彼女らを知らずに、ちよっかいをかけようとした新入りがあこのエレガと名乗る長身の女に叩き伏せられる。思えば、ブライズ自身仕事を終えたばかりで気が立っていたのだろう。いつものように鷹揚に構える余裕がなくなっていた。

ブライズ自身は否定するだろうが、元騎士である彼にとって無抵抗のものを殺すというのはやはり心がささくれたつもろしかった。だから、クシュレアの言葉にささくれた気持ちが一気に憎悪にまで高まるのに時間はかからなかった。

いつもの交渉ごとが、上手くいかないのにクシュレアも内心は苛立っていた。彼女らは賊徒の跋扈するガドリアで雪華に所属していた。ゆえに人死には慣れていて。だが、村の様子は眉をひそめるほどの虐殺でしかない。

嫌悪感しか湧かないその様子に、目の前のブライズたちにおいてさえ嫌悪の対象としか見えなかった。いつも以上に強気に出たのはそんな自分の心の動きを相手に知られたくなかったからだ。

「そんなに、あたしらが気に入らないなら交渉はこれっきりさ」
いつもなら駆け引きの言葉が、ブライズには最後通牒に聞こえた。

「この状況で逃げられると思ってやがるのか」

ブライズの言葉も、クシュレアには駆け引きに思えた。だからその次の言葉を聞いた時には驚愕に目を見開いた。

「てめえら、この女どもをやっちまえ！」
ブライズの手下たちが武器を構えるのと、エレガとカーナが己の得物を構えるのは同時だった。

「クシュレア！」
悲鳴に似たエレガの声に、瞬時に周囲を見渡しクシュレアは抜け道を探す。

「東だ、抜けるよ！」

我に返ってからの彼女らの行動は早かった。クシュレアとカーナの投擲剣が、降り注ぐ横殴りの雨のように一斉に放たれ怯んだそこに、エレガが単身突き進み道を作る。

焦ったのはブライズも同じ。

彼女らが逃走を図っている方向には、ロクサーヌ軍がいる。もし合流されたなら、仕事がやりにくくなるばかりではなく討伐の対象として、狩られるのは目に見えている。

クシュレアのことだから、なんと行ってロクサーヌの軍勢を籠絡するかわからない。

「逃がすんじゃねえぞ！」

怒りと憎悪に胸を焦がしながら、一方で西に偵察を出すことも忘れない。今はおとなしいとはいえ、ベルガディからトウムル歩兵軍がいつ出張ってくるかもわからないのだ。

「くそつたれ！」

どうしてこうなった、と悪態とも愚痴とも付かないものを吐き出してブライズは左右両方の勢力をにらんだ。

トウムルが自身の部屋で一心に、ナルニアからの手紙を読む。

初めてその手紙を受け取った時の笑顔、驚き、今でも色あせないそれがカチューシャの喜びだった。思わずその大きな背中に、ニシシと笑みがもれる。

「ん？　どうかしたか？」

声が漏れてしまったのだらう。大きな背中を震わせてトウムルが振り返った。

「いえ、なんでもありません」

につこりと笑うカチューシャに、そうかと言い置いてトウムルは手紙の返事を書き始める。

ナルニアのことになると、まるでトウムルは初心な男の子のよう

だった。そのギャップがカチューシャにはたまらなく愛らしい。

「なんと書いてあるか聞いても？」

「あ、ああ。お健やかですかと、な。後は季節の花々のことなど」
照れたように短く借り上げた髪を書くトウメルに、カチューシャは笑いをこらえるのが精一杯だった。

「トウメルさま！」

荒々しい足音とともに乱暴に扉が開かれる。息切って走ってきたのは軍の伝令。

「何事か？」

激つい声は戦場で鳴り響く勇者の声音。

「グンメル様、敗北。自軍は総崩れにて」

「そうか……軍議を開く。幹部らを招集しろ」

重々しく、眉間には深い皺が刻まれていた。

「トウメルさま……」

「ああ、すまぬ。カチューシャ返事はまた後でだな」

「あの、負けないでください！ きつとナルニア様もそういうと思います！」

苦い笑みを浮かべると、やさしく彼女の頭をなで部屋を後にする。その苦しそうな様子に、カチューシャの心は締め付けられるようだった。

トウメル歩兵軍の主だった幹部達が集まったのを見計らって、トウメルは口を開いた。

「先ほど、伝令から報せがきた。グンメルが敗れたようだ」

ざわつく幹部たちは目に見えて動揺する。

「伝令！」

そのざわつきが収まりきらぬ中、次なる伝令が届いた。

「ヨストークの村が、全滅。同じくフィーシャの村も」

「全滅だと！？」

目をむいたのはトウメル。幹部の中には座っていた椅子から腰を浮かしかけているものもいる。

「まさかロクサー又軍か!？」

「わかりません。略奪の後は見られませんが、村人は全員……」

悲痛な面持ちの伝令兵に、下がるように指示すると会議は重苦しい雰囲気にも包まれた。

「盗賊、ということも考えられるが……しかし全滅とは」

盗賊がそこまで徹底して村人を殺すことなど、西域ではなかった。盗賊自体も村人が貧しいことは知っているためだ。徹底的な搾取は自分たちの明日をも奪う。

だから彼らがその行為をロクサー又のためだと考えても不思議ではない。なにせ西域では盗賊よりも領主軍のほうが性質が悪いとまで言われていたのだ。

「そこまでやるかロクサー又!」

口々に交わされるのは、無為に村を全滅させてしまったという悔恨。

「トウメルさま、出陣の許可を! このままではロクサー又軍に西域は滅ぼされてしまいます!」

だが怒りに燃える眦を裂いてトウメルは首を振る。

「ロクサー又軍は、ベルガディ近郊までひきつけて殲滅する!」

初めて方針を打ち出したトウメルに、不安に互いの顔を見交わしていたものたちも、トウメルに視線を集める。

「ですが、それでは村々が!」

「かまわぬ。一度ロクサー又を打ち破ったならば、その勢いをもって王都まで攻め上つてくれる!」

その覇気に、暗雲立ち込めるばかりであった会議の場に始めて幹部たちは明るいものを感じた。軍の都合を最優先させるゆえに、トウメルは民に嫌われる。

民に犠牲が出たとしても必ず勝てる方法をトウメルは常に選ぶからだ。

怒りに任せて拳を机に叩きつけるトウメル。

「戦場の選択を急げ! 農民兵の収集はどうなっているか!？」 西

部の文官どもに東部の民の受け入れ体制を取らせる！」

トウメルの怒声にも似た指示に、幹部達は不敵な笑みを浮かべ、
各々うなずきあう。

これだと、これこそがトウメル歩兵軍のありようだ。

西域最強の軍が、ゆっくりと動き出した。

西域の主15（後書き）

西域の主編、そろそろ目処がついてきました。

王都にシュセからの初戦勝利の報がもたらされたのは、彼女らの勝利から三日後だった。すぐさまそれは王都に知れ渡り、各地でさやかな宴が催された。

王が主催する宴にオウカ・ジェルノは不機嫌さを胸の奥底に隠し参加していた。穏やかな好々爺の仮面をかぶり彼女らの勝利を讃える。

「このたびの、緒戦の勝利。さすがは白き戦乙女！」

持て囃された彼女の話に、相槌をうちつつ、オウカはここ最近の襲撃のことを考えていた。

クトウザーラに命じて襲撃者たちを襲わせたものの、成果は芳しくない。それどころか、クトウザーラを撃退して退けるほどの腕が立つ。

黒い髪の女。

東都を統べる、双頭の蛇。その首領が確か似たような容姿だったはずだ。ならば、本格的に東都が王都に手を伸ばしてきたということだろう。

だが、未だ証拠もない。

衛士の長として、治安を取り仕切る身分となつてから雑事は多い。彼女を捕まえることができるなら、東都を奪い返すまたとない機会とはなる。

だが、クトウザーラで手に負えないとするといかなるものをぶつけるか。

「ふむ」

遠目に貴族たちから賛辞の言葉をかけられる王の姿を見る。そし

て、その周囲。宴の席であろうとも、鎧を外すことのない近衛の姿。あるいは王とぶつけてみるのが良いかもしれない。

毒見には嚴重な監視の目が光り、兵を起こすにはいまだ兵力差は大きい。なによりも、シュセ率いる討伐軍の勝利のおかげで、ロクサーヌ中が王に喝采を送っているこの時期だ。兵を起こしても不利であることはいなめない。

王自身に責めるべき失政がないのなら、その部下はどうか。

シュセ・ノイスターなる女の騎士は今討伐軍の将となり、王都にはいない。さらにいえば、先日届いた戦勝報告によって今勢いがあると見ていい。

徒に手を出して、逆に叱責を被るのは損であろう。ならばほかの者……例えば、クラウゼとユイルイ今回の討伐軍には参加していなかったが、軍においてはあのカル、シュセについての実力者といっ
ていい。

例えば、文官の筆頭格ファイフィ・オルグやベルモンド。彼ら自身がいくら、潔癖であろうと、その親族全てが後ろ暗いことがないなどということはありえない。

人がいればその数だけ、欲望があるのだから。

だが、しかし……。

手に持ったグラスに視線を落とせば、皺枯れた自身の手が目に入る。老いさらばえた自身の身体。健康に気をつけてはいるが、からめ手から攻めて果たしてあの生意気な小僧を追い落とす所まで持つのだろうか。

一抹の不安。

誰にも平等に襲い掛かる時間という魔物が、オウカには殊更憎く感じた。

「迂遠なことじゃ」

口の中で呟いた言葉を、手に持った高級な葡萄酒と一緒に飲み干す。

カルの治世を覆す決定的な一手。

自身が権力の至高の座へと至るべき、一手。

こうなってくると、有力な貴族たちが悉く先の動乱で死に絶えてしまったのが悔やまれる。オウカー一人がカルに反旗を翻したとて、軍の信望厚きカルを追い詰めることは難しいだろう。十貴族の半数でも生き残っていれば、まだやりようはあった。

武力を持つての蜂起を牽制以上の効果として使うこともできたであろう。

しかし、十貴族の悉くは死に絶え今わずかに残るのは、あの小僧をのぞけばミザークとジェルノ家のみだ。

カルの小僧を襲い、謀殺しその罪を東都の賊に。

酒を舐めることで口の端が吊り上るのを隠す。

逆らいし者に懲罰を、不遜なる野心に鉄槌を。

大貴族たる野心を胸にオウカ・ジェルノは酒を飲み干した。

「ガドリアからの道筋はどうだった？」

クルドバーツが用意した隠れ家の一つでサギリは、笑みを浮かべた。

未だ時刻は夜の明けぬ時刻。

「お気遣いありがとうございます」

丁寧に返事をするのは、杖を突く少年。見れば彼の片足は作り物だった。

「現場を見るというのは大切ですな」

照れたように穏やかな笑みを浮かべると、薦められて椅子に腰掛ける。

「東都は大丈夫なんでしょうね、ルカ？」

「ご心配なく。シロキアさんにお願ひしていますので、現状維持なら十分だと思います。サイシャとケイフウには増員した分を含めて、

兵の指揮の練習をさせています」

ふん、と鼻を鳴らして笑うサギリにルカンドは自信を持って頷いた。

「連れて来たのは」

「双頭の蛇の若手を20名」

「まあまあだね」

満足そうに頷くサギリ。

「サギリさん、ひとつお願いがあります」

その表情を確かめて、ルカンドは表情を改める。

「できるだけ人は殺すな、かい？」

笑みはそのままだが、サギリの瞳は笑っていない。冷氣さえ感じさせる漆黒の瞳は、ルカンドを品定めするように見つめている。

「はい」

姿勢をただし正面から、サギリの瞳を見返す。そこに恐れはなく、自身の意志を押し通そうとする決意だけがみなぎっていた。

「心配しなくても今回は少なめさ。何せ“正義の味方”ってやつだからねえ」

可笑しそうに口の端を歪めるサギリを尚も、じっと見つめていたルカンドだったが、やがて息を吐き出すと頭を下げた。

「お願いします」

真摯なルカンドの態度に、サギリは苦手な料理でも見るように肩間に皺を寄せ柳眉を潜める。

「アンタ段々嫌な性格になってきたね」

頭をあげたルカンドに向かってサギリが言うと、ルカンドは苦笑で答えた。

「日頃の薫陶の成果だと思えますよ」

「ハン、言ってな！」

軽口を言うと席を立ち、去ろうとするルカンドの背中に向けてサギリは声をかける。

「この後は商売かい？」

「ええ、クルドバーツさんと……何か？」

「輸入品目の中に、キレーヌの苗木を入れておきな」

「キレーヌですか？ 乾燥に強い木ですけど……なぜ？」

「いいかい、ルカ。人を生かすのなら、先々のことを考えな……説教は終わりだ。行きな」

一度頭を下げるとルカンドは退出した。

「これで手駒は揃ったね」

一人呟くとサギリは視線を西向きの窓の外に向けた。

「……フン。アタシもヤキが回ったかね」

ガシガシと頭をかくと苦笑を口元に張り付かせる。

昼からの政務を終わらせカルが自身の定めている槍の稽古の時間を得たのは、すでに日の沈みきった時刻だった。昨日からの宴で、午前中いっぱいまでは仕事にならなかった。

積載された書類と格闘を午後から始め、区切りをつけたのは夕食時。それから更にかかり、先ほどあがった複数の案件に結論を出したところだった。

訴訟から、経済、商人らの品物にかける税の金額。ある程度までは彼の優秀な文官集団である推官に任せてしまっているが、最終的な判断はカル自身がしなければならない。

よってそれらに対する知識がどうしても必要となってしまう。ゆえに、一つ一つの案件に時間がかかり、結果として彼の仕事の時間は長くなってしまっていた。

スカルディアの庭園。かつてシュセが、奴隷の商人によって追われて迷い込んだ場所に、今は一人カルが槍を構えている。

上半身には薄い肌着を纏うだけ。豪華な黄金の髪を今は邪魔にならないようにまとめてあった。

風のない夜に、月が煌々と槍を振るう姿を照らす。

まるでそこに敵がいるかのようになり、一突き、一薙ぎに力が入る。時に相手からの攻撃を受け流すように、槍の石突で弾き穂先で貫く。それを徹底して繰り返す。10回繰り返したならば、さらにその二倍の数を淡々と、しかしいささかも惰性に流れることなく。

そのうちカルの上半身を覆う肌着は汗にぬれ、額には玉の汗が浮かぶ。都合100回、彼は槍の“型”を繰り返して槍を下ろす。

吐き出した息は、燃えるように熱い。

月光の下で体を休めるその姿は、美の女神が嫉妬するほど絵になる姿だった。引き締まった身体は無駄な肉の一片すらなく、長身は同年代の少年の間でもひとつ飛びぬけたもの。白磁を思わせる肌は、同年代の少女たちの羨望と嫉妬を買うこと間違いない。

凍るような湖水の色をした瞳は、熱狂とは無縁の涼やかさを目元に漂わせ、当代一の彫刻師が彫ったのかと思わせる整いすぎた鼻梁。朱をさしたような口元は、美姫すら酔わすように熱い息を吐き出していた。

槍を引き抜くその動作すら優雅さを感じさせるのは、彼自身が練り上げた気品か。流れるような動きに、呼吸を整えたカルが再び構えを取った。

「誰だ？」

簡潔にして圧力すら伴ったその声に、月光をさえぎる木陰から黒装束のものたちが這い出る。その数5つ。

「偽称の王に死を」

「暗殺者か」

くぐもった声が影の中から聞こえると同時に、彼らが同時に走り始めた。左右散り散りに走り出す暗殺者を認めながらカルは動作はいつそ優雅と言って良いほど緩やかだった。

下段に構えた槍の穂先が、ゆっくりと鎌首をもたげる。

カルを包囲される。後ろに二人。前に三人。

「やれ」

正面影から声が聞こえた。

声が聞こえるか聞こえないか。一瞬の間を侵蝕するように一歩踏み込む。長い槍の間合いの射程範囲を生かし、正面の男に向かって突き進む。

一斉にかかる敵を肌で感じながら、正面に向けて突き出す槍。先ほど“型”で行っていたのより、数段速度をあげた必殺の速度をもつて正面の敵を突き殺す。

だが敵もただ突き殺されるわけではない。虚を衝かれたとはいえ未だ数の上での有利が覆されたわけではない。死ぬのが遅いか、早いか。その程度の差でしかないのだ。

突き殺そうと突き出された槍先を、体をひねってさける。腕に掠った後から血が流れ出るが、それにかまう余裕はない。

体ごと前に出たカルが、勢いをとめないまま、槍の石突で崩れた体勢の暗殺者を弾き飛ばしたのだ。

「が、はっ!？」

ぐぐもった声を確認してさらに、右にいた敵を薙ぐ。

突進から急停止、一瞬にしての方向転換。戦いにおいて有利を占める地の利。それは確かにカルが握っていた。片手で槍を握りなおし、さらに一撃。

なぎ払われた敵と逆方向から迫っていた敵に足払いを決める。

一瞬たりとも止まらないカルの槍捌き。手元に戻った槍が、瞬間に繰り出されいつの間にか手元に戻っている。

カルの槍捌きが尋常ではないと悟った襲撃者達は、手に投擲用の小剣を握る。

瞬きの間に放たれたそれは、四方からカルへと迫る。それを槍を振るう風圧のみで弾き飛ばす。

だがそのうちのひとつ。後方から放った投擲剣がカルの肌着を裂いて、かすり傷を負わせる。

「……っ!？」

かみ殺した悲鳴はカルのもの。敵にこちらの動揺を悟らせないよ

う、無表情を装う。

目がくらみ、体がしびれる。

毒。

意思の力を総動員して、一步踏み出す。

体は刻一刻と自由をなくしていく。底なし沼に沈んでいくような、体の痺れ。

動きが止まったカルを確かめるように、賊の一人が止めを差そう近寄ってくる。

「死ね！」

叫んだ声とともに、振りかぶられた敵の刃。それが振ってくるのにあわせて渾身の力で槍でなぎ払う。

「くっあ!？」

悲鳴すら上げる余裕もなく吹き飛ばされる賊。

警戒を緩めていた賊が再び緊張を取り戻し、投擲剣を握る。再び放たれた投擲剣を、カルは地面に倒れこむようにして避けた。

普段ならたやすく起き上がるはずの体。自身の体でないように、すでに自由はない。

「死んで、なるものかっ！」

倒れたカルを殺そうと、集まってくる賊徒を、湖水色の瞳に炎の様な激情を宿してカルは睨み付ける。

約束がある。

友と、最愛の人と、従う家臣に誓った約束が。

再び振るわれる槍。

二人をなぎ倒したその槍に、襲撃者たちの方が恐れをなす。

カルはそれを杖にして立ち上がるも、もはや自分から仕掛ける力は残っていないかった。

再び距離をとった賊たちは、再び投擲剣を投げる。

苦痛の声とともに体をひねるが、足と肩にそれぞれ一刀ずつ受けてしまう。

だが、カルはまだ諦めてはいなかった。

カルの執拗な抵抗で、残る賊徒は2人。
後一撃。

朦朧とする意識の中だが、近寄りさえすればカルにもまだ勝機はある。ぐっと、奥歯をかみ締めて意識を保つ。

戦闘で乱れた呼吸を浅く、膝を突く。毒が回るのが早いのは血液に乗って全身に行き渡ってしまふからだ。運動を繰り返せば毒は早く回り、それだけ動けなくなるのが早くなる。

ならば。

カルはその場に膝を突き、ぐっと目の前の敵だけを見据えた。投擲剣を投げられても致命傷となる者以外は気にする必要はない。先ほど受けた感じだが、血を流して動けなくなる程の威力はない。せいぜいがかすり傷を負う程度。

投擲剣による攻撃は甘んじて受けよう。その後、やつらは近づいて来ざるを得なくなる。その時こそカルのほとんど唯一の勝機だった。

再び構えられる投擲剣。

それが投げられる寸前に。

「よお、お困りかい、坊や」

嘲笑に似た笑みを顔に張り付け、夜の闇からその女は現れた。

それが味方かどうかはわからない。だがその女はカルの傍らに立ち、暗殺者達を睥睨する。

「失せな」

その女の声一つで、今まで執拗にカルを狙っていた暗殺者達が下がる。じりっと、軽いうめき声をもらしながら、暗殺者たちが下がっていく。

そして彼らは負傷した仲間を連れ、夜の闇の中へと消えて行った。「ずいぶんと、手ひどくやられたね」

女が上から笑いかけてくるが、それに対してカルはまともに返事を返すことができなかった。体をめぐる毒が、急速に彼の意識を奪って行ったからだ。

「……おま、えは……?」

やっとそれだけ紡ぎだしたカルに振ってきた声は、ひどく冷めたものだった。

「……魔女さ」

そしてカルの意識は完全に闇に閉ざされた。

怪我の養生と、周辺地域への斥候の派遣にシュセラ討伐軍は四日の時を要した。

暗殺者の襲撃に、一旦は気丈な振る舞いすらできなくなったシュセだったが、ジンに慰められている自身を恥じてか、一刻もすれば自身の気持ちに折り合いをつけていた。

泣くだけ泣いた後に、くすりと微笑んで。

「今のは内緒にしてくださいね」

と言っている様子などは、年相応の少女にしか見えなかった。

暗殺者の襲撃に最も動揺が激しかったのは、むしろ彼女よりも周囲の方であった。その報せを受けたときには全員が愕然とし、次いで怒髪天を突くが如く怒り狂った。

「今すぐ四週に斥候放ちその襲撃者とやらを見つけ出さねば!」

「この闇では搜索とてままならぬだろう!」

「ならば森に火を放て、隠れる場所もなくなってちようどいいだろうが!」

気が狂わんばかりに叫び、暴発寸前の彼らを嗜めるのは、彼女をしても一苦労だった。

結果として、彼女の通常の護衛の人数は三倍に増えた。彼女の周囲の者からすれば妥協に妥協を重ねてその数字になっているのだが、シュセからすれば懇願に懇願を重ねて極力減らしてもらったのだ。

彼女自身はすぐにも軍を前進させることを考えていたのだが、

周囲の火山の噴火のような熱気に押し切られ渋々怪我の治療に専念することになった。

「良いですか、シユセ様はそもそもが無用心すぎるのです！ いか腕が立つとは言いますが、嫁入り前の身体。何かあってからでは遅いのですぞ！」

そういつて真剣に忠告してくるのが、家族などほとんど構うことがない父親達なのだから奇妙なものだとシユセは首をかしげた。だがあるいはそれは当然なのかもしれない。

中年の働き盛りの男たちにしてみれば、シユセに対して恐れ多くも、とは思いつつも、自身の娘のような親近感を抱いているのだ。

そのような彼らからしてみれば、今回の暗殺騒ぎは愛娘が乱暴をされそうになったと同意義か、それ以上であろう。概して父親というものは娘には甘いものなのだ。

当然怒りの量は、火山の噴火の如く。しかも小規模なものではなく、大噴火だ。

事、シユセの身辺警護に関する限り、シユセ自身の意見はほとんど取り入れられなくなったのは言うまでもない。

シユセが半ば無理やり“絶対安静”を言い渡されている間に、父親達は周囲の搜索を徹底して行った。

結果として周囲の村々からは、トウメルの勢力を駆逐することに成功する。あるいはトウメル側からの散発的な騎馬での妨害行為も、ほとんど全て退けたといっている。

周辺からトウメルの勢力を駆逐し、村々を解放する。それを名目に掲げたシユセ率いるロクサーヌの軍は村々に対する暴行と略奪の一切を禁止した。

これが可能であったのは、シユセが率いてきたのが、農民出身の兵士ではなく戦を専門とする專業の兵士だったからだ。加えて彼女の威令がよく全軍に行き届いていた。

彼女が元々率いていた近衛からなる騎馬隊の将兵と、カルが再建をしていた国軍ともいうべきロアヌキア軍の将兵が共に彼女を慕っ

ていたのが大きかった。

白き戦乙女は、自分たちを勝利の栄光に導いてくれる。

隊長クラスになればそういつて兵たちの士気を挙げたし、兵士達に近い班長や伍長にいたっては、生きて故郷に帰してくれる、といつて兵士達を励ました。

実際彼女の出す指示は、目的が明確でわかりやすかった。そのうえ、戦となれば常にその身を最前線に晒し、兵士達はその姿を見るたびに死の恐怖を押し込めて、戦場で戦った。

ケイウツドの村で四日間周囲の斥候を放ったシユセは次の目標を、西方第一の都市ベルガデイから二日の距離にあるカーティスという町に定めた。

カーティスという村は、森林地帯が広がる西域においては珍しい、農耕地に適した平地が広がっている。西域第一の都市ベルガデイの胃袋を養う、小麦はカーティスで生産されるのが常だ。ここを占拠してしまえばベルガデイに至る整備された街道を手に入れることになる。

収穫前の小麦畑が広がり、小麦の畑の中に町を囲む低い城壁が町をぐるりと囲んでいる。近くには、小さいながらも湖があり、平和なときには西方候主の避暑地として知られた町だった。

西域地域の要衝であり、それは敵もわかつているはず。

シユセは警戒をしつつカーティスの町へと兵を進めた。

だが、予想された敵の反抗は全くと言って良いほどなく奇妙なほどの静寂が彼女たちを迎えることになる。

「ずいぶんと、静かですな」

将兵の一人に話しかけられ、シユセは無言で頷く。

「油断をしないように、町に兵を入れなさい」

シユセの命令の下、長剣隊を先頭にして町への侵入を果たす。町を巡る城壁に付けられた門は開け放たれ、町の中はまるで無人のごとく静まり返っていた。

「妙な……」

長剣隊を率いるイエニルは、町の中央へと進むにつれてその静けさに舌打ちした。今年で43になる彼は、カルやシュセラが生まれてくる前から軍歴を重ねたラストウーヌの元私兵だった。主家が没落したのを切欠にロアヌキア軍へと志願したのだが、冷遇を覚悟した彼の覚悟とは裏腹にシュセラはその実力を認め、一つの隊を任せるまでに厚遇してくれた。

彼の脳裏を様々な可能性がよぎる。伏兵の存在、罠の存在。後ろ向きになりがちなのその思考を声を張り上げることによって振り払う。「各班異常はないな!？」

それぞれの班から、異常なしの報告にイエニルはさらに前進をすすめる。

イエニルの長剣隊が町の中央、広場になっている場所に差し掛かったとき、先頭を進んでいたイエニルは、老人を認めて隊の全身を止めた。

「何者か!？」

誰何の声は幾多の戦場越えて銅鑼金のように、響く。

「この町の長老衆でございます。この町は一切ロクサーヌの方々に抵抗することはございません。どうか御慈悲を」

降伏するということなのだろう。イエニルは頷くと、後方に待機させておいた伝令をシュセラの元に走らせる。

「それはありがたい。われらとて無用な流血は避けたいところだ。

しかしご老人。この町はずいぶん静まり返っているが……何か訳でもあるのか？」

「若いもんは、徴兵に取られてしまいましたな……男は兵士に、女は人質としてベルガディに」

悲しげに話す声音には、疲労の色があった。

ざわりと後方が騒がしくなったのを聞いてイエニルは振り返ると、馬上の人となっているシュセラの姿があった。

「シュセラ様!」

簡易の礼をしてシュセラを迎えるイエニルが彼女に事情の説明をす

る。

「そうですか」

静かにうなずいた後彼女は、町の長老たちに向き直った。

「事情はわかりました。できる限り貴方がたのご子息が戻ってこれるよう尽力致します」

まさかそんな言葉が一方の將軍から聞けるとは思っていなかった長老衆は、半信半疑で彼女を見守っていた。

「あんの……」

その長老衆の中から一人の老人が進み出る。迷いながらも、シユセに対して声をかけた。

「もしかして、貴方様は……ネアス様の、ご息女様では？」

ざわりと、長老衆全てがその老人の言葉に瞠目する。

「ネアス・ノイスターはわたくしの父にあたります」

僅かに俯いたシユセ。その前では彼女に質問をした老人が皺深い顔をくしゃくしゃにして泣き崩れていた。

「帰ってきただか。……ノイスターさまは、帰ってきた、だかあ」

地面に頭をこすり付けるように、顔を覆って泣き崩れる老人。その姿にイエール達は呆然とするしかない。

「そんな、だんがお嬢様は行方不明って……」

「だけんど、あの緑水の髪は確かに……」

ざわりと揺れる長老衆に、シユセは目を伏せる。自身の悔しさも、押し殺して言葉をつなぐ。

「お父様が亡くなってから、私はクレインの叔父様……いえ、クレイン・ノイシュタットによって亡き者にされそうになったのです。着の身着のまままで逃げ出したわたくしは、途中奴隷商人に捕まってしまう……そこで陛下のお母上様に」

老人達に理解が広がっていく。

「こ、これを覚えておいでですか？」

一人の老人が懐から出したのは、細工の施された小刀だった。

柄に描かれた紋章には、日輪を囲む鳥兜の葉。鞘には小粒の花柄

の意匠が施されていた。

「日輪に鳥兜は、ノイスターの紋章。鞞の方は、白波花は感謝の印……父からの贈り物ですね」

刻まれた意匠を優しく読むとくように、寛恕は小刀の鞞と柄をなでる。

「おおお……」

それで、もう疑うものはいなくなった。ノイスター家は、贈り物の際に、花言葉を多用していたのだ。幼いころからシュセ自身も父親に習って花言葉は一生懸命覚えさせられた。

特に白波花は、西方にしか咲かない独特の花だった。

長老衆は全員泣き崩れ、ロクサーヌ軍は抵抗どころか、歓迎されてカーティスの町を占拠するにいたった。

カーティスの町から以西の町村では、戦える男と村の若い女は軒並みベルガデイへと避難させられていた。男は兵士に、女は人質にするためだ。西域の者がロクサーヌの者たちに、何をされるか心配したトゥメルの気配りもあった。

最もロクサーヌ側ではシュセの威令によってそのようなことは、ほとんど行われず、また行われたとしても厳格に処分を下していたのだから、トゥメルの心配は杞憂に終わる。

「オシリスの皆まで、引き込んで合戦に臨む。異存はあるか？」
このところ精彩を取り戻しつつあるトゥメルは、ぎよろりと幹部を見渡した。短く刈り上げた髪に、筋肉の鎧をまとったような体躯から、ほとばしる覇気が会議の場に緊張感をもたらしていた。

トゥメル率いる西域軍の全軍は、今現在ベルガデイに参集しているだけでも、3000を超える。西部からの騎馬隊に加えて、雑兵ウチウチと呼ばれる農民兵を文字通りかり集めて膨れ上がっているからだ。

間もなく西部からの雑兵も到着すればその総数は4000を越えることになる。オウカがカルの前で披露した数とほとんど違わない。その見通しの確かさは、さすがに謀略を持ってロクサーヌを支配した老人のものだった。

「イアーソン、ウエイネ。貴様らは騎馬隊と合流し、引き続き奴等の後方を攪乱を続ける。ただし、被害が出る前に引き上げるよ」

小気味良い、返事が若手の幹部の中からあがる。

「ユネツク、テイター、ギンメル。貴様らは砦の防備と修繕だ。ギンメル、ギンメル殿の仇が討ちたかろうが今は抑えよ。必ず機会は俺が作ってやるからな！」

名前を呼ばれた者は背筋を伸ばし、トゥメルの命令に返事をする。特にギンメルなどは、涙を流さんばかりに、トゥメルの指示を聞いていた。

「ボーランデ。お前は集まってくる兵の編成だ。せめて雑兵が銅鑼の音を判別できる程度には、訓練せねばならんからな」

ボーランデと呼ばれた古参の幹部は、すっかり白くなった頭を掻いて頷いた。顔には深いしわとともに、トゥメルに対する信頼と押し付けられた仕事に対する苦笑が浮かぶ。

「良いか。オシリスの砦を奪われたなら、ベルガデイは目と鼻の先だ。今まで俺たちの故郷を奴らに踏みじらせておいたのは、この一戦で王都のやつらを殺すためだ。良いか、ぬかるなよ！」

トゥメルの檄に、全員が頭を下げ各々の仕事に駆けていく。

ロクサーヌの軍勢はすでに、オシリスの砦から二日の距離、カーティスの村を占拠しているとの報告が入っていた。だがそこから動かない。

何を狙っているのかが不透明だったが、トゥメルはあせる気持ちでぐっと押さえ込んだ。

「負けはせぬ」

彼らが動かなければ、こちらも万全の準備を整えて迎え撃てるのだ。

獰猛な笑みとともに戦の仕度を始めた。

シュセ率いるロクサーヌの軍勢が動き出したのは、さらに4日後だった。

目を覚ませば、そこは見慣れた天井があつた。重い頭と体を確かめながら、ゆっくりとカルは体を起こす。

「私は……」

頭痛に思わず眉をしかめ、それを振り払うかのように振る。

そう、確か暗殺者に襲われ。

「気がついたかい？」

気安くかけられた声の主は、ソファアの背もたれに体を預けくつろいでいた。

「貴様、何者か」

瞬時に自身の槍を捜し求めるが、視線で気づかれたのだろう。黒髪の女が薄く笑う。

「アンタの得物は、捨ててきちまったよ。アンター人を運ぶのだって苦労したんだ。まさか文句は言わないよねえ？」

くつくつと笑う女に、カルは視線を戻す。

その女はカルに強烈な印象を与えた。そらそうとした視線を釘付けにしてやまないほどの、強烈な印象。

一言で言えば、禍々しい。

黒鳥の濡れた羽を寄り合わせたような、長い黒髪。惜しげもなく晒された、すらりと伸びた四肢。白磁のように染み一つない白い肌には、細かな戦傷が残り、整った鼻梁から口元にかけては当代一の芸術家の作品を思わせる。

口元に浮かぶのは、不敵な笑み。切れ長の目とあいまって、その女の雰囲気は峻烈にしている。だがそれだけでカルは禍々しいとまでは思わなかつただろう。

彼女の印象を決定付けているのは、何よりもその深淵を思わせる漆黒の瞳だった。あらゆる感情を内包して空気さえ歪ませてしまうような、圧倒的な瞳。

あるもの全てを飲み込む黒が、カルをしてその女を禍々しいと感じさせていた。

「そんなことは聞いていない。貴様の名を名乗れ」

弱みを見せれば直ちに食い破られるような緊張感を持ちながら、カルはソファでくつろぐ女と対峙する。

「ハン！ 助けてやったのにお礼もなしかい？ まあいいか。サギリってんだ、坊や」

カルの知識にはない名前に、無表情を装って詰問する。

「……助けてもらったことには礼を言う。だが、なぜだ」
慎重なことだと、晒いながらサギリは口の端をゆがめる。

「単刀直入に言おうじゃないか、商売相手を殺したくなかったのさ」
「商売？」

「ああ、そう。アタシは東都の双頭の蛇の首領だよ……そういうばわかるかい？」

東都にて前の領主が殺され、盗賊が占拠している。その情報はカルの元にも届いていた。そしてそれが双頭の蛇という名前だということも、

「商売をしようじゃないか。戦を肩代わりしてあげるよ」

「……傭兵ということか。代価は？」

「東都ガドリア」

ためらうことなく言い切ったサギリの言葉に、カルはわずかに目を見開いた。

「それを私が呑むと思うか？」

カルの視線は、氷の刃を思わせるほど冷たく鋭い。

「駄目なら今ここでアンタを殺すって方法もあるからね」

冗談めかしてはいるが、彼女から感じられる殺気は、半ば本気であることをカルに悟らせた。

「商売の基本は信義だとは思わぬか」

寝台から立ち上がるカルに、おどけて肩をすくめて見せるサギリ。
「……代価と商品が釣り合わないな」

乗ってきた。

サギリは内心ほくそえむ。

「東都の自治がほしいなら、同等のものを出すべきだ」

「アタシらの力は一都の力に匹敵すると思うがね」

「足りぬ。一都の価値は武力のみではない。その経済力、収益、生産力……諸々全てを含めて現在、そして将来のモノを見てこそ真価が見出せるのだ」

ほう、と顔には出さずにサギリは感心した。

ガドリアを布石として、ロアヌキアを手に入れたいサギリにとって、カルの語る都市の姿は自分とは違う思考を感じさせた。

目の前の顔が綺麗なだけだと思っていた少年の、モノを見る目。その角度に、興味を引かれる。

現在でなく、未来を。

兵ではなく、経済を語るカルの言葉は軽い驚きと共にサギリの殺気を多少なりとも減じた。

「それじゃあ南都ジェノヴァを差し出してみようか」

「なに？」

あっさりと要求を引いたサギリが、代わりに提示したもの。

「馬鹿な……」

口に出してしまつてカルは、瞬時に目の前の女の言葉に思い当たつた。

「……まさか」

にやりと、口元をゆがませたまま頷くサギリ。

「オウカが消えれば、南都の支配権はアンタのものさ」

確かに、オウカが消えればジェルノ家には跡継ぎは幼い孫だけだ。親類たちについては、継承権をもつほとんどの者がオウカ自身によつて消されている。

「信用できぬな」

目の前の女はどこまでその確執を知っているのか。

「おいおい、命を助けてやったろう？」

「そうではない。貴様らの腕をだ」

「疑り深い王様だねえ」

苦笑を顔に張り付け、サギリが立ち上がる。

「良いよ。見せてやるうじゃないか、けどねえ……もしオウカの首獲れた場合は、約束をしっかりと守りなよ？」

カルの語る未来。収益、生産、経済……言葉の隅々から感じられるのは、南都ジェノヴァの存在。オウカ・ジェルノに流れ込む莫大な資金の源泉は、南陽の商業都市ジェノヴァに他ならない。

「良いだろう。もし、成功した際には、報奨の件考えよう」

とうとう、カルの口からオウカの名前が出ることはなかった。それを臆病と笑いながら、サギリはカルに背を向けた。

「じゃあね。お互いに良い商売になるといいね」

もし、約束を破ったならその刃はお前に向く。口の端をゆがめて不敵に晒うサギリの背中。小柄で華奢にすら見えるその背中は、雄弁にカルに語っていた。

「サギリ……双頭の蛇か」

一人になった寝室に、カルはサギリの幻影と対峙する。

「勝てるか？ 私は」

禍々しさすら漂わせる圧倒的な存在感。並々ならぬ力量は、今のカルでは太刀打ちできないように感じさせられた。

だが、カルは負けるわけにはいかないのだ。

王となった日から、彼に安息と平穩は求められないものとなっていた。

森の中を駆ける3人がいた。

「しつこいつ」

苦々しげに吐き出される弱音。

「エレガ、カーナ……ここからまっすぐ東にカーティスの町がある。そこまで行くんだっ！」

木々の間から放たれる矢を、かろうじて避けながらクシュレア達は森の中を逃げていた。

彼らの止むことはない追撃は、すでに丸一日続いている。森の中では、聳え立つ木々やその葉が邪魔になってクシュレアとカーナの投擲剣は使い物にならない。

唯一の戦力となるはずのエレガさえ、数に任せた攻撃に疲労の色が濃い。

「追え、追え！ 逃がすんじゃないねえ！」

熱狂的に追いかけてくる盗賊に、捕まった後のことなど想像もしたくない。

「困むように追え！」

このあたりを根城にする彼らには、追うのもそう苦にならない。だが逃げている三人にとっては、道もわからない森の中を走らねばならないのだ。

「あと、もう少しなのです」

荒い息をつきながら、自分と仲間を必死に励ますカーナの声。

「いたぞ、こつちだー！」

その声に、一瞬だけ振り返り顔をしかめるエレガ。

「エレガ!？」

その悲鳴はクシュレアからもれたもの。

「行け！」

叫んだ直後にエレガは今来た道に戻る。立ち止まり呆然とその後姿を見つめるクシュレアの手をカーナが引つ張る。

「お姉さま！」

我に帰ったクシュレアは、東へ向かって走り出す。かみ締めた唇

から、血がにじむ。

とても許してはおけない。

押し殺した悲鳴は、獣のうなり声に似ていた。

そしてすぐに街道にでる。整備された街道は、森の中に比べれば格段に走りやすかった。その道を必死に駆け抜ける。息が上がり、玉の汗は全身をぬらす。べたべたと肌に張り付く衣装も、かまっではいられなかった。

エレガが死んでしまう。

気を抜けば嗚咽が競りあがってくる。だがそんなものを許していただける時間はない。

今はただひたすら、町に急がなければ。

「いたぞ、女どもだ！」

後ろから聞こえた声に、理性が沸騰しそうになる。

エレガはどうなったのだ。沸騰しそうな頭の中で、齒軋りの音が聞こえる。

「カーナ！ 走りな！」

我慢の限界だった。許せない。許せるものか！

怒りがその矛先をぶつける相手をもつけてしまった。一緒に走っていたカーナの腕をつかみ、悲鳴を上げる彼女に耳打ちする。

「お姉さま！？」

「いいかい、もしあたしが死んだらきつちり東都に伝えるんだ」

「いきな！」

カーナの背を押すと、街道を走ってくる盗賊たちに向き直る。

「なめんじゃ、ないよ！」

ぎりりとかみ締めた齒の奥から、しばらくだすように吐き出すと、手にした投擲剣を必殺の呪いを込めて放った。

百発百中とはいかないまでも、追っ手の数人に投擲剣が命中する。一瞬ひるんだ追っ手に、背を向けて再び走り出す。

距離を取らなければ負ける。

ゆだった頭でもその程度のこととは理解できた。逆に距離を詰めら

れるときこそ、クシユレアが自身の命を心配しなければならぬと
きだった。

「てめえら、女一人に何手間取ってやがる！」

怒りの咆哮と共に、街道に走り出てきたのはブライズだった。革
の鎧に片手の剣と、軽装の彼はどんだん彼女との距離をつめてくる。
「ブライズ！」

今や憎い敵でしかないその男の名前を、呪詛と共に吐き捨てて投
擲剣を放つ。走りながら狙ったにしては正確すぎる投射。胸から首
を狙った二本の投擲剣は、ブライズの持った片手の剣によって弾き
飛ばされていた。流石に盗賊の首領を張るだけのことはある。その
思いを、苦々しく思いながら再び投擲剣を握る。

足の止まったブライズと距離をとるべく、足を動かすクシユレア
だったが。

「クシユレアアア！ 観念しろやア！ こいつがどうなってもいい
のか！？」

憎しみに濁った瞳を怒らせ、ブライズが足元のエレガに剣を突き
つけていた。引きずられた来たのだろう、エレガの衣服はボロ布の
ようになっていた。

思わず足を止めてしまったクシユレアに、ブライズは残酷に笑う。
「そうだ、それでいいんだよ」

生きているのか死んでいるのか、ぴくりとも動かないエレガを一
つ足蹴にすると、周囲の手下に目配せする。エレガの喉もとに手下
が刃を向ける野を確認すると、ブライズ自身はクシユレアに向って
歩き出した。

ガツツ、と骨が砕けるような音を立ててブライズがクシユレアを
殴り倒す。

「手間かけさせやがって！」

悪態をつく倒れたままのクシユレアの髪を乱暴に掴み、引きず
り起こした。

「てめえらみたくない女が！」

骨を軋ませる殴打の音。また殴られる。

「俺達に逆らうんじゃねえよ！」

激するブライズが、感情のままクシュレアを殴り、見る間に彼女の顔は痣と血に塗れる。妖艶な雰囲気漂わせていた面影など、もうどこにもない。

「分かったか!？」

突き放して地面にごみを捨てるかのように、投げ捨てつばを吐く。「あの小さいガキはどうした? まだ見つからねえのか?」

血と暴力によって据わったブライズの視線が部下の一人に向けられる。

「今、追っ手を出しているところで」

「てめえらも全員行け」

低く、次なる犠牲者を捜し求めるようなブライズの声に部下は心底怖ろしくなった。

だまって頷くとカーナを追って走り始める。それを見送ってブライズは打ち捨てられたクシュレアを見下ろした。

「さあて、邪魔者はいなくなった……これから自分がどうなるかわらない想像はつくよなア？」

吊り上がった口元は酷薄に笑みの形となる。

「下衆、野郎……」

動かないエレガを視線だけで確認し、再びクシュレアはブライズを見る。

クシュレアの口元から漏れた言葉にブライズは、笑みを深くした。

シュセへの暗殺未遂があった日から、ロクサーヌ軍の中では付近の偵察をすることは日課となっていた。班クセごとに周囲の街道沿い、森の中、町中を半刻いちじかんごとに巡回し、安全を確認するのだ。

バッセールの長槍隊に所属する班長グリューエンは、その日街道

沿いの巡回を行っていた。

班員24名を引きつれ、街道沿いの暗がりや、ついでに整備なども行う。行軍の進行に妨げになる岩や、倒木などを横にどけながら巡察をしていた。

いつの世でも男達が24名も集まると、話題になるのは女と飯のことだ。

ロクサーヌの酒場のあの子は可愛いだの、今度新しくクルドバーツ商会の手伝いの子は美人だの。取りとめもない話題が巡回中のグリュールエン班をにぎわす。

「そういえば、班長ご結婚は？」

「俺の品をわかってくれるような、高貴な女が居なくてなあ」

山賊すらはだして逃げ出す強面。体つきも横にも縦にも並の男より一回り大きなグリュールエンの言葉に、班員は爆笑する。

「しかし、遠征の飯ってのはどうしてこう、飽きるもんばかりなんですかね」

「馬鹿たれ、食えるだけマシだと思ってしっかり食っとくんだよ。

いくらロアヌキアの中だってこんなに食料が豊富なのは、ねえんだからな」

今回の西都征伐が初めての若手の兵士が、飯に文句を言って先達の兵士にたしなめらる。

「それに関しちゃあ、うちの若い指揮官は立派だな。飯が食えなきや戦はできねえよ」

豪快に笑う先達の兵士に。

「当たり前みたいに思いますけど」

「いやいや、お前は知らんだろうが、前にグリュールエン班長と十貴族の遠征に付き合わされたことがあってな。その時は酷かった。なんせ飯は自分ら持ちだ」

ひえ、と若手の兵士は悲鳴を上げる。いつ終わるか分からない遠征に自分達で食料を用意しなければならぬとなれば、その出費は想像を絶する。

「あの時は、そこらへんの蛇とか草の葉っぱとか食って飢えを凌いでいたからなあ」

目を細める先達の兵士に、露骨に顔をしかめる若手の兵士。

「ねえ、班長」

水を向けられたグリューエンは、その敵つい髭面でにやりと笑う。

「おう、今度お前にも、木の皮でだしをとったスープの作り方を伝授してやるう」

「具はなんになりますか？」

先達の兵士の合いの手。

「もちろん、そこら葉っぱだ。いや、雑草でもいいな。ネズミでも入れれば豪華になるだろう」

「勘弁してくださいよお」

若手兵士の悲鳴と、班員の爆笑が起こった。

「まあ、まじめな話うちのお姫さまはよくやってる。あの人に死なれちゃ、俺達は路頭に迷うことになっちまうからな、精々しつかりと巡察を……ん？」

「どうかしました？」

どこかのほほんと若手の兵士がたずね。

「敵ですか？」

話を切ったグリューエンに、先達の兵士が剣を構える。陽気な声から一瞬にして、固い声に切り替わるのは経験の差であっただろう。

「全員、音を立てるな！」

しん、と衣擦れの音さえも立てないように、班員たちが硬直する。耳を澄ませば前から、悲鳴と怒声がかすかに聞こえるのを確認し、グリューエンは剣を引き抜いた。

「野郎共！ 抜剣！」

長槍隊といっても、それは戦のときの陣立てでそうなっているだけである。長さが人の背丈の二倍もあるような長槍を常時持ち歩くのは体力と労力の無駄である。普段の巡察時には、着用している剣のみだ。

「微速、前へ！」

ゆつくりと走り出すグリユーエン班。彼らの前に、一人の追われる少女と追いかける男達の姿が見えてきた。

「どっちが敵、ですかね？」

先達の兵士の言葉に、にやりと山賊の首領でも通用するグリユーエンが笑う。

「娘だな。男には品がなくていけねえ」

ぷつと吹き出す班員に、班長の檄が飛ぶ。

「少女を救え！ 全速、用意」

少女は後ろを振り返りつつ、逃げているのだからこちらに全く気がついていない。追いかける男達も少女を捕まえることに躍起になっている様子だった。

その距離が、50小里メートルになったときグリユーエンの怒声が響き渡った。

「全速前進！ 蹴散らせエ！」

「うおおおお！」

自分自身を鼓舞するための喚声は、敵に恐怖を植えつける。

少女も、それを追いかける男達もハツとしてグリユーエン班を凝視した。少女の脇をすり抜け、追っ手の男達に切りかかる。

元々、兵士として訓練を受けたグリユーエン班の面々と盗賊では勝負にならなかった。たちまち蜘蛛の子を散らすように追い立てられ、討ち取られていく。

200小里も追い立ててからグリユーエンは追撃を止めさせ、道の真ん中で呆然としている少女を保護した。

「おう、嬢ちゃん大丈夫かい？」

髭面に、返り血を浴びたグリユーエンが少女に笑いかける。地獄の悪鬼すら逃げ出すようなその表情に、カーナは恐る恐る頷いた。

「俺達はロクサーヌのもんだ。俺達が保護を約束する。何で追われてたんだ？」

「あ、お姉さまがっ！ クシュレアお姉さまを助けてくださいです」

泣き出しそうなカーナに、グリユーエンの笑顔が変わる。

「おい、本隊に応援を頼め」

先達の兵士をカーティスの町に走らせると、他の班員に向かって剛毅を絵に描いたような笑みで向き直る。

「もう一戦だ、いけるな野郎共!？」

「おおう!」

振り上げた剣に応えて、剣が頭上に突き上げられる。

「案内してくれるかい?」

「はいです!」

カーナに先導されて、グリユーエン隊は走り出した。

四半刻さんじゅうぶくもしないうちに、その光景が見えてきた。足元に二人の女を並べて踏みにじるブライズの姿。その後ろには先ほどのことも合つて及び腰の、手下達の姿も見える。

「止まりやがれ!」

ブライズは口元に浮かんだ歪んだ笑みを隠すこともせず、血走った視線でグリユーエン隊を睨み付ける。

「停止!」

落ち着き払ったグリユーエンの声に、部下達が従う。

ブライズとグリユーエンらは、50小里を隔てて向かい合った。

「お姉さま!」

カーナの悲痛な叫びにも、クシュレアとエレガは身動き一つしない。気を失っているだけか、あるいは二人とも既に息絶えているのかもしれない。

最悪の予想を脳裏に描きながら、グリユーエンはブライズを睨み据える。

その横ではカーナが小剣を手に、ブライズを睨む。

「何が目的だ。盗賊め」

野太い声はブライズの後ろに控える手下達を震え上がらせたが、一人ブライズのみはその声に動じることなく口元には酷薄な笑みを浮かべる。

「目的だと？ そうだな……おい、そのガキ」

名指しされたカーナは炎すら生ぬるいと感じるような怒りの視線で、ブライズを睨む。

「てめえの小剣で、その髭面の足を刺せ」

「なんでそんなことっ！ お前に命令されなければならないのです！」

「あぁん？」

眉を八の字に歪め、ブライズはカーナを見下ろした。

「ああ、別に従わなくても良いんだぜ。だが言うとおりにしねえとなりゃ、俺の軽い手がやんちゃをしちゃうかもしれないな？」

片手に持った長剣を、クシユレアの首筋に当てるとグリューエンらを睨みながら舌なめずりする。嫌悪感すら誘うその様子に、カーナは愕然と身を震わせた。

「話を聞くところによると、そのロクサーヌから来た熊どもが俺の可愛い手下をえらく可愛がってくれたらしいじゃねえか？ フェアじゃねえだろっ？」

口の端が引きつったように、笑みの形を取る。だがその笑顔の底にある感情は憎悪でしかない。

「だからよお、ちよっとお痛を謝ってもらおうかと思ってなア」

軽薄すぎる笑み、真実の一欠けらもないよなその笑顔。その顔と自身の背後で黙ってブライズを睨むグリューエンの顔を見比べてしまった。

「どうした？ やれよ」

下卑た笑いはブライズから盗賊たちへと伝播していく。

巖のように沈黙を守るロクサーヌの兵士達へ、嘲笑を投げかける。

「全員」

低く押し殺した怒りを表すようなグリューエンの声が聞こえる。

「待機だ！」

今彼らは、行けと命ぜられれば飛矢よりも早く敵に向って駆け出すであろう。真っ直ぐに敵陣に向って走り、その蛮勇を奮うはずだ。ぎりりと噛み締めた歯軋りの音が、カーナにも聞こえた気がした。そつと胸をなでおろすカーナを尻目に、ブライズはなおも要求を重ねる。

「さあ、くそガキ！ てめえの投擲剣でその熊野郎を刺すんだ！」
「うう……」

振り返る先には、困っていた自分を助けてくれた恩人が厳しい視線で敵を睨み、ふとカーナに向ける視線には優しさが溢れていた。

「心配するな」
そう言ってもらえているその視線だけで、カーナの苦しみは深くなっていく。

ロクサーヌの人間というのは、カーナにとって客という印象しかなかった。人には言えない趣向をもってカーナを求める、軽蔑すべき人間だ。

だが、この人はどうだろう。

カーナの中のロクサーヌの人間というイメージはガラガラと崩れ、巖のように逞しい頼りがいのある男がその上に、塗り込められていく。

だが、だがそれでも、カーナにはクシュレアとエレガを見捨てるわけには行かなかった。どれほどこの“ロクサーヌの隊長さん”がいい人であったとしても、カーナの優先順位は決まっている。

後ろを振り返るカーナは、ブライズに背を見せたまま問いかけた。
「エレガお姉さまとクシュレアお姉さまは、生きていますか？」
顔を伏せたカーナの言葉に、ロクサーヌの兵士はざわりと色めき、盗賊たちは口笛を鳴らす。

「ああ、もちろんだ」

「助けてくれるのですか？」

「まあ、てめえらの態度しだいだな」

ブライズのにやつく笑みは有利な立場を確信してのもの。

「……わかりました」

上げたカーナの愛らしい顔には悲痛な決意がみなぎっている。それを見て取ったグリューエンは苦笑に顔をゆがめた。

「ごめんなさいです」

「班長!？」

「黙ってる!」

グリューエンにだけ聞こえるような小さな声で呟いてカーナは手にした小剣を、突き出した。

「ぐっ」

髭の間から漏れた苦悶の声と、歪めた顔に、ブライズは笑い出す。カーナの背中越しにでも、刃を突き出したのが、ブライズには分かった。

「くははははは、ほんとにやつちまいやがった!」

膝から崩れ落ちるグリューエンと呆然と立ち尽くすカーナ。その姿を眺め、腹を抱えるブライズ。

「班長!」

悲鳴と共に駆け寄るロクサーヌの兵士達を、嘲りながら一瞥すると手下をけしかける。

「さあ、やつちまえ! ロクサーヌのくそ野郎共を打ち殺せ!」

相手が弱みを見せた途端、威勢を取り戻すのは盗賊特有の性だ。ブライズの声とともに、盗賊たちが走り出す。

「くははは っ!？」

笑い声が途切れる。今まで嘲笑の声をあげていたはずのブライズの喉元に、風きり飛来した一矢が突き刺さる。

「はっ……ハア!? なんだ……ああ?」

吹き出る血潮に、意識を混濁させながらもブライズは周囲を睨む。日の光を受け、林の中に光るものを見つけた途端、彼の身体に無数の矢が突き立った。

「ひう……ああ」

ハリネズミのように矢を全身に突き立てられ、倒れるブライズ。だが彼の手下たちも、そんな彼のことを心配している余裕はなかった。

「待ち伏せだ！」

森の中から矢の雨が降る。横殴りの矢が、走り出した途端の盗賊たちを次々に射殺していく。

振り返った先には、血だまりに伏すブライズの姿。今まで信じていた優位など一瞬のうちに消し飛んで、盗賊たちは逃げだした。

「逃がすな、追え！」

さらに怒声を張り上げて盗賊たちを追う先頭に、さきほどカーナに刺されたはずのグリューエンの熊のような姿を見つけ、恐慌状態になって逃げ惑う。

盗賊たちを粗方捕らえるか、討ち取った後でグリューエンはカーナの居た場所まで戻ってきた。

「無事か？」

涙で顔をぐちゃぐちゃにしながらカーナは頷く。

「大丈夫ですか？」

彼女が突き出した短剣は、グリューエンの掌で受け止められていた。

「たいしたことはない。それよりも、二人を運ばないとな」

カーナの頭を大きな手でくしゃりとなでると、エレガとクシユレアをひょいと抱え上げる。

半ば呆然と、カーナはその後姿を見守っていたが、思い出したように彼の後ろについていった。

「盗賊が跋扈している、と？」

「はい。兵士どもがいなくなってやりたい放題といったありさまで」

弓兵の素早い援護に感謝をし終わったグリューエンは、戦果の報告をしていた。

肩をひそめるシュセにグリューエンは肩を竦める。

「それで、カーナといいましたか。保護した方々は？」

「一命は取りとめたようですが、しばらくは絶対安静だそうで」

頷くとシュセは形の良い顎に手を当てて、しばらく瞑目する。彼女が考えるときの癖で、それを知っているグリューエンら他の将官は、彼女のその様子を黙って見守っていた。

「分かりました。明日、カーティスの町を出ます。そのままオシリスの砦へ向います。出発時刻は、昼」

細々とした指示をすると、何か言いたそうな将官らに断固とした決意を持って向き直る。

「決定は変えません」

「ならばせめて護衛の数を……」

「これ以上は必要ありません！」

しぶしぶながら引き下がる彼らを下がらせると、彼女は一つため息をついた。

翌日、イエンルら長剣隊が先頭となってオシリスの砦へ向って前進を開始する。時刻は中天に太陽が上る時刻。

馬上の人となったシュセが全軍へ進発の号令をかける。

彼女自身も町を出発しようとしたとき、カーティスの長老衆が追いつがってきた。

「シュセさま、どうぞこれをお持ちになってください！」

絹の包みを恭しく差し出す長老衆。

「開けてみても？」

「もちろんでござえます」

包みの中から現れたのは、緑の生地に鶯が円を描いている紋章旗。鶯の円は日輪を表し、豊穰を表す緑系の生地に、白銀の日輪が翻る。

「父上の……」

そういったきりシュセは絶句した。それはかつてこの地に掲げら

れていたネアス・ノイスターの紋章。初代ネレイド・ノイスターの紋章旗。赤地の旗に、白き盾とそれを囲む鳶の王冠より、少しずつ変化を加えて作られた父の紋章旗だった。

今彼女が掲げるのは、カルの紋章旗である交差する蛇槍。スカルディア未だ自身の紋章旗を持たない彼女にとって、それは父の形見に映った。

「ネアス様ア身罷られてからこのかた……これア、ずっとわしらの希望でした。ですが、それも今日で限りとします。今日からわしらの希望は過去ではなくて、現実にいらいっしやる」

涙さえ潤ませて、訴える彼らにシュセはただ父の偉大さを思った。
「ありがとう……」

言葉を詰まらせるシュセは、傍らに居た騎兵を呼ぶ。

「これを。お願いします」

言い含めると、騎兵の一人に旗を渡す。素早く槍の穂先に紋章旗をくりつけると、騎兵はロクサーヌの行軍の横を走り抜けた。

「ノイスターに！」

掲げられる紋章旗。

そこまでは言い含めていないシュセは少し驚き、その騎兵の機転の効果を認めると、傍らの長老衆を見た。

「ノイスターに……！」

走り去った騎兵の後から、長剣隊、長槍隊と唱和の音が響く。

それを聞きつけて、屋外に出てきていた老人達がむせび泣いていた。
た。

「おじいちゃんどうして泣いてるの？」

傍らに引き寄せた孫の声に、老人が声を詰まらせながら頷いた。

「ああ、よく見ておくんだよ。西域は救われる、あの旗がわしらを導いてくださる」

風にはためくノイスターの紋章旗が、日輪の光を浴びていた。

西域の主17（後書き）

設定が好きな方のために……。

赤地の旗に、白き盾とそれを囲む鳶の王冠　赤系の生地は、情熱を。白き盾は守るべき民を、鳶の王冠には、それらを纏めるべき責務を誓ったネレイドの旗。

緑系の生地に、白き盾、それを囲む鳶の王冠　二代目西方候主ネイルドの旗。

三代目がネアス。

四代目がシュセ（予定）

ちなみに本編には出てきませんが……

トウメルの紋章旗は、赤系の生地に一本の鉄槍
ガシュベルは、緑系の生地に薔薇の円と中央には白馬
だったりします。

「動いたか！」

ロクサー又軍カーティスの町より、前進を開始！

待ちわびたその報告に、トウムルは思わず拳を机にたたきつけた。「ユネツク、テイター、ギンメルらには俺が行くまで待てと伝える！」

ポーランデ、と初老の幹部を呼ぶと待ちきれないとばかりにトウムルは声を張り上げた。

「雑兵どもの様子は？」

部屋を震わせる声に、ポーランデは頭を垂れる。

「手抜きなく……」

だが、その僅かな間がトウムルには気になった。

「どうした。何か心配事か？」

覇気を体中に漲らせ、問いかけるトウムルに、ポーランデが苦笑した。

「いや、あるいは私の勘違いかもしれませぬが」

「いい、言ってみる」

鷹揚に頷くとトウムルは床几に腰掛ける。腕を組み目を瞑る様子はまるで修行僧のように。だが真剣に部下の声に耳を傾けようとしている姿に、ポーランデは決して不満ではなかった。

「雑兵どもの動きがなにやらおかしい、と感じます」

「なにか、とは？」

眉間に皺が刻まれるが、それを押し殺してトウムルは問いかける。「さて、そこまでは……あるいは謀反か、サボタージュか。確たる

証拠はございませんし、私の気のせいかとも思いますが」

言葉を切ったポーランド自身、言ってしまったから首を捻る。たとえ叛乱を起こしたとて、目の前に迫っているロクサーヌがそれを受け入れるとは限らないのだ。叛乱分子諸共打ち滅ぼされルカも知れない可能性のほうが高いのではないか。

「あるいは、ネズミが入り込んだのか」

「ロクサーヌに通じるものがあるか？」

トウメルの言葉に、ポーランドの声が沈む。

重々しく頷くトウメルに、だが不安を感じているポーランドの方が質問をぶつける。

「ですが、どうやって……カーティス以西の地域にはロクサーヌの攻略の手はほとんど伝わっていないはず」

「わからん……が、打てる手は打っておくべきだな。折角の戦だ、水を差されては叶わぬ」

トウメルにしてみれば、戦さえあればと願いつづけた半生だったのだ。その気持ちを知っているからこそ、ポーランドも静かに頷く。

「御意。では、信頼できる兵士にそれとなく探らせて見ましようか？」

「出来るだけ口の堅いものでなければならぬ。それとネズミがいたとして、それに気づかれぬ程度の話術も必要だ。そのようなものがあるか？」

「……難しい注文ですな。ですが、何名か心当たりがあります。多くはないのが残念ではありますが」

「わかった。委細任せる」

「若。いよいよですな」

「若はよせ」

苦笑するトウメルに、ポーランドは黙って退出した。

「戦、ですか？」

その声に、真昼に幽霊でも見たかのようにトウメルは振り返った。

「ナ、ナルニア!？」

大仰に驚く彼が思わず叫ぶ。びくりと震えた彼女は、ナルニアを支えるようにして側に居たカチューシャの肩をぎゅっと握った。

「トウメル様、大きな声を出されては！」

カチューシャの愛らしい声に、トウメルは自身の失態を悟る。

「す、すまぬ。あまりに驚いてしまつて。つい」

その慌て振りに、思わずナルニアがくすりと微笑む。

「……笑つてくれるか」

「あ、いえ……申し訳ありません」

首を振るトウメルは、慈愛に満ちた視線をナルニアに注ぐ。

「いいのだ。まさかまた再びそなたの笑顔を見れるとは思わなかつた」

優しい声音に、ナルニアの緊張が和らぐ。

「あの……一つお願いが、ございます」

「どうした、改まつて」

「私の旅の、仲間の消息を何か聞いてはおられないでしょうか？」

「いや、そういえば姿が見えないようだが……」

「そう、ですか」

意気消沈するナルニアに、トウメルは心が痛んだ。

「分かった。これから俺も皆に向かうことになるだろう。そのときナルニアの仲間を見かけたという話があれば、知らせよう」

「あ、いえ……そこまでしていたただかなくても」

「俺がそうしたいと思つているのだ。お前が気に病む必要はない」

「……はい」

俯くナルニアに、少しだけ悲しげな視線を向けたトウメルだったが、すぐに満足そうに頷く。

「ありがとうございます」

蚊の鳴くような小さな声で、お礼を言うナルニアに、トウメルは驚いた。

「ああ……っ！ ナルニア、俺からも頼みがある。聞いてくれるだろうか？」

「なんでしよう？ 私でできることなら」

「俺の為に武運を祈ってくれ」

待ち焦がれた舞台へ立つトウムル。高揚感に満ちた彼は、舞台から降りたナルニアには眩しかった。

「御武運を、お祈りしております」

「ありがとう、ナルニア」

トウムルはナルニア偽を向けて歩き出す。彼女に背けたその顔には既に優しさは消えうせ、武人としての猛々しい笑みが浮かんでいた。

左右には深い森が広がり、土を固めただけの道が延々と続く。なるべく使用者の便を図ろうと平坦にならされた街道は、馬車が一台通れるだけの幅があった。人が並ぶなら3人ほどになる。

ロクサーヌから繋がり、カーティスを経由したその街道を進んでいたロクサーヌの軍勢は、街道の果てに巨大な砦を目にすることになった。

街道がを囲む森がいきなり開けたと思えば眼前に広がるのは、小高い丘それ自体が砦と化したオシリスの砦だった。森を抜けたとたんに下り坂になる街道。下り坂から僅かに先に小高い丘があり、その丘そのものを柵や、矢避けの盾で囲んだ砦となっていた。

獣避けの柵など比べ物にならない。馬を防ぎとめられるように設えられた背の高い馬防柵。天然の地形を利用して作られたのだろう。空堀と呼ぶには巨大に過ぎる谷。昔は川が流れていたのだろう。干上がった川をそのまま利用したかのような谷は、ぐるりと砦の全域を囲む。

元々小さな砦だったのだろう、未だ所々に防備の調わない箇所が遠めにも見受けられたが、力攻めをして落とせるような砦ではない

と、それを目にした全員が感じた。

「森を切り開いて宿营地を設けます。イエール隊は警戒を、長槍隊は作業に掛かりなさい」

目の前の圧倒的な砦を目にしても、シュセの表情には微塵の動揺も見られなかった。ただ圧倒されていただけの、隊長や班長らは、彼女の指示を聞いて部下達に檄を飛ばす。

まだ日の高いうちだったが、日が沈み始めてからでは敵に夜襲をされる恐れもある。経験的にそれを知っている彼らは、シュセの判断に敬服していた。

ロクサーヌの軍勢が、宿营地を作ったのは、谷と呼ぶに相応しい空堀の手前。未だ森の領域を切り開いて街道を塞ぐ形で宿营地を作りだす。

「警戒を怠らないように」

出来あつた宿营地。それだけ言つとシュセは自身の天幕の中へ入ってしまった。

「流石にシュセ様も参ってるな」

不機嫌にそういうイエールに、長槍隊長のバツセルは頷いた。

「全くだ。あの砦、一筋縄じゃ落ちんだらう……ある程度の犠牲を覚悟しなきゃならんのかもな」

グリューエンの上司に当たるバツセルは、40を越えた働き盛りの男だった。遙か十数年前には、兇王と呼ばれたヴェル・シフォに從つて遠くバルドギアまでも遠征したことがある古参じやうさんの兵だった。

といつても、彼自身は王の剣と呼ばれたヴェルの親衛隊に加わっていたわけでもなく、純粹なロクサーヌ軍として参加していたにすぎない。烈風に削られた岩のような顔と、背は低くともがっちりとしたからだ。鋭い視線は一睨みしただけで、新米の兵士を震え上がらせるのに十分だった。

「正面からまともに行つてだめなら」

「奇襲か」

どちらともなく視線が交わる。お互いに歴戦と呼ぶに相應しい経験を積んできた者たちだ。兵法の常道として、敵の油断に付けこめれば皆のひとつや二つ落とせぬことはない。

「献策の余地はあるな」

眉間に皺を寄せ考え込むバツセル。

「幸いにも俺の部隊は警戒だ。見回ってみようと思うが、付き合つか？」

「お願いしよう」

お互いに頷くと、二人の歴戦の兵士は宿営地からでていった。

「夜襲に対する警戒を怠るな。篝火を堀沿いに焚くんだ」

敵を目の前にして逸る気持ちをギンメルは、部下に矢継ぎ早に指示を出すことによつてなんとか抑えていた。尊敬すべき父は、今や敵の虜であるという。

一刻も早く救い出さねばならない。名誉ある父が虜囚の辱めになど、耐えられるはずもない。

「いいか、トゥメル様が来るまで決して敵に後れを取るな！」

彼の周りを固めるのは、自身の領地から連れてきた家臣達。忠実な護衛としての役割も果たす彼らは、十人を数えた。ギンメルに仕える彼らは、いわば主人と一心同体。ギンメルの榮譽栄達が、彼ら自身の榮譽栄達にも繋がってくるのだ。

ゆえに、雑兵と呼ばれる集められた兵士とは全くといって良いほど立場も身なりも違う。

「そこ、しっかり働かないかっ！」

ギンメルの叱咤に、周囲の兵士が手に持った鞭で雑兵を打つ。

打たれた雑兵は悲鳴を上げて手にした薪を取り落とす。

その様子をあたりで働く他の雑兵たちが遠巻きに見守っていた。

「あれでよかつたのか？」

ギンメルに与えられた私室にて、部屋の主たるギンメルと不気味な男が向き合っていた。

「ええ、閣下。雑兵などというものは厳しく獣と同じ、厳しく躡けてこそしつかりとした働きができる生き物なのです」

昼間だというのにその男は黒衣を頭からすっぽりとかぶっていた。見るからに怪しげな雰囲気を漂わせるその男は、つい先日盗賊に襲われそうになったギンメルを助けた功績で、彼のそば近くにある。

「ふむ。そのようなものか」

若いギンメルは、彼に素直に感謝し、彼を客人としてそば近くにおいていた。

黒いローブに覆われた彼の顔をシュセが見たら、驚愕に目を見開いて一閃の下にその首を叩き落していたかもしれない。その男は、シュセの命を奪い損ねた男だったのだから。

「堅く守りて、打って出なければ自ずと勝利は舞い込みましょう。」

トウメル閣下にも、その辺はご理解していただいているはず」

「だが、父上は……」

「お父上のことに心動かされては、戦は勝てませぬぞ」

「わかつている……」

不安と焦燥がギンメルの心根を揺さぶる。

「お父上とて、それをこそ望んでおられるはず。では、失礼します」

オシリスの砦とロクサーヌの築いた宿営地の間には、煌々たる篝火が夜の闇を照らし、双方の警戒の兵士達が遠巻きにそれぞれ渴いた川の両岸に対峙していた。

等間隔をもつて砦に近づく闇を駆逐する炎の列。それが小高い砦の周囲を囲む様子は、天上から俯瞰すればまるで火の輪のように見

えた。

バツセルとイエンは、二日前の昼時に彼らが相談しあった奇襲の具体策をつめるため、一つの日幕の中で額を付き合わせていた。「いかな、どうも」

愚痴にもた小言は、イエンの口から漏れる。

「厄介なのは、やはり地形か」

天然の谷底のような、空堀に昼夜を問わず監視の目がある。少しでも近づこうとするなら、雨のごとくに矢が降り注いで来るのだ。坂道を下って谷底が広く、小高い丘の上からでは、絶好の矢の的になってしまう。

それが皆の後背、僅かに一本の道を残すのみ存在する入り口を除けば、四周を覆うのだ。矢盾や馬防柵の位置を見回しても、なるほど確かに粗が目立つ。だが、必要と思われるところには、過分なく備え付けてあるのだ。

「この縄張りは、達者なものだ」

不満げに相手に賛辞を示すと、二人の間にある地図に目を落とした。

城の配置、防護施設、更には道の幅に至るまで細心の注意を払って計算された設計に、イエンは思わずうなる。

「迂回は許されず、奇策を施すにも相手は籠って出てこないとは…

…厄介な」

バツセルも眉間の皺を一層深くして、ため息をつく。

やはり犠牲を覚悟で力押ししかないか。

二人の間に、そんな共通の認識が出来つつあった。

「報告っ！」

天幕の外から聞こえた声に、二人は地図を睨んでいた顔を同時に上げる。

「どうした！」

天幕の主であるバツセルのだみ声に、外から伝令の硬い声が要件を告げる。

「シュセ様が、至急の召集にて」

「承知したと伝える！」

応えてから、バツセルは首をかしげた。

「この時刻になんの御用だろうか？」

「あるいは城攻めのご指示かもしれん」

イェンルは、立ち上がると外してあつた剣を腰に佩く。

「どちらにせよ、至急とならば行かねばなるまい」

バツセルも身なりを整えると二人揃って天幕を出た。

天幕をでて、将であるシュセの天幕へ向う途中、二人はシュセの天幕に近づくと共に連れて、周囲の兵士がざわついていているのに気がついた。

動揺をしているという雰囲気ではない。長年の戦場経験で、それが不安の類ではないということは感じられたが、目配せするにとどまった。二人にとってはシュセの天幕に近づくと共に連れてというのが、そのざわめきの正体を究明するよりも急務に思われたからだ。

どちらともなく早足になり、シュセの天幕に付く頃には半ば駆けていた二人が、彼女の天幕を守る護衛の敬礼をおざなりに受けて飛び込むように彼女の天幕へ入る。

「シュセ様！」

普段ならこの程度で息を切らすはずもない二人だが、不安に急かされたため息が上がっていた。

「……至急とは言いましたが、息を切らすまで急がなくて良かったのですよ」

少しばかり二人の剣幕に面喰らいながら、シュセはまずは二人を落ち着かせるべく口を開く。わざとゆっくりとした口調で話す彼女に、バツセルとイェンルは自分達が相当な剣幕だったのに気が付いた。

「ごほん、とわざとらしく咳払いをするバツセル。小さく深呼吸をするイェンルに、シュセは柔らかい微笑を向けた。

「で、ご用件とは？」

イエエルが切り出した言葉に、バツセールも身を乗り出す。

「ええ……ですが、とりあえず全員が揃ってからにしましょう」

バツセールとイエエルが見渡せば、彼女の天幕には彼らのほかに、将校級の人材はいなかった。

「……焦りすぎだ」

「ごほんと、咳払いをするバツセールが小さくイエエルに言う。

「お前が言うな」

返事は言葉と、軽い肘打ちだった。

「内応の使者ですか……？」

シュセの天幕に集った彼女の幕僚らは、彼女の話した言葉に互いに顔を見合わせた。

「そうです。先ほど、ベルゼイと名乗る者から書状が届きました」

上質とはいいい難い羊紙を、見せる。

「それが事実ならよき案ですが」

「言いよどむバツセールの言葉は、全員の意見を代弁していた。

「都合が良すぎるのでは？ 我等が到着してその日のうちに、このような書状……まるで図ったかのようなタイミング。敵の姦計ではありますまいか？」

「たとえそうだとしても、あの砦を落とすのに他に方策はありません」

首を振るシュセに、バツセール以下誰も反論ができなかった。

「それで、どういう仕儀に？」

ひとつため息を吐き出すと、イエエルが問いかける。

「明日の夜、砦をつなぐ唯一の扉が開きます。私たちはそこから砦の中に進入し、これを叩きます」

全員の中央に置かれた砦の見取り図。その一点を指し示すシュセに、全員が聞き入った。

「これが罠であろうと、正面から突破します」

皆の中まではその見取り図には描かれていない。内部がどうなっているのか、それは入ってみるまでわからないのだ。そこが行き止まりで地獄の入り口かもしれない……だがそれでも突破をすると彼女が言うのなら。

「ロクサーヌの為に」

彼女の部下たちに、迷いはなかった。

「くそっ！」

馬上で鉄の大槍を構えるトゥメルは、眼前に広がる光景に舌打ちした。

ロクサーヌが目と鼻の先にまで来ているこのときに、ベルガディの周囲で盗賊が跋扈している。西方候主であるその責が彼をして、その盗賊たちを放置することを許さなかった。

あるいは、その盗賊たちを取り逃がしたが為にベルガディが襲われるなどということになれば、彼の最愛の人が被害をこうむるかもしれない。その僅かばかりの杞憂が、彼を縛る。

「大盾を前に！ 混成隊は左右に展開！ 盗賊どもを狩り尽くせ！」
ベルガディに今やほとんどまともな戦力は残っていない。新たにガシユベルの領地から徴募した者達は混成隊として今彼の指揮下にある。

シュセ率いるロクサーヌの軍勢と違い、トゥメル率いる西域軍はその主力をトゥメル歩兵団と農民兵に置いている。数ならば圧倒的にトゥメル側が優位に立つが、質となればその有利は見事に逆転をすることであろう。

普段は鍬をもって畑を耕し、斧を持って森林を開拓する者たちに槍を持たせているのだ。普段から戦うための心構えと技を練っているロクサーヌ側とは差ができて当然だった。

トゥメル自身その弱点を知っている。ゆえに、編成にひとつの工夫を施した。雑兵二人に、古参のトゥメル歩兵軍の兵士をひとりつ

ける。古参の一人には長剣を扱う者をつけ、雑兵は槍を使わせる。こうするとことによつて、混成隊と呼ばれる約1,000人を彼の直接指揮下に置いた。他に長槍隊として編成した者は、ポーランドに任せ、騎馬隊はイアーソンとウインネに任せる。

そして彼の構想の元に設立された混成隊は、その真価を盗賊狩りの場面ではあるが、発揮していた。森林の中、不規則に並ぶ木々の間を縫つて、3人1組の混成隊は、分化して進んでいく。指揮官の目の届かない局地戦において、古参の兵士が指示を出しながら、各組が盗賊たちを追いたて、狩り、駆逐していく。

農民出身の雑兵らを戦力とするための工夫は、驚くほど順調に実を結んでいた。街道を埋め尽くす大盾の列が、静々と進み、左右の森林は小さく分化した混成隊が、盗賊を狩りたてる。

「なかなかよい仕上がりですな」

馬上のトウメルに話しかけるのは、長槍隊を指揮するポーランド。「お前のおかげだ。よくぞここまで仕上げてくれた」

盗賊の出現自体には罵声すら浴びせたいトウメルだったが、この兵の仕上がりは上々で、彼の機嫌を直すのには十分だった。

「私は、指示されたとおりにやつたまで」

初老の域に達したポーランドは静かに首を振る。

「だが、ここで余計な道草を食つてはギンメル達が苦しくなるう」

「ベルガデイの守りに500を残しましたからな」

「なるべく早急に賊どもを片付けて、砦に向かわねばならん」

「では、速度をあげますか」

駒を長槍隊の中央まで進めると、ポーランドは声をはりあげた。

「良いか、この地を掠める盗人を許すな！ 正義は我らにこそある

！ 進めえい！」

喚声がポーランドの声に続く。

「本当に、これで俺たちは解放されるんだろうな？」

「ああ、間違いない。ロクサー又は占領した村に、一切手を出していない。我らがシュセ様は寛大なお方ゆえにな」

オシリスの砦の暗がりの中、ボロボロの作業服を着た男が、黒衣に身を包んだ男に聞いた。だす。

「怖気づいたか？」

黒衣の男の瞳が、迷う男の反応を面白そうに眺めていた。

「ふざけるなっ！ いやっ、すまない……そうではなくて」

「お前の気持ちわからぬでもない。昨日今日であつた得体の知れぬ者の言うことを信じて良いのか、判断がつかないのは当然だ」

内心で、今更だなと思いつながら黒衣の男は続ける。

「だが、犀は投げられたのだ。お前の名を記した書状は確かにロクサー又側に渡り、おそらくロクサー又はそれを元にて攻撃をするだろう」

「なぜそういいられる!？」

「この砦は僅か2000の兵力で落とせる代物ではないからよ」

黙りこむベルゼイを視界に納めながら、黒衣の男はなおも続ける。
「ゆえにここで内応して、我らの勝利に貢献すれば、お前たちの待遇は天と地ほどの差ができる……わかるな？ 戦い終わってから降伏するのと、戦っている前から協力するのでは、もらえる恩賞が違つて当然よ」

クカカカ、と笑いながら黒衣の男は努めて陽気に笑い飛ばす。

「……わかった。それじゃ俺は仲間の説得に行つてくる」

「そつだ。自身のなすべきことをするべきだな」

ベルゼイが立ち去ると、黒衣の男は静かに笑う。

「さあ、やつて来い。シュセ・ノイスター……貴様の首は必ず、このわしが挙げてやるう程に」

ロクサー又からの暗殺者は、暗い笑みを浮かべた。

夜は新月の闇を落とし、鎧が擦れ合う音にすら気を使いながら、ロクサーヌの軍勢は夜の闇の中を進んでいた。

敵の目を欺くために、宿営地には煌々と松明を燃やし、逆に進軍は手探りに近い状態だった。前を進む者の背中を触りながら、進む彼らを天上から見下ろせば一匹の大蛇に見えたことだろう。堀を避けて門にたどり着くために、いまだ切り開かれない森の中を大きく迂回して砦へ迫る。

夜通し歩き続けて、夜明け前、やっと彼らは砦の見える位置にまでたどり着いた。

「……だいぶ遅れてしまいましたが大丈夫でしょうか？」

未開の森を進むというのがこれほどの困難を伴うことだと、イエールは改めて認識させられていた。縦横に張り巡らされた蔦と、不規則にゆがむ地面。ともすれば、倒木や落とし穴のごとく生い茂る草木に隠された深い溝。しかも森を抜ける困難はそれだけではない。猛毒を持つ蛇や、虫達、縄張りを浸食されたと怒り狂う肉食獣。さらには、けたたましく泣き叫ぶ怪鳥の声がシュセ率いるロクサーヌ軍に一瞬たりとも緊張を解かせなかった。

毒蛇に咬まれても、悲鳴を上げずにいた兵士。深い溝に落ちて切り傷を作ったまま、無言のうちに歩き続ける兵士。そんな彼らの様子を一度だけ振り返って、シュセは砦に目を向ける。

「行きましよう。合図を」

苦痛に耐えるのも、叫びだしたい悲鳴をこらえたのも、押し潰されそうな闇の不安を耐えたのも、全ては勝利のために。その思いを深く胸に刻み込み、長剣隊を先頭に砦の城門へ息を殺し、近づいて

いった。

「先に行く」

シュセの身边に張り付いていた兵士の一人が、彼女を追い越し際にそつと囁く。その影を見送ると、彼女は誰にも気づかれることなく、口の中で囁いた。

「お気をつけて」

キツと見据える先に、皆は闇の中に小揺るぎもせずそびえていた。

「来おったか」

夜明け前の闇の中、森の中から這い出す一群の人影。それを城壁の上から見下ろして、暗殺者は音を立てずに笑う。

今しも城門を守る雑兵の姿は、ベルゼイの手の者が固めている。森の中で、松明の火がともる。それが二つ。円を描くように振られると同時に、這い出してきた一群と、城門の兵士が接触した。

声を潜めたやり取りだったが、暗殺者として修練を積んだ彼の耳にはそれが明瞭に聞こえる。

「声を低く」

一群を率いる男が、城門の兵士に話しかける。

長剣を抜かずに近寄るのは、相手に無意味な緊張を与えないためか。

「ベルゼイの手の者か？」

「俺がその、ベルゼイだ」

「よし。では手はずを確認するぞ」

「まっつてくれ。俺達の安全の保証を」

「当然だ。シュセ様にいたっては無辜の民に危害を加えるような方ではない」

低く力強くうなづく男に、ベルゼイが安心した口調となる。その

露骨さ加減が、暗殺者にはおかしかった。

「門を開いたら、一気に首脳部を占領する。道案内はお前がするのだな？」

「あ、ああ」

「よし。では早速行こう」

ベルゼイの合図で、城門の門がはずされる。

「仲間はみんな、頭に白い布を巻いている。それで判断してくれ」

「よし。本隊に合図を」

言うや否や、開いた城門の中へ入り込む。

両刃の長剣を抜き放つと、無言のうちに続く部下達へ目配せする。統率された動きで、城門を占拠する兵士の姿。

城門の外では、待機していたロクサーヌの本隊が、森を抜け出してきたている。

「頃合じやの」

ギンメルに報せるべく、城壁を伝って砦の中へヤマモリの様に移動する。

ロクサーヌからの暗殺者である彼が、ここまで手の込んだことをしているのには、それ相応のわけがあった。トウムルが心血を注いで構築したこの砦は、ロクサーヌ いずれはカルを追い落とし、国の主の座に返り咲くであろうオウカにとって、邪魔である。と暗殺者は考えた。

シュセを始末するだけなら、ギンメルにことの次第を話し、ロクサーヌ軍を抹殺すればよい。だが、シュセには消えてもらう。同時に、この砦にも消えてもらう必要が、暗殺者にはあったのだ。

このような堅固な砦が残ったのでは、西域の主に治まっているトウムルが中央からの指示に従わなくなるのではないか。

そこまで判断してこの熟練の暗殺者は、手の込んだ芝居を打った。もしこの処置をオウカが不服とするなら、彼はオウカの手で処断されるのだらう。だが、長年オウカに仕える彼は常にこの種の判断を自身の首で負ってきた。

「このたびの処置も、翁は是といわれるであろう」
その自信が彼にはあった。

あるいはそのわずかな気の緩みに、付け込まれたか。
音もなく追いつがる影に、気がつけなかった。

不寝番が松明をともしてその一角を守っている。将校専用の区画。
明かりの中に、音もなく暗殺者が降り立つ。

「何者だ!?!」

思わず槍を構える不寝番の兵士達に。

「敵襲ぞ!」

「なに!?! 貴様はつ!?!」

「我はギンメル殿配下 ええい、急がれよ!」

声を荒げる暗殺者。事情を知らないものが見えれば、忠節ゆえの
粗暴さと映つただろう。そこまで計算した暗殺者の演技に、不寝番
の兵士は疑いを残しつつも、控え室に走って返す。

「よいか、敵は既に門を開いて侵入しておる! このことを一刻も
早くギンメル殿に知らせよ! 我はこれから他の兵士どもを起こし
てくる!」

言つやいなやその身を翻す。闇の中に駆け去る暗殺者は、自身の
芝居に思わず口の端を歪める。

「ふっ」

「疾っ!」

長年命を的に働いてきたものの勘が、暗殺者にその一撃を避けさ
せた。完全な死角から放たれた、双剣の一撃。首筋を狙つて放たれ
た弧を描く死神の鎌が髪の毛一本分届くより早く、暗殺者は転ぶよ
うに避けた。

「……いつぞやの!」

「命をもらいにきた」

己の半分も生きていないような死神が、双剣を構えてそこにたっ
ていた。

西域の主18（後書き）

お休みの日だけでいい、一日が48時間ぐらいにならないでしょうか。

砦の形状については、前方後円墳をご想像してください。

「ギンメル殿！」

敵襲の報に耳を疑いながら、それでもできうる限り迅速にギンメルは武具を身に着けた。そこに訪れた他の二人の将。ユネツクとテイターの姿に、ギンメルは眉をひそめた。

よろい姿も何もない、寝間着姿であわててかけてきたのだろう。部屋の間かりに、彼らの顔にある怯えと汗がギンメルには不快に映る。

「敵襲だとか？ 敵勢は？」

「なぜここに敵が来ているのだ。ありえぬ、ありえぬぞ！」

不安に怯えるユネツクと、わめき散らすテイター。

「黙れ！ 敵が来たのなら好都合であろう。今ここで殲滅すればよいではないか！」

若いギンメルはその不快感を抑えるすべを知らなかった。敵を前にして狼狽する自分より年上の二人の姿に、嫌悪を通り越して憎悪すら抱く。

「な、なにを若造が！」

「礼儀をわきまえよ！」

怒鳴って返す二人を鼻で笑うと、近くにあつた長剣を抜く。

「邪魔だ！ そこをどけ！ 戦う気のない臆病者め！」

立ちふさがるようにしていた二人を抜き身の長剣で追い散らすと、自身の配下をに命じてありつたけの松明をともさせる。

罵詈雑言を並べて逃げ去る二人の姿を鼻で笑うと、部下に次々指示を出す。

「これからは俺一人で指示を出す！ 使える雑兵どもを連れて来い

！ 目見もの見せてくれるわ！」
夜の闇を煌々と照らす松明のように、彼の闘志は燃え上がっていた。

「気づかれたか！」

砦全体に灯がつくのと同時に、一気に騒がしくなる気配を感じてイェンルは思わず舌打ちする。できればこのまま、首脳部を抑えてしまいたかった。理想に過ぎる考え方だが、それでも舌打ちせずにはいられない。

ベルゼイの説明によれば砦の中枢である将官らの区画に到達するには、まず雑兵達と兵士を分かち外門を抜ける。次いで、将官らと兵士の区間を分かち内門を抜け、最後に将官らの区画を守る土門を抜ければ砦を攻略できるはずだった。

ここからは、一気に駆け抜けるしかない。

音を忍ばせる必要も、もはやなかった。

「イェンルの長剣隊に告げる！ これより敵首脳部を一気に落とし、我らがシュセ様に勝利を差し上げ奉る！ 我と思わん者共は俺に続け！」

押し込めてきた気迫が実質的な重さすらともなうて周囲を圧する。立ちふさがるものは、今まで溜めに溜めた気迫をぶつけられ、見たそばから切り倒されていく。

バラバラと立ちふさがる敵兵を切り捨て、あらん限りの声で吠え立てる。まるで剣を握った獅子のような雄雄しさで、イェンルの長剣隊は砦の中を攻略して行った。

夜も明けようとするに突然の襲撃が重なり、砦に詰めていた兵士たちの混乱は蜂の巣を突いたような騒ぎだった。その混乱を切り裂くように、イェンル率いる長剣隊が進む。

「立ちふさがるもの以外、捨て置き！ 目指すのは将の首だけだ！」

先頭に立つイエニルの声に、眼前の敵を蹴散らしながら、長剣隊が続く。

その彼らが抵抗らしい抵抗にあったのは、砦の中枢まで後2門を残すのみといったところだった。外門を問題なく抜け、内門へと向かう途中でギンメルの指揮下にある一部隊と乱戦に持ち込まれてしまった。

「くそっ！ 俺としたことがっ」

肩口を掠める敵の白刃を弾き、体が流れた敵に対して長剣を叩き付けながらイエニルは罵った。隊長であるイエニルを一点の穂先として一体となつたロクサーヌの長剣隊だったが、それは同時にイエニルに攻撃が集中するということにもなつた。

結果、篝火をふんだんに灯した兵士の区間に差し掛かったところで、イエニルを始めとする先頭集団に、手投げ槍が降り注ぐことになる。砦の中に建てられた宿舎の屋根の上から降り注ぐ槍は、落下速度も加わつて平地で投げられるよりも遙かに威力を増して、彼らに襲い掛かった。

「恐れるなっ！ 進めっ！」

だがその程度で進撃を緩ませるイエニルではなかった。部下を叱咤激励すると同時、イエニル自身が先頭となつて降り注ぐ槍の中を走りぬける。

「先頭の男だ。狙えエ！」

次いで立ちふさがる敵の長剣隊。

それと真つ向から切り結んぶ。瞬く間にその場は、血しぶきが吹き荒れ、屍が横たわる修羅場と化した。

外門を越えた頃から、敵の質が明らかに変わっていたことにイエニルは気づいてはいたが、それほど気にしてはいていなかった。奇襲にとって必要なのは、勢いである。

ロクサーヌ全軍の先鋒を賜ったイエニルは、ひたすらに前を進むことが要求される。先鋒の勢いが鈍ければそれだけ相手に反撃の時間を与えることになるのだ。

だからイェンルは敵の質が変わっていることに気づいてはいても、ゆっくりと隊列を整えている時間などはなかった。むしろこのまま内門へ襲い掛かったほうが衝撃力をそのままに相手にぶつけられる。その判断を下したイェンルは、先頭を切って敵陣へ切り込んだ。

「続けエ！」

血脂の滴る長剣を振りかざし、切り込むイェンルだったが、繰り出された短槍に、足を切り裂かれる。いかに歴戦の戦士といえども、足を負傷してそう走れるものではない。

徐々に落ちる速度が、そのまま長剣隊の速度となった。

それでも彼の率いる長剣隊は強かった。平素から戦のための訓練をつんだ長剣隊の個々の技量は、西域の軍勢と比べてひとつ上をいく。徐々に、ではあるが内門の方へ繰り出してきた敵を押し返していく。

「ひゃ」

ベルゼイに降りかかる白刃を払うと、間髪おかずに自身に遅い来る短槍を跳ね除ける。

「道はあっているんだな!？」

怒鳴るイェンルにベルゼイは頭を抱えながらうなずく。

「よし！」

顔についた血糊を拭いながらイェンルは頷く。

「このまま押し切るぞ！」

周囲で戦う部下に向けて声を張り上げる。

「断じて通すな！ 数はこちらが多いのだ」

敵の指揮官らしき者が負けじと声を張り上げる。

その声の主を確認した途端イェンルは向かってきた敵を力任せに押し退けると、敵の指揮官目掛けて走り出す。

それを阻もうと、左右から迫り来る槍。それを撥ね退け、指揮官に襲い掛かる。

一刀のもとに指揮官を切り倒すと、その首を掲げた。

「道を開かねば、貴様らもこうなるぞっ！」

それに呼応するように、イエニルの部下たちが勢いを増して敵に切りかかる。

「よし……片付いたな。ベルゼイ、ここから先はどうなっている？」
足に負った傷をもとせずにイエニルは傍らのベルゼイを顧みる。

「ここから先は、まっすぐにぬけられるはずです」

イエニルの鬼気迫る戦い方にベルゼイは震えながら答える。

頷いてかがり火に照らされた内門を睨むのと、部下の悲鳴が聞こえるのは同時だった。

「ロクサーヌなど、いか程のことがあるうものか！」

ロクサーヌの兵士を切り倒し、ギンメルは氣勢をあげた。

ギンメル率いる長剣隊は、彼自身の領地から連れてきた直卒の私兵と、トゥメル歩兵軍からの兵士から構成されていた。トゥメルのように、古参兵と雑兵を混ぜたりはしなかったために、ギンメル自身に従う兵は皆全体でそう多くはない。

だがその分、混じり気のないオシリスの皆で最精鋭といってもいい戦力だった。

さらに、それを率いるギンメルが血気盛んな指揮官である。父の無念を晴らすという一念で、先陣を切って進むギンメルに、彼を守ると誓って戦う私兵や、トゥメルから直々にギンメルを守ることを厳命されている歩兵軍の兵士達は、奮い立たずにはいられなかった。内門を超えて来たロクサーヌの兵士を瞬く間に殲滅すると、逆に内門を超えてギンメル自身が突出する。

その火の付いたような勢いに、疲れの見せ始めていたイエニルの長剣隊は、態勢を整える間もなく蹴散らされてしまう。

先ほどまではあれ程に押しに押ししていたイエニルの部隊は、怒涛のごときギンメルの勢いにのまれ、散り散りになって後退するしか

なかった。

「くそ！ 無念だ」

態勢を整えるため、止む無く後退するイエメルは悔しかったが、彼一人が敵を倒そうとも、その勢いは覆ることがなさそうだった。

痛む足を引きずりながら、殿となって部下を先に行かせる。左右と正面から突き出される槍を、今や防戦一方に回す長剣で払いながら、なんとか後退していく。

「押せ、押せ！ このまま一気にロクサーヌの雑魚どもを葬るのだ！」

血を浴び尚猛るギンメルが氣勢を上げた。

その抑えようのない勢いに、イエメルが呑み込まれようとしたとき、後方から幾本もの長槍が彼を守るように突き出された。

「苦戦してるな、イエメル！」

「バツセールか！」

「先陣で駆けていったと思えば今度は殿か！ ずいぶん働き者だ」

「抜かせ！」

互いに無事を祝って不敵な笑みを交わす。

「後は任せる！」

「くっ……すまん」

下がるイエメルを守るようにしてバツセール率いる長槍隊が、ギンメルの長剣隊の前に立ちふさがる。

「グリユーエン！ 方陣だ。先陣3列横隊！」

「了解、聞こえたか！？ 野郎ども！ 方陣を敷くぞ！」

山賊顔負けノグリユーエンの濁声が、戦場に響き渡る。それだけで班員達は、眼前に迫る敵にも、ある程度心の余裕をもって対応することができた。

凄まじい勢いで襲い掛かってくるギンメルの長剣隊に対して、正面に重点を置いた槍の陣を敷き対応する。一列目は片膝をつき、二列目は中腰に構え、三列目はその隙間を埋めるように槍を突き出す。そのまま突き進めば、間違いなく串刺しになるであろう槍の密集度。

短時間の間にそれを作ったグリューエンは、班員達を鼓舞することを忘れない。

「この戦が終わったなら、オヤジにたっぷり奢ってもらわなきゃ割に合わんな！」

そうだ、そうだという声が槍列の間からも上がる。

その声になりと、笑ってグリューエンは氣勢を上げた。

「死ぬんじゃないぜ、てめえら！ オヤジの財布が空になるまで飲み明かすためになア！」

真面目にやれと、バツセルの怒声に押され、不敵に笑ったままグリューエンは自身も槍列に加わる。

「さあ、掛かってこいや！」

ギンメルの長剣隊とバツセルの長槍隊が、激突した。

ギンメル率いる砦の守備兵と、ロクサーヌの兵が内門を舞台に激しい攻防を繰り返していたところ、人知れず闇の中でも、二人の獣が牙を剥きあっていた。

手を地面について四足の獣のような構えをとるオウカの暗殺者。

その頭上から、地面を断ち切るがとき強烈な一撃が襲いくる。死神の鎌のごとくに襲いくるそれを、後ろに飛びのいてかわしたと思えば、追い打たれるのはさらなる一撃。

この死神には、命を奪うべき鎌を二つもっている。背中に滴る冷や汗を無視するように、暗殺者は考察する。今まで戦ってきた手練れの中でも、1、2を争う難敵に、経験のすべてを費やして対抗策を考える。

目の前の敵が、難敵たるゆえんは一つに双剣を使いこなしている点。まずもって、双剣などという代物を使いこなせる者はそういるものではない。人間には必ず利き手というものがあり、その逆に利き手でないほうの手は、自然と不器用になる。

だが目の前の敵はどうだ。まるで両手が利き手であるかのように、左右どちらの斬撃も強く鋭い。加えて暗さを物ともしない、眼の良さ。赤く不気味に光る瞳は、まるで血を求める本能でもあるかのよう、に錯覚させる。こちらの一挙動を正確に捕捉しているかのように、動きを合わせてくる。

月すらない新月の夜になのに、だ。

そして最も厄介なのが。

「くっ……」

襲いくる刃に、暗殺者は身をひそめてそのまま突進する。低い姿勢から鉤爪を振う。が、火花を散らしてそれは双剣の片方に受け止められた。頬を掠めるように、銀色の白刃が目の前を奔り抜ける。

このしつこさだ。

まるで影が本体に寄り添うようにして、体術を合わせ、それも、段々と振るわれる刃が、暗殺者の体に近づいてくる。

このままではいずれ切り裂かれるのは目に見えている。ここは、一旦引くべき。理性ではわかっていても、その切っ掛けがつかめない。執念ともいうべきしつこさで、敵は執拗に追いつがってくるのだ。心の臓を鷲掴みにされたように、明確に死を意識させられるその一撃。

それが振るわれるたび体から自由が奪われていくようだった。

「……何故に」

切り裂かれる片腕。

吹き出る血潮に、息が乱れる。

こんなはずではない。はじめて向かい合ったときには、すり抜けるのも容易な小僧のはずだった。

幾十年もオウカの元で暗殺をこなしてきた。しくじったことなど一度もありはしないのだ。

だが、なぜ……なぜこんなにも目の前の敵が恐ろしく感じるのか。常には自由に動くはずの体が、なぜにこんなにも重く言うことを聞かないのか。

この胸の奥から湧き上がる言い様のない濁流は、いったい何なのか。

「貴様のような小僧に！」

思わず発したその言葉に。

新月の夜に鬼火の様にゆれる赤の瞳。

立ち塞がる死神の口元が弦月に歪んだ。

剣と剣がぶつかり合い、長槍が敵を貫く。だがギンメルとロクサーはどちらも引きはしない。気迫と気迫がぶつかり合い、盾すら使い相手を殴り倒す。

「敵もやるものだ」

バツセルの小さな賛辞。直後迫りくる敵兵を槍で刺し貫く。

事実ギンメル率いるオシリスの守備兵達は、決して引こうとはしなかった。イエンの長剣隊と交代したバツセルの長槍隊にも疲労の色が見え始めていた。

せめて将を打ち取ればこの劣勢も覆せる。

そう考えて戦場の中にその姿を探し求めるが、ギンメルの近くには彼の直卒の私兵が固く彼を守ったまま近づけそうにない。

決して低くはないバツセルの長槍隊の士気だったが、ギンメルの守備隊はさらにそれを上回っていた。

徐々に押し込まれていくバツセルの長槍隊。

「イエンに大きなことを言って置いてこのざまかっ！」

自嘲気味に笑いながら、冷静に撤退の機会をうかがう。

「あと一息で敵を追い込める！　ここが勝機ぞ」

血塗れた剣を振り上げ、ギンメルの指揮ぶりはいつそう磨きがかかる。

わっとあがる喚声の声の方角を見れば、方陣の一つが打ち崩され

長槍兵がギンメルに討たれる様子が目に入る。

軽く舌打ちするとすぐさま決断する。

「後退だ、後退イ！」

大声でバツセールが呼ばわると、班長達がそれを復唱していく。

「グリユーエン、後退部隊の指揮を執れ！」

そついつと自身直属の部隊を最後尾にして、敵の圧力を受けきるべく、方陣を敷きなおす。

「逃げるぞ野郎ども！」

「班長、後退なんじゃ？」

「似たようなもんだろっが！」

すばやく自身の部隊と、隣接していた部隊に呼びわりながら内門の外へと逃れ出るグリユーエン。自身の部隊を除く、すべての部隊が撤収したのを確認して、バツセールも部隊を下がらせる。

「焦るなよ、慎重に少しずつだ」

だがそれを黙って見逃すほどにギンメルは優しくなかった。バツセールの引くタイミングにあわせて、彼に対する圧力をこれでもかというほどに厚くしていく。その圧力の中では、バツセールの制止の声にもかかわらず、隊列を乱してしまう者が続出してしまふ。

一人抜け、二人ぬけた方陣など穴の開いた盾と同じ。

「崩れたぞ！ 一気に殲滅するのだ！」

開いた穴目掛けて勇敢な戦士達が突入する。

ギンメル率いる守備隊の戦士達は、いまやはつきりと勝利を確信していた。最前線で戦うギンメルの姿に勝利の栄光を見ていた。

どちらも必死の攻防が続く。

数ではロクサーヌが、士気ならばギンメル側が上回るこの戦いは互角に思えた。徐々に引いていくロクサーヌ側の兵士を追ってギンメル率いる守備隊は内門の外にまで戦いを押し戻していた。

必死に防戦をするロクサーヌ側の兵士たちが内門の外にまで下がる。

「ゆけ！ 押し戻せ！」

ギンメル自身も敵を切り、迫りくる槍を跳ね飛ばす。そうしながら味方の士気をあげつつ、進撃する。

「勝てるぞ！ この戦ア！」

トウメル配下であった者も、ギンメルの所領から従った私兵も、いま矢誰一人としてこの若き将の実力を疑うものはいない。

「押せえエ！」

気合の声とともに、内門で殿を勤めていた槍兵を殴り飛ばし、敵を内門から追い落とした。

だがそこで彼らが見たものは。

「う……そんな」

「なんだ、これは……」

肩で息する合間から見たものは、彼らを包囲するロクサーヌの軍勢だった。いや、よく見れば、その中には自軍にいたはずの雑兵らの姿も見える。

「降伏なさい！」

目の前に迫る絶望を、理解できぬまま声をかけた主の姿を目で追う。

白亜の鎧姿に、夏の木々の梢を髣髴とさせる切りそろえた髪、細剣を腰に吊った姿は、登ってきた朝陽に照らされて、見事な細工が輝く。

噂に聞こえた敵の將軍。

あろうことか、前西方侯主の遺児を名乗る不埒者。

凜としたその姿に、美しさを感じる。その自身の心にすら憎悪を抱く。

「貴様が、僭称者か！？ 小娘！」

ギンメルの身の内から滲み出る憎悪を一身に受けて、尚彼女はひるまない。

「我が名はシュセ・ノイスター。先の西方侯主であるネアスの娘であり、ロアヌキアを統治なさる唯一の王の剣である」

堂々たるその宣言に、ギンメル以下は気を吞まれる。

「王の名において、命ずる。武器を捨てよ！」

背筋を駆け抜ける衝撃に、何人かの者は武器を取り落としそうになる。

抗いがたい衝撃に、彼は抗った。

「戯言を！」

だがその宣言を跳ね除けるギンメル。

彼にはわかってしまった。戦場の中にあつては普段いかな豪華に飾り立て、優雅を旨とする貴族達といえども、狂騒に荒々しくなるものなのだ。

だが目の前の将は、戦場の只中にあるというのに気品すら漂わせている。

これが、あるいは先の西方侯主から受け継いだ、人そのものの品格というものなのかもしれない。だが、そんなものを認めてしまえば、自分たちの戦いはいつたいたいどうなってしまうのか。それも正確に、しかも瞬時に理解してしまった。

敗北の二文字が目の前の戦乙女の姿をして、自身とひいては敬愛すべきトウメルに襲い掛かってきているのだ。

許せるはずがない。やつとめぐってきた戦場を。飢えるばかりの日常に、やつと巡つて来た潤いを。

例え、分の悪い賭けであろうとも彼は負けるわけにはいかなかった。

背中を押すのは、勇壮に戦って死んだはずの父の姿。小勢といえども、大軍を相手に出来ることを見せてくれた父の背中。胸の中だけにあるそれが、ギンメルの背を押した。

「貴様などが、先の西方侯主さまの子であるはずがないっ！」

いうや否や、彼の護衛も押しを超えて単身シュセへ向かう。手にした長剣はロクサーヌの兵士の命を幾人も奪ってきた凶剣。

「ぐああああ！」

狂猛な叫びとともに突進する彼の行動を、ロクサーヌ側でも予見できたものはいなかった。ゆえに生じる一拍の間。

空白となったその瞬間に、ためらいすらなくギンメルは入り込む。「死ねイ!!!」

予見できたものはいなかった……そう、ただ一人を除いては。シユセの手元から銀の閃光が迸る。

風を巻き上げるギンメルの凶剣が、シユセの鎧を掠めると、シユセの手から放たれた閃光がギンメルの首を切り裂くのはほとんど同時だった。

すれ違った瞬間に勝負はついていた。

糸の切れた人形のように地面に倒れこむギンメルと、すこしふらついたものの、しっかりと立っているシユセ。

「これ以上、西域の者同士で争って何になるというのです？ 決してあなた方を祖力にはしません……どうか」

涙すら浮かべて懇願する彼女の姿に、身構えていたギンメル以下の兵士達は武器を捨てた。

「彼の犠牲を持って皆の戦いを終焉とします。降る者は、容れなさい。去りたい者は去りなさい。ですがそれでもわたくし達に刃を向けるようなら、わたくしが直接に参ります」

実質彼女の布告が出された時点でこの戦は、ロクサーヌ側の勝利となった。おそらくもつとも頑強に抵抗したであろうギンメルはすでに息絶え、ユネックとテイターについてはすでに姿がない。雑兵達は既にロクサーヌ側の味方であった。心配されたトゥメル歩兵軍の兵士による反撃も、要となるべきギンメルが既に戦死したのでは求心力に欠けた。

結局半日もしないうちに、わずかにあった反乱の芽は摘み取られ、夜が開けきるころには皆にはロクサーヌの旗が翻っていた。

報告を受けたときは半信半疑だったが、目の前に広がる光景はト

ウメルの予想を完全に裏切るものだった。

自身の築き上げた砦に翻る“交差する蛇槍”。それが噂に聞くクサーヌの若き王のものだと確認するまでもなかった。

「スカルディア篡奪者め」

憎しみを吐く声にこめて、トウメルは呟いた。

「いかがしますか？」

ポーランドの声でわれに返る。兵たちが動揺している中に、自身まで動揺してしまったことを恥じて、毅然とトウメルは命令を下す。「ギリングの平原まで引く。それしかあるまい」

睨みすえる砦の上には、高々と敵の旗が翻っている。あの旗が偽者で、城主を任せた部下の三人が遊んでいるのではないとすれば。

「それしかありませんまいな」

無念そうに呟くと、ポーランドが殿を務めて来た道を引き返す。

ギリングの平原は、ちょうど部隊を収容するのに適した広さをもっている。西域では数少ない会戦に適した地形といえよう。砦を奪われたトウメルらにとって、かの砦は西都ベルガデイの喉元に突きつけられた短剣に等しい。

彼らに残された選択肢は、砦を落とすか、さもなければロクサーヌ側を野戦に引きずり出して殲滅するか、の二者択一となっていた。砦を放置すれば先に干上がってしまうのはベルガデイだ。砦には二ヶ月をゆうに戦えるだけの兵糧を運び込んでいたのだから。

ひとまずギリングの平原に到着したトウメルは、宿営地を設置させるとともに、斥候を四方に派遣した。砦が奪われたのなら、中にいた兵士たちはどうなったのか。まさか一人残らず全滅ということはないだろう。

彼らから情報を聞き出し、今後の対策を練らねばならない。

「基本的には、野戦をせねばならないが、ではどうやって誘き出すか」
周辺地域を詳しく描いた地図をにらみながら、軍議を行う。

「砦自体を攻め落とすのは、容易ではないですからな」

周囲の地形は、大軍を持って砦を攻めるに向いていない。それは

ロクサー又側からと同様にベルガディ側からも同じであった。

「報告！ ユネック殿、ティター殿ご帰還！」

トウムルを中心として彼らが頭を悩ませているときに、続々と入ってくる斥候からの報告。数多いその中であって、その一報はトウムルをはじめとした首脳陣にとつて、思わず腰を浮かせるのに充分だった。

「すぐに呼べ！」

トウムルの命に依じて、ユネックとティターらが軍議の席に呼び出される。取るものも取らずに、砦から逃げ出してきたのだろう。その姿は汚れ、外傷はほとんどないものの、表情は青ざめてすらいた。

「述べよ。いったいいかなる仕儀ぞ！？」

ポーランドの言葉に、ユネックとティターは押し黙り、俯いてしまつた。

「見れば貴様ら剣や鎧すら身につけておらぬではないか。まさか一戦もせずに砦を明け渡したのではなからうな？」

老将の苛烈な追及に、小さく答えたのはティターだった。

「……これは、裏切りによるものにて」

びくりとユネックの背が跳ねる。恐る恐るユネックが覗いたティターの顔には、焦燥と憎悪がたゆたっていた。

「裏切りじゃと？」

「さよう！ ギンメル殿の裏切りにて我らこのような仕儀と相成りました！」

顔を上げたティターの表情には必死さ以外のものはみえない。

思わずトウムルの顔を見つめるポーランド。このまま尋問を続けるのか、彼は迷っていた。この話が陣内に広まれば士気が下がるのは明白だった。父親をロクサー又に討たれ、猛り狂っていたはずのギンメルが敵に通じていたなどと。疑心暗鬼になる元を自ら生み出すようなものだ。

「虚言は死罪と決まっているが、その言葉今なら取り消せるぞ」

強い視線で睨むトゥメル。

「トゥメル様」

いけないと、ボーランデは思った。ティターは一度ギンメルの名を自身の口から出してしまっている。一度吐いた唾を、だれがいまさら飲み込めようか。

「いいえ、決してさようなことはっ！」

思わずボーランデは舌打ちしなくなった。ティターの態度はこれで頑なになってしまったようなものだ。ギンメルを裏切り者として全軍に広めるか、さもなければ虚言の罪でティターを処罰するか。どちらにしても戦う以前から、士気が落ちるのは火を見るより明らかだった。

「ギンメルと彼の部下、そして雑兵たちが結託し、砦を占拠したのでございます。我等は寝込みを襲われ、着の身着のまま……このよくな有様で逃げ出さざるを得なかった！」

「うそを、いうな！ ギンメルは父を討たれ本気で怒り狂っていたわ！ なぜそれが敵に寝返るのだ！」

ギンメルと仲のよかった若手の将が、我慢の限界という風に口を挟む。

「貴様、礼儀をわきまえよ！ このわしが嘘をついているとでもいうのか！」

「そうだともし！」

「事実奴の部下は、一人として戻ってきてはいないではないか！」

「ギンメルは戦い、貴様は逃げた！ そうに違いない！」

「なんだと！？」

喧々囂々の言い争いの中、トゥメルの一喝が雷鳴のごとくに落ちる。

「やめよ！」

天幕を揺らすほどの声量。いい争いをしてきた諸将は、トゥメルの一喝でおとなしくなるが視線だけは互いに角突き合わせたままだった。

「そのような無益な話し合いをするために、お前たちを呼んだのではない。わが軍の砦にいた兵士はどうなった？ ユネック答えよ」
平身低頭したまま、争いにも口を出さなかったユネックにトウメルが質問する。

「し、襲撃を受けたのは夜半だったもので、敵の正確な数は知れませぬ。わ、我が方につきましては、不意の奇襲だったため、その全容を把握することは叶わず……」

「つまり、何もわからないのだろう」

テイターに突っかかった若手の将の一言に、ユネックは黙り込む。話にならないと憤る若手の将をポーランドがたしなめる。

「雑兵は寝返ったという話だったが？」

「雑兵の大半は、すでにロクサー又側の手が伸びていました」
「わかった。二人ともしばらく休め」

下がるように命じるトウメルに、若い将は不満の声をあげる。

「閣下は奴らの言うことを信じるのですか！？ ギンメルが本気で我等を裏切ったと!？」

「そうではない」

ゆっくりと首を振るトウメルは、ポーランドに視線を向ける。

「わからぬか？ ユネックとテイターの話では雑兵どもは丸々敵に寝返ったと考えてよい。しからは数の優位を保つ上で、彼らの力はおのずと必要になるろう」

ユネック、テイターともに、中小とは言え自分の領地を持つ貴族である。彼らを処罰すれば、その下にいる兵士までも今回の戦で使えないことになるだろう。

「……では、ギンメルは」

「おそらくもう生きてはいまい」

拳を、白くなるほどにきつく握り締める。

「仇はとるぞ、ギンメル」

その宣言にうなずくと、トウメルは軍議を再開させた。

小勢をもつて砦に向かったポーランド以下の騎馬隊は、敵の全軍をその後方に引き連れながらギリングの平原へ向かっていた。

「これほど簡単に誘いに乗ってくれるとは予想外ではあったが……」
後方との距離を確認して、ポーランドは馬上で呟く。

「考えたとして仕方あるまい」

余計なことを振り払って馬に鞭を入れる。

もはや決戦以外に道はないのだから。

ギリングの平原に布陣してから、3日。トウメルの率いる西域軍は、ポーランドを長として敵の挑発に当たっていた。砦の周囲に火を放ち砦自体には火矢を放つ。

すぐに消し止められはするものの、その度に鳴らされる警鐘の音に、精神的な負担は増えていく。

それでは、とロクサーヌの側から騎馬隊を出して妨害を止めさせようとすれば、敵はあっさりと引いていくのだ。そして彼らが寝静まった時刻になると再びやってくる。

三日間それを続けたところで、ポーランドは敵を砦からつり出すことに成功していた。

トウメル率いる西域軍の待つ、ギリングの平原までこのまま着かず離れず敵を誘導するのが彼の役目となる。

一方のロクサーヌ側にも討ってでねばならない相応の理由があった。

純軍事的に見れば、砦に籠りつつ相手が弱った所で全軍を出撃させれば、苦もなくベルガディを始めとする西域はロクサーヌ側の手に落ちるであろう。しかし政治の絡まない軍事行動がありえないように、ロクサーヌ軍を縛るのはその後方の事情だった。

外交の問題でいえば、王都にいるカルの地盤を一刻も早く固めなければならぬという事情がある。大河ルプレを挟んで向こう側には、未だ虎視眈々とロアヌキアを狙う都市国家ポーレの影があり。東都ガドリアを支配するサギリを味方につけたとはいえ、南都ジェノヴァは未だカルの治世に諸手を挙げて賛成しているわけではない。内部においてはオウカとカルの暗闘が続いている状態だった。

またロクサーヌ軍を率いるシュセの心情としても、早期に故郷を取り戻したいと願うのは当然といえた。

双方の思惑が合致した結果、ポーランドはギリングの平原にロクサーヌの軍勢をおびき出すことに成功し、ロクサーヌ軍としては一挙に西域の平定を果たすための会戦をする機会を得た。

西域の主を決める戦いは、初夏の熱気がまだ目を覚まさない早朝にはじまることになった。

「平原に到着次第、斜列陣を取る。先頭は長槍隊、順に長剣隊、騎馬隊、後方に弓隊を配置！」

馬上にあつて指示を出すシュセは、進軍速度を僅かに落としながら指示を各部署に伝える。走り去る伝令を見送ると、朝もやのけふるギリングの平原が、目の前に迫っていた。

彼女は新しく加盟した雑兵と呼ばれていた農民兵を戦闘に加えることはしなかった。砦の守備を命じるとロクサーヌから引き連れてきた2000の全軍を持って砦を後にする。確かに数量の優位は魅力的ではあつたが、部隊同士の連携を重視した。

訓練もまともに受けていない農民兵と、もっぱら訓練を受けているロクサーヌ側の兵士ではやはりその錬度にかんりの差が出来てしまう。その差を突かれてしまうのを、彼女は危惧したのだ。

「長槍隊前へ！」

「前へ！」

彼女の命令をつたえる伝令が、隊長から班長へ、更にはその下に
いる末端の兵士にまで水を流したように伝わっていく。

「ぬかるんじゃねえぞ！」

髭に隠れた顔で、グリューエンは彼の部下達に笑いかけた。

「前の戦いじゃ長剣隊に良い所を取られっぱなしだからな！ 気張
れよ」

応、と答える兵士達もその士気は高い。

「勝てる戦だぜえ、手柄を立てなきゃ損だぞ！」

グリューエンの言葉を聞くまでもなく、彼ら末端の兵士に至るま
で、ロクサーヌ軍の士気は高い。難攻不落と思われたオシリスの砦
を攻略し、シュセの手腕に絶対の信頼を置いているからだ。

「我らの女神に勝利を！」

他の班から沸き起こる掛け声に、グリューエン隊も負けずに声を
張り上げる。

「女神様に勝利を！」

意気高く、長槍隊は先頭を切ってギリングの平原にいる西域軍へ
向かって走り出した。

「敵が、長槍隊を前に出しました」
「うむ」

待ち構えるトゥメルからでもその様子は確認できた。

トゥメルには、シュセが仕掛けようとしていることが手に取るよ
うにわかった。

「斜列陣か」

呟いたトゥメルは、獲物を前にした獣のように猛々しく笑った。

この時点で、トウムルにはシュセのしようとしていることがほぼ正確につかめていた。斜列陣とは、敵の全軍をまず一部隊が引き受け、その一部隊が敵をひきつけている間に、残る軍を持って敵を包囲殲滅するのを意図する陣形だ。

「ポーランドは？」

「先ほど帰還なされ、今は騎馬兵の指揮を」

「よし」

重々しくうなずいて、トウムルは指示を下す。

「敵の正面を叩く。混成隊前へ」

馬上に身を躍らせると、武骨な大槍を一振りする。風を唸らせる一振りは、彼の気迫が乗り移ったかのようにだった。

「続いて貴族軍前へ。波状攻撃をかけるぞ」

トウムルは三段構えの陣を敷いていた。敵がどのような戦法を取ろうと、瞬時に対応できるようにだ。トウムルが考えたのは、混成隊を一陣として敵にぶつける。当然数が互角なのだから、こちらが不利であるのは予想の範囲内だ。

敵がここで包囲殲滅を企図するなら、包囲は簡単。詰将棋の要領で容易に勝利が転がり込む。

だが、敵も馬鹿ではない。あの砦を落とした敵ならば、ここでは包囲をしていくことはないだろう。

ゆえに第二陣として西域に所領をもつ貴族軍を投入する。これで数の問題は解決する。押されている戦線も一時ながらも、持ち直すであろう。あるいは、敵の長槍隊を押し込むかもしれない。

ここで敵が包囲の態勢を取るならば、一気にトウムル子飼いの第三陣歩兵軍を投入して勝負を決める。包囲しようとした敵の外側から、歩兵軍を投入し、挟撃の態勢を取る。

だが、もしここでも敵が包囲を取らぬのなら、トウムルの歩兵軍を控えさせたまま、二つの陣を持って相手を押しに押せばよい。そのうち耐え切れなくなった敵は音を上げる。

斜列陣の弱点とは、敵の全軍を引き受ける部隊が無事であってこ

そ半包囲が完成するのだ。その部隊が壊滅してしまつては、逆に各個撃破の的とされてしまう。

「お手並み拝見といこうか」

敵を率いる将がどの程度の器量なのか、胸の奥に高揚感を覚えながらトウメルは全軍に出撃を命じた。

ロクサー又側の長槍隊と、西域軍の混成隊が衝突したのはギリングの平原のちょうど中間あたりだった。ぶつかった瞬間からロクサー又の長槍隊はその精強さを発揮する。

走つてギリングの平原まで来たというのに、彼らはすぐさま隊列を整えハリネズミもかくやというほどの密集隊形を作り上げる。大盾の合間から突き出される無数の長槍が、敵を貫くのは今か今かと待ち構えているようだった。

一方のトウメル混成隊は、走つてきた速度をそのままに盾を前にして速度を殺さずハリネズミに衝突した。幾人かの串刺しが出来るが、後ろから押されてとまることができなかったのだ。だが盾を前にだしてうまいこと槍の隙間をくぐりぬけた者もいる。

ハリネズミに取りついた何人かが、大盾をよじ登ろうとした途端に、わずかに開いた大盾の隙間から矢のような速度で繰り出された長槍で体を貫かれ、押し寄せる味方の列まで吹き飛ばされる。だが味方の屍を乗り越え、混成隊は前にでる。

長槍の隙間をすり抜け、強固に守られた盾の隙間に、刃をねじ込もうとした混成隊の兵士がまたもや長槍で胴体を射抜かれる。ロクサー又の長槍隊は敵の圧力に耐えながら、その圧力が弱まるのをじつと耐え忍んで待つていた。

「耐えよ！」

バツセールが声を枯らして味方を鼓舞する。正方形に並んだ大盾

と槍の隙間から、よじ登ってくる敵を突き殺しているのは、グリユーエンら班長の役目だった。1個班で1個の正方形型の陣を作り、それを並べることによって一つの陣を構成する。

遙か上空から見下ろせば、四角い箱がいくつも密集しているようなものだった。

複数の隊を指揮するのは、シュセの信任厚いバツセル。小さくともがつちりとした体つきに、気迫をみなぎらせ、風雨に刻まれたような厳しい顔を紅潮させ力の限り槍を振るう。

「クレイモン隊は左に、ゼルエブ隊は右にそれぞれ密集隊形だ。敵を誘い込むぞ！」

隣で控える副官に銅鑼の音によって、命令を伝えさせる。

「こっちは敵をひきつけながら後退する！ あせるなよ！」

敵からの圧力を受けながら、徐々に気づかれないように下がる。

徐々に前に出る左右の隊と呼吸を合わせつつ、下がっていくのは精神と体力をことのほか消耗させる。熱狂のままに槍を振るい、突撃をしてしまえばどんなに楽だろうか。

一瞬のあとには死が待っているとしても、刹那の恐怖さえやり過ぎせばそれは非情に魅力的にすら思えた。だがそれを、強靱なる精神力でねじ伏せると腹の底から声を出して味方を鼓舞する。

「班同士の密集度をしっかり保て！」

隙間なく並べた大盾の合間をあげないように、細かな指示を下しつつ、戦場を見渡す。

徐々に凹型になりつつある陣形を確認すると、敵がしっかりと食らいついているのを確かめると、バツセルは、歴戦の兵らしく冷静に決断を下す。

「反転、反撃だ！」

その声を聞いた瞬間、銅鑼は気が狂ったように激しく叩きならされ、兵士は今まで耐えに耐えてきた鬱憤を晴らすかのように槍を突き出す。

バツセル隊の反撃を見て取った左右のクレイモン、ゼルエブ両

隊も、前進を止めてバツセル隊にひきつけられていた獲物を襲いだす。

前方と左右から挟み撃ちにされた西域の混成隊はたまったものではなかった。今まで、自分達の優位を疑いもしなかったために、その衝撃は計り知れない。突然の反撃に、唯一空いている後方に向かって、隊列も武器も何もかも捨てて逃げ出していく。

「追撃だ！ かかれエ！」

バツセルの声に合わせて、彼の長槍隊が前に出る。逃げる混生隊を蹴散らすのは、羊の毛を刈るよりもたやすく、人の命を奪い去っていった。

今までほとんど、拮抗していた状態が一つの戦線で崩れると、まずはその左右の部隊に影響を及ぼすことになった。クレイモン、ゼルエブの両部隊の前に立ちはだかっていた混成隊に、前面の敵を蹴散らしたバツセルの長槍隊が襲い掛かったのだ。

声を枯らして戦線を維持しようとする混生隊の指揮官達の言葉も、古参兵達の奮闘も、大局を帰ることまでは出来なかった。大多数の雑兵にとって、目の前に突きつけられた仲間の屍骸を引きずった長槍は、魂が飛び出るほどの恐怖であり、死が形を持って現出したかのような重圧をもって、彼らに襲い掛かっていた。

バツセルの長槍隊に襲い掛かれた混成隊はクレイモン、ゼルエブからの圧力もあって、時間が経つほどに陣形を崩され、撤退をしていくしかなかった。

「踏みとどまれ！ 今にきつと、援軍が」

混成隊の指揮官の言葉が、突き刺さる長槍に阻まれる。だが、その長槍の柄を切り落として、指揮官の男は踏みとどまった。

「トウメル様っ……！」

立っていることすらままならず、片膝をつく。命じられたことを仕損じた無念さと、敬愛するトウメルに対する申し訳なきが彼の両肩に重く押し掛かっていた。流れ出す血潮は、彼の命脈が長くないことを伝えている。

そのとき後方から、歓声があがった。

思わず振り返った彼が見たものは、後方から迫ってくる第二陣の勇姿だった。

「援軍だ！ 援軍だぞ、我らは負けぬ！」

周りにいるはずの味方に向かって、声を張りあげる。

命が尽きることを恐れず、立ち上がる彼に、ロクサーヌの長槍が殺到する。

「侵略者などには、決して負けぬ！」

最後の力を振り絞って、長槍を叩き折ると混成隊の指揮を任せられたその男は絶命した。

「長槍隊が、敵を撃破した模様」

告げられる言葉に、シュセは頷く。

バツセールは見事に期待に応えてくれた。ならばその勝機を逃すべきではない。

「長剣隊を投入！ 敵を左から半包囲なさい。弓隊は長剣隊に続き前進。長剣隊の援護をしつつ、その後方に展開。騎馬隊については左から敵の後方に回ります！」

シュセは自身を先頭に立てて、騎馬隊を率いる。

「旗を！」

片手に持つのは、ノイスターの紋章旗。

父の紋章である“緑水の円環”を掲げながら、彼女は馬を走らせる。

ここが勝機！

耳元で囁かれるような、脳裏に響く声。

それに従うようにシュセは戦場へ向った。

伝令の言葉を聴くまでもなく、トウメルは自身の混成隊が危急に陥ったことを悟った。

「ボーランデの騎馬隊に出撃を命ぜよ」

予想よりも遙かに敵の長槍隊の連携がいい。俄か作りの混成隊では、圧力をかけるだけでそれを崩す所まではいかなかった。

「混成隊を救え」

このままでは混乱した、混成隊はこちらの陣形を崩す恐れさえある不安要素となってしまう。

「イアーソン、騎馬隊の一部を割いて敵の長剣隊をけん制せよ」

ときばきと指示を下すと、第二陣の戦いを見守る姿勢をろうとし、ロクサーヌの騎馬隊が動きだしているのに動きを止めた。

「ここを、勝機と見たか……」

不気味な沈黙が、あたりを覆う。

「ウインネ、歩兵軍を動かす。前衛を努めよ！」

「御意！」

猛々しく笑うと、全軍に出撃を命じる。

歩兵軍の前までいくと、横隊になっている彼ら一人ひとりの前を騎馬で通り抜けながら、声をはりあげる。

「戦友諸君、いよいよ決戦のときだ。噂では、スカルディアは精強を持って鳴る武門の家柄だそうだ。ここまで彼らの戦いを観察してきたが、事実と認めざるを得ない」

ざわざわと兵士達の間不安のざわめきがおこる。それを聞きながらトウメルは更に言葉を重ねる。

「だが、その噂も今日で塗り替えられるだろう。我らの後ろには守るべき家族がいる！ 愛する者を守るために我らは勝たねばならぬ！」

応、と応じる歩兵軍はトゥメルの雄姿を注視する。

「西域にトゥメル歩兵軍ありと、ロクサーヌ中に知らしめようではないか！ 我らは侵略者には負けぬ！ 虚構で塗り固めた王都の軍勢など我らの敵ではない！」

喚声か沸き起こる。

「さあ、出撃だ！」

トゥメルそのもののような無骨な鉄槍を掲げると、彼の率いる歩兵軍は前進を開始した。

ロクサーヌの長槍隊と、西域第二陣の戦いはトゥメルの予想したとおり、西域第二陣の方が有利であった。連戦による疲れと装備を交換する間もなく戦わされる物質的な欠乏。バツセールらが、なんとか戦線を維持しているものの、明らかに圧しているのは西域側だった。

指揮官を討たれた混成隊は、ポーランド指揮の下に後方に下げ再編成をしている途中。戦力としては、この戦中に間に合うかどうか微妙なところであった。

じりじりと下がる長槍隊を追うように、第二陣は圧されていた戦線を押し戻す。

長槍隊を助ける為に出撃を命じた長剣隊は、イアーソン率いる騎馬隊の絶え間ない後方へ回ろうとする動きに翻弄されて、なかなか長槍隊を援護に行くことができない。

「いいぞ。このまま、敵をひきつけておけば、勝利の女神は我らに嫌でも媚を売るだろう！」

イアーソンの軽口に、彼に従う騎士が笑う。

「前方敵騎兵！」

焦りの含まれたその報告に、長剣隊を翻弄していたイアーソンは忌々しげに舌打ちする。

やはり簡単には勝たせてくれない。

そんな思いを胸に敵の騎馬隊を見たとき、彼の目に飛び込んできたのは一流の紋章旗だった。

「……おのれ、そこまで我らを愚弄するか」

先代ネアス・ノイスターの“緑水の円環”だった。それを掲げるのは、年端も行かない少女。

「子供の遊びではないのだ！ 続けエ」

長剣を引き抜くと、騎馬隊と雌雄を決すべく方向を変える。

西域の地方は良質な馬を産出することで、ロクサー又中に知られていた。馬体の大きさ、その毛並みの美しさは特に際立っていた。

一回り馬体が違えば、その分騎手は上から攻撃が出来る。それがどれほど優位に働くか、イアーソンは知り尽くしていた。

数では劣るが、ロクサー又側からしたら巨馬の類が一塊になって突進してくる。その恐怖は、いかに勇敢な騎馬隊といえども逃れられるものではない。

ロクサー又騎兵の鼻先を掠めるように走り去ると、方向を変えて再び向ってくる。戦々恐々としている騎馬隊に向って、シュセが言い放った。

「ここで敵に向わない者は、わたくしの兵士ではありません！」

宣言すると単騎、敵の騎馬兵に向って駒を進める。

それを見て焦ったのは彼女に従う騎兵達だ。指揮官の重荷を背負った、自分達より遙かに年下の少女が勇敢に敵に向っていく姿を目にしては、勇気を奮い起こすしかない。

丁度そのとき方向を変えたイアーソンの別働隊がシュセに狙いを定めた。

「シュセ様を救えエ！」

その声と共に猛然と、巨馬の騎馬隊に突撃をかける。

騎馬隊同士の激突が始まった。

イアーソンの別働隊に捕まっていた長剣隊は、シュセ率いる騎馬隊が敵を引き付けている間に、長槍隊の援護に向った。

西域の第二陣に徐々に圧されて後退する長剣隊の丁度側方に到着すると、騎馬隊に押し込められていた鬱憤を晴らすかのように、激烈に敵に襲い掛かった。

浮き足立った第二陣の様子を見て、今まで押し込められていた長槍隊も息を吹き返す。

「長剣隊に遅れを取るなっ！」

バツセールの指揮の下、猛然と反撃に転じたのだ。

第二陣は、長剣隊と長槍隊の攻撃に浮き足立つ。長剣隊の猛攻が、長槍隊の正確無比な突進が襲い掛かってくる。

だがそれでも、戦列をなんとか維持できていたのは個々人の質という点がやはり大きい。第一陣の雑兵を交えた混成隊とは違い、この第二陣は貴族を中心とした軍勢だった。家の誇りと戦への名誉を刻み込まれている貴族達は、第一陣に比べて粘り強く戦った。

だがそれも、ロクサー又勢の猛攻の前には決壊寸前。打ち倒され数を減らしていく仲間と、迫り来る敵の勢いに思わず浮き足立つ。

西域の第二陣が崩れかかるかと思えたそのときに、流れ落ちる瀑布の勢いをもって戦線に加わったのはトゥメル率いる歩兵軍。

先頭に立つトゥメルは縦横に鉄槍を振るい、ロクサー又の長剣隊を圧倒する。それに続く兵士達も天にも届くほどに士気が高い。突き刺し、叩き伏せ、屍を踏み越えて猛然とトゥメルに続く。まるで一個の生き物のようになつた歩兵軍は、長剣隊を蹴散らしながら、前進する。

「ウインネ！ 第二陣の援護に向え！」

馬上で鉄槍を振るいながら、トゥメルは指示を下す。

未だ若いウインネに、一部隊を任せて崩した長槍隊の側面を突かせる。と同時に、歩兵軍の本隊は崩れた長剣隊の追撃に移る。

「進めエ！」

貫いた兵士の体を、槍で貫いたまま、片手で持ち上げると投げ飛ばす。

戦局の天秤は一気にトゥメル側へ傾いた。

騎馬隊同士の激突をなんとか切り抜けて、シュセは中央の戦局を確かめようとするが、イアーソン率いる西域の騎馬隊は、執拗に彼女を狙い反転しては突撃を仕掛けてくる。

騎馬というものは、走って突撃して初めてその真価を発揮する兵種である。長槍隊ががちりと、陣地を守るのに適しているように、騎馬は走ってこそその真価を発揮するのだ。

ゆえに、立ち止まってのんびりと戦況を眺めてなどいられない。相手が突撃を仕掛けてくるなら、応じるにしても逃げるにしても、こちらも移動しながらというのが鉄則となる。

馬首を巡らして、再び敵騎馬隊に向き合つと駒のわき腹を軽く蹴ってやる。

「切り抜けて後、敵本隊の背後に回りこむ！」
すなわち、次で敵の騎馬隊を仕留めよと、彼女は命じたのだ。

このまま騎馬隊に関わりあっていては、長槍隊と長剣隊が敵の餌食となってしまう。

武器を握り締めることで、彼女の騎兵は無言の返事とする。

「前進！」

シュセに率いられた騎馬隊が土煙をあげながら、猛然と駆け出した。

正面の敵を追撃しながら、トゥメルは高揚感に包まれていた。自身の策が当たった快感に身を震わせ、無限に沸いてくるような力に

任せて鉄槍を振るう。眼下に見下ろす敵の長剣隊を蹴散らし、進軍を速度を緩めないまま戦況を見渡した。

「第二陣のほうも持ち直したな？」

敵の長剣隊と長槍隊の挟み撃ちにあい、壊乱していた第二陣もウインネの援護もあつて指揮系統を回復できたようだった。

敵はといえば、第二陣の正面である敵長槍隊は既に、陸に上げられた魚のように力がない。歩兵軍の正面に当たる長剣隊は、ほぼ敗走に移っている。

残るは敵の騎馬部隊だが、それも時間の問題でしかない。この時点で、陣形を完成させていないのならばもう、包囲殲滅は不可能だろう。

通信手段が未熟なこの時代においては、独断専行はむしろ奨励されるべきものだ。

イアーソンはよく敵をひきつけてくれた。

後は第二陣と呼吸を合わせて、長槍隊を押し潰せば良い。

勝ったな。

その感慨を胸に、再びトウメルは鉄槍を振るう。

思考を重ねる間にさえ、彼の前に立ちふさがった敵の兵士を3人までも突き殺している。

「一気に行くぞ！ 突撃用意！」

長剣隊を本来なら預かっているイェンルは、砦攻略の際に足に受けた傷が元で、ギリングの平原における戦いでは長剣隊から離れていた。

彼がいるのは、弓隊。長剣隊から、かなり離れた位置に布陣している。

長剣隊を後方から支援する為の部隊に配属されていた。

「くそ、このままでは……」

狙いを定める為に、小高い起伏の上から戦況を見渡したイエンスルは、暗澹たる面持ちで呟いた。敵の猛攻を受けて、長剣隊が潰走を始めている。シュセ率いる騎馬隊は敵の、騎馬隊をなんとか切り崩すことに成功したようだったが、如何せん遠すぎる。

敵を包囲の網の中に誘い込み、殲滅するというのが戦術の基本だったが、それに従うなら包囲の輪は今まさに食い破られようとしている。

だが既に敵味方は混戦状態に陥っている。援護の為の弓兵も、これでは射撃すらできない。

「なにか、ないかなにか……？」

状況を覆せる一手。せめて時間を稼げぐための方策を。

見れば自身の率いていた長剣隊の部下までも、ほうほうのていで逃げ出して、弓隊の前まで来ると荒い息を整えている有様だった。

このままでは、敗北は必至。せめて逃げてきた長剣隊の面々を再び戦いに向わせねばならない。それがいかに困難かということ、歴戦の経験から彼は知っていた。

だが、やらねばならない。

痛む足を引きずりながら、彼は逃げてくる長剣隊の前に立ちふさがった。

通り過ぎようとする兵士の首根っこを捕まえるとその場に、引きずり倒す。

「な、なにを」

「座れ！」

有無を言わせぬ一喝に、兵士は周囲とイエンスルを交互に見る。それを何度か繰り返し、20人ほども集まったときだろうか。初めてイエンスルは口を開いた。

「まったく、貴様らなんて様だ」

言葉は鞭となって、逃げてきた兵士を容赦なく打ち据える。

「見る、長槍隊は未だ陣形を保ったまま戦場にいる。貴様らは仲間を見捨てて逃げ出した臆病者だ」

指差す方向には、苦戦を強いられる長槍隊の姿。

うな垂れる兵士達に、イエニルは更に言葉を重ねた。

「貴様らに恥というものが少しでも残っているなら、仲間を思う気持ちが少しでもあるのなら、今から俺について来い。班長連中を探して隊を組め」

告げられる言葉は、次第に兵士達の胸を打つ。

「もう一度、戦場へ戻るのだ！」

イエニルにしてみてもこれは、賭けだった。恐怖に打ちのめされて逃げ出した兵士に、どうやってそれを克服させるか。

「もし、俺が一度でも弱気を見せて逃げるような真似をしたなら、貴様らの持つているその剣で俺を刺すがいい！」

言い放つとイエニルは痛む足を引きずりながら、敵に向かって進む。

「……仲間を見捨てるな！」

「イエニル隊長に続け！」

顔を見合わせて頷いた兵士達は、口々に叫ぶ。

彼らの顔に浮かぶのは、戦場から背を向けた逃亡者の顔ではなく、仲間を救う為に命を張る勇者の表情だった。

「長剣隊、前進！」

統制と秩序を取り戻した長剣隊は、イエニルの指揮下再びトゥメル歩兵軍と対峙した。

イエアソン率いる敵の騎馬隊を辛くも打ち破ったシュセは、長槍隊と長剣隊の様子に目を止める。先ほどまで壊乱状態だった長剣隊が持ち直しているのを確認すると、騎馬隊をトゥメル歩兵軍の背後へと向けた。

逃したはずの包囲殲滅の為の好機、再びめぐってきたそれを、今

度こそは逃がさない為、高々とノイスターの旗を掲げる。

「全軍、敵後方を扼す！ 時が勝負です。全速前進！！」

先陣を切る彼女に、騎馬隊が続いて走り出す。

崩れていたはずの敵軍の突然の、猛反撃にトゥメルは戸惑いつつも自軍を鼓舞する。

「最後の足掻きだ、踏み潰せエ！」

命ずる声に不安はない。兵士達の全幅の信頼を得て、トゥメル歩兵軍は長剣隊を踏み潰そうと槍を構えて前進する。馬上から鉄槍を振るうトゥメルも、先頭を切つて長剣隊を駆逐するが、先ほどとは敵の粘りが違った。

盾でしっかりと身体を守りながら、歩兵軍の猛攻を受け止め、僅かな隙に乗じて反撃に移る。負けるとは思わないが、互角までの勝負に持ち込まれたことにトゥメルは驚愕していた。

何が彼らを蘇らせたのか。

先ほどは圧力に負けて敗走したはずの、敵軍が何を抛り所に再び目の前に立ち上がったのか。僅かな隙に、馬に突き刺さる長剣。

「くっ」

倒れる馬から、飛び退くと、歩兵となって先陣を駆ける。

吹き飛ぶ敵兵が、だが再び向ってくる。命果てるまで向ってくるのではないかと錯覚するほどの敵の士気の高さに、トゥメル歩兵軍の前進はとまらざるを得なかった。

トゥメルは気づいていなかったが、長剣隊の後方に待機していた弓隊までもが、弓を捨て、武器を剣に持ち替えて長剣隊の戦線を支えていたのだ。

倒されるそばから新手に、変わるような錯覚の中でトゥメルは戦っていた。

接近しすぎた間合いから、徐々に乱戦へ移ろうとしたそのとき。
「後ろから敵騎兵！」

最も避けねばならない事態が迫ってきたことをトゥメルは悟った。
猛然たる土煙を上げて迫る騎馬隊、先頭に立つのは白亜の鎧と、
ノイスターの紋章旗を掲げた小柄な騎兵。

引くか、攻めるか、一瞬のトゥメルの迷いは全軍に伝播する。今
まであれほど攻勢に終始していた歩兵軍が俄かに浮き足立った。

「シユセ様が来たぞ！」

敵軍から聞こえる希望の声は、トゥメルにしてみれば絶望の宣告
に他ならない。

長剣隊のあれほどの粘りがあれば、攻めたとて、包囲を突破する
ことは難しい。いったん包囲されてしまえば、騎兵を失っている西
域軍は、逃げ場所がない。

ならば。

「全軍、転進！ 第二陣は敵騎馬兵に向え！」

ならば、包囲される前に後退するしかない！

苦すぎる現実を飲み下し、トゥメルは決断を下す。

「歩兵軍は前面の敵を、防ぎつつ後退！」

自身殿しんがりとなつて、徐々に引き始める西域軍。それに襲い掛かるの
は、今まで防戦一方だった長剣隊と長槍隊だった。前面の第二陣が
騎馬隊に向つたおかげで、長槍隊の正面はがら空きとなり、今まで
第二陣が引き受けていた圧力を、歩兵軍が一手に引き受け得ねばな
らなくなつた。

猛火のように、激しく攻め立てる長剣隊に、長槍のハリネズミの
陣形のまま突撃してくる長槍隊。それらに侵蝕されて瞬く間に歩兵
軍は数を減らしていく。

「まだだ。まだ終わっていないぞ！」

まだ西域軍には、再編成にまわしているポーランド以下の混成隊
が残っている。あの兵力を、ポーランドならこの期に投入してくる
はずだ。

敵の騎馬隊とは別方向から見える土煙。

「来てくれたかつ！」

トウメルの言葉に、まだ勝負は見えていないのだと周囲の兵士も気を取り戻す。

「若様っ！」

むかしと変わらない呼び方で、トウメルを呼ぶ老将の声。

騎馬をそのままに、トウメルの側まで分け入ってくると、即座に馬を下りて、手綱をトウメルに渡す。

「お逃げください、わが身の失態でした」

涙すら浮かべて彼は詫びる。

「敵軍の掲げる旗を見た途端、雑兵どもは反旗を翻し……」

それはこの戦の帰趨が誰の目にも明らかになった瞬間だった。

奥歯を噛み締め、襲い来る絶望を跳ね除けようとするトウメル。

「イアーソンと合流し、僅かな騎兵だけを連れて参った次第」

迫り来る敵軍を見据えながら、ポーランドは背後に控えるイアーソンに合図する。

「俺は、この軍の指揮官だ。西方候主たる俺が、どうして兵士達を置いていけようかつ！」

その予想していた反応に、ポーランドは素早く対処する。

「御免」

叫ぶやいなや、トウメルの鎧の隙間に、鎮静効果のある毒物を塗った短剣を突き入れる。

「ポーランド!?」

何が起きたのか分からない、トウメルの視界は徐々に暗闇に落ちていった。

「イアーソン！ 閣下をベルガデイにお運びしろ！」

ポーランドの言葉に従い、トウメルの巨軀をポーランドの馬に乗せるとその手綱を握る。

「ウインネ！ 貴様は第二陣とともに敵騎馬隊を攻撃、折を見てベルガデイまで下がれ！」

「では、ポーランド様は？」

老将は静かに笑うと、前面の敵に視線を据えた。

「行け！」

敵しい声で言い放つ。

彼らが出発したのを確かめると、周囲の兵士に頭を下げる。

「皆の者すまぬが、トゥメル歩兵軍の勇姿、この老骨の前で今一度
発揮してくれい！」

言うや、槍を取って、敵を打ち据える。

敵の目をひきつけねばならない。

例え命を駆けることになるうとも、他に老将がトゥメルにしてや
れることは残っていないかった。

戦いの勝敗は決した。

ポーランド以下、西域で最強を誇ったトゥメル歩兵軍はその日壊滅し、西域の主を決める戦いは、ロクサーヌ側の勝利で幕を閉じる。
西方候主トウメルは、ウインネ、イアーソンら少数の者に守られてベルガディまで落ち延びることに成功するが、一方戦場に残った歩兵軍とポーランドは最後まで降伏を拒み、壮絶なる戦死を遂げた。

西域の主20（後書き）

読了時間が約1000分を越える作品になってしまいました。

鬱。

老兵は死なず、と申しますが・・・死んでこそ浮かぶ瀬もあれ、です。

ギリングの平原での戦いに勝利したシュセは、負傷者と遺体の処置を皆に残してきた雑兵に命じると、すぐさま軍をベルガデイへ向けた。ロクサーヌから引き連れてきた兵士は、激戦に次ぐ激戦で、その数を1500を割るまでに減らしていたが、負傷者を雑兵に任せると、トウメルを追うべく追撃に移った。

東都ガドリアを除き、都市として、周辺の村や町の中心的役割を担うような規模の街には、城壁がぐるりと街を囲んでいることが普通である。

治安の維持と言う観点の他に、害獣からの身を守るため、あるいは周囲の村へ威圧感を与えるため、そのほか様々な必要性から城壁が造られていた。

身の丈を遙かに越える鉄製の城門。仰ぎ見たそれは記憶にあるものより、少し小さくなったような気がした。

それが自身の身長が伸びた為なのだと気がついた時、シュセはベルガデイを攻める気持ちで新たにした。

「取り戻しますよ」

小さく呟いた言葉は、誰の耳にも入らずに消えていった。

「敵将を逃がしたのは、残念でしたな」

傍らのバツセルがシュセに問いかける。

「最上の結果ばかりは求められないでしょう。ベルガデイを首尾よく取り返したなら、問題はありません」

石で積み上げられた城壁を見上げれば、それを守る兵士の姿も垣間見える。

「一気に攻め落としますか？」

問いかけるバツセルの言葉に、彼女は首を振った。

「降伏の使者を立てます」

血で汚れた白亜の外套を翻すと、シュセは陣営地に戻っていった。

「いたた……まったくひどいめにあつたもんだ」

傷病者達に宛がわれているカーティスの村の一室。ベットから起き上がると、クシユレアは全身に走る痛みを顔をゆがめた。

「減らず口がたたけりゃ、もう大丈夫そうだね」

横で体を起こすのは、同じくグリユーエンの部隊に救われたエレガだった。

「ひどい顔だね、お互い」

ひとしきり笑いあう。いつ以来だろうか、身も心もこんなに軽くなつたのは。

「ねえ、エレガ」

「なんだい？」

「ひとつ頼まれてくれるかい？」

「裏子として？」

「いや、友達としてさ」

苦笑に近い笑みを残して、クシユレアはエレガに頼みを告げる。透き通ってしまったその表情に、エレガは不吉なものを感じる。

「……お別れか」

「頼むよ」

エレガは、強い瞳でクシユレアを見返すと、決意をあらわにして頷いた。

ばたん、と扉が開く音がして、二人は同時に扉のほうを見た。

「あ、あ……お、お姉さま！」

じんわりと目じりに涙を浮かべたカーナの姿。持っていた食器を

取り落とし、それすらもまったく意識に止めずに、彼女はクシユレアに抱きついた。

「よしよし、いい子だ」

「心配しんだですう……ほんとに、本当に……もう目を覚まさないのじゃないかって」

嗚咽の間に漏れる言葉に、クシユレアは肩をすくめる。エレガもそれを見て、苦笑してしまう。

「あんまり強く抱きついたら傷に障るぞ」

エレガが見かねて苦言を呈するまで、カーナはクシユレアに抱きついて泣きじゃくった。

「カーナ。さつそくで悪いんだけど、今の状況。教えてくれるかい？」

やっと落ち着いたカーナに、クシユレアは真剣な目でたずねる。

「はいですう」

クシユレア達を襲った山賊の末路。グリユーエンらロクサーヌ側の兵士の、親切的対応。戦争の行方。

「ありがとうよ、カーナ。やっぱりあんたは、いい子だ」

優しくカーナの髪をなでるクシユレアに、最初不思議そうにしていたカーナだったが、あまりされたことのない優しさに、頬をほころばせていた。

「では、村の人たちにお礼もしてくるのですう。お姉さま方は安静にしておいてくださいです」

ペこりと、お辞儀をすると彼女は部屋を出て行く。

「……行くのかい？」

「ああ、けじめってやつをつけなきゃね」

その夜、クシユレアはカーナへの手紙を残してカーティスの村から消えた。

喧騒が近づいてくる、同時に開かれる扉。

そこには今にも泣き出しそうな力チューシヤの姿があった。

「ナルニア様！ トウメル様が、トウメル様が！」

指差す方向に、彼がいるのだろう。ぼんやりと考えた頭を置き去りに、自然と彼女の足は歩み始めていた。

鎧を着たトウメルを応急的な担架に乗せて、屈強な男たちが運ぶ。それをみたトウメルの屋敷の使用人たちは、この世の終わりが着たかのような悲鳴をあげ、泣き出すもの、絶望に頭を抱えるもの、放心するものなど、さまざまであった。

「気が利かぬ、使用人どもだ！」

トウメルをベルガデイに入れるまではまとまっていたイアーソン以下の西域軍の第二陣だったが、ベルガデイに入ってしまった途端、散り散りになってしまった。自身の屋敷に戻る者がいれば、何をおいてもベルガデイから離れようとする者もいる。

わずかにイアーソン以下の心ある者たちで、気を失ったトウメルを屋敷まで運んできたのだ。

「誰かいないのか!？」

戦場から帰ったばかりで気が立っているイアーソンらと、トウメルのあまりに無残な姿に、泣き崩れあるいは、その体にすがりつく使用人たちが、押し合いをしていた。

指示を出すべき家宰すらも、呆然とトウメルの姿を見ていた。

「何を騒いでいるのですか！」

凜とした声に、その場にいた全員がナルニアの方を見た。ナルニア自身も自分がなぜこんな大声をあげたのかわからないままに、胸の奥底からわきあがる感情に任せて更に、声をあげる。

「今すべきことは、トウメル様をお屋敷の中にお運びすること！」

悲嘆にくれている場合ではない！ 家宰殿、使える部屋は？」

名前を呼ばれて初めて気がついたかのように、家宰は背筋を伸ばす。

「寝室にお運びくださいませ」

「最低限運び入れるのは兵士の方々にお願いするにしても、医師を呼んでください。それなら運んでくださった兵士の方々にお食事を！ さあ、皆さん」

ナルニアの声に励まされて、その場の混乱は瞬く間に収束した。

「……ナルニア様、いえ、奥方様……申し訳もありません」

こまごまとした差配を終えた家宰は深くナルニアに首を垂れた。

「あ、いえ……差し出がましいことを」

うつむくナルニアに、別の方向から声がかかる。

「あなたが、ナルニア殿だろうか？」

振り返ったナルニアが見上げるそこには、戦場からトウメルの身を守って走りぬいてきたイアーソンの姿があった。

鎧に浴びた返り血はすでに乾燥して黒く変色し、出るときには磨きあげられていたであろう鎧の各部署には隠しよのない傷跡がある。

「はい」

「……真に、申し訳なかった」

こちらも深く頭を下げるイアーソンに、ナルニアは驚いた。

「われらの力が足りないばかりに、トウメルさまは敗れてしまった。他の者になりかわり、陳謝させてほしい」

「そんな……」

「閣下をはじめ、御身は必ず我等が守り通す。どうか、ご安心してすごされよ」

最低限の私兵をトウメルの邸宅の護衛に残すと、イアーソンは馬を駆って城門へ走った。すぐにでもロクサーヌの軍勢が攻めてくる。騎馬隊で一戦交えた経験から、イアーソンは敵の指揮官である少女が、その見た目からは想像もできないほど強かであることを疑わなかった。

城門前に白旗を持った使者が一騎、朗々たる口上を述べ、開門を要求する。

その様子をイアーソンは、苦渋を伴った表情で見下ろした。彼自身の予想が当たり、あまりにも早いロクサーヌ側の進撃。予想が当たったとはいえ、それに対してなんら有効な手を打つことができなかった自分自身に腹が立つ。

降伏の使者は受けざるを得ない。

あるいは受け入れた振りを。

いまだトウメルは意識を回復せず、イアーソンの持つ兵力はわずかに200あまり。ほかの第二陣で戦った将兵を呼び集めるにしても、時間が必要だった。

せめて4日。

彼らの精神的支柱であるべきトウメルが意識を取り戻し、残った将兵を糾合するまで最悪その程度は必要になってくるだろう。

西域の主要都市であるベルガディを捨てて西部に逃げるにしろ、あるいはこの都市で籠城するにしろ、それはトウメルが決めることだ。イアーソンは兵たちの指揮はできても、彼らを導く展望をもつてはいなかった。

「我らは、まだ負けてなどいない」

肩に押し掛かりそうになる重苦しい敗北感。それを部下の前で見せてしまえば、もはや彼らに戦うことはできはしない。

ゆえに、イアーソンは忙しさの中に、敗北感を投げ捨てようとしていた。

ギリングの平原での戦いに敗れたとはいえ、未だロクサーヌ側は西域の半分を手に入れたに過ぎない。

遠く城壁の外に、紋章旗を靡かせて生前と居並ぶロクサーヌの軍

勢をにらみつけながら、イアーソンは使者と会談するために、城壁を降りていった。

城壁に隣接するようにして造られた兵士の駐屯所。普段は見回りの兵士が詰めているだけの、その場所は簡単な応接室と、夜間見回りの兵士が寝起きするための寝室程度しかない。

使者をそこに通すと、わざとイアーソンは時間をかけて待たせた。ゆっくりと身支度を整え、たつぷりと焦燥感を味あわせるためだ。「お待たせした」

イアーソン配下の屈強な兵士に取り囲まれていた使者に、一言断つて室内へ入っていく。

ぴかぴかに磨き上げられた鎧をまとい、新品の服に着替え、顔を洗ったイアーソンは、使者の顔に安堵の表情を見て取って、内心ほくそ笑んだ。

戦の使者などというものは、指揮官から無理やり押し付けられるか、もしくは功名心から名乗り出るかの二通りしかない。そしてこの使者は後者だとイアーソンは踏んだ。

口先ひとつで戦を避け、都市をひとつ手に入れるのだ。あるいはこの戦で比類ない武勲といえるのではないか。野心的に光る使者の瞳をちらりと、確認するとイアーソンは使者の対面に座った。

「この度は軍使を受け入れてくれたこと、まずは将であるシユセ様に代わり礼を言いたい」

堅苦しい言葉遣いながら、無闇に威張り散らしたりはせず使者は口上を述べる。

無言でそれに頷くとイアーソンは続きを促す。

「このたびの戦のこと、双方にとってまことに不幸であった」「確かに」

目を瞑り、思案の格好をしてみせるイアーソンに使者は気持ちが悪態に現れたように、身を乗り出す。

「だが、その不幸も終わらせるときが来たとこちらは考えている」

「つまり？」

「降伏なされよ。決してシュセ様は無慈悲なお方ではありません。ほう、とイアーソンは使者の表情を読んで、表情に出さず驚いた。身を乗り出した使者の顔には、いっぺんの疑念もなくシュセと言う指揮官への信頼が伺える。」

自身の真情を吐露するというのが他人の心を揺さぶるといのは、言わずと知れたことだ。その点で言えばこの使者は、あるいはこの先何度かの使者の役割とこなせば、きつと一つや二つ砦を、その口先で落とすのかもしれない。

そこまで考えてイアーソンは、埒もないと表情に出さずに苦笑した。

「人の不幸は人の手で終わらせる。それが出来れば素晴らしいことだろう……個人的には私も賛成だ」

使者の顔には、暗闇で光明を探り当てたような喜悦が浮かぶ。

「……時間がほしい」

苦渋に満ちたと言う表情を作って、イアーソンは言った。

「いかほどでしょうか？」

「察してください……今は、今はまだできぬ」

眉間に深い皺を刻み、一つ一つの言葉を搾り出すように口に出す。

「それは、私も子供の使いではない！ そのままでは呑めぬ」

「……三日、いただきたい」

「それは、待てぬ！ せめて1日。でなくば、いかに寛大なシュセ様とて」

どこまで相手の譲歩を引き出せるか、相手の懐を探りながら、イアーソンは演技を続ける。背中には冷や汗をかきながら、それを誤魔化すように苦渋の表情を作り続ける。

「ならば、我らはもう一戦するしかあるまい」

席を立とうとするイアーソンに、慌てたのは使者のほうだ。先ほどまではうまくいっていたはずの交渉に、焦りを隠せず呼び止める。

「お待ちを！ ではせめて二日。これ以上は待てません」

「わかりました」

安堵する使者にイアーソンは内心の喜びを隠して立ち上がる。

平和裏に交渉が終わろうとしたとき、応接室の扉が乱暴に開かれる。

「イアーソン貴様っ！」

怒鳴り込んできたのは、先の戦いでもしぶとく生き残っていたティターをはじめとする中小の貴族たちだった。

「我らに黙って敵と交渉を始めるとは、どういうことだ!？」

敗北の恐怖に追われ命からがら逃げ帰った彼らの顔にあるのは、恐怖から逃げ出したいと願う心情だけだった。

「裏切るつもりだな!？」

使者が目の前にいるにもかかわらず、イアーソンに詰め寄る彼らは、イアーソンを押し分けると、使者と直接交渉しようとする。

「ティター・スグメルはロクサーヌの味方をしてもらいたいと思ってるぞ」

その宣言に目をむいたのは、今まで必死に時間を稼ごうとしていたイアーソンだった。

「何をっ!？」

「ふん、元はと言えば、貴様らのせいであろうが……貴様のような裏切り者が出るようではもう戦えぬ!」

恥も外聞もない。全てはイアーソンのせいであるとしたティターの宣言に、貴族たちが続く。

「ユネツク殿も同じ意見であろう!？」

ティターに呼び上げられるたび、貴族たちは肯首する。

「そら、見たことか! イアーソン、貴様に交渉役たる資格はない。今すぐこの場から消えうせよ」

「貴様らア……」

目に憎悪の炎を宿しながら、イアーソンはそれでも自重した。

事態がこうなってしまうのは、即座にロクサーヌの軍勢が流れ込んでくることもありうる。何より優先しなければならぬのは、ト

ウメルの身柄だった。

心を殺し、イアーソンは部屋を後にする。

「いくぞ！ トウメル様を救わねば！」

自身率いてきた手勢を率いるとイアーソンは、城壁を守っていた兵士を率いてトウメルの屋敷へ向かった。

「トウメル様……」

鎧をはずされ寝台で眠るトウメルに、ナルニアは寄り添っていた。あんなに怖かったはずの無骨で大きな手のひらを握り締めたいと思ってしまうのは、なぜなのだろう。トウメルが傷つき倒れた姿を見て、あんなにも胸が締め付けられたのは、いったいなぜ。

心の整理が出来ないまま、ナルニアはため息をつくことしかできない。

トウメルが倒れた後のベルガディなど、今の彼女には考えることすらできなかつた。

思考が麻痺して未来など考えられないと言っている。どうしてこんなに風になってしまったのか、それだけを彼女は考えていた。

「う……」

小さなうめき声に、自分の考えに浸っていた彼女はわれに返る。

「トウメル様!？」

思わずかけた声に反応して、トウメルの手を握っていた彼女の手が握り返される。

「ナルニア……？ 俺は死んだのか？」

「いいえ、いいえ。トウメル様」

湧き上がった安堵は涙となって彼女の頬を流れ落ちる。

「ご無事、です。生きてらっしゃいます」

泣き崩れて彼の分厚い胸板に顔をうずめるナルニア。彼女の髪をトウメルは無骨な手で優しくなでた。

「……なら、泣くのはよせ。そなたは、笑っているほうが、良い」顔を上げると、涙ながらにナルニアは微笑む。

「はい、お帰りなさいませ……トウメル様」

頷くトウメルの胸で、もう一度ナルニアは声を殺して泣いた。

彼女を傷つけないように優しく抱くと、ぼんやりした頭でトウメルは思った。

ああ、俺は負けたのだと。

だが不思議に不快感はない。まるで憑物が落ちたかのように、胸を焼く焦燥が消えている。

あるいはやっと、この手の中に、かけがえのないものが収まったからなのか。

幼少のころから満たされることのなかったこの身に、あるいはやつと……。

「トウメル様!!」

ナルニアの押し殺した慟哭と、トウメルの考えを引き裂いたのは、イアーソンの声だった。扉を乱暴にあけると、カチューシャを引きずりながら、声を張り上げる。

「寝台を騒がせ申し訳ありません。ですが、お逃げください!!」

優しくナルニアの肩に置かれていたトウメルの手が、どかされる。

「敵か?」

鋭い視線はナルニアが知らない戦場を駆ける戦士のもの。

「御意、貴族らがロクサーヌに降伏。城壁を開けようとしています。このままでは、陥落は必死……なれば!」

落ち延びて再起を、と言おうとしたイアーソンの声をさえぎったのは、外から聞こえた喚声だった。

「敵襲だ! 貴族どもが裏切ったー!!」

「遅かったか!」

かみ締める奥歯の間から、ぎりりと歯軋りの音が聞こえる。

「ここは、私が防ぎます。ウインネらを護衛につけますゆえ、直ちに落ち延びてください!」

言うや否やトウメルの返事を聞かないうちにイアーソンは、部屋を飛び出した。

「ウインネ! いるか!？」

「応よ」

庭先で押し寄せる敵勢をなぎ倒していたウインネは、イアーソンの声に振り返った。並ぶと同時に、周囲に聞こえないほどの声で、会話する。

「トウメル様を、頼む」

「貴様はっ!？」

「誰かが、ここを防がねばならん。だろう?」

一瞬絶句したウインネは、だが即座に理解し、別れの言葉を口にした。

「武運を!」

「お互いに」

振り返らず、館に戻るウインネ。

イアーソンは、群がる“敵”に向かって吼えた。

「さあ、薄汚い裏切り者どもよ。西域を担ってきた武がどれほどのものか、よく目に焼き付けるが良い!」

「ナルニア」

イアーソンが出て行った部屋で、ナルニアはトウメルの優しい声に呼ばれた。

「はい」

「すまぬ……お前を守れなかもしれぬ」

それはいままで巖のように強くあったトウメルの鎧が剥がれ落ち

た後の言葉。

ナルニアを心の底から思う、一人の少年のような眼差しに、ナルニアは頬を赤くした。

「それでも、俺と一緒に来てくれるか？」

優しい安堵の気持ちに満たされて、ナルニアはトウムルに身を任せ、そんな彼女をトウムルはしっかりと抱きしめる。

「カチューシャ」

主二人の姿を見守っていた彼女は、トウムルに呼ばれてバネ仕掛けの人形のように背を伸ばす。

「はい！」

「すまぬが、上着を。人を寄越して鎧を持ってこさせてくれ、それから家宰を」

言われるままに走り出す彼女を尻目に、くすりとナルニアが笑った。

それから家宰が来るまでの間、トウムルとナルニアはお互いのぬくもりを惜しむかのように抱き合っていた。

再びトウムルが鎧を身に着けると、ウインネが生き残った手勢を率いて彼の前に並んだのは、半刻ほどしてからだった。

「まもなく、この館は落ちるであろう」

イアーソンらが文字通り命を盾として防ぎ止めてはいるが、貴族たちもまた必死だ。

「ウインネ」

「はっ！」

分厚い鉄の鎧をまとった青年は、トウムルの前にひざまずく。「西部まで脱出する。先導せよ」

「御意！」

猛牛のような勢いで立ち上がると、手勢を率いて走り出す。「家宰」

「若様……」

幼きころからトウムルのことを見守ってきた家宰は、目じりに涙

を浮かべて無言のまま頷いた。

これが今生の別れとなるであろうことを理解すればこそ、彼らの間に言葉はなかった。

「カチューシヤを伴いください。ナルニア様のお世話をするものが一人は必要でございましょう」

「すまぬ……俺が消えた後は、降伏してくれ」

「はい」

それがはかない希望だと、どちらもわかってはいる。

ただお互いに他にかけられる言葉がなかった。

「火だ、敵が火を放ったぞ！」

一向に抵抗の弱くならないトウメルの館に業を煮やしたのか、貴族たちは火矢を放ってトウメル毎焼き殺そうとしていた。

「さ、若様お早く！」

家宰の声に見送られて、動けるものはトウメルに従い、館の裏手から一気に貴族たちの包囲を突破する。走れない女達を馬に乗せ、男達は手に武器を持って血道を切り開く。

「恐れることはない！ 西方侯主トウメルは、貴様らの後ろにいるっ！」

その声に励まされ、槍を持ったことのない召使たちまでが、貴族達の兵士達に向かっていく。

「道を開けイ！」

群がる敵兵をトウメルの鉄槍が敵を葬り、屍の山を積み上げる。

「トウメルだっ！」

一突きで二人を串刺しにすると、振るい落とすついでに、横にいた兵士の頭を叩き潰す。

「トウメルがいるぞ！」

雷鳴のように鳴り響くトウメルの名に、多くのものはすくみあがり、包囲の輪を破って脱出に成功する。

遠く見える黒煙と、目の前に居並ぶ西域の貴族達に、シュセは嫌悪を押し殺し対峙していた。

「それで、あなた達に罪はないと、仰りたいのですね」

「我らは家族を人質にとられ、やむなくしたがっていたに過ぎず…決してロクサーヌ様に敵意を持っていたわけではありません」

「用件はわかりました。あなた方の立場については、わたくしから陛下に申し上げておきましょう」

「なにとぞ良しなに」

靴の裏をなめよと、言われればそうしかねない貴族達の態度に、シュセは顔をしかめるのをなんとかこらえた。

「会見は終了します」

言い置いて、跪く彼らの前からきびすを返すシュセ。

「見下げ果てたやつらですな」

「まったく、形勢が悪くなった途端寝返るとは」

彼女の周囲を固めるグリューエンやイェンルらの幕僚が口々に非難をする。

「速やかに兵をベルガデイへ進めます。グリューエン、紋章旗を先頭に掲げ、ベルガデイの主要部を占領なさい」

「ぎよ、御意」

彼らの言葉に耳を貸すことなく彼女は告げる。

「イェンル、貴族らを拘束なさい。必要以上に厳しくする必要はありませんが、逃げ出すことのないように厳重に」

「はっ！」

「民衆への被害を最小限に食い止めなさい。その為なら、敵の首魁であるトゥメル之首など取らずとも結構です」

そのシュセの判断に、彼女を囲む大人たちは全員頭を下げる。

「この戦いで、西域で流れる血は最後にしたいですね」

馬を引き寄せると、騎馬隊に指示を出す。

「西都ベルガデイにロクサーヌの旗を掲げなさい！」

彼女の差配のもと、ロクサーヌの軍勢は遠征の最後を締めくくる戦いに赴いた。

「ちつ……まったくこりゃ、なんて様だい」

燃え上がるトウメルの屋敷を眺め、クシユレアは舌打ちした。長いこと森林に身を潜め、やっとベルガデイにたどり着いたと思えば、はじめを取るべきナルニアの居場所がまたわからなくなってしまった。

周囲にはまだ敵か味方かわからない兵士達がうろついている。

こんなところは早く失せるに越したことはない。

「ん？」

ざわりと、騒ぎが起こっていた。

燃え盛るトウメルの屋敷から脱出してきたらしい一団が、兵士に囲まれている。

後は鬪り殺しになるだけの彼らを助けようと思ったのは、クシユレアの記憶に引っかかる顔があったからだ。

「確か、あれア……家宰だったよねえ」

敵味方定かではない中、半分焦げたような兵士達が、取り囲む兵士を相手に戦うのは、壮絶を通り越して凄惨ですらあった。

その包围を破ろうとする兵士の中に、見覚えのある家宰の姿。

あるいは、ナルニアの行方がわかるかもしれない、とクシユレアが考えたのは当然の帰結とすべきだっただろう。

手にした投擲剣の数を確かめると、狙いを定める。

だが如何せん数が違いすぎる。

「討ち取れえ！」

その声とともに、包囲している兵士達が一斉に襲い掛かる。

「このままじゃ……」

いくら度胸が据わっているといっても、彼女は無謀と勇気の違いを心得ていた。自分の力量ではこの数の差を逆転することなどできはしない。

手にした投擲剣をどうするか、考えあぐねている時にその声は聞こえた。

「化け物だ！」

悲鳴とともに、首を飛ばされる兵士。

片手で剣を振るう一人の武人が、包囲する兵士三人を相手に戦っているところだった。

「イアーソンだぞ！ 討ち取って名を上げろ！」

剣を持っていない方の手は黒く焼け焦げ、肩から頬にかけても火傷のあとがある。ほとんど死に掛けのその姿で、尚イアーソンは剣を振るう。

突き出した槍をたたき伏せ、相手の首筋を断ち切る。返す刀で、おびえる兵士の眼球に長剣を突き入れると、致命傷を負ったその兵士を突き飛ばして、さらに別の敵を求め。

「不死身だ！」

腰の抜けた兵士の悲鳴が、恐怖となって包囲をする兵士に伝播する。

手を出せない侍従達に襲い掛かる兵士を後ろから切り倒し、生きている足でその屍をけり倒す。

「ちっ」

焼け焦げた顔で判別がつかなかったが、それは以前トウメルの屋敷のときに、自身に言い寄ってきたことのある男だった。

「バカだね。どうしてあたしは男を見る目がないんだ」

舌打ち一つ。

隠れている物陰から一気に飛び出すと、手にした投擲剣を包囲をする兵士に向かってばら撒く。ひるんだ隙に、包囲の輪の中に入り

込むと、イアーソンの後ろに回る。

「加勢しますよ。お兄さん」

ちらりと、クシュレアを一瞥しただけでイアーソンは敵に向き直る。もはや煙に喉をやられて声を出せない彼は視線だけで感謝をすると、群がる敵に立ち向かっていった。

脇から襲い掛かるうとする兵士をクシュレアの投擲剣が貫き、蠟燭が最後の輝きを放つように戦うイアーソンを援護する。

「このっ！ クソアマア！」

突き出される槍が、クシュレアの背をえぐる。

「いつつたいじゃないかっ！」

その兵士の喉首を切り裂き、クシュレアはさらに向かってくる敵に投擲剣を投げつける。

イアーソンの体に槍が突き立ち、だがそれでも彼は歩みを止めない。柄を切り落として、突きかかってきた兵士を叩き斬る。

「ひっ……逃げろ、増援を呼ぶんだ！」

イアーソンの姿に恐れをなした敵が悲鳴を上げ、包囲は解けていった。

「引いた……？」

半ば呆然と膝を突くクシュレアの目の前で、ガシャンという音とともに、さきほどまで立っていたイアーソンが膝から崩れ落ちていった。

「ちよっと……」

駆け寄ったが、イアーソンは既に息絶えていた。

こみ上げる涙を振り払う。

痛みを振り払って、家宰の元へむかう。

「ナルニアは、ナルニアはどこへ行った!？」

クシュレアの姿を認めると、家宰は老人特有の柔和な笑みでゆっくりと頷いた。

「トウメル様と一緒に脱出を……心配はせずともよい」

見れば彼の口元からは血の一筋が流れ落ち、手で押さえた腹部か

らは血が滲み出していた。

「どこへ……」

「西部に」

頷くとクシュレアは振り返らず駆け出した。

一度は包囲を突破したトウムエル達だったが、貴族達の執拗な追撃に徐々に数を減らしていった。シュセは意図してのことではなかったが、ロクサーヌの陣営に行つたまま戻らない貴族達の不在により、兵士を束ねるものがいなくなったのが原因だった。

彼らの従えていた私兵達は、トウムエルの首を差し出さねばこの戦は終わらないと認識していた。主が死ねば、私兵は諸共運命を共にするしかない。

彼らが生き残るためには、トウムエルの首をロクサーヌに引き渡すしかない。

故に決して追撃に手を緩めはしなかった。追う方も追われるほうも死に物狂いとなった戦場は、凄惨なものとなった。

街中で騎馬兵すら使つて追撃をかける私兵達。トウムエルの力によつてそれも防がれると、今度は弓兵かが遠距離から射撃を加えるようになる。

トウムエルの武力が他の追隨を許さないほど、弓兵による無差別の狙い撃ちに、拍車をかけた。

「ナルニア！」

幾度目かの敵の波を掻き分け、突破しかけたところで、弓兵による降り注ぐ雨のごとき射撃が彼らに襲い掛かった。彼女に降り注ぐ矢の雨に、トウムエルは我を忘れてその身をさらす。

「トウムエル様!？」

ナルニアの悲鳴と、先導していたウィンネの悲鳴が重なる。

足の止まったトウムル達を狙うように、さらに矢の雨が降り注ぐ。
「くっ……いかな」

顔をしかめるだけにとどめて、周囲を確認する。

「ウインネ。大盾を構え！ 聖堂まで後退」

自身に刺さった矢を抜くこともせず、指示を出す。近くにある大きな建物を一時的に占拠する命令をだした。

「は、はっ！」

ウインネ以下の兵士は大盾を構えて戦えないものを最優先に聖堂に下げる。

トウムルが下がったのを見て、貴族の私兵達が武器を持って前に出てきた。

「全員に命ずる！ 決して下がるな！ 我ら誇りあるトウムル歩兵団。死しても尚、倒れることは許されぬぞ！」

周囲を包囲する敵に、ウインネ達は命を懸けて時間を稼ごうとしていた。

「トウムル様!？」

建物の中は思いのほか広がった。今はもうほとんど訪れるもの居ない神の館は、静寂とわずかばかりの埃をもって彼らを迎える。

トウムルに突き刺さった矢に、どうすればいいかわからないナルニアは、涙を流すことしかできない。

ナルニアを安心させるように微笑むと、トウムルは自分で矢を抜き取った。

「心配ない……だがすまぬ。ナルニア……これ以上お前を守れそうにない」

血止めをした傷跡から流れ出る血は、トウムルがこれ以上戦うことが出来ないと思わせるものだった。

「逃げる、ナルニア」

「そんな……」

首を振って精一杯拒否をするナルニアを、トウムルが優しく叱る。

「カチューシャ」

呼んだトウメルの声は、カチューシャに不吉な予感を抱かせるに十分だった。

「はい」

蚊の鳴くような細かい声で答えるカチューシャに、トウメルは懐から金貨の入った袋を取り出す。

「ナルニアをつれて、行け」

壁に背を預けたままのトウメルの言葉に、カチューシャは涙を振り払って金貨の袋を受け取った。

「いやです！ 私は、あなたと一緒に……」

「良いじゃないか。ご好意に甘えてさ」

聞こえた声にナルニアは思わず振り返る。薄く笑みを浮かべたクシュレアの姿に、ナルニアは安堵と同時に不吉なものを感じ取っていた。

「クシュレアさん……？ どうして？」

「けじめってやつをね、取りに来たのさ」

こんなときでさえ、匂い立つような色香が漂うクシュレアの姿。

「どういう、ことですか？」

「報酬さ。そこにいる死にぞこないの首、それを奴等に渡せば、あたしとあんた達ぐらいいは楽に逃げられる」

「だめです。トウメル様にそんなことっ！」

「ふうん、トウメル様ね……」

トウメルを庇うように両手を広げるナルニアに、クシュレアは容赦がない。

その頬を張ると、きつい瞳でナルニアをにらみつける。

「忘れちゃったのかい？ 私らが何者で、なんでここにいいのか」
荒地を渡る風のように寒々しく肌を刺す、クシュレアの視線。

「だとしても、私はどきません！」

「じゃ、どうするのさ。あんたにこの状況の打開策でも？」

「それは」

「いや、ナルニア……彼女の言うとおりだ」

クシュレアに賛成をしたのは、あるうことがトウメル本人。

「だめです、トウメル様……そんな」

掴んだナルニアの手を、割れ物を扱うように優しく振りほどくと、
いまだ血の流れる傷跡をそのままに、トウメルは体を起こした。

門の破られる音がする。

「もうきやがったか」

舌打ちするクシュレアに、トウメルが向き直る。

「さあ、早く時間がないぞ」

「言われなくたって……」

握り締める短剣の穂先が、トウメルの首筋を狙う。

「だめ、だめですクシュレアさん！」

「なに言ってるんだい……これはあんたの為でもあるんだ」

口元に浮かぶ微笑は魅惑の色がある。

「東都へ帰らなくちゃね……私たちの故郷へさ」

「っ！」

何もいい思い出などないはずの、ガドリア。だがその名は、ナル
ニアの心を確かに揺さぶる。

「待ってる人が、いるんだろう？」

ナルニアの胸に、ルカンドの優しい笑みがよみがえる。

守ってあげたくなるような、くすぐったいような……固く誓った

約束があったことを、思い出してナルニアは驚いた。

思い出したということ。

そう、今の今までその約束を忘れていたのだ。

黙りこむナルニアに、クシュレアは勝ち誇ったような笑みを浮か
べる。

「さあ、わかったらお退き」

優しい慈母にも似た笑みがナルニアを包む。

まるで幼子が嫌々をするようなナルニアに、クシュレアは優しく
微笑むと、彼女をどかした。

「死に際が神様の家ってのは、お誂え向きだね。行く所は地獄だろ

うが、先に行つてな」

振り切られるクシュレアの腕にナルニアが飛びついた。

「だめ、だめです……」

ほとんど叫ぶような声でナルニアは拒絶した。

「ナルニア!？」

「私が居なくなったら、この人は独りになってしまふ……」

驚愕に目を見開くクシュレアに、ナルニアは懐から護身用の短剣を取り出す。

「だから……だから……」

震える手で握るそれを、常に支えてくれた仲間に向ける。

「私は、この人と行きます!」

驚愕から立ち直つたクシュレアの視線は、東都の魔女を彷彿とさせるように氷点下よりなお冷たい。

一方ナルニアも、その瞳は鉄を打った鋼のごとき意思を宿していた。

「仲間に、手を向ける意味をわかっているんだろうね? ナルニア」
低く、どぶ底を這い回る女の声がナルニアを打つ。

「わかっています。お別れです……クシュレアさん」

彼女にためらいはなかった。

「おい、その木偶はがの坊……お前この女がどういう氏素性なのか知つてるのかい?」

ナルニアを貫いていた視線が、トウメルに向かう。

「彼女が何者で、どんな育ちだろうと、俺は彼女を愛している」

臆面もなく言い切るトウメルに、苦々しげにクシュレアは一瞥をくれた。

「仲間を裏切る奴を、私たちは許さない。そうだね、ナルニア?」

「はい」

そのとき、乱暴に開かれる扉と、怒声が響く。

「居たぞ、トウメルだ!」

「首を取れ!」

舌打ちしたのは、その場に居た全員だったかもしれない。

クシュレアの手から放たれる投擲剣が、私兵達の先頭をなぎ倒す。

「トウムル様をやらせるなっ！」

続いて響くウインネの声。

「ふん、時間切れか」

ナルニアと対峙してたクシュレアは、踵を返すと壁に寄りかかる。

「私の手で引導を渡してやろうと思ったんだけどね」

トウムルの部下と貴族の私兵達が争う中を、クシュレアはゆっくりとナルニアに視線をめぐらせる。

「この奥に、小さな部屋がある。最後の時間だ。好きにお過ごし」

指差す先には、クシュレアが先ほど出てきた暗い通路。

「クシュレアさん……私……」

それ以上何も言えずに、トウムルとともにナルニアはその部屋へ続く廊下を歩く。

見届けたクシュレアはその場に仁王立ちすると、周囲に油をまいて、火をつけた。

そのまま横の壁に背中からよりかかると、火の回りを確かめずるずると崩れ落ちる。

「やれやれ……手間が、かかっちゃうね。どうも私には……脚本家は……」

わき腹から背にかけて確かめた手には、べっとりとした血糊がついている。

「やつぱり……ポルナーレ裏子が、お似合いか」

ゴード暦528年、初夏

王都ロクサーヌより発した西都ベルガディへの討伐は成功のうちに幕を閉じる。

西域を支配してたノイシュタットの家系は悉く行方不明か、死亡が確認され、ベルガデイをはじめとした王都の西域の統治は再びノイスター家へと戻った。

この動乱の後、西方候主トウメル、その妻ナルニアの生死はようとして知らない。

王都では、内乱を早期に治めたシュセの力量と、彼女を抜擢したカルの人気は否が応でも上がり、彼の治世に疑問を投げかける声も、抑えられるかにみえた。

西域の主21（後書き）

西域の主編、終了です。

長い、長すぎるっ！

という作者の個人的感想はさておき、次はサギリを中心とした話になります。

復讐するは我にあり 1 (前書き)

一章の章で、The Kingdom of Heavenの区切りとなる予定です。

復讐するは我にあり1

ゴード暦528年、初夏。

シュセ・ノイスターの西域討伐は成功のうちに幕を閉じた。

王都ロクサー又は東都ガドリア、南都ジェノヴァにその武力を見せ付ける形になる。

戦乙女シュセの名は、ロアヌキアだけでなく隣国ポーレまでも鳴り響いた。少年王の決断の正しさが広く知れ渡ることになる。同時に討伐後の西域の統治に、今までカルのことを侮っていた、特に南都の貴族たちは、顔を青ざめた。

シュセから降伏した貴族たちの詳細を聞くと、カルはその全員に査察を実施した。そのやり方も巧妙で、最初は特に悪政を噂される者から、徐々にその範囲を広げていった。

過去五年で、不正に蓄えた財産の没収。

抵抗すれば即座に処分の対象とするその苛烈な処分に、権力の上で胡坐をかくことに慣れた貴族たちは背筋を凍らせた。

結果ほとんどの貴族たちが、カルの査察の対象となり没落することになる。100年の昔、戦乱を嫌って半ば独立していた西都は、このとき完全に少年王の手中に収まったといっている。

だがカルは民に対しては、寛大な態度を見せる。

税の軽減と王都の財力を使ってのインフラの整備だ。不正の摘発と働く場所を与えてくれる新しい君主に、西域の民は喝采を送る。

その喝采の中、西方候主の地位にシュセ・ノイスターは上ることになる。彼女が故郷を追われて十余年目の凱旋だった。

そして西域討伐の成功は、カルの座を狙うオウカと、それを狙うサギリら東都の一派にも影響を及ぼさずにはいらなかった。

クルドバーツの所有する宿の一室で、エレガは握り締めた拳でルカンドを殴りつけた。

「だめですよ、エレガお姉さま！」

「クシュレアが死んだ。ナルニアもだ！ ルカンド、ええ？ わかっつてお前……！ すまないの一言で許されるはずないだろう！」
クシュレアとナルニア亡き後、エレガとカーナはそのことを伝えるにロクサーヌにきていた。

案内された部屋には、サギリ、ジン、そしてルカンドの姿。

彼女らが伝えたことに、ルカンドは一言だけ返す。

彼としては他に言うべき言葉を持たなかった。

そしてエレガは激昂する。

「君たちの身は、雪華から買い取つてある。この後は自由にしてい。これが証明書だ」

奴隷の所有を認める証書を、彼女らを縛っていた鎖の書類を、ルカンドは差し出す。

淡々としたその言葉に、エレガはなおも怒りが収まらない。

魔女の冷たい視線も、狼の興味なげな視線も、エレガにはすべてが気に入らなかつた。

「こんな、こんなものがなんだ！」

差し出された書類を手で振り払う。

さらに拳をぶり上げるエレガの首筋に、いつの間にか鈍く光る小太刀の刃が突きつけられていた。このま少しでも小太刀を引けば、彼女の首は胴体を別れを告げることになる。

それがわかつていてもなお、彼女の怒りは収まらなかつた。小太刀を突きつけている狼に向かって、憎悪の籠った視線で睨み返す。

「ジンさんっ!？」

あせつたのはルカンドだった。ジンの瞳は明らかにエレガを殺すつもりで、サギリの言葉をまっつている。サギリが一言やれと言えば、ジンは躊躇なく殺すだろう。

「サギリさん、止めてください！」

殴られた頬がはれ上がったまま、ルカンドは後ろで事態の成り行きを眺めているサギリに懇願する。

「……うちのかわいい手下に手エだすんだから、覚悟はできてるんだろうね？ 雪華の下っ端」

睨み据えるサギリの視線は、温度すら感じさせない絶対零度の冷たさがある。

背筋に氷塊を突っ込まれたようにあわ立つ肌。一瞬に飲まれた気を、エレガは奮い立たせた。

「殺したきゃ、殺せばいいだろう！？」

握った拳にさらに力をこめると、視線だけでサギリを殺そうと睨み付ける。

憎悪に燃えるエレガの視線と、冷え切ったサギリの視線が空中で火花を散らしているようだった。

だがそれも長くは続かない。サギリの口元が弦月にゆがむと、視線はエレガからカーナに移っていく。

「そうさね……けど、お前は自分が死ぬより、他人が死ぬのが苦痛な類のやつだろう？」

向けられた視線の先にカーナがいることにエレガは愕然としてサギリを見る。

「このっ卑怯者！」

「さあて、どうするかね」

悪魔の微笑が、エレガを打ちのめす。

「くっ……」

握られた拳が力なく垂れ下がるのを確認すると、サギリはジンに命じる。

「サギリさん！ 彼女の怒りは正しい。彼女の怒りは僕が受け止めるべきものです！ だからっ……」

ルカンドの言葉をさえぎるようにサギリは言い放つ。

「アタシはさつき何ていった？ 双頭の蛇つばのモンに手を出すなら、

容赦はしない。そういわなかつたかい？ その怒りが正しかろうが、間違っているようが関係ないんだよ」

うつむくエレガを睨んだままのサギリは、ルカンドを振り向きもしない。

ルカンドは一度俯くエレガを見やって、サギリに向き直る。

「サギリさん、お願いします。彼女を助けてください」

面白がるようなサギリの視線が、ルカンドとエレガを交互に見る。

「ふん、落とし前はしっかりつけてもらおうか」

「わかっています」

強くうなずくとルカンドは、エレガに向き直る。

「今後一切、ガドリアに近づくことを禁じます」

歯を食いしばるエレガに背を向け、ルカンドはサギリを直視する。

「これでいいですよね？」

「甘いことだねえ……ジン、やめときな」

「どつちが、甘いんだか」

誰にも聞こえないように呟いたジンの言葉が消えないうちに、彼は小太刀をしまう。

小太刀が引かれると同時に、エレガはその場に泣き崩れる。それを支えるカーナに、幾ばくかの金を渡し、ルカンドは彼女らを下がらせた。

三人だけになると、ルカンドが口火を切る。

「彼女たちの働きのおかげで、西都の方は概ね成功したと言って良いと思います」

「アンタの策が図に当たったわけだ。こっちは王様と繋ぎもつけたし……そろそろ動くかね」

「オウカ・ジェルノの暗殺ですか？ 正直あまり必要ないのではないかと思います」

オウカ・ジェルノ……ロクサーヌに巢食う魑魅魍魎の総元締め。

カルの王道の足を引っ張ってくれる東都にとっては、毒にも薬にもなる存在だった。

それを排除してしまうのは、ルカンドにとって性急すぎるような気がするのだ。

「いや、アレには消えてもらう」

断固としたサギリの言葉に、ルカンドは頷いた。

「そうすると、王都に貸しを作ることが難しくなりますね……」

「ルカ。百聞は一見にしかずってエ言葉を知ってるかい？」

「え、ええ。それがなにか？」

きよとんとしたルカンドに、サギリは苦笑を張り付かせて答えを教える。

「一度お前も、あの王様に会ってみるといい。そして目玉の中をよく覗いて見な。ありゃあ、結構な悪党だよ？」

愉しげに笑うサギリに、ジンとルカンドは顔を見合わせる。

「しばらくはあの王様に付き合ってみようじゃないか。国獲りはその後でも良いさ。その為にも、オウカ・ジェルノには消えてもらう」

「わかりました。クルドバーツさんには、しばらく引き続き“根回し”を続けるようお願いしておきます」

「ああ、東都にはしばらく動かさずにいるように伝えておくれ。オウカの首はアタシー人で充分だからね」

わずかに眉をしかめるジンに、サギリは視線を向けた。

「アンタはしばらくあのお嬢ちゃんと仲良くしておきな」

「なんで、俺が」

露骨に顔をしかめるジンに、サギリは苦笑した。

「キレー又の苗木はどの程度揃ってるんだい？」

「数は300ほど、初回ですので大口の取引には中々食い込めないようですね……でもなぜ？」

「ふふん……なあ、ルカ。もしガドリアが王都や西都、南都みたいに豊穡ビュノスの女神の加護があるような土地なら、どう思う？」

「すばらしいことだと思います。でもそれは……」

「そう。アタシらがどうあがいたって、なるようにしかならない」
自然の暴威に、人はあまりにも無力だった。

「だけどね。人の一生が短かくできてるように、アンタの子孫や子供の代になつたら、あるいは自然の暴威をねじ伏せられるだけの術が見つかるかもしれない」

小さな変化を積み重ねて、少しずつ手を加えていく。

「ガドリアに豊穰ビュノスの女神の息吹を」

ぼんやりと呟いたルカンドの脳裏に浮かぶのは、誰も飢えない故郷の姿だった。

「人の上に立つなら、夢を見させるんだ」

ニヤリと笑うサギリ。胸のうちを駆け上がる衝動に、ルカンドはしっかりと頷いた。

シュセ・ノイスター帰還に伴って、オウカ・ジェルノが担っていた衛士の長の役目は彼女に戻されることとなった。

彼女の名声は今や王都ロクサーヌでは並ぶもののないものとなっている。それと争おうなどとオウカのような慎重な男がするはずもなかった。

莊嚴なる帰還を祝う祭典の後、シュセは自身の執務室に戻り、やっと一息ついていた。

「シュセ様っ！」

「お姫さん！」

どたとたと、乱暴に扉を開けたのは彼女が留守居の間、近衛を預かっていたクラウゼとユイルイの二人。

「ご無事の帰還なによりです！」

「無事に帰ったってなー!?」

扉を開け放つなり、声を張り上げる。

「え、ええ。貴方たちもお変わりなく……」

騒々しい彼らに、ため息を吐きつつ積みあがった書類に目を転じる。

「で、これはいったいどういうことでしょうか？」

「いや……それが」

しどろもどろに言い訳をするユイルイに、クラウゼは罰が悪そうに頭をかく。

「面目ねえ。オウカのじじいに言い様にされちまって……」

クラウゼの身も蓋もない言い方に、更なるため息が積み重なった。

「まあ、仕方ないでしょう。片付けてしまいますので、手伝ってくださいますね？」

「もちろん！」

「喜んで」

「ああ、それと。これからしばらくわたくしも休暇をもらうことになりそうです。簡単に仕事を説明しますので、しっかりと励んでくださいね」

「……はい」

引きつった返事が、二人の口からもれた。

「シユセ様、お客人です」

「どなたです？」

「ジン、と申される若い男の方ですが……」

「ジンさんが？ わかりました。わたくしの方から伺いますので、私室へ。くれぐれも粗相のないようにお願いします」

そそくさと立ち上がると、ユイルイとクラウゼに一言告げて外へ出て行く。

「どう、思う？」

「なにが？」

「その……ジンってやつだ。もしかしてお姫さんに悪い虫がついてるんじゃないかねえか？」

声を潜めたクラウゼに、ユイルイが思案顔で頷く。

「シユセ様は世間知らずなところがあるからな」

「お前が言つな。それよりも、大事になってからじゃ遅い」

「どうする？」

「とりあえず、そいつを見てみないことにはわからん。そんで、悪い虫なら……」

「やるか」

二人頷くクラウゼとユイルイは、そつと仕事を抜け出した。

オウカ・ジェルノはいらだっていた。むろん、表には出さずにだが。

「あの小僧、いい気になりおつて……」

先日、御前会議で諮られた法案。西域の処分に関する法律は、オウカにすれば都合の悪いものだった。

そればかりではない。はじめは法律論争などで優位に立っていたはずのオウカであったが、日に日にカルの推官達の意見は鋭さを増していく。

率いるカルの有能さもあるのだろうが、それにもまして次第にカルの中心とした流れのようなものができ始めている。今まではオウカの顔色をうかがい、積極的に発言しなかつた者達が、次第に声をだすようになっていく。

そのことがオウカには気に入らなかつた。

王の下にまとまる勢力は、いまだに増え続けている。日和見を決め込んでいた中小の貴族達の何割かはすでに少年王の傘下にあり、その数はいまだに増え続けている。

「このままでは済まさぬ」

ロアヌキア開闢以来の名門、ジェルノ家の邸宅にてオウカは一人最高級の葡萄酒をなめていた。

「翁、知らせだ」

姿を見せたのは異国の戦士。

多額の金とそして闘争の場と引き換えに、彼の護衛を引き受けた遙か北方の異人。

「む……」

書簡に視線を落とすオウカ。その口元が残酷な笑みの形をとってゆがむ。

「アズ、よき知らせじゃ。お前の大好きな闘争の時刻じゃ」

「相手は強いんだろうな」

「強かるう。何せ東都を奪い取るほどの力の持ち主なのじゃから」
目を細めたアズの口元は、にんまりを笑みの形をとった。

「期待させてもらおう」

立ち去るアズを、見送ってオウカは今一度書簡に目を落とす。

「東都の魔女、サギリ……まさか、な」

書き記された特徴は、脳裏で像を結ぶ一人の女の姿。

それはすでに死者の列に加わる者のことだった。

クルドパーツは、王都ロクサーヌに展開する店を着実に増やしていった。

最初は武器の店から始まり、雑貨店、あるいは洋服なども扱う。

その裏には、東都から品上げされる確かな武器と、着実な彼の手腕があった。

デイド亡き後ガドリアからロクサーヌへ続く交易路の拡大は、物品の流通を生み、確実な富となって彼の元に戻ってきていた。

かつて血を流さねば通れぬか細き道に、将来の機運をかけた商人たちの組合“赤き道”。今や、王都でもっとも勢いのある商会といつても過言ではなかった。

「雪華のお二人を、ですか？」

その記念すべき総本舗。クルドバーツの武器屋の2階で、クルドバーツはルカンドから相談を受けていた。

「そうです………なんとか、見つけ出して生きていけるように取り計らっていただけませんか？」

「それは、私としてもやぶさかではありませんが………」

難しい顔で考え込むクルドバーツに、ルカンドは頭を下げた。

「ですが、なぜそこまで？ 支度金は渡してあげたのでしょうか？」

今二人の話題に上っているのは、エレガとカーナの二人のことだ。彼女らの安全をなんとか、はかれないものかとルカンドは、クルドバーツに頭を下げ続けている。

「そうです。でもお金は使ってしまったえばそれまで………彼女らがこれからも生きていくためには、働くことがどうしても必要になってくる。だから」

必死の懇願に、クルドバーツはルカンドの発言を制した。

「ルカンド殿、はつきりいますますが、それは余計なお世話というものでしょう？ 彼女らに生きる才覚なくば、いくら仕事があるうとも結局は無意味です」

彼女たちの生きる希望を打ち砕いたのは、他ならぬルカンド自身だ。直接手を下してはいかつたとしても、失敗すればその程度のこととは理解できた。

だがそれでも必要と思ったから。

「あなたの心情を満足させるためだけに、私たちの金を使うわけには参りません。彼女たちを救うのなら、利益をお示しく下さい」

商人然としたクルドバーツの言葉。

商人を使いたいなら利益を示せと。

「利益、ですか？」

「そう利益です。それさえ認めさせていただえれば、恩義ある貴方のために、“赤き道”は全力で二人の行方を捜しましょう」

奥歯をきつく食いしぱり、ルカンドは考える。

彼女らを救つて商会の利益になること。

「……彼女らは、西都の地理に詳しいばかりでなく、今回の内乱で活躍した長槍隊と懇意です」

西都に出店をする際の案内として、彼女らには価値がある。

だがそれにクルドバーツは首を振る。

「いまだ王都の店の足元も定まらぬ中、西都などともない」

「西都は、南都の商人らがいまだ手をつけていない、いわば未開の地……王都で鎬を削る彼らに、一步先んじることができません」

「む、む」

今王都の商会の序列をつけるとすれば、最大規模で展開しているのが南都ジエノヴァの商人たちだ。次いで地元ロクサーヌの商人たち、その次は個人商達が続いて、やっと東都の“赤き道”がくる。

商才豊かなジエノヴァ商人たちは、銀行、食料品を牛耳っている。彼らに対抗するためには、既存の商品だけでは心もとない。もっと広範囲の商売が必要だった。

「わかりました。西都に出店する際には、彼女らの助けを借りるとしましょう。それはそうと、親交があつた長槍隊といえ、どこの部隊です？」

メモをとるために、小さな帳面を開くクルドバーツ。

「確かバツセール配下の、グリュージェン隊」

その名前を聞いた瞬間クルドバーツの目は見開かれた。

「いいですな。売り込み甲斐のあるところだ」

今回の内乱でつとに名高い長槍隊。

コネを利用して、そこに武器を収めることが可能になれば、評判を呼ぶに違いない。

「お引き受けしましょう」

「ありがとうございます」

につこりと笑うクルドバーツの脳裏では、これから弾き出される利益の計算が働いていた。

シュセの私室、スカルディア家の屋敷の中で、彼女に与えられた私的な空間にジンは招きいれられた。近衛の長としての彼女に用件があるものなどは、執務室に通されることになるので、これは彼女がジンのことを私的な客人と判断したことになる。

落ち着いた色に統一された部屋の内装に、効果ではあるものの控えめな装飾品の数々。それでも庶民から見れば目玉の飛び出る価格はするのであるが、ジンは無造作に長椅子に腰掛けて部屋の中を見渡していた。

先ほど使用人らしき女が持ってきた紅茶が、甘い匂いを部屋に満たしていた。

「遅くなりました」

部屋のドアから柔らかい声とともに、シュセが姿を現す。

近衛の正装を解いていない彼女の装いは、男装の麗人のようなだ。

ジンの対面に、長椅子を隔てて腰掛けると彼女自身で紅茶をいれる。

肩の辺りで切りそろえた若葉色の髪が揺れる。琥珀色の瞳は、懐かしさと好意でジンを包み込むように優しい。

「ああ」

その視線に戸惑いながら、ジンは頷いた。

「それで今日はどのような？」

「用がなければ来ちゃだめなのか？」

ぶつきらばうな言草に、シュセは軽く目を見開き、一人納得したように頷いた。

「あの女主人の方と痴話喧嘩でも」

ドン、と机をたたく。紅茶のティーカップが音をたて、わずかに中身がこぼれた。

「違う!」

「残念ですね。わたくしのものになってくださると思ったのに」

少しも残念そうに見えない口調と表情で、優雅に紅茶を一口飲むと、シユセはにっこりと笑う。

「美味しいですよ」

「……お前、いい性格してるな」

「ふふ、お褒めにあずかり光栄の至り」

紅茶に手を伸ばすジンに満足そうに微笑む。

そんな二人の様子を、扉をわずかに開けた隙間から、ユイルイとクラウゼの二人は食い入るように覗いていた。大の大人が二人で身を寄せ合って部屋の中を覗き込む様子は、さぞ奇怪に見えたことだろう。

しかもそれをしているのが、近衛をまとめる二人だというのだから注意をするものもない。

「シユセ様……」

「……お姫さん」

くつろぐシユセの表情に、会話の内容までは聞こえないが彼女が楽しんでいるのだということはわかる。しかも相手は目つきに多少険があるものの、なかなか精悍な男だ。

「クラウゼ、あれは」

「悪い虫だ。純情なお姫さんを弄びやがって」

「いや、まだなんとも言い切れ」

「ぶっころす!」

一言言い置いてクラウゼは身を翻す。

「待てクラウゼ、早まるな」

「俺にはわかる、あれは悪党だ」

「だからといって!」

「お姫さんが傷ついてもいいのか! ユイルイ!?!」

「いや、それは望むところではないが……」
早足に歩むクラウゼにユイルイが追いつがるようにして二人は、彼女の私室から遠ざかって行った。

執務室で政務に励むカルの元に、一通の書状が届けられたのは、夕方遅くなつてからだ。

すでに季節は夏を終え、秋から冬の支度をしようかと言う季節。木々の葉は色を買え、風に吹かれて色づいた葉が宙を舞う。肌を感じる風の冷たさは、家路を急がせる。

「陛下。失礼いたします」
入ってきたベルモンドの表情を見て、カルは決済をしていた書類に署名をし終える。

気弱な表情に、困惑の要素まで加えてベルモンドは少年王の前に立っていた。

「先ほど、オウカ・ジェルノ様より書状が届きました」
差し出される書状は、高価な紙を使ったものだ。

「オウカ様をご引退なさると」
書状のないようにわずかにカルの柳眉が跳ねるが、表情の変化はそれだけだった。

「家の相続は8歳の孫か」
カルの質問に、頷くとベルモントはいかがいたしましたしようと、困惑した表情でカルの意見を待つ。

「本人が望むものを無理にとはいくまい。受理すると伝えよ」
「仰せのままに」

ベルモンドが退出して、一人になると一人額を押さえてオウカの動きを考える。

「兜を脱いで引退……などと、あの老人に限ってありえまい。私を
引きずり降ろす算段がついたのか。あるいはもっと別の何か……」
突然の申し出は、カルの警戒心を引き上げた。

復讐するは我にあり2

シュセが王都に戻り、治安を預かる衛士の長の役目に復帰してからは、ロクサーヌの夜を騒がす騒動は極端に減っていた。オウカに組するものに対するサギリの襲撃も、その時期を狙って鳴りを潜めていた。

“血塗れの”ターデイは、サギリの配下にあつて今まで襲撃で得た財貨の分配にあたっていた。気前の良いサギリの計らいで、得たもののほとんどは彼らロクサーヌの賊徒たちの手に渡っている。見たこともない量の金貨の詰まった袋を手渡され、ターデイはサギリに思わず聞き返してしまった。

「いいんですかい？ こんなにもらっちゃまって……」

「あん？ ほしくないなら別のやつにやるよ」

貨幣などに価値は大してないというようなサギリの視線に、ターデイは納得しないまでも受け取る。

「いえ、決してそんなわけじゃないんですが」

賊徒の間の親と子の取り分などというものは、親が半分、そのほかを子で分けるのがほとんど常識だった。だが、今回サギリはほとんど頭割りである。ターデイをはじめとする他の者が訝しがっても不思議ではなかった。

稼ぎの危機をほとんど、彼女の手腕で切り抜けたと考えているターデイなどは、気まずさのようなものすら覚えていた。

「変にまじめな野郎だねエ」

苦笑したサギリは、肩をすくめて頷いた。

「まあ納得がいかないなら、その金でちいと買い物をしてきてもらおうか」

「へい、なんなりと」

素直なターデイの様子に苦笑を深くする。

「ほんとに、アンタ賊徒かい？ 商売人にもなった方が向いてるかもね」

「とんでもねえ……俺アあんたについていきませぬ」

その場に居合わせたロクサーヌの賊徒を代表してターデイは口を開く。

ふう、とため息ひとつ吐くとサギリは話題を変えた。

「買い物つてのは奴隷を一人一匹だ。腕の立ちそうな、将来有望そうなのを頼むよ」

「それだけでいいんで？」

奴隷の値段などたかが知れている。あるいは知恵の働くものがいれば、浮浪児を一人奴隷にして掻っ攫えばいい。金は丸々懐の中、奴隷の出来上がりだ。

それをわからないような愚鈍な主のはずはない。

探るような視線を向けるターデイに、サギリは人の心を震えあがらせる笑みを浮かべる。

「ま、精々いいのを見つけてきてほしいモンだ」

試されている。

直感したのはターデイの気のせいではあるまい。

従順に従うか、あるいはモノを見る目を、賊徒達の中　どぶ底で這い回るような彼らの中に、あるいは光る何かがないものかと、サギリは試しているのだ。

その考えに至った時、ターデイの背筋は感動で震えた。

この主のためならば命をかけられる。瞬時にそう決意してしまうほど、彼の心は大きく波打つ。

ゴミやクズとしか呼ばれない賊徒おれたちをこの人は人間として見ている。

「へい、必ずご期待に背きやしやせん」

自然と頭を垂れる。

体の芯から力が湧き出てくるようだった。

シュセがジンとの楽しいお茶会を終えて、執務室に戻ると、仕事を任せたはずの二人の姿はない。訝しげに使用人に問いかければ。

「先ほど帰られたお客様を追って行かれましたが」

それもなにやら物々しい雰囲気で、と付け加えられれば、シュセもなんだかいやな予感がしてくる。

「まさか、とは思いますが」

それほど短慮ではないだろうと、部下を思いやる気持ちと、でもやりかねないと言う不安が対立する。

「確かめるだけです」

自分に言い訳すると、彼女は外行き的身軽な格好に着替えた。

シュセと雑談を終えて、帰宅の途に着くジンは何者かの視線を感じて、ふと立ち止まる。

殺気というほどではない、どちらかといえば敵意程度の気配に思わず首をかしげる。

西域での戦いを通じて、ジンの気配を探る術は確実にあがっていた。相手の殺気の量から、どの程度まで悪意を持った敵なのかが、わかる。範囲は狭いが、感じられるそれは、ほとんどはずしたことがない。

「ふん」

どうせ体が鈍っていたところだと思い返して、人気のない路地裏を進む。

「……出てきたらどうだ？」

路地の突き当たりに行き着いたところで、ジンは振り返り背後からついてきたものに声をかける。

「……だから言ったろう？ 尾行などやり付けぬものをするものではないと」

「う、うるさい」

現れたのは、クラウゼとユイルイの二人。

訝しげな視線を送るジンに向き直ると、傭兵時代の乱暴な口調でクラウゼがほえる。

「糞ガキ、てめえ気にいらねえんだよ」

それでは我等が悪役ではないか、と嘆くユイルイを尻目に、クラウゼはジンに襲い掛かる。剣を使わないクラウゼに、わずかに安堵しつつユイルイもそれに続いた。

クラウゼが正面から殴りかかると同時に、左に回ったユイルイが蹴りを繰り出す。妙に息のあつた攻撃に、だがジンは難なく対処する。ジンが殴りかかるクラウゼにあわせて反撃しようとしたところに、絶妙のタイミングで繰り出されるユイルイの蹴り。

それをぎりぎりの所で避けながら、クラウゼの拳にあわせて、顔面へ一撃。

それを意に介せず、突き進むクラウゼにジンは僅かに面食らう。襟元を捕まれていると、力任せに引っ張られる。が引っ張られる方向に合わせて跳んだジンは、空中で態勢を立て直して着地する。

だが直後に襲い掛かるユイルイの右拳。

ジンの頬を掠めたそれをかいくぐると、懐にはいって、自身の身長よりも高いユイルイを投げ飛ばそうと腕をつかむ。

咄嗟に足をつ張り踏みとどまろうとするユイルイ。

固まった彼の体に、足払いを決めると、クラウゼの方を相手にしようとする。

予想よりはるかに近い距離でクラウゼが、思い切り殴りかかってきていた。

繰り出される拳を額で受ける。

「くっ」

怯んだ隙に、ジンの左が舌からクラウゼの顎を捉えた。

「まだ、まだあ」

足にきてふらふらになりながらも、半ば意地になって立つクラウ

ぜ。

「やめなさいっ！」

清涼なる一喝が、その場に響いたのはその後すぐだった。

息を弾ませ走ってくるシュセに、ユイルイとクラウゼは顔を見合
わせ。

「マズイ」

と互いに頷いた。

結局その日は、シュセに三人ともこっぴどくしかられ、ジンは憚
然としたまま帰宅した。

暗い室内に明かりはない。

季節はずれの豪雨が、窓をたたく音。雷の光は部屋の主を一瞬映
しては消える。

「生きていたのか……」

手にした書簡は先ほど届けられたばかりのもの。

「魔女の血筋、まつろわぬ民の末裔」

鳴り響く雷光が、呆然と嵐吹く窓の外を眺める老人の顔を照らす。
次第に書簡を持った手は震え、口元には歓喜が弦月を形作る。

「クッハ……ハッハッハッハッハッハ！」

気が違うほどに笑いが込みあがる。

腹の底から、粟立つ肌から、老いさらばえて曲がるしかない骨髄
から、歓喜の笑いが老人の全身を満たしていく。

「ヒャッハッハッハッハッハ！」

こみ上げる笑いに呼吸すら苦しくなる。

だがそれでもその老人は笑うのをやめられなかった。

「ようやっつと、見つけたぞオ」

皺だらけの顔に、爪を突き立てる。火傷を負った肌が引き吊れる

のもかまわずに、深く突き立てた。

「魔女め、魔女め……くっはっはっは！ 魔女めえエ！！ あっはっはっはっはっは！」

無くしてしまつた希望のかけら。

己が欲望を満たせる、最後の一欠片。

老人の細胞ひとつひとつが歓喜に沸いていた。

「手に入れてやろうではないかア！ 必ず手に入れる！ 何を差し出しても、二度と手放すものか！」 ころえ切れぬという風に、口元を押さえ、なお口走る言葉は狂気の色がある。

「魔女めええええええ！」

オウカがカルに引退の旨をしたため、書簡を送つたのはその後すぐだった。

覚えているのは、全てを燃やし尽くされる家の姿だった。

たくましい背に負われて、振り返ったときに見たものは、天まで届くのではないかと思わせるような劫火と、いくら伸ばしても届かない自分の小さな腕。

暗い、暗い闇の中を、背負われて走る自分の無力さに、少女は復讐を決意した。

奪つてやる。何もかも。

自分から全てを奪つた奴らを。

恩義を忘れて、牙を剥いた裏切り者を。

手のひらを返したように拒絶をする弱き者どもを。

決して許しはしない。

正義の無力さをかみ締めて、ならば悪と呼ばれようと力がほしいと願う。

例え、復讐の後に茫漠とした荒野しか残らないのだとしても、幼き少女は望むままの邪悪を目指した。

「……ちっ」

舌打ちの音は自分の口の中からもれたものだ。

仕立ての良い寝台から上半身だけを起こして、サギリは未だ夜明けには時間があることを悟る。

なぜあのような夢を見たのか。

遙か昔に忘れてきたはずの、力のない少女の夢。

サギリの起きる気配に、床で寝ていたジンが目を覚ます。

「なんだ、まだ朝まであるぞ」

「出てくる」

外に出れば昨夜の雨はすっかり止んで、夜明け前のロクサーヌは朝もやと静寂の中にあった。

石畳の敷き詰められた街道を、黒衣をまとった少女が歩く。

捨ててきたはずの過去の亡霊が、昨日の雷雨でよみがえり、背中にへばりついたかのように足取りは重い。

かつてあった王城の地、街の北部にあるお椀型の小高い丘の上へ向けて、足は勝手に歩を進める。

緩やかな上り坂を上りきると、今は草も伸び放題となっている場所に出た。荒れるに任せたその場所は、かつて庭だった場所だ。

今は面影をほとんど消されてしまったその場所に、一本の巨躯の老木だけが当時をしのばせる。

そつとその老木に触れる女に、魔女と恐れられる面影はない。

まるで傷口に触れられることを恐れる無垢な少女のような、悲しげな表情があるだけだった。

やがて、陽の光が街を照らし出す。

眼下に見下ろすのは、“宝玉”と称えられるロクサーヌの町並み。

昨日吹いた嵐が嘘だったような、晴れた青空が顔を覗かせる。

朝が来て、家々から炊事のための煙が立ち上る。目覚めた街をぼんやりと眺め、女は老木の根元に腰を下ろしていた。

陽が上り、豆粒のような人々が街道を往来する。

街を囲む巨大な白き城壁、それに着けられた城門が街の中に響く鐘の音ともに関く。一日の始まりが、街に訪れていた。

虚ろだった。

まるで身を焼く激情を置き忘れてきてしまったのか、彼女の瞳に生気すらない。

夜に囚われた少女が、夜の明けた街に取り残されて独り佇む。

「姉さん……」

呟いた言葉は、吹いた風に攫われる。

やがて彼女が腰を上げたのは、陽が中天にさしかかろうとしているころだった。

秋口とは言っても、今だに日差しはじりじりと首筋を焼く。

街中に入ってしばらく歩けば、中央広場に差し掛かる。一枚の立て札とそれを取り巻く群衆に、気がついてサギリはそれ吸い寄せられる。

「オウカ。ジェルノ様が引退だってよ。なんでもお体が悪いのだそ
うな」

「へえ……でもあそこの、御当主様は幼いお子様以外には親類の方もいらつしやらないんじゃ？」

「十貴族様も大変だあねえ」

罪のない雑談に混じって、サギリの耳に入ったのは、オウカという名前。

間もなく死ぬという老人に、サギリは目の前が目がくらむほどの怒りを覚えた。

「死ぬだと」

漏れた言葉に、自分で気づいてその場を離れる。

だが湧き出した怒りは、容易に収まりそうもない。

暗い裏路地に入ったところで、彼女と視線を合わせた浮浪者が言葉も忘れて腰を抜かす。

安穩と、家族と召使達に囲まれて、死ぬ？

「オウカア……」

許せない。許せるものか。

恐怖と絶望に打ちのめされ、泥濘の中を這いずりまわり、誰にも省みられることもなく無様に死んでいく。それこそが彼らに相応しい死に様のはずだ。

そのために、奴らに絶望を味あわせてやるために、自身は茨の道を選んだのではなかったか。

先ほどまでの虚ろが、怒りの激情に塗りつぶされていく。

震えすら走る手を握り締めると、広場から立ち去るその足で、サギリは一軒の店に立ち寄る。暗い裏路地の先にひっそりとたたずむ薬屋。店の名前は寒風山という、店構えは薬草を扱う店ということになっているが、ここは情報を売り買いする場所だった。

古びた扉を押し開けると、小柄だがやたらと目つきの鋭い老人が視線だけを彼女に向ける。狭い店内には干した草やら、蛇を瓶詰めにしたものやら、雑多なものが無造作においてある印象を受ける。

老人は、揺り椅子に腰掛け木製の机の上で青々とした葉を丹念に揉んでいた。その机の上に、サギリは金貨を二枚叩き付けた。

「……いらっしやい」

老人の口元に薄っすらと笑みが浮かぶ。いつも以上に苛立っているからだろう。そんな細々とした事が彼女の気に障る。

「オウカ・ジェルノの予定を一週間分知りたい」

「金貨、5枚ほどだ」

ヒヒヒと、細い声で晒う老人を見下ろして、その机の上にもう五枚ばらばらと投げ捨てる。

「明日、もう一度同じ時刻に来な」

返事をすれば怒声が漏れそうで、サギリはそのまま踵を返した。

ねぐらに使っている宿に到着したのは、既に西日が差し込む時刻

だった。

そのまま寝台に倒れこみ、仰向けに手で瞼に差し込む夕日を遮った。

「クッククク……はは、ハッハッハッハッハ！」

咽喉の奥から高笑いが湧き出す。

「最後の、最後の一人だ……あつはつはははははははははは！」

ヘルキオス・ヘルシオは自身の生み出した子供に殺され、アルトリウス・ツラドはこの手で地獄に叩き込んでやった。イシキア・ノイスターは病で死に、カンサスは荒地でジンの手で死んだ。

そしてオウカ・ジェルノ。

家族を死へと追いやった彼らに、牙を突き立てるこの時を、どれほど待ち望んだことが。

血に塗れたように真っ赤な西日が、部屋を染め上げる。

「殺してやる。殺して、殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して……はは、病気だと、老衰だと？ 逃がすものか」

宙を睨むのは、地獄の業火すら凌駕する憎悪の炎。

「この手で殺してやるっ！ オウカ・ジェルノ」

犯した罪に相応しき罰を、この手で与えるのだ。

涙すら流して、晒うサギリは宙を睨んでいた。

「シュセ様の命の恩人？」

「そうです」

気恥ずかしげに頷く彼女に、クラウゼとユイルイは、頷いた。

「その、あの小僧に恋愛感情などは？」

「ありませんっ！」

クラウゼとユイルイが互いに視線で会話する。

「いやーそりゃ良かった。俺はてつきりお姫さんに悪い虫がついちまったのかとばかり」

「こ、こらクラウゼ。申し訳ありません。シュセ様、我等の早取り、どうかお許しく下さい」

心底安心したような様子のクラウゼと、慌てて謝罪をするユイルイに怒る気もシュセは失せてしまっていた。

「心配してくださるのは結構ですが、わたくしの恋愛がどうなるうと、干渉しないでくださいませ。わたくし個人の問題でしょう」

「とんでもない！ お姫さんの大事は俺達の大事だ。なあユイルイ？」

「あ、ああ。うむ」

柳眉を潜めて、ため息を吐くとシュセは軽く彼らを睨む。

「戯れに問いますが、どのような殿方なら貴方達のお目に適うので？」

ふむ、と二人は考え込み、別々に一緒の答えを口にする。

「もちろん、強くなかつちゃあな。優しくて、できれば顔も良い方が良い」

「資産状況も大事だな。シュセ様が苦労しては元も子もない」

ため息を吐いて彼らの言葉を聴く。

「顔がよくて、お金持ちで、強くて、優しいと？」

「いやいやまだある。もちろんお姫さんに相応しい地位と包容力もなけりやだめだ。俺達を納得させるぐらいの、力量は最低限なきやな」

「うむ、後は知性も大事だ。品格も忘れてはならん。下品で下劣な男など、シュセ様に相応しいはずはないだろう」

指折り条件を数えていたシュセは、そのうち馬鹿らしくなっめてしまった。

「いるわけないでしょう」

やれやれと首を振る。

シュセ自身気づいていないだろうが、彼らの心情はまるきり嫁入り前の妹を心配する兄の心境だった。はっきりといえば、彼らに可愛^{シュセ}い妹を他人にくれてやるなど、まっぴらごめんなのだ。

「とにかく反省はしてもらいます。懲罰房に二日ほど入ってもらいますので覚悟しておくように」

宣言するシュセに、二人は項垂れる。

「シュセ、入るぞ」

ドアをたたく音と共に入ってきたのは、仕事を一区切りつけたカルの姿。

「か、カル様！ どうなされたのですか？」

「いや、なにずいぶんと楽しい話し声が聞こえたのでな」

「お、お恥ずかしい……今後このようなことがないようにしっかりと指導監督をさせていただきます」

あまり二人を責めるなど、と言い置いてカルはシュセの部屋をあとにする。

重いため息を吐く彼女は、近衛の騎士に二人を懲罰房に連れて行くように命じると、再び鉛のような重いため息を吐いた。

懲罰房に入った二人は、対象的な表情をしていた。

クラウゼはどこか能天気そうに、大してユイルイは何か深刻な発見をしてしまったかのように暗い。

「クラウゼ」

「あん？」

「先ほどの話だが」

何の話だと首をかしげるクラウゼ。

「シュセ様の理想の男性についてだ」

「ああ、あれね」

「見つけてしまった。お一人だけ、いらっしやる」

「なにい!？」

いるはずがない、そう思って並べ立てた条件だ。合致するものなどいるはずが……。

「陛下だ」

「はははは、まさか」

笑い飛ばそうとしてクラウゼは、先ほどいいあげた特徴を数える。
「顔は、間違いなくいいな。金、ないわけねえ」

頷くユイルイ。

「強いのか？」

「槍の腕はもはや達人の域に達しているということだ」

「頭……悪いわけねえか。相応しい地位、王様。包容力……なきや
王様なんてできねえか」

冷や汗の流れ始めるクラウゼに、ユイルイが言葉を継ぐ。

「品格は争うべくもない。優しさに関しては意見が分かれるかも知
れぬが、シュセ様の意見を汲んで孤児院などに出資なされていると
いうことだ」

無言のうちに顔を見合わせる二人。

「なんてこった……まさかそんな奴がいるなんて」

「よさないか、陛下だぞ」

「ちくしょー！」

その日地下の懲罰房からは、すすり泣きと悔し涙にぬれた叫びが
一晩中あがっていた。

張り巡らせた系の一本から、あがってくる情報。

今までは国中に張り巡らせていたのだが、それをロクサーヌの中
だけに限定することで、その密度と精度は限りなく完璧に近いもの
になっていた。

「来たか」

オウカの情報を買っていったという黒髪の女。

復讐するは我にあり3

暗闇の向こうで、色あせた記憶の断片が顔をのぞかせる。

遠く、はるかに遠くなつてしまった記憶。

煌びやかな戦装束に身を包み、黒き近衛の軍を率いた男の背中は余りにも大きく遠かった。あまねく周囲の敵を平らげ、その業績は並びない。歴代の王の中でも、群を抜いた武の力。

「オレは王の中の王になるぞ」

たった10しか変わらない男の大きさに、深い深い羨望と嫉妬を感じずにはいられなかった。

幾千の鋼を叩いて鍛えたような、揺ぎ無き漆黒の瞳。

荒地の台上、地平線すら睥睨して口元には自信に満ち溢れた笑みを浮かべる。

限りない憎悪と、それすら上回る魅力。自身の中の荒ぶる魂を揺さぶる何かを、確かに持ったその存在を、“王”と形容する以外言葉が見当たらない。

理屈ではなく、心が認めていたのだ。

この男こそ　ヴェル・シフォンと名乗る　この国を統べる者である。

自分の心が屈服している現実には、だがそれでも男は耐えられた。ほとんど唯一の肉親の父オウカから、惜しみない愛情を感じていたからだ。

だから、王に対する嫉妬も羨望も蓋をしていられた。

王には美しい妻と二人の娘がいた。周囲の反対を押し切って結ばれただけあって、非常に仲がいい。娘の方も長女は年頃を迎えて、何一つ不自由ないようにみえた。幸せな、家族の肖像。

それを真似るように、自身の隣にも妻と呼べる存在がいた。

ルカンドを殴りつけ、ほとんど身一つで見知らぬ街に投げ出されたエレガとカーナは、安宿に居を落ち着けると、今後のことについて話し合っていた。

ガドリアには帰れない。ベルガデイも無理だろう。だとすれば、南都ジエノヴァか王都ロクサーヌ。あるいは、ポーレを渡って自由都市群でもいいかもしれない。忌々しいことだが、ルカンドから渡された支度金はそれが可能な額だった。

「南都ジエノヴァは食べ物が美味しいって聞くし、ポーレはこの国よりよっぽど文化の進んだ国だってね！」

いつも以上に明るく振る舞うエレガの態度に、カーナは段々と悲しくなってきた。

「あの、エレガお姉さま……そんなに無理をなさらないでください」「無理なんてしてないさ」

「でも……」

「やっと自由になれたんだ。好きなこととして、今までの負債を返してもらったって構わないだろう？」

「はい」

エレガの向ける笑顔が、商売の時の何の感情も乗らないものなのが、カーナには見抜けてしまっていた。

「あのおう、ベルガデイでお世話になった人にご挨拶してからでは、だめでしょうか？」

「ん、ああ！ 行つてきな！」

今のカーナには、エレガを慰める言葉が見つからない。せめて、独りになることで思い切り泣く機会を提供するくらいしか、考えつかなかった。

「では、行つてきます」

出て行くカーナを見送ると、エレガは被っていた仮面にひびが入り、それを認めたくないかのように机に突っ伏した。

「ちくしょう……」

すすり泣く声は、次第に咽ぶ声へと変わっていった。

扉の向こう側で聞こえる嘆きの声に、カーナはそつとため息をついた。

「しばらく、時間を潰すですう」

ととととと街の雑踏の中に踏み出すと、時刻は昼時を告げる鐘が鳴り響いていた。

西都ベルガディにはなかった熱気。秋の晴れ晴れとした青空を渡る風が、心地よくその熱気に差し込む。屋台に並ぶのは今が旬の魚の焼き物や、栗菓子などの香ばしい匂いが通りを満たしている。

人々の顔にはガドリアにはない明日へと向かう元気がある。明日は明るい日だと、希望を持って暮らしていけるような何かが、この街にはあるのだろう。

ぼんやりとそんなことを考えながら、カーナは街を歩いていた。

「こんな街で暮らせば、カーナ達も辛いことは忘れられるのでしようか……」

小さい呟きは、雑踏の中に消える。

クシュレアやナルニアのことを考えるだけで、心の奥がぽっかりと穴の開いたようになってしまう。隙間風の入り込むその隙間が、楽しいことや嬉しいことを全て吸い込んでしまっているようだ。

「あっ!?!」

「気をつける!」

普段なら気づくはずの油断。後ろからぶつかられた拍子に、懐の物を奪われてしまう。

一瞬の空白の後。あまりにも遅すぎるその空白の間に、スリはほとんど人ごみをすり抜けていってしまふ。

「泥棒!」

あまりにも遅い反応に、絶望的な犯人との距離の差に、カーナは悔しさに涙が滲む。小さな身長を精一杯伸ばして、叫び続けるがびつくりしたような周囲の背の高い大人達は、咄嗟に判断することす

らできないらしい。

彼らの間を掻き分けて、犯人を追う。

「誰か捕まえて！」

叫ぶ声は、呼子の声や物売りの声に掻き消されがち。だがカーナには叫ぶしかなかった。あまりにもあせったためか、普段なら絶対に転ぶはずのないような小さな段差に躓いてしまう。

更に開く犯人との距離に、ほとんど犯人の背を見失ってしまった。も、がむしゃらに人の森の中を駆けていった。顔にかかる泥を無理やりぬぐって、カーナは更に走る。

「おっと！」

不意に、温かなものに抱きとめられて、涙と泥でぐしゃぐしゃになっってしまった顔を上上げる。

「やっぱりカーナのお嬢ちゃんじゃないか」

熊のような大柄な体格に、いつそ山賊のカシラと言ったほうが通りのいいであろう顔。柔らかに微笑む男の顔に、カーナは目を見開いた。

「グリユーエンさん」

「おうよ。どこかで聞き覚えのある声がしたと思って、追いかけたらコイツを見つけてなア」

にやりと笑って、顎で指す先には先ほどのスリがグリユーエン班の若い班員に締め上げられていた。

「探し物はコイツかい？ 小さなお姫さま」

ひよいと差し出されるのは、先ほどカーナが盗まれた財布代わりの皮袋。

コクリと頷くと、ぽんと手に乗せられる。

先ほどと寸分たがわぬその重さに、思わずグリユーエンを見上げる。

「気をつけなよ。ここいらは治安が良い方だが、全くないってわけじゃないからな」

ガハハハと豪快に笑い飛ばすグリユーエンのおおらかさに、カー

ナの瞳には涙がたまっていた。

「グリーエンさん……」

優しい大男の胸に、頭を押し付けると、カーナは辺りをはばかり事もなく大声で泣き出した。

「お、おう!？」

「あ、班長女の子泣かしたー」

「やかましいわ!」

熊がおろおろと立ち往生しているような、その珍しい光景に、班員だけでなく通り過ぎる通行人達も、温かい視線を向けていた。

耳の奥底、頭の中で声がする。

血のように赤黒く、呪いのように重いその声が、愛を囁く。

「ねえ、憎い?」

くすくすと、幾万の呪詛をこめた笑い声が聞こえる。

「殺して、殺して、殺してね?」

何人も許さない。この世の全てを地の底から睨み上げる憎悪の声がする。

屍の上、折り重なった腐敗の上に十字架が掲げられる。

手足に楔を打ち込まれ、流れ出る流血は屍から伸ばされた手に注がれ。

おぞましくも、自身がそれを啜るのだ。

知っている。

この光景を、知っている。

「っ!」

じつとりと汗ばむ肌に、朝の風が吹き込んで目が覚めた。

「くっ……」

割れるように痛む頭を抱えて、体を起こす。

「わたくしは何を」

思い出せない悪夢。ただその残滓だけが、噴出す汗となってその身にとどまっていた。

熱を持った右腕に、呪われし盾の刻印が疼いていた。

窓から吹き込む朝の涼風を浴びてシュセは、軽く頭を振って悪夢の残滓を振り払う。

なぜか思い浮かんだのは、ジンの主であると語った黒髪の女だった。

否応なく胸にしこりが残る。

心臓に杭を打ち込まれたかのような、違和感。

寝台から抜け出すと、不快な気分を振り払うように寝間着を脱ぎ捨てた。

早々と近衛の執務室に向いた彼女は、机の上に何も無いことを確認して、屋敷の庭に向かった。根をつめて仕事をする前に、朝の清涼な空気を楽しもうと、進んでいく。

スカルディアの屋敷の二階を登り、王の謁見の間を過ぎて、内庭へでる。上ったばかりの朝日にきらめく噴水の水しぶきが、七色に輝いていた。

その噴水のへりに腰を落ち着けようと二歩進んだところで、彼女はハッと息を呑む。

「カル様？」

噴水のへりには既に先客の姿。朝の稽古の後だったのだろうか、裸の上半身には玉の汗が光っていた。

「シュセ？ どうしたこんな朝に」

シュセに気づいたカルも、閉じていた視線を彼女に向ける。美貌の顔に、わずかに驚きの色がある。王としての責務を離れれば、その表情は自然と柔らかい。

カルの寛いだ様子をシュセは好ましいと感じながら、カルの側へ歩いていく。必要以上に近寄らず、何があっても対応できる距離に彼女は自身の身を置く。

「ええ、少し……散歩です」

なんとなくあの夢のことを口に出すのは憚られて、彼女は曖昧に言葉を濁す。

「そうか」

さして気にした様子もないカルに、今度は彼女が問いかける。

「カル様はいつも、朝に鍛錬を？」

その問いにカルは苦笑した。その表情に王であるとき見せるような、冷たさはない。いつそ柔らかく若々しい若葉を思わせる。

「いや、夢見が悪くてな」

情けないことだと、続けたカルに、だがシュセは微笑み返すことができなかった。

唐突に、忘れていたはずの悪夢がよみがえる。

血を啜る自身はどんな顔をしていたのか、震える歓喜に、口の端をゆがめ。

「、セ？ シュセ？」

「っ、はい」

問いかけられた言葉に、悪夢の残滓を振り払う。

「すみません。聞き逃してしまいました」

「珍しいな」

そういつて見上げるカルの瞳に、シュセは胸を騒がせる悪夢が静まるのを感じる。

「遠征の後休みもやれなかったからな……ふむ」

考え込むカルが、答えを出すのにそう時間はかからなかった。

「シュセ。しばらく休暇を許す」

「カル様！ わたくしは」

言いかけたシュセの言葉をカルは手で制する。

クラウゼとユイルイに奮起してもらおうと休暇をとります、と言ったことはあるが、実際に取るつもりなどなかったシュセは、カルの言葉に大いにあわてた。

「お前にはずっと無理をさせてきたと思う。シュセ。おかげで口ク

サーヌの平穩はしばらく続きそうだ」

だから、と続けるカルは真摯に彼女の瞳を見返す。

「お前に万が一のことがあれば、王都の治安は手に負えぬものになるだろう。体を労われ、シュセ」

優しい視線に射抜かれて、シュセはわずかに赤面した。

「ですが」

「それにな。最近ロクサーヌの名声は戦乙女シュセ・ノイスターにとられっぱなしだ。私としては王が臣下に休暇を与える権利を利用して、失われた名声を取り戻そうと画策しているのだ」

年相応の少年時じみた言い草に、シュセは最初呆気にとられ、ついで噴出した。

「だから、遠慮なく休め」

「はい。陛下……お気遣いありがたく」

柔らかかに微笑んで、王の騎士は主に頭を下げた。

「おじい様！」

オウカの邸宅に響く幼い声。いまや8歳にして、ジェルノ家を継ぐべき者となった孫の声に、オウカは自然目じりを下げる。

「おお、トウカ。よくきた。よくきたなあ」

目に入れても痛くない孫の姿に、オウカの顔にも自然と笑みが浮かぶ。

悪辣な政治家でもなく、魑魅魍魎の主でもない孫を愛する祖父の顔でトウカと呼ばれた孫に笑いかける。その慈愛に満ちた笑顔に、

トウカは甘えるように祖父の胸元に飛び込んでいく。

「お坊ちゃま。少々はしたなく存じますが」

家族水入らずの場から、適度に離れた場所で壮年の執事が少年の

軽拳をたしなめる。

「えー！」

頬を膨らます仕草さえも、愛らしく抗議をするトウカに、オウカは事のほか甘いようだった。

「よいよい、仕事ばかりでトウカにはとんとかまってやれなかった。このときぐらいはな」

一片の乱れもない礼を返してから、無言で執事は頭を垂れる。

「今日はわしが料理を作つてやろう」

やさしく微笑むオウカに、トウカが歓声をあげた。

扉の開かれる音で、エレガは浅い眠りから目が覚めた。

「ただいまです」

窓から差し込む日差しは朱色に染まり、時刻は既に夕刻に迫っていることを告げていた。

「あ、ああ。おかえり」

目じりに残った涙を拭いくと、エレガは空腹を覚えているのに気がついた。

「どんなになつても腹は減るもんだね」

妙にそれがおしかく、苦笑しながらカーナを食事に誘う。

「はいです」

その食事席で、カーナは以前世話になつたグリユーエンからロクサーヌにとどまらないのかとの誘いを受けたことを話す。

「お金はあるんですけど、それだけじゃだめだと思つたのです。使えば使っただけ減っていくだけなので、働いてお金を稼がないと。あ、

いや、もちろんエレガお姉さまが嫌だというなら、お断りするです」
黙って話を聞いていたエレガは、その話に苦笑しながら頷いていた。時に赤くなり、照れながら話すカーナの様子に微笑を誘われずにはいらなかった。

「それで結局、お世話になりたいのかい？」

こくん、と頬を染めて小さくうなずいたカーナ。

「そうか……」

カーナは自分の居場所というものを見つけたのだらう。一抹の寂しさとともに、エレガは妹のようなカーナをうらやましく思った。

「あの、それでエレガお姉さまは？」

「そうだね。それじゃお邪魔かもしれないけど、お世話になるうかばっとカーナの顔が輝く。」

その笑顔を見ながら、エレガは新しい明日へ踏み出そうとしていた。

休暇をもらったシュセは、休みをもらったその足でジンを訪ねていた。

「確かここのはず」

最近急速に成長をしているクルドパーツ商会。そこに出入りする“赤き道”の組合員の弟。そんな素性を本気で信じているわけではないが、シュセはジンのことをそれ以上追求しようとは思わなかった。

「いらっしやませ」

営業用の笑顔とともに、寄って来た店員にサギリと言う商人は逗留しているかどうか聞く。

「ああ、あの方ならいらっしやってます。お呼びしましょうか？」

店員の勧めに従って、案内してもらおうシュセ。

「入って構わないよ」

ノックの音に、扉の中から聞こえた声は一商人というにはあまりにも、自信に満ちたものだ。

「お久しぶりです」

にこりと微笑む彼女に、窓のガラスを開け放っていたサギリは視線を向けた。

「適当に掛けな」

黒髪は風に緩やかになびき、威厳とも威圧とも言えそうな迫力がある。

「それで？」

単刀直入に、用件を済ませるとせかす彼女に、シュセはわずかに違和感を感じる。

「サギリさんは、何かお困りのことでも？」

その問いに、ほんの一瞬鋭い視線を向けたサギリは、口元に皮肉に満ちた笑みを浮かべる。

「助けがほしいのは、アンタだろう？ シュセ・ノイスター殿。うちのジンは役に立ったようだね」

サギリに言われてシュセはここに来た目的を思い出す。彼女の身辺を探るために、ここにいるのではないのだ。

「その節は、お世話になりました。わたくしでお力添えできることがあれば、なんなりと申し出てください」

「なんなりと、ね」

ふふん、と楽しげに鼻を鳴らすサギリに、シュセは付け加える。

「あくまでも、わたくしのできる範囲で、ですよ」

「一介の商人風情の頼みさ。西方候主様のできないわけがないだろう？」

愉しげに笑うサギリに、シュセはわずかに驚いた。

「情報が早いですね」

「こっちも商売柄ね」

交差する漆黒と琥珀の瞳。

先にきつたのはシュセだった。

「それで、何を望まれます?」

「ん、それなんだがね、もうしばらく考えさせておくれ」

法外な金額の謝礼を要求されるとばかり考えていたシュセは、その応えにいささか拍子抜けする。隙があればすぐにでも付け入ってきそうな、油断のならない抜き身の刃じみた気配を感じていた彼女から、逆に間を取られた。

「ま、望みが出来たらこちらから連絡するよ。それだけじゃないんだろう? またジンかい?」

「ええ……そうなのですが」

微妙な表情のシュセは、サギリの大盤振る舞いともいえる余裕に釈然としない。

「なんだか、貴女からこれほど簡単にほしいものを頂くのは、非常に疑わしいですね」

「しつづれない人だねえ。それじゃまるでアタシが強欲みたいじゃないか」

違うのですか? と視線で問いかけるシュセを、サギリは一笑に伏した。

「生憎と今アタシは忙しくてね。遊んであげる暇がないのさ。ジンなら、屋根の上にいるよ」

「屋根の上ですか」

天井を見上げるシュセに、サギリは苦笑交じりに言った。

「どうも、街の暮らしに慣れなくなってるね。東都が恋しいんだろうよ」

ソファアの背もたれにもたれかかり、天井を見上げるサギリ。

「失礼します」

窓から上を見上げ、シュセは声を張り上げた。

「ジンさん! 遊びに行きましょう!」

シュセの言い草にサギリは思い切り噴出した。

ジンが思いつきり不機嫌に、だが可能な限り速く降りてきたのは

言うまでもない。

シユセがジンを連れ出して一人になったサギリは、昨日の情報を扱う店に向かう。

ギィ、と立て付けの悪い扉をあければ昨日訪れた時と同じように老人が、青々として葉を丹念に手でもんでいるところだった。

「いらっしやい」

まるで何十年も前からそうしてあったかのような景色の一端となつている店の主人が口を開く。

「情報は？」

冷め切つた漆黒の瞳がその老人に注がれる。

老人の懐から机の上に置かれる一片の紙切れ。

慎重にそれを摘み上げると、一読してサギリは彼に背を向ける。

「邪魔した……」

濃密な殺気を放つその背中に、老人の背に冷や汗が流れる。

喋れば殺す。

言葉よりも雄弁に彼女の背中話語っていた。

店に背を向けたサギリの口元が、弦月に歪む。本人もそれと気づかぬままに、逆さの三日月に似た口元。

闇の果ての深淵を覗く漆黒の瞳は、遠い過去からの鎖に縛られた亡霊そのものだった。

復讐するは我にあり4

細い雨は空から降り注ぐ針のように、地面に落ちてくる。

大地を打ち付けるその雨粒はまるで罪人を打ち据える天の裁きのようだった。

「ひでえ、雨だ」

ぼんやりと窓辺に腰掛けて外を眺めるサギリに、ターデイやジンは不信の視線を向ける。ジンなどは先日からシュセに連れまわされて、孤児院にいき子供の相手をさせらてご機嫌斜めだった。

「へえ……」

どうにもやりにくいと、視線でジンに告げるターデイ。彼の視線を受けてジンは憮然としたままサギリに声をかけた。

「買い集めさせた奴隷はどうするんだ？」

サギリに言いつけられた通り、ターデイ達は役に立ちそうな奴隷を買い集めてきていた。その数三十余人。今はクルドバーツの所有する隠れ家のひとつにまとめておいてあるが、いつまでもそのままというわけにもいかない。

数日前からずっとこんな調子のサギリに、ターデイ達は戸惑いを隠せず、ジンは苛立ちを隠そうともしない。

「奴隷どもは、ルカに任せてやんな」

「全員ですかい？」

「ああ……」

視線を向けようとしもないサギリに、それでもターデイはすんなりと頭を下げる。

「承知しやした」

早足に部屋を出るターデイを確認すると、ジンは珍しくため息を

ついた。

「……何かあったのか？」

「別に……なあジン」

やはりサギリの視線は、降り注ぐ雨粒に注がれたまま。

「アンタ、もしアタシと出会わなかったらどうしてた？」

「昔同じようなことを聞かれた。俺の答えは今でも変わってない」
「まっすぐなその言葉に、サギリは。」

「そうか」

と答えただけで、それ以上は問いかけてはこなかった。

「少し出てくる」

小降りになつた雨に、ジンの横をすり抜けて部屋を出る。

まるで細い針が無数に降り注ぐような、雨を見つめながらサギリは郊外の廃墟に蹲っていた。体が冷えるのを避けるために、適当に雨が防げる場所を探して入り込み、そのまま目を瞑って耳を澄ました。

あの情報屋から買った情報。

十中八九罨であろうことを確信しながら、彼女は引く気になれなかった。

罨だとしたら、あの情報屋を締め上げればオウカに繋がる糸が見つかるとも思えない。罨でないのなら、ここで決着をつけられる。

ジンに遅くなるって伝えておけば良かったかな。そんなことをぼんやりと考えながら時間が経つのに任せていると、雨を弾く足音と数人の話し声が聞こえてきた。屋敷自体はかなり広い方だろう。サギリが潜んだ二階部分から、ホールが見渡せるが端から端まではかなりある。

現れたのは四人。全員が黒い外套を着ており表情は見えない。手には皮の袋に詰められた何か、が握られている。あれが取引の品物

なのだろう。背の高いのが三人に低いのが一人。

他の護衛を探すが、サギリのいる位置からではわからない。

手持ちの武器は、短剣が4本と投擲剣が16本だけ。

「どれが、てめエだ」

今すぐに走り出したい衝動と、敵を見極めようとする理性が、歯軋りとなって彼女の内側を焼く。肌の下を這い回る憎悪の炎が、恐怖すらともなつて全身を駆け巡る。

気づけば、サギリの心臓は早鐘を打ち左手は知らずに震えが走っている。

吐き出す息は白く、初めて人を殺した時よりも、強張った筋肉は失敗を予感させた。

口元を無理やり弦月に歪ませて、サギリは笑う。

「アタシは怯えている」

隣にいつもいるはずの誰かが居ないのが、不安でたまらない！

あの憎きオウ力を討ちもらすのではないかと、心細さと不安が頭をもたげてくる。

「だが」

「だが、それでも！」

腰に結いつけた短剣を、音を立てないように引き抜くと震える左手を薄く切り裂く。流れ出る血を舐めて、気持ちを昂ぶらせる。

臓腑の奥底から這い上がってくるこの憎悪が、涙を流すほどの狂喜を引き連れて、不安と恐怖を押し潰す。

サギリは震えの止まらない左手に噛み付いていた。

「フウー……フウー……」

噛み付いた左手から血が零れる。それでやっと腕の震えは収まった。

視線を転じれば、ホールの四人のうち二人が袋を交換しあつてるところだった。

袋が受け渡されるその瞬間を狙って、サギリは身を潜めていた二階から飛び降りる。

空中で指の間に挟んだ投擲剣が三つの軌跡を描き飛翔する。動きは最少にして、気は内に潜ませる。極限まで無駄を省いたその動きは芸術的でさえあった。

「なんだ!？」

誰かの驚愕の声と同時にサギリは地面に降り立つ。

足が地面の感触を伝えると同時に、背の低い一人に向かって地面すれすれを、翔る。背の低い外套の男とその連れの間を通り抜けざまに、一閃。

確かな手ごたえを感じ、次の獲物に狙いを定める。立っているのは二人の背の高い男。一人に投擲剣を投げつけ、もう一人の懐へ入ると同時に一短剣の一閃。これにも確かな手ごたえを感じ、振り向くと投擲剣を投げつけておいた方も倒れている。

周囲に満ちるのは苦悶の声。どうやら全員男のようだ。血溜りが見る見るうちに広がり、雨と溶け合い流れていく。

「違うか……」

四人全員の顔を確認したあとに、口から言葉が漏れ出す。

やはり畏だったのか、そう考えた瞬間、砂を踏む音と、不快な鉄が擦れ合う音が耳を捉えた。

サギリは反射的に身をかがめそれをやり過ごす。軽い衝撃とともに、雨を避けるための外套が鎖に捉えられ、剥ぎ取られた。バラける長い髪の間隙から、毒と皮肉の籠った声が鼓膜を打つ。

「いや、見事だ」

廃墟となった邸宅の入り口、その暗闇からその声は聞こえた。

「その不吉な髪の色、顔立ち……昔を思い出す」

擦れ合う不快な鉄の音はサギリの後ろから尚も聴こえる。

「姉に生き写しだ。魔女というのは皆、お前のような姿形になるの
かね? 末の娘よ」

闇にしつとりと馴染んだ暗い声音。

隠し切れない歡喜が、その声からにじみでる。

「久しぶりじゃないか。オウカ」

入り口に立つ小柄な影が、低く晒った。

「母と姉をむざむざ殺された小娘が、ワシを呼び捨てにするか」
憎しみが、サギリの口元を笑みに模らせる。

やっとここまで来た。

その思いが、彼女につかの間、過去の温もりを思い出させ、同時に引き裂かれた冷たさを呼び起こした。

「おぞましき呪われた血統よ。今夜ここで絶えてもらおう」

言葉が終わると同時に、サギリの背後に控えていた気配が再び鎖を振るう。降り注ぐ雨を蹴散らし、鎖は闇に踊る。と、同時にオウカの周囲にはバラバラと人影が立ち並ぶ。

畏だ。

だがそれすらも、恐怖に値しない。

「オウカアアアア！」

激情が空気を震わせる。

腹の底から湧き上がる、この怒りがあらゆる感情を灰にする。

溢れる力が背を駆け抜け腕に宿り、不可視の力場を作り上げる。

腕に溜まったそれを左手の平を介して走る鎖に当て、弾き飛ばす。

右手に溜まった力は、短剣を通じて不可視の刀となす。あらゆる

物を切り裂き、決して切れ味の鈍らない魔女の名刀。ちから

不可視の名刀を握る右手に力を籠める。

狙うはオウカの首！

姿勢を可能な限り低く抑え獣の如く、足の指先に力を集め、自身を引き絞られた矢に見立て解き放つ。

加速する暗い景色の中で、オウカへ至る一点だけが流れずにはつきりとした輪郭を伴っていた。雨除けの外套に隠され一気に広がるその顔を、彼女の刃が貫こうとした瞬間、腕の先に走る衝撃と共に視界がぶれた。

「アズ！ しつかりせぬか」

焦ったような早口のオウカ言葉。転じる視界の先には、無表情に佇む男がいた。雨に濡れるのも構わず滴る水滴が長くもない髪を

伝つて落ちる。その奥から周囲の闇よりも一層暗い瞳が、敵対者を見据える。

足を踏ん張つて勢いを殺し、さつき鎖を弾いた左手の鉤爪を男に見舞う。狙いは過たず、アズと呼ばれた男は吹き飛びサギリの視界から消えた。

「アハト！」

オウカの声が上がるとほぼ同時に、オウカの背後から飛来する飛礫。それを、アズを薙ぎ払った鉤爪の返す刀で弾き返す。

首筋に走るゾツとする気配を感じ身を屈める。直後、頭上を駆け抜ける風圧を伴つた鎖。

バシャリ！

オウカの背後から大きな黒い物が飛び上がった。それが人だと判断出来たのは、それが飛びながら曲がる飛礫を放つたからだつた。

曲線を描き飛来する飛礫を同時に六つ叩き落とした所で、アハトがサギリの頭上を越えた。

そうなることで出来た空間の隙間、オウカへ至る最短の道筋を全力で翔た。

飛礫を受け流し体勢が崩れたまま、飛翔したので牙と鉤爪を引き摺るように体が前へ出る。着地したアハトの位置を音で見当を付け、サギリとオウカの位置を確認する。

背後からの投擲は無い。少なくともアハトが着地した位置からではサギリとオウカが直線で重なる。

場所を変えるまでにはオウカを仕留める。彼女にはその一瞬で充分だ。

サギリは心の中で喝采を上げた。遮るものは何もない。

後一撃、牙でオウカの喉笛を噛み切れば終わる。期待と安堵に身を委ねようとしたサギリを衝撃が襲う。

薄く笑つのはさつき吹き飛ばしたはずのアズ。構わず、振るつた牙にアズが二叉のダガーを合わせるのが見えた。

暗夜に、火花が咲いて散つた。

「てめえ！」

怒りに任せて左の鉤爪を叩きつけようと腕を持ち上げた瞬間、左の脇腹に思い切り殴られたかのような衝撃が走り、骨が嫌な音を立てた。

鎖！？

サギリの空白に、目の前の敵は、一片の迷いも無く得物を振り下ろす。

彼女は飛び退いた。反撃する余裕も無く、目の前の一撃をかわすため、反射的に行ったその後退に、飛礫が襲い来る。逃げ場の無い空中、がむしゃらに振るった鉤爪の隙間をすり抜けて、左の太腿と右の脇腹を切り裂かれた。

「くっ……」

思わず苦悶の声が漏れる。

「血をあまり流させるなよ。奴にはまだ用件がある。他はどうなっても構わんが」

サギリの口元が、赤く下弦の月を思わせる。

「可笑的いか、末の娘」

「ああ、アンタさつきアタシを殺すって言わなかったかい？」

傷口から流れ出した血が、体力と熱を容赦なく奪う。だが、サギリの念頭には残りの体力の計算などはなからしていない。

「用があるのは、貴様の血のみだ。貴様自身が生きようと死のうと、わしには興味ないでな」

「だから、貴族つてのはバカなんだ。一定量の血を抜いたら人間は死ぬんだよ。等しくな！」

「ああ、人間ならばな……」

その侮蔑を含んだ言葉に、過去の罪業が記憶の瘡蓋を引き裂いて血を流す。

「わしは貴様等を人間としては認めぬ。貴様等は化け物だ！」

オウカの声を合図に再び、アハトが飛礫を放つ。憎悪一色に塗り替えられそうな頭で、彼女は飛礫を避けつつ、アズへ向かった。

無数の火花を散らしながら、サギリは目の前の敵を乗り越えることが出来なかった。一つ牙を振るう度、苛立ちが募る。一度、鉤爪を避けられる度に、焦りは一步近づいてくる。

血を流す体は徐々に力と集中力を失い、呼吸は次第に困難になる。それでも彼女にとつて救いなのは、サギリとアズのが打ち合っている間は、飛礫も鎖も襲って来ないことだ。

優勢に打ち合っていたものが互角に、そしてすぐそれが劣勢に変わる。一瞬が何十倍にも引き延ばされたような苦しみの中、サギリの気力を支え続けたのは、怒りと憎しみだった。

あと少し、あと少しで長年憎み続けた敵に手が届く。力を蓄え、腕を磨いた。人の殺し方も覚えた。幼い少女だった彼女の、父を、母を、姉を、幸せを奪い取ったにくい仇まで、あと少しで届く。

泥を舐め、這いつくばったのも一度や二度ではない。命を危険に晒してきたのも、数え切れない。折れた肋骨も、血を流す太腿も脇腹も今まで味わって来たものに比べれば、大したことは無い。

「茶番もここまで」

打ち合うサギリとアズを眺めていたオウカは、後方に向かって声をかける。

ぞろぞろと闇の中から湧き出る護衛の兵に暗殺者。金に糸目をつけず、招きよせた異国の武人。

その数を視界に納め、三度彼女は鉤爪でアズを吹き飛ばした。

「上等だア、上等だよ……皆殺しにしてやる」

深淵にすむという鬼のが、彼女に憑いたかのようにその笑みは壮絶極まりないものだった。

「どこいったんだ」

ロクサーヌの町並みを眺めながら、ジンは不満に鼻を鳴らしていた。

ちよつとでてくると、言つたまま一向に戻る気配のないサギリ。夕闇が迫る時刻にはまだ時間があるが、今日はやけに胸が騒いだ。「出るか」

クルドバーツの店を出て街を歩く。混雑する町並みを避けて、裏路地を歩く。

表の熱気を避けるように、寂寥の支配する裏路地。時間がたてばたつほどに、胸の騒ぎは大きくなる。

イライラとしたまま何度目かの裏路地を抜け出すと、そこは一転開けた区画に出た。

表の熱気には及ばないまでも、市場バザールの熱気はガドリアの比ではない。さまざまな人種と様々な品物が流れ着く裏の市場。

奴隷、邪教の徒、賊徒の類。盗品を扱う商店や、発掘品を並べる露天、新鮮な果物は相応の値段で売られ、怪しげな薬は所狭しと並べられる。

「くそっ」

引き返すのも癪に障つたジンはそのままその市場を通り過ぎようとし、一人の男と肩をぶつける。

「おい！」

声をかけたのは、ぶつかった大男の取り巻きだった。

不機嫌なままに鋭い視線を向けたジンに、一瞬ひるんだものの、取り巻きはジンの肩に手をかけて怒鳴る。

「てめえ、誰にぶつかったと思つてやがる！」

ジンが見上げるその男は。

「ん？ どつかで見た顔だなあ兄ちゃん」

前に一度であつた異様な巨軀の男。

「ベイシュさんに、詫びのひとつも言えねえのか」

ジンの耳にはほとんど入らない怒声と、ルクをさらつた時の記憶が鮮明によみがえる。

「確か……」

「ああ。昔、俺の獲物をさらってくれたな」

口元に狂気の笑みを浮かべる。目に宿るのは殺気の焰。

胸の奥の苛立ちとあいまって、当り散らす相手を見つけた凶暴な感情が出口を求めていた。

「おお、あのときの」

ベイシユも同様に獰猛な笑みを浮かべる。

一瞬にして二人の間には、空気すら死に絶える緊張感がみなぎる。

「あの、お知り合いですか？ ベイシユの旦那」

取り巻きの声に、ベイシユが視線をジンから離さずに口元だけで笑う。

「まあちよつとな」

ジンの目はベイシユの隙を伺い、ベイシユの視線は猛獣すら威圧するほど力がある。

二人の間にただならぬ空気に、ようやく気づいた取り巻きが唾を飲み込んで一歩下がる。

「ちよつと、何やっているの！」

今にも殺し合いを始めそうになっていた二人を止めたのは、女の怒声。

二人の視線の先には、波立つ銀の髪を一つに束ねた女が走りよってくる姿。

「ロメリアか」

舌打ちして去ろうとするジンに、ベイシユが声をかける。

「待ちな……兄ちゃん。面白い話があるんだが、のらねえか？」

背を向けるジンが無視して足を踏みだそうとして。

「双頭の蛇、聞いたことあるだろう？」

聞き捨てならない言葉に、足を止めた。

「なに？」

振り返ったジンに、不敵なベイシユの笑みと駆け寄ったロメリアの怒声が聞こえた。

「死ねエ！」

魔女の哄笑は血しぶきを伴って群がる一騎当千の実力者たちを血の海に沈めていく。無駄な動きを最小限に収め、相手に触れさえせず、人を斬るその姿は、舞踏を舞う巫女シャーマンにも見えた。ただし彼女の周囲では彼女が腕を一度振るうたび、断末魔の悲鳴があがる。血が夜の闇を染め上げる。

極限にまで研ぎ澄まされた彼女の感覚が、降りかかる剣の雨を、打ち寄せる槍の一撃を、背を襲う暗器の刃を、その身に触れさせることを許さなかった。

積み上げた屍の数は、ゆうに20を超え。
そしてその数はさらに増える。

鮮血に濡れて輝くサギリの妖しい魅力が、襲い来るオウカの護衛をさらに減らしていく。

「手間取らせおる」

だが、その魔女に狙われているはずのオウカは自身の優位性をまったく疑っていなかった。

「鎖を使え。いつまで手間取るか」

夜半も既に過ぎている。

狂気に吞まれそうになっていたオウカの護衛たちは主の声で目を覚ます。

闇の中から放たれる鎖が縦横に走る。

サギリの小さな身体を外側から囲い込むように走ったその鎖が、徐々にその範囲を狭め彼女を捕らえようとその手を伸ばす。

闇に擦れ合う鉄の不快な音が響く。並みの者ならその先の未来を想像して恐怖を伴って聞く音に、サギリは瞬時の躊躇いすら見せず

迫り来る異国の武人と対峙する。

振り下ろされた斧に似た武器を交わし、懐に入り込む。途端に繰り出される膝蹴りを。

「ぐあ
」

左手で押し潰す。

下半身の崩れた男に、右手を振るってトドメを刺す。

すかさず左右から襲い来る敵にサギリは舌打ちした。砂糖に群がる働き蟻のようだった。その想像に吐き気がする。

鉄をこすり合わせる不快な音が、サギリの耳に届いたのは直後だった。

四方から迫りくる鎖の鞭。

受けきれないと判断して空中に身を躍らせるが、そこにすら頭上と四方から鎖が迫る。

「こんのっ！」

左手の爪をもって迎え撃つが、頭上と後ろから迫る鎖には爪すらも届かない。彼女の小柄な体躯を打ち据える重い一撃は巫女の舞踊のための体力を確実に奪い去る。

背と左肩を襲った一撃は、彼女を中空から地上へ叩き落した。

「オウカア！」

怨念の炎を瞳に揺らし、痛みを憎悪に転化する。

地上に降り立つと同時に彼女はまたしても駆ける。その小さな体のどこにそんな力があるのかと疑うほどの跳躍力とその持続力。

吐き出す息は焰よりも熱く、彼女の内側を焼く。

立ちふさがるオウカの暗殺団。

彼女の突進を防ごうと、長剣を盾にして牙を受け止める。如何に不可視の刃といども、腕の振りから察すればどこを狙っているのか程度は、熟達者になれば容易にわかる。

不可視の刃と長剣が火花を立て、彼女と暗殺者の体がすれ違う。

そのわずか一瞬、彼女を止めようとした暗殺者の体は彼女の爪によって宙に舞い上がる。横から入れられる槍の一撃を、服を掠めさ

せるだけにとどめて、相手の顔面に肘打ち。さらに足元を浚う鎖の動きに、彼女の体は再び宙を駆ける。

振るわれる刃と刃の合間を縫うように、彼女は血路を切り開く。だがそれにも限界がある。

憎悪に身を焼き、沸騰する頭でもサギリは自身の限界が近いことを悟っていた。

後退の二文字が脳裏にちらつく。取り囲まれている状況の中で、わずかな隙間から周囲を確認する。迷いとなってしまう前に、彼女は引こうとし。

「そういえば、忘れていたが」

オウカの言葉に足を止めた。

「貴様の姉は、実に健気なものだった。自身の命よりも、貴様を救えと煩くてな」

心底おかしいのだろう、オウカの言葉に嘲笑の色がある。

「あれは、人外のものなれど……いや、だからこそか？　なかなかにそそる声をだしおったぞ」

「オウカアアアアア！」

サギリの思考が一瞬にしてはじけ飛ぶ。身の内に流れる力が、彼女の感情に火をつけ、あつという間に燃え上がる。

「クカカツカツカ！　あの娘はな、死ぬ直前までわしに嬲られていたのだ。そうして、わしに嬲られながら、この手で殺してやった！」

「てめえが、仇かアア！」

我武者羅にオウカに向かって迫るサギリ、振るわれる横なぎの槍の下をくぐり、投げられる飛礫に肌を裂かれながらも、立ちふさがる者共を叩き伏せる。

彼女の目に映るのは、姉を殺した男のみ。

その彼女の前に、アズの姿。

「どけエ！」

左腕の爪でなぎ払おうとし、その腕に絡まる鉄鎖の重みに、目を見開く。

「つち」

一瞬気をとられた直後、彼女の体に幾本もの戒めの鎖が巻きつく。四肢を固定され、それを引きずるようにして彼女は前に出る。

あと少し。

「オウカアア！」

「面白い手品だったぞ、小娘」

怨嗟の声と、アズの一撃がサギリに降り注ぐのは同時だった。

ベイシユの宿には、彼の声かけで数十人の男達が集まっていた。いずれも腕の立つものたち、その中心に、ベイシユとロメリアそしてジンの姿があった。

「いいか。まず二組に別れて西区の川縁を探す。見つけたら無理せず、知らせを走らせる」

「わかっています」

ロクサーヌの詳細な地図を覗き込み、武装したロメリアは答える。腰に差すのは銀羽の細工も見事な細剣。急所だけを守る軽装が往年の伝説を髣髴とさせる。

「あの子のためですもの」

深緑の瞳に宿すのは、幾百の戦場を駆け抜けてきた鋼の意志。

「では、先に行きます」

「おう、気をつけてな」

ロメリアを見送るベイシユに不安の色はない。少なくとも周囲にはそう見える。

「さて、俺たちは北区の今は使われていない貴族邸だ。俺の勘じゃここがくせえ。ぬかるなよ」

それだけで周囲の男達は決意の頷きを返す。

「兄ちゃんは、俺についてきな」

「ああ」

軽く頷いてジンはベイシユの背を視線で追う。

双頭の蛇の女頭首が、オウカ・ジェルノと一戦やらかすらしい。そこで俺たちは、その健気なお嬢さんに加勢しようってのさ。先ほどベイシユから聞いた言葉を、その背を見ながら思い出していた。

サギリがオウカ・ジェルノの首を狙っていると聞いていたジンにそれほど驚きはない。問題は、なぜこいつらが、その情報を仕入れられたのか。そして本当にサギリに加勢するのか、ということだ。

例の胸騒ぎはいまだに大きくなっている。

不快な胸の騒ぎを意識の外に追いやり、柄にもないと思いながらジンはサギリを加勢するという一派に加わっていた。

復讐するは我にあり5 (前書き)

重くて暗い話になっています。

あとついでにぶっ飛んでいます。

覚悟をして読んでくださいます。

復讐するは我にあり5

ロクサーヌの暗闇が黒鳥の羽のように、舞い降りる夜。

街の西区、すなわち由緒正しい貴族の邸宅群は、シユネルピア静寂に包まれていた。その中を、駆ける一群の者たちはかつて閃光と呼ばれた女剣士を先頭に二十人ほど。

油断なく周囲に目を光らせ、音を立てずに進む様子は奇襲を仕掛ける少人数の部隊に見えた。

「オウカ・ジェルノの邸宅……ではないようね」

先年のロクサーヌでの動乱の折、オウカ・ジェルノが当時住まっていたジェルノ家の邸宅は焼け落ちていた。今は別邸をその孫に当主の座とともに譲り渡している。

火の消えたようなその様子に、見切りをつけると他の邸宅を探すべく足を向ける。

「私たちに何も言わないで……」

いや、半ばわかっていた。サギリがロメリアやベイシユらに頼ることなく復讐を企てていることは、わかりきっていたこと。

だから、危険を冒してロクサーヌに留まり市街にオウカ・ジェルノに張り合えるだけの情報網を築いてきたのだ。

サギリが一人で走り出してしまったのを知ったのは、その情報網に引っかかった情報からだった。

「言っても仕方ないわね」

黒鳥の羽のような夜の闇をロメリアは睨んで、部下たちを率いて行った。

一方由緒正しい貴族の邸宅群シューネルヒアを東西に分けるクルン河。西側を進むロメリア達と平行に、ベイシユ達も川の東側を搜索して回っていた。

人数はこちらのほうが少ない。10人いるかどうか、その中にジンの姿もある。

「ここらはまだ、内乱の傷跡が残ってるな」

夜の闇に黒衣の衣装をまとったベイシユが周囲をねめつける。

戦場に立つ將軍のように威風堂々と周囲を確かめるその様子に、

ジンは眉をひそめた。

どう考えてもサギリや自分達、賊徒達と一緒に行動するような輩には見えない。

周囲には、焼け焦げた邸宅跡。没落したか、あるいは復旧もままならず打ち捨てられた邸宅跡が連なっていた。

「……どうやら当りを引いたらしいな」

ベイシユの言葉に、ジンは周囲を見渡す。よくよく注意してみれば、薄っすらと敵意らしきものが漂っているのを感じた。

「ちっ！」

風きり音とともに飛来する飛礫。

舌打ちを残して、勘を頼りに飛びのく。

と同時に、廃屋の影から走り出る敵の姿に、ベイシユとジンは距離をとった。

ジンが鈍いわけではない。それが証拠にベイシユの率いてきた者の中には、飛礫に当たって怪我をするものが続出する。

ベイシユが鋭すぎるのだ。

「ロメリアに知らせだ。走れ」

ベイシユの指示に従って数名の手下が伝令として走る。

闇の中待ち伏せしていた敵をぐるりと見回して、その数の多さにジンは内心舌打ちしていた。人数だけでなくそれなりの実力を備えていることは、ジンに気配を悟らせなかったことでもわかる。

こちらの人数は10人を切り、すでに負傷者も多数。
その圧倒的に不利な状況に、ジンは引くことも考えるが。
「つつ!?!」

頬を掠めた敵の刃に、思考を中断させられる。小太刀を抜き放ち、
応戦しつつ距離をとったジンに、ベイシユが笑いかける。

「兄ちゃん、どうした。意外と慎重なんだな」

こともなげに、腰から抜いた大刀を一閃。

ベイシユに迫っていた敵の二つの首が落ちる。

一拍遅れて吹き上がる血しぶきに、敵味方の動きが止まった。

「ベイシユ・ライラックの名を聞いて、尚向かってくるヤツアいる
か?」

王虎が獲物を見下すように、名を告げるベイシユ。

威圧の風すらともなつて、ベイシユは周囲を睥睨する。

ざわりと敵が動揺した。

その隙を見逃すほど、ジンはお人よしではない。

瞬く間に目の前に迫る敵を切り伏せると、動揺する敵に向かって
瞬時に肉薄する。

刃を二閃。暗闇に血しぶきの音だけが二条の線を描いて飛び散る。
さらに動揺が広がる中を、ジンは獲物を蹂躪する。

敵も味方もほとんど声を立てない争いの中、ジンの奏でる風切り
音と、ベイシユの振るう大刀の轟音が敵の骸を積み上げる。

結局ほとんどの敵を、二人で仕留めることに成功し、生き残った
捕虜を荒っぽいやり方で尋問するとオウカの居場所を突き止めるこ
とに成功した。

「まあ上々だろうよ」

勝者の余裕で笑うベイシユ。

だが、ジンは胸騒ぎがひどくなりすぎて、頭痛までしてきていた。
割れるような頭痛が、ジンを蝕む。

「なんだ、気分でも悪いのか兄ちゃん」

やれやれと、肩をすくめるベイシユにジンは睨み返すが、頭痛は

立っていることも困難なほどになっていた。

「おい、誰か肩を貸してやれ」

ベイシユの部下からさしだされた手を払う。

「一人で歩ける」

渾身の力をこめて睨むと、ふらふらとベイシユの後に続いて殺戮の場を後にした。

振りかぶられた刃が頭上から落ちてくる。

雷鳴を想像させるその速さに、サギリは咄嗟に首をそらせた。

直後鎖骨から響く、鈍い音。直後に遅い来る痛みに、自身の鎖骨が折れたことを知った。

「つく、あ、ああ!？」

力の入らない左腕は死んだものと考えねばなぬまい。

骨を折られた激痛に湧き上がる悲鳴を押し殺す。

満身の憎悪をこめて睨むが、アズの顔には冷笑しか浮かんでいなかった。

続けて振り下ろされる一撃は再び折れた鎖骨を襲う。

「あ、あ、」

声にならない悲鳴を上げるサギリに、アズは薄く笑い。

そうしてオウカが、彼女の前に立つ。

「久しぶりだ。化け物め」

口元には嘲笑の笑み、だがうな垂れるサギリを睨む瞳には、百万の憎悪を宿す。

「オウカ……」

小さくささやく様にして呟かれた彼女の声。

がちりと、彼女の奥歯がかみあわされた音がする。

「オウカアア!」

の冗談でもあるかのように。

「何が、おかしい」

小さな怒声に、尚もその老人は笑い続けた。

「貴様の言うオウカだが、死んだよ。“俺”が殺した」

突然の告白に、サギリばかりでなくアズも怪訝な視線を向ける。

「何を、てめえ、何を、言っ……！？」

かすれる声で問いかけて、サギリは直後目を見開く。

オウカの瞳の色。

記憶にあるその男はこんな瞳をしていなかった。

「てめえ、誰だ？」

目の前の老人は、徐々に理解の色が広がる無力な女を楽しそうに見下ろす。

「俺が誰か。クッククク……」

「……トウカ、か」

確信を持ってないながら、恐る恐る呟いた名前に目の前の老人は嬉しそうに目を見開いた。

「ほう、思い出したか？」

言葉から滴るような憎悪が、サギリの肌を刺す。

「死んだ、はずだ」

「それは貴様も同じこと」

今まで作っていた温和な老翁の顔など、今はかけらも残っていない。

「貴様らの血に、呪われた我が臍腑」

だが、記憶の中のトウカではいまだ三十台の半ばのはずだった。

「この姿が不思議か？ 老いたこの姿が！」

白髪の老翁。サギリの記憶にあるのは、若々しいトウカの姿だけだった。

「答えは貴様ら魔女の血にある。皺枯れた忌まわしきこの身になっ
てしまった理由もな」

彼女が最後にこの男を見時、この男はまだ二十台だったはずだ。

このような姿になるには早すぎる。

「まだ、時間もあることだしひとつ昔話をしてやろう。貴様は自身の血に特別な力があるのを知っているな？」

サギリの答えも聞かずオウカは続きを話す。

「最初に気づいたのは、ヘルキオスだ。奴は、我が父オウカ、アトリウス、侍医のカンサスと結託して、兇王を追い落とした」

裏切りの王弟と共謀者。

「王亡き後、その美しき妻をその手にかけてとき、剣についた血を啜ったのだ」

まるで悪魔の所業だな、と低く晒うトウカ。

「湧き上がる力にヘルキオス自身が戸惑い、そのうちにその力は霧散したらしい」

愉悦に身を任せ、トウカは喋り続ける。

「そこで目を付けたのがお前ら姉妹だ。だがヘルキオスは臆病で、自身二度とその血を飲もうとは考えなかった。そこで白羽の矢が立ったのが、俺……クッククク」

サギリ息をするのも忘れて、その話に耳を傾ける。

「オレを生贄に差し出したのは我が父だ。裏切られる恐れもなく、力を得ても問題ないとな。結果がこれだ」

自身の顔を撫で、皺を確認するように指を沿わせる。

「オレは父の愛と若さを同時に失った。役に立たぬと切り捨てられたよ」

歪に晒うトウカが頂垂れるアタシを覗き込む。

「イシキアには、そこで気づかれた。仕方なく仲間に加えたがね。末の娘、そう無関心を装うな。貴様の母が死んでからのわずかばかりの平穩はどうやって購われたと知っているのだ？」

獣のような唸り声が、サギリの口から出ていた。

「切り刻まれる貴様の姉の声を聞いたことがあるか？ あれは化物ながら中々そそのものだったぞ！」

奥歯をかみ締めた歯軋りの音が、脳髓を焼く。

「挑発には乗らぬか。まあよい、続きだ、我ら同志は一つの結論に達したのだ。人にはこの力は宿せぬ、とな。そこで、我が父たちは人が人になる前ならば、どうかと考えた。つまり胎児だ」

トウカの話聞きながら隙をうかがう。

出血のひど過ぎる体。満足に動かない腕、全身に走る痛みは、気を抜けばすぐにでも意識を奪い去ってしまいそうだった。

「今の王と、その騎士などもそうだが実験は成功しつつあるようだ。全く喜劇というしかない。ヘルキオスなどはせっかく手に入れたその駒に殺されたのだから」

「いつから、だ。いつから、なりすましていやがった!？」

「いつから? クツクツク……ずっとだよ」

一人の人間の感情がその場を押し潰すほどに重い。

トウカはサギリを睨み付ける。

「貴様が追っていたオウカだがな、最後に面白いことを教えてくれた。今の俺の孫がいるだろう?」

懐から取り出した紫紺の宝石を額に突き当てられる。

「あれはな……俺の息子ではない。“弟”だ」

目を見開くサギリに、トウカは笑いかけた。

「アレが、わが妻の腹の中にいると知ったとき、俺はオウカと成り代わった」

哄笑の声は狂気の色を帯びる。

「妻はアレが生まれると同時に殺してやったがね。最後の言葉は“愛している”だとさ。クツクツク……カッハッハッハ!」

いまだやみの支配する天を見上げ、トウカはおかしくて仕方ないという風に嗤う。

「わかるかこの意味が! 実験に失敗し塵芥のごとくに扱われた俺がどのような思いで、生きてきたか。愛するものを全て奪われたこの屈辱が! オウカを殺しても尚消えぬ、この憎悪が! 貴様にわかるというのか! クツクツク、カッハッハッハ!」

紫紺の光は徐々に大きくなり、夜の闇を染め上げる。

「ああ、あああああ!？」

サギリの全身を焼くような痛みが走り、急速に額に当てられた紫紺の寶石に吸い寄せられていく。

「王も、騎士も、全ての元凶である貴様らを駆逐し、約束されたはずの未来を取り戻す! 当然だろう!？ 失ったものを思えば、せめてそれぐらいはなくてはなア!」

狂笑の音が響く。

憎悪の獣となったトウカの叫びが紫紺の光の照らす闇を震わせた。

「あの建物か……」

千切れた雲が、月が青白く闇夜を照らす。

風は死に、虫の声も聞こえない。その中を、ジンはベイシユと共に廃墟の前に佇んでいた。

嫌な予感がする。胸の奥に虫が這い回るような不快感。

崩れかけた屋敷に近づくとつれて、強くなるソレを振り払うように一度腰の小太刀に手を当てた。

「ここでいいんだな？」

痛む頭を無視してジンがベイシユのほうを見る。

「信用しないならそれでもいい。で、他に当ては？」

ジンの胸の奥で、悲鳴を上げるものがある。魂が引き裂かれるようなおぞましい悲鳴。人の動く気配を感じて、ジンは一気に駆け出した。背中呼び止めるベイシユの声が遠くなる。

いる。

敷地を守る門の場所に二人。驚く気配を感じたが何もせず通り抜ける。

更にその奥、屋敷の玄関に、もう二人。今度は有無を言わせず切り掛かって来た。ソレをすり抜けて、更に奥へ。

どこだ、どこにいる！？

背中に響く怒声を無視する。

玄関を抜けると、長い通路があった。一息で駆け抜けたその奥壁の崩れたホールに入った途端、ジンの視界を紫紺の光が覆う。咄嗟に腕を前に出し、視界を絞る。

光が引いていく同時に、ジンはその光景を見た。

鎖で腕を後ろに組まされ、横たわる女とそれを囲む何人かの人影。胸の奥から聞こえてきたのは、歓喜か絶望か。

「サギリイイ！」

サギリを囲んでいた人影が一斉にジンに振り向く。その人影めがけて、ジンは全力で駆け出していた。腰の小太刀を一気に引き抜く声にならない怒りが渦を巻いている。

全力で駆け寄るが、それでもまだ遅いくらいだ。

速く、もつと速く！

一人はサギリからさっと離れて行き、残った何人かはジンに向かってくる。

「邪魔を、するな！」

真上に放り投げられた鎖が、生き物のように曲がりくねって襲い掛かってくる。必要最小限の動きでそれを潜れば、待ち構えているのは二股の短剣を構えた男。

鬱陶しい。

ジンはその男を相手にせず、頭上へ飛んだ。

より高く遠くへ……サギリのそばへ！

胃が持ち上がるような浮遊感を経て、降り立ったのは傷つき倒れたサギリの傍らだった。足の裏から走る衝撃を、膝から逃がすようにして着地する。

「サギリッ……、おい！」

「何をしている！ あの娘を奪い返せ！」

怒声に呼応して、周囲の敵はジンを包囲する。

小太刀を構え周囲の敵を牽制しながら、サギリの様子を伺う。目

を閉じ、何の反応も返さないサギリにジンの中の不安が色濃くなる。グラリと、意識の片隅に妹とサギリの姿が重なる。

殺してやる、殺してやる。皆殺しだ、皆殺しだ、皆殺しだ。意識が、裏返る。

「……憎い、憎い、憎い憎い憎い憎い」
赤く、赤く染まる瞳。

自分自身にだけ聞こえる程の音量で、口がその言葉を無意識に紡いでいた。身の内のどこに潜んでいたのかと思えるほどの、憎悪。片方の目に映る敵。もう片方の目には、真っ黒な月を背に十字架に張付けられた女が、血を流しながら晒ってやがる。

誰だ、これは？

右手を小太刀に、左手で頭を抱える。

サギリを、助けなければという意味と、目の前の全てを殺し尽くすと言う意思が闘ぎ合いを始める。

視界に映るのは真っ赤な女の口。自分の意思と関係なく視線が固定されてしまう。

「憎い、憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い憎い……」

その女が発する言葉が、ジンの口から洩れていく。知らない女だ。なのに、ジンはそれを良く知っている気がした。忘れ去ってきた懐かしい記憶の彼方、遙か昔に犯された。

黒い月を見ていた眼の景色が鮮明に、逆に敵を見ていた風景が霞む。

ふと、倒れているサギリが視界に入った。

助ける、今度こそ、お前を。

その意識は刃に似る。綱が切れてしまうように、その憎悪と景色は繋がりを切ってしまった。

敵がにじり寄ると、ジンの両手が小太刀を引き抜くのは同時だった。

対峙するジンと敵の緊張を破ったのは、通用路から吹き飛ばされた人影。悲鳴を上げて地面を転がるその人影に、その場の全員が気

を取られる。

「おい、兄ちゃんこつちは片付いたぞ。館の周りも包囲したしなア」
緊張感の欠片もなく、頭をガリガリと掻いてやってきたのはベイシユ。

「まだいやがったのか……」

そう言ったきり、ベイシユの視線はサグリの上で止まる。

「……おい、兄ちゃん。そりゃ一体何の冗談だ？」

そう言葉を発したベイシユの纏う雰囲気の変化に、その場の空気が凍りつく。

視線で人を射殺せるほどに、その視線は鋭く俺を射抜く。

「わかんねえよ」

「わかんねえだあ？ わかんねえじゃねえだろうが！」

離れていても感じる圧倒的な威圧。

「俺は医者じゃねえんだ！ わかるわけねえだろうが！」

その威圧を吹き飛ばすように、声を荒げた。

「医者？ じゃあなんでさっさと……ん、ああ、そうか。おいガキども見逃してやるからさっさと失せろ」

視線をジンから逸らし、ジンを包囲していた敵に順番に向ける。びくりと、戒めが解かれたように固まっていた敵は顔を見合わせる。

「わかんねえのか？ 失せろと俺は言ったぞ」

ベイシユのごつい手が、腰に吊るした大刀に伸びる。

徐々に後退を始める者と、反対に一步前へ出る一人。その対応に驚愕を露にしていたのは他ならぬ、後退をした者達だった。

「退くのか、退かねえのか！ どっちなんだ」

またじりつと二人は下がり、二股に分かれた短剣を持った男は一步ベイシユの方へ進む。

「そうか、死にてえらしいな」

砂を踏む音がベイシユの足元から聞こえた。ベイシユが前へ出た。
「アズ！」

後退する二人から、前へ出る一人へ声がかかった。
笑っていた。

アズと呼ばれた北方の戦士が。
狂気に満たされた笑みを浮かべ、アズはもう一步前へ出る。

「アズ！」

仲間の呼ぶ声を無視して、ベイシユの方へ近づく。と、その体へ
一瞬にして鎖が何重にも巻きつく。

「退くぞ」

鎖を持っていない背丈が少し小さい人影が、二人に呼びかけ抵抗
するアズを引きずって月の光りの届かない闇の中へ消えていく。気
配が消えたのを確認すると、ジンはサギリを抱き上げる。腕に滴る
生暖かい血が、どうしようもなく彼の心を掻き乱した。

復讐するは我にあり6

「ねえ、あなた」

向けられる笑顔は、深い信頼の伺えるもの。

それだけでどうして、彼女を愛おしく思えるのか。自分自身でも不思議だった。

「私幸せよ。とつても……」

傍らに立つ伴侶の言葉に、自身はどう答えたか。

もう、名前も思い出せない女のことだった。

ベッドの上で眠りにつく前は、疲れているようだった。

折れた骨と、ひどすぎる出血。左肩の筋は断ち切られ、もはや以前のようには剣を振るうことは叶わないだろう、と下された宣告。

主と剣を交えている時のみが彼にとつての至福の時間だった。

最初は命の奪い合いだったはずが、それがいつしか確かな繋がりとなって主と従者を結ぶものとなっていた。

もはや戻ってこないその時間に、ジンは彼女の傍らで俯く。

彼女は、唯一自身の上に君臨するべき主は　越えるべき目標は
もう戦えない。

ベイシユの口から聞いたその言葉は、ことのほかジンの心を打ち

のめした。

サギリの両の手で振るう短剣を越えるため、ジンは技量を磨き、敵を打ち倒し、命を懸けてきた。

それなのに、それなのに……。

「あいつが、奪ったんだな」

オウカ・ジェルノ。

サギリが最後に狙っていた男。王都ロクサーヌに巢食う、魑魅魍魎の主。

俯いていたジンが顔を上げる。

赤く変色した瞳が、怒りと狂気に染め上げられていた。

「殺して、やる。俺が、殺してやる」

かみ締めた奥歯は軋みをあげ、握ったこぶしは怒りで震える。

眠ったままの彼女の横顔を、最後に一瞥してジンは部屋を出て行った。

「あの子のそばにあげなくていいの？」

部屋を出たジンに話しかけたのはロメリア。

心なしか怒ったようなその口調に、ジンは無言のまま背を向ける。

「あの子が起きた時貴方がいなかったらきつと悲しむわ」

背中から聞こえた声に強く頭を振る。

「サギリはそんなやわじゃない」

ざり、と奥歯をかみ締める音が静寂の廊下に響く。

「そうやって……みんなであの子を追い詰めるっ！ 自分の勝手な

理想をあの子に押し付けるのはやめて！」

「違う！」

その言葉はジンの心に抜けない楔を打ち込む。

ジンにとってサギリは特別だった。

超えられない壁として存在してくれていたサギリ

そのサギリが負けた事実は、ジンの小さな世界の崩壊だった。

この世界に恐れるものなどなく、どこまでもサギリの背中を追い

かけて走っていける。

博徒達の振るう刃の中も、戦塵舞い散る戦場も、人外の化け物どもが振るう凶器の間ですら、彼女と一緒にならば駆け抜けられるとサギリさえいれば何も恐れるものはなかった。彼女が命じれば、それこそ命すら厭わず戦い抜くだろう。

死ぬまでサギリの背を追い続ける。

深淵の闇の中、自身と世界の全てを憎悪していた少年に差し伸べられた最後の道標^{すくい}。

それだけが、守るべき者を、自らの手で殺した少年の唯一の望み。「違わない！ あの子は本当は戦いなんてできるような子じゃない！」

ロメリアの記憶の中の少女は、穢れを知らない優しげに微笑む王宮の中にいた。

両親と姉に囲まれ、幸せな庭園の中にいた。

怪我をしたロメリアを、心配だと泣いてくれた少女。

焼け落ちる王城を瞬きすらせず呆然と見守るしかなかった少女。

穢れを知らないあの小さな手で、人を殺すなんてことがあの子の望みであるはずがない。

「サギリは強い！ 俺よりも、誰よりも……だから」

「あの子は強くなってる！ 傷ついて、片腕しか使えないあの子をまた地獄の中のような争いの中に巻き込むの！？ いい加減にして！」

ロメリアの言葉に、崩れかけていたジンの心は悲鳴を上げて。

「違う……」

ジンの弱弱しい否定の言葉は、自分自身に言い聞かせるためだった。

「もう、あの子を戦いに巻き込むのはやめて……あの子まで亡くしたらもう」

その言葉に振り返ることなく彼は彼女の前から逃げ出した。

サギリの匿われている家から逃げ出したジンは、当てもなく街を彷徨う。

ロメリアに打ちのめされた心が、足取りを重くし、目は意志の光を失う。

それでもあてどなく街をさまよう。

まるで幽鬼のように、ただ歩く屍のように。生気を感じられないジンの肩が誰かとぶつかり、ジンは体勢を崩してその場に崩れ落ちた。

お前はアタシの為に生きてアタシの為に死ね！

「気をつける！」

投げかけられる罵声に反応することもできない。

気に入らないんならアタシより強くなつてアタシを殺せ。

「サギリ……」

ほしければ、奪ってみるとかつての彼女は言った。

だが、もう戦えない。

「あ……あ」

土に汚れた手でジンは顔を覆ってしまった。

彼は他に、心の痛みに耐える術を知らなかった。

「俺は……」

彼が求めれば求めるほど、彼女は傷つき、地獄に堕ちていく。

声が聞こえる。優しい姉さんの声。

「大丈夫、私がきつとあなたを守るから……」

温もりが、安らぎが、胸を締め付ける。暗い暗い闇の中、そこだけが暖かく薪に燃える火のように闇を照らしていた。

怒声、私を呼ぶ声。この声は誰だっただろう？

冷たい水の中を漂うような浮遊感。次第に寒くなっていく、姉さんの暖かさが次第に遠のいていく。

「大丈夫、私がきつとあなたを守るから……」

繰り返される姉さんの声。何十、何百、何千回、無数に延々と繰り返されるその声には吐き気を催した。

「大丈夫、私がきつとあなたを守るから……」

まるで、呪文のように繰り返されるその声。温かみはすでなく、覚えているのは私に向けられた笑顔だけ。

だが果たして、向けられた笑顔が憎しみでなかったと誰が言えるか？

だって姉さんは、私のために死んだのだ。私が殺したに等しい。

屑どもに良いように扱われたのも、私を守るため。最後は私を守るためにその命までを使い果たしてしまった。

まるで、そう強大な呪詛の言葉のように、姉さんの声は繰り返す。

「大丈夫、私がきつとあなたを守るから……」

私を見つめる笑顔の奥に、嫉妬や憎悪の炎が燃えていなかったと、誰が言えるようか？

私は最低だ。命を懸けて私を守ってくれた人ですら……その人の善意すら信じられない。

なんでそこまで私を助けようとしたのか。わからない。

そして私はどうしたらいいのか。

なにもかもがわからない。

本当は、傷つくのが嫌だった。人を傷つけるのも嫌だった。殺すのなんて以前は考えたこともなかった。

でも、私を……私の姉さんは死んでしまったのだ。他ならぬ私のために。

死んでしまった姉さんに、私は何をしてあげられる？ 何も無い。

本当に何も無いのだ。

「大丈夫、私がきつとあなたを」

「黙れ、黙れ黙れ黙れっ、黙れっ！」

聞きたくない、こんなものは聞きたくない。もう嫌だ。私にどうしろっていうんだ！？ 普通の女の子みたいに、ドレスを着て恋の話をして、平穩に、生きて行くことが、なんで私にはこんなに遠いんだ！ 私はもう戦いたくなんて、ないんだ。人を斬る感触を知っているか？ 傷口から血が噴出して、私も真っ赤に染まってしまっ。まるで自分が化け物になってしまったみたい……。姉さんはそんなことしたことないだろ？ 私はもう数え切れないほど、人を斬って殺して恨みを買って、また斬って殺しての繰り返しだ！ 私は姉さんほど、強くないんだ！

「大丈夫、私がきつと」

「やめろ、やめてくれ！」

声にならない声で闇に向かって叫び返した。思い出させるたびに、責められてる気持ちになる。

私が殺したんだと。お前のせいで私は死んだのだと。

消えない罪悪感。死んでしまった姉さんにどうしたら許してもらえらる？

眠りに落ちるたび、姉さんの笑顔が私を責めるんだ。

「優しい私はなぜ死んだの？ 私は死んでしまったのに、なぜあなたは生きているの？ 私はこんなに切り裂かれたのに、なぜあなたはそんな綺麗な肌で生きているの？ 死んでしまった私のために、あなたはなにをしてくれるの？ ねえ」

私の口を借りて、姉さんが呪詛の言葉を紡ぐ。

笑いかけながら、私を守るといいながら、姉さんはいつも私を責めるんだ。

だから、“アタシ”は走るしかない。自分を傷つけ、他人を殺し、恨みと悪意を背負いながら復讐という名の螺旋状の階段を、いつか野垂れ死ぬまでずっと、ずっと。

恐ろしかった。心の底から震えが止まらない。姉さんの前ではいつも勝ち目などない。

だって姉さんは、死んでしまったのだから……。

「大丈夫、私がきつとあなたを守るから……。」

「……………?!? はあ、はっ、はあ……………」

目覚めは、今日も最悪だ。

全身に粘りつく汗が、不快感を誘う。左手を動かそうとして、固定されているのに気がついた。そういえば、この天井は見たことがない。ぼんやりとした意識の覚醒。

「気がついた?」

気がつけば、ベッドの横にはロメリアの姿。

「……………ロメリア?」

「うん?」

「アタシは、生きてるの?」

「当たり前でしょうっ……………!!」

握られた右手に力が籠められる。

「そっか。なら、まだ」

走らねばならない。螺旋状の修羅の道。自ら選んだ罪業の道を。

眼球をぼんやりとロメリアから天井へ向け、再びロメリアへ向けた。

「ロメリアが、助けてくれたの?」

「大体はベイシユがやったけどね」

「そっか、ありがとう」

ロメリアが目を伏せる。

「……………調子、悪そうね」

「少し、だけね」

そう言っ、サギリは記憶を辿ってしまった。トウカに、何をされたのか。あの熱を、力を奪われる感覚はなんだったのか。

「ロメリア、ちょっと飲み物取ってきてくれない？ のど、渴いちやった」

頷いて立ち去るロメリアを、見送りながらゆっくり慎重に右手に力を集めようとする。

「……そんな」

ない、感じられない。身の内に蠢く力が微塵も感じられない。不安ばかりが心を重く塗りこめて行く。……いや、きっとまだ体が回復してないからだ。そうに、違いない。

心に蓋をして、アタシは目を閉じる。

でも、もし力が戻らないとしたらアタシは。

ざわつく不安の声から耳をふさぐように、再び眠りに落ちた。

「せつかくの休暇中申し訳ありません」

頭を下げるシュセの部下。

「いえ、それで現状は？」

由緒ある貴族の邸宅群シユネルヒア西区にて、廃墟一帯を焼く火災が発生。周囲一帯を焼き尽くす大火事となったのは、オウカとサギリが争ったその夜のうちだった。

あたりを嘗め尽くした猛火の火元と思われる場所は、さる貴族邸。今はすでに廃墟となっているその廃墟に、焼け爛れた屍があったとの報告があがっている。

ぎり、とシュセは奥歯をかみ締める。

この火事でいったい何人の命が失われたのか、そしてその何倍の人が住むべき家を失ってしまったのか。それに思いを至らせ彼女は歯噛みする。

「おそらく付け火と思われます。目下全力で捜査をしていますか…

…」

「ご苦労様です。衛士の方々と協力して捜査に当たってください。それと、陛下に明日の朝一番で被害を報告しなければなりません。被害にあった方々の一覧をまとめてください。そちらの方は、推官のベルモンドさんにお願ひすればよろしいでしょう」

「はっ！」

消火活動の後で疲れているだろうに、それを見せないきびきびとした動作で一礼してシュセの前から去っていく。

「この街に平穩は、いつになったら訪れるの……？」

遠い夜明けに、琥珀の瞳に戦意を宿しシュセは呟いた。

時が経つにつれて、被害の全貌が明らかになってくる。

シュセが消火の指揮と犯人の捜査とに全力を注ぐため、その指揮所としたのは現場に程近いミザーク家の別邸。

不審者の搜索と、消火の指揮をまとめていたシュセの元には、明け方には消火完了を告げる伝令が訪れていた。消火に一定のめどを立てたシュセは、そちらを後任に引き継ぐと、不審者の搜索に本腰をいれる。時刻は既に夜半をはるかに過ぎ、朝陽が顔を覗かせていた。

不審者として捕らえられた者は、ミザーク家の屋敷の一室に監禁されていた。衛士が街から不審と思われる人物を連れて来て尋問するためだ。

本来なら衛士の館を使用するところだが、その使用すべき館はこの火災で焼失してしまっている。

緊急の措置として、シュセがミザークの当主であるテクニアに頼み込んだのだ。

本来なら誰もが断りたがる牢屋代わりの部屋の使用を、だがテクニアは即座に快諾してみせた。

「本来なら、戦場に出ねばならぬわが身。ですが非才ゆえに貴女のような方を戦場に引き出しているわが罪を思えばそのくらい、どうということはありません」

感謝を述べるシュセに、テクニアは貴族の責務ですと笑って答えた。

「ですが、もし感謝をしてくださるなら、一度鎧姿ではなくドレスを着てわが夜会に参加してください。もちろん陛下も一緒に。きつと栄えあるものになるでしょう」

社交用の見本とも言つべき笑顔で提案するテクニアの言葉。その返答には戦場を駆ける戦乙女も若干顔を引きつらせつつ、考えておきますと逃げ腰だった。

不審者として連れてこられた者たちの大半は、その日を生きるのもやつとの浮浪者。あるいは、火事に乗じて盗みを働こうとした火事場泥棒。さらには若干の賊徒や焼け出されただけの平民などが混じっていた。

一人一人を調べていく作業はそれこそ何日もかかる。

火事の現場近くから、ほとんど怪しい者は片っ端から引き連れてきている状態なのだ。

作業が二日目を迎えたとき、その中の一人の人物にシュセは目を留めて驚きに見開く。

「ジンさんっ!？」

浮浪者に混じった見知った者の姿に、シュセは思わず声を上げた。「お知り合いでしたか……?」

衛士の付き添いが、眉をひそめて聞き返す。

「友人ですが、どうして彼が?」

「失礼しました。現場付近をうろついていた為尋問したのですが、言動が怪しく……シュセ様のご友人ということならば、今すぐに釈放しましょう」

遠めに見てまさかとおもい、近くで確かめてシュセは目を再び疑った。

「ジンさん……?」

瞳はうつろに、生气というものが感じられない。まるで抜け殻のようなジンの姿に、シュセは思わず絶句する。

「シュセ様、失礼ながら少し休憩なされてはいかがでしょう?」
気を利かせてくれた部下の言葉に、少しだけ考えて彼女はうなずく。

「申し訳ありませんが、お願いします」

ジンを伴って部屋を出ると、ミザークの屋敷の中でシュセの私室として使ってほしいと提供されている部屋に向かう。

いくら呼びかけても反応のない彼に、いぶかしがりながら、シュセは意を決して彼の頬を張る。

小気味良い音を部屋に響かせて、ジンの頬を打つ。

「ジンさん!」

肩を揺さぶり……そうしている内に彼の目の焦点が次第にシュセを捉え始める。

「ジンさん? わたくしがわかりますか?」

「あ、ああ」

まだ虚ろにゆれるジンの瞳。だが焦点は確かにシュセを捉えていた。

「なにが、あつたのです? 貴方がそんな姿になるなんて……もしかして火事に?」

だがジンが住んでいたのは平民区の方のはずだ。

そう思い直してジンの反応をうかがう。

「……サギリが」

ぼそりと、蚊の鳴くような声で告げられた言葉は、シュセにとって要領を得ないものだった。

「サギリが、もう戦えない……」

俯くジンの肩が震える。

「俺と、いるとあいつが不幸になるって……俺はどうしたらっ!」

今まで見ていた戦士としての彼を知るシュセにとって、それはまわりにも意外なジンの一面だった。

「ジンさん……」

知らない街で迷子になった幼子のような不安に揺れる瞳。絶望を

目の前にしているかのような、圧倒的な恐怖に濡れた顔。

ジンの言葉は要領を得なかったが、それでも彼女はジンの背中を抱きしめていた。

「大丈夫。大丈夫」

怯えるジンの様子をやさしくたたく。

泣いた子をあやす母親のような優しい調子。

孤児院の子供たちが悪夢に泣いたときなど、シュセがよくこうして宥めたものだった。

胸を穿たれた傷の痛みは、体以上に彼を追い詰めていたのだろう。彼女の唱える、言葉に抱擁に安心したのか、ジンは寝息を立て始めた。

「サギリさんが……」

ジンの様子を確かめると、シュセは彼の体をそつと横たえる。

ジンの言葉で唯一わかったこと。

あの黒髪のスギリという自称商人の身に何かが起こったのだろう。できれば、そちらを確かめるために人手を裂きたい。だが、彼女自身にも彼女の周りにも、そのような余裕はない。

眠りつくジンを見下ろしながら、彼女は小さく謝った。

「サギリさんとジンさんの行方はまだわかりませんか？」

クルドバーツの店のひとつでルカンドは眉をひそめた。

オウカを狙った後のサギリの失踪。そしてジンの行方がわからない。

「だめです。支店の方にもお二方とも戻っていません」

首を振るクルドバーツに、ルカンドはため息をつく。

ここ数日、双頭の蛇を狙った襲撃が頻発しているのだ。その対応

の苦慮しているところに、サギリとジンの失踪だ。

今はガドリア生え抜きの蛇たちを使って防いでいるが、いつまでもこのままというわけにはいかない。

「たった二人。サギリさんとジンさんがいないだけで、こつも違うのか」

改めてルカンドは二人の大きさを確認していた。

そしてこのままで、いいのかも。

愚痴をこぼすルカンドに、クルドバーツはため息交じりに答える。「仕方ありません。双頭の蛇はあの二人が率いてこそ真価を発揮するのでしようし、頭が働かない冬の間は蛇だって冬眠するでしょう？」

「まあ、そうですね」

一番被害の大きなロクサー又出身の賊徒たち。

彼らが集めた奴隷達をどうするか、ルカンドはそれを一任されているが、いまだ明確に答えを出せないでいた。

「サギリさんは、僕に何をさせたいのでしょうか」

「さあて、私のような一介の商人には」

言葉を濁すクルドバーツに、ルカンドは苦笑した。とても一介の商人ではないだろう、と視線で問いかけるがクルドバーツは商人の温かな顔を貼り付けたままだ。

「ですがこれ以上被害が膨れ上がる前に、手を打つ必要はあります。そろそろターデイさん達も我慢の限界でしょう」

気性の荒い賊徒達がルカンドのような“若造”に従っているのは、あくまでサギリの圧倒的な暴力があるからだ。

「……そうですね」

ため息をつきつつ、ルカンドは次善の策を口にする。

「奴隷達はガドリアへ移します。輸送品の中に彼らを頼めますか？」

「ええ、もちろん」

クルドバーツ商會が扱うのは、武器だけではない。食べ物、貴金屬、鉄、武器防具そして人もその商品の中に入っている。

「護衛として、双頭の蛇の半数をつけます。彼らはそのまま、ガドリアに」

「では、残った10名弱の蛇とロクサーヌの賊徒だけで、サギリさんの代わりをしますか？」

しかもその蛇達はみな、若い。

ルカンドやサイシャ、ケイフウらと同世代の者達ばかりだ。

東都ガドリアを震撼させた、恐怖の代名詞双頭の蛇。

彼らはその次世代の戦力といっていい。

「あの人の代わりは誰にもできませんよ。ですが、時間を稼ぐことはできると思います」

怜悯ともいえる表情で頷くルカンドに、クルドバーツは背に冷たいものが走る。サギリやジンとは種類を異にするが、彼もまた、立派に双頭の蛇を構成する一員なのだ。

赤き道、雪華、城主、そしてシロキア達ストリア同盟の博徒達。

彼らガドリアを仕切っていた者達をして震撼せしめた双頭の蛇の名前は、味方となった今でもクルドバーツの心の奥に恐怖とともに刻まれている。

「そこまで自信があるのなら」

「自信なんてないですよ。ただ、やらねばならない　　そうでしょう？」

故郷を守るため心を決めた少年の銀色の瞳は、闇に潜む敵を睨み付けていた。

復讐するは我にあり7

あなた……。

さようなら、私の愛した人……。

待ってくれと無様に叫ぶ自身の手の中を、愛するものは去っていった。

それこそ手の中から滑り落ちる一握の砂のごとく。

追いかけるべき自身の足は、鎖につながれ、鉄の格子が彼と彼女の間をさえぎっていた。

血を吐くような叫びに答える者は何もいない。

誰も彼も、目を背け、亡き者として扱った。

もう、記憶とも呼べぬ感情の欠片。

ロクサーヌの夜を巡る支配権は、今やオウカの手元にあつた。

円状に広がるロクサーヌの北側、半円を描く貴族区と呼ばれる地区から、南の地区平民区と呼ばれる地区まで。ほぼその耳目は網羅しているといつてよい。

密告者^{ジュタル}、あるいは黒鳥^{フシユルノア}の眼と呼ばれる彼らは、普段はロクサーヌに住む一般の民間人となんら変わることはない。

ただ、ひとたびオウカの指令があるたびにそれに関する情報を、オウカに挙げているのだ。膨大なその玉石混合の情報を総括できるからこそ、ジェルノ家は大貴族として他の追隨を許さず、今日まで

存在しえた。

南のジェノヴァの支持を得られるのも、ジェノヴァ商人達にとって死活問題である、国中の情報を握っているからだ。

天候の良し悪しは作物の出来を占い、交易品の流行物から、鉱山の産出量まで、およそジェルノ家に集まらない情報は無い。

それが例えば、ロクサーヌに巢食う賊徒の目撃情報であったとしても、だ。

「殺せ。一人も生かすな」

サギリにトウカと呼ばれたその男は、別邸の一室に引きこもって彼の抱える暗殺団に指示を出す。

「御意のままに」

傳く暗殺者に向けて憎憎しげに、舌打ちすると己が顔をなでる。

「やはり……魔女の血肉でなくば」

皺が刻まれた顔は未だに老人のまま。

「やつの手下を殺せ。そうしてあの小娘を！ この街から燻り出せ！」

双頭の蛇に向かって凶手が伸びていた。

「しかし、まさかベイシユ・ライラック。今更になって、なぜ」

王の剣“戦鬼”ベイシユ。

かつての兇王に仕えた、最強の武人。

すでに世を捨てたはずの男が、また世に出てこようとしているのか。

「君臣の情などと、ふざけたことは言うまい」

ゆえに、オウカは問わねばならない。

なぜ、あの娘にこだわるのか。

サギリを目の前にしながら、あっさりと引き下からなければならなかったのは、ひとえにあの男のためだ。

「一戦も辞さぬ、ということか」

ぎり、と奥歯がなる。

「ならば、徹底的にやろうではないか」

ベイシユが個人の戦いで、オウカはベイシユはおるか、双頭の蛇一人にすら劣るであろう。だが、彼らを殺すことはオウカには容易いことだった。

「地獄を与えてやろう」

口元に漂う笑みは、獲物を追い詰める肉食獣のものだった。

「サギリさんの居場所がわからないのに、こちらから討ってなど出れませんかよ」

「けどな！」

相手に地の利を取られたまま真正面からぶつかるなどルカンドは考えなかった。相手が地の利をもっているなら、それを覆すか、まったく別のこちらに地の利がある場所まで誘い出せばいい。

いくらそう説明されてもターデイが納得できる話ではなかった。

やられるのは専ら彼らロクサーヌの賊徒達。双頭の蛇をはじめ、東都から来た賊徒達は襲われているという話すらない。

「わかつています。だから心配はしないでください。近日中に、支度は整えます」

「支度つて……」

思わず声を潜めるターデイに、ルカンドは口元に僅かに笑みを乗せた。

「ロクサーヌの賊徒は、奴隷にまぎれてガドリリアへ脱出してもらいます」

その言葉に、ターデイはルカンドに掴み掛かっていた。

ルカンドが口元に浮かべた笑みの意味を悟ったのだ。

嘲笑。

「小僧っ！」

一回りも年下の子供に、馬鹿にされた。その事実が、序列も何もかもを忘れさせた。

ルカンドの首筋に短剣を突きつけると、彼本来の凶暴な個性が顔を出す。

「舐めてんじゃねえぞ！ 馬鹿にしゃがって」

「命惜しさに、逃げ出すことを僕は責めません。僕の判断だといえ
ば、サギリさんも納得してくれるでしょう」

ルカンドの首元を締め上げる力の嵩があがる。

「命を懸けてロクサーヌにしがみ付く理由はなんですか？ 家族もな
く、友人もいない。それなのに」

だがルカンドは口を止めようとはしない。言葉はターデイを切り
刻むように、鋭利だった。

「俺はなア」

「……勝手に手を出さないでください」

ルカンドを締め上げたターデイの背後に向かってかけられた声。

わずかに振り返ったターデイが見たのは、黒衣の装束をまとった
少年少女ら。仲間内ロクサーヌからでも薄気味悪いと、避けられる彼ら。

その存在に気がつかないほど気が立っていたのだろうか。振り返
った先で湾曲した短剣を構える少女の姿に、その姿から立ち上る殺
気に、ターデイの背筋を冷たいものが落ちる。

ルカンドの義足がカタリとなった。

背後の殺気に釘付けになっていた視線をルカンドに戻せば、彼の
手から抜け出したルカンドの姿。

「異存はありますか？」

「くっ……ねえよ！」

ルカンドから背を向けたターデイは、道を開ける双頭の蛇達の間
を抜けて、部屋を出る。

扉を出たところですれ違うクルドバーツを殴るようにどかすと、
ターデイは逃げるように去っていった。

「……ロクサー又側の賊徒も荒地へ向かわせるので？」

部屋の外で聞き耳を立てていたのだらう。クルドバーツの言葉に、ルカンドは苦笑した。

「僕らは戦力を必要としています。即物的な意味ではなく、将来戦力になる得るものでもいい。情報、物資、人……なんでも、戦力だったものは必要じゃないでしょう？」

「切り捨てる、と？」

一枚の便箋をルカンドは、クルドバーツに差し出した。

「これはっ!？」

半信半疑で受け取ったクルドバーツの視線が凍る。

「今朝、ガドリアから届きました」

「ですが、これは、誇張などではなく……?？」

首を横に振るルカンドに冗談の色はない。

「飢饉がやってきます……おそらくガドリアは今年、一粒の麦も取れない」

冷や汗がクルドバーツの額を流れる。

「まさか……やられた!」

普段の柔和な笑顔からは想像もつかない絶望を顔に張り付かせて、クルドバーツは頭をかきむしる。

「ジェノヴァの人でなしどもめ!」
クライヒック

普段の彼ならば絶対に口にしないであろう罵詈雑言。

「今朝から、ジェノヴァ商人達が一気に穀物を買占めに走っています! それ原因で穀物は急騰」

そのクルドバーツの言葉に、ルカンドは目を見開く。

「先手を打たれた!」

「クルドバーツさん、こちらも穀物の買いを」

「言われずとも」

走り去るクルドバーツを見送って、ルカンドは一人思索にくれる。
「本気になったということか……オウカ・ジェルノ」

ロアヌキア開闢以来の名門。この地に深く根を張る大貴族という

敵の大きさに、ルカンドは自身の無力を思わずにはいらなかった。

目覚めたジンを待っていたのは、沈み込むようなふかふかのベッドと、小鳥のさえずりだった。

「ん……ああ、ジンさん目が覚めました？」

自身はサイドテーブルに突っ伏して眠ったのだらう。頬に、寝起きの跡をつけながらシュセは声をかけた。

「俺は……どのくらい寝ていた？」

起き上がりながら、体を動かす。

「二日になります。それより何か食べます？」

強烈な空腹感。既に苦痛になりつつあるそれを、感じながらジンは問いかけた。

「なんでも、いい」

「ちよつとまっていてくださいね」

寝起きとは思えない軽やかな足取りで部屋を後にすると、シュセは台所に向かう。

「シュセ様、何もお手ずからそのようなことなさらずとも」

慌てる侍従達を抑えると、厚焼きのパンと焼豚のハムを彼女自ら手にとって、台所に向かう。

「良いのです。わたくしがしたいと思っていますのですから、あなたがたの手落ちはありません。それが原因で叱責をつけるようなら、わたくし自ら釈明しましょう」

柔らかく微笑まれると、年若い召使いの少女などは頬を染めてうつむいてしまう。

台所からシュセが去ったのを契機として、厨房を預かる侍従たちの間では噂話の花が咲く。

あのシュセ様が部屋に伴った者はなにものなのだろう？
恋人？生き別れの兄弟？

ロクサーヌの治安を預かる彼女の多忙な政務の合間を縫って、彼の看病をしている彼女はほとんど眠っていないのではないだろうか。それでも手を尽くす、などよほど親しい者に違いない。

戦乙女、あるいは西方侯主の肩書きを持つ彼女に関するゴシップなどというものは、これまで一度も噂に登らなかつただけに、噂の大好きな雀たちはあれやこれやと噂話しに花を咲かせていた。

一方そんなことは露と知らぬ彼女は、目の前で夢中になってパンを頬張るジンの様子を、楽しげに見守っていた。

「美味しいですか？」

咀嚼したまま黙って頷くジンの様子に、自然と口元がほころぶ。

右手に最後のパンを握り、左手にはハムを豪快にそのまま齧りながら食べていたジンが、その動きを止めた。

「お前、飯は食ったのか？」

「はい？ いえ、まだですが……」

聞かれた問いがあまりにも予想外だったので、シュセは何も考えずに答えてしまう。

それを聞いたジンは名残惜しげに、自分の握ったパンを見下ろすと、顔を背けてシュセに差し出す。

「やる」

やるもなにも、それは元々シュセが持ってきたものなのだ。

シュセはそれを思うと同時に、ジンの心遣いに、笑いがこみ上げてくるのを耐え切れなかった。

「なんで笑ってんだ」

戦い以外のことになると、目の前の青年はほんとうに年端もいかない少年のようだった。

シュセは彼のそういうところが、いたく気に入っていたし、それに気づかないジンを大いに気に入っていた。

「いえ、わたくしは他のものがありますから、それは貴方のためにもらってきたものです。どうぞ遠慮なさらず」

その返答を聞くや否や、一瞬のためらいの後ジンは再びパンにかじりついた。

「少しは落ち着きました？」

全てを平らげて人心地ついたジンは、シュセの声に頷いた。

「では、支度をしてきます。行きましようか」

「行くつて、どこへ？」

「サギリさんのところへ。貴方の姉君を、助けに」

くすりと、笑う彼女の笑顔は、ジンの胸に刃を打ち立てた。

「なん、で」

呼吸すらままならないまま、呆然とシュセに問いかける。

「ロクサーヌを焼いた火事も大方の目処はつきました。犯人の方は未だ目星もついていませんが、こればかりは地道な捜査が必要になってくるでしょう。現状、わたくしが治安を維持するために必要なことはそれほど多くありません」

それは、彼女の地位が言わせた理由。

「それに、わたくしはもう、わたくしの知りうる範囲で誰一人不幸になどなつてほしくはない……それはもちろん貴方も含まれるのですよ。ジンさん」

手近にあった銀の意匠を施された細剣を手にとると、丈の短い外套を羽織る。

「さあ」

差し出された手に、戸惑いながらジンは従っていた。

これが現実なのか。

求めた力の代償が　血塗られた螺旋の道の、ここが限界なのか。だとしてどうして、自分は生き延び、あの男は生きている？

軋みをあげる体。特に、左肩から下は、動かそうとしても、ぴくりとも動かない。まるで左肩から先に重りを垂らしているだけの無様な姿に、サギリは自身の胸に絶望が覆うのを感じた。

魔女と忌み嫌われたはずの、肌の下を這い回っていたはずの力さえも感じない。

庭園の中、一人立ち尽くすサギリは右手に握った短剣を力なく取り落とした。

「ちくしょう……」

見上げるのは、重々しい曇天の空。

まもなく振り出すであろう雨の予感に、彼女は呆然と呟いた。

「あと、一人なんだ……あと一人。それさえ、叶わないのか……？」
心を殺し、体を傷つけ、力を得るため幾多の命を奪ってきた。

狂おしいほどの、喪失感。

目の前に伸し掛る曇天は、絶望の色をしていた。

ギィ、と庭園の古びた扉が開く音。

「……サギリ」

どれだけそうしていたのだろうか、呼びかけられた声に反応して見た先には、ジンとそれに付き添うシュセの姿あった。自然と口元に、引きつったような笑みが浮かぶ。

「ああ、そうか……そういうことが
ジンまで離れていってしまう。」

力のない自身など、捨てられる塵芥だ。誰も気にかける存在ではない。

そう思えば自嘲の笑も湧いてくる。

「よお、ジンどうかしたか？」

天へ向けていた視線を地に落とす。短剣を拾うと、動く右手で弄

ぶ。

「サギリ……俺は」

“ 貴方はしっかりと彼女と向き合わねばならない”

シュセの言葉に励まされ、ジンはサギリと向かい合っていた。

「俺は」

「ジン」

言い出そうとするジンの言葉を遮ったのは、サギリの黒く燃えるような瞳だった。

「望みがあるなら、まずはこっちだろ？ 抜け」

憎悪すら混じった強い視線に、ジンはたじろいだ。

そんなものを向けられたことはない。

ジンの中でサギリは、常に導き手だった。

焦がれてやまない存在、自身が唯一従うに足る存在。

なのに。

「サギリ ！？」

目の前を銀の閃光が走り抜ける。右から左へ横一閃。目にもとまらぬ速さで駆け抜けた短剣が、鋭い軌道を描いて戻ってくる。

戸惑いながらもそれを、染み付いた動作で避ける。

「ほしいものがあれば、奪ってみせる！」

それが掟だ。

いつかのあの日のようなサギリの言葉に、ジンは二対の小太刀を抜き放つ。

「ジンさん！？」

「黙ってみてろ」

シュセをその場に残して、サギリとの闘争の場に身を躍らせる。

ほぼ直線、点にしか視認できない突きがジンに迫る。それを僅か

に、体をずらして避けると、反撃の右の小太刀がサギリの体を襲う。間に差し込まれる短剣、微妙に軌道をそらすそれがジンの体勢を崩す。

「くっ……」

もれた苦痛の声は、どちらがさきだったか。

踏み込んでくるはずのサギリは、それ以上踏み込んで来ない。

かわりに、間に合ってしまったジンの右の小太刀。

振るわれる暴力に、再び短剣が差し込まれる。

軌道をそらすことには成功するが、ジンの体勢を崩すにはいたらない。

「あああー！」

苦痛を噛み殺し、声を荒らげて彼女は剣を振るう。

だが、ジンにはもはや、それらは脅威を感じることはなかった。

傷つき、剣を振るう彼女が痛ましい。

降り出した雨が、二人を濡らす。

にもかかわらず、サギリは剣を振るうのをやめようとはしなかった。

たし、ジンは反撃に移れないでいた。

「……もう、いい」

雨にぬれ、がむしゃらに剣を振るう彼女の姿を、ジンはそれ以上直視していることが辛かった。

その宣言そのままに、彼女の手から短剣を弾き飛ばす。

一緒に吹き飛んだサギリを見下ろして、ジンは大地に仰向けて倒れる彼女に歩み寄る。

「もう、良いんだ」

荒い息を吐きながら、泣き出した空を見上げるサギリはジンの言葉を呆然と聞いていた。

「……好き、にしる。もう、アタシにはお前を縛る力は、ない」

その言葉に、ジンは勝利したにもかかわらず地面に両膝をついた。小太刀を地面に突き立て、彼女を抱き起こす。

「サギリ……俺が、守ってやる。だからもう」

その言葉を聞いたとき、サギリの息は止まった。

「俺が、お前を守ってやる」

雨に泣き濡れたジンの言葉に、悪夢が重なる。

わたしが、あなたを守るから。

「やめる……」

自身の口から出たとは思えない怯えた声。それさえ今は気にしている余裕すらない。

過去から伸びてきた姉の手が、彼女の首を絞めるのだ。

「やめる、やめる！ 来るな！！」

悪夢が、実態を伴って現実を侵食する。

サギリの目に映るのは、ジンではなく顔のない姉の姿。

「あ、あ、あああ　！！」

顔を覆い、自分を抱きとめるジンを押しつける。

降り注ぐ雨の中を、サギリは逃げ惑って館の中へ入った。

濡れたままベッドに潜り込む。

これが悪夢でなくてなんなのだ。

ついに、遂に恐れていた悪夢が這い出してきた。

姉さんが、姉さんが。

「ねえ、サギリ。私が貴方を守るから」

その声は過去からの亡霊囁き。

だが彼女の耳には、現実としか聞こえなかった。

「違う。違う！ わたしはそんな名前じゃないっ！」

「サギリ」

優しい声が、サギリを深い奈落の底へ突き落す。

「やめるおお！！」

悲鳴をあげて、そのまま、サギリは気を失った。

狂乱のまま去りゆくサギリの背を、ジンは雨に打たれながら見送った。

「サギリ……」

呼びかけた声は、もう彼女に届かないと知りながら。

「ジンさん……」

同じく雨に濡れてシュセはジンの側に寄り添う。

「……オウカ・ジェルノの居場所を教えてください」

顔を上げた彼の言葉に、シュセは言葉に詰まった。

「なぜ」

「教えてくれないのなら、それでいい」

幽鬼のように立ち上がるジンの姿に、不吉なモノを感じずにはいられない。

「ジンさん……」

「世話になった」

廃墟と思しき庭園から、ジンは立ち去る。

サギリの向かった邸宅とは反対方向。

背を向けた彼に、シュセは言葉もなく立ち尽くしていた。

ベイシユは、ロクサーヌを一望出来る丘の上から、夜の街を見下ろしていた。

「華やかなりし、我らがロクサーヌ」

一緒に戦った仲間も、仰ぐべき主君も今は既がない。

「老けたかね」

今年はいやに冷える。

誰にともなく問いかけて、彼は丘を降りるために立ち上がった。

「どうか、安らかに……なんて、柄にもねえか」

郷愁を胸にしまい込むと、桜の大木を軽く叩いてその場を後にする。

丘を降りて、貴族街をぶらぶらと歩いていく。火事騒ぎのあとで、どこもピリピリとした緊張感が伝わってくる。

それが久しく嗅いでいなかった懐かしき戦場の空気と似ていたからだろうか。

焼け跡に佇む、その男に気がついたのは。

普段なら声もかけず通り過ぎるその男。

ジン名乗った青年。

「よお、どうした。こんなところで」

「待っていた」

天を仰ぐジン、孤高の狼が月を見上げる様に似て、中々絵になっていた。

「誰を？」

「お前、オウカの居場所知ってるだろう？」

未だ話しかけているベイシユの方を見ようとせず、天を仰ぐその姿に苦笑する。

「知っているって言えばどうする？」

「教えてくれ」

ふん、とその言葉を鼻で笑う。

「嫌だといったら？」

無言で仰いでいた天から視線が落ちてくる。

腰に回した手が、小太刀の柄を掴み、一度抜いて再び仕舞われる。

澄んだ音が、闇の廃墟に鳴り響いた。

「力ずくか……嫌いじゃねえが」

赤く燃えるような瞳が、ベイシユを睨む。

「知ってどうする?」

「オウカを殺す」

「お前じゃ無理だろう。あのお嬢だつて無理だつたんだ」

虚空を見据えるようなジンの目が細まる。

「お前、何を知っている?」

「育ての親としちゃあ、娘のことは心配でね。それなりに知っているさ」

「……親、か」

「剣を教えて、少しの間養っただけさ。あとはお嬢が勝手に生きていく道を決めた」

「オウカの居場所を教える」

再びの要求は、怒りが含まれていた。

「おいおい、ただで教えるわけがねえだろう? せめてその気にさせてくれなくちゃあな」

腰に指した大刀をぽんと叩くベイシユが、不敵に笑う。

「殺すぞ、お前も」

体を向けたジンは、低く姿勢をとった。

「その気に、させてくれよ。兄ちゃん」

浮かぶのは猛獣の笑み。

月下に二人の獣が牙を剥く。

月明かりを反射して鈍く光るベイシユの大刀が、流れるように空気をすらも切り裂く。

髪を何本か巻き込まれながら、ジンはその下を潜る。直後突き上げるようにして、ジンの右の小太刀がベイシユの頭を襲う。

刃とベイシユの顎との間には、髪の毛一本分の間しかない。振り抜いた大刀を手元に戻して下から来るジンを串刺しにしようと手元に引き寄せ。

追い打ちをかけるジンの左の小太刀を払いのける。

予想以上の力で払われた左に、体勢が崩れる。

それを見逃すベイシユではない。ジンの左を払ったままの姿勢から、ジンの足を狙った刺突。

寸分の隙もなく繰り出された一撃を、ジンは勘を頼りに飛び退く。掠るだけにとどめた傷を、一瞥する余裕もなく再び左右の小太刀を交差に合わせて、ベイシユに襲いかかる。

右を受ければ左が、左を交わせば、右が襲いかかる。

二段構えの突進にベイシユは地面に突き刺したままだった、大刀をそのまま振り抜く。地面から直接ジンを襲う刃は、土くれ諸共、ジンに襲いかかった。

避ければ追い撃たれる。

直感的に理解したジンは、その土くれを全身に浴びながら、ベイシユの刃を交差した両の小太刀で受け止めた。

ぎりぎり、と刃と刃が交差する鏝迫り合い。

凶相に牙を剥くジンと、猛獣の笑みを浮かべるベイシユが殺気を放ちながら交える刃は、相手の命を奪い合うのに一片の躊躇もない。

復讐するは我にあり8

疾風のごとき剣戟に応えるのは、豪風を伴う一撃。

ジンの繰り出す二連撃は、ベイシユの振るうただ一撃によっては
じき返される。

「やるじゃねえか、兄ちゃんよお」

ぐっと押しこむ力は、そのまま人を両断してしまえる程に力強い。
歯を食いしばってそれに耐えるジンは、徐々に、鏝迫り合いの刃
の位置を動かしていく。

「おおお？」

刃と刃の触れ合うポイントがずれてしまえば、両者の力の入れ具合もまた微妙に異なってくる。

それを見越して力を入れる角度を若干ずらそうとした、ベイシユ。
「はっ！」

その間に僅かに空いた力の間隙に、ジンは満身の力を込めて押し返す。

まさか力で押し返されるとは思っていなかったベイシユは、僅かだが動揺する。針の穴を通すほどの僅かな隙間に、ジンは一気に切り込んだ。

左右から間断なく振るわれる小太刀は、急所のみを狙った一撃必殺。

首から脇の下、さらには大動脈の走る腿の内側と、上から下に流れるような連撃を繰り出す。

「ははは、いいねえ」

常人なら既に十回は死んでいるであろう、ジンの連撃をことごとく跳ね返しなお、ベイシユには笑う余裕がある。

埒が明かない。と踏んだジンは再び間合いを離す。

「ふふん、距離をとったって、打開策がなきゃあ意味がないぜ？」
ジンの全力を込めた二連撃が、ベイシユの一撃に弾きかえされる

現実。

そして上げるための速度は、すでに限界まで引き出している。

「オウカの居場所を、言え！」

だがベイシユの挑発めいた発言も、耳に入る様子はなくジンは再び斬りかかる。

「それじゃあ駄目だつてのに！」

大刀の刃をねかせ、脇に構えるベイシユ。

一回の跳躍で、距離を殺し、突き出される左の刃。

首元に喰らい付くその突きをかわせば、左が引かれると同時に振りぬかれる右の小太刀。

間髪いれずに振るわれた右の刃に、だがベイシユは拳を合わせて打ち抜いた。

狙ったのは、ジンの顎。

狙い澄ました一撃が、脳震盪を揺り起こす。

「ぐ、あ……」

膝から崩れ落ちるジンに、ベイシユは大刀を突き付けた。

「終わりだな。兄ちゃん」

ベッドの上で眠る彼女に、ロメリアはそつと毛布をかけた。

「もう戦う必要なんてない。仇討ちなんて、何の意味もない」

悪夢にうなされて飛び起きるこの子を見るたび、ロメリアの心は暗く沈む。

「っ……ロメ、リア!？」

その気配に気づいたサギリが飛び起きて、ロメリアだと気づいてぐしゃりと顔がゆがむ。

起きた時の恐怖に濡れた泣き顔。

「サギリ。大丈夫？」

「……うん」

まるで幼い頃のように、焼け出された城から彼女一人を連れだして来たばかりの頃のように、俯きおびえるサギリ。

「怖い？」

ロメリアの問いに、胸に刃をつきたてられたような、痛ましい表情を浮かべてロメリアを見つめたサギリは、俯いてうなずいた。

「……ずっと我慢してたんだもんね」

優しく頭をなでる手に、嗚咽を押し殺し、無言でサギリは頷いた。シーツを握りしめた手を優しくなでる。

「こんなに自分を傷つけて……痛かったでしょう？」

また頷くサギリをロメリアは抱きしめる。

「アタシは……アタシはっ……」

「もう、“サギリ”でなくても、良いんじゃない？ 貴女を縛るものは、もう何も無い」

俯いて涙を流していた顔を、ハッとサギリは上げる。

「私もベイシユも側にいる。貴女が戦わなくても、もう良いのよ」

「でも、でも……」

さながら幼子をあやすように、ロメリアはサギリを抱きしめる。

「ねえ、貴女の本当の名前」

「オウカの、居場所……教え、ろよ」

死に直面しても、決して諦めないその執念に、ベイシユはため息をついた。

「わからねえな。なぜそんなに拘る？」

「あいつを殺せば、サギリが戻ってくる」

「そんなわけがないだろう」

「戻って、来るっ！」

いつそそれは妄執と呼ぶべきものだったのかもしれない。

自分の信じたサギリの姿を追い続けるジンの言葉。

捨てられた幼子が、親を待つ一途な思い。

何よりも必死で、他に縋るものがない細い糸のような希望。

「兄ちゃん……お前の実力でオウカが殺せると思っのか？」

「俺が、やるんだ。サギリに、オウカの首を持って帰る」

振るえる腕で上体を起こし、剣を握る。

だが、いまだ揺らされた脳は指の先まで機能を回復するまでには
いたらなかった。

「あの子はサギリなんて名前じゃねえさ」

抵抗すらできず、ベイシユに蹴り飛ばされる。

「サギリは、サギリだ！」

地に伏しながら、ジンは叫ぶ。

「あの子の本当の名前は」

「　　ロクサーヌ。ロクサーヌ・サイ・ヴェル・シフオン」

かつてこの国を建国した、古の王の娘と同じ名前。

「きれいな響き。私貴女の名前大好きよ」

駄々をこねるように、首を振る義理の娘。胸に顔をうずめたまま、
怖いものから目を背を向ける、優しい少女。

「ガドリア姉さんの、仇を討たなきゃ……姉さんはきつと許してくれない」

「ガドリア様なら、きつと貴女を許している。あの人は誰を恨んだりもしていないはずよ」

「そんなこと、ないよ。姉さんは、毎日私を責めるんだ」

おびえながら、駄々をこねる彼女。

ロメリアにはそれが痛ましかった。この子が、家出をしたときに、なんとしてでも連れ戻すべきだった。

東都の悪辣な賊徒が、荒地に生きる餓鬼達が、王都に巢食つ魍魎がこの子をこんなにはるぼろにしてしまったのだ。

毎夜毎夜、自身を責めさいなむ悪夢を見るなんて、そんなことがあつていいものだろうか。

本来なら王宮で何不自由なく暮らしているはずの、この子に。

「ロクサーヌ」

震えるわが子の手を、ロメリアはそつと握つてやる。

「……今日は一緒に眠つてくれる？」

まるで、王宮で怖い夢を見たあの頃のように、泣き腫らす彼女の言葉にロメリアは頷いた。

「ええ、大丈夫。怖い夢も、悪い奴もみんな、このロメリアが退治してあげますからね。安心してお眠りなさい……ロクサーヌ」

「ロクサーヌ？ 街の名前じゃねえか」

「ばっか。物を知らねえな、昔の貴人の名前さ。この国を建国した初代国王の、娘の名前」

「あいつは、サギリ、だろうかっ！」

「そりゃ、あの子が自分で名乗った名前だ。城から焼け出されたときに、もうこの名前は名乗れない、って俺が諭したんだよ」

俯くジンに、ベイシユは追い打ちをかける。

「わかるだろう？ あの子はてめえら、ケダモノとは違うのさ。歴史とした王族。身分が違う。もし再びあの子が戦うことがあるうと、てめえらなんかの手は借りねえさ」

大刀を肩に担いで、ベイシユは宣言する。

「もし、あの子が本当の戦いを始めるなら、その時は」

「ふざけるなっ！ 俺はアイツについていく。サギリは、サギリだ！」

「わからねえかねえ……優しく言ってやったんじゃあ。やっぱり体に染み込ませるべきか」

ゆるく大刀が振り下ろされる。

夜の空気を切つて下段に構えられた大刀は、禍々しくも美しい。

人を斬らずには居られないような魔性の輝きが宿っていた。

「手を引けよ。小僧」

ベイシユの視線も口調もすでに、戦い始めた時の余裕あるものではない。

はつきりと拒絶を乗せた視線と口調。

本気の構えに、ジンはなお抗う。

「俺は、アイツに拾われた。他に、生きる方なんか知らねえんだよ」

脳震盪から立ち直り、震える手と足を鼓舞して立ち上がる。

小太刀の二刀流。

サギリから学んだ戦いかたで、ベイシユと対峙する。

「……そんなに知りたきゃ俺に一太刀入れてみる。そうしたら考えてやるぜ」

ふん、と鼻を鳴らすベイシユに、ジンは無言で構えをとる。

「サギリを、取り戻す。誰にも」

「餓鬼が！」

ベイシユの下段に構えた剣先が、蛇が鎌首をもたげるようにして

せりあがり、ジンを狙う。腹、首、眉間狙われ突かれた場所は三段。一息の間に正中線にそってなされた三段突き。二段までを、ジンは小太刀の腹で受ける。

最後の眉間を狙った一撃を、首を振って避ける。

「くっ！」

三段を数えるとはいえ、その突きの精度、速度は並みの剣士では捉えることすら困難なもの。

こめかみに走る熱を感じながら、ジンはベイシユの懐に入り込む。姿勢をできるだけ低く。

地を舐めるかのように、上体を曲げ、そこから一撃を繰り出す。踏み込む右足。

同時に左右の小太刀が、ベイシユを襲おうとして。

「それも、俺が教えた技だろうがっ！」

見上げたジンの視界、ベイシユの大刀の柄頭が降ってきていた。強かにこめかみを撃ち抜かれて、ジンは倒れ意識を失った。

「ふん。執念か……」

ベイシユが見下ろしたジンの手元。

薄皮一枚を斬っただけのジンの小太刀が目に入る。

「……はあ〜ロメリアが怒りそうだなあ」

大刀を仕舞うと、ジンの長身瘦躯をひょいと担ぎあげる。

口調とは裏腹に、その口元には笑みが浮かぶ。

かつて、若き日。

競い合った修練の日々。

今でもはつきり覚えている若き日々を、目の前の少年に見てベイシユは夜道を歩いて行った。

「箱の間にはもみ殻をしつかりと、詰め込むのですよ！」
クルドバーツ武器店。番頭の指図で、次々と荷造りが進められていく。

店先に並べた荷車は、遠方へ商売に出かける隊商のようだった。
「今日はまたどうしたのかね？ 引越してもあるんで？」

馴染みの客の疑問に、荷造りをしていた奉公人の少年は陽気に応えた。

「ああ、いえいえ。ガドリアの方になんでも急な荷物を届けるんだとか」

「ほう、にしちゃあえらく大規模みたいだが」

「ここだけの話、穀物やらを大量に詰め込んで、護衛まで付けて、えらい急いでましたけどねえ」

事情を知るものの優越感に浸りながら少年は、客と顔を寄せ合いながら話す。

「なんか東の方であつたのかい？」

客の思いのほか色よい反応に、少年は苦笑して頭をかいた。

「いや、それが旦那様も番頭さんも頑として口が堅くって」

「なんでえ肝心要のところがわからないんじゃねえか」

「ははは、面目ないです。それはそうと、今日はどうします？ 先

日頼まれてた短剣なら、こちらに届いてますが」

たわいない会話をして、商品を受け取った客は去っていき。少年は再び荷造りにもどる。

その店の奥。

ルカンドとクルドバーツは店の外の様子を眺めながら、話し合っていた。

「こんなに大規模にやっちゃってしまつて大丈夫なのですか？」

不安に顔を曇らせながら、自身の店の様子をうかがうクルドバーツ。

「ええ、何より今は速度が大事。人間は貯蔵が実際に底を突くより

も、底をついてしまうという切迫感にこそ、追い詰められてしまうものです。ここで、クルドバーツ商会……いえ、赤き道全体で食糧の供給が行われていると、皆に知らしめておかないことには、またガドリアは荒れるでしょう?」

ルカンドの静かな口調に、だがクルドバーツの不安はぬぐえない。「……確かに、そうかもしれないませんが。だとしても、実際に今の小麦の値段では、ガドリア全体を食べさせる前に、赤き道の方がつぶれてしまいます」

もって、一か月。

それがクルドバーツの出した結論だった。

「それにサギリさん、ジンさんの行方までわからない」

暗澹たる面持ちのクルドバーツに、ルカンドは灰色の瞳を向ける。

「……クルドバーツさん……僕たちはどうして双頭の蛇という名を名乗っているか知っていますか?」

「え? さあ、私にはとんと」

いきなり全く違う話題を振られて困惑するクルドバーツに、ルカンドは、冷たく口元に微笑を刻む。

「一つの頭が、潰れようとも残る頭が必ず相手を食い破る……まあサギリさんから聞いたのですけどね。大丈夫ですよ、きつと」

信じて待ちましよう。というルカンドに、クルドバーツは従うしかなかった。

「ああ、それと例の便箋は届けていただきました?」

「もちろん……ですが、あんな手紙一通のみで、大丈夫なのでしょうな?」

「まあそれも、信じてみるしかないでしょう」

くすりと笑うルカンドに、クルドバーツは胃痛を覚えていた。

「ほう、動き出したか。東都のゴミ虫どもめ」

オウカの居座る一室に、届けられた書簡。

異なる密告者ジュタルからの報告にも、やはり同じ旨の報告がある。

あの魔女を誘き出すために、それに連なるものどもを徹底して攻撃する。それがオウカ・ジェルノの戦い方であった。

義憤に駆られてかあるいは、内紛の結果出てこざるを得ないか。

どちらにしても、再び目の前にあの魔女が現れたならば、今度こそ逃がしはしない。

「暗殺団アサシンどもに伝えよ。ガドリアの商隊を襲え。なるべく夜盗に見せかけて、な」

低く喉の奥から哄笑がもれる。

「足掻けば足掻くほど、それを踏みつぶすのは、なんと愉快なことか」

立ち上がると、一度カーテンを開けて外を眺める。

「ふむ……いや、念には念を入れるべきか」

外は煌々と照らす満月の夜。

「護衛が隊商に出払っている隙に、クルドバーツ商会を焼き打て」
「御意」

物陰にいた影は、オウカの命を受けて気配を絶った。

「足を払い、手を貫き、耳をふさいで、目をつぶす。いかな大きな獲物といえど、殺すのに苦勞はないわ」

狂気に満ちた哄笑の音が、闇を震わせた。

満点に晴れ渡る秋の日。クルドバーツ商会の隊商は、ガドリアへ

向けてロクサーヌを出発した。

歩いて、およそ30日。東都の者だけが知っている抜け道をいくつも使い、なるべく早期にガドリアまでたどり着かねばならない。

隊商の護衛を務めるのは、双頭の蛇の若手10人程度、そしてロクサーヌの賊徒たちだ。

「ルカンド殿も、一度ガドリアに戻られるので？」

クルドバーツ商会で事実上この隊商を任せられているテイゼンが、片足で器用に馬を御するルカンドに問いかけた。

「ええ、まあそうですね」

彼にしては何んとも歯切れの悪い回答に、眉をひそめながらテイゼンは、二日目の宿営地を決める。

幸いにして空を見る限り、しばらくは好天が続きそうだった。

黒鳥の羽が舞い降りるように、夜の帳が降りていく。

「今日はこのあたりで、野営にしましょうか」

「お任せします」

少年と呼べる年齢のルカンドに、敬意を払うテイゼンは、商人らしい如才なさで野営の準備にかかる。店の主であるクルドバーツの客ということで、ルカンドに敬意を払っているのだ。

馬を天幕の近くの木に繋ぐと、双頭の蛇の一人に声をかける。

「警戒を、特に厳重にしてください。恐らく、来ます」

黙ってうなづく手下の一人は、仲間の元に速足で向かう。

それを見送ってルカンドは周囲を見渡した。

高かった日は遠く地平線の彼方に沈みかけていた。

斜陽が周囲を染める。

義足に杖を突きながら、テイゼンのもとに歩き始めようとしたルカンドの耳に、悲鳴が聞こえた。

「来たか」

一瞬だけ目をつむると、これから流れる血に向けて祈りをささげた。

「ルカンド殿、夜盗です！」

悲鳴交じりのテイゼンに、ルカンドは至極落ち着いて返事をする。「大丈夫です。商会の者には荷物の影で動かないように伝えてください。僕の予想を超えてはいません」

「……は？」

「急いでください。無益な被害を出さないために」

「は、はい！」

落ち着いた様子のルカンドに、テイゼンは自分のすべきことを思い出し、走り出す。

「ルカンド！ これは一体どういうことだっ！？」

怒声をあげて迫ってきたターデイらロクサーヌの賊徒達。

「策はなりましたよ、ターデイさん」

「策だと!？」

切り結ぶ双頭の蛇達と、夜盗達。

「はい。夜盗に扮してはいますが、あれはオウカ・ジェルノの手前者。今まであなたたちを苦しめていた僕たちの敵です」

冷たさを湛えるルカンドの灰色の瞳に、ターデイは気圧される。

「大げさに出発の準備をしたのも、相手に僕たちを殺す機会があると知らせるためです」

「つまり、俺たちを囷に……」

「ええ。相手を釣りだしました」

ぐっと、拳を握るターデイ。

「正面切つてあいつ等を殺せる機会なんだな!？」

「そうです」

「やい、てめえら。今まで殺された仲間の恨み、今こそ晴らすぞ！」

吠えるターデイは、短剣を握りなおすと夜盗に向かって突き進む。

ルカンドに向けるべき怒りも、飲み下し目の前の敵を殺すことに専念する。

「もはや、後戻りの道はない。戦って生き延びるしかない」

静かにつぶやくと、ルカンドは目の前に迫った夜盗に、仕込み杖を一閃。

その首を刎ねる。

ルカンドは自身達を囿にして、オウカの暗殺団を釣りだした。それは、いまだオウカの命を狙っているであろうサギリ、ジンへの援護であると同時に、オウカの抱える暗殺団の地の利を殺す策である。都市の中では密告者や黒鳥の目と呼ばれる彼らによって、こちらの情報だけがオウカにつかまれてしまう。

だが、襲われると分かっている行軍ならば、話は別である。

「オウカ・ジェルノ……その首は、双頭の蛇が頂きます」

義足を一步踏み出して、ルカンドは日の沈みゆくロクサーヌに向けて呟いた。

「クルドバーツさま」

深夜遅くに呼ばれる声に、クルドバーツは目を覚ました。

見れば商人風の衣装に身を包んだ双頭の蛇の少女。

ルカンドがロクサーヌに残した双頭の蛇は10人。

「敵襲です。逃げる支度を」

「て、敵ですって!？」

ベッドから文字通り飛び上がると、眠気も吹き飛ばしてベッドを下りる。

「ど、どこへ逃げれば」

震える語尾で尋ねるクルドバーツ。その問いに、双頭の蛇の少女は、僅かに沈黙してから応えた。

「我らが護衛いたします。他の店の方へ」

他に選択肢はないと観念したのか、クルドバーツは首を縦に振る

と、取るものも取らずに、最低限必要なものを取ると、店の裏手から脱出する。

「行きましょう」

クルドバーツを囲むように、いつもの黒衣ではなく、商人風の衣装や傭兵のような格好をした双頭の蛇の者たちが走り出す。

それをいぶかしむ間もなく、クルドバーツは必死に足を動かした。

「はあはあ　ひいひい」

途中振り返った先に、見えたのは燃え上がるクルドバーツ商会の武器店。ガドリアから最初にロクサーヌに築いた第一歩が、無残に燃え上がる光景だった。

「店、が……くそう、くそう……はあはあ」

「クルドバーツ様、これより迎撃に向かいます。このまま店まで走り続けてください」

追ってくる敵の数が視認できるところまできて、双頭の蛇の少女が囁く。

曰ころから運動不足気味のクルドバーツに長い距離を走るのは、無理だったというべきか。

少人数ずつ、狭い路地に入り込み敵を受け止める双頭の蛇。

一度離れた者は二度と戻ってこない。

徐々に詰まっついていく距離に、クルドバーツに絶望が覆う。

後は大通りを二つ超えれば、クルドバーツの第二号店まですぐだ。もうクルドバーツを守る人数は3人ほどしかない。

背後から射かけられる矢に、一人が倒れる。

「くっ……シユノっ!？」

今までずっとクルドバーツに付き添ってきた少女が悲痛な声をあげる。

「ベルベト、行け」

そう叫ぶや、射かけた仲間を救おうと反転する。

「ユニ!？」

ベルベトと呼ばれた少年は、目を見開くが、クルドバーツを守り

つつ必死に走る。

「馬鹿、なんで来た!？」

「死ぬときは一緒だ」

悲痛な覚悟を秘めた瞳で迫りくる敵を見据える。

足をかばいながら、立ち上がるシユノ。

「馬鹿……」

「うん」

二人は今までの仲間もそうであったように、死を覚悟して刃を構え。

「そこまでだ!」

闇を払うような凜とした声に、周囲が一斉に照らされた。

「ロクサーヌの夜を騒がす賊め! 残らず捕らえよ!」

白亜の鎧に身を包んだシユセの姿。

周囲から照らされる明りは、闇に潜む襲撃者達を照らしていた。

復讐するは我にあり9 (前書き)

PV1500・000HHTーめじがとひねらます。

復讐するは我にあり9

その便箋が届けられたのは、彼女がなす術もなくジンを見送った後だった。

みるからに意気消沈していたのだろう。

一つ目鴉の家宰が、恐る恐るといった風に差し出す便箋を見て、彼女は眼の色を変えた。

「……今夜クルドバーツ商会が襲われる」

密告の類なのだろうか。便箋に記された内容に、彼女は首をかしげる。

普段なら気にも留めないような密告に、彼女が引つかかったのはクルドバーツ商会というところ。

確かジンやサギリも、クルドバーツ商会に属していなかっただろうか。

そしてあの二人の、追い詰められた様子。

霧の中にある真相にあと少しで近づけそうで、彼女は便箋に目を落とし続ける。

彼女はロクサーヌの治安を預かる立場である。

彼女の下には、衛士と近衛の兵士達がいる。連日の捜査で彼らの疲労は最高潮にまで達しているといってもいい。

それを密告の類一つで、軽々しく動かすなど治安を預かる彼女がしていいはずがない。

だが。

胸を占めるのは、雨の中短剣を向けて向き合うサギリとジンの姿も少し、あとほんの少しでも早くジンを伴って彼女が動いていれば、あんな結末にはならなかったのではないか。

実際の事情は彼女の知る由もない。

それでも自責の念に駆られてしまう。

勢いをつけて立ち上がると、彼女は部屋の外に控える侍従に衛士

と近衛を呼ぶように伝える。

「彼らはわたくしの私兵ではない。それは重々分かっています。ですが……わたくしは正しいと思えることをします」

彼女は何処からか、投げられた密告を信じた。

月は雲に隠れた。街の喧騒から引き離された、郊外の貴族の別荘のひとつ。周囲は田園と高い木々に囲まれている。夏なら涼しげな風が吹き抜けるその別荘は、夜になればまた別の顔を見せた。普段ならば静寂を友とする別荘の夜は、今日に限り一変していた。明々と炎に照らされる影達が狂騒する。

「てめえの部下どもは、大丈夫なんだろうな？」

その喧騒を眺め、頭から黒いフード付きのローブを身に纏うジンは横にいるベイシユに問いかけた。

「心配はねえさ。どいつも一騎当千、お前よりよっぽど頼りになるぜ」

「ふん、焼け死ななきゃ良いけどな」

ジンとベイシユが刃を交えてから丸一日。

いまだベイシユという男を信用しきれないジンだったが、今はその身を並べて戦うしかないと割り切っている。

ジンにとってはオウカの首さえ、取ればいいのだ。

「この屋敷にはオウカの孫とオウカ自身がいる。その二人を守るために、護衛も多少はいるから火事で焼け死ぬなんて間抜けな死に方はしねえだろうさ」

オウカの隠れ住んでいた場所。

「灯台もと暗しってやつだな」

楽しげに笑うベイシユに、ジンは胡乱な視線だけを返した。
屋敷を包み込もうとする炎を消そうと必死に動き回る使用人達、
火事にあわてて出てくる護衛達、そしてそれらを襲うベイシユの部
下。炎に照らされた影達の舞台の幕は上がったばかりだ。
「オウカはまだ中みたいだな、どうする兄ちゃん？」
「屋敷の外にいる護衛の数が、あまりに少ない。」
「正面から行く。来なくていいぞ」
そのジンの答えに肩を竦めるとベイシユは凶悪に笑う。
「だから餓鬼だと言っただ」
餓狼と猛虎は、互いに視線を合わせず並んで宴へ身を投じた。

眠っていたオウカが目を覚ましたのは、しばらくぶりに嗅いだ戦
の臭いからだった。

「誰か！」
老人とは思えない声量で使用人を呼びつける。胸を騒がすのは、
最後に嗅いだ戦場の、王を殺した時の戦場のことだった。

「何でしょう、お館さま」
「胸騒ぎがする。屋敷の警備を強化させよ、私兵どもをたたき起こ
せ！」

いつにもまして、迫力のあるオウカの姿に使用人は、身を縮めて
逃げるように退出するしかなかった。

「……クウハン、アハトおるか」
自身の抱える暗殺団の中でも指折りの人材。先刻失ったアズを含
めた彼らは、常にオウカの身边を警護している者達だった。

「……御前に」
現れた闇の者を、一瞥するとオウカは命令を下す。

「トウカが気にかかる。アハト貴様は、トウカの護衛に行け。クウハン。外が静か過ぎる。探つてまいれ」

「御意」

頷く二人を送り出し、オウカは寝間着を脱ぎ捨てる。しわくちやな老人の顔からは想像できないほど、その体は引き締まり無駄な贅肉の一片までもありはしなかった。着替えるのは、鎖帷子に、動きやすい服をまとい、杖を手に取る。

「お、お館さま！」

使用人の叫ぶ声は窓の外から照らされた炎に掻き消された。

「くっ……おのれっ！」

敵だと、報告を受ける間もなく思い知らされる。

「わしは逃げる。貴様らは賊を命がけで食いとめよ」

冷然と言い放ち、歩むオウカに、使用人は呆然とその場に立ち尽くす。

「そ、そんな……」

「そんな、じゃと！？ 貴様誰に向かって口を聞いておる！ ロア又キア創世以来の名門、ジェルノ家の当主たるわしの命を聞かぬというか！」

叱り付けると、杖で使用人を叩きつける。

「いえ、決して、そのようなことは」

「ならばいけい！ 貴様らはジェルノ家に使えるものとして、わしの為に命を賭して働かねばならぬ！」

追い払うように使用人を送り出すと、オウカは廊下を歩き出す。

屋敷は混乱の坩堝と化していた。

「アハト、クウハンと共に、トウカを安全な場所まで逃がせ。わしの護衛はアズだけで足りる」

投擲剣のアハトと鎖使いのクウハンに指示を下しながら、オウカは指示を出していた。

「アズ、わしのそばを離れるな。このわしに喧嘩を売る度胸のある者はそう居るまいて」

頬から額にかけての火傷の跡を歪ませて、オウカは粘り付く様な笑みを浮かべる。

「使用人どもは、火を消せ！ 私兵どもは外に出て賊の始末じゃ」
絹製の高価な寝間着に身を包み、別荘の二階から、赤い絨毯が敷かれた階段を下りて広間に降りる。その手に握るのは、彼の切り札とも言える紫紺の宝石。そのすぐ後ろを歩くのは、燃える屋敷を愉しげに見回すアズの姿。それに続いて護衛達がバラバラとついてくる。

広間にはまだ火の手は回りきっていない。使用人達の働きで火事は消し止められつつあった。そうなるとオウカの心配事は唯一の身内トウカのことだった。無事に脱出できただろうか、それが頭の片隅を掠める。

「翁」

後ろから掛けられたアズの低い声に、オウカは立ち止まる。

「来た」

嬉しげに頬を歪め、広間からの出入り口に広がる扉を指差す。訝しげにそちらを睨めば、恐ろしい程に殺気に満ち満ちた獣のような男が二人。一人は頭から黒いフードの付いたローブを羽織り、容姿は見えない。もう一人は、既に廃れたはずの黒旗軍の軍装、そして巖の様な巨躯の男。

「何者じゃ？」

その問いに

「ジンだ。てめえを殺しに来た」

フードの奥で男は、憎しみを込めて笑い

「黒旗軍、近衛兵長ベイシユ・ライラック」

軍装の男は鞘を払った。

「荒地を彷徨う犬と、亡霊の類か」

ばらばらと護衛たちがオウカの前に出て壁を作る。

「殺せ、やつらの首を取った者には金貨10枚を出そう」

護衛たちが色めき立つ。金貨1枚で、贅沢をしなければ一年はゆ

うに暮らせる金額なのだから無理もない。

我先にと駆け出す護衛を見送りながら、オウカは二人の侵入者が
罅り殺されるのを見守るつもりだった。

走り寄って来るトウカの護衛達を、ベイシユの刀が襲う。左右か
ら襲い来る彼らを切り伏せるのは、暴風雨に似ていた。挑み来る護
衛達が近づくとそばから次々に、血の雨を降らせ絶命していく。五人、
八人……犠牲者の数が増えるに従ってオウカの護衛達は恐怖に駆ら
れた。

ベイシユが荒れ狂う暴風雨とするなら、ジンは疾風に似ていた。
人体の急所を的確に貫き、命を奪う。強引に切り伏せる事もあつた
が、すぐ側で戦うベイシユの影で目立たない。風のように懐に入り
込み、間を置かず斬り殺す。派手さは無い分、護衛達の目標はベ
シユよりもジンに集中した。

ベイシユは護衛達の目標がジンに集中し始めた事を感じると、群
がってくる彼らの壁を突き破りオウカへ向かう。

その前に立ちはだかるのは、黒塗りの鞘に納まった反りの浅い片
刃の剣を持ったアズ。

「てめえ、その得物……」

「お前と同じものだ」

「へっ、悪趣味だな」

ベイシユの軽口に、アズはねつとりとした笑みで答える。血と油
の染み付いた刀を一閃し、汚れを払うとベイシユはそれを鞘に収め
た。

「得物が同じでも、技はどうかな」

腰を低く構え、半身になったベイシユ。アズは鞘から右手で刀を
抜き取り左手で鞘を持った。

先に動いたのはベイシユ。10歩以上の距離を一息で詰める。一
直線に向かってくるベイシユに、アズは鞘を投げつける。

回転しながら、自身にぶつかる鞘に、体勢は崩さないものの踏み
込みの勢いを殺され、ベイシユは舌打ちをした。

直後に鞘から引き抜かれるベイシユの刀が捉えたのは、アズの刀身だった。

「器用な真似をするじゃあねえか！」

そのまま鏢迫り合いに持ち込もうとしたベイシユのわき腹をアズの蹴りが襲つ。

「くっ」

一瞬よろめくベイシユ。蹴りを放った反動で、距離とつたアズ。その足元には先ほど彼が投げつけた鞘がある。ベイシユから目を逸らさず、革の靴のつま先だけで鞘を跳ね上げる。跳ね上げた鞘が収まるのはアズの左手。

「ごう、かな」

先ほどベイシユがしたように、刀身を鞘に収め半身に構える。

「なめてくれるぜ」

同じ姿勢を取るベイシユの側をジンが走り抜ける。

「オウカは俺がもらう」

言い捨ててオウカの側へ迫るジンを、忌々しげにベイシユは見送つた。

「どうするんだ？ てめえのご主人様が危険だぜ」

不満をぶつけるかのように、アズを牽制する。

「知ったことか。オレには、戦いが全てだ」

血走つた目、と地獄の底から響いてくるような怨念を感じさせる声。

「狂戦士の一族か」

見れば、アズは遙か北の地方特有の服装をしている。ズボンとチユニックの上から貫頭衣を着て、それをベルトで締めると言う寒い地方独特の格好。貫頭衣の腰から下にはスリットが入り、動くのに不便はなさそうだ。

「知ってるのか、なかなかの博識だ」

遠く北の国では古くから信仰されている神々がいる。戦の神との融合を核とするその宗教では、より多く戦い抜いた者にその荣誉が

訪れるとされていた。

善と悪、ましてや正義と不義には一切関係なく、ただ強くあれと。

「てめえも、神様とやらを信じてる口かい？」

緩やかに、そして静かにベイシユが間合いを詰める。

「ああ、もちろんだ。最近は何も信じてない奴らが増えてるが」

同じようにアズも間合いを詰める。

互いが間合いに入ったと感じた瞬間、ぶつかり合う鋼の音が響き渡った。

「やるじゃねえか、さすが狂戦士の一族。筋が良い」

響きあう音と同時に二人は再び距離を離す。

「ちと、長くなりそうだな」

「ゆるりと愉しめばいい、芝居の幕はまだ降りない」

アズとベイシユが戦いを繰り返している合間を縫ってジンはオウカの首とを狩る為に走った。距離を取ろうとする、オウカに倍する速度でジンは迫り、問答無用で斬り付けた。

「っち……」

空を切る一撃に、思わず漏れた舌打ち。詰まった距離を離さぬように再び振るわれる双刀の小太刀。だがそれすらも、空を斬る。左右から息もつかせず攻め立てるジンの攻撃は、悉くオウカには当たらず空を切る。

「驚いておるようじゃな」

「黙って死ね！」

右の牙で渾身の突きを放つジンに、オウカは手をかざす。

かざした手から覗くのは紫紺の寶石。体を感じた衝撃とともにジ

ンは吹き飛ばされた。

「くっ……どうなつてやがるっ！」

目に見えない衝撃。ジンはそれに覚えがあつた。不可視の爪と呼んでサギリが使っていた力だ。

「頭の悪そうなお前にも、わかりやすく説明してやるとすればじゃ、この宝石はの、力を封じ込めるだけではない。力無きこの身でも使えるようする代物だということじゃよ」

口の中にたまった血を吐き捨ててジンはオウ力を睨む。

「もちろん、貴様の攻撃がわしに当たたらぬのにも訳がある。魔女の末の娘の他にも、この宝石には入って居るのじゃよ」

残虐な笑みがトウ力の顔を覆う。

「わかるであろう？ アレの姉の力だ。千里眼というのか、貴様の攻撃は全て見切れるのだ。つまりわしに貴様の攻撃は当たらぬ！ さあ、荒地を彷徨う犬よ、どうする、大人しく尻尾を巻いて逃げ帰るか？」

自分の絶対的有意を信じて疑わぬトウ力の嘲笑。

「それともじわじわと鬨り殺されるのが好みか？ 貴様の主の力で殺されるのだ、本望であろう？」

「知らねえよ……サギリに姉がいたことなんて」

オウ力の言葉に耳を貸さず、再び斬りかかるジンの攻撃はやはり空を切る。そして宝石をかざされた途端に、襲い来る衝撃。耐え切れず後ろに吹き飛ばされたジンは、わき腹を押さえた。

ベイシユとの戦いで傷ついた体が痛み始めたのだ。それに耐えて、立ち上がる。

「全く、理解に苦しむな。あの末の娘もそうだったが、往生際が悪すぎる。敵わないと知りつつ、何度も立ち上がるなど反吐がでそうじゃわ」

傷ついたサギリの姿がジンの脳裏を掠めた。

「俺は、サギリの狼だ。あいつが狙った獲物は、俺が殺す。サギリを苦しめるものも、サギリを傷つける奴も、俺が皆殺しにしてやる」

「世迷言を」

一笑に伏すオウカ。

「殺してやる」

右手に持った小太刀を鞘に収める。フード付きのローブを脱ぎ捨てたジンの顔に浮かぶのは、狂気的笑み。赤く光る瞳は、荒れ地を闊歩する悪鬼羅刹の色がある。

「何を考えておる？」

「視えるんだらう？」

ジンの右手を中心に渦を巻く風が集まり始める。ゆっくりと静かに、だが次第に激しく強く。

「貴様っ！」

「避けてみるっ！」

掌の中で回り、次第に圧縮されていく風を持って、ジンはオウカの懐目掛けて地を蹴った。

「くっ……正気か!？」

迫り来るジンに宝石を掲げ、不可視の爪を放つオウカ。オウカが掲げるその手を目指して、ジンは手の中にある風の塊を右腕諸突き出した。

それを中心に荒れ狂うカマイタチ。圧縮された風が刃物となって、周囲全てを切り裂いていく。オウカは言うに及ばず、術者自身であるジンすらも巻き込んで暴れ、収まった。

例え、相手の攻撃が見きれていても、避けられなければ意味はない。

己には大きすぎる力を見誤ったオウカの敗北は死という影を伴って近寄ってきていた。

「ぐっ……愚かな、自滅を覚悟の上で攻撃するなど」

開いた傷口を押さえ立ち上がるうとするオウカに、影が差す。

「そうか？ だがお前は死ぬ」

オウカの見上げる先には、全身を自ら起こした風に切り刻まれたジンの姿。

左腕は手首から肩にかけて斬り裂かれ、足、胸と言わず切り傷がある。あるいはオウカよりもなお、ジンの方が重症といえた。

「俺が、殺す」

無慈悲な言葉とともに振り下ろされた小太刀は、オウカの体を貫いた。

「馬鹿な、俺が、……こんな」

体に突き刺される刃、臓腑をえぐり、溢れだす血潮は床を染める。一度引き抜かれた刃が再び襲いくる。

悲鳴を上げたはずの口から洩れるのは、ただ乾いた息だけだった。首を絶ち切るジンの一撃。

オウカであり、トウカであった男の最後に見たのは、今はもう名前も思い出せない女のことだった。

愛しているわ。トウカ。

「ああ、名前は確か……」

ロアヌキア開闢以来の名門ジェルノ家当主にして、ロクサーヌの闇を支配する男。

オウカ・ジェルノはその命を落とした。

ベイシユの巨軀から振り下ろされた斬撃は銀色の線となってアズに迫る。両手で握られた彼の愛刀は風と共に、今までアズが居た空間を通過した。

間一髪後ろに避け、間を置かず反撃しようとしたアズの視界に、かわしたはずの銀色の光が映る。

舌打ちと同時に全力で防御に徹する。反撃用に動き始めていた右手の刀を相手の刀にぶつけ、戦いながら拾った左手の短槍は牽制の為に突き出す。

その顔を狙って突き出される短槍を、わざとギリギリまで引き付けて避ける。と、同時にベイシユは一步踏み込んで防ぎに来たアズの刀を弾く。

そのまま最小限の動きで、渾身の突きを繰り出した。

ベイシユが一步踏み込んで来た瞬間、アズの全身を冷気が吹き抜けた。踏み込んで来るベイシユから空気を圧縮するような、力を溜めを感じたアズは突き出していた短槍の柄で、ベイシユを殴りつけその反動を利用するかのように左へ跳ぶ。

槍の柄で殴られるのを、ベイシユは敢えて避けなかった。突きの速度を鈍らせたくなかったためだ。だが予想よりも遥かに重い一撃を受け、ほんの一瞬技を繰り出すのが遅れてしまう。

巻頭衣が破れ、下に着込んでいた鎖帷子を貫き、鮮血が飛び散る。受け身も取れず転がると、直ぐにアズは立ち上がった。脇腹に受けた傷は血が流れているが、大したことはない。

立ち上がったアズは震えていた。恐怖ではなく歓喜に彼の血が沸き立った。

「コレも避けるとはな」

こめかみの上から流れる血を拭いながらベイシユは口を開いた。

「とっておきつたんだがな」

口元だけの笑み。気の弱い者ならその凄みだけで気を失うであろうベイシユの笑みに、アズは歓喜の笑みで応えた。

アズは嬉しかった。この相手は極上だ。この間の小娘も面白くはあったが、目の前の相手には及ばない。

「神に感謝せねばな、こんな辺境でこのような相手と戦えることをアズが前に出ようとしたちょうどその時、二人の間を突風が吹きぬけた。」

視線を転ずれば、ジンがオウカに止めを刺している所だった。

「良いのかい？ ご主人様が死んじまつたぜ」

「あのようなもの、どうなるうと知ったことではない」

じりつと二人が距離を詰める。

「同感だが、剣は主の為にこそあるべきだ」

「死んだ主に忠義を立てて何になる？ 戦いは常に自らのためであるべきだ」

唸りを上げるアズの短槍。体の中心に向け最短距離を走るそれを弾く為、ベイシユは刀を跳ね上げた。

跳ね上げた槍の向こうから、アズの刀の突きが続け様に放たれる。ベイシユはそれを峰で受けて、無理やり鏢迫り合いに持ち込む。

「主を持たない剣は哀れだぜ」

「剣は神に捧げている。同情される覚えはない……特に亡き主に忠誠を誓うような輩にはな」

引っぺがす様に、距離をとるアズにベイシユは刀を鞘に納める。

「見解の相違だな」

その声と共に距離を詰めるベイシユの刀が地面スレスレを這う。

「ぬう！」

唸り声と共に迫り来るベイシユの切っ先を後退しつつ紙一重で交わす、と同時に床に刀を叩きつけた。自らの体に触れない分、油断したベイシユの足を、アズの一撃が放った亀裂が飲み込む。

「っちい！」

ベイシユの舌打ちと、打ち掛かるアズの剣撃を払うベイシユの刀の音が交わる。真上から斬りかかったアズの一撃を受け止めず、流し切り自身は亀裂から足を引き抜き飛び退く。

後退するベイシユを、アズが追う。流された刀の位置をそのままに刃の向きだけを修正して、踏み込みと同時に振るう。気負いも力みもなく、流れるようなその剣技、そして繰り出される短槍にベイシユも交わすだけが精一杯だった。気がつけば、ベイシユの周囲には先ほど斬り伏せて来た護衛たちの亡骸があった。

周囲を確認する間もなく、迫り来るアズの速く重い一撃。

息もつかせぬ連撃の合間、ふと目があつたアズは笑っていた。

振りかざされるアズの刀、それを左に体を捻らせて避けると、あろうことか振り下ろした刀を屍に突き刺す。

「ぬう、おおおお！」

咆哮と共に、屍はアズからベイシユへ投擲される。その無茶な戦い方に、一瞬ベイシユが我を忘れる。

屍に塞がれる視界、投げつけられたソレをまともに受けてしまったベイシユは、屍のすぐ後から振り下ろされたアズの刃をまともに受けることになった。

屍諸共袈裟掛けに斬り付けるアズ。その一撃から伝わる硬い衝撃にアズの頬が緩む。

「野郎……」

崩れ落ちる屍の向に見えるアズのにやけた顔をベイシユは睨み付ける。

刀を振り上げたアズのから空きの胴へ、蹴りを入れて距離をとった。後ろに下がったアズは短槍を捨て、亡骸の持っていた両刃の剣を持ってベイシユと対峙した。

ぎりつと奥歯をかみ締め、ベイシユはアズをにらむ。独白の合間に、刀身を鞘に収め、半身に構える。血を吸い込んだ絨毯に半歩、アズに対して出る。

「その技は見たな」

大胆に一步、間合いを詰めたアズにベイシユが口を開いた。

「若いの、礼を言っぜ。久々に昔の血が騒ぐ戦いだっつ」

「死に損ないが！」

互いに譲らぬまま、正面から激突する。

アズはベイシユの得物の長さも、その構えから軌道も計算に入れて左右に刀と剣を振りかぶる。

ベイシユの抜刀、それに被せてアズも剣を振り下ろす。

刹那の交差。

ベイシユの刀の軌道。

振り下ろしたアズの剣の軌道が重なり弾けた。

アズは自分の横を駆け抜けたベイシユに背を向け、呆然と自分の体を見下ろした。振り下ろした剣は砕け、尚も止まらぬベイシユの

刀は、腹から肩に掛けての太刀傷を残し、左腕を奪っていった。助からない、とぼんやり考えたアズは頬を歪ませて笑みの形を作る。

「幕か……」

どう、という音と共に崩れ落ちたアズは既に息絶えていた。

「戦士よ、俺の捧げた剣は朽ちちやあいねんだ」

振り替えずに、ベイシユは物言わぬ亡骸に言葉を掛けた。

ヒュンという風切り音を立て、ベイシユは刀を一閃する。積み重なった荷を払い落とすかのように、血と油を落として刀を納めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3840g/>

The Kingdom

2012年1月2日00時50分発行